

魔法少女こゆり☆マギカ

鐘餅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

寝巢扉都市圏——急速に発展したこの地域では、ここ二年、魔法少女の数が増えていた。しかしながら、この地域一帯を支配する魔法少女はおらず、魔法少女を取り締まる者は誰もいない。ベテラン魔法少女達はこの事態を何とかしようと、それぞれグループを結成し、寝巢扉都市圏を支配しようと日々縄張り争いを繰り返していた。

そんな中、ベテランでありながら一人で活動する魔法少女が存在していた。彼女の名は色梨こゆり。二年前のトラウマから、仲間も居らず、ただ各地を放浪する旅をしていた。

しかし、こゆりはある日、新人魔法少女、マチルダと出会い、チームになるよう誘われる。

その日から、こゆりの運命が動き出す。

——これは、魔法少女のルールを巡る話。一人の少女が、信念を見つけて出す物語。

※同作者が投稿している魔法少女かのん☆マジカと世界観や時系列が繋がっているため、かのん☆マジカのネタバレがあります。ご注意ください。

目次

語られぬ物語

怪物と不思議なレコード

1

プロローグ

プロローグ

7

第一章 因果の起点

悪魔の祝福

22

繋がり始める因果

39

全てに怯える少女

52

手駒の意味

68

道のり

79

魔女

90

愛される資格

104

追憶と純愛

118

たとえこの身が終わろうとも

130

傲慢

140

苦しみしかない人生

153

貴女を私は捨てますか？

170

防衛機制

186

取り残された者達

209

出会い

222

出会い

236

出会い

247

出会い

260

出会い

271

すべてのきっかけ	288
誰も味方がいないなら	301
かつての自分と今の自分	317
重すぎる期待	327
伝えようとしないと、何も伝わらない	339
劣等≡絶望	357
矛盾	371
相棒	389
惨めな子供	404
絶望へのチケット	419
饗宴にて狂う	430
フィル・イン	449
露見	463
手を繋ぎ、心を結ぶ	477
指切り	500
龍神のお守り	517
柘榴の夢	536

語られぬ物語

怪物と不思議なレコード

どこにもなくて、どこにでもある宇宙に、ある一匹の怪物がいました。小さくて、醜くい姿をしていて、その声は外見以上に酷い声でした。

怪物は、いつも一人ぼっちでした。

仲間はいません。怪物に寄り添うものは、ゼンマイがついたお人形だけ。誰も怪物のことなんて、見てくれないし、名前も呼んでくれません。

怪物がどれだけ歌っても、その歌はやつぱり酷いもので、無視されてしまいました。

怪物の周りでは、幾つものレコードが、無数のレコードが、常に回っていました。レコードは、ゆっくりと回るものもあれば、早く回るものもありました。

それらは光を反射しながらチカチカ瞬いて、まるで生きているかのようにでした。しかし光の強さは皆違います。早いものほど輝いているのです。

やがていくつかのレコードは、回転が遅くなるにつれて光を漸減させて、最後に一際眩しくカツと瞬くと、二つに割れて消えてしまいました。そしてまた新しいレコードとなって、回っていくのです。それが延々と空では行われていました。

レコード達は、まるで星のよう。ガスの塊から惑星は生まれ、死ぬばまたガスの塊となり、生まれ変わる。同じように、レコードもまた、生産されては割れて、また新しいレコードの材料となるのです。

一人ぼっちの怪物には、その繰り返しだが、命のサイクルのように思えました。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

生は死へと向かって行き、死は生に邂逅します。

怪物は、その輪廻をもう何回見たでしょうか。

怪物自身、それは分かりませんでした。もう完全に見慣れていて、飽きる程です。

思わず、溜息が出ても仕方がないでしょう。

怪物はレコードを壊したくて壊したくて、仕方がありませんでした。レコードに刻まれた魔法少女の歌声が、自分よりも遥かに綺麗だったからです。

怪物は嫉妬して、人形相手にぐちぐちと少女達の悪口を言いました。

どうして彼女達は、私よりも上手く歌えるのかしら？

彼女達だって、私と同じじゃない。それなのに、おかしくないかしら。ねえ、貴女もそう思うでしょう？

ええ、そうね。あんまりよ。女神さまは何故この子達に、祝福の歌を歌って差し上げるのかしら？

人形の口をパクパクと動かして、怪物は誰かと会話をするふりをします。怪物は自分で自分の考えを肯定しながら、早速レコードを壊そうと、手を伸ばしました。

でも、レコードから流れてくる少女達の歌声は、怪物にとって心地よいものでした。

時々過去を思い出して、悲しくなるけれど。

時々未来のことを思つて、切なくなるけれど。

歌は泣きたくなるくらい、美しくて尊くて。声は可憐で素晴らしいものに見える。

怪物の中で紡いでいる絶望の歌は、この時ばかりは希望の歌へと元に戻り、怪物は懐かしくなつて、安心するのです。

結局手はレコードに触れる前に、自然と止まって。

諦めて怪物は大人しく人形を手にとると、ゼンマイを巻いて、レコードの回転に合わせ、その周りをとことこと歩かせました。

そうしていると、何だかいつの間にか自分も、ただの一人の少女になつた気がして、胸が踊りました。

しばらく遊んでいると怪物の耳に、聞き慣れた歌が飛び込んできました。

それは、忌々しくも、どの歌よりも美しいと感じる調べでした。遊ぶのを中断して、顔を上げて見れば、そこには神々しくも恭しい、魔法少女の女神さま。

彼女は優しくにつこりと微笑まれ、星の円盤に座りながら、暖かくレコードを見守っておられました。

怪物は女神様に同調するかのように、歌い始めます。

ガラスを引っ掻いた時のような、金属が擦れた時のような、この世で最も聞くに耐えない声が喉から発せられます。

息が空気に触れるたびに、世界に拒絶されてるかののように、歪な音がしました。

やがて段々と声は掠れて小さくなっていきました。

怪物を除け者にして、女神さまと魔法少女の合唱が響いて、怪物の歌を飲み込んでいきます。

女神さまは一等星よりも輝いていて、怪物は惨めになって口を閉じます。漏れた声は、余韻一つ残しません。

そんな可哀想な怪物に、女神さまはまったく気がつきませんでした。

というより怪物の姿は、女神さまには見えないのです。

怪物は、宇宙の領域の外に存在を固定されていて、概念である女神さまよりも、上のところにいるのです。

何でも見通し、知り尽くしている女神さまにとって、怪物は唯一視認できない、未知の存在でした。

怪物はそれを分かっていたので、また諦めて溜息をついてから、今度は箱の中を開いて、収納している円盤を一つ取り出しました。

それは、怪物の宝物。

女神さまとは違う、金と銀の二対の龍の神様が下さった、大切なレコードです。

このレコードのみ、怪物は歌を刻むことができますのです。

怪物はレコードに荒く針を落とすし、回しました。

同時に怪物は人形を抱きしめながら、壊れたメロディーを歌います。

ネジがずれたオルゴールの音が狂っていくように、レコードも悲鳴を上げて、軋んでいきます。因果という楽譜に沿って歌っていた少女達の歌声も心なしに、共に共鳴しているようです。

ふと、女神さまがはつとなされて、こちらを向きました。

怪物はあまりのことに驚いて、レコードの上に人形を落として、歌うのをやめてしまいました。

怪物は期待して、女神さまに呼びかけました。

ねえ、女神さま。私、寂しいの。救われたいの。だから、私にも祝福の歌を、歌ってくださいませんか？

当然、女神さまは聞こえていないご様子で、声に応えることはありません。

不振に思って女神さまの視線を追うと、そこで初めて怪物は、時が止まったかのように静止している、淡い光を放っているレコードを見つけたのです。

そのレコードは、他のレコードにも良く似ていました。

しかし怪物にはそれが、今にも割れそうなくらいに形がおかしくて、脆いもののように思えました。

そこから流れる魔法少女達の歌は、めちやくちやになっていて、こんがらがっているに決まっています。こんなレコード、自分が持っているレコードの中にもありません。

女神さまも驚かれています。無理ありません。きっとそれは、怪物以外に初めてできた、知らないもの。

すべてを把握しているのに、”把握しきれていなかった”なんて、異常にも程があります。

女神さまは、止まったレコードを回しました。思ったよりも、いつも通りの聞き慣れた歌が鳴り始めます。

頭の良い少女の、内に秘めた叙情的なアリアも。

明るい少女の、陽気なバラードも。

優しい少女の、眠気を誘う子守唄も。

どれも、何千、何万回と聞いた歌です。寸分違わず、彼女達の歌声です。

女神さまは知っているはずのレコードを、どうして知らなかったのか疑問に思われたようで、首を傾げておいででした。

と、そこで、初めて聞く少女達の歌声がしました。これには怪物もびつくりして、女神さまと一緒に目を見開きました。

そして、女神さまの後を追いかけて、共に色々なレコードを確認しましたが、やはりそのレコードだけがおかしいようでした。

何故こんな歌が聞こえてくるのかしら？とつても耳障りだわ。

女神さまは初めて聞く歌に聞き惚れておられました。怪物にはその歌が、不快に感じられました。

それは、自分が歌う旋律と、かすかにイントロが同じ歌。明らかに絶望の歌だったのです。

でも、同じ絶望の歌といつても、毛色が違うようです。よくよく聞いてみれば、希望の歌も聞こえてまいります。

その他にも、色々な歌が錯綜しているのです。

この円盤に刻まれた音楽は、どうやら絶望でも希望でもない音色をしているようです。

そのためか、女神さまがいくら歌っても、レコードには祝福の歌が刻まれません。

女神さまは不安に思われたようで、顔が曇りました。

このままでは、このレコードに刻まれた魔法少女に、祝福を授けることは愚か、全体の宇宙に何が起こるかわかりません。

怪物は僅かに期待します。

このレコードは、普通のレコードとは違います。ならば、自分の歌を刻めるかもしれません。

怪物が駄目でも、限りなく人間に近い人形ならば、可能性はあります。

レコードから怪物の歌が流れれば、きっと女神さまは自分に気がつくはず。やらないより、やってみる方が、数倍良いように思えます。

怪物は表情を明るくさせました。

怪物は箱から新たな人形を取り出して歌を吹き込むと、ゼンマイを回します。

そうしてレコードに近づくと、人形を置きました。人形は静かに動き出し、レコードの回転とは逆に周りを歩きます。

怪物はそれを確認すると、落ちた人形を探しにいきました。そして探している中で、置いてきた方の人形のことなんて忘れてしまいました。

取り残された人形は、存在しないはずの肺に空気を送り込み、吐き出します。

呼吸は歌となって響き、虚空に広がってゆきます。ジリジリ、ジリジリと、レコードには怪物の望み通り、絶望と希望の歌が溝として刻まれます。

それはやがて、一つの歌と重なり、二重奏となりました。

その響きは、今までにないくらい、女神さまも聞いたこともないハーモニー。

それが一体この先何を齎すのか、怪物にも、女神さまにも、数えきれないレコードも、知りませんでした。

プロローグ プロローグ

小さな影が、こちらへと向かってくる。

それは、よく見てみると奇妙な動物だった。

とんがった耳に、そこから伸びてる毛。真白な体に、背中にある不思議な模様。

見た目はどちらかというと、犬とか猫より、マスコットといった感じ。だから、こいつのデザインをぬいぐるみにして売れば、そこそこ売れるんじゃないかっていうくらいには、普通に可愛らしい。

……まあ、中身はまったく可愛くない。ていうかむしろうざいんだけどね。

「こんばんは、キュウベえ」

あたしは椅子にあぐらをかいた姿勢のまま、手を振った。キュウベえはぴよん、と隣の椅子に座った。

「こんばんは、相変わらず変なところに住んでいるんだね」

「む……。変なことじゃないわよ」

いや、キュウベえの言いたいことは、まじで良く分かる。普通の人……、普通の魔法少女なら、こんなところ住み着かないもの。

あたしは辺りを見渡す。

前方には、どこまでも遠くまで続く線路。背後には木で出来た駅舎。そして上を見上げれば、どう見ても雨風から座席を守れないほど錆びた屋根。

ここは、いわゆる鉄道の廃駅のプラットホームだ。殆ど昔から誰も使わなかったけれど、とうとう二年前に鉄道がなくなつて、ここは捨てられた。

で、今はあたしが勝手に、根城の一つにしてる。何故なら最高の隠れ場所だからだ。

一般人は当然誰も近寄らないし、魔法少女もあたしがこんなところに住んでるなんて考えない。魔女も来ないし、屋根もついている。

だから、ここは全然変なところじゃないのだ。そう、全然変なところじゃないのだ（大事なことだから二回目）。

「他にも住みやすいところはあると思うけどね。ホテルとか、たくさんあるじゃないか」

「……別に良いじゃない。あたしが何処に住もうが、あたしの勝手だし？」

キュウベえにわざわざ言わないけど、あたし、ホテルなんかに住みたくないのよ。

そんなの余計に魔力を食うだけじゃない。ただでさえ食べ物を得るために毎日魔法を使って、グリーンシードもかつかつだつてのに、住処までに魔力なんて使えないわ。

「そもそもキミは、何故そんなところこころ住居を変えるんだい？」

「そういうのが、性に合ってるの」

あたしは、一つの場所に定住しないって決めているのだ。

留まるとしても、長くても数ヶ月、短ければ数日程度。あちこちを放浪して、風のように生きるのがあたしの生き方。

そういうの、気楽で良いじゃない？ 勿論、辛いこともあるけれど、縛られるのってつまらないじゃない。

「まあ、お喋りはここまですて。今日も行くよ、インキュベーター」
そう言うと、あたしは椅子から立ち上がって肩を差し出す。するとキュウベえは仕方なさそうに、あたしの肩に飛び移った。

あたしはそれに満足げに微笑むと、駅から出て行った。



ソウルジエムを手の平に乗せ、魔女を探して街の中を歩く。

魔女というものは、基本的には世の中の影に潜んでいる。だから、悪意に満ちた場所や、人がいない暗い場所なんかを好む。そういったところを重点的に回るのが、魔女探しのセオリーだ。

でも今回は、ちよつとそれから外れて魔女を探している。あたしはあえて、人が多い場所を回っていたのだ。

「何でそんな非効率的な探し方をしているんだい？」

案の定、肩に乗っているキュウベえから突っ込まれる。あたしはよくぞ聞いてくれた、と得意げに語って見せた。

「だって、ここ最近『色』が活発になってきているじゃない。だってら魔女だって『色』に散々追い回されてるはずだよ。そしたら、中にはこういう風に考える奴がいてもおかしくないじゃない？ 『人が多い場所に隠れてた方が、あえて見つかりにくいのではないか』って」
「その可能性は考えてもいなかったよ。捻くれ者のキミらしい、興味深い着眼点だね」

……キュウベえって、どうしてこの確に嫌なとことをついてくるのかしらね。本当、むかつ腹が立つわ。後でぐりぐりくって頭をしてやろうかな。

そんなことを思いつつ、あたしは目の前に広がるビル街を見渡した。

ここら辺には元々、こんなものはなかった。ただ空き家ばかりがあつて、薄暗い幽霊でも出そうな場所だった。

それが五年前、再開発によつてビル街に変わったのだ。おかげで深夜だというのに、結構街中は明るくて騒がしい。……まあ、二年前はここまでじゃなかったと思うけど。

ちよつとあたしは、複雑な気分になった。

過去に囚われないと決めているのに、あたしは未だに過去を懐かしいと感じている。そのことが、何よりも過去に囚われている証明のように思えたのだ。

あたしはかぶりを振ると、ビル街を抜ける。お洒落と評判の大型ショッピングモールにまでやってくると、ソウルジェムが光った。魔力反応を感知したのだ。

その魔力反応を頼りに、従業員用の駐車場に回り、非常口と書かれたドアを開ける。ソウルジェムが、一際強く輝く。どうやらここに、魔女がいるらしい。

「君の考えはビンゴだったね、こゆり」

珍しくキュウベえが褒める。

……いや、本当に褒めてんのかどうかは分かんないけど。もしかしたら褒めてないかも。ビンゴだったね、って言ってるだけもの。

「あらよつと」

魔力を操作して、魔法の住処、結界をこじ開ける。するとその入り口が、不可思議な文様として正面に可視化した。

「んじや、魔法狩りといきますか〜」

あたしは気だるげにソウルジェムを掲げた。魔力の光が体を包み込み、あたしの服を別のものへと変換していく。

光が収まると、あたしはフード付きのワンピースを着ていた。魔法少女としては、比較的地味な格好だ。派手な部分は、ベルトにあるソウルジェムくらいなものか。

そんな格好に不釣り合いな、武骨なウオーハンマーを召喚して手にする。それは体の一部と感ずるほどじっくり馴染んでいて、柄も七センチぐらいだから、かなり取り回しやすい。

あたしはその感覚に頷くと、結界へ足を踏み入れようとした。

と、瞬間、ある事に気がつく。

結界の魔力が、かなり乱れている。この魔力パターンは……、誰かがいる？ しかも結構苦戦している感じがするわね。

「助けるかい？」

尋ねてくるキュウベえ。勿論、即答した。

「助けない。でも、魔法は倒す」

「それは助けると同じ意味なのでは？」

「違う違う。全然違うから」

あたしは、グリーンフィールド欲しさに魔法を倒しに行くだけだ。助けに行っているわけじゃない。中で先に戦ってる子のことなんて知らないし、あたしには関係ない。

あたしはハンマーを携え、紋章の中へ飛び込む。

刹那、体が捕食されるように結界の奥へ奥へと体が引つ張られた。進む度に扉が現れては、あたしはそれを潜り抜けて先へ行く。あた

しはまるで、トンネルを通っている感覚に陥った。

やがて、最後の扉が開かれ、広大な空間が広がる。

そこでは、線路が無数に入り乱れるように走っていた。だが駅舎などは見当たらず、踏切らしきものもない。あるのは、線路を避けるように等間隔で生えた、電線がない電信柱だけだ。

その色合いは、サイケデリックと呼ぶに相応しいものだ。空がやけに黄緑色で、電信柱は蛍光色。かなり目に痛い配色だ。

そんな世界を打ち壊すように、さつきから、ドドドド、とタンパが発するような豪音が鳴り響いている。

その音源は、外套姿の魔法少女が持っている機関銃。彼女が銃弾のような針を、機関銃から打ち出しているのだ。

その攻撃の対象は、髪が長い女性姿の上半身……、いわゆるテケテケである。服装は少女のせいかわロボロで、血みどろだ。全身から酷い異臭がする。

あれはたぶん……、いや、絶対に魔女だ。仮に、テケテケの魔女とでも呼んでおこう。

「ヒイ!!離れて、離れてよお!!」

魔法少女がパニックになりながら、悲鳴を上げる。それもそのはずで、魔法少女が絶えず機関銃を打っているにも関わらず、テケテケの魔女は前進し続けているのだ。

様子からみるに、攻撃は多少利いている程度で、まあ魔女からすればちよつと痛いだけだろう。気にしている素振りはまったくない。これでは、魔法少女が怖がるのも頷ける。

最早あの魔法少女が魔女にやられるのは、時間の問題と言えた。しかし、さらに駄目押しとばかりに、ここで魔法少女にとって恐らく一番最悪のことが起こった。

銃弾たる針が尽きたのだろう。機関銃が、突然針を打ち出すのを止めた。

少女の顔が絶望に染まる。その機関銃は、この場で唯一の頼みだったのだ。それが動かなくなっただけということは、高所で命綱が切れたのと同じ意味だ。

テケテケの魔法の速度が速まり、魔法少女へ鋭い爪が生えた手を振り上げる。魔法少女は諦めたように、ぎゅつと強く目を瞑った。

あたしは魔法少女が魔法少女に襲いかかる前に、軽くハンマーを投擲する。

瞬間、ごしや、と醜い音が響く。テケテケが吹き飛び、遠くの地面へ激突した。

「……助けないんじゃないのかい？」

「あたしは助けてない。攻撃のタイミングが、たまたま被っただけ」

肩でとやかく言うキュウベえに反論しながら、あたしはブーメランのように戻ってきたウォーハンマーをキャッチする。そして膝から崩れ落ち、その場に座り込んでいる魔法少女に近づいて、顔をじろじろ見た。

外国人なのか、堀が深い目元に、はつきりとした鼻筋。眼鏡をかけており、頬にはそばかすがある。水色が混じった銀髪は上でお団子にされていて、魔法少女の証たるソウルジェムが、お団子を結びリボンについていた。

見かけたことがない魔法少女だ。戦闘慣れしている感じでもないし、十中八九、契約したての“新色”だろう。

「……この子知らない子なんだけど、また契約したの？」

「しようがないじゃないか。マチルダが強く契約を望んだんだ。それに僕としても、彼女との契約は実に好ましいものだからね」

抗議すると、キュウベえはすぐに言い訳じみた言葉を喋った。

もちろん、悪びれもしておらず、むしろ堂々としている。態度で、こちらは一切非はありませんと言い返しているのだ。

もう何度もこのことで抗議しているが、キュウベえはこういった対応しかしない。本気で何も悪くないと……、いや、それが悪いことだと、彼らは認識できないからだ。

彼らに善悪は図れない。反社会的なことは理解できるくせに、その根幹部分にある感情を、キュウベえは正しく把握できないのだ。

こちらとしては、勘弁してくれよといった感じだ。

こここのところ、ただでさえ魔法少女が増えて“色”が活発になって

きてるつてのに、ここに来て魔法少女が一人追加？絶対ろくなことにならないし、荒れるじゃない。そういうの、もう嫌なんだけどなあ……。

「なーにが好ましい、よ。体よく利用できそーだとか思ったんでしょ？そんで、骨の髄まで食いつくそつてんでしょ。正直言いなさいよ、正直に」

「心外だなあ。そこまで言われるだなんて……」

「お前は言われて当然だよ」

こいつはあたしの家族を殺したうえに、あたしを騙して魔法少女にしたのだ。

罵らなきやわりに合わないわよ。そうしないと、やってられない。

「あの……。何の話をしてるの……？」

あたしらが話しているのを割り込むように、魔法少女が声をかける。自分だけ置いてけぼりにされたせいかな、若干、表情が困惑気味だ。

あたしは、ちよつと悪いことしたな〜と、頭を少し掻いて、

「……えーと、ごめんだけど、話は後にしない？魔女、動き出しているし」

「!!」

思い出したように、外套の少女ははつとする。

テケテケの魔女は、既に起き上がっていた。ハンマーが直撃したと思われる頭部は半壊していたが、それでも無事なようで、腕を使つてのそりのそりと張っている。あれだけの怪我で、痛みを感じないのだろうか。

「ひっ!!」

少女は軽く声を上げ、後ずさった。焦りのせいか武器すらも手落として、それに気づいている様子でもない。

随分とびびりで根性がない子だ。魔法少女になんて向いていない性格だろう。

……本当、凄く災難ね。こんな子、すぐに死んじゃうじゃない。

まあ、あたしには何の関係もないけどね。この子のことなんて知らないし。何処でくたばろうが、それはこの子の自業自得だ。

あたしは彼女のことをほったらかし、魔女へ向かう。その体を粉碎せんと、大きく戦鎚をふりかぶった。

テケテケがすぐに後方へ大きくジャンプし、ウォーハンマーが避けられる。

魔女は飛んだ勢いそのまま電信柱に手をつける。鉄棒のように電信柱を起点にくるりと一回転すると、こちらへ飛びかかってくる。

あたしはウォーハンマーで横から魔女を殴りつけ、攻撃を逸らした。

爪による二撃目も防ぎ、魔女が距離を取ったのを見計らって、地面を叩く。するとあたしの固有魔法、金属操作が働いて、魔女の周りに無数の鉄の刺が隆起した。

それらはテケテケを串刺しにし、拘束する。あたしは動けず、血を流しながらもがくテケテケの魔女に、悠々と近づいた。

「これで、終わりね」

ウォーハンマーを大きく大きく振り上げる。魔力を込めると、白い電気が戦鎚に帯電し始めた。

あたしは勝利を確信してほくそ笑み、そうしてハンマーを振り下ろそうとして——突如後ろから飛来してくる気配に気がついた。

「危ない……!!」

魔法少女が叫ぶ。離れているのでその顔は分からないが、声は酷く慌てていた。

だが、御生憎さま、あたしも伊達に『古色』ではないのだ。心配せずとも、あたしからしてみれば、こんな攻撃生温い。

「そんなの、きかないよ、っと!!」

前を向いたまま、腕を後ろへ回す。上げていたウォーハンマーがくるりとあたしの横で弧を描き、背後から迫る何かを下から殴りつけた。

嫌な感触が、柄を伝って感じられる。攻撃は、確かに直撃したようだ。

僅かに後ろを見ると、そこには全裸の女体の下半身が立っていて、太腿を凹まさせてよろめかせていた。

恐らく、魔女の一部だ。魔女が気を狙ってこの下半身を操り、奇襲を仕掛けたのだろう。

上半身と下半身でそれぞれ別個に動くことができるなんて、なかなかユニークな能力だ。

でもそれなら、こーんなしよぼいことじゃなく、もつと別のやり方で攻撃する方法がいくらでもあるだろうに。ちったあ、あたしを楽しませろってんだよ。

「そんじゃ、いっちょやりますか!!よっこいせ、つと!!」

ウォーハンマーに魔力を込めると、再度思いつきり地面を叩く。

魔力が地面を伝い、上半身と下半身がいる場所に送られる。あたしの合図で、地中から鉄の木が生え、真下から魔女の体がそれぞれ貫かれる。

魔女は絶叫すらせず、絶命する。結界が散り、あたし達は元の非常口前に戻ってきた。

残念ながら、グリーンフィードは見当たらない。どうやら、今回は外れだったらしい。

あたしは、はあとため息をついてから、魔法少女の方を向いた。そこで、あたしは少しにんまりと笑った。

魔法少女が目を見開き、あたしを見ていたのだ。あたしが華麗に魔女を倒したので、驚いているに違いない。

その視線に、ちよつと気分が良くなってくる。やっぱ、こういう風に見られるの、悪い気しないのだ。

キュウベえが肩を降り、魔法少女へ歩み寄る。

魔法少女は人の良さそうな笑顔を浮かべる。完全に、キュウベえを信用してなきやできない表情だった。

「無事かい、マチルダ」

「うん。何処も怪我はないよ。この子が助けてくれたお陰で……」

そこで、魔法少女はしまったという風に慌てて、立ち上がったあたしに向き直る。

そして少し申し訳なきさそうにお礼を言った。

「ありがとね。私を助けてくれて……。貴女がいなきや、本当に天国

に行ってたよ……」

「……。えーと、何言ってるの？あたし、別に貴女を助けたつもりないから」

「へ？」

きよとんとする魔法少女。

あたしは彼女に言い聞かせるように、丁寧にしつこいぐらいに念を押しした。

「良い？あたしはグリーンフィードが欲しかっただけ。魔女を倒したかっただけなのよ。貴女はそこに、たまたまいただけよ。あたしはこれぼっちも貴女を助けようなんて、考えちゃいない」

「で、でも、あの時ハンマーを投げてくれなきゃ……」

「それは、魔女が隙だらけのタイミングだったから。つまり、チャンスだったから攻撃しただけ」

「そうなの……？」

魔法少女が訝しげに聞くので、あたしはそうなんだって、と強く主張する。

するとキュウベえが、横槍を入れてきた。

「さっきと言いつ分が違うよ、こゆり」

「インキュベーター、マジ黙れ」

余計なことばっか、言ってるんじゃないよ。この子に勘違いされたらどうするの。

「この子……」

魔法少女が面倒臭いものでも見るように、うんざりとした顔になる。

ちよつと失礼だ。でも、このあたしに向かってそんな態度をするなんて、ますます「新色」っぽい。

あたしは、この子のために忠告した。

「……貴女、「新色」だよ？なら、「古色」に対する態度は気をつけた方が良いでしょう。そのまんまじゃ、「色」に入った時も困るだろうし」

「「新色」……？「古色」……？「色」……？」

「「新色」は新人。「古色」はベテラン。「色」はこの地域で有力な

魔法少女グループのことだよ。この地域では、そういった独特の呼び方があるんだ」

首を傾げる魔法少女に、キュウベえがさらに詳しく説明する。

この地域、寝巢扉都市圏——寝巢扉市を中心に、牛木草市、いさ土市、トメ井市、飛雄角市で構成された都市圏——は、十年前から急速に都市開発を進め、大都会に生まれ変わりつつある地域だった。

特にここ二年は異常な程発展を遂げており、様々な経済格差、人口増加による土地問題、文化を無視する若者と、文化を守ろうとする老人の軋轢など、色んな歪みを見せている。

そんな歪みからか、魔法少女の数も二年で急増した。彼女達は新人であるが故に、他の縄張りを知らずに侵したり、グリーンフィールドを得られず、勝手に盗んだりと、多くの問題を発生させた。

魔法少女が多い場所では、問題行動を防ぐ、土地自体を統率するリーダーや派閥というものがあるが、しかし寝巢扉都市圏は、前は魔法少女が平均的な数”しかない普通の土地であったため、そういう存在はいないのだ。

寝巢扉都市圏は、いわば無法地帯のようなものだった。何をしても良いし、どんな非道なことだろうと、見逃されてしまう。犯罪すれすれの行為をする者達が横行し、魔法少女社会は大混乱に陥っていた。

そんな現状を変えようと立ち上がったのが”古色”——ベテラン魔法少女だ。彼女達はそれぞれ、後に”色”と呼ばれる魔法少女グループを結成し、その魔法少女を管理しようと努めたのである。

だが、幾ら立派な志を持つとも、”古色”達も所詮は人間。他の”古色”に支配されることを嫌い、互いのルールの敷き方に納得できず、争いが勃発。

現在、この寝巢扉都市圏では、”古色”達が”色”を引き連れて、土地全体を支配しようとする縄張り争いを繰り返している。リーダーの下克上也も平然と行われており、戦国時代もかくやという状況なのだ。

「……嘘。そんなことって……」

キュウベえの話すべてを聞き終えると、魔法少女は愕然として震えた。

そんな状況になっていいるなんて、予想できるはずもない。魔法少女が動揺するのも、無理はなかった。

「何とかならないの？皆、共通ルールを作ろうとしているだけなんだよね？……こんなのおかしいよ」

「誰だつて、自分が美味しい思いをしたいからね。不利益が生じたり、損をするのは嫌なのさ」

それに、問題行動を正そうとすればするほど、反発なんかも生まれるし、その反発からさらに別の問題行動も生まれて、周りに悪影響を及ぼしたりするんだよね。

だから、二年前から何も変わつちやいないし、進展もしてない。相変わらず、〝古色〟達は揉めている。混乱は、まだまだ続いているのだ。

「この地域は、生き残るのが難しい、魔法少女にとっては最低の環境よ。無所属は誰からも攻撃される。だから〝色〟に入っていた方がいいよ。そうすれば、とりあえず生き残れるから」

何処にも所属していない者は、無法者だ。何をしても自由な代わりに、誰からも疎まれる。

特に〝新色〟は酷い目にあいやすい。あたしだつて最初の頃は殺されかけたのだ。安全のために、〝色〟の庇護下の下についていた方が良かったらう。

「……そうだね。さっさと何処かの〝色〟に入った方が良かったかも」

魔法少女は眼鏡の柄に触った。もしかしたら、不安になった時の癖かもしれない。

「けど、貴女は〝色〟に入ってるの？えーと……」

「こゆり。色梨こゆり」

詰まったので、あたしは自分の名を名乗る。

魔法少女も、こゆりね、と復唱してから、気づいたように今更自己紹介をした。

「私も名乗っておかなきゃね。私は、地水マチルダっていうの」

「……ハーフ？」

「いや、純ロシア人」

それなのに、苗字が日本なのか。まあ、何か理由でもあるのだろうか。親が日本に帰化したとか。

「それでこゆりは、『色』には所属していないの?」

「あたしは『無彩色』……、無所属だよ」

するとマチルダが、心配そうな顔になる。無所属は危ないって言うたばかりなのに、そのあたしが無所属だからね。そりゃあ、そんな顔にもなる。

「それって危ないんじゃない?」

「あたしは平気。一応『古色』だし、貴女だって、あたしの戦っているところ見てたでしょ?」

そう胸を張ったが、マチルダは心配するのを止めない。案ずるような視線であたしを見てくる。

そのマチルダのお人好しっぷりに、逆にこつちが心配になってくる。だって、お人好しって基本良いことなんて何も無い。自分を犠牲にして、他人のために頑張っちゃおうし。

「心配せずとも、彼女なら大丈夫だよ。むしろ、実力はこの地域でも折り紙付きだよ。なんせ、特定の縄張りを持たずとも、その腕だけで二年間も一人で生き抜いてきたぐらいだからね」

「一人で……!?!」

マチルダは瞠目し、大きい声を出す。弱い彼女にとって、あたしみたいなのは、信じられないんだろう。

「貴女、仲間いないの……?」

「そうだけど、それが何か?」

するとマチルダは、考えこむように目を伏せた。また、眼鏡の柄に触れ、しばらくの間黙り込む。

そして、ぱっと思いついたように顔を輝かせた。

「ねえ、こゆり。良かったら、私と一緒にチームを組んでよ!!」

「はあ?」

何言ってるんだ、いきなりこの子は?

この子とあたしが組んで、チームを結成する?冗談じゃない。

仲良しごっこなんてしてたって、何の得があるわけ?ただ馴れ合っ

るだけじゃない。

「嫌だよ、そんなの。あたしは『無彩色』のままでもいい。ていうか、『色』に入るんじゃないの？」

「『色』に入るのはやめた!!」

「……マジで?」

信じられない。意見をすぐ変えちゃうだなんて、あたしだったら、そんなのしないよ。

この子……、結構、面倒臭い子だな。あたしとは別の意味で。

「素直に入つときなさいよ。あたしといたつて碌なことにならないわよ?」

「それでも、私こゆりをこのままにするの、嫌だな。それにこゆり強いから、こゆりの側にいれば安全だし、私もこゆりに何かあつたら助けられる。何より、魔女狩りも効率が良くなる!それに、一人つて寂しくない?」

「……寂しい?」

……何それ。訳わかんないんだけど。

思わず、戸惑ってしまう。胸の内がざわざわして、酷く不愉快だった。

「うん。私は一人つて、寂しいと思うんだ。仲間がいた方が、楽しいよ」

あたしの気なんて知らず、マチルダは言葉を続ける。人を疑わない、綺麗で眩しい笑顔で。

あたしの中で、苛立ちが生まれる。知つたような口を聞かれて腹が立つたのだ。

決めつけたみたいに、上から目線で偉そうに。

仲間がいても、裏切ったり、裏切られたりするだけ。とても、他人なんか信用できないわよ。

「……ふざけんな」

「……?」

マチルダがあたしの様子に不思議がる。あたしはますます腹立たしく思えて、マチルダに吠えた。

「他人なんて信用できない。他人はすぐ裏切るの。それをアンタは軽々しく……。……あたしを馬鹿にしてんの？」

「……そ、そんなつもりは!!私ほただ……」

「あたしは、もう他人と分かり合おう、共にいようだなんて思えない。……どっか行きなさい。帰れ」

ハンマーを向けて脅す。マチルダはそれをじっと見て、悲しそうに顔を俯かせた。

「……分かった。じゃあね、キュウベえ……」

変身を解くと、背を向けてマチルダが去っていく。あたしは、ふんと不機嫌に鼻を鳴らした。

キュウベえが、あたしの足元までやってくる。そのビー玉みたいな赤い目が、あたしを射抜いた。

「こゆり、何も追い返す事はなかったんじゃないかい? キミにとつてもそう悪い話ではなかっただろう?」

「…………。悪い話に決まってるでしょ……」

今更、そんなこと言われても困る。あたしの決心、踏みにじっているようなもんじやん。

「そこまで、突っぱねるのかい?」

「ええ、あたしは、このままがいいから」

そう言つて、何度も心の中で頷く。これで良かったんだって。

だが、どうしてなのだろうか。苦々しい思いが広がって、心臓をきゆうと締め付けくる。

何よ、これ。これじゃ、まるで後悔しているみたいじゃない。

あたしは別に、寂しくない。今まで十分やってきたじゃない。

あたしは今のままが一番良いの。他人なんて……。分かり合えないんだから。

「そうだよ……」

二年前を思い出せ。今更この信念を崩すな。

あたしはあの時決めたじゃない。信じられるのは、自分だけだつて。自分の気の向くままに生きようつて。

あたしは、自分から――

第一章 因果の起点 悪魔の祝福

「……ねえ、私って何ですか？私って、一体誰なんですか？」

一面真っ白い部屋の中で、私はそう、目の前の少女に問いかける。すると彼女は、ちよつと困ったような顔をした。

やっぱり、彼女にも答えられないらしい。当たり前だ。その質問の答えは、容易には出せない。

しかし聞かずにはられない。

私という存在は酷く曖昧で、そして嘘に塗れている。私は自分を“自分”として定義できないのだ。だからこそ、私を定義してくれるのは他人だけ。私何か、という質問に答えられるのは、私以外の誰かだ。

「……」

少女は手に持っていたものを撫でる。

それは、見た目は何の変哲も無い、ただの古風な望遠鏡。しかし、私はこの望遠鏡が普通の望遠鏡では無いことを知っている。

この望遠鏡は、あらゆる世界を見ることができると。それがどんなに一欠片の遠く小さな世界であっても、確かに存在しているならば、観測可能だ。

それを使って、少女は世界にたった一人取り残された私を拾ってくれた。

曰く、私に興味があったから、だそうだ。

……まったく、この人らしいというか、何というか。

少女は唐突に、ゆっくりと望遠鏡を覗き込む。

何のつもりでそんなことをしているのか、さっぱり分からない。彼女はこうしてこのタイミングで、他の世界なんて見ているんだろう。そう思っていると、しばらくして少女は望遠鏡を目から離れさせる。

その顔は、相変わらずこちらを憐れむようなものだった。

「何を見ていたんですか？」

「別の世界の『貴女』を見ていたんだよ。ほら、『貴女』って複数体いるからね」

「それは、『私』ではありません」

私は顔を思いつきり、歪めてみせた。

私は『私』以外、本当の自分だと認めない。だから他の私だろうとも、『私』と呼んじやいけないのだ。

「……そうだったね。ごめんね、ノカ」

「その名前もやめて下さい」

もう、私は何者でもない。私は誰にもなれない。

名前とは、存在の定義づけだ。名付けられた瞬間、その存在は固定する。

私は、名前なんていらぬ。そんなもので、私は『私』以外の何かになりたく無い。

「そんなことを言われても、こちらは何と呼べば良いの？ 流石に名無しはまずいでしょ？」

「確かにそうですけど。でもそれなら……、もっとカッコいいのが良いです。例えば鮮血殺人卿とか——」

「却下で。やっぱりノカが良い」

「……」

……何だよ。良いじゃん、鮮血殺人卿。

そりゃあ、血生臭い名前だとは思うけど、それが逆にカッコいいのに……。

「それで、どうだったんです？ 他の個体の様子は」

あたしは気を取り直して少女に聞く。少女は望遠鏡を弄りながら答えた。

「……良く見えなかったけど、でも彼女は自分が何者か、答えを見つけたみたいよ」

それはそれは……、珍しいこともあるんだね。私と同じ存在だということ、その個体もまた偽物だということ。つまり、彼女もアイデンティティを失っているはずなのだ。

だが、それを自力で得たというのか。

感服すぎて、言葉がない。称賛されるべき快挙だろう。

「……しかし、その個体はどうやって自分の答えを見つけたんですか？」

「さあ？」

「さあ……」

すると、彼女はしようがないでしょうと、とても言うように、

「そこまでは見えなかったから、何とも言えないの」

それならば、まあ仕方がないか。

どんなものでも観測可能とはいえ、望んだものすべてを見ることはできないのだ。この望遠鏡は、そこまで万能ではない。

少女は、私を安心させるためか、胡散臭いくらいにつこりと笑った。「でも、貴女も何れ、答えは見つけられるんじゃないかな。こうやって、私みたいに観測し続ければ」

「……そうでしょうか」

「少なくとも、諦めたらそこで試合終了だよ」

ほら、今日も観測を続けるよ、と彼女は望遠鏡を私へと放り投げた。大切なものである筈なのに、その扱いは些か雑だった。

私は望遠鏡をキャッチすると、横についた数字式のダイヤルを弄った。ここを動かすと、ある程度見たいものを指定できるのだ。

「今日は何を見るの？」

少女が聞いてくる。私は側にあった椅子に座ると、しばらく考えて、そして答える。

「色梨こゆりの二年前を見ようと思います」

「そりゃあまたどうして？」

「気になるから」

色梨こゆりとは、この寝巢扉都市圏で悪名を轟かせている魔法少女だ。

“古色”でありながら“色”を作らない変わり者で、特定の住居も持たず、また特定の縄張りも持たない。他の魔法少女の縄張りで勝手に魔女狩りをしているが、戦闘能力も強いため、こゆりを止められる

者は誰もいない。そのせいで、あらゆる場所で敵を作りまくっており、風来坊と忌み嫌われている。

ここまで聞くと、さぞ傍若無人のように思われるだろうが、少女の話によれば、こゆりは元々そういうタイプではないらしい。

過去のトラウマから、他人を信用できないだけなのだという。

だから、そのトラウマとやらを見てみたい。こゆりの人格を歪めるに至った過去を抉り出し、私の答えを探す道程にしたいのだ。

「まあ、悪くないんじゃない？ 彼女は私が見込んだ魔法少女の一人だし。それにこゆりと君は対局でありながら似た者同士。学ぶことは多いんじゃないかな」

少女が明後日の方を向いて、伸びをする。

「似た者同士、ね……」

それは、私のことを言っているの？ それとも、「私」について言っているのだろうか。

そういう、含みのある言い方は実に困る。

「それじゃあ、少しの間借りますよ」

返事代わりに、欠伸が返ってくる。思わず私は、呆れ顔になってしまった。

何て適当な人なのだろう。もうちょつと、こつちのことを気にかけてくれないのと思う。

まあ、いちいち気にしていても仕方がないかもしれない。この人はこういう人だと割り切ろう。真面目で硬い私も、そろそろ柔軟にならなければ。

私は望遠鏡のダイヤルの設定が、ちゃんと合っているか確認する。

そして、間違えていないことが分かると、望遠鏡に目を当てた。

視界が、灰色に切り替わる。

現実が置き去りにされ、今私の目の前に、過去が再現されていく。同時に、浮遊感。私の時間も、どんどん現在の感覚を忘れて、過去へ向かっているのだ。

そうして、私は「観る」。

こゆりの過去を。こゆりの絶望を。

ああ、それはなんて愉快な、物語。



六時間目が終わり、いつもの様にホームルームの時間がやってくる。

その時間には、時々学校からプリント類が配られる。それは、親への手紙だったり、生徒に向けたお知らせだったりするんだけど、今日はまた、違うものが配られてきた。

手元にあるプリントを見ると、「悩み相談アンケート」と書かれている。今日配られてきたのは、たまにある、学校側が生徒の事情を把握するために実施するアンケートだった。

教壇にいる先生が、最近いじめが流行っているらしいので、正直に書いてください、と決まりきった様な台詞を言う。

あたしは、少し冷めた気持ちになった。

誰がこんなアンケートに、素直に悩みなんて書くんだろう。大抵の子は、悩みなんか先生に相談したいなんて思わないっつーの。

あたしもアンケートに悩みなんか素直に書きたくない。だって、先生あれこれ聞かれるの、面倒なもの。

それに、この悩みは解決しなきゃいけないほど、深刻なものじゃない。

あたしも、何もありません、とアンケートに記入をして、前の席の子に渡した。

全員分を集め終わるのを先生がチェックすると、終わりの挨拶。ホームルームが終わり、放課後が始まる。

でもあたしの学校での一日は、まだ終わらない。もうちよつとだけ、あたしは学校にいなきゃいけない。

別に、部活とかは入っていないが、それでもあたしは残らねばないのだ。

「あ、色梨さん。この前頼んでたやつなんだけど……」

先生が部屋を出ていくと、早速女子のクラスメイトがすぐ来た。

あたしはため息を吐きたくなるのを我慢して、机の上に用意していた数学のノートを差し出した。

以前目の前にいるクラスメイトに頼まれて、数学のノートを貸してくれるよう頼まれたのだ。

「……うん。写して良いよ」

「ごめんね、色梨さん!!」

受け取ると、女子がお礼を言って去っていく。

そして、今度は次の女子のやつてくる。女子はわざとらしい、いかにも困ってます、という顔だった。

「色梨さん、例の件んだけど……」

「……うん。日直の当番、でしょ?」

素直に頷く。断る理由が、あたしにはないから。

「さっすが、色梨さん。優しいわ〜」

それは言葉だけ見れば、ただの褒め言葉。だが、明らかに馬鹿にしたものだ……、見下したものだ、と、声音で分かる。

そんなに、あたしが馬鹿みたいに見えるのだろうか。

でも、そうかも。こんな奴に馬鹿にされても、あたしってば何も言い返せない。

こういう声を聞いてしまうと、あたしは固まってしまうのだ。

だから、ただ下向いて、頷くしかない。不甲斐ないけれどね。

「じゃあお願いね〜」

女子はそう言い残すと、帰っていく。その様子が妙にムカついた。あたしの苦労も知らずに押し付けやがって、まったく……。

何となく嫌な気分になってきて、いらいらしてくる。こうなったら、黒板ピカピカにしてやる。ここんとこ汚なかったし。

席から立ち上がり、黒板掃除を開始する。

あたしは黒板の角から角まで、チョークの粉を雑巾で拭き取り、黒板消しで端の端から黒板に書いてあったものを完全に消し去った。

三十分をかけて、黒板を出来る限り綺麗にする。あたしはレールに散り一つもないことを見て、満足した。

やっぱり、綺麗にするのって気持ちが良い。

「あ、色梨さん」

その時、タイミングを見計らったみたいに、またニヤニヤしながら別のクラスメイトがやって来る。そこまでするか、とでも思ってるのかしらね。

どうせ、また頼み事でしょ？そうやってあたしをからかってんでしょ？あたし、何も言えないし、幾らでも聞いてやるわよ。

「……今度は、何？」

「あたしき、この後用事あるんだよね。それで、掃除当番を代わって」
「うん……」

今日は、帰るのが遅くなりそうだな。……あの子、待ってなきや良いんだけど。

あーあ、あたしってば情けない。何であたしって、こうなんだろう。



掃除当番を代わって、あたしはようやく学校での仕事を終わらせる。

そうして校門まで行くと、黒髪のショートヘアの少女が——双子の妹、色梨さゆりがいた。

案の定、あたしを待っていてくれたらしい。

「あ、お姉ちゃん!!」

ずっと待ってたのは地味にきつかったろうに、さゆりは明るい。

あたしに元気よく駆け寄って来る。

「……ん」

対照的に、あたしは元気なく手をあげる。掃除も全力でやらないと気がすまなくて、散り一つ残らないレベルまで掃除したので、ちよつと疲れたのだ。

帰り道へと、あたし達は歩き出す。

中学校に入ってから二年間、帰り道の景色は何も変わらない。都心部から外れていることもあって、普通の田舎みたいに家が疎らで、緑も多い。

いかにも都会って感じより、こういう落ち着いた風景は落ち着く。学校は嫌いではないけど、好きでもない。気を使ってるから、凄く疲れる。でも、通学路だけは好きだ。行く時は億劫だけどね。

「ところでさ、……お姉ちゃん、今日もクラスの子から仕事頼まれたんだよね」

突然、さゆりがあたしにそう切り出してきた。当たり触りのない話をしてる時だったので、あたしは一瞬びくりとしてしまった。

どうせバレているのに、あたしは目を泳がせる。さゆりはあたしのその反応から、やっぱりね、という表情になった。

「もうこれで何回目？お姉ちゃん、なんかクラスメイトがらいじめられてない？」

さゆりが怒ったように言う。そんな風にあたしを心配しなくても良いのに、さゆりはいちいちあたしのことを心配してくる。

あたしはうんざりした気持ちを込めて、反論した。

「……からかわれてはいるよ。でも、いじめじゃない。あたしは、いじめられてなんてない」

クラスにあるカーストのバランスのために、誰か特定の子を辱める。それが、あたしのクラスでも行われていて、今はあたしの番になっている。

でも、よくある話だし、いじめってほど深刻じゃない。せいぜい見えないところで、仕事を押し付けられたり、少し無視されたりしてるだけ。それってからかいの域で、いじめにはなっていないよね。いじめはもつと、悲惨で酷いものだし。そういう子と比べたら、あたしなんかぬるいもんだ。

「だから、あたしの帰りなんて待たないで良いんだよ？……あたしを気にする必要はないんだから」

さゆりってば、このからかいが始まってから、あたしのために毎日毎日で待っている。

そこまでしなくても良いのだが、一人じゃつまないと、あたしと無理やりにも帰りたいがるのだ。

姉としては、双子とはいえ妹と帰るのは恥ずかしい。元気付けられ、それが救いにはなっているけど、正直他の奴らに目を付けられるんじゃないかとも思う。

本音で言えば、一緒に帰るのはやめて欲しい。あたしなんかほったらかしてれば良いのだ。

あたしは全然、大丈夫だからさ。

「いやいや、そういう訳にはいかないよ」

さゆりは首を振る。我が妹ながら、なんて頑固なのだろう。二卵性双生児なんだから、あたしに似ないでよ。

「ていうか、これ絶対虐めだつて!!」

「虐めじゃないって言ってるでしよ」

これは、からかいだ。あたしは絶対虐められてなんかかない。そこまです落ちぶれてないし、嫌われちゃいない。

そんなの、絶対に認めない。

「やれやれ……」

あたしの頑固な態度に、さゆりは諦めたようにお手上げのポーズをしてみせた。根負けしたことに、あたしは内心勝ち誇る。ざまあみな。あたしの頑固さの方が、上なんだから。

「本当、面倒くさいお姉ちゃん……」

「面倒臭い言うな」

年長者に対して失礼な……。仮にもあたし、姉なんですけど。

「口の利き方がなっていないわよ。生意気妹」

「そっちこそ、何でそう、私に対しては横暴なのさ」

「そりゃあ、家族だから」

瞬間、さゆりは、あたしをじろつと見た。心なしか、こちらを非難しているようにも思える。

それがあたしには、何だか心をすべて見透かされているように感じられた。思わず気圧され、見透かされないように、ぶつきらぼうに聞く。

「な、何よ……。何か言いたいことでもあるの？」
するとさゆりは、真剣な表情になった。

「……そういう強気の態度を、どうして皆に出せないの？」
「それは……」

言い返せなくて黙る。さゆりは構わず、容赦なく続ける。

「お姉ちゃんってさ、皆には黙りよね。それで、頼まれたらなんでも断
んない。だから、舐められたりからわれたりするのよ。ちったあ、そ
こら辺直せよ」

さゆりの言うことは、最もだった。

あたしは、クラスではいつも俯いて、何にも言わない。一応グルー
プの中にはいるけど、意見など主張しない。ただ頷いて、幽霊みたい
にグループの子にどこでもついていく。

自分から弱々しい態度を取れば、それは周りの子にからかってくだ
さいと言っているようなもんだ。あたしがクラスで最底辺にいるの
は、紛れもなく自分のせいだった。

「……けどさ、あたしできないよ。だって、そんなのしたって、見捨て
られるだけじゃん……」

あたしの性格は、実に面倒臭い性格だ。

まず、拘りが強い。

そのくせ、大半のものは適当なのに、特定のものには妥協出来なくな
る。掃除とかは良い例だ。

おかげで、周りにもずつと変な目で見られて、迷惑をかけてきた。

あたしが意見を主張すれば、皆あたしを白い目で見ると。勘弁してよ
と注意もされる。

それで、小学校の頃に一度ハブられた。

それ以来、あたしは思い知った。自分を出しても、良いことなんか
何もないのだ。あたしは皆に受け入れられない。あたしなんて、黙っ
て俯いているのがお似合いなんだよ。

「……怖がってたって、意味ないじゃない。やってみなきゃ、分かんない
よ」

「……そんなことないわよ」

あたしだって、頑張ったことはある。

けどさ、無駄だったんだよね。皆面倒くさがって、あつという間にあたしの周りからいなくなっちゃった。

……そうだ。どうせ無駄なんだ。どんなに頑張ったって、あたしは受け入れられない。

「……あたし自身を受け入れてくれる人なんて、本当にいるの？」

「いるよ、きつと……」

「いないわよ。だから、今のままが一番良いんだよ。あたしはまた、ハブられたくない」

もう、あたしのことなんかほったらかしてよ。あたしのことなんか心配しないで。

あたしは、これが最前なのだ。それを変えることなんか、あたしはしたくないのだ。

「……本当にそのまんまで良いの？そんな風に仮面を被ってるお姉ちゃんなんて、本当のお姉ちゃんじゃないわよ。意固地になってらいつか自分を見失っちゃうよ。そっちの方向に頑固を働かせてどうするのよ」

「良いの、これで。我慢すれば、誰もあたしで嫌な思いしない」

強く言い放つ。さゆりは、ますます心配そうになった。

「お姉ちゃん……」

「……。ごめん……。先帰ってて……」

あたしはそう言うと、そっぽを向いた。今のさゆりの表情を、見ていられなかったのだ。

「……」

足音がして、次第にそれが遠くへ離れていく。正面を向くと、さゆりは背を向けてあたしより先を歩いていった。

あたしはそれを、ぼんやりと見送る。

鬱屈してくる。

あたしはこの場に居たくなって、適当に歩き出す。

そうしながら、考える。あたし、何をやっているんだろうって。

こんなの、ただの八つ当たりだ。ますます自分がかっこ悪い。

あたしは、家族には自分を出すことができる。家族はあたしのことを受け入れてくれてるから。

でも、それを良いことに、あたしは家族を困らせてばっかりいる。さつきだって、そうだ。せつかくさゆりが心配してくれたのに、追いついてしまった。

……やっぱり、家族にも自分を出しちゃいけないのかも。

こうやって迷惑をかけるくらいなら、心配させるくらいなら、我がままとか言うべきじゃないよね。自分の感情なんて、ぶつけちゃいけない……。

あたしは、いるだけ迷惑な人間なんだ。……自分の拘りも、意見も、思いも、出しちゃいけないのよ。

あたしは、そうするのが一番だ。

何度も何度も何度も何度も何度も。あたしは自分に言い聞かせる。自分を出してはいけない。自分を押し殺せ。自分を捨て去れ。人形みたいに機械みたいに皆を優先皆のことを第一にそれがあたしの

「……本当に、そうなのかな」

ぼつり、と。ふいに、勝手に疑問が溢れた。

脳裏に浮かぶのは、いつか自分を見失うよ、というさゆりの声。

「……あたし、このままだと、あたしじゃなくなるの？本当に我慢した方が良いの？」

絶対そうなんだって。口から勝手に漏れ出す言葉に対抗しようと、あたしは心の中で叫ぶ。

「……でも、あたしは……、あたしそのまま……」

しかし、感情は止まらない。それどころか、堰を切ったみたいに、隠していた気持ちが次から次へ溢れてくる。

本当はあたしは……、あたしだって、今のままは嫌だよ。

からかわれるのも頭にくるし、見下されるのも気分が悪い。

こんな誰にでも良いなりの自分なんて、さゆりの言う通りあたしなんかじゃない。そんなあたしなんか、気持ち悪くて反吐が出る。

あたしは、もつと堂々として、胸を張りたいんだ。これ以上、自分

を犠牲になんてしたくない。

あたしは、自分に誇り高くありたい。誰にも負けない、自分の意思を貫きたい。

……だけど、あたしやっぱ怖い。迷惑をかけるって思うと、遠慮をしてしまう。

それに自分を出したら、嫌われちゃう。あたしなんて、皆に受け入れられないよ。だったら今のままの方が良いんじゃないかな。

二つの思いが、あたしの中で闘ぎ合う。頑固なせいか、どちらも曲げたくない、矛盾したことを思ってしまう。

だから、選べない。どちらを選んでも、もう片方を捨てることになる。

……あたしは、どうすれば良いのだろう。どっちが果たして正解なの？

現状維持？それとも、黙るのをやめて、自分を面に出すの？自分を蔑ろにするのを止めるの？

あたしは、もう嫌な思いはしたくないよ。傷つきたくもない。何より、決めた選択を変えるのも抵抗がある。

覚悟が、全然決まらない。あたしは、どうしようもなく臆病だ。

「分かんない……。正解を……。教えてよ」

あたしは耐えきれなくなつて、自分の思いを呟く。そして、すぐに馬鹿馬鹿しくなった。

あたし、誰に聞いているのよ。こんなの、誰も答えやしない。聞いているやつなんて、誰もいないじゃない。

「正解、とはなんだい？」

「……!?!」

いつの間にか変な動物が目の前にいたので、あたしは叫び出しそうになった。

すんでのとこで、口を塞ぐ。まあ、周りに人気はなかったの、叫んだところで何も影響はなかっただろうが。

あたしは、目を見開きながらその変な動物を凝視した。

見たこともない動物だった。全体的に、なんか猫っぽいフォルムを

してて、真っ白い。四足歩行で、赤い目が不思議な印象を受ける。
何だこれ、とあたしは戸惑う。

ぬいぐるみ？何かのドッキリ？しかし、それにしても妙にリアルだ。それに、ちゃんと生きている気配がする。

でも、今いきなり現れたよね……？普通そんなことあり得る……？
「ボクにぜひ、その正解とやらの意味を教えてくださいな。色梨こゆり」

「じゃ、喋った……!？」

な、何なのこいつ!？」

あたし、何か夢見てんじやないの……？絶対そうだよ。じやなきや、こんな現実離れたこと起こんないし。

もしかしたら、どこかで寝ちやつたのかも。こうしてクリアに思考できるのは……、まあたまにあることらしいし、そういう奴なんだろう。

そう考えないと、ちよつと辻褄が合わない。

「あ、貴方一体……？」

恐る恐る問う。すると動物が、尻尾を一振り。あたしを赤い二つのビー玉に映しながら答えた。

「ボクはキュウベえ。こゆり、キミに魔法少女の契約をしてもらいたくてきたんだ」

「……ま、魔法少女？」

魔法少女ってあれよね？女兒向けのアニメの……、ちっちゃい頃に見たアニメのヒロインみたいなやつよね。

それに、あたしがなれっていうの？

なんか、夢とはいえ、話おかしくない？何であたしなんか魔法少女になるの……？

「どうして……、あたしなの？」

「キミに魔法少女の素質があるからさ」

あー……。なんかいかにもそれっぽい言葉だ。つーか、理由になつてないよ。

なれる素質がありますね、だからなりましょうね、なつてください

ねって……。

いくら何でも無理矢理すぎない？まあ、夢だから話しが変なのか。ていうか、何で夢に魔法少女が出てくんの？あたし、魔法少女になんて一ミリも興味ないし、アニメも詳しくないしなあ……。

本当、変な夢だわ。覚めるなら、さっさと覚めて欲しいなあ……。でも、一応聞いてみようかな。馬鹿馬鹿しいけど興味はあるし。

あたしは夢なので、無遠慮に素を出してキュウベえ（随分と古風な名前。あたし、こんなネーミングセンス残念だっけ？）とやりに質問した。

「……魔法少女？ってのがなんか分かんないけど、それって何なわけ？」

「呪いを振り向く魔女と戦う使命を持つ者さ」

「あたし、その魔女と戦わされんの？」

「でも、ボクはキミの願い事を何でも一つ叶えてあげるよ。その対価としてね」

「……何でも？」

一気にうさんくさくなつたんですけど。魔女？はひとまず置いておいて、何でも願い事を叶えるって、何よ。

嘘っぽいというか、なんとというか……。これ、願いが叶う、って言うつときながら、本当は願いなんて叶えてねえよ、っていう新手の詐欺じゃないの？

言ったら絶対酷いことになりそう。こういう展開って、ろくにならないこと多いし。

まあ、でも、これって夢だしねえ……。

「……むふ、むふふふ」

自然と笑い声が漏れる。夢だと分かっても、何でも願いが叶うと言われたのだ。これが心躍らずにいられるものか。

でも何が良いかな……。

無難にお金にでもしておきますか。金さえあれば愛も買える。

この世は所詮金よ、金。金で人は動くもの。

あとあれとか……。願い事を増やして下さい……。とか。

結構それが一番良いかも。そしたら何でもあたしの望み通り。お金も人の心も、あたしの思いのままじゃない。

久々に楽しい気分になってくる。もう、考えるだけで夢心地。いや、これ夢なんだけど。

「こゆり、それでどうなんだい？契約するかい？」

「あー、はいはい、契約すつから、ちよつと黙ってて。今願い事を考えてんだから」

キュウベエの催促を適当にあしらいい、あたしはお金と願い事のどちらにするか悩み出す。

しかし、ふとそこで気がついた。

別にお金、あたしには必要ないじゃない。

あたし、趣味にそれほどお金は使わない。つまり、お金があつたところで持て余すだけ。

願い事を叶えられる回数を増やすのも、考えてみれば、それはそれでちよつとお得感が消え失せる。一回切りだからこそ、特別感があるんだよね。

というか、既にあたしの望みは一つだけだ。

夢だけど、せつかく願い事が叶うのだ。言ってみるのも悪くはない。

あたしは試しに、この望みが叶うのかお願いしてみた。

「あたし、……正解を、答えを知りたい。どっちを選ぶべきなのか、分かんないから」

「つまり、その正解とは、キミが悩んでいる選択肢のどちらが最善なのか、という意味なんだね」

「そうよ。そういう意味」

「しかし、キミは一体何に悩んでいるんだい？それを教えてくれないかな」

キュウベエが具体的に言え、と言ってくる。夢のくせに、こういうところはしっかりしてんのね……。

まあ、普段だったら本音とか言えないんだけど、夢だから言っても良いだろう。別に、こいつ友達とかじゃないし、現実に存在してない

し。

「……あたしね、周りの人に迷惑ばかりかけるから、ずっと自分の意見とか黙ってきたの。けど、それは本当のあたしじゃない。でも、自分を出しても受け入れてもらえないかもしれない。だから、あたしはあたしを押し殺すべきなのか、それとも、あたしはあたしを貫き通すべきなのか、分かんないの」

「なるほど、そういうことか。その選択肢の正解を、キミは知りたいたいんだね？」

キユウベえが確認するように聞いてくる。

そのせいか、あたしは変に緊張してきた。けど、あたしの意味は変わらない。

あたしは心のまま、思いを告げた。

「うん。今すぐじゃなくて良い。時間がかかっても良いから……、あたしはどっちを選ぶべきなのかを知りたい!!」

瞬間、光が生まれた。一瞬苦しくなったと思ったら、急に胸の内から飛び出したのだ。

それは、徐々に球体へと凝縮されると、一つの卵形の白い宝石になる。

その輝きは、生命の神秘が具現化したように美しい。あたしは、すべてを忘れて見惚れた。この世にこんなものがあるなんて、思えない。

「……おめでとう、こゆり。キミの願いはエントロピーを凌駕した」

静かにキユウベえが祝う。でもあたしは呆然としていて、その言葉をしつかりと聞いていなかった。

だから——祝福だとしても、それが悪魔の祝福だなんて、気付けやしなかった。

繋がり始める因果

「あの……、ごめんなさい。八つ当たりしてしまつて」

家に帰るなり、私の姉——こゆりは、私に対して、申し訳なさそうに謝つてきた。

私はこゆりに、別にいいよ、と気にしないように言った。こゆりはそれでもやっぱり、ばつが悪そうにしている。

その態度に、私はむしろむつとなる。

こゆりはいつもこうだ。他人に遠慮しまくつてばつかり。私にさえ、最近はこのなにも弱気だ。

そういう風にされると、かなりムカつく。最高に腹が立つてくる。寂しがり屋のくせに、内へ内へと心を閉ざしてしまえば、こゆりは何もかも大丈夫だと思つている。どんなに嫌なことも、我慢しなければならぬと信じている。

でも、実際は逆だ。何か言つてくれないと、分かるものも分からぬいし、こつちだつてどんな風に付き合えば良いのか困つてしまう。

まあ、そうなつてしまったのも、仕方がないような気もする。こゆりは小さい頃から、一人ぼっちだったから。

拘りが強い性格もそうだが、こゆり自身昔から口下手なところがあつた。だから、自分の意見を主張しても、意図が上手く伝えられなくて、ただの我がままのように聞こえた。こゆりは厄介者扱いされて、周囲に馴染むのに失敗し、友達と呼べる者は皆自分から離れていった。

いつしか、こゆりは自分が悪いのだと思ひ込むようになり、本心を隠し始めた。それに比例するように、こゆりはどんどん意地っ張りになつていつて、今じゃすつかり捻くれ者だ。

こんな風に不器用なもんだから、私は余計にこゆりの将来が心配になつてくるのだ。

私はこゆりの妹として、こゆりの孤独を癒してきた。こゆりの理解者として、こゆりを支えてきた。

でも、この先ずつとは一緒にいられない。私は私のやりたいことが

あるし、離れ離れになる時が、絶対訪れる。

そうだったら、こゆりは本当の一人ぼっちになる。

それは、私の望むことではない。いっぱい助けてもらっているし、何より私はこゆりが家族として大好きだ。彼女が寂しい思いをするのは、もうこれ以上嫌なのだ。

こゆりには、もっと自分を出して、受け入れてもらえる人が必要だ。そして、そういう人を見つけるには、こゆり自身から他人に歩み寄らなければいけない。

勇気を振り絞って、人から嫌われるという強迫観念に打ち勝たねばならない。

「……あのさ、こゆり。これ、あげるよ」

だから、私は「お守り」を渡すことにした。そうすれば、少しは勇気がつくだろうと思って。

「これって……」

渡されたものを見て、こゆりが少し驚く。私はそれに刻まれた花、鳴子百合を指差した。

「知ってる？ 『鳴子百合』の花言葉はね——」



今日も無事先生から当てられることなく授業が終わり、あつという間に昼休みになった。

クラスメイトがグループを作って食事をする中、あたしは誰からも誘われなかった。あたしが所属していたはずのグループも、あたしを忘れたように楽しく談笑している。あたしだけが、クラスで一人ぼっちだった。

そのことを、今更虚しいだなんて思わない。誰もあたしのことなんて、関わりたくないだろうから、しようがない。

でも、この場で食事を取る気にはならない。皆の中になると、自分

の立場をしつかりと感じてしまう。賑やかなお昼時は特に居心地が最悪なのだ。

紙袋を持つと、教室を出て歩く。目指す場所は、人気のない美術室へ続く階段。さゆりは誘わない。こんな時まで、あの子に頼ってはいられない。

階段に着くと、あたしはそこへ座る。紙袋から事前に休み時間に購買で買ってきたホットドッグを取り出した。

数量限定、週二日しか販売していない、人気のある商品だ。これを手に入れるのには、本当に苦労した。

流石というべきか、味は最高だ。このソースといい、ソーセージといい、もう完璧だよね。いやあ、ほっぺたが落ちるって、このことだよね〜……。

「やあ、こゆり」

どこからか声が出て、あたしは若干びびる。

隣を見ると、いつの間にか見たことのある白い動物が座っている。

「キ、キュウベえ……」

いきなりすぎる登場の仕方に、あたしは眉間に皺が寄りそうになった。

先程、ホットドッグを落としかけそうになったのだ。危うく、昼食を無駄になるところだった。

「やれやれ、驚かないでくれよ」

そんな風に困った感じになるなよ。びびるもんはびびるわ。

「そろそろ慣れてくれたって良いころだと思っただけど……。もう出会って三日たつんだから」

そう言われて、初めてもうそんなに時間が経っているのかと気が付いた。

あたしは改めて自分の失態を思い出す。そして、猛烈に頭を抱えたくなかった。

キュウベえは、夢ではなく現実に存在する生物だったのだ。

契約して数時間経っても、キュウベえは消えず、また卵形の宝石——ソウルジェム——も消えてくれなかった。そこでやっと、あたしは

ようやくそれらが夢ではないと気がついた。

つまり、あたしは本当にキュウベえと契約してしまったのだ。

当然あたしは、自分がやってしまったことの意味を理解し、焦りに焦りまくった。

しかも、キュウベえに契約を破棄したいと言えば、それはもうできないと言われる始末。あたしは一生、このまま魔法少女らしい。

あたしはなんて軽はずみなのだろうか。何も考えず、何も警戒せず、余計なことをしてしまった。

そのせいで、あたしはこの三日間、契約したことをずっと後悔する羽目になっている。

以前から、あたしはクラスメイトに対して疎外感を感じていた。それが魔法少女になったせいで、より一層強くなったのだ。

あたしは魔法少女とかいう、訳の分からないものになりたくはなかった。

超パワーを手に入れたといえ、聞こえは良いかもしれないけど、そんな力を持っているの、周囲ではあたしだけだ。

自分で言うのも何だけど、あたしはこの前まで普通の中学二年生だった。なのに、何である日突然、普通じゃなくなるの？

あたしは、皆みたいに普通の子でありたい。自分だけ違うとか、おかしいだとか、思いたくない。だから、あたしは特別じゃなくて良いのに……。

「こゆり。キミは魔法少女になって以来、ずっと俯いたままだね。どうしてそこまで、暗い顔をしているんだい？」

ブルーな心が顔に出たのだろうか。キュウベえが無神経に聞いている。

あたしは、キュウベえに自分の思いを伝えたくないの、少し誤魔化すように、ずっと気になっていたことを聞いた。

「……その、あたしの願い、もしかしたら、叶ってないんじゃないかなあ……、なんて思って。本当に叶ったの？」

契約したのに、あたしは未だに「正解」が分からないのだ。そしてそれが分かるようなきっかけも、ここ三日間で起きていない。

もうちよつと、何かあつても良い気がする。魔法少女になつちやつたんだから、せめて願いぐらいきちんと叶つていて欲しい。

「心配せずとも、キミの願いは必ず叶うはずだよ。それが魔法少女の契約だからね」

キュウベえははつきりしないことを言う。相変わらず、こんな可愛らしい見た目なのに胡乱な奴だ。

「それに、キミはあの時言つたじゃないか。時間がかかっても良いって。キミの願いは、もしかしたらその通り、時間をかけて叶うものなのかもしれないね」

「……つまり、願いが叶うのはずっと未来ってこと？」

そこまで長く待てないんだけど。あたしは、今すぐ『正解』が知りたいのに。

くそ……。こんなことになるくらいなら、勢いで時間がかかってもいいなんて言うもんじゃなかった。

「どちらにしろ、願いが叶う時が来るまで、気長に待つしかないね。まあ、惨めなキミとしてはもどかしいだろうね」

「……」

あたしは苦虫を噛み潰したような顔になった。

『惨め』という言葉に、純粹に腹が立ったのだ。

それではまるで、あたしが可愛そうな子みたいじゃないか。あたしは、全然憐まれるような立場ではないのだ。そんな同情するような言い方は、止めて欲しい。

「そんな顔をされても、事実じゃないか」

あたしの顔を見ながら、キュウベえが言った。

「キミは周囲から見下され、孤立している。それなのに、キミは他人に遠慮をして逆えず、反抗もできない。そんなキミには、世間一般で言うところの、惨めという状態に当てはまるじゃないのかい？」

「……………」

あたしは、何も言い返せなかった。

夢だと思っていた時は、キュウベえにスムーズに会話できていたのに、現実にいるのだと思うと、あたしの口は自然と動かなくなった。

周りの人と同じように、自分を出すのが怖くなったからだろう。面と向かって、あたしはキュウベえに強く言えない。

「キミはいつもそうやって、下を向くんだね」

あたしが俯いたのを見て、困ったような仕草をする。あたしはそれが悔しくて、バレないように奥歯を噛み締めた。

「ボクとしては話にくいから、契約した際の態度に戻って欲しいけどね」

それは、こちらもだ。あたしだって、めちやくちや文句言つてやりたいもの。

けど、しょうがないじゃない。この恐怖は簡単には消えないわよ……。

「……何か用事があるの？」

ここ三日間、接して思ったことだが、キュウベえはかなり事務的だ。そんな奴が、ただあたしのところへ遊びに来るなんて考えられない。キュウベえは、あたしに頼み事があってやって来たに違いない。

「ああ。契約して三日も経つんだし、そろそろ魔女狩りに行ってもらいたいと思つたんだ」

「魔女……か」

確かキュウベえによると、魔女とは呪いを振りまく化け物らしい。

自らが作り出した異次元、結界に潜みながら、時には人々の悪意を助長させたり、操ったりして、様々な事件を起こす。

しかも彼女達は、人間を捕食するのだ。かなりの確率で、行方不明は魔女が関連している。

そんな魔女を退治するのが魔法少女な訳だけど、ついにあたしも魔女を倒す時がきたのか。

まあ、魔女と戦うのは正直嫌なんだけど。あたしだって痛い思いはしたくない。

けど、あたしは断れない。魔女は魔法少女にしか倒せないんだから、魔女を放置して人が死んだら、それはあたしの責任になってしまう。そんなの、流石のあたしも気分が悪い。

「申し訳ない話なんだけど、出来るだけ急いで魔女を探して欲しいん

だ。最近、ここら辺の魔女が活発になってね。早く倒さないと、被害が拡大してしまう」

「被害が拡大……?」

「キミはスマホを持っているかい?」

「持っているけど……」

スマホは今時の中学生にとって、マストアイテムも同然。スマホぐらい、あたしもいつもポケットに入れて持ち歩いている。

「それでネットニュースを見て欲しいんだ」

あたしは何だろうと疑問に思いながら、ポケットからスマホを取り出す。キュウベえに言われるがまま、あたしが住んでいる都市——牛木草市うしきそうのネットニュースを検索。するとすぐに、ずらつと記事が出てきた。

その中でとりわけ目を引いたのは、一番上の欄にある記事だ。そこには、「通り魔殺人事件。女性が包丁で死亡。他、三人の男性が重軽傷」と書かれている。

詳しく見てみると、昨日の午前八時三十分に、ある歩道で通り魔が出現。通行人の内、一人の女性と三人の男性が刺されたらしい。

女性は出血多量により死亡。男性二人は意識不明、一人は軽傷だという。

かなりの大事件だ。牛木草市は治安が悪いけど、こんな凄惨な出来事が起こったなんて、とてもではないが信じられない。

他にも調べると、殺人事件が起こった近くで、自殺や窃盗の事件が三件も起こっている。さらに、その三つの事件の一週間前に、四人の少女が行方不明になっているのだ。

ここまで事件が続くのは、明かにおかしい。「何かのせい」だとしか、思えない。

「……ねえ、まさかこの事件って……」

「そうさ。ボクはこれを、魔女によるものと睨んでいる」
背筋が凍る。

こうしてネットニュースを見てみると、ぞつとしてくる。魔女の呪いの影響力がここまで大きいだなんて思ってたなかった。正直、甘く考

えていたかもしれない。

でも、実際人が死んで、事件が立て続けに起こっている。魔女は本当に……、見えないところで不幸をばら撒いているんだ……。

「ここら辺の魔法少女は、事情があつて皆いなくなつてね。外から来ていた魔法少女の子達も地元でこたごたして、最近牛木草に通わなくなつたし、魔女が一時的に野放しだったんだ」

「そのせいで、魔女が活発になつた……?」

「推測だけどね」

けど、その推測は恐らく当たつているだろう。天敵がない野生動物が異常繁殖をするのと同じだ。抑止力がなくなれば、魔女だつて好き放題暴れ出すに決まつている。

それつてよく考えるとやばいな。そんな状態の魔女どもを、あたしが退治しなきゃいけないのか。

こちらら新人なんですけど。そのあたしが一人でやれることなんて、たかが知れてるじゃない。

まあ、あたしが他の魔法少女に頼んだとこで迷惑かけるだけだし、結局一人でやつてたから、状況はそう変わんないのか……。

もうこうなつたら、やるしかないでしょ。

「……分かつたよ。やるよ。魔女退治」

「本当かい? 助かるよ」

キュウベえが、じゃあ放課後にまた会おう、と言つて、あたしの元を離れていく。

彼も忙しいのだろうか。随分と急いでいるように見えたけれど。でも、用件を伝えたらすぐに帰つてしまうなんて、やっぱり淡泊だ。

お昼休みはまだまだあるんだから、もうちよつとくらい一緒に居てよと思う。キュウベえは好きじゃないけどさ、一人で居るのつて、結構暇なんだよね。

キュウベえが居たら、その暇もマシになるのに。



寝巢扉都市圏。そこに属する牛木草市は、都市圏が発展するにつれて、その恩恵を授かってきた。

元々、牛木草市は寝巢扉市のベットタウンとして生まれた衛星都市だ。現在でも、牛木草市から寝巢扉市に通勤、通学する市民の割合が、非常に高いのだ。そのため、寝巢扉市が盛り上がれば盛り上がるほど、牛木草も成長していく。

しかし一方で、周囲の都市の発展は遅れている。牛木草市に人口が流れ、人手と活気が奪われているのだ。

特にその傾向が目立つのが、私が住む市、早島市はやしまだった。炭鉱都市として栄えていたが、やがてエネルギー革命によって炭鉱は閉山。経済的に大打撃を受け、さらには牛木草だけでなく、近年は隣の市、飛雄角に人口が流出。これといった産業も、観光スポットもないため、ここら一体で一番衰退した都市となってしまった。

私が今いる、蘭ノ家学院の屋上からは、そんな早島の町並みが一望できる。

こうして見ると、かなり寂しいものだ。

洒落た店などありもせず、若者が集まりそうなデパートでさえない。住宅街には空き地が目立ち、道行く通行人は老人ばかり。車の数も、牛木草に比べれば少ない。

「相変わらず遅れているね、この町は」

風景を見ながら、キュウベえは私に話しかける。

「そうだね。でも、それはここに住む人達のせいだと思うけど」

あたしは、自分の長い髪を弄りながら答える。我ながら、自分の声は何処か投げやりだった。

「自分が住んでいる町だというのに、キミは随分とドライなんだね、阿岡入理乃あおかいりの」

「私からしてみれば、この町は何の価値もない」

早島では時代錯誤な考えが蔓延ってて、旧家に力が集中している。だからか、大したこともしてないくせに威張り散らしてばっかい

て、血筋や家柄ばかり気にしてる。

私も分家のくせに、本家の子とかよりも優秀だったから、親戚から随分といじめられたもんだ。

だから、こんな町なんて大嫌い。

「けど、船花^{せんか}ちゃんが守りたいって言ってるから、この町を守っているの」

私の相方、私のパートナーの船花ちゃんの義父は、この早島が好きだからね。

彼女としては、この町を守りたいんだろう。私は、それに付き合っているだけだ。

そうじゃなかったら、早島なんて見捨ててる。

「そのために、船花サチに黙って、邪魔者を排除するのかい？けど、一つ忠告しておくけれど、それはあまり褒められた行為ではない。少し自分勝手すぎやしないかい？」

「そうかもね。けど、船花ちゃんだって、私に任せた方が良いついていつも頼ってくれてるよ？」

私がやった方が、何事も上手くいくじゃない。

船花ちゃんも、それが分かって大抵のことは私に任せてくれてるし。彼女の手を煩わせないためにも、私がやらなければいけない。

「話があると聞いたけれど、何か用かい？」

これ以上言っても話が平行線だと思ったのか、キュウベえは急に本題に入る。私もさっさと用事を済ませたかったので、遠慮なく聞いた。

「……牛木草市で行方不明になった、三人の女の子がいたじゃない？でも、その子達って、全員魔法少女だったよね？しかもそこそこ強かったはず。……何でいなくなってるの？」

キュウベえが黙る。静寂が場を支配し、風の僅かな物音がより鮮明に聞こえた。

「いくらなんでも不自然よ。彼女達なら、大抵の敵は返り討ちにできる。まあ、一人か二人いなくなったのなら、まだ分からなくもないけど、どうして皆一斉に消えてるの？……それほど強い魔女が現れたと

「いのの？」

「いいや。キミもよく知つての通り、あそこには強い魔女は元々いない」

「よ。けれど、一人が魔女になって、皆その魔女に全滅してしまったんだ」

「そう……」

自然と表情が厳しくなった。私は左手の薬指にはめられたリング——指輪に形状を変化させたソウルジェムを見る。

魔法少女の契約の際に現れる、魔力の源。魔法少女の証。

しかしその正体が、自分達の魂だなんて、あの子達は最後の最後に、気付いていたのだろうか。

「……彼女達に同情しているのかい？」

「そんなのしてないよ」

悲しいなんて感情は、微塵も私の中にはない。あるのは、魔法少女システムに対する嘆きだけだ。

「だけど、これであの地域一帯は誰のものでもなくなった」

魔力を使えば使うほど、ソウルジェムに穢れが溜まり、魔力の残量は減っていく。魔力は無尽蔵ではない。

魔力を回復するには、魔女を倒せばたまに手に入る魔女の卵——グリーフシードにソウルジェムの穢れを移さなければならぬ。

つまり、魔女が多ければ多いほど、魔法も使い放題になっていく。だから、縄張りなんて概念もあるし、グリーフシードの奪い合い

だって頻繁に行われている。

誰も魔法少女が居ない地域なんて、最高の場所だ。何も邪魔されないし、好き放題にできる。

「そんな場所、別の魔法少女がすぐにやってくるはずだよ。そうじゃなくても、魔女の管理のために、貴方は他の少女と新しく契約を結ぶはず。もうすでに、あそこには魔法少女がいるんじゃないの？」

「そういうえば、キミも牛木草の一部を縄張りに行っているだったね。……キミは、その魔法少女を警戒しているのかい？」

私は何も言わず、先程のキュウベえのように沈黙した。でも、

キュウベえはそれを返答だと受け取ったらしい。勝手にペラペラと喋り出した。

「……分かったよ。それくらいなら、教えるよ。キミの言う通り、ボクはすでに新しい牛木草の魔法少女と契約を結んでいる。彼女の名は、色梨こゆりだ」

「……その子、どんな願いを叶えたの？」

興味本位で聞く。キュウベえはしばらく思索し、一言言った。

「ありきたりな、平凡で答えが見えきった願いだよ」

それを聞いて、ニヤリ、と私は口角を上げた。

なんて馬鹿な願いなんだろう。そんなので魔法少女になったの？
おかしいの。

「あまりにも下らない。普通の願いなんて、一番吐き気がする願いよ」
そういうものに限って、ろくなことにならないのだ。

願いは、呪いにしかならない。希望は、絶望にしかならない。

願いなんて、祈っちゃういけないのだ。現実には優しくない。いつだって、私達に牙を向く。

「それを言うならキミの願いだって、ありきたりな願いだけどね。友達」と親しくなった時間を消したい、だなんて、よくある願いじゃないか」

「……!!」

そう言われた途端、怒りが熱を帯びた。

私は手の中に白い杭を召喚すると、衝動のまま、キュウベえに振り下ろした。

その小さな体を食い破るように、杭がキュウベえを貫く。

私は杭を外すと、次に容赦なく踏んづけた。

「黙れ。二度と私の願いのことを口にするんじゃない」

感情なんて分かんなくせに、人の神経を逆撫でするな。

私の願いは、確かにとても下らないものだ。叶えちゃいけなかった願いだ。そのせいで、何が起きてしまったかなんて、私が一番よく分かっている。

でも私の場合、しょうがなかったんだ。私はあの子が怖くて怖く

全てに怯える少女

放課後、さゆりに用事で、一人で出掛けなければならぬと伝え（その日、さゆりは委員会があつたのだ）、あたしは先に学校を出て行った。

いつもならば、この時間帯、あたしは他の子の仕事をやっていた。でも今日は呼び止められないように急いで出て行ったから、仕事はまったくしていない。

あたしは複雑な気持ちだった。

あたしはずっと、他のクラスメイトの仕事を我慢してやってきた。でも、自分の意思ではないといえ、始めてその仕事をほったらかしてしまつたのだ。それも、結構簡単に出来てしまつた。

今までのあたしの苦悩は何だつたんだ、という感じだ。

かなり後ろめたくもある。あたしが我慢していることによって、他のあたしと同じ位置にいる子達は被害を免れている。あたしが逃げてしまえば、その子達に矛先が向かうだろう。

だが、仕方がない。申し訳ないが、人命の方を優先しなければならぬ。あたししか魔女は倒せないのだ。これ以上、多くの人を犠牲にするわけにはいかない。

「やあ、こゆり」

自宅で準備をし、外にちようど出た時、キュウベえが時間通りにやってきた。今度はびびりはしなかつた。こちらに来ると前もって分かつていれば、それほど驚きはしない。

「…………、こんにちはキュウベえ」

あたしはこそそそと小声で話す。

一般人はキュウベえを視認することができないらしい。実際、さゆりの前を通り過ぎた時、彼女は気づかなかつた。

そして周りには、当然ながら少なからず通行人がいる。普通に返事を返せば、あたしはただの変人にしか見えないのだ。

「目立つことを気にしているのかい？それなら、そんなに小さな声で話さなくても、テレパシーを使えば良いよ」

「テレパシー?」

「魔法少女は心の声を相手に届けることができるんだよ。試しにやってみてご覧」

あたしは若干困った。試しにやってみてご覧、と言われても、やり方なんか分からない。

とりあえず、あたしは伝えられ、と思いながらキュウベえを凝視する。そうすれば、なにか力が働いて、テレパシーが使えるそうだと思ったのだ。

「……………」

「……………」

互いに黙る。あたしは無心に心の声が届くように祈り続けた。

「……………どうしてボクをじろじろ見ているんだい?」

……………やがて、不思議に思ったのだろう。しばらくしてから、キュウベえが首を傾げた。

あたしは顔を少し赤くさせた。自分がいかに、変でズレた行動を取っていたか、理解したからだ。

「やり方が分からないのかい? 魔力を使って、ただ念じれば良いだけだよ?」

……………うるさいわね。そんなん、初めてだから分からないわよ。

とりあえず、キュウベえの言うように魔力というものを使おうと、意識の奥底へとイメージを膨らませる。

すると、不思議な感覚があたしに突然襲いかかった。まるで、視覚、聴覚などの五感に匹敵するような器官が、いきなりあたしの体にできたような感じだ。あたしは、その期間で自分の内で漲る「何か」を認識する。

それは言葉で言い表すとしたら、「オーラ」だろうか。その「オーラ」が、自分の身体中を駆け巡っている。これが、魔力というものかもしれない。内側で何か得体の知れないものがあるような、変な心地だった。

あたしは何とか、その魔力の流れを自身の制御下に置く意識をして、その力をキュウベえに向けて発した。

『こんな感じ?』

「そうだよ。やればできるじゃないか」

「どうやら、何とかテレパシーは出来たらしい。あたしはほつとしたと同時に、キュウベえに内心、上から目線な奴だな、と思った。」

『そ、それで、この後どうすれば良いの?』

「あたしは先程のようにテレパシーで尋ねる。一度できてしまえば後は慣れるようだ。それほど苦労は感じない。」

「魔女を探すためには、まずは魔女の魔力を探知しなければならんだ。ソウルジェムを元の状態に戻してかざしてみて」

『うん』

指輪を卵形の宝石へと形状を変え、手のひらに乗せる。

白い宝石は、相変わらずいつ見ても、ぞつとするくらい美しい。

「魔女の魔力を感知すると、ソウルジェムが光るんだ。その光を頼りに、魔女を探すんだよ」

『でも全然光ってないけど……』

「そこには、魔女はいないということだよ。魔女がいる場所や魔女の魔力に近づかなければ、ソウルジェムは反応しない。自分の足で歩いて、反応する地点を探らないといけないんだ」

要するに、ダウジングみたいなものなのか。

地味……、というか、えらく効率悪い探し方ね……。魔法少女って言うくらいなのに、シビアすぎ。

「何でこういうところは杜撰なのだろう。もっと便利な魔法やアイテムよこせよ。」

『……ほ、他に手掛かりは……』

ソウルジェムの光を頼りに探せとか、結構無茶苦茶だ。ここら一体をしらみ潰しに歩き回るなんて、どんだけ時間かかると思ってたんだよ。最低でも一ヶ月とか二ヶ月かかるじゃん。その間、絶対被害拡大したらどうするのよ。

何かコツみたいなのがないと、やってられない。というか、探せないでしょ。

「魔女はだいたい、人気のないところにいることが多い。例えば路地

裏とか、廃ビルとか、人が寄り付かないところだ。しかしその一方で、賑わっている繁華街などに現れることもある。彼女達は人を食うからね。だから、人がいない場所、人が多く寄る場所。その両方を中心に調べると良いよ」

キュウベエのアドバイスに、あたしは唸ずきながら考える。

人の多い場所……は大体の目星がつく。大型デパートとか、駅の近くとか、人が集まるところは分かりやすい。

だが、問題は人気のない場所だ。そんなところ、当然寄りもしないから、全然知らない。

スマホで調べのも、ちよつと無理があるかもしれない。人気がないということは、注目されていない場所ということだ。そういう場所がわざわざネットに書き込みされてるとは思えない。まあ、そこら辺はキュウベエにでも聞いて探すとしよう。キュウベエならば、詳しいだろう。

と、そこでふと気がつく。

まずは、事件現場の近くを探するのはどうだろう。事件を引き起こしたのが魔女ならば、現場周辺にいる可能性が非常に高い。いないとしても、何らかの痕跡が残されているかもしれない。行ってみる価値は充分ある筈だ。

『ねえ、事件があつた場所つて、魔女と関係しているよね?』

『そうだね。まさか、初めに事件があつた場所体調べるつもりかい? まあ、それが一番現実的な方法だけだね』

『うん。……事件の後、どうなってるのか気になるし』

ポケットからスマホを取り出して、最近起こつた牛木草の事件を調べる。

その事件を、時系列にまとめるとこうなる。

一番最初は、一週間前に起きた四人の少女の行方不明事件。学校はばらばらだが、少女二人は牛木草市にある牛木草中学で、あたしが通う、ミヤノ木学園中学校とはそこそこの近い。

二番目に起きたのが、今日から五日前に発声した、コンビニでの窃盗事件。犯人は初老のホームレス男性で、既に捕まっている。

三番目は、男子高校生の自殺事件だ。明るい生徒で、いじめにもあつてなかつたらしい。事件発生の日時は、コンビニ窃盗事件の一日後に発生。つまり、今日から四日前に発生した事件だ。

四番目は二番目と同じ窃盗事件だ。ただし、コンビニではなく、その付近のデパートで、あたしもよく買い物に通うくらいには、地元ではよく知られている場所だ。事件が起こった日時は、今日から三日前。犯人は捕まっていない。

そして最後の五番目の事件。昨日起きた通り魔殺人事件だ。事件被害者は女性一人に、男性三人。内、女性が死亡している。男性三人は無事だが、二人は意識不明だ。

こうして改めて事件のことを調べてみると、その異常性がよく分かる。とても短い時間で、必ず事件が起きているのだ。しかも同じ地域内でだ。普通じゃ考えられない事態だ。

ネットも随分な騒ぎになっているようだし、大分皆混乱しているようだ。……あたしは今友達と一緒にいないし、ネットもニュースもあまり見ないから、事件のことを知らなかつたけれど……。

「どこからいくつもりだい？」

『二番目の事件が起きた場所から』

とりあえず、一体の魔女が一連の事件の原因と仮定するとして、時系列順に事件を起こしていると考えると、事件が起こった場所を辿って移動しているはずだ（憶測だが）。

とすると、事件が起こった順番で回るのが一番なのだが、生憎時間がかかりすぎる。行方不明者四人の家族の証言では、少女達はそれぞれ事件前日、普段通り家で過ごしており、次の朝に忽然と姿を消していたというのだ。つまり、最後の目撃情報は家というわけだが、少女達がかつそり家を抜け出した可能性もある。

まあ……、要するに、何処から調べれば良いのか分からない事件なのだ。本格的に調べるには、労力をかなり費やさなければならぬだろう。調べるのは、一番最後が良い。

よって、一番をすつ飛ばして二番目から調べる。場所もコンビニだからのはつきりしてるし、ここからも比較的他の場所からは近い。

庭の方へ行き、そこに止められてある自転車の鍵を開ける。家の前まで移動させると、キユウベえが籠の中へ入ってから、あたしも座席に跨った。



コンビニは事件が起きた後だというのに、いつも通りだった。店内にも入ってみたが、従業員はなんだか締まりのない、緊張感に欠けた顔をしている。

まあ、犯人も捕まっている。そして、この従業員が直接現場に居合わせたわけではないのかもしれない。そういう態度はどうかと思うが、仕事場で事件があっても、少し他人事のように感じるのは分からなくもない。

とりあえず自転車を一旦止めて、卵形にしたソウルジエムを持ってコンビニ周辺を回ってみる。

やはりコンビニの窃盗事件は魔女絡みなのか、ソウルジエムは光っている。しかし、さつきからその反応は一定していて、しかも弱い。感覚的に伝わってくる、キユウベえ曰く、魔女の魔力というものも薄い気がする。

人気のない路地裏などにも行って見たものの、反応は変わらない。まさか、もういないのだろうか。

これだけ探しているんだ。それなのに、反応が変わらないなんて、魔力の痕跡だけしか残っていないんじゃないの？

だったら、コンビニ付近は諦めて、三番目の場所に行った方が良さだろう。時間もそれほどあるわけじゃ無いのだ。最低でも、夕飯時に帰らないとお母さん達に怒られる。

「あの……」

次の場所に行こうと、コンビニで止めた自転車の鍵を開けた時だった。

背後から、声をかけられた。

振り返ると、そこには一人の少女がいた。見かけぬブレザーの制服を着ていて、長い髪を下ろしている。気弱そうな印象で、何処か怯えた様子でこちらを見ている。年齢はまだ小学校高学年か、せいぜい高く見繕っても中学生くらい。確実にあたしと同年代か年下だろう。

「キミは……」

キュウベえが驚いたように呟く。あたしも少し驚いていた。何で話しかけられたのか、さっぱり分からなかったからだ。

「えーと……、貴女は……?」

「……」

首を傾げると、少女はちよつと驚いたような顔をした。

え……、何?何かあたし、変な質問した?そんなことないはずだけど……。

「あたし……、嫌なこと言っちゃった?」

「……え、あ、そ、その……、そんなじゃないの。ただ、私のこと……、知らないんだ、と思っちゃって……」

まあ、よく考えると当たり前だけど……、と少女はおどおどしながら言う。随分と喋るのが苦手な子らしい。きつと引つ込み思案なのだろう。

声をかけてきた理由が分からなくて、あたしは少女に問う。少女は、左手であたしの足元を指差す。その先にいるのは——キュウベえだ。

「……貴女……、キュウベえ連れてるってことは……、あの……、魔法少女よね?」

「……!?!」

この子、キュウベえを知っている!?!いや、それ以前に見えている!?!あたしは戸惑いを隠しきれなかった。普通ならば、キュウベえというものは視認できない。だから、キュウベえを指差すことも、普通ならば不可能だ。

だが、この子はキュウベえのことを認識して、彼を指差している。しかも、魔法少女のことまで口にしてているのだ。この子は……、ま

さか……、

「貴女も魔法少女……？」

「う、……うん。……そうだよ」

少女はキュウベえを指すのを止めて、左手を今度はあたしに示す。その左手の薬指には、あたしのもと同じデザインの指輪がはめてある。指輪に変化したソウルジェム。魔法少女の証たる宝石だ。

でも、ちよつと信じられない。こんな何処にでもいそうな普通の子が、同じ魔法少女だなんて。

それに、こちら辺の魔法少女は皆いないんじゃないやなかったっけ。何であたし以外の魔法少女がこちら辺の地域にいるんだろう。

「……阿岡入理乃。まさか、こんなに堂々と接触してくるなんて驚きだよ」

足元のキュウベえに話しかけられると、入理乃、と呼ばれた少女の眉がぴくりと動いた。

……何だろう。キュウベえの発言が何か気になったのかしら。

もしかしたら、この子はあんまりキュウベえのこと好きじゃないのかもしれないわね。だって、少しぶすつとした顔になっているし。

「……って、阿岡入理乃？」

その名前、何か聞いたことがあるような……。

確か、隣の市、早島にある名門、阿岡家のお嬢様じゃなかったっけ？何でも、小学六年生にして超天才で、中学校や高校の問題まで何なく解いてみせたとか。スポーツも、県内の小学生記録を塗り替えるほど、運動神経抜群らしい。他にもあらゆる分野で幾つもの賞を受賞していて、時々、県の新聞にその名前が記載されているのを見かける。そんな凄い子が、この子……？でも、そうは見えないというか……。イメージと全然違う……。もっと傲慢で高飛車な子だと思っていた。でも、当の本人はおどおどしていて、大人しそうで、とても天才とは思えない。

……「天才」によくある、自分に対する自信が感じられないのだ。この子は、こんな見るからに人見知りなあたしにもかなりビクビクしている。

「……………うん。私が阿岡入理乃……………」

そう肯定すると、少女はしばらくの間、考えるように俯いた。その様は、何故か何処となく苛立っているような仕草にも見えた。

「キミの行動は、まったく予想がつかないからね。これ以上、余計で余分なことはしないでもらえないかな？入理乃、キミは今度は何をする気なんだい？」

「……………」

キュウベえが聞くと、入理乃は答えない。ただじつと、黙って地面を向いたままだ。

「……………阿岡さん？」

不審に思い、入理乃に声をかける。すると、彼女はあたしの腕を掴んだ。

「ちよつ、ちよつと?！」

あたしの声を見無視して、入理乃は半ば強引に腕を引っ張っていく。

あたしよりも体格が小さいくせに、力は大人の男性じやないかという程強く、抵抗もできない。……………後から考えると、腕力を魔法で強化していたのだろうが、この時のあたしからすると訳が分からなかった。少女の力の強さに驚愕し、心の中であり得ないと叫び、混乱しくった。

入理乃は数分歩くと、あたしを路地裏へ連れ込む。

彼女の左手の薬指が光り、その光が体を包み込む。それが弾けて消えると、入理乃の服が変わっていた。

着物に、厚底の下駄。頭には花飾りがあり、その中心には赤い宝石。手には、和風な衣装には似合わせぬ金属の籠手がしてある。

……………初めて見る変身に、あたしは目を見開いた。魔法と分かっている、目の前で服が一瞬で変われば、驚いてしまう。まるで手品か何かを見ているような気分だった。

「何のつもりだい？キミは何をしよう……………」

キュウベえが再び聞くと、入理乃は無視し、袖から複数枚和紙を取り出すと、ぱつとばら撒く。それらは生き物のようにそれぞれ自立して宙を舞ったかと思うと、空気に溶け出し、消え去った。

次に、大型の日本独自の弓——和弓を虚空から呼び出す。

そして同様に、長く白い矢を呼び出すと、番て弓を構えた。その矢を、あたしに向けられている。

「へ？」

あたしは変な引きつった顔になってしまった。唐突過ぎて、理解ができない。

手の先端が冷たくなっていく。

「こゆり!!」

キュウベえが大声を出したのと、矢が放たれたのは同時だった。

あたしの中で恐怖が爆発する。頭が真白になり、あたしは悲鳴を上げ、無我夢中で魔力を放った。

刹那、がきいん、と、何か硬いものに当たった音が、路地裏に響いた。

「……へえ」

入理乃の感心したような声。あたしは何が何だか分からず、恐る恐る目蓋を開いた。

「……へ？」

いつの間にか目の前に、あたしと同じくらいの高さの壁ができていた。銀色に輝いていて、触るとつるりとしていて硬い。恐らく材質は鉄だ。

自分の格好も変わっている。着ていた私服が、飾り気のないワンピースになっていて、白い宝石がついたベルトをしている。

それで、すぐに気がついた。あたしは無意識に変身し、目の前の壁を魔法で作り返したのだ。

「あ、あたし……」

自分の手を見る。全身が、未知なる力に興奮して震えた。あたしがこんな、鉄の壁を作るなんて凄いことをやってのけたのか。テレパシーもそうだけど、あたしは本当に魔法が使える……。信じられないけど、魔法を使った感覚が体の中にまだ残っている。

「それがキミの固有の魔法か……」

興味深そうに、キュウベえが鉄の壁を見上げる。

「差し詰め、金属操作といったところかな？……なるほど、本人の意志が揺れ動いている時に願ったから、そういう魔法になったのか。キミの魔法は、キミの精神状態に由来する魔法なんだね」

「は、はあ……」

何言ってるのかさっぱりで、生返事をした。こんな時に何言ってるだこいつ、と、思わずキュウベえに呆れる。

そのせいかすっかり気が緩み、壁がどろどろに融解していく。あたしが気を張っていないと、壁は持続しないのだろう。

壁の高さも下がっていき、隠されていた入理乃の姿が叙々に露わになる。

あたしはぎよつとした。彼女がまた弓を構えて、矢をあたしに向けている。

「こゆり、防御を!!」

あたしは声に動かされるように、魔力を地面に流した。今度は、無意識ではなく意識的だった。やり方は、感覚的にもう分かっている。

矢が放たれるより速いタイミングで、溶解した鉄がまた凝固して壁を形成する。

壁に矢が当たったのか、鉄板を落としたときのような音がする。それに続き、壁の向こう側から、かん、という軽い音がした。

視線が上を向く。入理乃が、大きく跳躍していたのだ。

これでは、壁を作り出した意味がまるでない。

不味い不味い不味い不味い!!あたしは冷や汗を掻き、慌て出す。

入理乃は空中で新たな矢を番え、和弓の弦を引き絞る。矢は放たれた途端、無数の白い杭に分裂。恐るべき死の雨となって、あたしに襲い掛かった。

あたしは咄嗟に、側にあつた角に逃れる。防御しようなんて考えは浮かばなかった。

耳を塞いでいるのに、雨の音が体全体にビリビリ響く。きつと轟音とは、こういう音のことを言うのだろうか。

「……、何よ、あれ……」

雨が止んだのを見計らって、角からこっそり、着物の少女の様子を伺う。

入理乃は、鉄の壁に悠然と着地していた。その下——あたしがいた場所は、かなり酷いことになっている。無数の白い杭が、地面に刺さっていて、その先端はすべてアスファルトにめり込んでいる。

あの雨を食らっていたら、今頃あたしはこの場にいなかっただろう。絶対、穴だらけになって死んでいる。

鼓動が速くなった。言葉が出ず、口内が急速に気持ち悪い程渴いていく。

状況がよく理解できない。

何故あたしがこんな目に合っているの？突然魔法少女の子に会ったと思ったら、問答無用で襲われるとか意味不明!!何なのよ、一体!!こんな、あんまりというか、あり得ないわよ。

あの子、シンプルに言っちゃばい。おどおどしてたと思ったら、容赦なく攻撃してくるなんて、豹変し過ぎでしょ!!何考えてんの!?

「……こゆり、迎撃しないとこのままじゃ負ける。武器を出して立ち向かうんだ!!」

「嫌よ、無理に決まってるでしょ!?!」

小さい声で怒鳴る。

何言ってるのよ、このけむくじやら!!今出て行ったら、入理乃にやられるに決まってる。わざわざ目に見えた地雷を踏みに行くとか、阿保じゃないの!?

ここは、このまま逃げる方法を考えた方が絶対に良いって!!

「でもこんな場所に隠れていたって、すぐにバレる。それに逃げようとしても、入理乃からは逃げられないだろう」

キュウベえが横を向く。その先は、建物の壁。逃げ込んだ角は、行き止まりだ。上に登れそうな出っ張りも、周囲の壁にはない。まさに、八方塞がりだ。

「なら、答えは一つしかない。立ち向かうしかないんだよ」

あたしはもう一度、入理乃の方を見る。彼女は辺りを見渡すことな

く、弓も番ず、真正面を向き続けている。しかし、その目は鷹のように鋭い。

……うん、あの子に勝てる光景が想像つかない。これ、負けるわ。もう、ここは逃げ一択だね。どうにかしてこの角から出て、かつ入理乃から離れるしかない。まともに戦ってなんていられるか。こちら、魔女と戦ったこともないペーパーなのよ？

でもどうしようか。こう、相手の前に壁を作って、攻撃の邪魔とかする？でも、そんなの効果ない。入理乃にジャンプされたら、確実に終わりだ。

だったら、鉄の壁を作る要領で箱を作り、入理乃を閉じ込めよう。少しは足止めになるだろう。

よし、とあたしは深呼吸をする。

テレパシーの時のように、自分の魔力を内側から引き出し、武器を呼び出すよう念じる。

簡単に入理乃が捕まるわけもない。だからわざと遠くから攻撃をして、相手が防御した隙に、鉄の箱を作る。

武器が出た途端、手のひらに、木の感触が伝わった。ずしりと重い重量も、伝わってくる。

それは、ウオーハンマー、所謂戦鎚だった。柄の長さは、私の身長の半分ぐらい。特徴っぽい特徴もない、地味な武器だった。

本当は入理乃の武器のように、遠距離から攻撃できる武器が欲しかったが、仕方がない。

ここから投げて当てよう。こんなものでも、当たれば痛いだろうし。

「……キュウベえ、今からあの子に攻撃して、それを囿にして行動を封じる。その隙にあたし逃げるから」

「……少し驚いたよ、こゆり。まさか僕の意見を聞かないなんてね」肩に乗りながら、キュウベえが意外そうにする。

キュウベえの言葉に、あたしははっとした。……緊急事態とはいえ、あたし、自分の意思を出せてる。

迷惑かけるとか、そんなこと考える余裕がなかったせいなのだろう

う。

あたし、自分のことしか頭になかったんだ。

「……あたし——」

「だいたい分かったわ」

その声が聞こえた、次の瞬間、弦が鳴る音がした。

角の向こうから、矢が飛びこんでくる。それは有り得ない動きだった。普通、矢というものは真っ直ぐ進んで飛来するはずなのに、その矢は一人でに曲がって、こちらへ向かってきたのだ。

反射的に、防御姿勢をとる。しかし全くの無駄だった。

矢はあたしに当たる直前で、紙の帯に変わる。それは触手のようにあたしに纏わりついて拘束し、ぐるぐる巻きにする。あたしは立っていられなくなり、その場にどさりと倒れ込んだ。

「入理乃……」

「……妥当っちゃ、妥当な弱さか。まあ、色々使えそうな面もあったけど」

入理乃がこちらへ歩み寄る。しゃがみ込むと、あたしの顔を覗き込んだ。

着物の少女は、あたしの額に何かの紋様が描かれた、禍々しいお札を張る。そしてそつと手で触れて、魔力を流した。

「……!?!」

瞬間、心臓に痛みが走った。何かの奥底が掻き乱されるような感覚がして気持ち悪い。息が窒息し、血の気が引いていく。

あたしは何をされたのだろう。当然重たい病気になったみたいだ。かなり苦しい。これ……、ちょっとやばい……。

「入理乃、こゆりに何をしたんだい!?!まさか本当に殺すつもりなのかい!?!」

流石にキュウベえも慌て、声を荒げる。だが、入理乃は首を振って、愉快そうに答えた。

「こいつ、私の手駒にするの。裏切らない、私だけの操り人形にね」

二タリと笑う。その笑顔は、あのおどおどした子と同じ人物だとは思えなかった。

あたしは何とか、入理乃を睨みつける。

操り人形だが何だか知らないけれど、あたしを酷い目に合わせやがって。入理乃の理不尽さに、怒りが止まらない。

「なーに、私に逆らおうっての？自分の立場分かってないの？」

不機嫌さえを顔一杯に出す。入理乃は低い声を出し、私はお前よりも強い、と繰り返した。

「私の強い。お前よりも強いんだよ。お前は私にこれぼっちも逆らえない。だからお前はただ怯えて、私に従ってろよ。弱者は弱者らしく逆らうんじゃないよ」

「……」

「……いい？今お前には、逆らえないよう呪いをかけている。これでお前は、私の手駒だ。私がお前を、これから徹底的に、容赦なく利用してやる……!!」

あたしは無言になってしまった。

彼女は何処と無く必死だった。自分に対して、何か言い聞かせているようだった。

その様子に、つい同情を覚えた。声が、顔が、泣きそうなくらい悲痛なものだったのだ。

あたしには、その感情が痛い程理解できた。だって、あたしも種類は違うとはいえ、同じ思いを少なからずしてきたから。

「……貴女、あたしが怖いの……？でもあたしの何を、そこまで怖がっているの？」

「……!?!」

つい尋ねてしまった問いに、入理乃が動揺する。あたしも言った瞬間、しまったと青ざめた。こんな時に余計なこと言っただうすんよ。

「だ、黙ってる!!変なこと言うな!!私の心を乱すな!!」

入理乃が怒鳴る。顔がすっかり怒りで真っ赤だった。

「良いか、私に逆らうんじゃない!!私の言うことを聞け!!」

そう言っ、親指を立てて、それを勢いよく下にした。あたしはそれを、掠れゆく視界の中で見ていた。

気持ち悪い感覚が、増していく。奈落に落ちていくみたいに、意識が遠のいていく。

最後に、あたしは思う。これから、一体どうなってしまうのか、と。

手駒の意味

「さっさと起きろ」

ばしつと、勢い良く頬を叩かれた。その痛みで、意識が覚醒する。一体何だよ、と思いつながら目蓋を開ける。すると視界いっぱい、こちらを中腰で覗き込んでいる少女の顔があった。

「うあああ!!」

思わずびっくりして大声を上げる。飛び起き、あたしはそのまま後ずさろうとした。しかし、すぐに何か背中にぶつかると、

後ろを見ると、赤い色をした長い背もたれがある。それでいつの間にか、ソファで寝かされていたということを知る。

周囲もいつの間にか路地裏から狭い個室に変わっていた。

大きなテレビが壁につけられていて、その下にマイクが並べられている。あたしが寝ていたソファの向こうには、もう一つソファがある。その間に小さな机がある。そして隣からは、バラード調の音楽と微妙に下手くそな歌声が聞こえてくる。

……ここ、カラオケボックス?しかも割と近所のじゃない?何であたしはこんな場所にいるんだろう。

「私がお前をここまで運んできたの。あのまま路地裏に寝かせとくわけにいかなくなったからね」

少女——変身を解き、制服に戻っている阿岡入理乃は、はあと溜息を吐いて背筋を伸ばすと、さも面倒くさそうに顔を歪めた。

あたしは彼女にビビリ、萎縮する。恐怖はまだ、続いているのだ。「取り敢えず落ち着いて。彼女が襲ってくる心配はないから」

「キュウベえ……」

視線を入理乃の足元に向けると、そこには白い獣の姿があった。彼女の横にいることは、とても危険であるはずなのに、どうやらあえてその位置にいる事で、安全であるところらに伝えているようだった。

あたしはとりあえず彼を信じることにし、身構えるのを止めた。

……わざわざこんな、一般人も利用する場所にあたしを連れ込んだんだ。これ以上襲う理由など存在しないということだろう。

「賢明だね。それでこそ私の手駒だよ」

入理乃は目を細め、くすくすと馬鹿にしたような笑い声を漏らす。

……あたしは屈辱的な気分になる。いつも学校でからかわれているあたしだが、同年代に笑われるのと、年下に笑われるのでは訳が違う。

「あたしをこんな場所に連れてきて、……一体何のつもりなの？」

「お前を私がこの先どうするのか、話をしたいと思ったの。お前も色々気になっているでしょ？」

そんなの当たり前が決まってるでしょ。こっちはこう見えても、訳が分かんなくて、大混乱中なんだから。

「私もお前には、この状況を把握してもらわなきゃ困るの。だから、丁寧に説明するよ。事細かく、詳細にね」

少女は向かい側のソファに座る。それに続いて、キュウベえも彼女の隣に座った。

「それは実にありがたい。ボクとしても、キミがどうしたいのか、知る必要があるからね。でもキミがボクを追い出さないなんて、珍しいね」

「……別にお前に知られても、どうでもいいから」

あからさまに入理乃は嫌悪感を顔に出す。……やっぱりキュウベえが大嫌いなようだ。

どうしてそこまで嫌うんだろう。……まあキュウベえって胡散臭いところあるから、気持ちは分からなくはないけど。

「まあ、お前にとって決して悪い話ばかりじゃないよ」

入理乃はそう言うが、あたしは疑いの視線を止めることが出来なかった。……なんか悪い話しか待っていない気がする。

「まずは、お前をどうするのかを説明する前に、私の事情から話すね」
そうしないと分かりにくいだろうから、と入理乃は腕を組んだ。

「私がお前が知ってるの通り、この牛木草の人間じゃない。だけどね、私達のチームは、地元の早島に加えて、こここの一帯にも縄張りを持っていたの」

「縄張り？」

「ぎっくりいうと、魔法少女が所有する魔女の狩場と考えてもらって良いよ。魔女を倒せば、グリーンシードという魔女の卵が出る。それは魔力の回復に必要なものであり、魔法少女への報酬でもある。だからグリーンシードの奪い合いも頻発しているし、魔女の狩場は魔法少女の縄張りそのものになるんだよ」

うわ……。そんな事情あるとか、想像もつかなかった。

……でも、普通に考えみれば、命がけで戦っている分、報酬は他者を踏みじってでも欲しくなるよなあ……。あたしも話を聞いてて、そのグリーンシードとかいう魔女の卵（気持ち悪いけど）、欲しくなっちゃったくらいだもん……。

「……元々、その牛木草の縄張りは、譲られたものだった。譲ってきた魔法少女——伊尾ミズハ……。いいえ、東ミズハは、魔女と戦えない魔法少女だったの」

何でも、東ミズハは、『自身に降りかかる災難を回避する』という魔法の使い手だったらしい。

それは、あらゆる物理的な危機から逃れることができる強力な魔法であったが、厄介な魔法でもあった。

せつかく魔女を狩ろうと思っても、近づいただけでその固有魔法が発動し、魔女という『危険物』を遠ざけてしまうのである。しかも、制御ができないタイプの魔法だったので、本人がいくら頑張ってもどうにもならなかった。

これでは、魔女が野放しの状態になり、被害を食い止めることができな。だから、ミズハは入理乃とその相方、船花サチに自身の縄張りを託した。

……だが、ある日いきなり状況が一変したという。

ミズハが固有魔法を、自ら無意識に封印してしまったのだ。稀にある現象で、強い精神的ショックを受け、願いを否定すると、それによって生まれた能力が使えなくなるらしい。ミズハの場合は、クラスメイ卜の自殺が封印の引き金となった。

固有魔法を封印して以来、ミズハの様子はおかしくなり、早島が自分のものであると主張。その理由は不明で、今も分かかっていないそう

だ。

とにかく、彼女は無理やりな方法で早島に引っ越してきて、入理乃達から早島の縄張りを奪おうとし、争いに発展した。同時期に牛木草でも新しい魔法少女が生まれ、牛木草の縄張りも狭くなってしまう。決して楽な状況ではなかっただろう。

一応今は争いは解決しており、早島をそれぞれ半分割し、一方を入理乃達が、一方をミズハが縄張りとする取り決めがされているという。

他にも、早島の魔女の数を互いに調整することも取り決められた。早島の魔女は普通の土地よりも少なく、そうしなければ、どちらとも半分の縄張りだけでは生き残れやしなかった。

「でも、魔女の頭数を調整するためには、色々やらなければならぬことが多いの。それに、私は最近、魔力の研究をスタートさせた。それらに集中していたら、牛木草の縄張りの管理まで出来ないんだよ。だから、牛木草の管理をお前に任せようと思う」

「それはつまり、牛木草をこゆりに譲るといふことかい？」

キユウベえが驚いたように問い返す。それに入理乃が頷くので、あたしは困惑を隠しきれなかった。

あまりにも話が上手過ぎる。あたし、その縄張り好き放題に出来るじゃない。裏があると思えない。

「うん。でもその代わり、いくつかやってもらうことがある」

ほれ、やっぱり裏があった。

「二つ目は、私達のグリーンフシード供給源になること。グリーンフシードを定期的に、私の元へ届けて欲しいの」

「な……!!」

初っ端からとんでもないこと言うわね……。

……縄張りをあげるなんて言ってるけど、実質はあたしにあげるつもりなんかないんだ。ただこいつは自分の用事を優先するために、あたしを使うつもりでいる。

「二つ目は、牛木草の情報を週一で、決まった時間に私に伝えること。出来れば周辺地域のことも含めてね」

「牛木草の情報をすることは当然としても、周辺地域のことを伝えさせるのは、情報収集の一環ということかい？」

「そうよ。なーんか、最近寝巢扉都市圏って、魔法少女が増えてきてるの。その動向も少しは知りたいんだよ」

入理乃は複雑そうに溜息をついた。

魔法少女は、ある意味グリーンフィールドを巡って争うライバルだ。自分の地域と離れた場所であっても、数が多くなれば微妙な心境にもなるだろう。

「最後に、私と船花ちゃんに何かあったら助けなさい。拒否権は一切ないからね」

それって、もしもの時、あたしにどうにかしろってことか？面倒なことばかり、全部あたしに押しつけるわね。

……手駒の意味がようやく分かってきた気がする。入理乃にとってあたしは、都合良く動く動かせる便利な道具なのね。

「……でもあたしが逃げたり、抵抗したりしたらどうするの？」

あたしは頼みを断れない性格なので、悔しいが入理乃に従ってしまうだろう。

あたしはまだ「答え」を得ていないから、自分の意思を出すべきじゃないのだ。

しかし、そんなこと、入理乃は知らない。あたしが他の場所に行ってしまう可能性を、考えない訳がないのだ。

「ええ、もう言っただけじゃなかったっけ？そうできないように、お前に呪いをかけたって」

面倒臭そうに入理乃が答える。

そういえば、意識失う前に呪いとか何とか言ってたような気がするな……。

いや、そんな呪うとか本気でやるなんて馬鹿な……。

「そんなの信じられないって顔してるね」

そこで、入理乃は少し考えるような仕草をする。そして、ふと思いつたかのように、両手を可愛らしく叩いた。

「信じられないなら、試してみようか。実感するのが一番良いよね」

入理乃がすつと、あたしに人差し指を向ける。彼女は面白い玩具を動かす子供のように、無邪気に命令した。

「そこから動かないで」
「!?」

瞬間、急に体が動かせなくなった。

目も、腕も、指の一本一本も、すべてが硬直している。力を入れようにも、上手くいかない。

あたしはかなり狼狽える。まるで自分が突然、人形にでもされたような気分だ。

「もう動いて良いよ」

入理乃が再びあたしに命じると、体の硬直が解ける。

途端、どつとあたしは嫌な汗をかいていた。確かめるように、あるいは安心させるように、しきりに手で握り拳を作ったり、開いたりを繰り返す。

……大丈夫、体の操縦権はあたしに戻ってきている。

「これで分かったでしょ？ 私に逆らえないって」

ええ、充分理解できたわよ……。

さっきのを、入理乃は自分の意思一つで出来るのだ。やられたら、あたしに抵抗する術はない。

もつと酷い命令だつて出来てしまうのも、容易に想像がつく。

まさしく「鎖」そのもの。あたしを縛りつけ、飼うための「首輪」同然だ……。

「また裏切られたら困るもん。だからお前は逆らえないようにしたんだよ」

だからって呪いをかけるなんて……、随分と抜かりがないというか、容赦がないというか……。

それに、あたしを利用して牛木草の縄張りを維持しようという考えが思いつく時点で、かなり頭が良い。天才児の噂は、どうやら本当のようだ。

……入理乃ははっきり言って、色んな意味で異常だ。ここまでやるとか、普通思わないだろう。

「……入理乃、これはちよつとやり過ぎだ」

キュウベえが嗜めるように言う。流石に、看過出来ないらしい。入理乃は一瞬むっとしたものの、すぐにニヤついた顔になった。

「何とでも言えば？それに、最後まで話は聞くものだよ。お前にとつても、メリツトがない訳じゃないから」

キュウベえを映すその目が、細められる。キュウベえも、じつとそれらを見つめ返した。

「まあ、ボクにはどうすることも出来ない。……今回は諦めるよ」

やがて、しようがないと言わんばかりに、その場で伏せのポーズをとった。

……もうちよつと頑張つて欲しい。この場でガツンと言えるのは、キュウベえだけなのに。

「あの、何でもそもそあたしをそもそも襲つたの？」

事情は大体分かったが、そこだけがまったく意図が把握できなかつた。

呪いをかけるだけなら、もつと簡単な方法もあつた。それをしなかつたのはどうしてだろう。

「ああ、それは、お前の判断力とか、戦闘力とかを知りたかつたんだよ。急に襲わないと、そういう純粋な能力は測れないから。ある程度抑えはしたけど」

ええ……、あれで抑えてたとか冗談だろ……。

あたしを襲つた理由も理不尽だとしか言いようがない。あたしの戦闘力とか、知つてどうすんのよ。

「牛木草の縄張りを無くすわけにはいかないんだよ。そのためには、お前には強くなつてもらわなくちゃ」

「こう言うのもなんだが、それだったら強い子に呪いをかければ良かったんじゃないのかい？こゆりが強くなるのは時間がかかるよ」

あたしはキュウベえの言うことに、心の中で、うんうん、と頷いた。だからあたしの呪いを今すぐ解いてよ。

「あたしだってそうしかかつたんだけど、あの呪いは“新人”にしか効かないのよ」

入理乃はそんなにあたしが嫌だったのか、不機嫌そうに悪態をついた。

……その様子を見てみると、何とも言えない気分になってくるわね。

「しようがないから、二週間で強制的に強くなってもらうよ」

入理乃が悪戯っぽく笑う。その顔から察するに、多分、ロクなこと考えちゃいない。

一気に不安になってくる。頼むから、まともなものであってくれ。

「とにかく、特訓するよ、特訓」

そう入理乃が言った途端、あたしは胸を撫で下ろした。

良かった……。至極真つ当な方法で……。

「今ほつとする場面だっけ？」

あたしを奇妙に思ったのか、じと目で訝しそうに見てくる。しかしすぐにどうでも良くなったのか、数秒で気にする素振りを止め、また腹立たしい笑顔を浮かべた。

「船花ちゃんに頼んでしばらく時間作ってもらったから、私がお前に、色々教えてあげる。最初に言った通り、結構悪い話じゃないでしょ？」

確かにありがたくはある。恐らく普通の新人は、一から自分で試行錯誤しながら魔法を学んでいくだろう。その必要がなく、しかも先輩から鍛えてもらうのは、凄く恵まれていることだ。

二週間で強くなれというのは滅茶苦茶だが、鍛えてあげると言ってくる辺りが意外と優しい。やらされようとしていることが「あれ」だから、妙に怪しく思えてくるわね……。

「キュウベえもこゆりには強くなって欲しいでしょ？」

「そうだね」

キュウベえは、苦言を呈することなく素直に頷いた。彼は近辺の魔女の野放し状態をどうにかしたいと思ってるから、あたしにさっさと強くなって欲しいんだろう。

「これで私の話は終わりだよ。質問ある？」

あたしは首を振った。本当は何故相方のサチがここにいないのか

尋ねたかったが、あまり細かいところを聞くのも何だか怖くて質問できなかつた。

キユウベエも何も言わなかつた。彼の方は、あたしと違ってもう気になるところがないのだろう。

「じゃあ、自分の立場も理解出来たよね？色梨こゆり」

入理乃はいつの間にか知ったのか、あたしの名前を冷酷な声で呼んだ。

ソファから立ち上がると、こちらに近づき、あたしの前の立つ。

その瞬間、彼女の顔が無表情になった。それはただの無表情ではない。作り物のようなと形容すべき、恐ろしいものだった。

「あ、阿岡さん？」

心配になって、あたしは声をかける。だが、それは無視された。

彼女は俯くと風のように小さな、しかしはつきりと通る声で言った。

「……ミズハみたいに、私を裏切るなよ。私はお前より強い……。お前は下の立場だから、私を敬い、尊重し、媚び諂え。そうしなかつた場合、お前は敵だ」

入理乃はどこどころ、自分とあたしの立場を強調する。

それは、お前なんていつでも殺せる、という脅しに他ならなかつた。そして、入理乃は本当にその力を持っているのだ。言葉の一つ一つに重みがある。

脳裏に、路地裏で襲われた時のことが思い浮かぶ。ぞっとするような、背筋から伝わってくる冷たさが、抵抗しようという感情を凍らせていく。

「……わ、分かつた」

あたしが頷くと、入理乃は満足気になった。明らかに上機嫌になって、嬉しそうにしている。

わざとらしい口調で、入理乃はあたしの手を掴んだ。

「これから存分に私と船花ちゃんのために働いてね、私の手駒」



「こゆりに牛木草を任せしたのは、さつき話したこと以外にも何か理由があるんだらう?」

こゆりをに大きな紙を被ってもらい（私が魔法で生み出した和紙だ。これで覆ったものは透明になる）カラオケボックスから出て別れた時だった。

私についてきたキュウベえが、ふと唐突に先程の話題の続きを切り出してきた。

「例えばどんな理由があるっていうの?」

私は試しに、からかうように聞いてみる。まあ、大体察しがついていることだろうけど。

「キミは『寝巢扉都市圏の魔法少女が最近増えている』と話したね。それはつまり、『グリーンフィードの奪い合いも増える』ということだ」

「そうね」

魔法少女が増えれば増えるほど、グリーンフィードの数も『増える』が、同時に『魔法少女同士が遭遇する率』も跳ね上がる。すると、『魔法少女が対立』するケースも必然的に多くなる。魔法少女の数と縄張り争いは共に表裏一体なのだ。

「しかし、ここの縄張りには、キミを除けばこゆりは一人しか魔法少女はいない。ましてや彼女は新人。ここは魔法少女にとつて『奪いやすい狩場』——『手に入れやすい狩場』だ」

……そうでなくても、自身の縄張りを奪われた魔法少女が来ないとも限らない。魔法少女がいなくなつたという噂はすぐに広まる。どっちみち牛木草の縄張りには魔法少女がやってくる可能性は高い。「キミはまた、縄張り争いをしたくなかつたんだらう? だから牛木草を手放し、こゆりに任せることで、縄張り争いを避けた。単純に手放すのではなく、こゆりを手駒にしたのは、キミが話した通り、グリーンフィードが少しでも欲しかったからだらう? 互いに魔法の頭数を調

整しても、最低限のグリーンフシードしか得られないしね」

キユウベえは、狙いはそれだけじゃない、と続ける。

「こゆりは多分、すぐに魔女化してくれるだろう。しかし彼女の素質は高いから、万が一生き残り、縄張り争いにも勝って生き残れたら、戦闘に長けた魔法少女となるだろう。そうなった場合、キミは自分の意のままに操れる戦力を手に入れられる。ミズハがもしまた縄張りを奪おうとしても、こゆりという切り札を使って、迎撃することができると。……どうかな？ボクの考えは当たっているかい？」

その問いかけに、私は自分でもよく分からない表情を浮かべた。だが、下らない感じの顔に相違ないだろう。私が抱いている感情は、とても醜いものだ。

「……私を止めるなよ。私にグリーンフシードが集まれば集まるほど、私の研究も進んでいく。私の研究は、お前にとつても役に立つものだろう？」

「ああ、今回限り、止めやしないさ」

私は口角を上げる。

今こそ、利益と合理性を優先するインキュベーターの性質に感謝したことはない。これで心おきなく船花ちゃんのために、こゆりを利用できる。

……あの子”を消し、ミズハに裏切られた私には、もう貴女しか友達がいない。

貴女は私の灯火。真っ暗で怖いこの世界を照らしてくれる道標。

その炎を絶やす者がいるのなら、たとえ非道なことをしてでも、徹底的に排除する。

だって取り除かないと、私は一人ぼっちになるから。

道のり

「ちよつと、頼んでたのにどうしてやらなかったの？」

次の日、案の定学校に行くと、クラスメイトの女子達が詰め寄ってきた。お怒りなのか、話が違うと言わんばかりの表情をしている。まああたしがさぼるなんて想定外のことだろう。あたしは彼女達にとって、程の良い存在なんだから。

だが訳を説明できる筈もない。あたしは俯いたまま、小さくごめんなさい、と謝った。

「もう、色梨さんのおかげで、私ら大変だったんだから」

「そうそう。周りに迷惑かけないでよ」

「おかげで他に頼む羽目になつたじゃない」

悪意の言葉が向けられる。傲慢な冷笑、嘲笑があたしに浴びせられ、自分の恥部を晒されたような気持ちになる。

……あたしはさつきと断らなければ、と頭の片隅で考えた。カラオケボックスで別れる際、入理乃にまたここに来いと言われたのだ。それに魔女だってまだ見つけてない。今日こそ見つけないとやばいに……。

でもあたしに自分で断るなんて出来るんだろうか。こんな言いように言われているあたしに、勇気なんて出せるのか？

だがここではつきり言わないと、確実に遅れる。どうしようか、頭の中でぐるぐると考える。

「……!!」

ふと目を横に動かした、その時だった。遠くからこちらを見ている人影にあたしは気がついた。

その子は、同じクラスに所属する女子。だが目の前にいる子達とは違い、あたしのようにグループ内で地位が低い子だった。

あたしは瞬時に、彼女に仕事が押し付けられたのだろうということ察した。

ある程度予想していたくせに、声が喉の辺りで逆流した。

“どうしようか”なんて考え自体が、思考から消えていった。

「それじゃあ、さぼらないでね。色梨さん」

女子達はあたしが黙っているのを良いことに、今日の仕事内容を言うだけ言って去ってしまった。

あたしは一瞬、その背を少しだけ呼び止めたくなくなった。でも、止めておいた。どうせそんなの、やろうとしても出来やしない。

代わりに、ずっとあたしの方を見ていた女子へ顔を向ける。彼女はばれていないかと思っていたのか、驚いたような表情をしていた。だが、あたしがそちらに歩み寄るに従って、眼差しが厳しくなっていた。

「あの、あたし——」

「何でちゃんとしなの……?」

話しかける前に、彼女は恨みがましそうに、あたしに小さな声で呟いた。

「アンタのせいで私までいじめられたじゃない……。何で私に迷惑かけるの……?」

あたしの罪悪感が増し、胸の内に広がっていく。それは傷に消毒をした時に生じる、あのじわりと染みていく痛みに似ていた。

あたしは言い訳をするみたいに辿々しく言った。

「……つ、次から、ちゃんとやる。貴女に迷惑かけないわよ……」

「本当に……?」

「も、勿論……」

あたしはこくりと頷く。

もしかしたら、また魔法少女関係で仕事をさぼらなければならぬ時が来るかもしれない。しかし、この子の前ではそうするしかなかった。

「しっかりしてくれないと困るよ……。素直にあいつらの言うこと聞いてて……」

彼女は苦しそうに眉を下げた。

あたしにこんなことを言うのは、多分彼女の本意ではないのだろう。彼女も難しい立場にいるのだ。

……でも、だからってわざわざあたしを責めなくても良いじゃない

い。

あたしだって、わざと迷惑かけたんじゃない。迷惑かけたくてさぼったんじゃない……。

……どうしてあたしがこんな目に合うの？ 精一杯他の子より頑張ってるのに……。

あたしは首にかけた「お守り」を握る。

さゆりはあたしに友人が出来るようにとこれをくれたけど、やっぱり無意味だよ。

……「お守り」なんて、所詮願掛けで紛い物。効果なんてあるわけがない。

それを信じることは……、あたしには無理だ。



仕事を出来るだけ早く終わらそうと思ったのだが、いつも以上に押し付けられた量が多くて、約束の時間より大幅に遅れてしまった。

集合場所である空き地に何とか駆け込んだのだが、既にその場に入った入理乃は見るからに苛々していた。

彼女の肩にいたキュウベえは、いつものように無表情だった。怒っているのかいないのかよく分からない分、入理乃とは別の意味で怖い。

「何分待ったと思ってるのよ」

入理乃はこれだけ時間が経ってたんだぞ、とでも言うように腕時計を指し示す。早島は隣の市とはいえ、牛草駅までは電車で約二十分かかり、そこからここまで歩くと、更に二十分かかる。その手間に待たされた時間まで加わったら、腹も立つことだろう。

あたしだって怒る。

「い、ごめん」

「ごめんじゃないよ。私達には、時間なんてないの」

……ごもつともだ。こればかりは大いに反省しないと……。

「それで、どうして遅れたんだい？」

「……。学校の子達に仕事を押し付けられて……。それで断れなくて……。遅れた……」

あたしは事情を伝えたくなかったが、正直に話した。

キユウベえはあたしの境遇を知っているのだ。どうせ遅れた予想もついているだろう。

それに学校と違って訳を話せないということもないし、言わなくてもあの呪いで入理乃から命令されれば、どっちみち話さなければならぬ。

「お前……」

入理乃はあたしの話聞いて、驚愕したように息を飲んだ。そして少しだけ戸惑ったような素振りを見せると、確認するように質問してきた。

「こゆりはいつもそんな調子なの……？」

「いつもって……？」

「仕事を毎日押し付けられているのかってこと」

「そうだけど……」

頷くと、入理乃は更に質問する。

「じゃあ、お前は何で押し付けられても逆らわないの？当然嫌に決まっているはずだよな？」

「えと……、それは、怖いから……」

「具体的には？どんな風に怖いの？何故怯えているの？」

「そう言われても……」

何と説明して良いやら……。拒絶されるのが怖いー、とか、迷惑かけるのが怖いーとか言う、そういうアバウトな理由だからなあ……。

というか何でやけに聞こうとするのよ。そんなに重要なこと、これ？

「……まあ良いや」

入理乃はふいに、興味を失ったようにそう呟いた。あたしはきよとんとし、キユウベえは不思議そうに聞いた。

「まあ良いやって……、聞かなくて良いのかい？」

「……いつでも聞けるから、後でで良いよ」

入理乃は時計を一瞥する。こう話している間にも、五分くらいはもう経っていた。それ以上は、さつき自身で言った通り時間の無駄になるということだろう。

「ねえ、お前さ、昨日魔女探してたよね」

「何でそれを……」

まったく話した覚えがないので驚いていると、入理乃はその理由を淡々と言った。

「ずっと後からつけてたもん。だからそのくらい分かったよ」

「……」

こいつあたしのストーカーまでしてたのかよ。怖……。

「お前が追ってるのって、牛草市で立て続けに起こっている万引きとかの事件を起こした魔女でしょ？最近目立っている事件なんてあれくらいだしね」

「うん。でも……あたし一応、夕食食べてから、また魔女探したんだけど、全然見つかなかったのよ」

襲われて中断されたもんだから、その後も魔女探しを続行するしかなかったのだ。

お陰で夜、皆が寝ている隙に家を抜け出さなければならなかったのは内緒だが。

「え、お前そんなことしてたんだ」

入理乃が意外そうにする。

……ちよつとその反応は心外だ。そんなに不真面目に思われていたのだろうか。

「……基本、こちらの頼みを断らないし、特にやると決めたからには、一生懸命頑張るタイプみたいだからね」

一方のキュウベえは微妙なコメントをくれた。……貶されちゃあいないが、これもこれで傷つくんだけど。

「けど、ちようど良いや。今から私もその魔女を探すつもりだから、お前情報言いなよ」

ええ、と、突然のことにあたしは戸惑った。

魔女探しをするように言ってきたのは、一緒に行動するのだからそこまで驚きじゃない。しかし、情報を言えと言ってきたのは予想外だった。

さつき「魔女を見つけれない」と言っただばかりのあたしなんて、大した情報も持ってない。入理乃からしたら、宛にならないんじゃないの？

「どんなに些細な情報であっても、それが案外魔女に直結している可能性も高いし、ベテランの視点から見れば気づけることもある。ここは一つ、入理乃に言ってみたらどうか」

あたしの気持ちを察したのか、キユウベえが言うように進めてくる。あたし如きが役に立てるのか、と迷いながらあの時のことを説明した。

まずあたしは、事件が起こった三番目の場所——自殺した少年のマンションに行った。

そのこの周囲を回ってみると、やっぱり魔女反応があった。二番目の時のコンビニものと違い、ソウルジェムの光り方は強かったように思う。それから、何かちよつと反応に違和感があったが詳しくは分からない。だがこの違和感は一五番目の場所でもあった。

四番目の場所——デパートの周りでも魔女の反応はあった。ソウルジェムの光り方はコンビニと同じくらいだ。

そして最後の五番目の場所——通り魔殺人事件が起きた道路では、最も強い魔女反応があった。だが辺りを幾ら探しても見つからず、時間もやばかったので切り上げたのだ。

「……違和感、ねえ」

あたしの説明を一通り聞いてから、入理乃は何か引つ掛かったのか、思案するように顎に手をやった。

「確認するしかないか……。という訳で、はい」

面倒くさそうに顔をしかめながら差し出されたのは、魔法で作り出した大きな和紙だった。前日、カラオケボックスから出て行った時に被らされたのと、同じものだった。

つまりそれが渡された意味は、姿を消せという意味で……。そして
そうする必要がある行動は、すなわち――

「さっさと被って。今から屋根伝ったりしてデパートまで行くから」
思わず顔が引きつる。そんなあたしをほったらかし、入理乃は自分
の分の大きな和紙を作り出しだすと、それを頭から被った。



デパートまで行く道程は、ただの地獄だった。

先に行く入理乃は、紙を被って透明化しているとはいえ（同じ紙を
被っている者同士は、互いの姿が見えるようで、あたしは彼女を視認
することができた）平気で人前に姿を晒すどころか、赤信号だという
のに遠慮なく道路を横断し、ビルの壁をよじ登ったと思ったら、猿の
ようにぴよんぴよん別の建物へと飛び移っていった。

それについて行くのがどれだけ大変だったことか。魔法少女に
なったおかげで身体能力が馬鹿みたいに高くなったとはいえ、常時ハ
ラハラしっぱなしだったし、入理乃が速すぎて置いていかれるかと
思った。

だが、その道程は、デパートまで歩いて二十五分かかる時間を、たつ
たの十分に減らしていた。

それは入理乃が、牛木草に住むあたしよりも牛木草の道を熟知して
いるからだった。

ここら一帯を自身の縄張りにしてきたからこそ、詳しいのだろう。
入理乃はすぐに指輪を紫色の卵形の宝石へと変化させると、辺りに
翳した。

ソウルジェムが、瞬く間に光の点滅をし始める。入理乃は合点が
言ったと言うような顔をしてみせた。

「……やっぱり確認して良かった。私の考えは正しかったんだね」
「どういうことだい？入理乃」

入理乃はキュウベえの問いの代わりに、ポケットから折り畳んだ紙を出して広げた。

覗き込むと、それはどうやら牛木草の地図らしいことが分かった。随所に牛木草の名を関する施設の場所が記され、区画まで丁寧載っている。

入理乃の両手が一瞬発光した。すると地図に、等間隔で赤い点が四つ浮かぶ上がった。

「この点は、一つ目の事件を除いた、四つの事件の現場の位置だよ」「!!」

あたしは地図を凝視した。

赤い点は縦にジグザクで並んでおり、上から数えて一番目の点はコンビニ、その右斜め下にある二番目は団地……、高校生が自殺したマンションがあった場所で、三番目は二番目から左斜め下にあるデパート。残る四番目は、三番目から右斜め下にある道路だ。

見事に並んでいる順番と、事件が起こった順番が一致している。

「……やっぱり魔女は、事件が起きた順番で移動したんだ」

「いや。それは絶対じゃない」

「え?」

即座に否定されて驚く。

入理乃は点のうち、上から一番目の点……、二番目に起こった事件現場の点を指した。

「お前と集合する前にコンビニ付近を見て回ったんだけど、そこで感じた反応は、魔女のものではなく使い魔のもだった。だから魔女は、コンビニには移動していない」

「使い魔?」

「魔女の手下。魔女が生み出す子分。魔女と同じく、呪いを振りまく存在だ」

要は魔女の劣化バージョンみたいなものか。そんで、そいつが事件を起こすこともあって、今回のコンビニの事件がそれに当てはまるってこと??

ややこしいなあ……。

「お前が違和感を感じたのは、先に使い魔の魔力反応を感じ取ったから。マンシヨンと道路に使い魔以外の魔力の痕跡があったから、変に思ったんだよ」

「じゃあ……」

「ああ。間違いない。キミが違和感を感じた魔力は、魔法の反応だ」
そうすると、色々と納得がいく。

二番目と四番目は万引きの事件だった。

三番目と五番目はどちらとも死者が出ている。

この違いは、使い魔と魔法がそれぞれで起こした事件だったから。犯人が同じものは、共通点が出ている。

「しかし、この四つの事件の順番は実に奇妙だ。万引きが起き、その次の事件では死者が出て、また万引きが起きる。このサイクルにはどういった意味があるんだろうね。逆に入れ替わったりしても良さそうなのに」

……言われてみれば、確かにそうかもしれない。

魔法と使い魔は別個体だ。彼女達は独自に動き周り、事件を起こすことができる。当然事件が起きる順番は、万引き、通り魔殺人、自殺事件、万引き……、みたいに、不規則になるはずなのだ。

「それに一番目の行方不明事件との関係も分かんないし……」

「一番目は魔法とは関係ない」

入理乃がはっきりと断言する。

あたしは思わず、どういふことかと、地図から入理乃の顔に視線を移した。

すると入理乃は少し忌々しそうに歯を噛み締めた。

「……関係ないの。別の原因があるって私は知っているから」

……なら、行方不明事件と魔法の事件が被ったのはまったくの偶然？

「そんな偶然なんて……」

「信じられないだろうけど、偶然なんだよ。ねえ、キュウベえ」

少女は肩に乗っているキュウベえにも目をやると、嘲るように彼に同意を求めた。

「……キミの言っていることは正しい。行方不明事件は、魔女の事件とは何も関係がない」

しかし、キュウベえはそんな態度も意に返さずに極めて普通に答えた。入理乃はあからさまに不機嫌になり、僅かに唇を噛み締めた。

入理乃を奇妙に思い、内心首を傾げる。

別の原因を知っているとでもいたし、一番目の行方不明事件の件で何かあったのだろうか。キュウベえに対する態度も変だし……。

とにかく……ここであんまり詮索しない方が良さそう。何かいかにも地雷つばいし、怒られるのは勘弁だ。

「さっきのキュウベえが言ったことだけど——」

入理乃は無理やり話を戻すと、地凶にある上から数えて二番目の点を指した。

「魔女が使い魔を放って、その後移動したからじゃないの？」

指を斜め上にある、一番目の点にスライドしてみせる。そして次に二番目の点に戻ると、入理乃はそのまま下にある四番目の点に指を移動させた。

「最初に魔女が上から二番目の点の場所——マンションに取り付いた。そこから使い魔が放たれ、一番目の点の場所——コンビニに向かい、万引きを起こした。マンションにいた魔女は、次の日に男子高校生を自殺させたのちに、そこから離れて移動。今度は道路に取り付くと、また使い魔を放った。そいつは前に放たれた使い魔同様、デパートで万引き事件を発生させ、再びその翌日に魔女が通り魔殺人事件を起こした。

……多分これが事の真相じゃないかな」

「……そうかも」

その説明は、十分信憑性があるものだった。

この動きならすべての辻褄が合う。時系列にも何の矛盾もない。

魔女の糸口が、やっと掴めた気がした。ここまで分かったのはすごい進歩だよ。これなら魔女も見つけられる……!!

「でも、こゆりは道路付近で魔女を発見出来なかった。既に道路から離れているんだろうね……。次は何処に向かうやら……」

「……」

湧き上がった希望が、キュウベエの言った言葉で掻き消える。

魔女の道のりを知っても、その後の魔女の行方までは分からない。つまり魔女の行き先を特定することが出来ない。

これでは、結局最初と同じである。手がかりが何一つない。

「次に魔女が向かう場所なら、だいたい予想はついている」

入理乃は地図を畳み、ポケットにしまいながら言った。そして、新たに何かに気づいたのか、急がないと不味い、と慌て始めた。

「すぐ行かないと……」

「ど、何処に？」

気圧されて恐る恐る聞くと、入理乃は空を睨みながら答えた。

「マンシヨン……。男子高校生が自殺した場所……!!」

魔女

入理乃は和紙をマントのように羽織ると、あたしにもう一枚魔法で生み出した大きな和紙を渡して、駆け出し始めた。

あたしも慌てて和紙を羽織ると、彼女を追いかけて問いかける。

「どうしてマンションに行かないの!?」

マンションに魔女はいないのだ。行ったところで、意味などあるはずがない。

入理乃は面倒臭そうに間を置くと、ただ前方を見ながら、あたしに振り返らずに答えた。

「お前、マンションに強い魔力反応があるって言ってたよね。あれ、結構おかしいんだよ。かなり時間が経ってるんだから、魔力はかなり薄まっているはず。普通ははつきり残りはしない」

「じゃあどうして……」

「……考えられるのは一つしかない。その魔力は目印として残していったものなんだよ」

「目印……?」

「餌場としての目印だと思う。……呪いを撒き散らされた場所には、人々の負の感情が向いやすい。そこは魔女にとって好ましい環境だから……」

全身の毛が逆立つ。入理乃が慌てるのも道理だった。

このままでは、魔女が目印を目指して一直線だ。多くの人が、魔女に喰われてしまう。

「だが、それだけでどうして魔女がマンションに向かっていると言えるんだい? 道路から離れて、別の場所に取り付いているかもしれないよ?」

「じゃあこゆりは、何でそこから魔女を追いかけられなかったの。道路の魔力反応は、時系列を考慮するに、目印ではなく確実に魔女自身の痕跡なんだよ? 足跡だってはつきり残っているよね?」

入理乃は路地裏へと入り込みながら、早口で説明した。

「……要するに魔女は道路の先から進んでいないってことなの。魔女

がまた来た道に戻っていったから、足跡が曖昧になったんでしょね。多分、私達を攪乱させるために、魔女はわざと道路にまで移動して事件を起こしたんだ……」

……そうだとしたら、かなり恐ろしい。

知性とは武器である。知性による策略は、弱者を強者にするのだ。生物の中でも弱い人間が地球の頂点にあるのも、その知性のお陰なのである。

だから、単純な力の強さに、頭の良さが加わってしまったら、それはもうとんでもない脅威な訳だ。まさに鬼に金棒。弁慶に薙刀といった感じだろう。

あたし達は、マンションまでの道を急ぐ。

入理乃の先導の元、遮蔽物を飛び越え、通路を突っ切り、人が到底通れないような、そんなあたし達魔法少女にしか通行できないルートを進んでいく。

やがて十五分後、マンションが立ち並ぶ団地が見えてくる。入理乃はジエムを卵形にして、様子を確認する。その宝石の光は、強く激しく明滅していた。

入理乃の読みは当たっていたのだ。魔女は、この場所にいるに違いない。

けど、魔女が何処にいるのかまでは分からなかった。集中して魔力の気配を探るものの、その発生源が見つからない。

真っ白い煙がいったいどの部屋では、それを出している物体が何であるか視認するのは難しい。視界が一面真っ白になって仕舞えば、人は盲目になる。

それと同じ状態にあたしはなっていた。辺り一体の魔力の反応が大きすぎて、大元の魔女の場所が見分けられない。

「こっちだね」

しかし入理乃は瞬時に団地の一角を指す。そして、迷わずそこへと歩き出す。

どうやら一瞬で、魔女が何処にいるのか見分けられたらしい。

「ど、どうして分かったの？」

「魔法少女やってるうちに、色々な魔女を探して戦ってたら、自然と見分けられるようになった」

つまりは、部屋の構造を時間をかけて、完璧に把握したということだろうか。

盲目であつても、物体の位置が分かっていたら、全体像は掴める。だから、煙を出している物体を簡単に見つけることが出来たのだ。

「まあ、入理乃は一年間魔法少女をやっているベテランだからね。こればかりは、分からなくてもしょうがないさ」

キユウベえがフオローしてくれる。

まあ……、成り立てとずつとやっている奴じゃあ差が出て当然ではあるか……。

でも若干入理乃に負けたの、なんか悔しいのよね……。あたしも、そのうち、魔女をすぐに見つけられるようになりたい……。

「……こゆり」

しばらくして前を歩く入理乃が止まり、視線を上にする。

ちょうど死角で、他のものから影になっているマンシヨン。その屋上に、二人の人影がいる。

一人は女性。中年ぐらいで少し痩せている。もう一人は年老いた男性で、サラリーマンなのかスーツを着ていた。

二人は性別も年も不揃いだ。だが、共通するものが一つある。揃って虚な目をしていたのだ。……それは遠くからでも、正気ではないと分かる程に空っぽな瞳だった。

「まさか……」

嫌な予感がした。

それを裏切らず、人影達はよろよろとした足取りで屋上の鉄柵に近づいていく。

前に、高いところから物を落としたり、どのように壊れるのだろうか、という動画を見たことがある。

それは確か教育番組のような内容で、硬いものや柔らかいもの、様々な材質の性質の違いについて説明がなされていた。

だが、……それが人に置き換わったら、どうなるのだろうか。

しかも、動画に映っていた物を落下させていた場所よりも、マンションは高そうに思う。

その結果がどうなるのか、イマイチ予想がつかない。確実に分かるのは、この高さから落ちた人間は死ぬだろうと言うこと。そして、とんでもなく醜い姿になるだろうということだけだった。

二人の人間は、手すりに手をかける。

あたしは堪らず、駄目、という絶叫を出して手を伸ばす。だがそれも無駄なこと。彼らは手すりから身を投げ、地上目掛けて落下した。そしてそのまま、ぐちゃりと潰れて――

「…………ふっ!!」

その時、短い息が発せられた。見ると、入理乃が魔法少女に変身していて、地に手をつけている。

その手前の地面から、瞬く間に触手のような無数の紙の帯が生える。それは落ちる二人の人間を絡めとり、空中で受け止めた。

「降ろせ」

命令すると、紙の帯はその通りに優しく二人を下ろした。

入理乃は肝を冷やしていたのか、ほっとしたように脂汗が滲んだ額を腕で拭った。

あたしは地面に横たわっている彼らを見た。二人とも意識を失っているようだが、ぱっと見怪我らしきものはない。

安心感がどっち押し寄せてくる。あたしは入理乃に、最大級の感謝を込めてお礼を言った。

「ありがとう……」

「何でそこでお礼……?」

立ち上がりながら、心底不思議そうに入理乃は聞いた。

「…………この人達を助けてくれたから」

あたしはただ見ているだけで、何も出来なかった。入理乃がいなかったら、彼らは死から逃れられなかっただろう。

だから自分が不甲斐ない分、感謝したかったのだ。

「そう」

興味なさげに、入理乃が答える。それは意外と淡泊な態度だった。入理乃は二人のうち、少し痩せている中年女性の首元を確認した。今まで気づかなかったが、そこにはスライムに目玉が飛び出ている、不気味なマークが記されてあった。

「これは魔女の口づけだね」

「魔女の口づけ？」

「魔女が獲物につける印、といえば良いかな。魔女に操られている人にはこのマークが浮かび上がるんだよ」

じゃあ、やっぱりあの異様な彼らの状態は、魔女によるものだったんだ。

……ああいう風に、意思すらも奪いさって操り、目に見えないところで魔女は人を殺しているんだろうか。

その数は、一体幾つなんだろう。百なんて下らない。恐らく方は超える。

考えるだけで目眩がしてくる。

入理乃は羽織っていた和紙を消すと（ついでにあたしのも消えた）手の中に和弓と矢を呼び出し、構えてマンシヨンの壁へと射った。

矢が刺さった瞬間、壁の一部が揺らぐ。そして、次には魔女の口づけと同じマークを出現させた。

「あれは……」

「魔女への結界の入り口さ」

キュウベえがすぐに、あたしの疑問に答えてくれた。

あたしは、その結界の入り口に近づく。

……今までになく、緊張が走っていた。いよいよ、これより始まるのだ。あたしの魔法少女としての戦いが。

「こゆり、恐らく獲物を殺害するのを邪魔をされて、魔女は怒っている。突入したら、間違いなく魔女が真っ先に襲いかかってくるだろう。入理乃がいるからといっても、警戒を怠ったちゃいけないよ」

キュウベえの注意に頷く。

言われなくても、魔女が危険な存在だというのは先程の後継で充分に分かった。

魔法少女に変身する。そして、前回と同じように武器を召喚しようと魔力を練り上げる。

……だがその直前で、ふとハンマーじゃなくて、別の武器だったら良いのに、と思った。

だってハンマーって、なんか心元ない。攻撃力はともかく、防御力がなさそうだ。

あーあ、手取り早く、防御力がありそうな盾とか呼び出せたら良いのに。まあ、そんな簡単に上手くいく訳が――

「……!?」

あたしは瞠目した。

あたしの手の中には、いつの間にか、大きな盾が召喚されていた。

それはずしりと、かなり重たい。形は大きな円形。見るからに丈夫そう、それが頼もしく思える。

「お前、どうやって……」

入理乃は盾に釘付けになっているようだった。顔も、どういうことだ、と言わんばかりの表情をしている。

「あ、あたしにもさっぱり。ただ身を守る武器が欲しいと思ったら、盾が出てきたの」

「……どういふことだろうね。キミの武器はウォーハンマーのはずなのに」

どうやらあたしが盾を出したことは、かなりおかしなことらしい。

そういや、入理乃は和弓だけしか使っていなかった。そこから考えるに、魔法少女の武装ってのは基本的に一つなのかもしれない。

でもあたしは、武器を二種類出している。もしかしてあたしは、他の魔法少女とは別に、武器を何本か所持しているのだろうか。

「……今度は別の武器を出すよう念じてみてくれないかい?もしかしたら、他の武器も出てくるかもしれない」

キュウベえも同じことを考えていたのか、違う武器を出すよう言うてくる。

あたしはやってみる、と頷くと、盾以外の武器……試しに斧が出てくるように思い浮かべる。

そうして魔力を呼び起こすと、変化はすぐに起こった。突如、盾がぐにやりと金属の液体に融解したのである。そのままその液体は生き物のように蠢きながら、一つの塊へと凝固していく。そして、あっという間に身長大の斧になった。

「……」

全員が言葉を失う。

その後も武器は、斧、剣、ナイフ、刀、槍と、想像した通りに変形していく。最早、何でもありだった。

「何なんだ、これ……」

思わず、ぼそりと呟いてしまった。ますます困惑が強まる。あたしの武器は一体どうなってんだよ。

「……その武器本来の姿にしてみたら？変形する以上、基本の姿があるはずだよ」

入理乃が提案する。それは、ナイスアイデアだった。

武器に、基本の姿になれと命令する。

すると、どろりと武器が手から滑り落ち、完全に融解した液体の状態で地面に広がった。

またもや、全員が言葉を失った。やがて、入理乃が目を見開きながら、結論づけた。

「まさか、……液体金属、……てこと？」

そうとしか思えなかった。

だって目の前で金属が液体になっているし、あらゆる武器に変形するのも、液体金属ならまあ納得がいく。あたしが操る魔法もキュウベえ曰く金属操作らしいから、それにもぴったり当てはまる。

でも、正直戸惑ってしまう。液体金属とか、それもう魔法少女の武器としてありなのかよって感じだし、どう扱えば良いのか分かんない。

「……一応斧にしとけば？」

入理乃は微妙な顔をして言った。

「そうね……」

液体より、武器にしてた方がよっぽど使い勝手は良い。あたしは地

面に広がった液体金属を、再び巨大な斧に変形させると、それを拾い上げた。

「じゃあ、行こうか」

手の震えを誤魔化し、ぎゅっと握りしめる。そしてマークの中へ飛び込んでいく入理乃に続いて、あたしも結界の入り口へと入っていた。



ゴミ屋敷。

そんな言葉が、まず頭に思い浮かんだ。何故ならそこが、本当の意味で『ゴミだらけ』であったからだ。

腐臭がする腐った食べ物。破かれたチラシ。着古したであろう洋服。そういったものが、地面に足場もないほど埋め尽くされている。その中央で叫びまくっているのが魔女なのだろうか。

全身のシルエットは辛うじて人の形をしているが、しかし体がどろどろの青い粘液だ。そしてその体の腹の辺りに、丸く赤黒い球体が浮かんでいる。人間の真似をしているスライムとでも言うべき姿だった。

なるほど、人を喰らう化け物だけあって気持ち悪い姿をしている。ちよつとあたしは安心した。これが人間に似た姿だったら、どうしようかと思っていたのだ。

しかし化け物なら、心おきなくあたしでも攻撃できるというものだ。

「私の邪魔しないでよ」

和弓を構えながら、入理乃が言った。あたしは何となくで斧を構えながら、こくりと頷く。感じていた緊張が限界突破する。そのせいか、死地に赴く兵士は、多分今のあたしと同じ気持ちなんだろうなあ、というどうでも良い考えが頭に浮かんだ。

「二人とも、来るよ!!」

キユウベえがあたし達に大声で警告した刹那、魔女が奇声と共に辺りへ粘液を飛ばす。

あたし達は飛んで回避し、そのまま散開した。

入理乃が魔女の横に走り込みながら、矢を器用に連射する。それは一極集中の点の攻撃。当たるときに魔女の体を大きく穿ち、削っていく。

だが、効いていると思ったのも一瞬だ。攻撃が止むと、すぐに魔女は再生しする。

入理乃は今度は、面の攻撃を試した。放った矢を、数百もの白き杭に分裂せ、魔女へと浴びせたのだ。

虫食いのように魔女の体が次々と食い破られていく。

しかし、何も変わらない。同じように魔女は再生する。

彼女は二度も攻撃されたのが気に食わなかったのか、狂ったように雄叫びを上げながら粘液の腕を勢いよく伸ばした。その標的はもちろん入理乃だ。

「阿岡さん!!」

すぐさま飛び出し、横から粘液の腕へと斧を振り上げる。

怯んだようにぬるりと腕が引つ込められ、斬撃が避けられる。そして片方の腕を、鞭のようにあたしに振り上げてきた。

逃げようと思ったが間に合わない。仕方なく斧で防御する。魔女の攻撃の勢いで、あたしは少し後ずさった。

「こゆり、使い魔だ!!」

そこへ、煩い羽音と共に大量の黒い影が何処からともなく殺到した。

それは人間の最大最悪の天敵。トイレの汚れよりもしつこい、ずぶとき汚物。所謂、一般的にGのイニシャルで呼ばれる忌々しき台所の悪魔の群生だった。

あたしがびびっている隙に、入理乃が前に躍り出て矢を放つ。それは幾重もの紙吹雪の嵐へと姿を変え、周囲のごみを巻き上げながらゴキブリ共を吹き飛ばした。

「ちゃんと集中してよ。たかがゴキブリじゃない」

「ご、ごめん」

入理乃が横目で軽くあたしを睨みつけ、つい謝る。

本心で言えば、うっせえ!! Gは苦手なんだよ、と怒鳴ってやりたかったが。

羽音を飛ばたかせ、また吹き飛ばされた虫の軍隊がこちらへと向かってくる。足がひしゃげたり、胴体が真っ二つにされたりしてるのに、平気な感じで触覚を動かしている。流石G。いちいちしぶとい。後やっぱり気持ち悪い。

「やって」

入理乃の命令に、ぎゅつと斧を握る力を強くする。今度は迷惑かけないように、ちゃんとやらねばならない。

……あたしだって、無様な姿は晒したくないのだ。

斧に電気にも似た魔力を纏わせ、刃を地面に突き立てる。鉄の木々が地面から勢い良く生え、Gを一気に串刺しにする。

その間を縫うように飛ばされてきた魔女の粘液を、入理乃が矢で相殺させた。

使い魔が再び召喚され、こちらへ本来ないだろう牙を剥き出しにする。

しかし入理乃は、どうやら遠距離だけでなく近距離戦もいけるらしい。

彼女は迷わず和弓を振るう。仕込まれていたのか、末弭から槍が飛び出し、ゴキブリを切り裂く。続く二撃目で使い魔を完全に沈め、三撃目で、隣で密かに近づいていた使い魔を弭槍で貫いた。

その間にあたしは魔女へと向かいながら、斧を剣へと変形させる。魔女は人間大の大きさだ。ならば大振りな斧より、剣の方が小回りも効くし当たりやすい。

剣を振り上げ、切り上げる。斬撃が粘液の両腕を切断した。当然、魔女の腕はすぐさま回復する。

だが、あたしの狙いは、一瞬でも良いから攻撃手段を潰し隙を作ることだ。

掛け声を上げて、腹の赤い玉へと剣を振りかざす。確かな手応えと共に、ガラスが割れる音がした。

「!!」

魔女の悲鳴が響き渡る。人型の粘液は、赤い玉を失っただけでゴミの山に溶けていった。



気がつけば、元の場所に放り出されていた。

ほんの十分程度の時間であったはずなのに、息があがっている。達成感よりも、疲労感の方が大きい。なんとかへたり込まないだけで精一杯だ。

対して入理乃は、小さいくせに全然疲れた様子を見せていない。スタミナの差が現れている。

「お疲れ様、二人とも」

キュウベえの言葉が身に染みる。労われるのがこんなに嬉しいなんて、初めての体験だ。……まあ、お前戦ってないのに、よく言うよ、という不満もちよっぴりあるんだけど。

何はともあれ、これで一見落着だ。魔女を倒したんだから、被害もこれ以上起こらない。町の平和は守られたって訳だ。

……でもそれは、殆ど入理乃の力だ。

あたしは何も出来なかった。あたしでは、何も対処できなかった。

「何を俯いてんの？」

入理乃が変身するとき、横たわっている女性のうち、女性の腕を自分の肩に回しながら言った。あたしも同じように変身を解くと、意識のない男性の腕を自分の肩に回して答える。

「……あたし、大して何も役に立ってなかったなって思ってたよ」

「そんなことないさ。キミは充分に頑張ったよ」

横からキュウベえが歩み寄って、あたしを励ました。だが、気分は晴れない。本当にそうか？と思えてならないのだ。

「私から言わせてもらえれば、お前が事前に調べなかったら魔女見つけられなかったし、そこは役に立ったよ?」

「……だけど、あたしはその後は大して役に立たなかった」

男性を運びながら自虐的に微笑む。そんなあたしを、入理乃は隣でじつと見つめていた。

「……すごいわね、阿岡さんは。魔女の行き先を一人で見つけちゃうんだから。天才だよ」

これは決して皮肉で言っているんじゃない。純粹に褒めているのだ。

その頭脳、その分析能力は、大人顔負けだ。それは称賛されるべきものだし、讃えられるものだ。

「……、そうだね」

入理乃はあたしの言葉に頷いた。まるで、当然のように。

しかし、その顔はのっぺらぼうのように無表情だった。褒められても、それがどうしたの、といった感じだった。

「……でも、天才に何の意味がある訳? 天才児の阿岡家のご令嬢なんて、何の意味もないじゃない」

「そんなことは……」

「そんなことはあるんだよ。……だって、才能なんてどうせ無駄だもん。欲しいものは何一つ手に入らない」

何か彼女なりに、天才というワードに思うところがあるのかもしれない。顔が苦々しいものに変わっていた。

「ご、ごめんなさい。余計なことを言っ……。あたし、貴方の気持ちを何も考えてなかったわ」

あたしはすぐ、入理乃に謝った。

誰だっけ心の中に土足で踏み込まれれば怒る。あたしはそれを無遠慮に、容赦なくやってしまったのだ。

「……」

入理乃は何故か、そこで呆けたように固まった。しかしそれも一瞬のこと。すぐに無表情になると、近くのベンチへと女性を寝かした。

あたしはその隣に、男性を寝かせる。

幸い、日も傾いてきている。必ず誰かが帰ってくる時間帯だから、この人達もすぐに一般人が見つ付けてくれるだろう。

「……どうして、クラスメイトに仕事を押し付けられても逆らわないの？何がそんなに恐ろしいの？」

ふと、これまた唐突に、入理乃が後で聞けるからと言って中断した質問をこちらにぶつけてきた。

だが、その視線は、あたしとは別の方向——団地にある、ブランコしかない公園に向けられている。

「答えてよ。……私にはその感情が理解ができないのよ。分からないものは怖いだよ」

しばらく沈黙する。あたしは、入理乃の表情を見ることも出来なかった。

やがて、あたしは感情を整理しながら答えた。

「……誰からも、見捨てられたくないからよ。一人になるのが、あたしは一番恐ろしいの」

……そう、あたしはただ、役立たずだと言われたくないだけなのだ。従ってないと、自分が惨めで一人ぼっちみたいで怖いから。それ以外に、理由なんてない。

「何それ……。そんなの頑張っても無駄じゃない」

少女が呆れたように言う。嘲り……。というよりも、そこには哀れみの感情が込められているようだった。

「……、どういうこと……？」

「愛して欲しいと思っても、誰も貴女を愛してはくれないってこと」ぞつとした。入理乃の目が、あまりにも達観したような目だったからだ。

入理乃のような、決して小学生がしては良い目じゃない。

彼女は諦めきつたように続け、その恐ろしい目を細めた。

「……全部諦めれば？受け入れなよ。どうせ、誰にも愛されないって。自分がそういう存在だと分かれば、苦しまないよ」

「……入理乃。キミという人間は本当に……」

キユウベえが小さい声で呟いた。しかし聞き取れず、その先は聞こ

えない。

ブランコは、少し風に揺れていた。それが何だか、寂しいように思えてならなかった。

愛される資格

「どうだろう、と私は、廃れた廃屋跡地にて、目の前のものを睨み付けていた。」

それは、限界まで使用したグリーンフシード——通称、枝垂桜の魔女と呼ばれる魔女の卵——と、二枚の和紙だ。

二枚の和紙にはそれぞれ、魔女の結界から採取した物質をすり潰し、付着させてある。

私はグリーンフシードと二枚の和紙を組み合わせ、「魔女の結界」のみを展開させる道具を作ろうとしている。

魔女の結界には、そのフィールドが魔女に有利に働くことも多い。そういう時に、別の新たな魔女の結界を展開させれば、こちらの有利な場所に上書きできないかと、前々から私は考えていたのだ。

当然、実用化するためには魔女を孵化させないようにしなければならぬ。

そこで、魔女の孵化を抑制する物質を採取して、実験を繰り返しているのだが……、正直行き詰まっている。

紙に付着させる量が多ければ「結界」が展開せず、少なければ魔女が孵化してくる。

今回は上手く調整した自信があるが、さてはて、結果はどうだろうか。

私はグリーンフシードの針の両方を和紙で隙間なく覆うと、今度は矢を召喚し、それで中心部を器用に繰り抜く。そして、その矢を小指ぐらいのサイズまで小さく縮小させると、何もない中心部に矢をはめた。

ソウルジエムを指輪の状態にしたままで、穢れをグリーンフシードに吸わせる。グリーンフシードはすぐに黒い魔力を発し、桜が幾重にも咲き乱れる風景へと周りが歪んでいく。

しかし、喜びも束の間だ。一分後には結界が霧散し、元の風景に戻っていた。

「……失敗か」

辟易とし、グリーンフシードをほいっと後ろに無造作に放る。それは見事、失敗作というラベルが貼られてある箱の中へと入った。

今日はもう道具の実験はこの辺にしよう。次の作業に移らないと時間がやばい。

私は廃屋に入り、奥の部屋のドアを開ける。

その室内は自分でやったとはいえ、少し異様だ。

壁にはびっしりと、余すところなくパイプや突起物が伸びているんだから。何より、その中央に生えているクリスタルの結晶が、インテリアとして見てもおかしい。

まあ、クリスタルなのは見かけだけで、実際は硬化させた紙を加工して作ったものだけだ。

この部屋の名前はカーズ。その名の通り呪いをもたらす装置が仕込まれた部屋であり、こゆりにかけてある呪いもカーズによるものだ。

その呪いは複数の効果があり、一つ目が体の支配権を奪う。

二つ目が私の情報を許可なしでは他人に言えないようにする。

そして三つ目が、私の判断でソウルジェムに負荷を与えることができるようにする、だ。

これにより、呪いをかけた対象を自由に手駒に出来、いざという時に処分もできるといふ優れものの装置だ。ちなみに遠隔で呪いをいっても発動できるし、自動的に何かあったらこちらに知らせるようになっていいるから、ずっとこゆりを監視しなくても良い。

反面、欠点は結構あって、ソウルジェムがまだ安定していない新人にしか使えないし、メンテナンスも大変だ。

それと、カーズは対象者のソウルジェムを弄ることで、自身と見えないラインを作り、そこから魔力を送ることで呪いをかける仕組みとなっている。だからそのラインをぶち壊されれば、呪いも消えてしまう。

まあラインは頑強かつ見つかりづらいから、破壊されることはないだろう。巧妙に隠されているから、いかに探知に優れていると気づくことも出来ない。

それに、こゆりが呪いから自由になったとしても、そのソウルジェムは事前に私のソウルジェムとも魔力の道で繋げてある。その道から幻痛を送ってやれないこともない。

「……」

呪いのことを考えていたせいかな、ふいにこゆりの顔が思い浮かんだ。

それに引つ張られるように、誰からも見捨てられたくない、という彼女の言葉が頭の中で反響する。

改めて私は、下らないな、と思った。

……昔、親に振り返ってもらおうと賞を取りまくっていた時期が私にもあったが、やるだけ無駄だった。

元々私の両親は、家の都合で政略結婚した。お互い仲は覚めきつていたし、子供である私なんて彼らからすれば厄介者。だから、私のことなんてどうでも良いのだ。

そして周囲に愛を求めても、私のことを本当の意味で見ってくれる人はいなかった。向けられるのは、嫉妬や羨望と言った感情だけ。私を蹴落とそうとする奴や、利用しようとする奴しか近寄ってこない。

周りは私をいつでも虐めてくる。私は「天才」であるのに、どうしようもなく弱者で、強者には勝てない。

やがて、私は理解した。

人間は互いのメリットをまず第一にしか見ない。そして私は元々から、愛される資格がない人間だったのだ。

……私はその事に気がついた時、どれだけ救われたことか。

私はずっとずっと、何故皆が私に優しくないのか分からず、人間や世界に恐怖して震えていた。それが理解した途端、一面闇だった世界がほんのりと明るくなったのだ。

だからこゆりも、さつさと折り合いをつけたらいいのにと思う。そしたら、クラスメイトからいじめられずに済むというのに。

大体、何だつてあんなにもミスハと境遇が似ているんだろう。これは何かの偶然なんだろうか。

こゆりのことを思うと、自然とミスハのことまで色々と思いついて

しまう。

リノちゃんと呼ぶ声。一緒によく遊んだゲーム機。あの悲しそうな顔。

どれもが鮮明に蘇る。もう、脳味噌の隅っこに追いやったつてのに。

「忌々しい……」

私はそう吐き捨てると、気分を変えるためにカースのメンテナンスに取り掛かろうとする。

しかし調度、ポケットに入ったスマホから呼び鈴が鳴った。

私は無視することもできずスマホを取り出す。確認すると、画像に表示された電話番号は船花ちゃんのものだった。

「もしもし!!入理乃!!私だけど!!」

通話ボタンを押した瞬間、船花ちゃんの戯けたような大きな声が耳に飛び込んできた。

相変わらず彼女は元気だった。その明るさに、こっちまで救われる気持ちになる。お陰で、ミズハのことを忘れられそうさ。

「もしもし……、船花ちゃん」

「何だよー、入理乃。その暗い声はさあ。もうちよつとテンション上げられないの?」

返事を返すと、船花ちゃんは少し拗ねたような感じになった。私が淡々とした声だったので、あまり喜んでないと勘違いしたのかもしれない。

そこで私は、ストレートに気持ちを伝えることにした。

「私……、これでも、嬉しいと思ってるよ……。むしろかけてくれてありがとう……。私……、気分が落ち込んでたから……。船花ちゃんのおかげで元気になったよ……」

「……!!」

船花ちゃんが息を飲んだ。恥ずかしくなったのか、ああ、だの、うう、だのと言葉を辿々しく発する。

「そ、それなら早くそう言ってよねえ。もう、入理乃のくせに勘違いさせやがって……」

言葉が汚いながらも、実に嬉しそうだ。最後にはえへへ、と小さく笑っている。

その反応はなんとも可愛らしく、ちよつとそれが面白い。やはり船花ちゃんはちよろいなあ。

「……あの、何か用かな……」

「ん？用とか特にないよ。ただ暇だったから、電話かけたんだよ。まあこの船花様が電話をかけたんだ。何か面白い話の一つや二つしてよね」

何とも船花ちゃんらしい、上から目線な答えだった。

しかし、普通ならば眉をひそめてしまいそうなそれも、私には嬉しかったりするのだ。

船花ちゃんは逆に、どうでも良くない人には性格を隠す。つまりは、この態度こそが、私のことを認めてくれてる証拠なのだ。それに口調のわりに、悪い子でもない。

「……そんで、最近どう？忙し過ぎてテメエ、体調崩してないよねえ？」

何だかんだ言いながら、現にこうして船花ちゃんは心配してくれている。

私が表情を綻ばせて、ううん、と否定すると、彼女はほつとしたような溜息がした。

「と、ところでさ、早島の様子……、どうなの？」

牛木草に行っている間、船花ちゃんには早島を任せてある。そんな彼女とせつかく話せているんで、ついでに私は早島の状態を聞いた。

すると船花ちゃんは、案の定愚痴るように言った。

「どーもこーもないよ。魔女は少ないし、グリーンフィードは蓄えあるけど、倒してもぜんっせん落とさねえしさあ。ちったあ、あのクソ魔女共もこの船花様と入理乃のために役立つて欲しいわあ……」

つまりは、いつも通りということらしい。私は変わりが無いことにある意味安心する。

そしてやはり、グリーンフィード不足は深刻な問題だと痛感した。

魔女が減っている原因は、経済活動が活発になっっている寝巢扉都市

圏へと人が動いているためだ。その流れをストップできないから、魔法の減少は私達では抑えようがない。

だから、グリーンフシードは他の土地から集めるしかなく、それを解決するのがこゆりという手駒な訳だが……しかし、このままこゆりだけにグリーンフシードを集めるとしても、心許ないかもしれない。

いつそのこと、魔法の養殖でも初めてみようか。幸い早島には神社跡地がいっぱいあるから、そこで育てれば魔法も隠し通せる。

「……なあ、入理乃」

「な、何……？何か心配事……？」

唐突に、船花ちゃんが神妙そうに呼びかける。私はつい、反射的に問い返した。

「まあ、確かに心配事っちゃあ、心配事だけど」

船花ちゃんは煮え切らない発言をした。そして、きつと浮かない顔をしているだろうな、と予想させる声で言った。

「使い魔……、放置して本当に良かったのかなって思ってたさあ……」

「それは……」

私は何も言えなかった。

私達はミズハと争う前には、ちゃんと使い魔も狩っていた。

だが、それが魔法減少の原因の一端となり、さらには縄張りが半分になってからは、流石に使い魔狩りを止めざる得なかった。

船花ちゃんは、その事をずっと気にして落ち込んでいた。

私は本音で言えば、使い魔を殺さないのは正しい判断に思える。しかしそんな風に考えている私に、下手な慰めが出来るだろうか。

「……仕方がないって分かっちゃいる。分かっちゃいるんだけど……」

電話から聞こえてくる声は苦しそうだった。

グリーンフシードが得られなければ、魔力は回復できない。そして魔法を失えば、魔法を殺すこともできない。

町を守るためには、町の一部を犠牲するしかないのだ。……これは船花ちゃんにとって大きなショックだっただろう。だって彼女は、早島のすべてを守りたいと考えていたから。

「……私は、船花サチは、自由だ。何をしても許される。だから、何も私は悪くないよね？私が使い魔を放置しているのは、許されるよね？」

やがて、船花ちゃんは震える声で縋ってきた。私はようやく、そこで船花ちゃんがこちらに電話をかけてきた真の理由を理解した。

私は自分を恥じる。何で今まで気づかなかったんだろう。彼女はああ見えても、繊細だというのに。

「うん、許されるよ……。大体、皆やってる……。私達だけが、責められることはない……」

私は船花ちゃんが望む言葉を言ってあげる。それが相方としてしてやれる、唯一のことだった。

「……うん。ありがとう」

彼女は落ち着いた声でお礼を言う。

私はそれでも、心配だった。さっきので、少しは船花ちゃんの気が楽になれば良いのだが……。

「……何かごめんな。入理乃も大変だったのに」

「……良いよ。そんなに気にしなくて……」

「そうは言っても、テメエミズハのことで落ち込んでるじゃないか。入理乃にとってミズハは大切な——」

「ミズハなんて、大切じゃない!!」

瞬間、私は叫んでいた。

先ほどまでずっと、ミズハのことを忘れようとしていたのに、それを強制的に思い出されたこと。何より、船花ちゃんの口からミズハの名前が出たのが許せなかったのだ。

私はスマホを割れんばかりに力強く握りしめ、捲し立てた。

「ミズハは私の思いを踏みにじったんだ……。ずっとずっと、側にいて慰めてやったのに、周りとは違うって思ってたのに。それどころか、船花ちゃんにまで手を出して、縄張りを奪いやがった……。あんな奴、大嫌い……!!」

「い、入理乃……。お前大丈夫か？」

船花ちゃんが、先ほどは変わって私を案ずるように聞いてきた。

私ははつとすると、苛つきのあまり、制御できなくなったのだろう目尻の涙を拭う。そして、それを悟らせないように勤めて平坦な声を出した。

「大丈夫……」

「そうは思えないけど……。もしかして何かあったのか？」

「そんなのないよ。……心配しないで」

「……じゃ、じゃあ、牛木草は任せるからな。早島はしっかり私が守るから、ちゃんとやれよ」

船花ちゃんの返事に、私は誇らしくなった。

彼女は私を愛していない。けれど私を頼ってくれている。私にメリットを見出しているから、私の存在を認めて、求めてくれてるんだ。

私は満面の笑みを浮かべ、拳を握りしめた。

「期待しててね……。私ちゃんとやるから……!!」



毎日毎日、放課後には入理乃との特訓が行われた。そうしている内に一週間が経った訳だが、その中で阿岡入理乃について色々分かったことがいろいろある。

彼女、あらゆることに無頓着というか、興味がない。

例えば今日一緒にお昼時に喫茶店に入った時は、周りで食事の写真を撮っている人を見て、何であんなに拘るの、と本気で呆れていた。仕舞いには、テレビ番組の超大御所芸能人の名前にさえ首を傾げる有様だ。

正直、こんな性格だとはまったく予想していなかった。今でも少々面食らっている。

……ただ、納得できないこともなくはない。入理乃はあらゆる分野で天才だ。結果としてどんなものにも興味を持たなくなったのだから。

「だから、これは仕方がない。うん、仕方がない……、」

「訳ないわよ……」

あたしは小さく呟き、密かに嘆いた。

ちらりと訓練場である空き地にて、せっせと紙をばら撒いて結界を張っている入理乃を見る。

今日は土曜ということもあって、彼女は制服ではなく私服だった。だが、何というか……、一言で言えばあんまりな格好だった。

安物の水色の長袖に、下も無地の水色のズボン。靴下は何ともオヤジくさい茶色で、靴に至っては使い古された小汚いスニーカーである。しかも色が水色だ。

男子中学生か、こいつは。いや、男子中学生より酷いわ。

水色、水色、水色で全部統一しやがって。統一するなら色の濃淡を考えろ、濃淡を!!

あたしも別に、おしやれに気を使うタイプではない。だが、入理乃を見ているだけですっごいヤキモキする……。本当に超どうにかしたい……。あの格好を。

その内、入理乃が駆けて戻ってきた。どうやら結界を貼り終わったらしい。

いや、それにしてもやつぱり、近くで見るとパジャマっぽい服だ。

「これでどんなに大きな音を出しても大丈夫。さあ、続きをやるよ」

「う、うん」

びしっと、入理乃は前方を指差す。その先には五メートル間隔で、全長百センチの白い杭が刺さっていた。

彼女はポケットからスマホを取り出す。そしてタイマーをセットして、私が手を翳すのを見計らうと、叫ぶと同時に画面をタップした。「スタート!」

あたしはその合図と共に魔力を放った。

刹那、バキバキ、と五メートル先の杭の隣に鉄の木が生える。間髪

入れずに魔力を放つと、さらに十メートル、十五メートル、二十メートルの杭の隣に鉄の木が生える。

それは一定の時間で次々と木が生えているように見えるだろう。だが、実際は距離が遠くなる度に生えるのが遅くなっている。

魔力を直接地面に送って生えさせているため、その分タイムラグが大きくなっていくのだ。しかしこの方法でしか鉄の木は生成できない。だからこそ、そのタイムラグを短めるしかないのだ。

「ストップ！」

五十メートル先に鉄の木が生え終わったその時、タイマーが止められた。

鉄の木を消しながら、私は尋ねる。

「結果は？」

「二分」

あたしはガクツと落ち込んだ。前回より二十秒も増えている。

「お前さあ、タイム全然縮まんないじゃん。一週間やってそれ？それじゃあ魔女逃げちゃうよ？」

遠慮のない言葉が浴びせられる。それは落ち込んでいる私には痛い一言だ。ぐさつとそれが心に突き刺さった気がした。

「お前のあの液体金属、遠距離の武器に変形できないんだから、こうやって金属操作を磨くしか遠くの敵攻撃できないじゃん。それなのに、こんなに時間かかるなんてあり得ないでしょ！もうちよつとちやんとやってよ!!」

またぐさつと心に言葉の槍が刺さった。もう止めて下さいという感じだ。ちよつと容赦がなさすぎて涙が出そうなんですけど。

「大体、魔力の伝達方法が悪いんだよ。お前さあ、いちいち木を一本生やす度に魔力を放ってるでしょ？何でそんなのするの？」

「え？その方法駄目なの？」

「駄目って考えれば分かるでしょ。魔力の量を多めにして放って、それと平行して木を生やす方が効率良いし速いじゃん」

やってみ、とスマホを構えながら入理乃が顎をくいと前にやる。あたしはもう一度手を翳し、そして普段より多めの魔力を放った。

五メートル地点に鉄の木を生やす。しかし魔力はまだ残っている。そのまま直進させ、十メートル、二十メートルと続けて鉄の木を生み出していく。その生える速度は極めて遅い。そしてのろのろと木は生え続けあと二つで四十メートルというところで、突然止まった。

魔力がなくなってしまうのだ。

「……さっきよりめっちゃ遅くなってんだけど。九分だよ、九分。私の足の速さより負けてんだけど？」

「うぐ……」

あたしは渋い顔で、唇をかみしめた。

もう、そこまで言わなくて良いじゃない。それがここまでやれただけ、すごいことじゃん。ちよつとは褒めてよ。労うように。

「もう一回。目標は二分以下。それまで返さないからね!!」

入理乃は休日なのを良いことに、徹底的に至極つもりらしい。

僅かに悔しげな顔すると、その反応良いわあつてなるのも微妙にウザい。

くそ、こうなつたら徹底的に頑張つてやる。そんでもつてこのクソガキを見返してやる。

あたしは鉄の木を全て消し、手を翳して構えをとった。



太陽が傾き始めた頃、あたしは肩で息をしてへたり込んでいた。

あの後、散々やっては駄目だし、やっては叱られるの繰り返しだ。もうすっかり疲労困憊である。

それでもタイムは確実に縮んでいて、少しは進歩したと思う。

しかし入理乃は、不満げな……、いや、苛々したような顔をして、こっぴどく見ているのどうして出来ないのかな、とか、想定と違うから分

かんない、とかぶつぶつ呟いている。

そして仕舞いには頭がパンクしたのか、頭を抱え始めた。

「どうして上手くなんないのよ。こんくらい出来るでしょ!？」

「い、いや……」

無茶言わないでよ。魔力を放ちながらその線上に木を生やすのだ。作業が二倍も三倍も増えて、それを同時にこなさなきゃいけないんだ。確かに効率は良いけれど、こんなの一日二日で上手くなるもんじゃない。何でそんなものも分かんないんだ、入理乃は。

「……別に魔力操作苦手じゃないんだから、普通に出来るよね? 何で早く上達しないの?」

入理乃のその発言を聞いて、ああ、成る程……と一人納得する。

つまりは下手に天才だから、何でも出来るのが当たり前なのか。

だから、上手く出来ない常人の気持ちがあつたく理解できずに戸惑っているのだ。

そういや、昨日も一昨日も、一週間前も、あたしが失敗すると不思議そうな顔してたっけ。あれはそういう意味だったのね。

「あーもう、こんなに原因が分かんないのは初めて!!」

そして天才故にか、失敗にも耐性がないらしい。酷く戸惑った様子で、地団駄を踏んでいた。

「……あの、あたしが上手く出来ないのは、コツが分かんないからなのよ。だから、魔力が操作できないというか……」

良い加減その姿も可哀想になってきたので、あたしは出来ない理由を入理乃に教えてあげた。しかし全然あたしの言いたいことが伝わっていないのか、彼女はきよとんし、訳が分らなさそうに訝しがった。

「コツ? ただ魔力を操るだけだよ? そこにコツがあるの?」

今度はこちらが、頭を抱えたくなる番だった。天才が必ずしも教えるのが上手くない、と何処かで聞いたことがあるが、まさしく入理乃がそれに当てはまるらしかった。

しばらくして、入理乃は頭を抱えるのを止めて落ち着いた。そして腕を組みながらあたしの方へと視線を向ける。

「……とりあえず、お前が言ったことを明日のうちに考えてくるわ。このままじゃ、特訓上手くいかないし。お前のためにも、出来ることはやらないと」

「……。何でそこまで私のためにしてくれるの？」

あたしはずっと思っていたことを口にした。

正直、特訓などをここまでしてくれてありがたいとは思っている。だが、それにしたってこの一週間、あまりにも入理乃は親身になり過ぎだった。

仕事をクラスメイトから押し付けられて遅れるのを許したり、差し入れを持ってきたり。

手駒手駒言いながら、対応が酷かったのも最初だけで、妙なところは優しいし。

そういうのが、何だが怖いのだ。また変なところで嫌なことされたらたまったもんじゃない。

「何でって……、私にメリットがあるからに決まってるじゃん」

「メリット？」

「お前を強くすればいざって時に私の手伝いさせることができるし、何よりもグリーンフシードをその分だけ稼げるようになるでしょ？お前の特訓をする理由はほそれだけじゃないよ。特訓する中で、お前の能力の詳細を私は知ることができるんだよ。他にも特訓してやっつて事でお前に恩を着せることも可能だし」

だからって、それが優しくする理由にはならない。まったく話が繋がってない。

私はどう言ったら良いのか分からず、瞳で入理乃へさらなる答えを追究する。それを入理乃は、若干面倒臭そうにしていた。

「何だよ、手駒のくせに生意気だなあ……。さっきの答えで何の問題があるの？……もしかして、お前にもメリットがあることをやっているのが不思議なの？」

そうだよ、とあたしが心の中で悪態をつきながら領けば、入理乃はようやく、合点がいったような顔をした。

「あのね、人間関係って互いにメリットがないと成立しないでしょ？

メリットがないと、人は裏切るからね。だから、特訓っていうメリットをお前にあげたんだよ。ちゃんと襲った理由を説明したのも、特訓の差し入れとかもそう。こっちの利点をお前に教えてあげていたんだよ」

絶句するようなことを、入理乃はしれつと言ってみせた。その目は、あの背筋がぞつとするような、暗闇のような目だった。

……この子は歪んでるな、とあたしは感じた。

その目を見ていれば分かる。彼女は本気で、人間は損得勘亭だけで動く信じ切っているんだ。

「じゃあ私、帰るから」

あたしがどう思っているのかも気づかず、少女はそう言って踵を返して帰っていく。

あたしは複雑な気分で、それを見送っていた。

粘液の魔女を倒した後、阿岡入理乃は言った。

どうせ、誰にも愛されないと。あれが彼女の奥底にある本心なのだろうか。

……一体入理乃の過去に何があったというんだ。こんな悲しくて寂しい考え……、しちやいけないわよ……。

「……おい」

その時だった。ふいに、ガサガサ、と物音が聞こえたのは。

目の前の空間が剥がれ落ちるように、小柄なショートカットの女の子が現れる。

年は入理乃と同じくらいだろう。大人しそうな見た目だったが、しかしその印象を剣呑そうな目が掻き消していて、物凄く柄が悪い。すぐ側には、体を包めるくらい大きな和紙が落ちていた。

「貴女、誰……？」

驚きながら聞くと、少女はこちらをきつと睨みながら答える。

「私は船花サチ様だよ。入理乃の相方だ」

追憶と純愛

船花サチは、ちよつと面をかしな、と空き地から私を連れ出した。そうして付いたのは、昼間に行ったカフェだった。

カウンターの席に着くと彼女はまずメニュー表を手に取り、慣れぬ手付きでパラパラと捲り始めると、ドリンクメニューのページを開いた。

「特別にこの船花様が、何か奢つてやるよ。さあ、選びな、クソボケ」
口が悪いのに、そこまで声と顔は悪くない。すつごいギャップ差を感じる。

入理乃も変人なら、その二倍は変わっている印象だ。

「え、じゃ、じゃあ……、紅茶で」

「テメエ、紅茶好きなのか？私と入理乃もよく飲んでんだよ。私はアッサムで、入理乃はウバが好きなんだ」

「へえ……」

アッサムとかウバは知らないが、紅茶好きなんて、小学生の子にしてはなかなか好みが大人びている。何よりも、あの入理乃が趣味を持っていることが意外だ。

サチは店員を呼ぶと、紅茶を二つ頼む。そしてメニュー表を邪魔だとばかりに横にのけた。そして、頬杖をついて、

「……なんか、お前入理乃みてえな奴だな」

あたしはバレないように僅かに瞳を半目にする。

あたしのどこがあなの、生意気で、偉そーで、強気なクソガキに似ているというのだろう。そんなの死んでもあり得ないに決まってる。

「あれだよ、無口そうなことかだよ。まあ、入理乃の場合、無口というより、おどおどしてっけど」

「……おどおど？」

確かに入理乃は最初会った時、分かりやすくあたしに弱気だった。

あれはあたしを油断させるためのフェイクだと思っていたが、その言い方だと、あつちが素の性格で、あたしに対する態度の方こそおかしいように聞こえる。

……何だかよく分からなくなってきたわね。二つの顔のうち、どっちが本当の入理乃なのかしら。

「ていうか、テメエ誰だよ。入理乃の何なの？」

「……!？」

サチが入理乃の相方なのに、あたしを知らないことに驚く。思わず前のめり気味になって問いかける。

「船花さん、入理乃のこと……、阿岡さんのこと何も知らないの？」

「……あいつ、結構ああ見えて、勝手に動くことが多いんだよ。私頭が悪いから、入理乃が何やってんのか分かんないこともよくあるし。だからテメエのことも全然知らないし、あいつのことも把握できてないよ」

サチは分かりやすく落ち込んだ表情になる。

あたしは、一週間前にカラオケボックスで感じた疑問を思い出していた。それは、何故その場にサチがいなかったか、ということだ。

その答えが、今はつきりと分かった。

あたしに襲い掛かって呪いをかけたのも、特訓をつけてるのも、全部全部、入理乃が独断でやっていることだったのだ。

サチと話し合って決めたわけじゃない。だからカラオケボックスにサチがいなかったのだ。

あたしは入理乃に飽きた気持ちになった。

牛木草は入理乃とサチの縄張りなのだから、二人で相談して管理していくのが普通である。それをせずに好き勝手にやっているのは、ちよいと野方図だ。

そりゃあ、キュウベえも入理乃に、何をやらかすか分からない、と言うだろうさ。

「阿岡さんに注意したりとかはしてるんじゃないの？」

あたしは、至極真つ当で、当然の疑問をぶつける。しかし、サチはそれが尺に触ったのか、ふんと鼻息を鳴らした。

「あいつは私のために色々頑張ってくれてるんだもん。何も言えないよ。それって、私があいつの信頼を否定することになるし」

あたしは呆れと感心をごちゃ混ぜにした顔になった。

自分勝手な奴を信じて、得なんかあるわけがない。それをよくこの子は、はつきりと言いつつ切れたもんだ。

「貴女、凄いわね。どうして、入理乃にそこまで……」

「……あいつは私と同じ苦しみを抱えてるんだよ。だから、私が入理乃の味方になってあげないといけないんだ」

「……？」

「……どういふことか、と聞こうとしたその時、店員がカップを二つ運んできた。」

一旦会話を中断し、それぞれカップを受け取る。

船花サチはその中にある紅茶を啜ると、改めて話し始めた。

「……入理乃ね、ちっちゃい頃から親に無視されてきたんだ。それどころか、赤ちゃんの時から親に育ててもらってない。あいつの両親は、全部あいつの世話を使用人に任せっぱなしにして、あいつをずっと放置してる。親戚総出で入理乃がいじめられた時でも、何もしなかったくらい無関心なんだ」

「……、そんな……」

「……じゃあ入理乃は、親の愛をずっと生まれてきてから一度も貰えてこなかったの？」

「それは、どれだけ孤独だったんだろう。想像しただけで、あたしは怒りで体が震えた。」

「……家族は心の支えであり、パーソナリティの拠り所だ。どんなに周りが酷くたって、家族が暖かければ何とかやっていけるくらい大切ものなんだ。あたしが家族に——さゆりにどれだけ救われたことか。」

「……入理乃の両親も、我が子なら無条件に愛して、救わなきゃ駄目でしょ。ここまで酷いことをするなんて、親失格どころか、人間失格だ。」

「……私も昔は実の両親に良い扱いを受けてなかったんだ。全部、何もかもを管理されてさ……。そういうの何て言うんだっけ。か、か、か……」

「過干渉？」

「そう、それ!!カカンショー!!」

あたしが教えてあげると、サチは悩ましい顔から一転、すぐにくっこりと笑った。彼女は案外、単純らしい。

「そのカカンショー、超酷かったの。やれ言葉遣いは丁寧にしなさいだの、やれ次はどここの旅行に行こうかだの……。小さい頃から散々私を振り回して、連れ回して、自由を奪って。『香干サチ』は、伯父さんがお義父さんになってくれるまで、ずっとお人形さんだったんだ」
その後も、延々と自分の過去についてサチは述べる。

聞いているだけで、気分が悪くなるような内容ばかりだ。サチの親は、完全に彼女の人格を無視し、否定し、束縛していた。

……。どうやら、サチもサチで、入理乃のネグレクトと同じくらいの虐待を受けていたらしい。

つまり、入理乃と似た境遇だったのだ。

故にサチは、入理乃に共感して、自分と同じ苦しみを抱えていると称したのだろう。その悲しみも、その辛さも、よく分かっているから。何だか居た堪れなくなつて、あたしは居心地が悪くなった。……。その健気さが馬鹿みたいに一途で、直視できない。

「私はあいつのやることを全部信じてあげるの。誰にも肯定されてこなかったあいつを、私だけは裏切っちゃいけない」

「それなら、……。尚更疑問に思うんだけど、船花さんどうして近くで覗き見なんてことをしてたの？」

サチが現れた時に落ちたあの紙は、姿を隠すための魔法の紙と考えれば良いだろう。つまりサチは、あたし達の目に映らないように側にいて、ずっと特訓を見てきたということだ。

……。相方の偵察だったのだろうが、しかしそれこそ、入理乃を疑つてる行為だ。言っていることと少しずれてる。

「な、何おかしなこと言つてんだよ。私覗き見なんてしてないし!!遠くの木の手辺に隠れてただけだもん!!」

サチはそこで失言に気がつき、赤面する。そして、あたしを思いつきり睨みつけた。

「分かった、認める!!そうだよ!!覗き見してたよ!!」

開き直ったのか、キレ気味になった。

あたしは、眉をひそめて不機嫌さを面に出した。自分でうつかり喋ったくせに、そういうのを止めて欲しかったのだ。

「……何で覗き見なんかやってたの？」

再び、肝心な部分を聞く。サチはそっぽ向いて紅茶を飲むと、

「今日、入理乃に電話したら、ミズハのことで突然怒り出したりしてたんだよ。その前も様子がおかしかったし、だからこの船花様が、わざわざ入理乃の様子を見にやってきたんだよ？何も悪いことしてないじゃない……………」

取り繕うように言い訳を述べていたサチは、その最中にまた何かに気付いたのか、突然その顔を真っ青にさせた。

「入理乃から早島の留守を頼まれてたのに、放置してきちやった……………」

……………アホだ。アホがここにいます。

「バレたらまずい……………!!バレたら終わりだあ」

慌てて始めるサチ。その目は泣きそになっていて、少し同情してしまふ。

「な、何も言うなよ。何も!!」

「わ、分かったから、何も言わないわよ。あと、代わりにあたしのことも黙っておいてくれると助かるんだけど……………」

「うん。私のことは、お前とだけの秘密だ。言わない、絶対言わない!」

あたしは紅茶を口に含み、渴いた喉を潤す。それと共に、本当に大丈夫なんでしょうね、という言葉も胸の内に仕舞い込んだ。

……………実は一瞬、サチにこちらの事情を話して助けてもらおうかと思っただけけど、こんなには抜けているなら期待できそうにない。

もっと酷い目に合うのは御免だ。あとあの入理乃のことだから、事情を話したら呪いが発動する仕掛けでもあるかもしれないし。

「それで、テメエ何なんだよ。入理乃の何だ？」

やっと話が本題に戻る。しかし、色々ぐだぐだしたのもあって、緊張感は明らかに薄まっていた。サチの目元も、微妙に剣呑さが薄まっ

ていて、こっちに気を許している。

しかし、どう答えたものかしら。入理乃の防音結界で会話は聞こえ

ていないだろうから、何とでも言えるんだけど、下手な発言は出来ないわね。

「そうやって悩んでいると、サチがとんでもないことを言い出した。」

「……もしかして、友達とか？」

「……」

それを聞いて、あたしは内心で変な顔をした。

「どうしたらその結論に行き着くのだろう。あたし達の様子から、友達という関係性を連想するのは無理があると思うんだけど。」

「……いや、じやなきや、特訓するような間柄になれないと思っただけだよ」

「あー……、そういう考えをしちゃったのか。でも残念ながら外れなのよ。めっちゃくちや悲しいことにね。」

「ち、違うわよ。あたしと阿岡さんはそんなではない。」
「たまたま偶然にも魔女狩りで知り合って、一緒にいるようになっただけよ」

「そうなのか……」

「こつちの嘘を、サチはすぐに鵜呑みにしたようだった。彼女は単純なだけでなく、年相応に純粹らしい。」

「……ちよつと危なかつしい少女だ。相方の入理乃も大変だろう。まあ、だからこそ、黙って独断行動を行なっているのかもしれないが。」

「ねえ、……お前に頼みがある」

急にサチが神妙そうな、改まった態度になった。

「あたしは密かに警戒する。クラスでのからかいもそうだが、相手がこういう顔の時は用心しなければならない。大抵、ろくなことは言わないからだ。」

「あいつの友達になって。そして、支えになってあげてくれない？」

「……」

「僅かにカップにやっていた手の力が軽くなる。身構えていた分、ちよつと拍子抜けしてしまったのだ。」

「だが、サチにはこちらを面白がっている雰囲気があるでない。どうやら本心から、誠心誠意、頼んでいるらしかった。」

「……私達、ミズハって魔法少女と交流があったんだ。まあ、私は

あまり仲良くなかったし、数回しかあったことないけど、入理乃とは相当仲良かったらしくてさ、週に一、二回は、一緒にゲームしたりして遊んでたんだ。けど、色々あってミズハと縄張り争いすることになった。入理乃はそれ以来すっかり変になった。何かが壊れたような……、そんな気がしてならないんだ。」

ミズハとの関係は、思ったよりも複雑なものらしい。それにしても、皮肉な話だ。サチはともかく、入理乃のシヨツクは大きかったに違いない。

……愛を諦めているのに友達になれたってのは、それくらいミズハを信用してたということだ。もしかしたら、本当の愛を得られると期待さえしていたかも。

そんな相手に裏切られたら、誰だって絶望する。

「だから、あいつの友達になって、励ましてあげてくれない？あいつには、ミズハみたいな友達が必要なんだ」

「……、貴女の方が、阿岡さんと仲が良いじゃない。貴女が励ますのは駄目なの……？」

あたしはサチに、訝しがりながら問う。

ここまで相方を思ってるのに、自分の手で何故支えない。一体何を考えてるのかさっぱり理解できない。

「私じゃ、無理よ。正直あそこまで強気な入理乃は初めて見た。私じゃあ、入理乃をおどおどさせて、引かせてしまうだけなんだ。けどあいつはお前の前では自然体で、心を開いてる。……あいつに言葉を届けられるのは、お前しかいない」

「……貴女、それで本当に良いの？あたしと入理乃が仲良くしてたら嫌だと思うのだけど。それって一人ぼっちになるみたいだし。寂しい思いはしたくないでしょ？」

「そりゃあ寂しいけど……、でもこの船花様にとって、そんなことより入理乃の方が大事だよ。私は、私自身よりも入理乃を優先する」

目の前の少女のその覚悟を聞きながら、あたしは自然と俯いていた。

揺らめく紅茶の水面には自分の顔が映りこんでいる。そこに浮か

んでいたのは——サチへの羨望だった。

……悔しいが、今素直にあたしは、サチがカツコいいと感じてしまったていたのだ。

ここまで意思を貫き通せるこの子の強さが羨ましい。

あたしも、こうなりたい。あたしもこの子みたいに胸を張って、堂々としたい……。

その時、すうつと何かが天啓のように頭の中で降りてきた。

瞬間、雷にでも打たれたような衝撃が広がる。あたしは、震える手を額にやった。

……求めてやまなかったものが、今手に入るかもしれない。あたしは、ようやく——

「……キュウベえの願いつてのは、本当に叶うもんなのね」

「そりゃあ、そうだろ……」

何言つてんだこいつ、という目つきが向けられる。あたしはそれに苦笑した。

実は今この瞬間まで、それを疑っていたんだとは言えない。

……にしても、よくよく考えると、入理乃の手駒になるのもサチに会うための布石だったのね。

くそ、急に腹が立ってきたわ。こんな理不尽な叶い方せずとも、サチに会える方法はいくらでもあったじゃない。

やっぱ、あの白い毛むくじやは詐欺師だ。あとで文句の一つでも二つでも行ってやろうかしら。

「船花サチ。……アンタは『正解』を持っているかもしれない」

あたしは顔を上げ、尋ねる。

……あたしの直感が言っている。この子は間違いなく、あたしにとって重要な何かがある。

それを意地でも良いから掴み取ってやる。あたしは、この悩みを早く終わらせたいんだ。

「だから、あたしがアンタの頼みの返事をする前に、あたしからも質問させて欲しい。あたしは、あたしを押し殺すべき？それとも、あたしは何かあっても、あたしを貫き通すべきなの？」

「えーと、どういふこと……?」

サチはその質問の意図が分からないようだった。あたしは言いたくはなかったが、もうこの際だからぶっちゃけることにした。

「あたしは、皆に見捨てられて一人になりたくなかった。それで、何でも人の言うことを聞いてきたの。でも最近それが本当に正しいか分からなくなってきたのよ。……サチはどっちが正しいと思う? あたしは、あたしを押し殺すべき? あたしは何があっても、あたしを貫き通すべきなの?」

少女は呆けたような表情をする。しばらくしてから、カップを口につけて紅茶を飲み、そして一言。

「……、お前馬鹿だろ」

「は?」

「この船花様がそんなの分かるわけねえよ。なんせ、私もそれに悩んでんだから!! むしろ教えろ!! 私はどうしたら良いんだよ!!」

「は、はあ!」

ずっこけそうになる。この展開、予想外すぎる。

「私だって、私だってねえ……、入理乃に何してんの? 何やってんの? 私のことどう思ってるの? 本当に信じてくれてるって聞きたいよ! でも、さつき言った通り、信頼を裏切ることになるし!! なんか怖いし!!」

結構……、不満たまりまくってるのか。

でも、それもそうよね……。あんな相手じゃあ、不安の一つや二つ感じるわ。だから今回、覗き見に踏み切ったんだろうし。

「入理乃から見捨てられるのは嫌なんだよ! 私を見てくれるの、入理乃ぐらいだもん。もお、どうしたら良いのか分かんねえよお」

サチはいつの間にか泣いていて、テーブルに突っ伏していた。周囲の注目があたし達に集まり始める。サチには同情的な目、そしてあたしには冷ややかな目は向けられた。

……傍目から見れば、中学生が小学生を泣かしているように見えるんだろう。つまり、あたしの方が悪く見えてるのだ。

畜生、世の中つて理不尽で最低。外見だけで人を判断するんじゃあ

ない。特にあたし、今回に限っては何もしてないわよ。

「な、泣き止んでよ、ほら」

「……ぐす。ありがとう」

持っていたハンカチを、半ば強引に手渡すと、サチは涙でぐしゃぐしゃな顔をゴシゴシと拭いた。

「……そういうわけだから、私には答えられないから。ごめん」

あたしは差し出されたハンカチを受け取る。ああ、……お気に入りやつなのに、汚れてしまった。仕方がないとはいえ、もうちよつと丁寧に扱えよ。人のものなんだから。

「いや、こつちこそ、ごめんなさいね」

……何かあたし、早とちりしてたのかも。キュウベえも、長い時間をかけて叶う願いかもって言ってたし。

あーあ、勇気を出して損をしたかもしれない。何の収穫にもなりはしなかったし、あと罪悪感あるし。

まあ、……少しは気が楽になった。何もあたしだけが、悩んでるわけじゃないって知れたから。

「……でも、はつきりと言えることはあると思うよ?」

「……え?」

「皆に見捨てられたくないってのは、間違いだろ。だって、そんなの無理だもん」

サチは泣いたことで乱れた髪を、手で触りながら言った。

それは、あたしも理屈ではわかっていることだった。見捨てられる時は、大した理由もなく、容赦なく見捨てられる。あたしも小学校の頃に一度は体験している。

「皆とじゃなく、一部の人とだけ仲良くしてれば? 大人数にニコニコするとか面倒くさいだけだし」

あたしは目を見開いた。そんな発想、今までなかったからだ。

胸元で揺れる「お守り」を握りしめる。

……あたしは何で、こんなことも分かりはしなかったんだろう。

一人じゃないってのは、皆から認められることだと思ってた。けど違ってたんだ。

心の底から、自分よりも相手を選ぶ人がいる。ただ一心に、大事に思ってくれる人がいる。

……それだけで、一人じゃなくなるんだ。それで、充分だったんだ。家族みたいな友達がいれば、きつとあたしも――

「なんなら、この船花サチ様が友達になってあげようか。お前友達いなさそうにないし」

あたしは信じられない思いで固まった。

こんなこと言われたの、いつぶりなんだろう。……こんな物好きなお奴いたんだ。

「け、けど、あたしは誰からも受け入れられない性格で……」

「ええ、そりゃあないでしょ。私、お前のこと好きだし」

「な、何でそんなこと言えるのよ……」

一日中、あたしを見てきたんだ。あたしの性格くらい、分かる筈だ。それなのに、どうして……。

「だって、抜けてて面白いもん」

「……抜けてる？」

んな、阿保な……。このあたしの何処が、そんな感じなんだよ。あたし他人よりもしっかりしてるんですけど。

「自覚ないの？お前、特訓中の時に間違って、液体金属で作った槍のインジキで足の小指をぶつけて悶絶してたでしょ」

「ちよ……」

こいつ……、ドジ踏んだところちゃっかり見てやがる。ずる賢い奴め……、そういうところよくないのよ、本当。

「本当愉快的な奴だよ。もう思い出しただけで後五年は笑い転げられるわ。ぷ、ふふふふふ」

「……このクソガキ」

必死に笑うのを我慢しているサチを見て、あたしは顔に青筋を立てた。

超やめて欲しい。周りの視線は冷たくなかったけど、代わりに生暖かい目になってるから。しかもニヤニヤと面白がるように……!!

「……はあ。もう良い。アンタと友達なんて。笑うような子とはなり

たくない」

なんか、気が抜けた。まったく、馬鹿馬鹿しい。これってあたしを受け入れてるんじゃないかって、あたしをただたんに馬鹿にしてるだけじゃない。

「ええ〜……。そういうこと言っちゃうの？よく空気読めないって言われないの？」

「失礼ね。そんなことないわよ」

昔ならともかく、今は場の雰囲気ぐらい読めるよ。むしろ得意と言っても良い。何せ、伊達に小学校の頃から人の顔色は伺っていないからね。場数は踏んでいる……!!

「ねえ、そろそろ、返事をきかせてくれない？」

サチは窓の方を見た。外はすっかり暗くなっている。店内もそれに合わせて、人が多くなってきた。

あたしはすっかり冷めた紅茶を全部飲む。……うん、好きでも嫌いでもない味だ。

「……何とか入理乃を元気にするのは、協力してあげる……。でも申し訳ないけど、入理乃の友達にはならない。あたしはあたしなんだ。ミズハの代わりにはなりたくない」

あたしは、サチの顔を見据えてはつきりと断った。

以前ならそれも怖くて出来なかっただろう。でも、その恐怖はもうあたしの中にはなかった。

……あたしはサチのお陰で、大事なことに気づいたんだ。

「……ありがとう。それだけでも、十分助かる」

サチは笑顔を浮かべる。あたしは目を細め、テーブルに載せていた手で握り拳を作った。

たとえこの身が終わろうとも

家に帰ってきたあたしは、両親も用事で出かけているので、リビングで一人、ソファア一人だらしく寝そべりながら、入理乃をどうやって元氣付けるのか考えていた。

意味もなくつけたテレビでは、さつきからニュースが流れている。内容は、寝巢扉市の地域開発が順調に進んでいる、というものだ。このまま二年後には、新たなテーマパークやビル街なんかが出来らしい。

その完成予想図が画面に映し出され、ニュースキャスターが淡白な顔で解説する。

……この人、絶対心の中で興味ねえって思ってたそう。お仕事ご苦労様です。世の中って世知辛いものね。

ていうか、寝巢扉だけじゃなく、最近牛木草でも地域開発ばっかりやってるけど、何になるんだろう。無駄な工事費とかかかるんじゃないの？そういうのより、廃屋とかどうにかしろ。

家の近くに一つあるんだけど、あれ結構怖いんだよ。取り壊して欲しいなあ……。

あーあ、ニュースつままない。あたしはリモコンで、チャンネルを一から順に変えていく。

子供番組、再放送のバラエティ番組、ニュース、ニュース、ニュース、ニュース――

「……、ニュースしかない」

時間帯のせいかな。……本当に時間帯のせいよね？普通もつと色々面白い番組あるだろうに。

……たまーにあるのよねえ、こんな嫌がらせみたいなのが。くそ、この気分を盛り上げてくれるものはないのか。

友情ドラマとか、友情ドラマとか、友情ドラマとか。

「楽しそうだね、お姉ちゃん」

その時、後ろからさゆりがやってきた。

自分の部屋で宿題をしてたはずなんだけど、もう終わったのだろう

か。

「……あたし、そういう風に見えるの?」

あたしはテレビを消すと、ごろりとさゆりの方へ寝返りを打った。

「顔はそうじゃないけど、なんとなく雰囲気は浮ついてるから」

そうかな……。あたし、真剣に悩んでる最中なんだけど……。

「それより、ちよつと良かった。ちよつと相談に乗ってよ」

「相談?」

「最近、知り合いができてね。その子、仲が良かった人に裏切られて落ち込んでるんだけど、どうすれば元気になる?」

あたしはそれとなく、入理乃のことについて意見を聞いた。

ずつと考えていたのだが、まったく良い案が思い浮かばないのだ。

ここは一つ、友達が多いさゆりの意見を聞いてヒントにするしかない。

「珍しいね、お姉ちゃんがそんなことするなんて」

さゆりは意外そうに聞く。

「……そうね」

普段だったら、こんなに他人に介入することはなかったと思う。あたしは、そこまでお人好しじゃない。

でもそれ以上に、入理乃の考え方があまりに悲しくて、サチが報われなさ過ぎて、見ていられなかった。

だからこの手でそれを変えたい。そうすることで、あたしも変われる。

「お姉ちゃん……、大切な友達ができたんだね」

感慨深そうに頷くさゆり。

……なんか昨日のサチとは違う意味で、入理乃が友達だと勘違いされてる。

まあ、めんどくさいから訂正しないけど。

「あのさ、お姉ちゃんはその子のことをどこまで知っているの?」

「……あまり詳しくない」

趣味趣向。どんなことが苦手で、どんなことが好きか。周りに対してどう接して、どう思ってるのか。

現時点出入理乃についてあたしが知っていることは、これらのうちの表層部分。いや、それより浅いかもしれない。

とにかく付き合いが短いので、未だに何を考えているのか分からない時がある。

「だったら、まずは知ることから始めた方が良いんじゃない？知らないよ、励ますときにどんな言葉選びをしたら良いか分からないでしょ。何か好きなものとか聞いて、交流を深めたら？」

「それは無理」

その交流を深めるっていう意見には賛成だけど、自分から何か好きなもの聞くとか出来ないし。

えー、丸々ちゃん、そんなの好きなんだー。マジでく？ウケるく、みたいな会話とか、したことないもん。

「じ、自慢じゃないけど、あたしのコミュ力最底辺だからね？だからもっとうこう……、そんなあたしに相応しい方法じゃないと——」

「あるわけねえよ、そんなもの」

さゆりは、怖いくらい良い笑顔でばつさり切り捨てる。

……何だよ、何だよ。そんなの考えてみなきゃ分からないじゃん。それを最初から否定するとか、そういうの良くないのよ？

「……成長しと思ったら、すぐこれだよ」

「……もしかして、あたしがヘタレって言いたいわけじゃないわよね？」

「そうだけど。むしろ、それ以外ないでしょ」

流石は我が妹。あつさり認めやがった。

「あのさあ、もういつそのこと、遊びにでも誘ったら？」

「ええ……？」

嫌そうに顔を歪めると、さゆりは腰に手を当て、子供に説教をするお母さんのように言った。

「ここは思い切らないと駄目だよ。いつまで経っても前に進めやしないよっ……」

……そう言われても、ハードル高いなあ。

まずあたしは入理乃の手駒であり、何かを頼んだところで、聞き入

れてもらえるとは思えない。

そして更に付け加えるなら、今は特訓期間中。そんな暇はないと一蹴されるだろう。

「ん？」

その時、床に放り投げていたスマホから、ブブ、という音が聞こえた。

あたしはソファから離れず、なんとか腕だけを伸ばしてそれを拾い上げ、画面をタップする。

「何だったの？」

「クラスメイトからライン」

内容は、明日、つまり日曜日、自分の家にあたしの宿題のノートを持ってこいというものだ。

どうせ、今回も黒板に書かれてあったことをメモし忘れたに違いない。まったく、だらしない奴め。自分勝手過ぎる。

「こいつ、こゆりを何処まで……」

スマホを覗き込んださゆりは、怒り心頭といった様子で、画面を鋭く睨みつけた。

……本当に、あたしには勿体無い良い子だ。いつもあたしのために、怒ってくれる。まあ、生意気だけど。

「大丈夫」

「え？」

僅かに声を上げるさゆりに、あたしはらしくもなく、にっと歯を見せて笑った。

まあ、見てなさい。これでアンタも安心するから。

あたしはゆっくりと深呼吸をすると、一言、「やだ」と文字を打ち込んだ。

そして——指の震えを押さえつけて、相手に送信した。

「……どう？やるでしょ、あたし」

あたしは手でVサインをしてみせる。こゆりは驚いて、何も言えないようだった。

その顔がある意味抜けだから、ちよつと気分が良い。さっきのお

返しだ。

「ど、どんな心境の変化なの？」

やがて、恐る恐るといった感じで聞いてくる。あたしは起き上がりながら妹に答えた。

「ちよつと、あることがきつかけで目が覚めたの」

入理乃とサチ、彼女達からあたしは人に自分を出しても良いんだと学んだ。だから、クラスメイトのからかいに関しては、今のあたしに怖いものはない。

それに、ずっと抱いていたこの罪悪感、孤独を恐れてるが故に感じていた感情だ。

つまり、これは自己防衛のために作り上げた錯覚。そんなものに従うのは誰のためにもならない。

「……お姉ちゃん」

さゆりは、心底ほつとしたような顔つきになった。

……どんだけ心配していたんだろうか。そこまであたしは駄目駄目じゃないんだけどなあ。

「〃お守り〃、渡したかいあったね。それを信じてくれたの？」

「良いや、〃お守り〃は信じてないよ。……あたしは、そういうの迷信だと思ってるから」

あたしは首から下げた〃お守り〃を、指でとんとんと軽く叩いた。

さゆりは、また始まったよとも言いたげな、うんざりした表情になっっている。

「あのね、さゆり。これはいつもの屁理屈とか、そういうのじゃないんだよ」

「屁理屈って自分で分かってるんだね……」

「まあね」

「何故ナチユラルに威張ってるの？」

あたしが胸を張ると、どうしてだがさゆりは呆れたような目をした。

困ったような仕草をすると、手でマイクの形を作り、あたしに向ける。

「色梨こゆりさん、質問です。どうして『お守り』を信じてくれないんでしょうか？」

「はい、さゆりさん。『お守り』とは所詮願掛けだからです。そこに勇気が湧き起こる不思議なパワーはありません。思い込みで勇気が出てたら、あたしはとづくにクラスメイトのからかいに反抗出来ていました。よってあたしは、『お守り』を信じません」

「……結局、屁理屈じゃない」

さゆりは呆れた目を、さらに遠い目にさせた。

……違うつつてんのに、どうして信じてくれないかなあ。だってあたし、事実を言ってるだけだよな？

「まあ、こんな風に、『お守り』は信じられないけど……、でもね、さゆり。ここに込められた思いはあたしとって特別だから……。その……」

「……、それだけは信じてくれるんだね」

恥ずかしくて口籠ると、さゆりはその続きを言ってくれた。そして、口元を綻ばせた。

「周りくどい表現だなあ……」

あたしもそれに返すように、微笑した。

生憎、こちとら天邪鬼だ。だから『お守り』を渡した意味を理解してるけど、その通りにそのまんま、受け取ってやんない。

そんな曖昧なものより、貴女を信じる。

「あたし、本当の意味で大丈夫だよ。……これからは心配しないでね」

「……じゃあ、遊びに誘う勇気も持ってね」

「う……」

思い出したように、そういう痛いところを突くの止めて。

……くそ、せっかく巧妙に話を逸らそうと思ってたのに、失敗してしまった。所詮、浅知恵だったと言うことか……。

「わ、分かったわ。勇気を持つ。頑張って、一生懸命誘ってみる」

あたしは渋々と頷く。

一度決めた以上、引き返すことはできない。そして何より、あたし自身引き返したくはない。

だからこそ、一緒に遊ぶという案しかないのなら、嫌でもやるしかない。

こうなったら、何とかしてあたしと遊ぶようになるよう、徹底的に頑張ろうではないか。

「……」

“お守り”にさゆりは視線を移した。そして一瞬だけ——そう、一瞬だけ、複雑そうにした後、彼女は言った。

「強くなったね、……お姉ちゃん」



お姉ちゃんが、最近変わった。

始まりは十日ぐらい前の夜。ふと、突然、顔を蒼白させ、私が話しかけても心ここにあらずといった感じになってしまった。

次の変化はその二日後で、今度は疲れたような表情で机に突っ伏していた。何かあったのか聞いても、何も話してはくれなくて、奇妙に思ったものだ。

そして三日、四日とたつうちに、その疲労感が増していつているようで、ここ数日は私より先に彼女は早く寝ている。

しかしこゆりは、それに連れて、感情を表に出すようになった。良くも悪くも、遠慮がなくなったのだ。

そして今日、ついに何かが大きく変わった。

私はその時悟った。本人が言った通り、お姉ちゃんはもう大丈夫だと。

私が支えてあげなくても、これからは何とか、自分でやっていける。

私のこの孤独を癒してあげる役目も終わりなのだ。

それなのに、どうしよう。

まるで世界中の人類が滅んで、自分だけ生き残ってしまったような、そんな強烈な孤独感が、湧き上がっている。

……なんて醜い感情。自分でお姉ちゃんの成長を願って、わざわざお守りまで渡したくせに。

今気がついたけど……私、心の何処かで、お姉ちゃんが自分だけの物だと思って、それに優越感を感じていた。

本当は誰にも渡したくなかったし、勇気を出しなよと言いながらも、どうせ誰も仲良くなれないと高を括って、安心しきっていたんだ。

私も、どうやら自分で自分を誤魔化していたらしい。まったく、人のことはいえないなあ。

……でも、今更お姉ちゃんに何て言えばいいのだろう。

他の人と仲良くせず、自分とだけいてよ、って都合良すぎ。私はそんな、情けないこと言えない。

私だって、私がやりたいことがしたいという思いもある。

私達は、これを気に離れなきや。この気持ちは我慢しなきや……。私がお姉ちゃんの邪魔しちやいけない。

……たとえこの身が終わろうとも、私はお姉ちゃんが幸せであればそれで良いんだから。



私は双眼鏡から目を離す。

一気に感覚が戻ってきて、過去が現実になった。

私がお姉ちゃんの昔を見ている間に移動したのか、少女はいつの間にか部屋の隅にある椅子に座って、湯飲みでお茶を飲んでいた。

「お帰り。何処まで見てきた？」

「まだまだ最初……、物語で言えばプロローグ部分ってところでしよるか」

「貴女らしい例え方だね」

少女は立ち上がると、お湯を沸かし、コップに紅茶を入れて来てくれた。

それは船花サチと阿岡入理乃の友情の象徴。私は静かに茶を嚙下し、すべてを胃袋に収める。

「こゆりの過去はどうだったかな？」

「結構面白いですね」

こゆりの様子はあまりにも滑稽で、腹の底から愉快だ。しかしそれが故に、意外と考えさせられる。

……充分、私の答えを探す手掛かりになりそうだ。色梨こゆりもまた、私と同じく自分自身に迷い、「正解」を探す同志なのだから。

「私は、可愛そうな奴が基本的に大好きで、そういう人を助けてやりたいんです。ですから、こゆりの過去に実際に立ちあいたかったですね」

……とくに、リノやしーちゃんに関わっているなら、尚更だ。

あの二人は「私」と最も繋がりがあある魔法少女。彼女達に会えば、この私に与えられた役割を、少しでも真つ当できた。

「……ノカ。そうは言うけど、どうせ貴女はお兄ちゃんの真似をしたいだけでしょ？」

「……当たり前です。それが「私」であり、ゼンマイ人形の呪いの性質なんですから」

コップを少女に手渡す。すると空気に溶けるように、それは一瞬にして消えた。

「こゆりにも、何か渾名を考えないといけませんね」

こゆりは既に私にとって特別だ。ならば、きつちりと私だけの呼び名を考えて、存在の定義づけをしないと。

リノやしーちゃん、家主さんにコイ。彼女達のように、こゆりを私の中で自分だけのものにするんだ。

「そう言うなら、私にもその渾名を頂戴よ」

自分自身に向けて指を指しながら、少女は少し拗ねたようにねだった。私はわざと揶揄うように、んーと悩むふりをして、

「……まあ、良いですよ。いつまでも貴女じゃ可愛そうですし」

「私にぴったりのものを頼みよ」
「ええ。……それじゃあ、貴女の渾名は——」

傲慢

あたしはその日のうちに、サチに相談したうえで、明日、入理乃にどっか遊びにいかないか、と電話をした。

理由はそのまま、一緒に遊びに行きたいから、と言った。

普通はそこら辺、取り繕うなりなんなりするんだろうけど、どうせそんなことしたって、頭が良い入理乃の前では無駄な気がした。だから、あえて素直に気持ちを言うしかないと思ったのだ。

まあ、駄目で元々だと半分諦めていたし、当たって砕けろ、という感じだった。

しかし、結果は予想外のことにOKだった。

びつくりして理由を聞くと、『牛木草で行きたいところがある』、ということだった。そのついでなら、遊んでやっても良いらしい。

……やっぱり、優しいところがある。あたしの話、ちゃんと聞いてくれてるしね。

でも、それを抜きにしても違和感があったような気がする。何だか声が少し上擦っていたような……。

とにかく、これで約束はできた。

後は一緒に遊ぶのを通して、入理乃と親睦を深め、彼女の人物像を探るだけ。出来れば、サチのことをそれとなく聞ければベストだが、一番難しいことだろう。

……速いところ、なんとかしないと。あたしが頑張らないで、誰が頑張る。

これは、あたしにしかできないことなんだから。

——その時、あたしはさゆりのことなんて、考えていなかった。

入理乃とサチ。その二人のことに夢中で、他のことに目を向けていなかったのだ。

しかし、もし自分の妹にも気を使っていたら……、あんなことにはならなかったのかもしれない。

キュウベえに願ったあたしの祈りは、既に絶望の物語を綴り始めていて。

その因果の起点は、あたしを奈落の底へ引きずりこもうとしていた。



あたしは一足先に集合場所である、“色彩の木”の前にいた。

色彩の木とは、牛木草駅の広場前に設置されてある、その名の通り木の形をしたオブジェだ。

高さは二十メートル。枝には光の三原色、赤、緑、青と、色の三原色、シアン、マゼンタ、イエローのガラスの林檎がそれぞれ三十個実っている。

まさにその美しさは圧巻の一言。牛木草市の名所とも言ううに相應しい芸術品ではあるが、実は珍しいものではない。

製作者である、十年前に事故死した女性芸術家、夜見鳴子よみめいこが、寝巢屏都市圏中にこのオブジェを配置しているのだ。そのため、他の市に行けば別の色彩の木を見ることができるといえる。

しかし、それぞれの地域ごとに色彩の木は微妙に違う。

例えば牛木草のものは飛雄角のものより林檎の数が少ない。また高さも十五メートルと低い。

その理由は不明だが、夜見鳴子のファンの間では各市の経済格差を表しているという説が有力だ。

ちなみに、あたしも夜見先生のファンの一人ではあるが、その説は推していない。

彼女ならそんな陳皮なものでなく、もつと深いテーマで芸術品を作るはずだ。

「こゆり、来たよ」

しばらくすると、阿岡入理乃がやってきた。

あたしは弄っていたスマホをバッグに入れると、彼女の方を向いてにこやかに笑った。

「入理乃。待ったわよ」

「……、お前」

名前を呼ぶと、瞬間、入理乃がぎよつとした。

……ちよつと酷い反応だ。そりゃあ名前を呼ぶのは衝撃的だったろうけど、これじゃあ、まるであたしが気持ち悪い虫みたいじゃない。

「もう、すつごく暇だったわ。少し早くきてしまったから」

あたしは誰かさんがいつかして見せたように、はめてきた腕時計を示した。

彼女は何だこいつ、と言いたげにあたしを見る。

「……電話の時も思ったけど、性格違いすぎるでしょ。何なのよ、お前……」

「ああ、あたし昨日から、誰であつても自分を出すって決めたの。だから貴方相手であつても、もうびびったりしないわ」

そう言つてやると、入理乃はちよつと引いたような動作をする。

手駒のくせに、あたしが反抗的な態度をとったからだろう。

「お、お前、立場分かつてるの？私が上で、こゆりは下なのよ？な、生意気な言動は慎んでよ、いや、慎みなさい」

入理乃は言葉の最後の方の語気を強めた。しかしそれは、及び腰になつているのを隠せていなかった。

あたしはそれを意外に……、いや、素でたのか？と思ひながら言い返す。

「生意気はどつちよ。アンタだつて、年上のあたしに対して態度がでかくせに。人のことなんて言える立場なわけ？」

「……くそ、言い返すようになりやがつて……」

悔しげにぎりつと歯を食いしぼる。それで、あたしは少し口元が緩んだ。

調子に乗つてたクソガキに、やつとやり返してやったのだ。気分が

良い。

「ねえねえ、早く遊びに行きましようよ。時間は有限なのよ、有限」
さっさと移動して欲しいのだ、とあたしは言う。このままうかうか
していたら、お昼を超えてしまう。

「……あのねえ、何か忘れているようだけど、遊びはついでだからね？
私の用事を優先させてよ？」

「ええー。どうせ、入理乃の用事なんかすぐ終わるじゃない。なら沢
山遊んだ後でも別に良いんじゃないの？」

「そりゃあそうかもしれないけど。ていうか、沢山遊ぶとか誰が言っ
たよ。そんなの、ほんの十分とか、その程度だけだからね？」

「え……う？」

あたしは驚き、固まった。

う、嘘よね……。そんなこと電話で言ってたっけ？いや、あたし
ちゃんと人の話聞いてるし、聞き逃したってことはありえないから、
まず言っていない……。と思う。

いや、そんなことは置いておいて。……今の状況不味くない？

今日逃したら、次遊べるのいつか分かんないし、入理乃と親睦を深
めるといふ作戦自体がおじやんになっちまうわよ。

それに出かけてくる前に、見栄はつてさゆりに堂々と、『必ずあいつ
を元気にするヒントを見つけてくるわ』とか言っちゃった以上、ここ
で引くとか情けなさすぎる。

なんととしても、入理乃と長く遊ばないと……!!

「じゃあさっさと私の用事を済ませに——」

「ね、ねえ、やつぱ今から先に遊びに行かない？なんなら服とか買って
あげるわよ？今日服屋がポイント五倍デーの日でね、いつもよりポイ
ントが貯まるのよ。ほら、ポイントつて大事よね？そのためにも何と
してもいかないと、ね、ね？」

あたしは引き留めようと、酷く慌てた。そのせいで、我ながら変な
ことを口走っている。本当に恥ずかしい……。

「……何言ってるの？」

当然、入理乃は実に嫌そうに顔を歪めた。

あたしはどうしようか、とぼくぼくと心臓を鳴らしながら必死に全脳細胞を働かせて考え、そして——最終的に強引にでも連れ回すことにした。

何故かって？そりゃあ、あたしは他人に遠慮しないって決めたからだ。決してテンパってるとか、混乱してるとかじゃない。

「さ、さあさあさあ、行こうか、入理乃ちゃん！案内してあげるわ。こゆりさんについてきてねー!!」

あたしはぎこちなく人の良い笑顔を浮かべると、無理やり、入理乃の腕をがっつと掴んで手を引いた。

後ろから、何処がいついてきてか！引つ張るなー!!という声が響いたが……、まあ気のせいだということにしておこう。



あたしは駅前通り——牛木草の都心部に入理乃を連れてきていた。上を向けば、高くそびえ立つビルの摩天楼。目の前に視線を戻せば、雑踏で埋め尽くされた道。

入理乃はそれらに口を開けて、さつきからぽかんとしている。

聞けば、入理乃は牛木草に来ることはあっても、この都心部には来たことがなかったらしい。つまりは、牛木草の田舎の部分しか見たことがなかったのだ。

そりゃあ、圧倒もされる。牛木草に住むあたしだって、初めは入理乃と同じリアクションをしていた。

「い、一体どっちに行けば……」

「こ、こっちよ、こっち」

掴んでいた手をそのまま引き、あたしは近くの商業ビルの中へ入る。

エレベーターで上へ上がる最中で、感心したように入理乃が言った。

「よく目当のものが分かったね。あんな建物いっぱいあったのに……」

「まあ、あたしってば都会っ子だからね。そういうのの見分けぐらいつくわよ」

「……お前牛木草でも田舎の方に住んでんじゃん」

入理乃から呆れた声音で突っ込みが入ってくる。あたしはそれに適当に答えた。

「あたしは都会に何度も言ってるもん。だから一応都会っ子なのよ」

「都会っ子ってそういう言葉の意味じゃないよ……」

「え、マジで?」

「そうなのか……。初めて知ったわ……」

けどあたしが住んでるところら辺、一般の田舎からしたら十分都会だし、自分のこと半都会っ子って思っとこ。なんか指摘されたの恥ずかしいから、絶対ただの田舎者ってことにはしたくない……。

三階にまで上がると、その一角にある洋服店に行く。そこは落ち着いた雰囲気だが、比較のカジュアルで、中学生や小学生向けの服が売ってある店だった。

そのため、休日ということもあって人も多いが、敷居は高くない。さて、ここからどうしよう……。完全にノープランだ……。

ていうか、やつぱ強引に連れてきて良かったのかな。嫌がってたら意味ないし。

でも作戦がおじゃんになったらダメだし……。

ああ、もう、どうしたら良いんだよ!!頭がこんがらがるう!!

「こゆり。お前なんかさつきから変だよ。大丈夫?」

「……え!?う、うん!!」

入理乃からの心配の眼差しにぎくつとなり、こくこくと頷く。
いかんいかん……。平静にならねば……。

……せめて連れてきた以上、服を買い与えなきや。だってこいつ
アレ”だし。

「ごほん、とあたしは気を取り直すように咳をすると、

「入理乃、好きなの選びなよ。服色々揃ってるから、ここ」

「いや、服とかいらぬし」

入理乃は即答した。しかも服を見もせず。

あたしは一瞬折れかかったが、ここで諦めてはいけないと、側に
あつた服を見せた。

「ならこれなんてどう？」

「いらぬ。でかいし」

「これは？」

「いらぬ。痒くなりそう」

「こ、こつちは？結構カツコいいよ」

「いらぬ。痛い人が来てるやつだし、それ」

進めては、その度にNOが突き出される。

途中からあたしは、意地になっていた。服選びも最初は似合いそう
なものを選んでいたが、いつの間にか目盛り次第に服を見せ続けてい
た。

「だ、だったら、これはどうだ!!」

二十回目で、あたしはピンクでフリルがいつぱいついた服を見せつ
けた。適当に選んだにしては可愛い。

「……………」

しかし、そこで入理乃が初めて、即座に顔を背けた。それは、何か
臭いものでも嗅いだ時にする反応のようだった。

「あ……………、嫌だった……………」

「嫌っていうか苦手。何、そのお嬢様っぽい服……………。そんなの一般庶
民が着るわけないじゃない」

アンタはお嬢様のはずなのだが…………。

まあ、こいつ、周りの環境がアレだし…………金持ちって自覚が本人に
はあまりないのかもしれない。

「……………だいたい何なの、お前。迷惑なんだけど」

ついに耐え兼ねたのか、入理乃が気に食わない、とぶすつとしたように言う。そして、ぐつと眉間に皺を寄せた。

「何でいちいち服を買ってくれようとしてるの？もしかして、私に奢ることで貸しを作りたいの？」

「はあ？何でそうなるし……」

我ながら人のことは言えないが、……こいつ結構考えが捻じ曲がっているわよね。

そんな邪推するなつての。こっちは100%そんなことは思っ
ちやいない。

あたしは、ただ――

「いや、その服装、どうにかしたいからだけど」

「はあ？服装を？お金を払ってまで？」

「ええ」

「……そこまで言う程、私の服に何が問題あるつていうの？」

そう言うので、入理乃の全身をあたしは改めて見る。

よれよれに着古した白いタートルネックに、サイズが少し小さい
ジーンズ。もちろん、どちらとも安物だ。

……これでよく、問題ありませんと言えるわね。昨日と劣らず酷い
と思うんですけど。

「てかき、服なんてどうでもいいじゃない。着ればそれで良いし、普
段は制服なんだし」

それを聞いて、あたしは心の底から呆れてしまった。

この年でなんちゆう野暮つたい発想をしてるんだ……、こいつは
……。

「……アンタ、女らしさのかけらもないわね。そのままじゃ数年後、立
派なお父さんになってるわよ？」

「……私がオッサン!？」

「ええ。小学生だからって油断しない方がいいわ。今のうちから身嗜
みには気をつけとかなないと、すべてがどうでも良くなって、まるで休
日のお父さんのような状態になるわ」

「……!!み、認めたくないけど、確かに説得力がある……!!」

漫画だったら、背景に雷が出るだろう。そのくらい、入理乃が驚いたりアクションをとった。

……流石に効いたみたいである。

「……いいよ、そこまで言うなら分かった。服選ぶ」

「え、ええ。じゃあこれとこれなんてのはどう？」

さつきと違ってずいっとくる入理乃に、側にあったフード付きの緑のジャンパー進めてみる。

すると入理乃は、それを無理やり引たくると隣にあった赤いワンピースも引たくり、ぴゅーつとカーテンで覆われた試着室の方へと直行してしまった。

「どう!?!」

しばらくして、入理乃がカーテンを内側から開いた。顔には、切羽詰まる表情が浮かんでいる。

何か必死すぎて逆にこつちが圧されるわね……。

「私、マシになった? ね? ね?」

「う、うん、さつきよりはマシだと思うけど……」

実際、小学生らしさが増していた。

ダボツとしたジャンパーは子供っぽさを、その中のワンピースは女の子らしさを印象付けている。

あと、地味に「色」の組み合わせが良い。

色相を円状に並べた色相環というものがあるのだが、その円状で向かい合っている色同士——「補色」は、互いの色を引き立て合う性質を持っている。

赤と緑は、その補色の関係にあるのだ。

……まあファッションの分野において、それがどのくらい当てはまるのか分からないけど……、にしてもこいつ、迷いなくワンピースを取っていったし、もしかして「補色」のことを分かって選んだの? あたしは将来、芸術関係に行こうと思っっているから「色」について勉強しているが、普通だったら知らない知識なんだけどなあ……。

「よし、じゃあこれ買う!!絶対買う!!」

即カーテンを閉めると、入理乃は数秒後には元の姿になっていた。服一式を持って試着室から出て行くと、目にも止まらぬスピードでカウンターに向かう。

そしてあたしが辿り着く前に、彼女は既にお金を払っていた。

「あれ、あたしが買うつもりだったのに……」

「ふふ、お前より先に金を払ってあげたよ。どうしてこの私が、格下相手に貢がれなきやいけないわけ? 目論見が外れて残念でしたー!」

何を勝ち誇ってんだろう……。こいつ残念だよな、こういうところ。

まあ、さゆりとかからは、お前もだよ、とか言われそうだけど。

その後、入理乃は服を買って舞い上がったようで、早速トイレで再度新しいものに着替え(古い方はなぜか魔法で処分したようだ。それはそれでもつたない)、ルンルンにスキップしていた。

なんか、ちよつと納得がいかない。あたしが連れてきた時は嫌がつてたくせに。

でも、楽しんでもらえて良かった。……無理やりだったから、めちゃくちゃ失敗したあ、と思つてたけど、やってみたいと分かんないものね。

よし、この調子でどんどん行こう。

「ねえ、入理乃。他に行きたいところある?」

「行きたい場所? そんなのある訳——」

「見てみないと分かんないでしょ」

服屋のカウンターで取った、このビルの地図が載ったパンフレットを半ば無理やり押し付ける。

入理乃は渋々といった感じで開き、中を見始めた。

「……………ここ、本屋とかあるんだ」

「興味あるの？」

「もしかしたら、ここになら早島で見つからなかった木戸船艦全集があるかと思つて。……船花ちゃん船好きだし、ずっとプレゼントしたいと思つてたの」

「……そういうのを思うつてことは、入理乃も入理乃でサチのことが大切なのね。」

まあ、考えてみれば、入理乃はカラオケで自分と“サチ”の味方をいざとなつたらしろつて言つてきたし、すべてサチのために動いているのだからなあ。

「……愛してくれない、と思つておきながら、すごい矛盾だ。一方的に愛することは良い、つて言うことなの……？」

しかし、そう思つているからこそ、自分の思いをサチに伝えず自分で勝手に動いていて、逆にサチが不安がる状況になった。そして、そのくせ何もサチは言えないので、入理乃も入理乃で気づかない……とところなのかも。

「……ちよつと探りを入れてみるか。」

「ねえ入理乃。貴女、プレゼントをするくらいサチのこと大好きなの？」

「当たり前じゃん。船花ちゃんは私と同じような境遇を、苦しみを持っている。だから、理解できるの。側にいると安心する……」

「じゃあ……、もしもサチのためなら、一人で何でもできたりする？たとえ黙つてでも——」

「できるよ」

それは、きつぱりとした言葉だった。あたしが驚いて、息を飲んでしまうくらいには。

「彼女は私にすべてを任せてくれている。それに私の方が船花ちゃんより能力が優れている。だったら、私が何もかもやってあげた方がいいじゃない？」

「いや、でもさ、そのサチが探つてこないとも限らないわよ？」

「はあ？探つてくる訳ないじゃない。私を疑つてくる訳がない。だつ

て何も言つてこないし。つまり、それつて、私が色んなことをやれてことですよ？その筈だったんだよ」

あたしはもう、絶句するしかなかった。

相方へ向ける思いはサチと同じ、いいや、それ以上とさえ思える強さのように感じられた。……間違いなく、本物だったのだ。

けど……、サチとは本質がまるで違うように思えた。サチが真つ直ぐで純真なら、入理乃はねじくり曲つている。こいつは何処まで傲慢なんだ……。

「……本当、見てみないと分かんないね」

入理乃はある程度見たのか、パンフレットを差し出してきた。あたしは促されるまま受け取ってしまう。

「これから行きたいところに順に行くつもりだから、付き合つてよ」
「……」

「もともと遊びたかつたんでしょ？私も遊びたくなつたし、案内してよ、この牛木草を」

それは、何処か試すような響きで言われた。あたしはそれに対して、頷いた。



ゆらゆら、髪が揺れた。バサバサ、衣服を風が揺らした。

屋上ビル。そこから望遠鏡を構えて見るのは、眼科に広がるビルの摩天楼の間に挟まれたスクランブル交差点——ではなく、その都会の裏にある廃墟である。

この望遠鏡は、見る光景を、空間さえも、距離さえも縮められる。だから現在地点から離れた場所であっても、まるで目の前のことのように映し出せるのだ。

その部屋の角で、私は不気味な紋章が浮かび上がっているのを見つめる。その前では、複数の死体が折り重なっていた。

あちこちが血だらけ。そして、何本もの包丁が床に投げ捨てられている。恐らく、それらを使って、お互いがお互いを殺し合ったのだろう。それも魔女に操られて自ら……。

「おやおや、あれは……」

思わず、目を細めた。

その死体の山の天辺には、少女がいた。

年の頃は、中学生ぐらいか。顔は美しもなく、可愛らしくもない。さりとて、特別醜くもない。本当に平均的な顔立ちをしている。だが、そのショートカットに切られた黒髪の艶には目を引くものがある。

私は、彼女のことを見かけたことがある。彼女の名前は、確か――

「色梨さゆり……、だっけ？」

苦しみしかない人生

私の片割れ。私の半身。お姉ちゃん。

貴女はいつつも、一つの物事に囚われてばかりだったね。

そのうえ、抱え込みやすく、調子に乗りやすく、俗っぽくて、意地っ張り、ヘタレで、脳筋気味だ。

……本当、生きにくい性格だね。昔から自縄自縛をして、苦しんでもがいている。

でも、そんな貴女だけどころも不思議なくらい一生懸命だね。

めげないし、諦めない。どんなことがあっても、立ち直れる強さを持っている。

……何で貴女はそこまで頑張れるの？どうして目標に向かって真っ直ぐでいられるの？

よく考えても分からないし、質問したところで貴女も答えられないだろうね。

でも、頑張ってる姿はそれだけで私を励ましてくれていた。私を勇気づけてくれていた。

だから、思ったの。将来、貴女のように頑張っている他の人も、支えてあげたいって。

……貴女のお陰で、今の私の夢がある。

ありがとう。感謝しても仕切れないよ。照れくさいけど、いつか何かお礼がしたいな。

私は気がつけば、見知らぬ場所にいた。

木でできた、広い小屋のような施設の中だ。カビ臭く、埃臭い。

何か作業台のようなものが角にあったり、倒れたプラスチックのゴミ箱がある。

しかし陰鬱な印象に反して、窓が上にあるので、意外とそこから光

が入ってきて明るかった。

「ああ、悩める人達。貴方方は本当に本当に、可愛そうな顔をしていますねえ」

それは、突然だった。

何と、一つ瞬きした瞬間に、派手な衣装を着た女の子がいつの間にか目の前に出現したのだ。

実に奇々怪界。摩訶不思議な現象だった。

しかし私は……、何故か驚かなかった。いや、驚けなかったということの方が適切か。

何だか頭がぼんやりしているのだ。上手く思考できない。感情のスイッチがオフのままになっているみたい。

記憶もあやふれだ。私は、さっきまで何をしてきたのだけ……？「自ら思いに蓋をし、自らの手で首を絞め、自ら鎖で自分を封印する。そのことのなんと生きにくいことか。貴方方は矛盾の権化と言えるでしょう」

舞台上にでも立っているかのような、大仰な口調。手を広げて、まるで踊るようにくるくる回っている。

万華鏡みたいに、世界もぐるぐる、ぐるぐる。

気が緩み、パカって、思いを閉じ込めていた心の箱が開く。私は手で顔を覆って、その思いを面に出した。

「……私は、矛盾している。何で私、姉を支えておきたいと思っていないから、こんななんだろう……」

私は醜い。ぐちゃぐちゃで、意味が分かんない。

私達は互いに依存し過ぎて……。こゆりは私を支えにすること一人でじゃないと言いつき聞かせ、私はこゆりの悩みを相談することで優越感を得ていた。だから、離れたいと感じていた。夢のためにも、互いのためにも……。

けれど、……あの依存関係は心地良すぎた。だから、お姉ちゃんが自立しようとしていることに——この思いにけじめがつけられない。

……矛盾した願いは両立できず、天秤は釣り合わないのに。

「私……、私はどうしたら良いのか分からない」

無力感が襲う。

……お姉ちゃんも、こんな気持ちだったのかな？ 貴女も、決められなかったのかな？

選択肢にぶつかるのって、こんなに辛くて悲しいんだね。

「俺もだ……。俺もどうしたら良いのか分かんない……。会社から逃げられない……」

隣から声が聞こえた。見知らぬおじさんだった。

何だか覇気がない顔をしている。……きっと彼は、この世のすべてに疲れてる。

「わしも……。どうしてこんな目に合うのか分からない……。何故、誰も救えない……」

今度は後ろから聞こえた。裕福そうなお爺さんだった。

……この人も覇気のない顔。お金で解決できない何かがあるんだろうか。物で心は、満たされないと。いうし。

私も。俺も。あたしも。僕も。

気がつけば、周りには人が多くいた。年齢はバラバラ。性別もバラバラ。しかし、皆一様に虚な顔している。苦しんだものが浮かべる、虚無がそこにあった。

……そっか。私の他にも、折り合いをつけられない人はいたんだ。皆、もがいてももがいても、選択肢を選べないんだね……。

「分かります、分かります。貴方型の苦しみ、よく分かりますとも。私もそうでしたから」

派手な服の少女が、うんうんと頷く。

嘘くさい動作なのに、私は感激してしまった。分かってくれたのが、安心スル。

嬉シイ……。ウレシイ……。

皆、泣イチャってる。隣のオジサンなんか、モウスゴイ……。

皆、カンセイアゲテル。ワタシモカンセイアゲテル。コエハリアゲテ、アゲテル……。

「この苦しみが、永遠に続くのは耐えきれませんよね？ この苦しみが、永遠に続いて欲しくありませんよね？」

ウン。クルシミタクナイ……。スクワレタイ。ナニカニスガリタイ。

スガリタクナイ。ワタシはワタシをステタイ。

「苦しみから逃れる方法は一つしかありません。お互いが、お互いを殺すのです。肉体を滅ぼせば、魂は救われる。何故なら魂は自由だから」

フワン、グワン、プワン。

ミミナリガひどい。何かがワタシの頭を揺らし、陶醉させている。

メノ前が真っ赤つか。夕日みたいに真っ赤つか。

「さあ、殺し合いますよう。刃は既に準備してあります。さあ、どうぞ気の赴くままに——」

ワー!!ワー!!ワー!!

ドタンバタン!!ドタンバタン!!ザクザク!!ブシャー!!

途端におこったそうおん。みんな、アバレマワツタ。

ワタシもアバレマワツタ、アバレマワツタヨ。

みんな救うためにがんばってガンバツタ。みんなをサシテコロシテアゲタ!!

オオクノヒトが死んだ。

オジサンはオンナノコをコロシタアト、オトコの人にナグラレテ死んだ。

オジイサンはオナイドシのオトコノヒトにハラを刺され、ワタシがアタマを指してシンでしまった。

そして……。キガツイタラ、ミンナイナクナツテタ。血ノ匂い。散乱するヒトの亡骸……。

ドウヤラワタシだけイキノコツタみたい……。ワタシだけがスクワレナカツタ……。

ん、……。アレ?ワタシ、そんなことかんがえてたっけ?そんなことノゾンデいたっけ……??

分かんない……。デモスクワレタイ……。ナンで?

「あら?貴女、正気を取り戻そうとしているの?」

オンナノコが聞いてくる。……。正ウキ?取り戻ス?

ワタシはなにをしていたノ……？

手元にいつのまにか持っているものを見る。それは赤い血がついた包丁で……、

「私、人を——」

「ま、いつか!!バーン!!」

その瞬間。何かが飛んで私の首に刺さった。

——それで、意識は無くなった。そこで私の命は終わった。呆気なさすぎて、つまらないくらいに。



都心から少し離れた道を、あたしと入理乃は歩いていった。

目的地は、入理乃の『牛木草で行きたい場所』である。その距離は、後十分ぐらいといったところか。割と徒歩で近い。

あたしの足取りは、我ながら重かった。背中では若干猫背気味だ。

そんなあたしとは対照的に、横にいる入理乃は元気だった。

それはキラキラした目で見ている、彼女の手の中にあるもののせいだろう。

カリツカリのコーン。その上に盛られてあるのは、積み重なった二つの半球。下は牛乳がたっぷり使われたバナナ。そして上はビターチョコのジェラートだ。

牛木草名物、バリーさんちのアイスである。

バリーさんという店が出しているアイスで、基本の組み合わせはバナナとビターチョコしかないが、その二つが合わさったその美味しさはまさに極上。全国のアイスの頂点を決めるテレビ番組で六位をとった程である。

入理乃は涎を垂らしそうな勢いのまま、その超人気アイスにかぶり

ついた。

そして、堪らんといった感じで、

「うまあ〜……」

「そうですかい、そうですかい……。良かったわねえ……」

あたしはため息をついた。

このアイスを手に入れるのに、何分並んだことか。マジで疲れた。それもこれも、入理乃が「最後だから!!」ここ行ったら目的地にすぐ行くから」と駄々を捏ねたせいである。

つたく、遊びに乗り気じゃなかったくせに、最終的には自分からこっち行きたい、あっち行きたいだもんなあ……。

服の時もそうだが、なんか納得がいかない。なんか負けた気がする。

「……でも、意外ね」

「んん？うふあい？」

「食べながら話さないで」

もぐもぐとアイスを頬張る入理乃は、まるでハムスターのようになっっていた。

ちよつと面白いぞ、おい。

「んぐ……。それで、意外って何よ、意外って」

「いや、素直にアンタが楽しむなんて思っていなかったから」

入理乃は普段と違って、ずつとはしやぎまくりだったのだ。

どこに行っても、物珍しそうにしたり、驚いたりして、まるで普通の小学生のようだった。

偉ぶっているわりに、可愛いところあるじゃないか。すつかりイメージ変わったわよ。

「それを言うなら私だって、……。こんなに楽しんでしまうなんて思わなかった。最初は楽しむつもりなんて微塵もなかったはずなのに」

アイスのバニラ部分を食べ終わり、チョコ部分を舐め始めながら、入理乃は複雑そうだった。

「……お前は不思議だね。こんな、自分を苦しめてる人間を遊びに誘うなんてさ。何のつもりなのか知らないけど……。お人好しすぎる

よ」

「あたしはお人好しじゃない」

あたしは優しくもなければ、人のこともどうでもいい。

本当に大切に大好きなのは自分だけ。自分の考えが一番正しく、それを曲げられるのが何よりも嫌な人間なのだ。

……あたしは我がままなんだよ。

「あたしは自分のやりたいようにやっただけ。ただ、アンタが元気がなさそうだから、励ましたいと思っただけ」

入理乃はその時、アイスを食べるのを止めてこちらの言うことに聞き入っていた。

そして、何故か恨みがましそうに睨まれる。

「お前よくそれを私も前で言えるね……。恥ずかしくないの？」

「恥ずかしくはないわ」

断言すると、呆氣にとられたのか。彼女は馬鹿にしたように、ふつと笑った。

「……何でそう堂々とできるかねえ……。私はお前が羨ましいし、妬ましいよ。だって、自分がやりたいことが明確になってるんだから。私はもう、そんなの分かんなくなっちゃった」

「入理乃……」

「そういう視線は向けないでよ。手駒にして欲しくない」

思わず同情的になると、入理乃は興味がないとばかりぷい、つと顔を背けて、バクバクとアイスに齧り付く。

あつという間にコーンまで、入理乃の胃袋の中へ入っていった。

そして、ああ、そうだと。何かを思い出したような素振りをした。「……昨日言ったと思うけど、何故お前が魔力を上手く操れないのか、その原因を私なりに考えてきたよ」

「え、今からその話？」

「別に良いじゃん。何か文句でもあんの？」

「いいや、ないけど」

唐突すぎてびっくりしただけだ。

それに着くまで暇つてのもあるし、むしろ今言ってもらえるのは全

然OKだ。

「……あれだったんだね。金属操作はああいった魔力を送るとかいう操作には向いていないんだね」

「え？あたしはただコツが分からないだけじゃないの？」

「コツとかの問題じゃないと思う。だってお前、他の同じ難易度の課題はどんどんクリアしていったし、特別魔力操作が苦手だった訳でもないじゃない」

ええ〜……。そうかあ？お前が無茶なこと教えた結果じゃないの？

「付け加えていうなら、私は他者と自分の能力差ぐらいきちんと把握している。だから、できるだろうという範囲でしか、お前には教えてはいない。あれくらい、お前ならできて当然なんだよ」

失礼なことを考えていたことが見抜かれたのか、入理乃からじと目を向けられた。

……。どうやらこの言いぶりからするに、本当は気を使ってくれてたんですね。今まで心の中で悪口言っでごめんよ……。

「……遠距離戦の練習のアプローチを変えてみたほうが良いかもしれない。例えば、投げた武器を遠隔操作で操るとか。そうしたらお前は攻守共に隙がなくなる。お前の生存率は上がるよ。私はお前には死んで欲しくはない……。これから……。ずっと……。牛木草を任せっておきたいから」

あたしから視線を外しながら入理乃は言った。しかし……。それはこちらが恥ずかしくなるぐらいはつきりとした言葉だった。自分の思いを素直に出している言葉だった。

あたしは嬉しくなる。心と心が、少し繋がったような気がしたから。

「……ありがとう、入理乃。……。本当、貴女の方こそあたしより優しいんじゃないのかしら？」

あたしは元気付けるように、戯けて言ってみせる。

しかし、入理乃は視線を逸らしたままだった。そして、何かを訴えるように、

「私は――」

言いかけたところで、勢い良く隣の曲がり角へ向いた。あたしもびくりとして、立ち止まってしまった。

禍々しい気配。産毛が逆立つような魔力の反応を――魔女の反応を感じ取ったのだ。

距離は近い。それに今までにないほど強力なものだった。

……どうして今までこんなのに気づけなかったのよ。普通だったら、とつくに……。

身体中が一瞬で、氷みたいに冷たくなっていた。不思議と何かがあったような気がして不安になり、鼓動が速くなる。

「こゆり!？」

あたしは入理乃の声も待たず、弾かれたように曲がり角の方へと走り出した。

魔力の反応を辿って、道を右折し、左折し、まっすぐ進んでいく。

そうして見えてきたのは、木で出来た今にも崩れそうな大きい小屋だ。

周りは草でぼうぼう。人の手を長く離れたであろうことを感じさせた。

「!？」

驚愕しながら鼻をつまむ。外にいるのに、小屋の中からむせ返るような血の臭いがするのだ。

いよいよ嫌な予感がしてくる。

あたしは意を決し、頭の中で出来る限りネガティブなイメージを追い払いながら、無理やり小屋の扉を開けた。

「……………は？」

それを見た瞬間、がく、と膝から力抜けてへたり込んだ。

どこもかしこも、赤い色で染まっていた。

壁や部屋の角にある机に跳ねた、ペンキのような赤黒い血化粧。血のりがついた、床に落ちているいくつもの鋭利な包丁。

腹部やら足やらの傷口から鮮血を出している、十四、十五人の老若男女の死体の山。

そしてその天辺にて、首に包丁を刺されて目を剥き出しにして絶命している少女は、あたしの最愛の妹で――

「何、これ……」

そこから先、言葉が出ない。酷く実感がなかったのだ。

五感が冷却されていく。世界が遠のいていった。

しかし、気分は悪くなつていき、ぐるぐるお腹の底が搔き回されいく。

四つん這いの格好になり、頭を下げた瞬間、それは喉を逆流し、口から胃酸として飛び出した。

「おええええええ!!」

げほっ、げほっ、とあたしはその後も咳き込む。口内が酸っぱく、目眩が起きたように頭がくらくらした。

……何で、何で……、理解が追いつかない。

目の前の光景が、嘘だと思いたかった。でも、嘘じゃない。夢じゃない。

これは現実。逃れ用のない現実なのだ。

「嘘でしょ……」

その時、後ろから物音した。

見ると、追いかけてきたであろう入理乃が顔を真っ青にさせ、口を手で覆っている。

彼女もまたこの光景に驚いて、固まっているようだった。

「ねえ、………何でさゆりが、死んでるのかな?」

あたしは、疑問を胸の内にしまいきれずに問いかける。

その声は深閑とした室内に不気味なくらい、良く響いた。

「はあ?……さゆり?誰それ?」

入理乃は訳が分からないといったように顔を歪める。

「妹。あたしの、双子の妹。あそこで死んでいる女の子」

入理乃の視線が、さゆりに向けられる。

みるみるうちに、目が見開かれた。息を飲む音がこちらまで聞こえてくる。

「……どうして?今日はいつも通りだったのに……」

……そう、さゆりはいつも通りだったのだ。

同じ部屋で一緒に起きて、同じ朝食を食べて、同じテレビ番組見て、遊びに出かける際は、元気よく手を振って見送ってくれたのだ。

だから……、帰ったら、また同じように夕食食べて、同じ部屋で眠るはずでしょ？

いつもの日常が続いていくはずでしょ？

あたし、何が起こったか全然分からないよ……。そもそも、何で貴女はこんなところにいるの？

今日、外に出ていたっけ？そんなの聞いてないよ？

こんなの冗談じゃないよ……。突然すぎる。

「誰だ……。誰がこんなことをした？誰があたしから、妹を奪った？」
溢れ出た涙をそのままに、ゆっくりと顔を上げる。

その視界の先の壁には、先程はなかったものが浮かび上がっていた。

シンプルな家の形をした大きな紋章。結界への入り口だ。

魔女、という二文字が浮かんだ。それで、はつとする。

……そうだ。魔女は人を殺すじゃないか。つまり、さゆりは――

「……。お前か？お前だな？魔女……」

呟いたと同時に、ぶるぶると体が震えた。それは、今までに感じたことのない、マグマの如き怒りによるものだった。

ああ、許せない。許せない。許せない。

誰もあの子の命を奪って良い訳がない。

……さゆりはあんなに良い子だったんだよ？

自己中なあたしなんかのために、あの子はあたしを励まし続けてくれて、〃お守り〃まで渡すくらいあたしの幸せを願ってくれて……。

さゆりこそ、幸せになるべきで、あたしより価値がある人間だった……。あんな無惨な姿で死ぬべきじゃなかったのに……!!

「こ、こゆり……」

入理乃は、悲しげにあたしの名前を呼んだ。

どうしたらいいのか、分かんないんだろう。でも、あたしだって彼女に気を使う余裕はない。

目の前は、怒りの色で染まっていた。

結界の入り口から漏れている魔力が膨れ上がるのを感じる。

……誘っているとしてもいうのだろうか。上等だ。あたしが直々にぶっ殺してやる。

立ち上がり、素朴な魔法少女の姿に変身する。銀色の液体金属を召喚すると、五メートルくらいのブーメランに変形させて握る。

不思議なことに、それは何をしたわけでもなく、まるであたしの怒りが伝播したように、自ら熱くなって湯気を立てていた。

しかし、あたしは平気だ。何故なら、この武器はあたしの体の一部みたいなもんだから。

「……ば、馬鹿なことはやめなさい!!」

結界の入り口へ向かおうとしたその時、入理乃が横から肩を掴んだ。

あたしは何で、と目だけで聞く。それに入理乃は、真っ直ぐマークを指さした。

「わ、分かるでしょ!?!この魔力が!!私達の手に負えない!!妹の仇かもしんないけど、このまま向かえば死んでしまう!!」

「——それが何か?」

「……!?!」

「あたしは、命よりもあたしの意思を優先する」

止めないで。あたしは魔女を、さゆりを奪った奴を、放置できない。じゃないと、この怒りは収まりそうにもない。

「だから、……邪魔をするなあ!!!引っ込んでろよお!!!あっち行けえ!!!」
あたしは入理乃の手を掴むと、小屋の扉へ——外へと思いつきりぶん投げた。

無意識に身体強化をしたおかげか、入理乃は遠くへと吹っ飛ばされる。

その間、あたしは扉を締めて二つの液体金属を呼び出すと、それぞれ扉の上部、下部に張り付け、接着剤のようにガッチガッチに固定した。

「……ちよ、何するのよ!!」

戻ってきたであろう入理乃が、ガンガン外から扉を叩く。
あたしは、それを冷めて目で見ていた。

……入理乃はあたしに付き合う必要なんかないのに、どうしてそこまで必死なんだろ。

大人しくそこにいろ。そして一人で逃げろ。目障りなんだよ……。
あたしは今度こそ、結界の入り口へ入っていく。

世界が、変わった。



ダルトーンの黒い空。ラクダ色の雲。ハリボテでできたヨーロツパ式のレンガの家。点在する古風な外灯。

そして広大に広がる石畳の上に、あたしはいる。

誰もいなかった。生物の気配がない。風が吹いてる、寂しい世界だ。

その世界を壊すように、あたしは叫んだ。

「出てこい!! 魔女お!! あたしの命に変えても、ぶっ殺してやる!!!」

ガリン!!

まるで氷をアイスピックで穿ったような音。

空間に黒い裂け目が開かれ、そこからぬうつと、蠢く暗闇でできたコートの背の高い女性が現れた。

当然、人間などではない。

まず、背中には巨大なナイフの突起物が生え、首にはコードが巻き付けられている。単眼の目は顔半分を覆うほど巨大だ。

そして全身が、どう見ても助からないだろうと思うくらい、火傷後で醜く爛れているのだ。

それはどこからどう見ても、魔女に相違なかった。

……ああ、これで心おきなく、叩きのめせる。
「貴様ああああああああああああああああああ!!!」
慟哭を上げ、ブーメランを力の限りコート of 魔女へと投げる。
がき、と空気が震えた。

魔女の首に巻きついていて細長いコードが動き、ブーメランを後方へと弾き返したのだ。

しかも、あの金属は熱せられていた筈なのに、損傷はない。どうやらコード部分は熱に対して耐性があるのだろう。

「さっさと死ねえ!!」

あたしは激情のまま、勢いよく右手を横に凧いだ。呼応するように、飛ばされたブーメランがまるで生き物のように旋回し、後ろから魔女へと向かっていく。

それは前に目が付いている普通の生物からすれば、死角からの攻撃の筈だ。

しかし魔女は、易々と振り返りもせずとそのコードでブーメランを迎撃してみせる。

なら、と。あたしは真正面から肉薄しながら、新たに呼び出した液体金属で武器を作り出す。

巨大な、虎のように物物しい矛だ。そのリーチを生かし、魔女目掛けて叩きつける。

瞬間、首のコードが先程より非じゃない程の数に増え、払い退けられた。

軽い感じの動作だったのに、物凄い力だ。それだけで風圧が舞う。あたしは魔女へとまた矛を何度も打ちつける。

そこには当然、技術などあるわけもなく。ただ力任せの、感情任せの、単調な動きでしかない。

簡単にいなされる。

魔女はコードを伸ばすと、あたしの腹に鞭のように打ち込んだ。

ぶっ飛ばされ、ハリボテの家に背中から激突する。内臓が揺れて、血反吐を吐いた。

「くそ……!!このヤロオオオオオオオオオ!!!」

恐らく、魔女がコードを伸ばして今度は右足をもごうとしているのだろう。

それが面白いのか、けたけたと笑っている。

あたしは鬱血するくらい、口びるを噛み締めた。

悔しい。悔しい。悔しい。

あつさり良いようにやられて、馬鹿にされて、あたしはなんて情けないんだ。

せめて一泡吹かせてやる……。このままでは死んでも死に切れない!!

「……このあたしを舐めるな!!ボケええええええええええ!!」

あたしは右足に身体強化をかけながら、力の限り動かしだす。

巻きついてきたコードが連動して引つ張られ、魔女が地面に激突する。

その隙を、あたしは見逃さなかった。

あたしは鉄の杭を魔女の真下から二十本生やし、その頭を、首を、胴体を、腕を、足を、指し貫いた。

畳み掛けるように、さらにすべての鉄の温度を最高値にまで上げる。

……怒りによるせいか、自然と金属に関する熱の操作ができるようになっていた。

やはりというべきか、魔女の胴体部分には熱への耐性はないようだった。

熱せられた鉄の杭に内側から焼かれ、苦しんでいる。しかし逃れることなどできない。それを、あたしは許さない。

やがて、何分過ぎたのだろう。魔女は動かなくなっていた。

……死んだのだ。あたしは、勝ったんだ。

「やった……」

お姉ちゃん、やったよ。さゆりの仇を、とったよ……。

ああ、殺してやった……。あたし、頑張ったよ……。

「……………」

……なんか、おかしいなあ。目蓋って、こんなに重たいものだっけ

……。

何も考えられなくなつてく……。もしかして、あたし死んじやうの
かな……………？

ふふ、そりやあそつか……。だつて腕持つてかれて、これだけだく
だく血が流れてるんだもん。生きられるわけないものね……。

……短い、人生だったな。

苦しみしかなかった……。いつも一人で、他人にどう接して良いの
か分かんなくて……。皆に迷惑ばつかかけて、どうでも良いことで悩
んでばつかで……。やつと友達できたと思つたら、何故か唐突に妹も
失つて……。

意味分かんない。……こんなあたし、価値あつたのかな……………？

胸が締め付けられる……。

「どうして……、あたしは幸せにはなれないの……………？」

それを最後に、意識が落ちる。あたしはそのまま――

貴女を私は捨てますか？

「……………!!」

小屋の外で私は苛ついていた。

こゆりが私の命令を聞かず、無茶な真似をしたからだ。

本当、突然すぎて「呪い」で止めるのを忘れてたくらいよ。

何としてでも連れ帰ろうと、扉を一生懸命引っ張る。

しかし、開かなかつた。十中八九、こゆりが魔法で何とかしているんだらう。

恐らくこの感触からするに、物か何かで固定している感じではない。ギツチギチにドアの四辺が固まって動かない、……………そんな気がする。

「……………つまり、扉の真ん中部分は何もされていないってことか」

それならば、そこだけに穴を開けて中に入ることは可能ね。

まあ、回り込めば窓もなくはないが、生憎中は死体が散乱している。飛び降りた際に運悪く踏み潰してしてしまう可能性もあるし、ここは扉から入る方が良いだろう。

私は和紙をポケットから出して、白く長い杭にさせる。

そして、目の前のドアに穴を開けようとしたその時——私は「知っている魔法少女」の反応を感じ取った。

「……………!!」

私は背後を振り返ると同時に、杭を投げつけた。

瞬間、炎が目の前で舞い踊る。

後ろから近づいていた「知っている魔法少女」が、持っていた火の短剣で杭を切り伏せたのだ。

はらはらと焼かれ、萎んで落ちる杭。

……………認めたくはないが、私の和紙と彼女の火の短剣の相性は最悪だ。

「酷いなあ、もう。元々私とは仲が良かったじゃない、リノちゃん」

何もしてません、といった、いかにもむかつく顔をしてくる。

私は内心腹が立ったが、睨み返すだけに留まった。

「……そうだね。けど、裏切ったのだからこんな対応をしてしまうのも、仕方がないじゃない」

「相変わらず、普段はおどおどした性格なくせに、敵には口が回るのね。私が言うことではないけれど、無理をしたら自分の首を締めるわよ?」

ニタリ、と笑う動作に合わせて、二つ結びにした、色素の薄い髪が揺れた。

古風なローブ。前髪からちらりと覗くのは、額についた半月の形をしたマゼンタ色のソウルジェム。そして、燃え盛っている火の短剣。

早島を奪い合った縄張り争いの相手——東ミズハがそこにいた。

……何故こんなところにいる。

あのミズハだぞ……? あんなに執着していた早島から離れる理由はないじゃないか。

それに、追跡したのだとしても、船花ちゃんのように「ピーピング」を使ったならともかく、どうやってこちらの居場所を探り当てたんだ?

考えれば考えるほど、不可解に思えてならない。

……まあ、悩んでいる暇などない。今はこゆりを優先しないと。

「……何だかよく分からないけど、生憎お前に構っている暇は私にはない。グリーンフシードはあげるから、さっさと何処かにいつてくれないう?」

私は予備のグリーンフシードを差し出した。

……悔しいが、ここは向こうに引いてもらうしかない。私とミズハでは、どうしてもあちらが有利なのだから。

しかしミズハは何を考えたのか笑みを溢し、

「……色梨こゆりのことを助けようとしているのね。でも結界には向かわなくて良いわ。彼女は結構酷い怪我を負うけど、必ずこつちに戻ってくるもの」

「!?」

思わず、グリーンフシードを落としそうになる。

彼女がこゆりのことを知っていることが、私には何故かとても

ショックだった。

「……な、何を言つて……？」

「こゆりは大丈夫だつて言つてんの。……リーダーが言うには、こゆりは全ての時間軸においてこのコートの魔女に打ち勝つの」

リーダー……？

まさか……こいつ、何処かのグループと繋がっているのか？

そのグループの誰かの魔法で、こゆりのことなんかを知つたのだからか……？

でも、……時間軸ということから察するに、未来予知という類でもなさそう。

恐らく因果を手繰り寄せる……いや、因果を把握する能力のものだろう。

そんな相手がいつの間にもミズハのバックにいるとは、信じられない。対応を誤れば、もしかしたら命もないかもしれない。

「ここで大人しく待つて。お願い」

「……」

ミズハの頼みに、私は少し熟考する。そして、……二分後、私は答えを出した。

「分かつた。大人しく待つよ」

「あれ？意外とあっさりね」

「……このタイミングで来たということは、何かしらの狙いがあることは明白よ。」

そして、お前はわざわざリーダーの存在を言った。要は魔女によって怪我をしたこゆりを助けてやるから、自分が今所属しているだろうグループの元にまで来いってことでしょ？

だから、……お前が言っているのは、嘘でもなんでもない。ならば、私が魔女の元にまでいって無茶をする必要はないわ」

白状に思われるかもしれないが、仕方がない。ミズハの求めに応じなければ、私は多分彼女に殺される。

……ミズハはクラスメイトの自殺のせいか、そういう奴になってしまった。悲しいくらい、性格が変わってしまったんだ。

まあ、……本音の部分で言えば、色々事情を知りたいからっていうのもあるけど。

「さっすが、それだけで分かっちゃうんだね」

ミズハは感心したように頷いた。それは、以前と何も変わらぬ仕事だった。

「ごめんね。少し試せてリーダーにテレパシーで言われててさ」

「それって、今言われたことなの？それとも事前に言われたことなの？」

「今言われたことよ」

「ふーん……」

要するに、こちらを監視中ということ？

厄介ね。隙がないじゃない。

「テレパシーが届くなら、そのリーダーとやらは近い場所にいるんだね」

「ええ。牛草美術館の屋上で待ってる」

そこって、魔法少女の身体能力で移動すれば十分ぐらいの場所じゃなかったつけ。

思ったよりも近くにいたんだな——そう思った次の瞬間だった。

……魔女の魔力が消えたのだ。そして同時に、こゆりの魔力の波が現れる。

「……こゆり!!」

私はすぐさま反応し、小屋の扉のドアノブに躊躇なく手をかけた。

こゆりが消耗しているのなら、扉を接着していたであろうものはなくなっているはずだ。

案の定扉はすんなり開かれる。

私は中にいるこゆりを見た瞬間、絶句してしまった。

その体は、うつ伏せになって倒れていた。完全に気絶しているのか、ぴくりとも動かない。まあ……意識があつたとしても、体は動かさないだろう。

何しろ、両腕が二つともない。

断面部からかなりの血を出血しており、魔法少女でなければ間違い

なく即死しているレベルの怪我を彼女は負っていた。

この状態になるまで戦い、最終的に魔女に勝利したことが信じられない。

お前は一体、どこまで妹のために頑張ったっていうんだ。ここまですることないでしょうに……。

「……こりやあまた酷いわね」

小屋に入り込んだミズハはこゆりに近づくと、汚れで濁りきりそうになっている彼女のソウルジェムを、自身のグリーンフシードで浄化する。

次にローブのポケットから包帯を取り出し、肩の断面部に巻いて止血をした。

それは手早く、慣れているような手つきで、動揺もなかった。

……それが、やけに変に感じた。何だかミズハが無機質に見えたのだ。

私はミズハが応急処置している間に、魔法で作った和紙をばつと空中にばら撒き、空気へと溶かす。

一般人避けの結界だ。もし私達がいなかった時にここが見つかったらとんでもない騒ぎになるので、事前に隠しておこうと思ったのだ。

「さて、行こっか」

「……待って」

ミズハがこゆりを抱え、行こうとするのを止める。

不思議がるミズハを置いて、私はこゆりの妹のところまで歩み寄り、その胸元に魔力を込めた和紙を置いた。

……死体の腐敗を防ぐ、防腐剤みたいなもんだ。これでこれ以上無残な姿にならずに済む。

「優しいのね」

その紙の意味を悟ったのか、ミズハは薄く笑った。私はそんなミズハを見ながら言った。

「……つるやん」



牛木草美術館——寝巢扉都市圏の美術品を蒐集し、展示している美術館である。

元々、寝巢扉市一帯は芸術などが盛んな地域で、そのベットタウンである牛木草も影響を受けたことで、芸術家が多い。

その芸術家達によって創設されたのが、この牛木草美術館というわけだ。

しかし、今は時間が時間なので、閉館しているようだった。

もう空はすっかり暗く、町には街灯や建物の電気の明かりが浮かび上がっている。

「……あの子が、阿岡入理乃？どう見ても普通の子にしか見えないですが……、こんな弱っちそうな子、本当に大丈夫なんすか？」

「相手を過度に舐めちゃいけないっていつも言っているでしょ？あの子の天才性も見抜けないなんて、我が弟子ながら情けがない。もっと私の後継者の自覚を持ちなさいな」

「うう……、そこまで言わなくていいじゃないですか、師範。厳しすぎますよ」

美術館の屋上。そこに、二つのシルエットがあった。

一つは小柄な少女のものだった。義眼なのか左目だけに輝きがなく、口からはギザ歯が覗いている。着ている魔法少女の衣装は、黒と白色を基調としたもので、大きい帽子が目立ち、クセの強い柴染の髪を下ろしている。

もう一方は、大学生ぐらいの女性。こちらは左腕のみの隻腕で、その手には望遠鏡があった。容姿は美しい。クラシカルなドレスに身を包んでおり、長く絹のように美しい黒髪と相待って、ギリシャ神話のセレーネを思わせた。

会話から考えるに二人は師弟関係らしく、小柄な少女の方が弟子、女性の方が師匠らしい。

仲は良いようで、口喧嘩をしながらも信頼関係が読み取れた。

……にしても、こゆりを見てもまったく驚いた様子がない。それもこれも、魔法で前もって知っていたからだろうか。

……こいつらが、ミズハと繋がっているだろうグループなのか……？

魔力の強さから、それぞれがかなりの強者だと分かる。間違いなく、私一人では勝てない。

しかし、こんなに強いなら、情報の一つや二つ入ってきてても良さそうなのだが、今まで隠れていたのだろうか。

……一体、何者なんだ？

「さて、……初めまして、阿岡入理乃。私は夜見鳴子。こっちは弟子の黒曜こくよとむ富夢。あるグループのリーダーを務めているの。よろしく」

女性が一步前に踏み出て、自己紹介をする。それに、私は何を言っているんだ、と思った。

だって、夜見鳴子は十年前に自殺している。

というか、彼女の死亡時の年齢は五十二才だぞ。仮に生きていたとしても年齢が一致しないではないか。

……これは、明らかに偽名だろう。だが、何のために名乗っている。ふざけているわけじゃなさそうだし、本名を隠すためか……？

「……色々質問したいけど、まずはこゆりを治してほしい……。彼女は今危険な状態だから……」

「分かった。富夢。こゆりの治療をしてやって」
「りよっかいなり、あ……」

途中で噛んだのか、了承の言葉が不自然な発音になって、小柄な少女——富夢が少し赤面する。

「ふふ……。噛んだ……」

面白がったのか、ミズハは笑うのを必死に我慢していた。……こういうところは、ある意味船花ちゃんと良く似ている。

富夢はちよつとムツとしたらしく、師範の方を向いて口を尖らせ

た。

「師範、この子意地悪ですぞ？何か言ってやってくださいよ」

「リーダー、少し笑っただけで怒ってきました。彼女、寛容さがたりてないですよね？」

「はいはい、喧嘩は後にしな。それより早くこゆりを」

「むう、……分かりました。師範」

渋々と頷くと、ミズハが地面に寝かせたこゆりの側に、富夢はしやがみ込んだ。

そして、師範から渡された望遠鏡に魔力を込め始める。

「……お願いします。力を貸してください」

白黒の少女は祈るように呟く。

寒々しく、まるで永遠に燃え盛る憎しみのような魔力が、望遠鏡から一気に発せられた。

ミズハと女性はそれを受けても、どうでもないように平然としている。

しかし、……私は恐怖で動くことができない。

だって、この魔力反応は……、まるで――

「安心して。ただの治療だから。」

富夢は、情報から能力を分析し、それを自分の能力として一時的に使用できるといふ固有魔法を持っている。その魔法を利用して、この望遠鏡から最も治療能力が高い魔法少女の情報を探し出し、こゆりを治そうとしているの」

鳴子が私に、落ち着いた声音で説明する。

私はこゆりの方を見た。……確かに富夢の魔法によって、腕が半分にまで再生し始めている。

どうやら言っていることは本当のようだ。

「……だからって、……こんな不気味なもの使ってるのか……」

強気でいこうとしたのに、口調がいつものように弱々しくなってしまう。

私はこの人達が、怖くて仕方がなくなっていた。得体が知れないものは、いつだって私の恐怖の対象なのだ。

「……言いたことは分かる。私達は危険よね」

自嘲気味に鳴子は笑う。諦めきつたような、そんな笑み。

「でも、私達は真実を知ってしまった。……あの真実を知って……、魔法少女の存在に疑問を抱いて、狂ってしまったのよ」

「真実……?」

問い返すと鳴子は自分の左腕を見た。自分の、ただ一つの手を。

「そう。この『私達の時間軸の真実』。私はその真実を伝えて、ミズハのように私達の仲間になりたいと思つて貴女を呼んだの。正確に言えば、こゆりやサチを見捨てて、私が率いるグループで活動してほし
いってことね」

「……は?」

夜風が、やけに冷たく感じられた。それは、私の体からも血の気が引いたせいからかもしれない。

……裏切られる苦しみは、誰よりも私はわかっているつもりだ。私は仲間を裏切るといふ行為を軽蔑している。

それをやれ、とこの女は言うのだ。

……冗談じゃなかった。

怒りのスイツチがオンになり、私は控えめながらも吠えた。

「……そ、そんなこと出来るわけがない……!!私は船花サチの相方で、親友なの……。あの子に寂しい思いをさせるなんて真似、私には出来ない。だいたい……何で船花ちゃんやこゆりも誘わないの?……何で私だけなの?」

「サチはどうあつても私達の『思想』は受け入れられないから。こゆりは『実験』のために野放しにしておく必要があるから。そして入理乃を誘うのは、その能力が欲しいからよ」

実験だの何だの、碌でもないような言葉をぽんぽんと鳴子は言った。

……不気味だった。理性を閉じ込める箱が壊れて、自我が剥き出しになって飛び出ているように思われた。

「私には貴女が必要な。真実を見て、この『夜見鳴子』の我がままに付き合つて欲しい」

すつと、手が差し出された。私は勿論、その手を取らなかった。

「……お断りします。大切なものを自ら捨てるなんて……、船花ちゃんを捨てるのか……、私には無理……」

「……本当にそうなの？」

その時、突然ミズハが反論してきて、憂いを帯びた瞳で私を見てきた。

富夢の、おい、という制止させようとする声を無視してでも、ミズハは話す。

「大切だとか何だつて言ってるけど、そんなものは半分くらい嘘っぱちよね？」

貴女は愛は諦めてるくせに、せめて何でもいいから自分を見て欲しいと思ってる。そのために、サチちゃんを利用してるだけ。現に相方を理解しようともせず、損得勘亭だけで動いているという勝手な考えを無理やり押し付け、傲慢にも見下し、自分の思いのままにしようとしている。……あなたにとって、サチちゃんはただの愛玩人形なわけ。

ついでに言うと、こゆりも同じよね？……こゆりは、私の代わり。呪いで縛ったのは、自分の元から逃げさせないため。そしてもし自分の手に余るようなら捨てるため。

私の存在だって、願いで捨てた友達の代わりでしょ。一人ぼっちで、誰かに甘えたくてしようがなかったから、私と仲良くなった。

……船花ちゃんがたとえ死んでも、貴女は必ず代わりを用意する。貴方にとって私達など、替がきく消耗品なのよ」

「……それは——」

私は何も答えられなかった。私は私の考えがもう分からなくなっていたのだ。

だから……、ミズハの言ったことが正しいかすら、私には分からなかった。しかし動揺していることだけは確かで、足元がガクガクと震えていた。

「そんなこと認めたくなかったから……何より愛を諦めるために、貴女は無意識にずっと自分を騙してきたのよね？……けど、今は少し

気持ちに変化が生まれているんでしょ？サチちゃんの思いを知ったことで、長いこと信じていた。人間は損得鑑定だけで動くという考えがぐらついてるんでしょ？

なら、自覚してよ。この私は、所詮誰かの代わりだったんだって」
……自覚？

……確かに私は、サチちゃんの覗き見に気が付き、逆に彼女らの動向を確認したけど……、それで何を自覚しなきゃいけないんだ？訳が分からない。

「わ、私はそう思ったことはないし。だいたい、私が自分を騙してるなんて嘘だあ……。私の考えが間違ってるはずないもの。私の考えはいつだって、誰よりも正しい——」

「流石にそれは思い上がりだよ、入理乃」

そこで、富夢が割り込んできた。

こゆりを完治させたのだろう。立ち上がると望遠鏡を手に、片方しか光が宿らない目を冷たいものにさせた。

「……この世に正解はない。貴女がいつだって正しいとは限らないんだよ。天才故にそんな思考回路なんでしょうけど、あまり他人を見下して、自分の方が優れているなんて思うわない方がいいぜ？」

私は口籠る。それは正しく正論で、私は完全に言い負かされていたのだ。

自分が恨めしくて仕方なかった。こういう時、弱気な性格を捨て去りたくなる。

「二人とも、あまりいじめてやるな。涙目になってるじゃない」

「しかしっすねえ、師範。私も止めるつもりでしたが、流石に何か一言言ってやらんと気が済まねえと思ってしまうて……。この子、性根が腐ってますぜ？分かせてあげるべきでっすよ、自分の傲慢さを」

「……そうだとしても、今そこを突くべきじゃない。ミスハもミスハだ。本来するべきじゃなかった役割を押し付けられたからといって、その感情をぶつけるな」

「……はいはい、すみませんでした。リーダー」

注意されると、ミスハと富夢は納得できていないように、それぞれ

頭を掻いたり、顔を伏せたりした。

夜見鳴子は富夢から望遠鏡を戻してもらおうと、

「ごめんなさいね。二人とも真実を知ってそんなに日がたってなくてまだ混乱状態なの。特にミズハはここ数日で知って仲間になったから、色々思うところもあるんだ」

「……」

もう……、頭が痛くなってくる。

……そこまでのことなの？その真実ってのは……。

「入理乃。私はこの望遠鏡で貴女の過去を覗き見たの。貴女の願いも知っている。……貴女のソウルジェムに込められた祈りは、友人との繋がりをなかったこと」にする、だよな？」

「……ええ」

勝手にみるなど思うながらも、私は勤めて平静を装う。

願いのことを聞かれたからなのか、ついそのきっかけが頭に思い浮かんだ。

……あれは一年前の出来事だった。

あの頃私は、毎日のようにある公園に出かけてはブランコに座り、周囲から受けた心の傷を癒していた。

そこは穴場で誰も使っておらず、私にとって居心地の良い場所だった。

……孤独が好きじゃなければ、一人になるとほっとできなかった。だって、誰にも傷つけられずに済むのだから。

しかし、その日は違った。私と同じ年の他校の少女——菊名夏音きくなかのんが先にブランコで遊んでいたのだ。

私は逃げることもできず、呆然として立っているしかなかった。

でも、夏音ちゃんはそのような私にも優しくしてくれて、一緒に話してくれた。

……それ以来、私は夏音ちゃんと仲良くなった。

夏音ちゃんは私とは正反対の子だった。明るく真面目で面白く、それでいて皆に愛されるような女の子だった。

彼女は私の憧れそのもので——だから、私は彼女のようになりた

かった。

……けれど、私がどんなに努力をしても、周囲から愛は得られない。私がどんなに頑張っても、この陰気な性格は変えられない。

私はどんなに夏音ちゃんといえるのが辛くなっていた。その立場の差を認識する度、私は彼女に嫉妬をせずにはいられなかった。

それに……、私は夏音ちゃんが怖かった。

私と付き合ってるんだから、何かしらのメリットを求めているはずなのに、それが全然見えてこなかった。それどころか異常なくらい私に献身的で、あらゆることをそっちのけで私を優先し続けたのだ。

私は最早、菊名夏音という少女を信じれず、身勝手にも憎むようにさえなっていた。

そんな中で私はキュウベえと出会い、……思った。夏音ちゃんをこつちから捨ててしまおうって。

そして私は、夏音ちゃんと過ごした時間をなかったことにしてください”と願ったのだ。

その結果……、

「貴女は友達を——菊名夏音を存在ごと消してしまうことで、願いを叶えた。貴女は親友を殺してしまった。

……でも、貴女は後悔していると同時に、不思議に思っているのよね？この願いの叶い方はおかしいって。だって、共に過ごした時間を消したい”のであって、そのためにわざわざ”存在自体を消す”必要性がないもの」

「……、何が……、言いたいのか？」

「……その答えが、この世界の真実に直結しているってこと」

酷く驚き、私は目を見開いた。

……いくら考えても、どうして夏音ちゃんが消滅しているのかは不明で、思い返しても願いに不備などなかった。

やがてこれは、誰かによって歪められたものだ、という結論に至り、私はその答えを追い求め、必死になって”魔法”の研究に明け暮れていたのだ。

でも、夏音ちゃんが消えた原因なんて、見つからないと諦めてた。

だって確証も何もないのだから。

それが知れるなんて……、そんなの有り得ない。

「何も無理やりって訳じゃないのよ？ 真実を知らなくてもいいし、私のグループに入らなくて良い。その時はさっさと記憶を消すだけ。でも、そうすると真実への扉は永遠に閉ざされる。」

「どう？ 真実だけでも見ていかない？」

今度は手ではなく、望遠鏡が差し出された。

これを使えば、真実とやらが見えるということだろう。

私は、どうすれば良いか分からなくなった。私は、何を信じて良いかも分からなくなった。

夏音ちゃんのこととは、私を常に蝕む呪いでしかなかった。それが解決できるなら、死んでも良いと思えるほどだ。

しかし、真実を見れば何が起こるか分からない。これを見れば、多分引き返せない。

「私は——」



「色梨こゆり、起きるんだ」

誰かが、あたしの名前を読んだ。頭に響く、不思議な少年のような声だ。

「ん……」

ぼんやりとした意識を手繰り寄せながら、寝そべっていた体制から身を起す。

何回か瞬きを繰り返すと、ぼやけていた視界がクリアになっていき、今いる部屋を映した。

ここは何処かにある廃墟のロビーのようだった。

カウンターも、側にあるプラスチック製の椅子も、壁も、床も、すべての塗装のハゲかけていて、放置されたこと感じさせる。

そしてあたしはそんな部屋の一角にあるベンチの上にあった。

少し動くだけでギシツと音が響く。随分と老朽化してるみたいだ。

あたしの隣には、一匹の動物が座っていた。

白いビロードのような毛並み。三角の耳。四足歩行の可愛らしい、まるで女兒向けアニメに出てくるマスコットののような姿。

彼は――

「キュウベえ……?」

「やあ、久しぶりだね。こゆり」

白い動物は、無機質な昆虫を思わせる声で返事をする。

……何であたしの前にいるんだろう。しばらく、あたしから姿を消していたくせに。

それに、あたしは何でこんな場所にいるの?入理乃は何処……?さ

ゆりは……?あの多くの死体は……?

そもそも、あたし……、死んでなきやおかしいよね?

なのにどうして、体に痛みもないし、それどころか失ったはずの腕があるの?

これじゃあまるで……、化物みたいじゃない……。

「混乱しているようだね。そんなキミに、入理乃が手紙を残しておいたよだよ」

キュウベえは尻尾に何かを載せて器用に渡してくる。

それは、あたし当ての便箋だった。

開けてみると、二枚の和紙が入っていて、ぎつしりと綺麗な字で文章が書かれてあった。

「一応ボクも中を確認してみたけど、残念ながらキミ以外には見えない仕組みになってるようだ」

「貴女ねえ……」

「デリカシーないなあ……、こいつ。」

……とにかく、入理乃のことだ。この手紙にすべての疑問の答えが書かれてあるはずだ。

あたしは、早速それを読み始めた。

防衛機制

色梨こゆりへ

色々状況の説明する前に、まずは私がお場に居ないことを謝らせて下さい。

貴女は妹を失い、さぞショックを受けていることでしょう。

それを慰め支えてあげるべきなのに、私は自分の都合で貴女の側から離れることを選びました。

これは何も、一時的という意味ではありません。

突然ではありますが、私は貴女との関係をここで断ち切り——すべてを白紙といたそうと思っただけです。

もちろん、貴女一人だけでなく、船花ちゃんとも縁を切ろうと思っています。

理由はいくつかありますが、その一つは貴女達が、私達にとって都合が悪い存在になったことです。

私は昔から、愛を得ることが出来ませんでした。

どんなに努力して良い成績をとっても、どんなに頑張つて結果を残したとしても、親は私を無視しました。

周りは私を疎み、妬み、見下し、いじめました。そうせずとも、薄っぺらい期待と乾いた称賛しかくれません。

誰も私を見てくれませんでした。

やがて、私は愛をあきらめ、私は決して愛される存在ではないのだと自分を納得させました。そうしなければ、自分を保つていられなかったんです。

そんな私に最初に愛を与えてくれたのは、菊名夏音という少女でした。

彼女は私と仲良くしてくれる、ただ一人の友達でした。今でも船花ちゃんと同じくらい大切な親友だと思っています。

しかし、私は彼女が怖くなった。

……本当に私を思ってくれているのか、分からなかったんです。

だから、彼女にいつか裏切られるかもしれないと思うと、耐えられ

ませんでした。

私はキュウベえと契約を結び、親友との縁を無かったことにしました。そして私は魔法少女となり、とある魔女狩りの時に船花ちゃんとの出会い、再び別の親友を得ました。

私は夏音ちゃんを裏切り、船花ちゃんをその代わりとしたのです。

……ミズハと仲良くなったのも、同じように親の代わりが欲しかったからです。私はずっと年上の、自分が甘えても良い対象を探していて、それがたまたまミズハと条件が合致していたから、仲良くしていました。まあ、結局のところ裏切られました。

色梨こゆり。貴女も例外ではありません。貴女はミズハの代わりです。

実のところ貴女は、口調も年もミズハと同じなのです。おまけにちよつと面影が似ていて、まさにミズハの代わりとしては最適でした。

利用してやろうというのは、ほぼ建前のようなもの。……実際は、仲良くしていこうと心のどこかで思っていました。

呪いの効力が中途半端に強くないのも、特訓をつけていたのも、そのせいです。

また私は、自分が威張り散らせる相手も欲しいと思っていました。立場の弱い相手ならば、弱気な私でも好きにできる。正直に言えば、大切に思いたかったから、裏切られないようにしたんです。

しかし、貴女達に対する気持ち、昨日で変わってしまいました。

貴女達は気づいていないと思っただけですが、私はサチちゃんが覗き見をしていることには気づいていました。

それは船花ちゃんが、ピーピングという望遠鏡型の魔法道具を無断で使い、私を探し始めたからです。私は自分の魔法道具には必ず、自分以外の誰かが使った時、そのことを知る仕掛けを組み込んでいます。

それですぐに、ああ、覗き見するつもりなんだなあって分かりました。

あの時の怒りは、自分でも言うのは何ですけど、とてつもないもの

でした。思わず、地団駄を踏んでしまおうぐらいにはね。

その後、私は怪しまれぬために、いつもと同じように貴女を特訓させ、それが終わると姿を隠し、貴女と船花ちゃんのカフェでの会話を盗み聞きしました。

……その会話は私にとって衝撃的でした。

船花ちゃんがあんなことを思っているなんて、一度も考えたことがなかったから。

自分の考えが一変に否定されて……、船花ちゃんの思いに触れて、ごまかしていた自分が揺らぎました。

何を信じ、何をしたかったのかも分からなくなった。

そういう意味では、貴女達は憎たらしくてしょうがありませんね。

私は貴女達が怖くなりました。いえ、正確にいうと、貴女達から愛をもらうのが怖くなったというべきでしょう。

私は前述したとおり、今まで愛されてきませんでした。

愛を信用できず、私は私が思い描く、側にいて欲しい人物像を周りに押しつけることしかできなかった。そうすることでしか、安心できないんです。

……だから、今更、本気で愛されたって困ります。愛を得てしまえば、愛が壊れるのに耐えられない。私は愛を失う恐怖を味わいたくありません。

ならば、いつそのこと私は自分から愛を手放す。これ以上貴女達のそばに居ると、矛盾で押しつぶされてしまう。

貴女は多分、よりによって何でこのタイミングなのだと思問に思うでしょうが、残念ながらそれはこの手紙では言えません。

ただ一言言えるのは、私は魔法少女というものに絶望してしまっただけです。

願いで世界を自分勝手に改竄して、大きな力を持って調子に乗って、最終的には厄災となる。そんな魔法少女という存在に、私はあることが原因で、嫌悪感を覚えてしまいました。

私はこの憎悪に、従うことにしたんです。

……探したところで、無駄です。私は誰にも見つけられない。誰に

も見られない。

この手紙は、船花ちゃんにも渡してあります。彼女も貴女の事情は把握しているでしょう。

貴女を運んできた、その牛木草のホテルの廃墟にキュウベえを誘導しておいたので、三人で情報共有も今後のためにおいた方が良いでしょう。

それから、貴女の怪我については心配しないで下さい。知り合いに頼んで治してもらいましたから。

廃墟の小屋にあった死体も、その知り合いに頼んで然るべきところに置いておきました。後は警察が上手くやってくれるでしょう。

……ただ、貴女の妹の死体だけは別です。貴女の妹は、貴女と一緒にこの牛木草のホテルの廃墟に運んでおきました。

貴女が手紙を読み終えると同時に、彼女は姿を現すようになっていきます。

貴女の妹をどうするかは、貴女に任せます。打ち捨てるなり、警察に渡すなり、秘密にするなり、貴女が決めてください。

ああ、そうそう。貴女はもう私の手駒ではないので、呪いは解除しておきました。これで貴女は自由です。

私にはこれくらいしかできません。
……本当にごめんなさい。

さようなら。



「何よ……、これ……!!」

あたしは手紙を持ったまま、啞然としていた。

開いた口が塞がらないとはまさにこのことだろう。

手紙は意味不明かつ、最初から最後まで、自分のことばかりしか書かれていなかった。

色々処理はしてくれているようだが、すべて自分勝手な裁量の元に行なっている。

サチに何も言わず、無断であたしに呪いをかけたのとまったく同じだ。

阿岡入理乃のその思い、その行動は、あまりにも独善的過ぎた。こつちのことを、まるで見てないつてのが手紙からよく伝わってくる。

あたし達は、入理乃にとってその程度の存在だったのか。

だから、ガラクタみたいに捨てられた。積み上げてきた絆の全部を、すべて無駄にしやがりやがった。

そこにどれだけ思いが込められているのか、分かったうえで……。

一番、腹が立つのが、今この場においてくれないことだよ。

あたし達が怖くなつた？魔法少女に絶望した？

何があつたか知らないけど、そんなことよりも、あたしを支えてよ。

……あたし、双子の妹がいなくなっちゃったんだよ？

自分の半身が裂かれたみたいない気持ちなの。心にぽっかり穴が開いて、寂しいの。

入理乃。貴女がいてくれたら、それは少しマシになってたよ。

なのに、どうして見捨てるの？あたしを一人ぼっちにしないでよ

……!!

ふぎけるな、ふぎけるな、ふぎけるな……!!あたしをコケにしやがりやがってえ……!!

「あたしは何のために……!!」

……くそ。何のためにあんなやつなんか信じようと思つたんだろ
う……!!

こんなことになるなら、信じるんじゃなかった!!

もう、こうなつたら、こつちだつて知らないわよ!!どこでも勝手にやつてろ!!

「……一体何が書かれていたんだい？」

「……ごめん、ちよつと今は話したくない」

あたしはキュウベえから顔を背け、紙をぐしゃぐしゃに破り捨てた。

こんなもの、見たくもなんともない。

「ところで、こゆり。あそこに急に現れた死体は、キミの妹じゃないのかい？」

そう言つてキュウベえが前足で指したのは、あたしの前方。向かい側に設置されたベンチの上だった。

そこにはさつきまでいなかった、さゆりの姿があった。

目は硬く閉じられ、服は新品同然のものになっている。しかし、血が止まっているとはいえ、その凄惨さは何も変わらない。誰がどう見ても、一発で死んだと分かる。

……こうして見ていると、胸が痛い。本当にさゆりは動かないんだなつて再確認させられて、喪失感が大きくなっていく。

あたしは俯くと、一雫涙を流した。椅子から立ち上がつてさゆりに歩み寄ると、ぎゅつと抱きしめる。

「……状況がよく分からないが、とりあえずその死体をどうにかしないと不味いね。警察にでも届けるかい？」

あたしの悲しみが分からないのか、気遣う様子すらなくキュウベえは話しかけてくる。

……あたしはそんなキュウベえが、冷たく思えた。

獣の姿だけど、人語を喋るから、何となく人間の相手をしている気分だった。しかし、今は違う。

まるで、無機質な機械と相對しているような気持ちだった。

「……警察には届けない。お母さんとお父さんにさゆりを届ける。そして全部を話す」

せめて、両親と顔を合わせて真実を伝えたい。もちろん、魔女や魔法少女のことも言う。

そうじゃなきや、さゆりが浮かばれないよ。

……それにきつと、あたしの言うことを彼らは信じてくれるはず。

あたしは、彼らがさゆりのことを受け入れてくれるって信じている。だって、掛け替えの無いあたしの家族なんだもの。

「それはお勧めしないよ、こゆり。キミが思っている以上に人間は強くない。ましてや——」

あたしは最後までキュウベえが話し終わる前に、さゆりを抱き抱えて外に飛び出した。

その内容は最後まで予想がついていたから、聞きたくなかったのだ。

そして、それを否定できる自信もなかった。そうなったら、自分の中で支えていたものがぼつきり折れそうで怖かった。

あたしは、あたしが信じたいことを信じ続けたかったのだ。

……まあ、今思えば、それはただ入理乃に捨てられた寂しさを紛らわせたかっただけだったのかもしれないが。



人から隠れながら、塀の上を走り、時には建物から建物へ飛び移る。

あたしは道なき道を移動して家を目指していた。

悲しいことに、入理乃に特訓された影響である程度の牛木草のルートは叩き込まれていたもので、そこまで迷わずに済んでいる。

ちよつと複雑な気分だ。

時間は門限ギリギリの七時台で、（うちは割と放任主義なので、ある程度の自由は効くのだ）携帯にも連絡は届いていない。

これがもう少し遅ければ、最悪警察が動いていたかもしれないから、非常に運が良かったと言えるだろう。

しかし、サチからはまだ電話は来ていない。……まだ手紙に気付い

ていないのだろうか？

家の前に到着すると、あたしは周りを確認した後、素早く扉から二階の屋根へ飛び移り、自室の窓を開ける。

玄関で親に騒がれたら、近所の人が寄ってくるかもしれない思ってたからだ。こっちの方が、さゆりの死体が周りで見られる機会がぐつと下がる。

意外と物音はせず、侵入は成功した。あたしは、まだ日常の香りが残った自分の部屋を見渡す。

二つ並んだ勉強机。二段ベット。大きな本棚。

どれもがお揃いのあたし達の家具。あたし達双子が共有していた家具。それを使っている妹の姿が、目に浮かぶ。

しかし、この部屋のもう一人の主は、ここを歩き回ることはない。永遠にその機会はないのだ。

部屋を出て、あたしは重い足取りで階段を降りていく。

一階からは、皿洗いをしているのか水が流れる音と、バラエティー番組のテレビの音、そしてお父さんとお母さんの会話が聞こえてくる。

よく聞き取れなかったが、まあよくある話のようだ。

学費はどうするのか、給料はいつ上がるのか、家賃はどうするのか。主にお母さんが意見を提案しながら、相談し合っている。

しかし、すべてが異質に聞こえる。音が、日常のものと感じられない。

「にしても、さゆりの奴、将来どうするつもりなのかしらねえ？」

もう少しで階段を降りきるだろうという直前で、足が止まった。

さゆりの話題が出たせいだった。

「もうすぐ冬よ？二年生になってもこの調子じゃあ、やばいわよ」

お母さんが困ったように言った。

就職への方向性が決まっているあたしに対して、さゆりは未だそれ

がなかった。

一応、高校への進学は決めていたが、理由も皆通っているからという漠然としたもの。むしろ、勉強嫌いなためか行きたくなさそうであったりするようにしていた。

ようは、やる気がなかったのである。

あいつはあたし以上にやるべきことはきっちりこなしたが、なんせ飽きっぽいためか、努力しようという熱意はなく、特定のものにのみ入り込めないタイプだった。

お母さんはそれを心配しているのだろう。

「ま、案外大丈夫じゃないのか？」

お父さんはお母さんとは反対に、能天気だ。彼は意外と、のんびり屋さんなのである。

そしてさゆりも、確実に父親似だったので、色々適当だった。

「そんな悠長な。貴女すっかり考えてるの？あの子のこと」

「考えてるさ。それにいつてたぞ、あいつ。夢はできたって」

「夢？」

お母さんは嘘だろと言わんばかりに聞く。もし目の前に彼女がいたら、恐らく首を傾げているに違いない。

「頑張っている誰かを応援したいってな。……多分こゆりの影響だろうな」

あたしの……？

思わず、ぴくりと反応してしまう。その会話にいつの間にか、あたしは聞き入っていた。

「あいつはさゆりとは正反対だからな。案外真面目だし、のめり込みやすい分一直線で、努力家だ。そんな奴を支えてあげたくなるのは、当然の感情じゃないのか？」

「そうなのかしら？私はそうは思わないわ」

「と……？」

「貴女、気付いてないかもしれないけど、さゆりはこゆりにコンプレックス持っているわよ？自分ほこゆりと違って中途半端だ、なんか打ち込めるものもないし、全部つまらないって昔小学生のころ言ってた

の。だから、さゆりを支えてあげたいとは、思えないんじゃないかしら」

妹の顔を覗き込む。

貴女がそんなこと思ってたなんて、知らなかったよ。あたしの方こそ、貴女が羨ましかつたのに。

貴女は社交的で、外交的。明るくて、人に好かれて、悩みなんかあたし以外のことでは何もなさそうだったじゃない。あたしは、貴女を見るたびに落ち込んでいたのよ……？

「けど、それは昔の話だろ？」

「まあ、そりゃあそうだけど」

お父さんは、少し明るい口調で言った。

「きつと、誰かを応援したいって言うってことは、とつくにさゆりはそれを乗り越えているんだよ。あいつも強くなったのさ」

……弱かった心の成長、か。あたしよりも、随分と先をいていたんだね、さゆりは。

やっぱり、お姉ちゃんより凄いな。その歩幅に、追いつけそうにないや。

「信じてやろうぜ？だって、これから何だから、さゆりも」
これから。

その言葉に、ぎゅつとさゆりを抱える手に力が入る。
だって、さゆりの夢はもう途絶えてる。さゆりは死んでしまったから。

……本当に、どうして貴女はこんな時に死んじゃったの？

お父さんの期待を無駄にして、お母さんの心配も報われなくしてさ。

酷すぎるよ、さゆり。

真実を話さなければ、という思いが一層強くなる。一瞬、隠しておこうとも思ってたけど、そんなこと出来ない。

あたしはこの悲しみを、二人とも分かち合いたい。

「……お母さん、お父さん」

あたしはリビングに行くと、両親に呼びかけた。

二人は、ほぼまったく同じと言っていいタイミングであたしの方を見て——瞬間、バリン、という音が響いた。

予想通り、台所で皿洗いをしていたお母さんが、持っていたカップを床に落として割ってしまったのだ。

テレビの前のソファアに座っていたお父さんの目は、限界まで見開かれていた。本当に、面白いくらいに。

二人とも、あたしの腕の中にいるさゆりを見て黙っていた。

「……こゆり。どういうことだ、これは……」

不自然に強張った表情でお父さんが戸惑っている。

お母さんはさゆりの状態が酷かったからか、呆然としていた。

あたしは気まずさから、数分黙る。そして、苦しい口を無理やりこじ開けて答えた。

「……さゆりは……、魔女っていう化け物に殺されたの」

両親は、再び沈黙する。

シンクを叩きつける水の音と、不釣り合いなくらい明るいテレビの音が強調され、より空気がずしりとした質量を持った。

「何だそれは。ふざけてるのか?」

やがて、お父さんが尋ねる。

それは信じられないくらい、腹の底から絞り出された怒りの声。温和な彼が、そんな声を出したなんて思いたくない。

「ふざけてないよ。真剣に言っている。」

……あのね。この世界には、人を殺す魔女っていう化け物がいるの。

それがさゆりを殺した。

あ、あたしも最近までその存在は知らなかったけど、キュウベえが教えてくれたのよ。あ、キュウベえってのは白くて小さな動物なの。それで、なんでも願いを叶えてやるから魔女を倒す魔法少女になれって言われて——」

あたしは話しながら、なんてしつちやかめっちゃかな説明だろうと思っただけ。

分かりづらいうえに、重要なことが伝わっていない気がする。頭の

中で何度も何度も説明の練習をしたのに、完全に緊張で記憶が吹き飛んでいる。

しかし、あたしは一生懸命言葉を紡いだ。なんとか、分かって欲しかったから。

けど、お父さんは……ただただ、あたしを睨み付けていた。

「おい……。何だその安っぽい誤魔化しは？」

「ご、誤魔化し……？」

あたしはたじろぎながら、問いかける。

「だって、そんな非現実的なこと、あり得るわけないだろ……。どう考えたって、お前が本当のことを誤魔化しているとしたか思えねえんだよ。そうなんじゃないのか!? ああ!？」

どんつと、お父さんは目の前のテーブルに拳を叩きつける。

あたしはびくつと肩を跳ねさせた。怖気付いて、声も上手く出せない。

「魔女？ 化け物？ 何だそれは？ 気がおかしくなったんじゃないのか？」

本当のことを話してくれよ。どうしてさゆりが死んでいる。何でこゆりが、死んださゆりを抱えている。

……もしかしてお前、殺したんじゃないんだろうな？ そのことを認めたくなくて、変なことばかり喋ってるんじゃないよな？ そうだよ言ってくれよ。俺は何を信じれば良いんだよ……」

お父さんは頭を抱えた。

すっかり混乱し、動揺している様子だった。

確かに魔女なんてのを知らない人からしてみれば、こんな話は荒唐無稽。

そりゃあ、お父さんが激怒するのも当たり前だ。

……それでも、あたしは信じてくれると思ってた。信頼し合ってるから、こつちの気持ちを込めて伝えれば、きっと思いは届くんだと思ってた。

けど、それはあまりにも甘えた発想だったんだ。

……本当は言うにしても、覚悟してなきやいけなかったんだ。

「あ、あたし、本当にあった話しをしているの。嘘ついてなんかない

の。魔女はいて、そいつがさゆりを殺した!!

と、とにかく、あたしのことを信じて欲しい。あたしの話に少しでも良いから耳を傾けて!!」

「そんなアニメみたいな話をか？冗談じゃない」

あたしは訴えるが、父は首を振るだけだった。

本気であたしの頭がおかしくなっていると思いついて入らなうか。

なんて、冷たい目をしているらう。……この人は、こんな感情を出せたのか。

「……もう一度言う。魔女とかのことは言わず、真実を話せ。妄想喋ってないで、本当のことを誤魔化さないでくれ。俺、さつきから何が何だか分からないんだよ……」

「あたしは妄想なんて言っていない……」

駄目だ。いくら言っても、聞く耳を持ってくれない。

……しようがない。こうなったら――

「分かったわよ。そこまで言うんなら、証拠を見せるわ……」

「それは、どういうことだ？」

あたしは訝しがる父への返答として、魔法少女に変身してみせた。

そして、側に液体金属を浮かせ、剣や盾、矛などの色々な形に変形させる。

お父さんとお母さんが、驚きの声を上げた。

……これで、分かった筈だ。あたしが話しているのが真実だって。

「……これが魔法だよ。あたしは――」

「……アンタ、本当にこゆりなの？」

「は……？」

今度は、その発言に息を飲む。

お母さんの顔に、表情がなかったのだ。まるでのっぺらぼうみたい……。

……口元が、情けなく上がってしまう。だって、お母さんがあたしに変な目を向けるんだもん。おかしくなっちゃうよ……。

「な、何言ってるの？あたしは色梨こゆり……。貴女達の娘よ？何で

そんなこと言うの……?」

「……私達の娘は、人間よ。こんな化け物みたいな得体の知れない力を操るわけがない……」

……化け物?あたしが?

まさかお母さん、この魔法少女の力が受け入れられないっていうの?

どうして?あたしは、何もしないよ?

だから、やめて……。あたしをそんな不気味そうに見ないで。怖がらないでよ……。

「お前の言っていたことは、正しかったのか?それなら、本当にさゆりは化け物に殺されて、こゆりはこんな訳の分からない力を手に入れたってのか?理解できない……。こんなことが現実にあつて良いのか?俺の娘達がどうして……。」

ハハ……。俺は夢の中にいるのか?お前、本当にこゆりなのか?妻の言う通り、偽物なんだろう?」

お父さんもぶつぶつ呟いた後、一頻り笑って、お母さんと同じ顔になった。

……その表情は、あたしを拒絶しているって、言わなくても分かる。

偽物、偽物、偽物……。

両親は狂ったように繰り返す。

あたしも、訳が分かんなくなっていく。偽物という言葉に脳が侵食されていく。

その内、あたしって一体何なんだ、と思った。

今ここにいるあたしは……。本当にあたしなのか?

「貴女がこゆりなわけがない!!さゆりがこんな風に死んでいるわけがない!!どうなっているのよお!!アンタ、娘達に何したの!?娘を返せえ!!」

お母さんの怒鳴り声。あたしの心をボロボロにしていく、言葉の刃。

あたしはその血を流す代わりに、失望の涙をこぼした。

「あたし、何もしてないし、偽物じゃないよ。どうしてあたしを受け入

れてくれないの……?」

お母さんに近づいていく。すると、ばん、と勢い良く何かが頭に当たった。

視界の端で、見慣れたテレビのリモコンが落ちた。痛みとともに、左側頭部から血が出る。

「妻に近づくな!! 貴様!!」

目を動かせば、リモコンを投げたであろう父がソファから身を乗り出していた。

怪我を治すと、ひっと小さい悲鳴を上げる。

あたしにも、冷たい感情が広がっていく。……きつと、あたしの顔は両親と同じになっているんだろうな。

「……お父さん、あたしがそんなに変に見えるの? 何で?」

「……当たり前だろ。死んでいるさゆりを抱えていて、変な力を操る。これが……、変じゃなきゃなんだ。認められねえよ、こんなもの……」

お父さんの、人を見ない目。現実を見ないようにする目。

あたしは、悟る。

さゆりの死体。あたしの力。

それが、常軌を逸し過ぎていて、理解の範疇を超えていて、怖いんだ。だから、受け入れたくないんだ、あたしのこと。

……この二人はあんな風に娘達を心配していたけど、実際のところ、ずっとずっと人を信じていない。

そう思い込んでいたのは、あたしだけだったんだ。あたしだけが、無意味に、根拠もなく、無邪気に信じていた。

いや、それでも……、あたしが魔法少女なんかにならなきゃ、両親はあたしを信じてくれていただろう。

信じきれなくなったのは、あたしが化け物になっちゃったから。あたしが人間じゃなくなっちゃったから。

あたしが道を踏み外したからだ……。

……ここには、もういられない。

このままあたしが側に居続けたら、お父さんとお母さんが本当の意味で狂ってしまう。

化け物は正体が分かれば、人間とは寄り添えないんだ。

「……どうやっても、信じてくれないんだね。受け入れてくれないんだね、この変わっちゃったあたしを」

「……え？」

両親が一瞬キョトンとするうちに、あたしはさゆりを床に寝かせた。

せめて、現実を見せつけてやろうと思って。

液体金属を消して元の姿に戻ると、あたしは感情の赴くままに怒鳴った。

「ありのままのあたしを信じてくれないなら、もう良いや。よく分かったよ、普通の人と魔法少女が分かり合うことなんて出来やしないうって。

……だったら、縁を切つてやるわよ。あたしはもう、アンタ達とは会わない!!

あたしは人間じゃないんだ!!化け物なんだ!!化け物は化け物らしく、好き勝手自由に生きていくわよ!!こんな家、出て行ってやる!!」
あたしは二階に駆け上がると、ボストンバックを物入れから出し、洋服や日用品など、思いつく限り詰めて行った。

そして、入りきらないまでにパンパンになったところで、二階の窓から外に飛び出した。

あたしは何なく、庭に着陸する。

魔法少女なら当然だ。こんな高低差くらい、なんてことない。まあ、普通の人間には無理だけど。

……ああ、そっか。よく考えれば、そうなのよね。

超人的な身体能力。魔女を殺す、魔法の力。

これが、化け物じゃなくて何だというのよ。お父さんとお母さんはやっぱり、正しい反応をしたんだ。

「キュウベえ、魔法少女って人間じゃないんだね。でも、それなら魔法少女って何なの？契約時に、あたしに何をしたの?」

庭の茂みから姿を見せた、白い獣の方を向く。さつきから、気配がしていたのだ。

「キミの肉体から魂を抜きとり、それをソウルジェムに——魔法の石として固形化させたのさ。つまり、キミを魔女と戦える状態にしたんだ。串刺しにされても、最悪肉体が消えても、本体が別であれば無事だろ？」

流石に、脆いままの人間に力をそのまま与えても、簡単にやられるだけだしね」

キュウベえは実に平坦な、抑揚のない口調でとんでもないことをペラペラと喋る。

あたしは、そこまで酷く驚きはしなかった。それは、魔法少女が化け物だって自覚したからかもしれない。

でも、魔法少女の正体を聞いて、また自分という存在が更に遠のいていった。

あたしはただの石ころ。そんなのが、果たして色梨こゆりと言えるのだろうか。

だって、化け物どころか、これじゃあまるで生きていないのと同じじゃないか。

ねえ、さゆり。

あたし、これから先どうすれば良いんだろう。どこに行けば良いんだろうね。

あたしの居場所である家族も壊れちゃったし、願いの結果手に入れたであろう入理乃との関係も消えちゃった。

そんなあたしの存在って何？あたしは本当に、あたしっていえるの？

「……」

俯いたその時、首にかけてた「お守り」が目なが映った。

それは、銀プレート状の、銀色のペンダントトップ。そこに刻まれていたのは、鳴子百合の模様。

確か、鳴子百合の花言葉は——あなたは偽れない。

こんな時に、思い出すなんてね。

さゆり、あの時に言ってたな。

あたしはどんなことがあっても、あたしだって。自分を自分じゃな

くしちやうのは駄目だつて。

「……あたしは、あたし……」

……そうね。

何事も、考え方次第なのかもしれないわね。

この石ころの姿になつても、このあたしの心は何も変えられていない。

つまりそれは、あたしが「色梨こゆり」そのものである証明なんだ。

俯いていた顔を上げる。

ちやんと、前を向いて歩いていかなくちやと思つたから。

あたしはキュウベエの、血のような瞳を射抜くように睨みつける。

段々と、猛烈なまでに怒りが湧いてくる。

……いつか絶対、復讐してやろう。

あたしは根にもつタイプなんだ。あたしを魔法少女にしたこの恨み、死ぬまで忘れやしないわよ。

「意外だね。ソウルジェムが濁つていけないだなんて。キミは、絶望していないのかい？」

キュウベエが首を傾げた。

彼は語る。

……多くの魔法少女が、ソウルジェムが魂という事実錯乱してきたのだと。

例えば、見滝原というところでは、新人の魔法少女がその事実を知ったことがきつかけで、破滅したという。

それくらい、受け入れ入れがたいものなのだ。

しかし、あたしはめげている様子を見せなかった。それが、キュウベエにとつては不思議なのだろう。

「……絶望はしてる。」

でも、打ちひしがれたままじゃ、さゆりに示しがつかない」

あたしはいくらそこに残酷な現実があつても、受け入れる。

お父さんやお母さんのように現実から目を逸らさず、生きて生きて生き抜く。

それがきつと、あたしに出来る唯一のことだから、
「あくまで希望は失っていないということか。キミはボクが思っているより、ずっと強い心の持ち主のようだね」
……そうなのだろうか。よく分からない。
けど、あたしは出来れば、強くありたい。誰に受け入れてもらえなくとも。
さゆりもそう、そう願っているはず。



私は椅子に座りながら、カップの中の紅茶を飲んだ。
暖かくて優しい味。鼻腔を穏やかな香りが通る。
でも、何でかな。

ちつとも美味しく感じない。以前ならば、そうじゃなかったのに……。

「あ、ちよつと良いかな？」

声の方を振り向くと、富夢がいつの間にか紅茶が入ったマグカップを持って、私の横にある椅子に座っていた。

彼女は驚いているこちらに気が付いていないのか、部屋の窓から暗くなった外を眺め、マイペースに紅茶を飲み始めている。

こうして見ると、いかにも普通の中学生って感じだ。

まあ、実際は高校生らしく、それ相応に魔法少女歴も四年という大ベテランだとは聞いたが。

実際、立ち居振る舞いにも隙がなく、その雰囲気はぶつきらぼうながらも、頭の良さを感じさせた。

しかし、それ故に解せない。

そんなに長年魔法少女を続けていたら、あの夜見鳴子の危険性は分かっているはずだ。

それなのに、あろうことか自ら弟子になったというのだ。

いくら真実を知ったからとはいえ、私は「ああ」はなりたくない。

中々出来ることじゃないぞ、普通……。

「このお茶、師範からもらったんだけどさ、大量にあつて困っちゃうんだよ。しかもずつと送りつけてくるんだぜ？あの人、ああいうとこ面倒くさいんだよねえ。てか、入理乃が入れ方分かって良かったよ。おかげでお茶を消費できるようになったし」

しばらくして、気安く富夢は話しかけてくる。そして、延々と師匠の愚痴を言ったところで、私に聞いてきた。

「でも、この茶の名前分かんねえんだよなあ……。貴女なら分かる？」

「……キーマン。中国のお茶」

私は若干困惑すると、ボソリと呟いた。富夢は純粹に感心したのか、すげえな、と、びっくりしていた。

「冗談のつもりだったんだけど、飲んだだけで分かるのか……」

「……別に、大したことじゃない。船花ちゃんのお義父さんが好きだったから、よくそのお茶葉を貰ってただけの話……」

そこで会話が途絶える。お互い、何を話して良いか分からなくなってきたからだろう。心なしか、富夢も困ったような表情をしていた。

……嫌いな顔だ。人と話すといつもこうで、うんざりする。

「唐突だけどさ、リノって呼んでいいかな？」

「え？」

「入理乃って名前、言いくいんだよ。舌噛んじゃいそうだしさあ」
そんな理由で？と私は内心呆れてしまった。

しかも、リノという渾名が元々夏音ちゃんが考えた物だって知っているのに、それを自分も呼んでいいかだなんて、どうにかしている。かなり無神経だ。

だが、逆らおうとも思えなかった。反抗するのも面倒臭かったのだ。

私はこくりと頷く。それを見て富夢は、じゃあ、と、リノ、と切り出してきた。

「貴女、本気でサチとこゆりと別れてきて良かったの？」

「……何で、そんなこと聞くの？」

そっちから誘ってきたくせに、変なの。それにあんなの、ほとんど強制的だ。『真実』を知ってしまったら、私は――

「リノにとってあの二人は、とても大切な人だったんでしょ？それを捨てるのって結構きついつて知っているからね。それに、中途半端に捨てちゃうと、かえってそれが原因で潰れるし」

……富夢は何を思ったのか、自分の過去を話し始める。

幼い頃から黒曜富夢は母親に疑問を抱いていた。

裏でこそそと何かをして、父親がいなときは必ずおめかしをして外に出ていくのである。その理由を尋ねると、殴られたり蹴られたりといった暴力を振るわれた。

しかし、それ以外では普通の母。富夢と父と仲の良い、優しい女性だった。

そのギャップが母親への嫌悪感を募らせていき、同時に父親への憐憫に繋がっていった。

そして、中学生あたりなる時は、彼女は嫌でも母親の行動の理由が分かるようになっていったのだ。

これは、父親への裏切りだ。そう考えた富夢は、キュウベえに『母の秘密が父にバレる』ことを願った。

案の定、母親は長年に渡り他の男と浮気をしていた。

父親は当然怒り狂い、一ヶ月とたたず離婚。富夢はざまあみろと思いなから、母親を捨てて父親のもとへ付いて行っただ。

……だが、それを後悔する事件がしばらくして起こる。

母親が父親や子供に捨てられたことで鬱病となり、自殺しようとしたのだ。

富夢は精神的なダメージを負い、絶望から魔女化しかけた。

……幸いこの時は仲間に使われたから良かったものの、それがなければ死んでいたところだった。

それ以来、中途半端な気持ちで破滅を生むことを知った。覚悟がなければ、執着を捨て去れなければ、何もなせないまま潰れてしまうことを富夢は知ったのだという。

「貴女には、私のように絶望はして欲しくない。」

今のうちだ。今なら、船花サチのもとへ戻してあげられる。私は師範の弟子だからね。あの人は私に弱いから、頼めばなんとかなるかもしれない」

富夢は嘘を言っているようには見えなかった。私が頷きさえすれば、本気で私のために動いてくれるんだと思わせる気迫があった。

……確かに、これがサチちゃん達のもとへ帰る最後のチャンスかもしれない。しれなかった。

何も一日経っているわけじゃないし、謝ればサチちゃん達が許してくれる可能性だってある。

でも――

「……そんなのいらない」

私が船花ちゃん達を裏切った一番の理由は、愛が怖いからでも、魔法少女に絶望したからでもない。そんなのは、ただ後からついてきたものに過ぎない。

私の本当の目的は、船花ちゃん達を幸せにすること。私と船花ちゃん達が何の気兼ねもなく暮らしていけるようにすることだ。

夜見鳴子の側にいれば、この世界を変えることができる。

怖いもの全部、消してあげることができる。より安心なものにすることができると。

そうすれば、私の大切な人達は死なないし、奪われない。ずっと私のものであり続ける。

……そのためなら何だってやる覚悟は出来ている。たとえば、船花ちゃん達を殺すこと”になっても、私は構わないと思っている。

私は一人になりたいたくないの。もう、怖がりたくない。

安寧を、手に入れてやる。

「……そっか」

富夢は残念そうな顔をする。

「……私は貴女を逃してあげたかったのに……、それを拒否するなんて、もったいないねえ」

その先の運命は、過酷そのものだ。『実験』を行う中で、死ぬかもしれない。

それを富夢は案じてくれていたのだろう。複雑そうに、ため息を吐いていた。

しかし、まあでも、と。右目に怪しげな光を灯す。

「それでこそ、私の仲間になる資格があるのかもしれないねえな。その歪み、気に食わないけど貴女のこととは認めてあげる」

彼女は笑った。乱杭歯を覗かせて。

それだけなのに、何故かゾツとした冷気が首筋を撫でた。

こいつは、……思ったより『化け物』なのかもしれない。

しかし、だからこそ私は明るい希望のようなものも抱き始めていた。

彼女なら、怖いものやつつけてくれるかもしれない。世界を幸せに変えてくれるかもしれない。

何かを変えられるのは、圧倒的な力だけだ。

黒曜富夢。

彼女は一体何者で、何を考えているんだろう。

どうやら、……私は彼女にどうしようもない興味を持ってしまったらしい。

……もつと知りたい。そうしなければ、怖くなくなるから――

取り残された者達

ある日突然だった。

夜、いつものように親にべったりと絡まれて、へキエキとしながら自分の部屋に戻った時、そいつは何処からともなく現れた。

それは、白い毛に包まれた、可愛らしい四足歩行の動物だった。

私は腰を抜かしていた。

だって、見たこともない生き物だったし、おまけに、

「やあ、^{かほせ}香干サチ。ボクはキュウベえ。キミに頼みがあつてきたんだ」
なんて、喋ってきたんだから。

今は慣れたけど、最初のうちは完全にホラーだったね。

これ何の悪夢だよ!! って、当時はガチで震えていた。

「た、頼み?」

恐る恐る勇氣出して尋ねると、そのキュウベえって奴はアホなことを言い出した。

「そう。ボクと契約して、魔法少女になって欲しいんだ」

「ま、魔法少女……? 契約……?」

聞いた瞬間、私は何じゃそりやあって思った。

何かおかしくなったのだろうか、とその時は本気で自分の耳を疑つたものである。

私は事態が上手く飲み込めなくて、戸惑うしかなかった。

「うん。ボクは何でも一つだけ、願いを叶えてあげる。でも、その代わりに魔法少女となって、魔女と戦って欲しいんだ」

「……」

でも、私は自分でも言うのは何だけど、チヨロかった。

願いを叶えてあげると言われただけで、私は魔法少女とか、キュウベえとかのあり得ないことを、すっかり信じ込んでしまっていたのだ。

だってそれは、親という手錠を外す鍵だった。

そんなものが目の前にぶら下げられたら、もうそこにしか目がいかなかった。

「じゃあ魔法少女になったら、私はお母さん達から愛されるようにな

るの？」

淡い期待が胸の内に浮かんでいた。

私はずっと、憧れていたのだ。普通の子のように、愛と自由に満ちた人生を送ることを。

それが手に入るチャンスに私は舞い上がっていた。いつそ、運が良いとさえ思っていた。

……本当はそうじゃなかったのに。

「それは、どういう意味だい？キミはもうとっくに、二人から愛されているじゃないか」

「あの二人は、私を愛してなんかいない!!あの人達が愛しているのは、私じゃない私、〴〵良い子の香干サチ”っていう外面なの!!”」

両親は、皆が羨む自慢の子供を持つことで、自分たちは幸せなんだと思いたがっている。私でジコケンジヨクを満たそうとしているだけ。

だから、両親が求めているのはこの私自身じゃない。

彼らが求めているのは、お行儀がよくて、誰よりも可愛くて、優秀で、素直で、わがままじゃなくて、謙虚で、それでいて元気がよくて従順な、馬鹿みたいに自分達に都合の良いお姫様なのだ。

……そして、それを私に押し付けるためだけに、私を昔から徹底的に管理し続けている。

毎日毎日決まった時間に起こされて、決まった時間に食事をさせられて、決まった時間に学校から家に帰らされる。

放課後には習い事や外出ばっかり。

私が好きなものも、嫌いなものも把握せず、無意味なプレゼントやお金ばかりを渡し、飽きもせず自分達の好みの洋服やアクセサリーで私を飾り立てては、これ好きでしょ、似合ってるよ、素敵になれて良かったね、なんて言ってきた。

将来も決められていて、私は大人になったら何処かのセレブのお嫁さんになるんだとか。

まるで、お飯事をしてるみたい。

……二人にとって香干サチなんてのは所詮、道具でしかない。私に

は自由もなくて、愛もない。いつも一人ぼっちなんだ。

このヘイソクカンから救ってくれるものといえば、海か船しかない。

気が遠くなるくらい広い広い海を見てみると、全部忘れられる。そしてその中を船で突き進んで風を受けると、何処までも何処までも行けるように思える。

私の支えは、それだけだ。

「……私は道具じゃない。私は人間だ。なのにどうしてこんな目に合っているの？私を私として、何で扱ってくれないのよ……。理想を押し付けないでよ……」

「だったら、キミはキミの理想を叶えれば良いじゃないか。大丈夫。ボクは何だって、実現させてあげられるよ」

そのキュウベエの言葉は、酷く魅惑的に聞こえた。

彼は、鍵を手錠の鍵穴に差し込んだのだ。

「……私の理想」

思わず、私は唾を飲んだ。

そしてその魅惑に抗うことなく、考えることもなく、願いを言った。

「私は、今の家族を捨てたい。私のことを愛して、尊重して、ありのままに接してくれる、私の理想通りの親がほしい!!」

瞬間、光が胸の内から溢れて、私の全身を染め上げていく。

露出の多いセーラー服。頭には錨型の、青い宝石が輝く水兵帽。

光が消えた時、私はそんなコスプレ染みた格好に変身していた。

……私は本当に魔法少女になったのだ。

つまり、願いが叶ったことになるわけだ。

頭の中で、それじゃあ両親はどうなっているんだ、という当たり前の疑問がよぎる。

急いで部屋を飛び出し、両親の寝室に飛び込む。

彼らは既に、大きな一つのベッドで寝ていた。

私は二人がどのように変わっているのか気になって、無理やり起こそうとその肩に触れた。

でも――

「……体が冷たい？」

言った途端、ぶわつと全身のあらゆるカンセンから冷汗が噴き出た。

両親の脈を測る。心臓の音を確かめる。口元の息を確認する。

しかし、どれを試しても、結果はある一つの状態を示していた。

即ち、死。

両親は、私のせいで死んでいたのである。

それからは、良く覚えてない。

いつの間にか両親の葬式は終わっていて、身寄りのなかった私は伯父さんの——船花久士ひさしの養女となり、元の苗字である香干から、船花サチに変わった。

お義父さんは私を尊重し、大切にしてくれた。実の両親がくれなかった、自由と愛をくれたんだ。

まさに彼は、私の理想の親だった。

……けど、今のお義父さんは、もしかしたら元々のお義父さんじゃないかもしれない。

私の叔母曰く、彼は家族に興味がある人じゃなかったらしい。突然私と会ったことで人が変わったと言っていた。

つまり、両親が死んだのも、お義父さんの性格が変化したのも、私の願いのせいなのだ。

私の祈りは、最悪の形で実現することとなってしまった。

欲しかったものを手に入れたのに、私の心はまったく晴れない。

両親が死んでしまったあの夜が、何度も何度も夢の中に出てくる。肉親殺しの罪、人を歪めた罪。私はそんな重たいものを背負ってしまった。

「……何でこんなことになったんだろう。」

私はただ、自由な暮らしが出来て、親に愛してもらえれば、それだ

けで良かったのに」

「それは、キミが理想の親を願ったからだ。でもそれがどういう風に実現するのかわらなかつた。だから、こんなことになったのさ」

「……………自業自得だつてこと言いたいのか？」

自分の部屋の中で蹲つてしていると、契約した時と同じように、何処からともなくキュウベえが現れていた。

私は小動物を睨み付ける。

だが、心の中では彼の言う通りだと思つていた。

……………本当に、申し訳なさ過ぎて死にそうだ。消えてしまいたい。

「不満なのかい？」

「不満っていうか、何ていうか……………」

「キミの望みは叶つた。」

キミの新しい親は、キミが言つていた、本物の愛情を向けてくれている。それにキミは強制された生き方をしていてのではない。何もかもいいことじゃないか。そもそも、そんなに落ち込むこともない。キミは、もう「船花サチ」だ。船花サチは、自由なんだろう？」

……………キュウベえの話すことは、いつだつておかしいくらい私を惹きつけた。

彼の話が、頭の中を回つていく。私はジョジョに、それにオカサレテク。

自由、自由、自由……………

それつて何だつたんだつて。

私が求めて止まなかつた自由は……………、確か、何でも出来るつて意味だつた。

つまり……………、私は何をやつても許される？

「……………私は、「船花サチ」。香干じゃない。自由になつた、私……………」

香干サチは、自由じゃないから許されない。

でも、船花サチは自由だから、この罪も許される。親を犠牲にして、幸せになつても良いんだ。

「……………殺しちやつたけど、現実逃避ぐらい許してください、お母さん、

お父さん。私は貴方達のイタイの冷たさを、思い出したくはない。こ
うでもしなければ、私は耐えられない」

だから、私は悪くない。『船花サチ』は悪くない。



何処かのバス停を取り込んだのだろう。

崩れたベンチ。遠くに見える、ひび割れたガラス製の停留所らしき
建物。お辞儀している道路の標識。

それらが周りにはいくつも点在していた。

勿論、それだけじゃない。

地面にあちこちに生えている花の造花や、標識同士を繋いでいるペ
ナントガーランド。

無意味にあちらこちらに置かれた二メートル程の巨大なパー
ティー帽子が、より空間の異質さにアクセントを添えていた。

……やっぱり、結界というのはいつ見ても異常だと思う。

どうやってこういうのを魔女は生み出しているんだろう。

「まったく、手間かけさせやがって。このクソ野郎」

私は水平帽の唾を触りながら、柄悪くそう呟いた。

前方の宙には、五メートルほどのプレゼントボックスが浮かんでい
る。

その蓋を突き破り、極大サイズのハサミを握る、横幅だけで六メー
トルにもなるマジックハンドが伸びていた。

あれこそが、仮称、プレゼントボックスの魔女。私が三日前から探

し、そしてようやく追い詰めた魔女だった。

「とつとどぶつ潰してやる!!覚悟しろ!!」

私は自身の武装——私の身長とほぼ同じ長さの錨を手に、露出の多いセーラー服を靡かせながら突撃する。

そのハサミが振り下ろされる前に、くるりと右に飛んで方向転換。攻撃を回避すると同時に、地面についた足をバネのように使って高く跳ね、アンカーで魔女の側面を叩く。

爪が箱にめり込み、魔女は吹っ飛ばされて遠くの停留所にぶつかる。

そのせいで、ガラスの割れる音が空間に響いた。

「おいおい、大したことないじゃん。弱っちなあ」

私はそれを見てニヤリと笑いながら着地した。

そして、もう一発ぶちかまそうと再度走ろうとする。

しかし、次の瞬間、即座に嫌な気配を察知。前進を止め、錨を自分の胴体のところで横にして構える。

刹那、箱からマジックハンドが勢い良く伸び、まるでフェンシングのように大きなハサミを突き出してきた。

「くっ……!!」

それが錨と激突し、今度は私が押されて下がる。

マジックハンドは伸びたまま、ハサミを私へ向けて豪快に振り回していく。

避けるにつれ、造花やパーティーハットが舞い上がり、

停留所や標識を横から真っ二つになり、地面に深い斬撃の跡が残っていく。

巨大な分避けやすいので余裕はあったが、しかし、この魔女の攻撃はいちいち大きな音が響く。

はつきり言って、かなりうるさいのだった。

「つたく、うぎぜえんだよおっ!!」

下からすくうように、最大限の力で錨を動かす。その魔力を込めた一撃は、青い燐光を走らせて、迫りくるハサミを粉々に粉碎する。

私は腕を再度下す中で、錨に組み込まれた機構を作動。瞬時に爪が

折り畳まれ、正面に構えたときには長銃となる。

私はその引き金を引き、マジックハンドへと銃弾をお見舞いした。大きな手から火が吹き上げ、魔女の箱へと燃え移っていく。

私は狙いを変えず、止めにもう一度銃を撃つ。

銃口から青い魔力の弾が飛び出したかと思うと、一瞬にして魔女に大きな穴を穿った。

魔女は苦しそうに悶えながら、グリーンシールドを残して消滅していった。

「ふう……、こんなもんか」

風景が結界から、元の雑貨屋の裏側に戻る。

私は黒い球体を拾うと、被っていた帽子を取って、それについている錨型のソウルジェムを見た。

そこまで魔力を使ったはずではないのだが、少し濁っている。

キュウベえ曰く、負の感情を溜め込むほどソウルジェムに穢れが生じるといふ。

ならば、この穢れはその負の感情が原因なのだろう。

入理乃のあの手紙を読んで、私はずっと四六時中、後悔ばかりしている。

一番近くにいたのに、私は入理乃を無意識に追い詰めていた。

それどころか、普段の寂しい気持ちにも気付いてあげられなくて、救ってあげられなかった。

私は、相方失格だった。私なんか、相方になるべきじゃなかったんだ。

……そう思うと、申し訳なくて申し訳なくて、悲しみが止まらないのだ。

もちろん、怒りはある。

夏音とかいう昔の友達の代わりにされたのは純粹にムカつくし、手紙に書かれてあったこゆりにやったことも許せない。

でも、どんなに自分勝手でも、入理乃はこの世でたった一人の私の大切な親友。どうしたって、心のそこから憎みきれないよ……。

それに、今は怒りより寂しさの方が強い。

……唯一、入理乃を失った悲しみを分かち合えるだろうこゆりが、思ったよりコミケーションをとってくれないのである。

どうも話を聞けば、妹が死んだり、魔法少女のことで親と一悶着あつて家出したりと、一変に不幸が重なったようだ。

恐らく、それで私のことに気を使っている余裕はないのだろう。彼女も彼女で、いっぱいいっぱいなのだ。

……私はそんなこゆりに何も言えないし、話しかけることができない。ホームレス生活やめなよ、とも言えない。

これでは、孤立したのと同じ。他に友達といつたら数えるくらいなもので、その子達にもこの悩みは共有できないし、もう本当にどうしたら良いか分からない。

「入理乃……。テメエ、一体何処にいるんだよ……」

自然と俯いてしまう。

私はその後もグダグダと入理乃のことを考えながら、その場を後にしていった。

だからだろうか。物陰から、誰かが見ているだなんて、その時気づきもしなかった。

後から思うに、そいつは多分、私を見て微笑んだと思う。

そして、それをきっかけに決めてしまったのだ——魔法少女への道を。



あたしは、手紙を読んだその日のうちに、サチに電話をしようと思つたその時、彼女が丁度連絡をくれた。

やはり、入理乃に捨てられたことをショックだったらしい。

サチは泣きながら、そちらの状況を説明してくれた。

彼女はその日、自分の部屋の机の掃除をしていたところ、引き出しに入理乃からの手紙が入っていたのを見つけた。

気になってそれを読み、その内容にびっくりしたサチは、直接問い詰めようと入理乃の家に行った。

しかし、何故か使用人の人から昨日の夜から入理乃はいないと言われしまい、手がかりはないかと、今度は同じ早島にいるミズハに電話をかけても、どうしてか繋がらない。

サチはしようがなくキュウベえに相談してミズハの家を教えてもらい、そこへ入理乃の時と同じように直行した。

だが、どういうことか、そこでミズハと同居していただろうミズハの親戚も、ミズハは数日前から行方不明になっていると言って、打ちひしがれていたのである。

不気味なことに、ほぼ同じ時期に入理乃とミズハは早島から忽然と姿を消したのだ。

その理由は、キュウベえもよく分からないという。

ただ言えるのは、入理乃とミズハに、何かが起こったということだけだ。

これは魔法少女の今後に関わるとして、現在進行形でキュウベエとあたし達はその何かを調べ続けているが、いまいち成果は上がっていない。

しかし結果として、早島はサチ一人で管理することになり、グリーンフシード問題は思わぬ形で解決することになってしまった。

サチは他の縄張りが必要なくなり、また手紙であたしが入理乃に受けた仕打ちも知ったためか、牛木草を正式にこちらに譲渡。

それに伴い、入理乃が研究して残した、牛木草各地に隠したという魔法の道具の管理を共同で行う取り決めを交わした。

あたしとサチの関係は、以前のような顔見知りレベルの友人から、同盟者や協力者といった関係へと変わったのである。

……そうそう。変わったと言えば、今の生活も随分と変わった気がする。

家出をした当初、あたしはお金もないのでご飯もなく、飲料水の確保さえ難しいという有様だった。

もちろん、お風呂だとか、スマホの充電だとか、そういったことも出来なくなつた。

そのため、一日ぐらいお腹を空かせて途方にくれ、街中をずっと歩き回る羽目にあつた。

その際に、怪しい男の人に連れて行かれそうになったり、なんか見るからに胡散臭いお店の誘いにあつたり、電車の地下のホームで寝た時に、見ず知らずのおつきにセクハラを受けて、泣きながら逃げたりといった数々の酷い目に暫くあつたが……、思い出したくもないので詳細は割愛しよう。

結局あたしはキュウベえに教えてもらった、牛木草の某所にある廃ビルに住むことにした。

理由は単純に、ホテルに住みたくなかつたから。

というのもあたし、自分の場所だと思えないところはずっと生活するのは、どうしても落ち着かなくて嫌だつたのだ。

まあ、ぶつちやけた話、そこまでお金に余裕があるわけでもないつてもあるのだが。

あたしは毎日を、人に隠れてこっそりと生きていくようになった。

一日の大半をビルの中で過ごし、夜は街に出かけて魔女を狩つた。

食料品は、サチが固有魔法のレプリカ生成で作ってくれた偽札を使用して賄うようになり（入理乃の魔道具を主に管理する代わりに、一ヶ月五千円程度の偽札をもらっている。はつきり言つて、めちゃくちゃ苦しい）、お風呂は公園の水道水やペットボトルの水、最悪の場合は雨水を何処かから拾ってきたドラム缶に溜めて行った。

とても中学生がやる生活じゃないが、しかし人間適応するものである。

最初はめげそうになっていたが、五日もすれば慣れていて、なんとか日々を送れるようにはなつてきた。

——そうして気がつけば、二週間が過ぎようとしていた。

天気の良い昼下がり。

あたしはビルの屋上で体育座りをし、ただ空を見上げていた。

最近はずっとこんな調子で、何もやる気になれず、何をしていなかった。

あたしは家を出てからは生活に慣れるという目標があったが。しかし、それを達成してしまつた今、後はただひたすら虚無感が襲ってきた。

あたしは何もかも失つたのだ。

妹も、家も、暖かな日常も。

学校に通えなくなつたから、芸術関係の大学に行きたいっていう夢も叶いつこないし。

心の整理だつて、上手くいかない。

どうしても一人でいると、さゆりや両親を思い出す。その度に家に帰りたいと思い、そして、そうすることができないのをダラダラと悩んでしまうのだ。

まあ、今の状態じゃいけないってのはあたしにも分かっている。

前を向こうと決めた以上、無意味なままで死にたくはない。

……早く、何か見つけないと。あたしの新たな目標や生きがいを。

そうしなければ、さゆりにどう向き合えば良いか、分からない。

いつそのこと、さゆりが死んだ原因を探ろうかとも思ったが、それこそ意味がない気がしてくる。

あたしが外に遊びに行つた時、さゆりも何処かへ外出した。そして魔女と遭遇し、殺された。

不確定ではあるが、どう考えたつてそういう結論にしか至れないと、キュウベえから言われてしまつたのだ。

それにコートの魔女も殺してしまつたし、魔力の痕跡だつて残つちやいないだろう。

手がかりなんてもうないのだ。

ああ、でも、意味がわからないにも程があるわよ。

本当に、何で突然死んじやったの？何で何の前触れもなく死んじやったの？

誰でもいいから、教えてよ……。

「はあ……。ネガティブになつていたら駄目ね……」

あたしは立ち上がると、グツと伸びをした。

こういう時は、気晴らしが一番だ。近くの本屋にでも行って、時間を潰そう。

そう考えると、あたしは一気にビルから飛び降り、町に繰り出して行ったのだった。

出会い 1

牛本草、都心部。

牛本草市のすべての中心。地方屈指のオフィス街。

そこは、今日も多くの人々が行き交っている。

あたしはその中に紛れながら、目的地もなく彷徨っていた。

あたしは周りから拒絶され、家族以外とはあまり親しい人はいなかった。

だから、寂しいのは嫌だけど、ある意味孤独には慣れているといえた。

単独行動も、別に嫌いじゃあないのである。

むしろ、集団行動よりも気楽で自由に振る舞えるので、こつちの方が面白い。

でも、今はどうだろうか。一人でいるだけで、重荷を背負っているみたいに苦しい。

それは周りが、あたしより楽しそうに見えるから。

皆、笑顔なのだ。中には渋い顔してる人もいるけれど、すぐにそれはなりを潜め、町の賑やかさに溶け込んでいる。

そういうのを見ると、落ち込んでいるあたしだけがこの町において異質に思えてくる。

何だかあたしだけが取り残されたみたいで、酷く寂しい。

「ねえ、知ってる？最近大量の遺体が、警察庁の前につの間に置かれてたつて事件があつたんだつてー」

「え、こわ！犯人は？」

「まだ見つかってないっぽいよ。それにしても、こんなにっぽい死体を置くなんて、気持ち悪いよね」

「うん。これじゃあ被害者の人達も可愛そ〜」

若い女性の二人組が、会話をしながら横を通り過ぎていく。

あたしはその話の内容から、入理乃は死体の処理を上手くやったんだな、と思つた。

……ていうか、あんなっぽいあつたのに、どうやつて一変に運ん

だんだらうか。

まあ、入理乃の奴、意外と魔法でなんでもできていたし、知り合いに頼んだとか書いてあったから、その人の力でなんとかなったのかもしれない。

でも、知り合いって何者なのかしらねえ。

魔法少女だとは思いますが、入理乃の知り合いの魔法少女って、キュウベえが知っているなかでは限られてるんだっけ。

そして、その中であたしやサチを除外していくと、残る知り合いってのはミズハだけになるが……、普通に考えて裏切り者に死体の処理なんか頼むのか？

けど……、案外その可能性も捨て切れないんだよね。

ほぼ同じタイミングで、入理乃とミズハはいなくなっているのだし。

「……」

ふと、それが本当だったらサチはどう感じるのだろうか、と思った。……多分、あたしがサチの立場だったら怒って絶交するだろう。家族の時と同じように。

でも、サチは違うだろう。彼女はああ見えて優しくて一途だ。きっと、どんなことがあっても彼女は入理乃を信じ続けている。

しかし、だからこそ、不用意に扱ったら、パリンって、その心が割れてしまいそうで。

……サチとどう接して良いか、正直なところあたしにはまったく分からなかった。

腕に巻いている時計が、もうすぐで三時半になろうか、という時だった。

あたしは歩くのも限界になって、高台にある公園のベンチで座り休

憩をしていた。

とにかく暇だった。

何もやることがなかった。せつかく町に来たっていうのに、お金がないと何にもできない。分かったことだけど、ホームレス生活つきついことだらけだ。

途方に暮れて、何となく空を見上げる。

ふよふよと自由に流されていく雲が、何故だか恨めしい。

あたしは、はあ、と溜息をついた。

「おや、お嬢ちゃん。どうしてそんな暗い顔をしているんだい？」

「……誰？」

ポーとしているうちに座ってきたのだろう。

いつの間にか、浅黄色の服を着た老人があたしの隣にいた。

顔立ちは、バーテンダーにいるジェントルマンといった渋い感じだ。

年齢は恐らく、七十代から八十代だろう。しかし、それを感じさせない若々しさがあつて、背もちゃんと伸びているし、杖も持っていない。

穏やかそうな顔をしているが、瞳には年寄り特有の、あの人生経験からくる明敏な輝きが浮かんでいた。

あたしは怖気付く。

こう言つてはなんだが、母方の祖父も、父方の祖父も小さい頃に亡くしているあたしにとって、この年代のおじいちゃんはあまり接したことのない人種だったのだ。

「そんなに怖がらなくても良いじゃないか。何も、とつて食おうなんて思つてないんだから」

びびっているあたしに、朗らかに笑ってみせる老人。それだけで、とても良い人なんだろうということは伝わってきた。

だからこそ、ますます苦手に思えて嫌になつてくる。優しくされるのが、一番きついから。

「僕はこの年になつても、散歩が日課でね。そして、散歩の終わりには必ずここに来て、景色を眺めるんだ」

何も聴いていないのに、彼は語り出す。

あたしはそれを真剣に聞くつもりもなかったが、暇でもあったので、一応耳を傾けていた。

「良い景色だろう？ここからだ、町を一望できる」

老人は、眼下に広がっている風景に視線を向けた。

立ち並ぶ、剣山の如き高層ビル。テレビ局がある電波塔。そして、少し外れにはマンションが密集し、更に端の方には緑がある。恐らく、都市開発が間に合わなかった地域だろう。

ここからだ、まるですべてが、模型のように見える。当然、人など見えもしない。……遠くから見れば、人間はその程度の存在なのだ。

「この牛木草も、随分と立派になったもんだ。……だが、知っているかい？どんなに大きくて立派な建物も、ここ十年ぐらいに立ったものなんだよ。牛木草は単なる田舎の都市に過ぎなかった。この公園の周りにある立派な住宅街だって、元々は田んぼだったんだ」

その話は小学生のころ何処かで、何となく聞いたことがある。

十年前、急速に発展した寝巢扉市には、一気にあらゆる企業が入り込んできた。

その企業に就職しようと集まった人達の受け皿になったのが、この牛木草であった。

こうして、市には住宅街や高層マンションが立ち並ぶこととなったのだ。

当然、それは田んぼなどや古い建物を壊して作られたものだ。批判も殺到し反対運動が行われたが、しかし若者の賛同者も多かったという。

そしてこの都市圏では、新しいものを作ろうという動きの方が活発だった。

古臭いものは忘れられて、次第に住宅街は受け入れられていったのである。

「その田んぼの畦道は、僕にとってはどうでも良いものだったが、しかし後に、死んだ娘にとっては子供時代の大切な思い出が詰まった場所

だったとわかったんだ。……今思えば、反対運動に参加しておくべきだったね」

娘は死んでから、ようやく何を考えているのかはつきりと分かるようになった。その願いを叶えてやることは、もうできないというのに。

老人は物憂げに呟く。

その響きには、何処となく諦観が含まれている気がした。

「僕はね、長年後悔に取り憑かれているんだよ。それがどんなに苦しいことか、若い君にはまだ分からないだろうね。でも、だからこそ悩みは相談するべきだよ。君、何か悩みがあるんだろう？この老いぼれに少しでも良いから話してくれないかい？」

「悩みなんて、あたしには……」

「……じゃあどうして、君はどんなに暗く悲しい目をしているんだい？」

そう言われて、あたしは目を逸らす。

……反骨心からなのか、何も答えられなかった。

「……何で悩みなんかをアンタに話さなきゃいけないのよ。本当はあたしのことなんて、どうでも良いと思っっているくせに。ていうか、さつきからあたしに話かけてきてうざいんだよ。どっか行って」

やがて迷った末に、わざとあたしは悪態をついた。

そうやってすれば、相手はあたしに関わってこないと思ったからだ。

でも、老人は臆することなくニコニコとするだけだ。

あたしはムツとして、さらに態度をでかくした。

「何でそんなヘラヘラ笑ってんの？もしかしてあたしを馬鹿にしているわけ？」

「いいや、そんなことはないさ。君が突然、無理やり悪ぶってみせるから、ついおかしくなってしまったね」

老人は悪戯っぽく言った。

完全に見抜かれていた……。何で、さつきのだけで……。

「君は実に分かりやすいよ。思いつきり顔に出てたしね」

老人はあたしの真似をしてるのか、不自然に強ばった、むすつとした表情を作った。

やっぱり、この人苦手だ。全部心の内側を見られている気がして、落ち着かない。

よし、こうなったら……、

「……さつきは酷いこと言ってます。さようなら」

あたしは立ち上がると、その場からさつきと離れようとした。

老人がその場を退かないなら、自分から何処かに行こうとしたのだ。

「そうそう。僕、料理を作るのが趣味なんだ。丁度お昼時だし、君、何か僕の家で食べていけない？」

しかし老人は、あたしをマイペースに呼び止める。

その時、丁度答えるようにぐうーとお腹がなった。

……朝から何も食べてなかったから、空腹がピークに到達していたのである。

恥ずかしさのあまり、赤面する。何かあたし今、物凄くかつこ悪い？

「ほら、やっぱりお腹空いてるじゃないか。遠慮することはないんだよ、君」

彼も立ち上がって、あたしの元へゆつくり歩み寄る。あたしは相変わらず目を合わせられないまま、俯いてしまった。

「……で、でも、こんな見ず知らずのあたしを家に連れ込んだりして良いんですか？」

「ああ。僕も今日は寂しかったしね」

老人の笑みをちらりと横目で見る。

確かにそれは本人の言う通りの表情であり、居た堪れなさを感じさせるものでもあった。

……あたしは彼の誘いに乗るか少し悩んだ。

そして、首を縦に振った。

何かされたとしても魔法少女だから抵抗はできるし、それにお腹はさつきから空いている……。もう、限界だった。

「良かった。それじゃあ、案内しようか」

老人は柔和な顔を崩さず、背筋を伸ばしなら歩いていく。あたしはそれを、無言で大人しくついて行くのだった。



案内された場所は、カフェらしき……いや、その外装だけ残っている建物だった。

当然看板だつてないし、窓の内側はカーテンがあつて見えない。でも、雰囲気は良かったんだろうなあつていうのが分かるデザインをしていて、それがより一層、寂れた雰囲気を強めさせていた。にしてもここ、何か見たことある気がする。何処となく懐かしい気がするのだ。

そう思った時、脳内の記憶が一瞬弾けて消え、あたしははっとした。そうだ、ここは――

「……もしかしてこの店つて、モノトーンつて名前じゃありませんでしたか？」

あたしは少し期待しながら、隣の老人に聞いた。すると、そうだけど、と、予想通りの返事が返ってきた。

「よく知ってたね。こんな十年も前に潰れた店のことなんて」「……こういうのも何ですけど、あたしは夜見鳴子さんのファンなんです。だから、知ってました」

あれは、中学に入りたての頃だっただろうか。

あたしは既にクラスに馴染めずにいて、空気のような存在だった。その時期に、あたしは本屋で夜見鳴子の作品集と出会った。

あれは一言で言えば、衝撃的だった。

孤独と絶望が捻じ曲がって混ざり合い、でも何処かもがこうと必死になつてゐる……。まさに、そんな感情が作品として具現化していたのだ。

あたしは見ていただけで泣きそうになつた。まるで、あたしの心の内を代弁してくれてるように感じたから。

それ以来、あたしは夜見鳴子にのめりにのめり込んだ。

我ながら、キモイオタクになつたのである。

一時期、生活習慣やら服装やら何やら、夜見鳴子を真似てたしね。それで、最終的に夜見鳴子の実家がカフェだつて知つて、はりきつて来たのだけど……。これが潰れてたんだよね。

シヨックだから、よく覚えているよ。

でもまさか、今になつて入れるだなんて思つてもみなかった。

もう本当、めちやくちや嬉しい。

だつて、夜見鳴子の実家だよ？彼女の作品の源流がここにはあるんだ。

一ファンとしては、この上なくご褒美に決まつているじゃないか。

「そうか、嬉しいことを言ってくれるね。娘も喜んでることだろう」
老人は少し影のある笑顔を浮かべた。

あたしはどうしてか、「僕は後悔に取り憑かれている」、という言葉葉を想起していた。

「……………ん？……………娘？まさか、鳴子さんのお父さんなんですか？」

「そうだよ」

「……………大変失礼いたしました」

あたしは申し訳なくなつて、頭を下げた。

まあ、この潰れたお店がモノトーンだつて思い出した時点で、何となく予想はついてたけどさ、憧れの人の父親に向かつて暴言吐いてたなんて、死にたくなるよ。

「ここが入り口だよ」

裏口に回つて扉を開けると、すぐ目の前には緩やかな階段があつた。

それを老人は、手摺りを使わず何なく上がっていった。むしろハイペースすぎて、ついていくのがやっとだった。

二階の居住スペースはそれほど広くなかったものの、古い洋風の家具、著名な画家が手がけた絵、それにフランス人形の置物など、アンティーク調になっていて、なかなかお洒落だった。

なるほど、確かに外国好きの夜見鳴子が好みそうなものばかりだ。流石、彼女の実家だけある。見ているだけで、あたしにしては珍しくテンションが上がってた。

老人はあたしをリビングのテーブルの席に座らされると、台所から食材や調味料を出し、料理を始める。

だが、見ているだけというのも辛い。あたしは何かしようと、老人に呼びかけた。

「……あたし、何かお手伝いしましょうか？」

「良いよ良いよ。公園の時も言っただろう？遠慮しなくて良いって」

彼はあたしの方を見ていなくても、優しい声でそう返した。

「それより、名前を言っていないかったね。僕は夜見ミキオというんだ。君はなんていうんだい？」

「こゆり……。色梨こゆりです」

「こゆりちゃんか。良い名前だね」

「……ありがとうございます」

緊張のせいかな、感謝の言葉が少し素っ気ない感じになってしまった。

公園の時もそうだけど、もうちよつと愛想よくしろよ、あたし……。

「こゆりちゃんは、不登校ってやつなのかい？」

「まあ……、そんな感じです」

本当は不登校どころか、家出なんだんだけどね。

「鳴子も不登校だった時期があったよ。あの子は変わり者だったからね。クラスに馴染めなかったんだよ」

——そして、夜見鳴子は大人になって、芸術家を始めてからも誰にも受け入れられなかった。

作品をたくさん作っても、批評家達からは陳腐だの、才能がないの

だと罵られ、アルバイトや副業を掛け持ちしながら、精神的にも肉体的にも、何度も何度も病気になるという。

その期間、約三十年程。

そしてやつと、晩年になって評価がもらえるようになり、夜見鳴子は瞬く間に人気芸術家へのし上がったのである。

だが、皮肉なことにそれが逆に夜見鳴子にストレスを与えてしまった。

売れるものを作らねばならないというプレッシャー。自由に過ごしていた時間を奪われ、悪質なファンからは誹謗中傷が付き纏うようになる。

半年を待たずして、夜見鳴子の精神はすっかり病んでしまい、彼女はある日ビルの屋上から飛び降りようとした。

自殺しようとしたのだ。

でも……、迷いがあったのだろう。ギリギリのところまで彼女は踏みとどまった。

しかし、……ここからが、本当の悲劇であった。

何と、丁度その時、強風が吹いたのだ。

それは地上にいる人たちには何の問題にもならないものだったが、屋上にいた夜見鳴子だけは違った。

その風に煽られ夜見鳴子は転けてしまい——落ちて死んでしまった。

町を歩き交う、多勢の人の目の前で。

それは完全なる事故死であったと、どの本にも記録されている。

だが、わざとだったんじゃないか、という声もあり、ファンの間でも自殺説がまことしやかに囁かれているほどだ。

……夜見鳴子の人生は、不幸そのものだったといえるだろう。

最初から最後まで誰からも理解されず、誰からも認めてもらえなかった。

彼女もあたしと同じように、家族だけが支えになっていたのかもしれない。

ただ一つ違うのは、あたしは家族に捨てられたこと。そして、家族

を残して一人、逝ってしまったことだ。

「僕はね、今とても嬉しいんだよ。鳴子を好きだと言ってくれる人がいて。……そうだ、良かったら、鳴子に会っておくれよ」

「え……う？」

あたしは驚いた。

もちろん、ここでいう「鳴子」は既に死人なので、きっと本人の骨のことを言っているのだろう。

でも、仏壇に手を合わせる事ができるなんて……。

「頼むよ。あの子も久しぶりにファンに会いたいだろうし」

「は、はい!!ぜひ!!……あ」

嬉しくなったからだろうか。あたしは柄にもなく、大きな声を出してしまった。

また恥ずかしくなって、この大馬鹿な頭を抱え込みたくなる。

「君は本当に鳴子のが好きなんだね」

ミキオさんが感心したように言う。

あたしは愛想笑いしか浮かべられず、何も言うことができなかつた。

忙しなく動き、料理をする老人の背を見る。

トントントン、っていう包丁の音が何処か胸にきて、あたしは目を細めた。

……普通の人の日常がそこにはあって、そして今、あたしはその中に入り込んでいる気がした。

町を歩いているときに感じた疎外感がなくて、一種安らかな気持ちになっていく。

「ちよつと雑に作ってしまったんだけど、どうかな？」

しばらくしてテーブルに並べられたのは、肉じゃがやご飯、それに魚の煮物といった、シンプルなものだった。

食べてみると、じんわりと暖かくて柔らかな味が広がっていく。

それは久しぶりにまともに食べた、暖かい食事だった。

「……美味しいです、とつても」

あたしは、お母さんの手料理を思い出していた。

お母さんは料理が上手い人で、どんなに素朴なものでも美味しく作ってくれていた。

この料理は、その味付けととてもよく似ている。

……どうしようもなく懐かしくなってきた。きつてしまう。

双子の妹の死。入理乃の裏切り。両親の拒絶。遠く離れてしまった、あたしの心の拠り所。

失ったものの記憶が頭の中をフラッシュバックしては、切なくて、悔しくて、悲しい思いが駆け巡る。

「辛い時は、思いつきり我慢せず泣くと良い」

ミキオさんが、背中をさすってくれた。あたしの目頭が熱くなつて、決壊する。

「はい……」

静かに目を閉じる。あたしは声も上げず、感情に身を任せて涙をそのまま流し続けた。



私は、町の中をソウルジェムを持って歩いていく。

こうすることで、魔女の魔力を追って、探索しているのである。

でも、どんな原理でキュウベえは私に、こんな魔力を捉えられるとかいう変な力を与えたんだろう。

考えれば考えるほど、ファンタジーに片足を突っ込んでいる。

うん。やっぱり、魔法少女は不思議。でも、それでこそ面白いなあ……。

「集中が途切れているよ。もっと神経を研ぎすますんだ」

そんな呑気なことを考えていると、肩に乗ったキュウベえからお説教が飛んできた。

私はちよつとしつこいと思つて、口答えをした。

「分かつてるよ。もう、うるさいな……。そんなネチネチ言わなくても良いじゃん。これ以上言うと怒るよ？良いの？」

「そういうこと言うの、止めてくれないかい？ボクにはキミが本気で怒っているのか否か判別が難しく、困るんだよ。なんせキミ、殆ど無表情なんだから」

私はよく、笑わないとか鉄面皮とか言われる。自分ではそんなつもりはないけど、多分他の人より表情筋に感情が出にくいんだろう。

キユウベえも、私のことを分かりにくいと思つているようだった。まあ、私からすればお互い様だけど。だって、キユウベえこそ怒つたりしないし、ちよつかいを出しても慌てないもの。

「うーん……。殆ど感じられないなあ……」

キユウベえに言われた通り、一応真面目に頑張つてはみるものの、殆ど魔女の反応が掴めない。

もしかしてもういないのかな？それとも、誰かが倒しちやつたとか？

なんか、考えれば考えるほど面倒臭くなつてきた。足も疲れているし、正直辞めたい。

でも、もつと頑張れ私。

ここは気合だ。根性だ!!やればできる、やればできるよ!!うおおお おおおお!!

「見つけた……!!」

再び意識を集中させると、ほんの小さな、しかしはつきりとした魔力反応を感じとることができた。

私はそこへ向けて走り出し、路地裏に回る。

……絶対にここだ。魔力反応も強いし、キユウベえが何も言つてこないのも、正解つてことで良いんでしょ？

私はキユウベえに教わった通り、魔力を使って、扉をこじ開けた。すると、壁一面にスマホのを象った紋章が浮かび上がる。あの日見た、水平の魔法少女の前に現れた紋章とは違うが、概ね似た同じだ。これが、結界の入り口なんだろう。

「……いよいよ、初めての魔女狩りだね。江戸柘榴^{えどぎくろ}」
「うん」

魔法少女に変身しながら、口元に笑みを浮かべる。

ああ、気分が高揚して、ゾクゾクする。この先に、私の日常にはない、知らない世界があるんだ。

「さあ、はりきって魔女狩りを——およう？」

結界へ入ろうとしたその時、紋章が由来で消えてしまった。同時に魔力反応がどんどん離れていく。

まさかこれは……、

「逃げられたね」

冷静にキュウベえが分析する。

私は悔しくて悔しくて仕方がなかった。だって、せっかく楽しみにしてたのに、魔女狩り!!

「すぐに追いかけるんだ、柘榴」

「言われなくても」

私は再度変身を解除すると、魔女が逃げていった後を追う。

そうして、あの潰れたカフェの方角へと走っていったのだった。

出会い 2

その仏壇は、入り口付近にある洋間の隅にあった。

それは質素であったが、周りがちゃんと掃除されており、線香も真新しい。

備え付けられた棚には、二つの写真が立てかけられている。

一つは、生前の夜見鳴子のもの。

そして二つ目は、黒髪の、十代前半の少女の写真だ。

色あせてこそいないが画質は悪く、十年前に撮られたであろう夜見鳴子の写真と比べてもあまり差がない。恐らくこの写真も、同時期に撮られたものなのだろう。

「あの、この子は一体……？」

気になって尋ねれば、ミキオさんは影のある目を落として答えてくれた。

「僕の孫。そして鳴子の姪、雨戸ナルだ」

……確かに言われてみれば、鳴子先生に似ている。いや、生き写しだ。夜見鳴子を若くすればこうなるだろうという顔をしている。

唯一違うところといえば、左目の近くにある泣き黒子ぐらいだろうか。

「……彼女も、亡くなったんですか？」

「ああ、八年前にね」

あたしはそれを聞いて、慰めを送ることはなく、そうですか、とだけ答えた。

……余計なことを言うべきじゃない、と思つたのだ。外野の人間が陳腐な言葉を使っても、逆に腹立たしいだけだ。

あたしは仏壇の前に座ると、手を合わせて目を瞑った。

神も仏もこの世にいやしないし、きつと死んだら人間の精神は消えるから、こんなことをしても夜見鳴子にあたしの思いは届かない。

しかし、そもそも「祈る」という行為は、故人を思う感情を強め、最確認することこそが本質。それは、死と向き合うための儀礼であり、その人を尊重するためのもの。……さゆりが死んだ今、あたしはそう

思っている。

だから、あたしは夜見鳴子に祈りを捧げた。もちろん、雨戸ナルにも。きつと、望んで死んだわけじゃないから。

本当はお線香あげるとか、細かい礼儀なんかがあるんだろうけど、ミキオさんは何も言わなかった。

……ただその視線には、並々ならぬ思いは込められているように感じた。

「ありがとう、こゆりちゃん」

祈り終わったところで、ミキオさんが改めて礼を言った。

あたしは立ち上がりながら、いいえ、と首を振った。

「こつちこそ、ありがとうございます。……鳴子さんはあたしにとっても大切な存在ですし、こうして祈ることが出来ただけでも嬉しいです」

あの人は、あたしの代弁者だった。内に抱えたもやもやを、そのまま表現してくれていた。

彼女の作品を見れば、水知らずの他人にもあたしの気持ちが届く。それが、どれだけあたしの救いになることか。

その感謝を捧げられたのは、純粹に喜ばしい。

「あの、長くいちちゃってすみません。あたし、うちに帰ります」

あたしはペコリと頭を下げた。

本当は、もつとここに居たい。ミキオさんは良い人だし、何より夜見鳴子について色々聞いてみたくもある。

でも、彼のその優しさも、暖かさも、今のあたしには苦痛でしかない。

「……そうか。また、いつでもおいで。出来る限り歓迎するよ」

「はい……」

寂しそうにミキオさんが笑うので、あたしは少しバツが悪くなる。……夜見鳴子は、父子家庭で育ったという。

つまり、夜見ミキオには妻はいない。そして、夜見鳴子の兄、雨戸五郎は寝巢扉市の有名なヤクザであり、十五年前に大量殺人の罪で死刑となっている。

さらに、姪の雨戸ナルも死亡していると、多分ミキオさんに残された親戚はいないのではないだろうか。

彼は、本当の意味で一人ぼっちなのかもしれない。それも、ずっと長い間……。

「ミキオさん、貴方は——」

「ごめん、おじいちゃん。本返すの忘れてたー!!」

尋ねようとしたその時、入り口の方で大きな声が聞こえた。

驚いていると、声の主は足音を響かせて開けっぱなしにしていたこの部屋に入ってくる。

「……。えーと、どちら様かな〜?」

それは何処かほわほわとした雰囲気、分厚い本を持った少女だった。

ツーサイドアップにした艶やかなオレンジ色の髪に、落ち着いた茶色のワンピース。そして、肩にかけてベージュのバッグが特徴で、あたしを見るなり首を傾げている。

「……」

あたしは固まっていた。

それは、シヨックを受けていからかもしれない。

ミキオさんが一人なんじゃないかと考えて、あたしは内心、彼が自分と同じなのだと思った。

けれど、実際にミキオさんは孤独ではなく、家にまで遊びにくる知り合いがいたのだ。

だから、裏切られたような気持ちになってしまった。それどころか、苛ついてさえいる。

……やっぱり、あたしは捻くれてるんだろうな。さっきまで自分から出て行くようにしたくせに、急にこんなことを思うのだから。

そうやって呆然としている間にも、話は進んでいく。

ミキオさんはこっちを見ながら、あたしを勝手に紹介した。

「この子はこゆりちゃん。お腹を空かせていたようだから、ご飯を作ってあげようと思って家に連れてきたんだ」

「そんな、子犬拾ってくるようなノリで……?」

少女の言葉には、何処か呆れたような響きをしていた。まあ、当然だろう。普通あたしみたいのを自分のうちになんて連れてこないからね。

「いやあ、暇してたし寂しかったもんでね。つつい」

しかし、ミキオさんはからからと笑うばかりである。悪く言えば、超軽い。

これには少女の方もムツとしている。

「あのさ、良い年なんだし、おじいちゃんもちよつとは警戒心もって行動してよ。本人を目の前にしてこう言うのもなんだけど、もしその子が乱暴してきたらどうするの？」

「それでも、困っている子は放っておけないさ。年長者としてはね」
「……どうしてそうお人好しでいられるかな。うた、全然分からないよ」

少女ははあ、と溜息をつきながら肩をすくめた。ほわほわした性格かと思っただが、見た目によらず案外幸が薄いというか、苦勞人なのかもしてなかった。

「とにかく、これ、返すよ……、あつ……」

渡そうとしたところでつると本が少女の手を滑り、床に落ちる。そこでようやくあたしははつとなり、慌てて本を拾おうとした。

同じように本を拾おうとする少女の左手と、あたしの左手が触れ、互いに視界に入る。

「!!」

あたしは瞠目する。

その少女の中指には、あたしのものとはほぼ同じデザインの指輪がはめられていた。

それが意味することはつまり――

「貴女、それ……」

少女の方も、あたしの指輪を見たのだろう。驚愕して息を飲んでい

る。あたしは突然の魔法少女との邂逅に、厳しい顔をしてしまった。

「……ミキオさん、はい」

手を引つ込めてしまった少女の代わりに本を拾うと、あたしはそれをミキオさんに渡した。

彼は一瞬、意表を突かれたような顔をしたものの、すぐに温和な笑顔になって、お礼を言った。

「……………ごめん」

少女が、申し訳なさそうな表情をする。

しかし、微妙な気持ちにならざる得なかった。

一瞬だけだったが、少女の口元がこわばっていたのである。

『……………話があるから、面に来て』

『分かった』

テレパシーを送ると、すぐに少女から返答が返ってくる。

こっちは結構緊張しているのに、向こうは全然そんなこと思っさそうだった。

そのせいか、あたしはちよつと不服というか、先程とは別の意味で微妙な気持ちになった。

「……………食事、ありがとうございました。じゃあ、失礼します」

「うたも帰るね。バイバイ、おじいちゃん」

あたし達はミキオさんに別れを告げると、階段を降りて建物の外に出て行く。

そうして数分間歩いて、誰もいない路地裏へと回った。

改めて少女と相對する。

彼女はこちらを探るように、観察していた。恐らく、困惑して警戒心を抱いているのだろう。

あたしも、多分歌羽と同じ気持ちなんだけどね。

「……………テレパシーで言ってたけど、話ってなあに？」

どうやらあたしと同じく、他人の顔色を伺うタイプらしい。恐る恐るといったように聞いてくる。

あたしは少し共感しながらも、確認する様に尋ねる。

「……………アンタさ、うたって言ったっけ？ミキオさんとはどういう関係なの？」

「ん〜、仲の良いお友達かなあ？」

「友達……?」

思わず、眉がぴくりと動いた。

「うん。うたの家族、あのカフェの元常連客でさ、マスターであるおじいちゃんとも仲が良かったの。で、その縁で今でも交流が続いているんだ。……あ、後ついでに言っとくけど、正確には古鐘歌羽だから。うた”はただのあだ名で、本名じゃないからね”

そう言っとうた——いや、歌羽は、最後に訂正をしてくる。

でも、あたしはそんなことどうでも良く、やっぱりミキオさんの友達なのか、とがっかりしていた。

まあ、よく考えたら、今後ミキオさんとまた会う確率はかなり低いからがっかりも何もないんだけどね。多分、あたしの方から近付かないだろうし。

……もういつそのこと、ミキオさんのことはここできっぱり忘れよう。

そもそも、あたしなんか普通の人と仲良くなっちゃいけないよね。

どうせあたしなんて、根暗だし影薄いし口下手だしホームレスだし、何より”化け物”なんだもん。あたしがミキオさんの側にいたら、彼もあたしの両親同様、不幸になるかもしれない。

「……歌羽は、よくミキオさんのところに行くの?頻度はどのくらい?」

あたしは感情を押さえつけながら、もう一つ言いたいことへの切り出しとして、先ほどとは別の角度からミキオさんに関することを聞く。

歌羽は目線を上げて考えてから、

「そーだね……。多い時で週に二日は来てるよ」

「……なら尚更言っとくけど、今後あたしのテリトリーに入る時は魔女狩りとかはやらないでね。ものすごく困るから」

「て、テリトリー?」

訝しげに歌羽は疑問の声を上げる。

……成る程、この反応、さては新人だな?だから、魔法少女のルー

ルを知らないのか。

なら、ここは優しいあたしが教えてあげるわ。

「あのね、魔法少女は各々、魔女狩りをできる狩場を縄張りとして持つてるの。そして、そこで他の魔法少女が魔女が狩ったりするのは、敵対行為になるのよ」

「……もしかして、グリーンフィードがあるからそういうことになってるの?」

「そうよ。特にあたしの場合、グリーンフィードなしじゃ生きてけないわ。だからこそ、こうして事前に注意してるのよ」

……ホームレス生活をするためには、どうしても魔法に頼るしかない。つまり、グリーンフィードはあたしの生命線。なくなれば、あたしは死ぬ運命にあるのだ。

すまないが、テリトリーについては気を張らせてもらう。

「勘違いしないで欲しいんだけど、これは別に、ミキオさんのところに行くな、という話じゃないわ。ただ、魔女関連はトラブルの種になるから、緊急事態以外はそういう部分に気を使って欲しいのよ。もし、勝手に魔女を狩ったら、……半殺しにしてやるわ」

あたしは最後の部分だけ、出来るだけ低い声で威嚇する。

瞬間、それが恐ろしかったのか、歌羽がギョツとした。

「そ、そんな恐ろしいこと言わないでよ。怖いんだけど」

彼女はしばらくしてから、ははは、と乾いた笑いをする。どうやら、嘘だと思いたいらしい。

しかし、あたしは真顔のまま表情を変えない。それは半分、本気だったからだ。

「まさか……。でも、どうしてそこまで……」

……やがて、こちらの思いを段々と理解したのだろう。彼女は一転して、不安げに眉を下げた。

それにあたしは、拳を強く握りながら言った。

「……ごめん。こればかりはしょうがないのよ」

あたしは、もう二度と“自分のもの”を奪われたくない。

そして、それを害そうとする人には、容赦なくいくと決めたんだ。

そうしないと、何も手にすることは出来ないから。

「そっか。色々大変な思いをしてきたんだね」

歌羽何かを察したかのように、目を伏せた。

そして、その顔を更に悲しげにさせて謝ってくる。

「何も知らないのに、ミキオさんのところでああいつでごめん。ミキオさんが良いからいつも心配で、ちよつと過敏になってたかも」

「……そうなの」

適当に答えながらも、あたしはもやつとした。

同情されるのは、大嫌いなのだ。何だか見下されてるようだし、自分の惨めさを直視させられるうな気がする。

「まあ、……別に良いわよ。そんなの気にしてないし。むしろ、アンタ方こそ偉いわね。ミキオさんを支えようとしてあげてるんだから」
あたしは珍しく、「素直」に褒めたたえてあげた。この悪感情を気づかれないように。

だが、歌羽の反応は何処か薄い。

「そういうつもりはないんだけどな。うたはただ、当たり前のことをしてるだけで、支えようなんて微塵も、……!!」

「ん？どうしたの？」

何故か急に顔色を悪くするので、心配になって歌羽に聞く。すると歌羽は、苦笑いを浮かべた。

「えーとね……、うた、ちよつと嫌なことを想像しちやつて。怖くなくてしまったんだあ。この先、魔法少女として頑張れるかなって……」

「……ああ」

もしかして、半殺しって言ったのが悪かったのだろうか？

……まあ、確かにぶつそうな響きだものね。これから相手を注意するときは、もつとやんわりとした言葉選びをしようかしら、なんて、思った時だった。

「……!!」

禍々しい魔力が、肌をピリリと撫でた。

……これは、間違いなく魔女のものだ。

しかも反応からするに、あたし達の方に急速に近づいていって

る。

「何でこんな時に限って……」

少し苛ついたように歌羽はそう吐き捨てると、こちらを向く。

これって緊急事態だよね？と、その顔は言っていた。

それに、あたしは短く領き返した。

「急ぐう。もう時間がないわ」

あたし達は、魔力反応がする方へと向かう。

勿論、最初から全力疾走だ。

あたし達の後ろには、ミキオさんの家がある。このままだと彼の命が危ないのだ。

やがて走っていると、魔力反応が急速に強まる。

魔女の元へ、あたし達が追いついたのだ。

だが、それでびびったのだろう。一秒もたたないうちに、魔力反応は遠ざかろうとする。

思わず慌てるが、しかし、反対方向から突如、無数の蠢く影の手が飛んできた。

そして、空中で魔女の魔力を捕縛すると、スマホの紋章——結界の入り口を露出させる。

その様子は、何もない虚空を掴み、そのまま空間ごと引き裂いたように見えた。

「……良かった。間に合った……」

そう呟きながら向こう側の角から出てきたのは、キュウベえを肩に乗せた魔法少女だった。

身に纏っている衣装は、植物の衣装をあしらった可愛らしいものだ。

だが、表情はまったくと言って良いほどない。

赤く長いロングヘアや、目元を隠す前髪。さらには涼やかな顔立ちが、極寒の冬の如き印象を与えている。

「また、か」

彼女の登場に、場が静かになる。

歌羽は暗い顔をし、あたしもうんざりして、少ししかめっ面になる。

……何でこう次から次に魔法少女がやってくるかな。しかもキュウベえもいつとか、洒落にならないわよ。

「……キミ達は色梨こゆりに、古鐘歌羽？奇遇だね、こんなところで会うなんて」

キュウベえはあたし達を見ると、平坦な声でそう挨拶した。

顔も少女のように、ピクリとも動いていない。本当、見てるだけで腹が立つてくるわね。

「でも、ちようど良かった。二人とも、柘榴の魔女退治を手伝ってくれないかい？」

「手伝い？」

首を傾げて、歌羽が問いかけの復唱をする。

「うん。柘榴はまだ、数日前に魔法少女になったばかりの新人だね。これが初めての魔女狩りなんだよ。だから、経験者のキミ達が彼女をリードしてくれると嬉しい」

いけしやあしやあと提案してくるキュウベえ。

流石にあたしは、不愉快さを隠しきれなかった。

だって、キュウベえはこのテリトリーがあたしのだって知ってる。だというのに、わざわざ新人の子を連れてきたのには、何か意味があるはずだ。

でも、絶対ろくでもないってことだけは分かる。

「……後で洗いざらい、全部吐き出させてやる」

「……？何か言った……？」

「別に。何も言っていない」

柘榴が聞いてくるので、あたしはぶっきらぼうに返した。

機嫌は、今最高に悪い状態だった。

「私も、出来れば二人と一緒に戦いたいと思う。こう見えても私、結構ドキドキしてるから」

しかしそうは言っているが、柘榴の表情はピクリとも動かない。

なんか、掴み所がないというか、ちよつと何考えているのか分からない子だな……。おい。

「……もちろんよ。キュウベえの頼みつてのは尺だけど、むしろ共闘

は、こちらとしては願ったり叶ったりよ。そうでしょ、歌羽？」

「うん。今は戦力が一人でも多くいた方が良いからね」

歌羽はあたしに同意する。

……しかし不安が続いているのか、若干乗り気ではなさそうだったが。

「じゃあ、倒しに行こうか」

あたし達は魔法少女に変身すると、マークの前へ歩み寄る。

そして、現実とは隔絶された魔の空間へと、飛び込んだのだった。

出会い 3

その空間も、結果の例に漏れず実に変なところだった。

天井には大量に吊り下げられた、冷たい監視カメラのスクラップ。四角や三角のブロックを積み上げた、二十メートルはある歪な形のオブジェ。

通路はかなり幅があるが、ガラス張りの壁が両サイドにあるせいで横に行くことは出来なさそうだった。

「ここが、魔女の結界……？」

周りが現実離れしているために驚いたのだろう。

柘榴はしきりに辺りを見渡し、落ち着かない様子だった。

「その反応、最近だって言うのに懐かしいなあ」

その隣でうんうんと頷いている歌羽は、黒を基調としたドレスを身に纏っている。

それは何処か舞台衣装を思わせるデザインで、頭に被ったミニハットもあってか、まるでマジシャンのように見えた。

「最初はビビるよねえ。うたもお化け屋敷とか苦手だったから、パニックになっちゃったりしたんだよ」

怖がったもの同士分かり合えると思ったのか、歌羽は少し嬉しそうだった。しかし、柘榴はキョトンとしている。

「あの……、私全然ビビってないよ」

「……え、そうなの？でもさっきドキドキしてるって言ってたけど……」

歌羽が疑問を柘榴にぶつける。

彼女は、ああ、と何かに気づいたように声を出すと、

「あれはね、ワクワクが止まらないって意味だよ」

「……what?」

歌羽はその言葉が余程衝撃的だったのか、何故か英語で驚きを表現した。

「……いや、あたしもすっげえ混乱してんだけどね。」

正直何言ってるの、こいつ？ってなってるもん、今。

「えーと、どういうことかな？ 結界って気持ち悪いと思わないの？」
「んー、そこまでないかな。私にとっては恐怖より興味の方が勝っているよ。だって、こんな見たことも聞いたこともない不思議な場所、色々知りたいてって思うもん」

「な、なら、一緒に来て欲しいっていうのは一体……」

「何事も、誰かと一緒に行った方が楽しいでしょ？」

柘榴はそこで初めて、口元を少し微笑ませながら言う。

声も若干棒読みではあったが弾んでいて、だからこそこの場においてはとてつもなく軽い。まるで、結界をお化け屋敷か何かの扱いをしているようである。

……ちよつと普通じゃない。あたしはその肝の座りっぷりにただただ驚くしかなかった。

「先行こう。ああ、この先どんな風になっているのか楽しみ」

柘榴は小躍りでもしそうな足取りで先へ歩いていく。あたし達は複雑な面持ちのまま、その後を追いかけていった。

『……あの子、何であんなことが言えるんだろう？ 訳が分からない』
しばらく立った頃だろうか。

歌羽が同意を求めるようにキュウベえとあたしにテレパシーを送る。しかしキュウベえは、首を振るところか、しょうがない、とばかりに、

『柘榴は少し普通よりかわわっているから……』

『絶対少しだけじゃないと思うけど。』

……ていうか、うた、柘榴のこと悪い印象抱いてないけど、何となく嫌な予感がしてるんだよね。この先あの子、何かやらかすかもつて」

『……え、そこまで言うの？ ま、まあ、確かに何を考えているんだろうとは思っているけど、流石に……』

『甘いよ、こゆり。多分あれはそう楽観視して良いものじゃない。でないよ——』

「柘榴!？」

そこで突如、キュウベえが大声を上げた。

次の瞬間、空間を揺らがすほど大きな、ガシャン、という音が響いた。

……何故か柘榴が影の手を大量に召喚し、それでガラス張りの壁にパンチを繰り返していたのである。

お陰で壁には大きな凹みができており、全体に雲の巣のようなヒビの亀裂が走っている。

あたしは唾然とし、歌羽は嫌な予感が早速的中したのがよほど心臓に悪かったのか、若干青ざめている。

キユウベえも無言になり、ようやく口を開いたのは一分後だった。

「……何でこんなことをやったんだい？」

すると、柘榴はいつの間呼び出したたのか、人間の顔の大きさはある大きな石の円盤を手に持ち、ただ一言こう言った。

「なんか、この壁を壊さなきゃいけないってふと思って」

「……つまり勘ってことかい？」

「うん。そうだよ」

キユウベえの話し方は質問するというよりも、確認する語調だった。

そしてそれに、柘榴は小さく頷く。

「何じゃ、そりゃあ……？」

あたしは苦笑いさえ出来ず、困惑の声を上げた。

普通、そう思っただけでそこまでするか……？歌羽の言った通り、

こいつ結構、〃あれ〃なんじゃあ……？

「ああ……、この先が不安過ぎる……」

歌羽は耐えきれないといったように、お腹を抱えた。

……恐らく、歌羽は心配性なのだろう。そのため、柘榴の行動にストレスを感じ、胃でも痛くなつたに違いない。改めてあたしは古鐘歌羽が不憫に思った。

「っ、危ない!!」

と、その時、上から歌羽目掛けて、銃弾の嵐が押し寄せた。

あたしは咄嗟に彼女の前に出ると、液体金属で作り上げた傘のような形状の盾を展開。攻撃をすべて防ぎ切る。

「大丈夫？」

「う、うん。ありがとう」

歌羽は礼を言いながら、自分を攻撃してきた相手——黒くて無骨な形をしたドローンを見上げる。その機体には大きい監視カメラと機関銃をくくりつけいる。

そして既に空には、その一体だけでなく同じ種類の者がいくつも現れ始めていた。

「使い魔……」

警戒するように一步身を引き、歌羽は自身の武装であろう、十メートルほどの大きな鍵を召喚する。

あたしも、盾を構えて空を睨みつけた。

……しかし、ここでも柘榴はびびった様子を見せず、しかも一人、無防備に自然体でいた。まるで、何かを考えているように。

「早く臨戦体制を取るんだ、柘榴!!」

キュウベえが慌てたようにそう言うが、柘榴は動かない。

むしろ目を伏せ、深く深く熟考するかのような素振りさえ見せる。

そして——壁の方へ向き直ると、そこへ先程と同じように影の触手で。パンチを繰り返し始めた。

「ちよ、ちよつとアンタ!!こんな状況で何やってんのよ!!」

あたしは思わず苛ついて、柘榴を叱咤する。

このままでは彼女は攻撃の的になるだけだ。わざわざ危険なことなど、あたしははして欲しくはなかった。

「ごめん……!!でも、何かやつぱり壊さなきゃいけない気がするんだよ……!!」

「……はあ!!そんなことやって何に——っ!!」

呼び掛けようとする刹那、柘榴へ向けて使い魔の監視カメラから虹色の光線が放たれた。

それは柘榴の隣の地面に直撃し、衝撃で彼女は倒れそうになる。だが、それでも。彼女は気にした素振りを見せなかった。

堂々と使い魔相手に背を向けて、より一心不乱に作業を進めていく。

その姿に、言葉も出ない。

あたしは正直、柘榴のことが理解ができなかった。

どうしてそれほどまでに、自分の勘とやらを信じられるのだろうか。そんなもの、この状況であてになるのかも分からないっていうのに。「こゆり、こうなったら柘榴はほったらかして、うた達だけで使い魔の迎撃をしよう。柘榴なんかは構ってたら、うた達もやられる」

歌羽が覚悟を決めたような顔をして、あたしに呼びかける。

だがそれが冷徹な意見の思えて、あたしは反対の意を瞳に込めた。

「でも、このままじゃ柘榴が……!!」

「悪いが歌羽の言う通りだ。こうなった柘榴を誰も止められない。今は使い魔を倒すのが最善策だ。それに柘榴のことなら、キミ達が戦いながら守れば良い」

「そういうことだよ、つと!!」

掛け声と共に歌羽が鍵を振ると、空中にて鳥籠が現れた。

それは内側から鎖を伸ばして使い魔を一変に捕縛。体の中に収めて自分ごと圧縮した。

……だが、わらわらと使い魔はやってくる。そして、こちらの心境などお構いなく、その機関銃をこちらに向けるのである。

流石に背筋に冷や汗が流れる。あたしはようやく、澁々ながら覚悟を決めた。

「……分かったわよ!!こうなったらあたし一人で全部倒してやる!!援護を頂戴!!」

「え、あ、うん!!」

歌羽はあたしに圧されるように頷き、鍵を構え直した。

あたしは盾を硬鞭に変形させる。

それは最近見つけた、最もあたしの手になじむ武器だった。

ドローンの元へあたしは一直線に走っていく。

もちろん、機関銃の散弾はあたしに集中するが、そこは歌羽のサポートが入る。

彼女は鳩の形をした黄金の魔力弾が次々と放ち、銃弾を相殺させてくれた。

あたしは高く飛び上がると、近くのブロックを積み上げた柱の天辺に足をつけ、さらに飛ぶ。

そして、一閃。すれ違いざま、二つのドローンに硬鞭を叩き込む。あたしはその後オブジェを足場にしながら、ドローンの注意を引くようわざと攪乱するよう動いていき、次々と攻撃を仕掛けた。

誰もあたしのスピードにはついて来れない。一秒で接近して、次の二秒で落とす。三秒後には次のドローンが餌食になっている。

「ふっ!!」

あたしは柱の上に立ちながら、機関銃が乱れ打つ銃弾をすべて正確に弾く。

ドローンはそれで遠距離を諦めたのか、体当たりを試みた。

しかし、あたしはタイミングを合わせて体をずらして避け、硬鞭で使い魔を遠くまで弾き飛ばしてやった。

これで、全滅だ。地面には、ドローンの部品が散乱している。

「すぐ……。全部一人で倒したなんて……」

歌羽がびつくりしたようにそう呟く。

あたしはそれに首を振り、その言葉を否定した。

「これで、終わりじゃないわ……」

油断は許されない状況だった。

まだ、来ているのだ、使い魔が。それも先ほどより数は倍である。これにはあたしも、食い止める自信がない。

ここは逃げるしか……、あたしは自然とそう考え始める。

しかし、その思考に至るまでもう遅かった。

ふいに、ズズズ、と音が響く。

それは前方と後方、両方の天井から、隔壁が落ちる音だった。

あたし達は予想だにできなかった光景に呆気にとられ、固まってしまふ。

そうしている間に、みるみる壁は下へと降りていき、床と接触。完全に退路がたたれてしまった。

……あれ?これ、絶対絶命ってやつじゃない?

「やばい……」

口から出たのは、焦りの言葉だった。

どう考えても、なす術がない。

歌羽も動揺したのか、もう駄目だー!!と腹を抑えている。

「ん d t k d k t t t d!!」

使い魔達の監視カメラがの前に虹色の光が集い、力を貯め始める。あれを受けたら、一瞬で丸こげ確定だ。でも、逃げ道が何処にもない。万事休す……そう思った時、さっきから響いていた破壊音が一際、ガリン!!と高い音を立てた。

視線を向けると、柘榴の前にあるガラス張りの壁が大穴を開けていた。

しかもその先には道が続いていて、行き止まりには扉——下の階層へ下りるためのドアがある。

あたし達は驚愕した。

まさかそんなところにドアがあるとは、とてもではないが予想できなかった。

「……失礼するよ」

「!?」「うわ!!」

柘榴は二つ黒い影の手を伸ばし、あたしと歌羽をむんずと掴むと、自分の方へと引き寄せる。

そのせいであたしの体は勢い良く宙を舞い、ジェットコースターもかくやという勢いで落下。

着地は上手くできたものの心臓には大変悪く、肝がとても冷えた。

ちなみに歌羽の方は引きずられたようで、全身埃まみれになっていた。

「急いで向こうへ!!」

キユウベえに促され、あたし達は駆け出す。

追尾するドローン。監視カメラに宿る光は、一層激しさを増している。

「このままじゃ追いつかれる!!あれをやるんだ、柘榴!!」

「うん」

柘榴は石の円盤を掲げた。

それはよく見れば、表には死神——鎌を携えた骸骨が彫られており、裏には植物の柘榴の花のレリーフが刻まれている。

赤髪の少女は、その裏の方へとくるりと円盤を回した。すると次の瞬間、辺りを目が眩むような閃光が包んだ。

恐らく、円盤から光を出したのだろう。

使い魔が面食らったように停止する気配がする。あたし達も視界が潰されていたが、ドアはすぐそこだ。そこへ我先にと一気に雪崩込んだ。

降り立った場所には、サーバや脳味噌をモチーフにしたガラス製の岡が地面から隆起している。

また、あちこちをコードが蛇のようにのたうち周り、周りの機械にはめ込まれた画面は暗い。前の空間とは、えらく雰囲気違った。

「た、助かった……？」

自分が生還したことに、未だ実感が持てない。

しかし、あたしも歌羽も柘榴も、後ついでにキュウベえも、皆ここにいる。

目立った怪我もない。

それを確認すると、あたしは安堵感でほっとため息をもらした。

「さ、さっきはマジで怖かった……。死ぬしかないんじゃないかとさえ思ったもの」

今思い出しただけでも、体に震えが出てくる。一步間違えば、あたし達は終わっていたのだ。

助かったのは、一重に柘榴が自分を信じて壁を壊してくれたからだ。

今更になって、柘榴を意味不明だと思った自分が恥ずかしくなっ

くる。

「柘榴、疑ったりして悪かったわね。……ありがとう。アンタがいなきや、あたし達は今頃死んでたわ」

「……そうだね。その点については感謝するしかないよ」
礼を言うと、柘榴がほんのり……そう、微妙にほんのりと赤くなつた。

どうやら照れているらしい。すごく、分かりにくいが。

「でも、さつきみたいな行動は慎んでよ？柘榴のせいで連携乱れたのは事実なんだから」

「うう……、耳に痛いです……」

ぐさあ、という擬音がつきそうなほど容赦のない歌羽の言葉に、柘榴がダメージを負う。

……なんだろう。何か既視感がある気がするわね。

「……!!三人とも、あつちを見るんだ」

キュウベえの声に、斜め右を見つめる。

コールタールのように濁った色の地面には、前の空間にあつたものと同じような形状の監視カメラが大量に宙に浮かんでいる。

それが、かたまた、と動いていた。

自ら、その機体を震わせているのだ。

「まさかあれは——」

監視カメラから霧のようなものが出て、やがて監視カメラの後ろに、物質を形作る。

現れたのは、スマホの姿をした魔女だ。

本当に、何の変哲もない白い色のスマホである。ただしそれは形だけ。

サイズは異常であり、五十メートルはあろうかという程巨大だ。大きすぎて、携帯というより姿見鏡に似ている程だ。

暗かった周囲の画面に、一瞬で笑顔のマークが浮かび上り、空間が明るく照らし出された。

再生されるのは、けたたましい笑い声。

まったく、耳障りである。何処まであたし達をバカにする気なのか

しら？

「むかつくわね……。あの監視カメラ全部引きちぎって、スクラップにしてやりたいわ」

「……うた、結界の前でも思ったけど、こゆりって結構物騒だよな……」

「仏像……？もしかして、仏像みたいに慈悲深いって思ってくれたの？……や、やめてよ。照れるじゃない……」

「……う、うん……」

何故か歌羽が、遠い目をする。「もしかしたらこの子もこの子で……」とかなんか言っていて非常に不気味だ。

「……あれが魔女。気持ち悪いけど、本当不思議で面白い……」

「落ち着くんだ柘榴。前に出過ぎだ」

そして、普段の無表情とは一点、とても恍惚とした顔をしている柘榴。まさに変態である。

……どうしよう。めっちゃ不安になってきたんですけど。これ、何とかなるの？

そう思っていたら、歌羽が気を取り直して音頭をとった。

「……とにかく、今は集中!!こゆり、柘榴!!三人で協力して魔女を倒すよ!!」

「うん」「え、ええ!!」

あたしは硬鞭を、柘榴は円盤を、歌羽は鍵を構えると、魔女を睨みつける。

それに反応したのか、スマホの怪物は笑いながら監視カメラを操り

——あのドローンと同じ虹色の光線を幾重にも放ってきた。

「やせなこ」

柘榴がすかさず前に出ると、円盤を掲げた。

すると、使い魔の時に放ったのと同じものだろう、白い光が円盤に宿り出す。しかし、今度は辺り一面に広げるのではなく、それを一点に収束。

魔女とは別の白い光線を撃って、虹色の光線を打ち消す。

その刹那生まれるのは、一瞬だが大きな大きな隙だ。

あたしと歌羽は、ほぼ同時と言っても過言ではないタイミングで飛び出す。

そうして急速に魔女に接近。

あたしは硬鞭を、歌羽は大きな鍵を棍棒のように振るって監視カメラをそれぞれ一つずつ破壊する。

まずは遠距離で攻撃できる手段を潰そうと思ったのだ。

だが、うまく行ったのはここまで。

他のものも壊そうとした刹那——味の毛がよだつほどの、大きな魔力を感じた。

何だ、と思った時にはやはり間に合わない。突如として、体を吹き飛ばすほどの衝撃波が前方から放たれた。

それは、どうやらスマホの画面から飛来したもののようだった。魔女が何か超音波のようなものを放ち、あたし達を攻撃したのである。堪らず後方へ下がるあたしと歌羽。

そこへ監視カメラの光線が炸裂するもんだから、あたしと歌羽は散開して境界内を駆け回るしかなかった。

当然、柘榴の方にも攻撃はくるが、彼女はあたし達よりも余裕だった。

猫のように身軽に動き回り、楽しそうに避けるのである。

……いやでも本当、どうしてこんな状況で薄ら笑みを浮かべられるか分かんないわ。

まあ、とにかく、今はあの監視カメラをどうにかしないと。それとあの子巨大スマホも厄介だ。せつかく近づいても、邪魔をされてしまう。

「二人とも、うたに協力して!!」

その時、鳥の形をした金色の魔力弾で光線を迎撃しながら、歌羽があたし達へ大声を上げた。

柘榴はくるりと宙返りをしてからサーバの一つに飛び移ると、それに問い返す。

「協力って言ったって、具体的に何やれば良いの?」

「スマホを前に倒して、その重みで監視カメラを壊す!!そしてその隙

に魔女を倒すの!!」

「成る程。魔女の攻撃手段を潰した上で安全にし、確実に殺す、か。キミらしい案だ、歌羽」

確かにその作戦は、理に叶ったものだった。

監視カメラはスマホの前に丁度浮かんでいるから、上手くいけば一網打尽にできる。

光線も打てなくなるし、画面をうつ伏せにしてやれば超音波も放ちようがない。

つまり、魔女を無防備にできるって訳だ。

あたしはニヤツとらしくもなく笑った。魔女を一方的に倒せるのは、ちよつと面白いなって思ってしまったのである。

「なら、とどめはあたしがするわ!!多分この中じゃ攻撃力は一番高いだろうし!!」

「分かった!!柘榴、魔女を引き付けて!!」

「うん」

頷くや否や、柘榴は手に持つ円盤をくるりと死神が描かれている方に裏返す。

瞬間、彼女の影から虚な手が伸び、光線を掻い潜りながら魔女に接近する。

それは結局、放たれた超音波によって阻害されたが、しかしそのお陰で隙が生まれる。

歌羽はすぐ様地面から鎖を伸ばしてスマホに絡めさせ、力一杯前に引っ張った。

ずしん、と計画通りうつ伏せに倒れる四角い板。その体に監視カメラが下敷きになって潰れたり、吹き飛ばされたりして残骸となっていく。

「こゆり、今!!」

歌羽があたしに合図をする。

あたしはそれに合わせて、走り始めた。

「ああああああああああああ!!」

飛び上がり、持っている硬鞭に魔力を縫わせて、その温度を一気に

上昇。鉄を熱する。

そしてそれをスマホの体の上から突き刺し——魔女は霧のように消えて行ったのだった。

出会い 4

結界は消えた。風景が路地裏へと戻っていく。

あたし達も変身をとぎ、普段の姿へと戻る。

ふう、と溜息をつく。

今回の魔女は、色んな意味で強敵だった。特に結界自体が罠として機能するなんて考えたこともなかった。

……やっぱり、慣れてきたから油断してたのかもしれない。これから先生き残るためにも、注意していかないと。

その思っていた時、突然ドン、という衝撃が体を走った。柘榴がはしゃいで、あたしと歌羽をまとめて抱きしめたのである。

「やったー!!勝てたよ!!」

「うぐ!!……く、首がしまつて……」

腕の当たりどころ悪かったらしく、歌羽は青くなっている。

あたしの方は歌羽ほど苦しくはなかったが、すっかり戸惑ってしまった。

「な、ななな……、何をして……?」

「ハグだよ」

「そ、それは分かるけれども……!!」

だからって、いきなり抱きしめる奴がどこに居るのよ!!火が出るぐらい恥ずかしいんですけど!!

「ありがとう!!魔女狩りがこんなに上手くいくなんて思ってたよ!!これも二人のお陰だよ!!」

しかし、そんなあたしの心の叫びには気づかず（当たり前ではあるが）更に柘榴は抱きしめる力を強くする。

流石に助けてくれ!!とキュウウえを見るが、彼は知らんぷりだ。

この野郎……。あとで痛い目みさせてやる……!!

「ぞ、ぞうがな……?こゆりはどもがく、うだ、あまり何もやつでないんだけど……?」

歌羽が喉を圧迫されているためか、濁音混じりの声で苦しそうに問い返す。

それにキュウベえが柘榴の代わりに答えた。

「何を言っているんだ、歌羽。キミが指揮をとって、戦いに一番貢献したじゃないか。」

まあそれを抜きにしても、魔女戦においては三人とも、初めての割に連携が取れていたと思うよ。キミ達、案外チームとしてやっていくんじゃないのかい？」

「ち、チーム……、マジで？」

胡乱に思い、半目になって聞くあたし。歌羽も予想外の展開に返事に困ったような反応をしている。

だが、柘榴は本気にしたらしい。一層はしやぎ、キラキラした目であたし達を見た。

「本当？なら、チームを組もうよ!!二人となら心強いし、魔女狩りも楽勝になるよ!!何より楽しそう!!」

「……」

あたしは思わず、その目から顔を背ける。

「楽しそう」とかいうふわついた理由が、何故かあたし自身を馬鹿にされているように気がして、気分があまり良くなかったのだ。

……それに、魔女狩りが楽勝になることなんてない。どうせ、あれは「まぐれ」だったんだから。

「……無理よ」

「……？」

柘榴がぼかんとする。あたしがあまりにもはつきりと、断ったからだろう。

「何で……？」

「……連携が取れたとか、気のせいだからよ。あれは歌羽が頑張って指示をしたからそなんとなっただけ。また一緒に戦ったら、どうせガタガタになるわよ」

「それはただの屁理屈じゃないのかい？指示を聞くにしても、協力しようとしなければ、ああも上手くはいかなかった」

キュウベえが何か言ってくるので、あたしはムツとして睨みつける。

「馬鹿言わないですよ!!上手くいつていたとしても、あれはまぐれ。まぐれなのよ!!だからあたしはこの子と一緒にいちゃいけない!!最初から組まないほうが良いに決まってる!!」

「……やれやれ。ここのも情緒不安定だとやりにくいね」

小動物は困ったような仕草をした。

怒りが自然と込み上げてくる。だって、しようがないじゃないか。さゆりが死んでから、どうしてか感情が止まってくれないんだもん。

「……ねえ、どうしても駄目なの?」

柘榴は悲しげ瞳を少し揺らす。あたしはそれに、首を縦に振った。

「……ていうか、良い加減離してくれるかしら。歌羽が死にかけてる」「え、うわ、ごめん」

柘榴が慌てて抱きしめるのを止める。顔を青くさせるどころか、口から泡を出していた歌羽は解放されて、必死に深呼吸を繰り返している。

……そうしてしばらくたってから、彼女は何とか元の顔色に戻り、柘榴の誘いを断った。

「ごめん、柘榴。……うたも、チームは組めないかも。……悪いけど、団体行動って苦手でさ。上手くやっていける自信がまったくない」

「ええ〜……」

柘榴は僅かに眉を下げる。テンションがただ下がりなのは、見ていて明らかだった。

そんな彼女にキュウベえが、仕方がないよ、と言って慰めた。

「またチームが作りたいと思ったら、別の子を誘えば良い。牛木草にはまだまだ、色んな魔法少女がいるのだから」

「ちえ……、分かったよ」

すっかりいじけてしまったらしい。柘榴はそっぽを向く。

しかし、地面にあった“それ”を見た次の瞬間、不思議そうに首を傾げた。

「ん?何あれ?」

その視線の先にあったのは、アスファルトに刺さった、黒くて球状の寶石だ。

あたしも、今初めて気がついた。どうやらあの魔女は、
「当たり前」だった。らしい。

「キュウベえ、これ何なんなの？」

「グリーンフシード。魔法の卵であり、ソウルジェムの穢れを取り除いて、魔法少女の魔力を回復できる便利な代物だ。時々魔女を倒すと落ちてくるんだ」

「へく、なら早速浄化を……って、いきなり何するの？」

無遠慮にグリーンフシードに伸びる柘榴の手を、歌羽が自分の手で遮った。

驚いているあたしと柘榴の目の前で、歌羽は厳しい顔をして言った。

「……ここはこゆりの縄張りだから、勝手に拾っちゃ駄目。まずはこゆりにこのグリーンフシードをどうするか聞かないと」

「どういふこと……？」

無表情のまま、僅かに小首を傾げる柘榴。

歌羽は沈んだ口調で、説明した。

「うたもさつき初めて知ったけど、その魔法少女がグリーンフシードが手に入れられる範囲、つまり魔法の狩場が、そのまま魔法少女の間ではテリトリーになっているんだって。」

今回は非常事態だったから一緒に戦ったけど、普通じゃ敵対行為なんだよ。だから、ここはこゆりの顔を立てないと……」

「……、何、その面倒くさいルール」

柘榴はテリトリーのことを初めて知った時のあたしと、全く同じような感想を口にした。

「……グリーンフシードなんて、互いで融通し合えばいいじゃない。魔法少女ってのは危険な仕事なんですよ？それなのに、自分達でいがみ合って馬鹿げてる」

「まあ、そうなんだけど、そう上手くもいかないんですよ。赤の他人と協力できる奴はどれくらいいるの？皆、柘榴が思ってるより冷たいよ」

イラつくぐらいの綺麗事に、歌羽は自分の考えを述べる。

その意見は厳しくもあつたが、正しいと思えるものだった。

この世の中、優しい人ばかりではない。悪意はいつもあたし達の身の回りで渦を巻き、いつ襲い掛かってきてもおかしくはないのだ。

でも、柘榴は、えく、と言つて訝しがっている。どうやら歌羽の言っていることが認められないらしい。

……ちよつと心配になつてくる。いくらなんでも、警戒心がなさ過ぎるように思えたのだ。

「こゆり、グリーンフシードはどうするんだい？」

「皆で使う」

キュウベえが柘榴の肩から降りて、こつちへ寄つてくる。

あたしは魔女の種を拾いあげ、ぼそりと答えた。

「良いの？グリーンフシードは貴重で大切なものだつて……」

「別に良いよ。どうせ独り占めしたら、なんかあたしだけ悪者みたいになるし」

歌羽に気を使つてもらつておいて、そんな横暴な態度を取るの流石にできない。

それにグリーンフシードをあたしだけの物だと主張したら、柘榴が何か言つてきそうで面倒くさい。

「でも、これも今回限りよ。歌羽には既に言ったと思うけど、今後あたしの縄張りで魔女を狩つたら半殺しにするから」

グリーンフシードを自分のソウルジェムに当てて浄化しながら、あたしは目の前の魔法少女達を睨みつける。

反応はやつぱりまずまずで、歌羽は釈然としないが仕方がない、といった雰囲気を出し、柘榴は面倒だなくと真顔で呟いた。

そして、柘榴はあたしが歌羽にグリーンフシードを渡している間にも、キュウベえと話を続けた。

「ねえ、縄張りの問題つてどうにか何ないんの？」

「解決するのは難しいね……魔女狩りをするのは命がけだから、皆、見返りは自分の元に独占しておきたいんだよ」

「でも仲間同士で助け合えば……」

「テリトリー問題がある限り、魔法少女は基本孤立する。周りが敵だ

らけなのだから、簡単に他者を信じられないんだよ」

「……そうなんだ。だから、早島に行った時見かけた水兵の魔法少女の子は一人だったのか……」

何気なく柘榴が発した一言に、あたしは目を見開く。

早島。魔法少女。一人。

それに合致する特徴を持つものは、あたしが知る中では、あいつしかいない……。

つまり……、

「柘榴、アンタ、サチを見たの？」

「サチ……？」

柘榴と歌羽が、揃って訳が分らなさそうにする。早島にも魔法少女にも縁がないため、当然サチのことが分からないのだろう。

「早島で活動してる、あたしと同盟関係にある魔法少女よ。こう、肩まで髪があつて、小学生ぐらい、いや実際小学生んだけど、その中でも小柄な身長で、気の強そうな……」

「ああ……、確かに私が見たのはそんな感じの子だったかも」

ジェスチャーをしながらサチの容姿を説明すると、柘榴はそうだと頷いた。

「一体いつ見たの……？」

「三日ぐらい前かな。」

早島で雑貨屋に行った時、丁度一人で静かだったからかな。裏で物音が聞こえたんだ。それで様子を確認したら、そのサチ？って子が魔法の結界から出てきてさ。私、もう興味津々になって、魔法のことが知りたくてキュウベえと契約したんだ」

「……、なんてことを……」

それを聞いて、嘆いてしまう。

……あたしが言えた義理じゃないが、そんな単純な理由で契約してしまうなど、考えなしにも程がある。

それでどれだけ酷い目に合うか、あたしはつい最近になって思い知った。

だからこそ胸が痛く、キュウベえの卑劣さに怒りが込み上げてく

る。

多分この子はサチと同じタイプで、人を信じやすい。……将来あたしよりも嫌なことが起こるんじゃないか……。

ていうか、サチもサチで何やっているんだろう。あたしよりも魔法少女歴は長いんだから、一般人に見られないよう配慮はしていると思うんだけど。

……やっぱり、入理乃が居なくなつて調子が悪くなっているのかもしれない。

それに気づけないなんて、あたしは馬鹿だ……。どう接して良いかわからないという言い訳でサチから逃げて、ほつたらかしにしてしまつてたのだ。

でも、とにかく柘榴のことだけは報告しないと……。柘榴、興味があつたものには何でもツツコミたがるようだし、その内サチのところまで行くかもしれない。

「キュウベえ、貴方うただけじゃなくて、他の子にもそういった詐欺みたいなことしてたんだね……」

歌羽がはつきりと「詐欺」という言葉を強調する。

表情もそれに合わせてか、少ししかめっ面になっていた。

しかし、この白い獣には通用はしない。淡々と流されてしまう。

「ボクは契約を望まれたから、柘榴に答えただけだよ」

何か問題でもと、キュウベえはこちらを見ながら圧をかけてくる。

……あたしが柘榴について聞きたがつているのを、気がついたのだろう。

それで、この場では柘榴と契約した本当の理由は話さないと暗に伝えてきたのだ。

ま、こつちもそれで構わない。こういう話は、じっくりと二人で話すべきだ。

「うん。」

あまりキュウベえを責めないでやって。彼の言う通り、私が望んだただけだもん。魔法少女が危険だろうと、戦っていく覚悟は出来ているんだから」

柘榴はほぼポーカーフェイスながらも、キュウベえを庇う姿勢をとった。

それが妙に、すれ違っているのを感じさせる。戦っていく覚悟とか言っている辺りも、拍車をかけてる。

恐らく、あたし達の言葉の意味を分かっているのだろう。

「……こゆり。そのサチって子に、会わせてくれないかな？」

ふと、何故か歌羽が、そうせがんでくる。

あたしは、サチを他の人と対面させることに不快感を覚えたのだろう。一気に不信感が増し、無言で目つきを鋭いものにさせる。

そんなあたしの代わりに、キュウベえが質問した。

「その理由は？」

「先週、他の場所で会ったベテランの牛木草の魔法少女に、早島の魔法少女が居なくなったから、キミも気をつけろって言われて……、その後色々気になって少し考えてさ、うた、気になることが出来たんだよね。」

それを行方不明になった子と同じところで活動しているそのサチって子に、直接質問したいと思ったんだよ。……これは、うた達牛木草の魔法少女全員に関わることだから」

「……」

“牛木草の魔法少女全員に関わること”。

そう言われては、あたしもサチとは会うな、と強く言うことは出来なかった。

それは柘榴でさえ驚きのリアクションをとるほど、重要なことだったからだ。

「……私、名前とか詳しいことは聞いてないけど、早島の子が二人行方不明になってるってことはキュウベえの話で知ってたよ。でも、それが何で牛木草の私達と関係があるの？隣の市で起きたことじゃない」「だからこそ、だよ。いつだって、脅威が迫ってくるのは隣からだ」

歌羽はぎゅっと、拳を軽く握りしめた。

さつきから思っていたが、結構慎重なタイプよね、この人。見た目からは全然そんな印象ないのに。

「こゆり。歌羽は入理乃までとはいかないが、頭は多少良い。その気になってることが、案外的を得ているかもしれないんだ。

彼女をサチに会わせてくれないかい？それが駄目ならせめて電話させてくれないかな」

「……………良いわよ。事情が事情だから、サチに直接会わせてあげる。あと、すつごく嫌だけど、柘榴もあたし達と一緒に来て」

「え、私も？」

無表情だが、驚いたようなポーズをとる柘榴。あたしは呆れた眼差しを向けた。

「歌羽が言ってたでしょ。その気になっていることは、牛木草の魔法少女全員に関わるものだって。なら当然、柘榴も来るべきよ」

「……………ああ、なるほど」

納得したようにそう呟く柘榴。その後数秒ほど黙り、

「……………こゆり、こつちのこと考えてくれたんだ。グリーンシードも使わせてくれたし、意外と優しいんだね」

「ふえ……………!?!」

ストレートに伝えられた言葉に、つい声を上げてしまう。

こういうのって、あまりされてこなかったのだ。全身がむず痒く なって仕方がない。

「あ、あう……………」

恥ずかしさで顔を赤面させ、俯いてしまう。

しかも、あたしの反応に歌羽が意外そうにしているのが更に恥ずか しかったのだった。



その後あたしは歌羽のスマホを借りると、サチへと連絡を取った。サチは見知らぬ番号に驚いたのか、初めは警戒心を持って出たが、

あたしだと分かるや否やほっとした声を出した。

あたしは丁寧に、一つ一つ事情を話した。特に柘榴の件については我ながら慎重に言葉を選んだ。

そのおかげか特にシヨックを受けた様子もなく、すんなりとサチはその話を流した。それどころか、早く歌羽と柘榴に会ってみたいと言いだし、集合場所を牛木草と早島の境にある空き地にすることを提案。そのまま切られてしまった。

「……と、いうわけで、この場所に来いってさ」

あたしは歌羽に引き続き許可を取ってスマホを使用し、インターネットの地図で集合場所を表示した。

その距離は、電車に乗れば十数分とかかりはしない。だが、柘榴はあちゃーというポーズを取った（もちろんポーカーフェイスで）。

「もしかして、電車代がないのかい？」

「実はそうなんだ。今日は寝坊して学校遅刻しちゃったから、財布忘れてきたんだよ」

「なら、お金を誰か貸してあげたら良いんじゃないかい……？」

「いや、その必要はないよ。二人とも、路地裏から出てちよつと歩道のところで待ってて。うた、すぐ戻ってくるからさ」

「あ、うん」

走ってここから歌羽は離れていく。あたし達は言われた通り、人通りが少ない開けた歩道に出た。

やがて、二十分ぐらい待った頃。道路の向こうから、うるさいエンジン音と共に黒い物体がこちらへやってきて、側で止まった。

それは、サイドカーをつけた中型のバイクだった。その上にはヘルメットをつけた歌羽が跨っている。

あたしは一瞬、キョトンとなった。歌羽のゆるふわな顔と無骨なバイクでは、ギャップがあり過ぎたのだ。

「歌羽、すつごい……。バイク乗れたんだね」

「お父さん、バイクが趣味だから無理やり免許取らされたんだよね。このバイクも、家に戻ってお父さんから借りてきたものだし」

しかし、それでもサイドカーをつけたバイクなどテレビの中だけで

しか見たことがなかった。

こんなものを持っている時点で、歌羽の父親は相当バイクが好きなんだろうなあ。

「ボロっちいから遠慮せず乗って」

「ありがとう」

あたし達は礼を言い、サイドカーに乗り込む。座席に置いてあったヘルメットをつけ終わると、歌羽が頷き、

「時間もないから、制限速度ギリギリまで飛ばすよ。乗り心地悪かったらごめんね」

そう言つて、バイクを発進。文字通り、かつ飛ばしたのだった。

出会い 5

撒き散らされる、低いエンジンの爆音。周りの風景は、物凄い勢いで後ろへ流れていく。

歌羽が操るバイクは現在、国道の道路を疾駆していた。スピードは制限ギリギリのためか、とてもつもなく速い。前の車に追いつくのではないか、と思うほどだ。

しかし、運転は荒くなくガタガタと揺れたりはしない。どうやら予想していた以上に、歌羽はバイクに乗り慣れているようだった。

「良いなあ、良いなあ……。バイク乗れるとかうらやましいな……。ねえねえ、どうやってたら免許取れるの？なんかものすごい勉強しないとイケないとかあるの？」

「割と簡単取れるよ。普通に十六才になって教習所行けば誰だって乗れるようになる」

「へえ……。つてことは、私十三だから、あと三年もあるのか……。」「そこまで焦んなくてもいいんじゃない？中学校は短いからすぐ取れるようになるよ」

「短くなーい。そんなに待てないよ」

マイペースに柘榴が歌羽に話しかけては、歌羽が適当に返す。

さつきからこんな感じで、ずっと柘榴と歌羽の二人だけが会話をしており、キュウベえも時々それに混じっている。

あたしだけが、一人無言でいた。

言わずもがなだが、上手く会話に入り込むタイミングが掴めなかったのだ。意見は言えるようになったが、コミュ症は相変わらず治っていない。

……。まあ、それ以前に話す話題とかもないし、相槌ぐらいしかうてなうんだけどね。

あたしは密かに溜息をつくと、顔を外の方へ向けて耳をこっさり立てた。

話題は先ほどと少し変わり、バイクの免許からバイクを持つ歌羽のことへと変わっているようだった。

「歌羽さー、いつから乗ってんの？バイク」

「んーと、四月……、いや、今年の五月からかな。そこからずっと通学とかどこか行く時はバイクに乗ってるね。お父さん程じゃないけど、バイクって実際乗ってみると意外と良いよ。行動範囲が一気に広がって超楽しい」

「じゃあドライブとかにも行くの？海沿いとか走ったり」

「まあねー。でも、海はないかなー。紫外線強いし。それより町の中走る方が面白いよー。意外と周り見て回るの好き」

……サチが聞いたらブチ切れそうだな。

あいつ、入理乃が行方不明になる前に色々ラインで自分のこと喋ってくれたけど、確か船とか海とか好きじゃなかったっけ。

「……あ、あそこだよね」

その後、どうでも良い話が延々と続き、しばらく経った時。

ようやく集合場所である空き地が見えていた。

その真ん中には、一人の少女の人影——船花サチがいる。

どうやらあたし達よりも速く着いたらしく、最初はこちらに気づいた様子はなかった。しかし、エンジン音を不審に思ったのかきよろきよろと辺りを見渡し、そうして向かってくるバイクを視認するや否や、思わずといったように二度見した。それぐらい、ビックリしたよ
うだ。

バイクが空き地の前に着き、静止する。

あたし達がヘルメットを取って降りる頃には、サチは興奮気味にこちらへ詰め寄ってきた。

「何これ!? すっごくカッコいいんだけど!! こんなの映画とかで見たことない!! あれでしょ? サドカーってやつでしょ!」

うわー、とキラキラした目でバイクを眺めるサチ。

少し意外な反応だ。

……てつきり、またあたしと会ったら気まずそうに思うと思ってた
んだけどなあ。

まあギスギスするよりかマシだけど、なんかバイクに負けた気がして少し複雑な気分……。

「大事な一文字抜けてるよ……。それじゃあ、ドSの人が乗る車になっちやう……」

歌羽が苦笑しながら訂正する。

それはなかなかに上手いツツコミであった。もしかしたら芸人のセンスが彼女にはあるのかもしれない。なかつた。

「もう、なんだよなんだよ、こんなの乗りやがって羨ましい!!これ絶対乗ると楽しいやつ!!」

今までに見たことがないほど、サチが悔しがる。

すると柘榴は、このバイクが自分のものでもないのに何故か自慢するように言った。

「実際楽しいよ!!ビューンって乗ってギュインって速いのもカッコいいし、風がバーってやってくるのが快感って感じでビーンってなるの!!」

「うおお、マジか……。そこまで凄いのか……」

感覚が同レベルなのか、柘榴の擬音表現の意味がサチにはちゃんと伝わったらしい。

素直にバイクの性能に感心している。

「く……。ますます羨ましいじゃん!!おい、そののやつ!!」

「な、何?」

サチに呼びかけられ、歌羽が困惑気味に答える。

どうもサチに圧されているようで、少し腰が引き気味だ。

「後でこのバイクに乗せろ!!お金あげるから!!」

「ええ!?そこまでするの!?!」

「つたりーめだろ!!人に物を頼むんだから、対価ぐらいこつちから払わなきゃいけないえだろ!!」

実に真面目な答えが返答が返ってくる。変なこととで律儀なので、歌羽はますます圧され気味になるのだった。

「……皆、盛り上がっているところ悪いが、そろそろ話の本題に入って欲しいのだけれど」

「あ……」

その時、あたしの足元でキュウベえがそう言った。

そこで全員がハツとし、彼を見る。なんかここまで黙っていたので、若干存在感がなかったのである。

そのせいか、微妙な空気が流れてしまう。

「……ていつてもさ、まずテメエらどっちが歌羽でどっちが柘榴なんだよ。私には判別がつかないんだけど」

サチが困ったように腕を組んだ。

そういえば自己紹介もまだだったし、名前だけしか電話では言っていなかった。これでは、誰が誰だか分からないのも当然だろう。

あたしはやつと口を開けるチャンスだとばかり、率先して歌羽と柘榴を紹介した。

「こっちのバイクを運転していた方が古鐘歌羽。そしてこっちの小柄な方が——」

「江戸柘榴だよ。よろしく。サチ」

ずずいっと、柘榴が相変わらず無表情に自分から前に出た。

瞬間、サチの目の色が厳しいものへと変わる。顔はとても複雑そうに歪められた。

「テメエが、柘榴か……。この船花様を見て、魔法少女になったっていう」

「そうだよ。貴女のおかげで、魔法少女になれたんだ。ありがとう」

素直に感謝の気持ちを述べて、ぎゅっと柘榴がサチの手を握る。

サチはその行為に、一瞬面食らっていた。

「な、何でお礼なんていうんだよ……。私のせいで、魔法少女っていう命がけの仕事をしなくちゃいけなくなつたのに……」

「でも、それと引き換えにして良いくらい、この魔女とか魔法少女とかいう世界はワクワクする。だから、貴女には感謝しても仕切れないのよ」

それにね、と柘榴が続ける。

「私、こんなにも人を助けられる魔法少女ってかっこいいと思うんだ。そんな存在になれて、とっっても誇らしいの」

「……、お前……」

真つ直ぐな言葉に、サチが思わずと言ったように悲しげに目を細め

た。

魔法少女歴が長いサチには、きっと分かっているのだ。

魔法少女はとても醜いものであると。

しかし、柘榴は魔法少女をヒーローか何かのように思っている。

あたしでもその考えがあまりに真つ直ぐすぎて……、綺麗すぎて見て入れられない。

サチは何か言いたげに唇を震わせた。しかし、気を取り直すように首を振ると柘榴に小さく問いかけた。

「願う事は何……？」

「え……？」

「お前は、何を願ったの？」

再び投げ抱えられる質問。

その顔は、意外なことに怒りで染まっているのではなかった。

ただ、くしゃりと泣く寸前のような表情になっているのだ。

「……何をって、力を増幅させる能力が欲しいって願ったよ。どうせ魔法少女になるなら、強くなりたいから」

「……そう。そうなんだ」

胸を撫で下ろすサチ。

……魔法少女の願いは、そのまま本人に呪いとして返ってくるものだ。それがもし自分のせいで起こったらと考えるだけでも、サチは怖かったのだろう。

しかし柘榴は、あまりその呪いが跳ね返ってこなさそうな願いだっただ。

だからこそサチは、安堵したのだ。自分のための祈りは、そうそう自身を裏切らない。

……ただ、「魔法少女」になった際の思いはどのようなだろうか、とあたしはふと思ってしまう。

人を救える存在になれて嬉しい、と言っていたことから、柘榴は結構お人好しな部分があるだろう。

だが、それで通用するほど魔法少女社会は甘くない。……いつか、そのことに絶望する日はくるのではないか、と感じずにはいられない。

い。

「……歌羽。この私に確認したい、気になることって何なわけ？ 出来る限り答えてやるから、遠慮なく質問してきてよ」

柘榴に自分の手を離させると、サチは今度は歌羽に向き直った。

この場にいる全員が、青いワンピースの少女に注目する。

「分かったよ。うたも遠慮なく質問するから。」

……あ、でもその前に一つ聞かせて。貴女、阿岡入理乃とは知り合
いだった？」

「知り合いも何も、阿岡入理乃は私の相方だったよ」

沈んだ口調でサチは答える。口の端を、堪えるようにぎりりと噛みながら。

それに何かを感じたのか、柘榴が一瞬、息を呑んだ。

……しかしそれだけで、何も言わなかった。流星の柘榴も、重要な話を邪魔しようとは思えなかったらしい。

「なら、ますます確かめる価値があるよ」

歌羽は確信したかのように、すっとサチの目を見た。

そうして、

「噂でもなんでも良い。……阿岡入理乃は、織部エルと何か関わりがあったという話を聞かなかった？」

「織部エル……？」

サチが不思議そうにする。それは、彼女にとって全く聞き覚えのない名前だったからだろう。

しかし、あたしはサチと違って驚いていた。だって、あたしはその名前を知っているのだから。

「それ、数週間前に牛木草で行方不明になった女の子の名前じゃない……」

そう。

入理乃が去る前に起こった、行方不明事件。そのいなくなった四人の少女の内の一人の名前が、織部エルである。

……それがどうしてまた、こんな時に唐突に出してくるのか。まったく考えても分からない。

「ああ、そういえば、確か牛木草で何人かなくなっちゃった事件があったんだっけ。」

もしかして、歌羽はその事件と今回の早島の事件が繋がっていると思うの?」

柘榴が歌羽へ、小首を傾げながら聞く。

しかし、即座にあたしがおかしいでしょ、と指摘した。

「いやいや、繋がりがなくなかない?その事件でいなくなったのってただの一般人じゃん」

「違う。……いなくなつた奴ら全員、魔法少女だ」

「……!?!」

サチの言葉に、あたし達は目を見開く。すぐさま、彼女の方へ顔を向けた。

「ど、どういうことよ。魔法少女がいなくなるだなんて……。ていうか、どうしてそんなことをサチが知ってるの?」

「入理乃が、言ってたんだ。牛木草のある魔法少女グループが、魔女によつて全滅した。だから、気をつけろって……」

「……今言つたことは、本当なの?」

キュウベえに質問をふる。すると、ああ、そうだよ、と肯定した。

「ただし、エルはその魔法少女グループには属していない。彼女はあくまで飛雄角の魔法少女であり、そのグループと仲が良かっただけなんだよ。……まあ、たまたまグループと一緒に魔女狩りをしている最中に一緒に命を落とすしちやつたみたいだけど」

「そんな……」

柘榴が言葉を失う。

確かに、運が悪いにも程がないと思う。なんせ、タイミングが違えば生きている可能性も大いにあるのだから。

しかし、しばらくして歌羽は信じられないことを言った。

「でも、うたはその織部エル……、生きてるんじゃないかと思ってる」

「……え?」

その途端、皆が驚愕して息を飲んだ。動揺が広がっていくのが分かる。

その中で、柘榴が真つ先に歌羽に疑問をぶつけた。

「な、何でそんなことを言えるの？今さっきキュウベえが全員死んだって……」

「……それが詳しく聞くと、キュウベえは魔女結界にグルーブが入り込んで、誰も帰ってこなかったからそう判断しただけみたいなんだよね。」

つまり、……その結界の中で誰が一人でも生き残つてとしてもおかしくない」

あたしはふと、シユレーディングアの猫箱、というものを思い出す。それは有名な思考実験の一つである。

箱に猫を入れ、その中を放射線で満たすと仮定する。

そうしたら、猫はもちろん時間をかけて死ぬだろう。それに耐えられるほどの強度は猫にはない。

しかしその結果は、開けてみないと分からない。一分後でも十分後でも一年後でも、実際に確かめてみないと猫の死は確定できず、理論上その間猫が生きててもおかしくないということになる。つまり、箱を開けるまで猫の生死は曖昧になり、どちらの可能性も存在するのだ。

歌羽の考えも、まさにその思考実験と酷似している。

結界内にいた魔法少女全員が “死んだ” ことを、誰も観測していない。だから死は確定せず、“生きている” 可能性もまた、存在し続ける。

「事実エルのことについて知っている人……、うたに気をつけろつて言ってくれた魔法少女の人に後日確認してみると、エルの固有魔法は瞬間移動だったの。」

だから、彼女ならどうにか生き延びることが可能だと思う」

「……なるほど。なんとなく理解できたよ」

キュウベえが頷く。

彼はさつき歌羽が喋ったことだけで、もう何が言いたいかを察したようだ。

「つまり、キミはエルが入理乃達を連れ去った犯人なんじゃないかと

疑っているわけだね？」

「うん。」

瞬間移動使えるなら魔法少女の一人や二人ぐらい連れられるか
なって。それにエルはうたの幼馴染で、彼女がミズハに恨みを持って
いるってことよく知ってる。……だから、やりかねないと思う」

「恨み……？」

サチが訝しげに復唱する。

「ミズハ、竹林明人たけばやしあきとっていう同じクラスメイトの男の子を、いじめで自
殺させちやつてるの。」

そしてその明人君は、両親の離婚で離れ離れになった、織部エルの
実の弟なんだよ……」

「嘘……、だろ？」

サチが絶句する。

……あたしでさえ、お腹の底が冷えたのだ。ミズハの知り合いであ
るサチなら、尚のことショッキングすぎる事実だろう。

「で、でも、そこまで憎まれるべきなのかな、あいつ……。ミズハ、無
理やりクラスメイトにいじめを強制させられたうえに、その罪悪感か
ら引きこもって外にも出られなくなっちゃったって、入理乃が話して
ただけど」

「……そんなこと、エルも知っているよ」

歌羽はため息を吐いた。

瞳にはなぜか、何処か諦観と無気力な感情が宿っている。

「それでも、エルにとっては明人君はたった一人の、血を分けた弟なん
だよ。しかも、明人君はミズハに恋愛感情があつたらしいからね。そ
の分だけ憎しみは募っちゃてるみたいで……」

「つまり、どうしようもないってことかよ……」

「そうなるね……」

何というか、胸が痛い話である。

ミズハもその若林の加害者であるとはいえ、ある意味いじめの被害
者に変わりはない。それが、若林が死んだり、その姉に恨まれたりと
とんでもなく不遇だ。

……こんな境遇、あたしだったらおかしくなってるかも。

「サチ。入理乃は、ミズハと仲が良かったの？」

歌羽は次に、入理乃とミズハの関係性について聞いてくる。それに、サチはつまらなさそうに言った。

「昔ね。私はある日ミズハのことよく知らないけど」

入理乃とは違い、サチにはミズハとの交流がなかったらしい。

繋がりといえば、縄張りを互いに争ったぐらいなものなのだろう。

「……なら、エルが入理乃を攫う動機は十分ってわけだ。」

きつとエルはミズハの復讐のためにそんなことをやったんだ。そして次は、ミズハと深い関わりがある人達や、明人君をいじめた他の人に被害がいくかもしれない。下手したら、ミズハと関わりがあった他の牛木草の魔法少女も被害にあって、混乱が生まれ——」

「違うんじゃない？そのエルって人は、入理乃とかミズハを攫ってないと思う」

その時、柘榴が歌羽の言うことを遮った。しかも、はつきりとした言葉で。

これには少し、歌羽がピリつく。

「どういうこと？……また、勘違ってやつ？」

「そうだよ」

柘榴は自信満々だ。やはり、自分の言うことを何の根拠もなく信じているのだろう。

だが、今回ばかりはあたしも柘榴の言うことには賛成だ。

歌羽の説は、どうにもこじつけくさいのだ。

死んだ友人が実は生きていて、ミズハを恨んで攫い、更に入理乃まで攫ったってのは、大分飛躍しすぎと言うか、無理があると思う。

それにミズハは知らないが、入理乃は自らの意思で行方くらませている。これは、誘拐事件でもなんでもない。

「歌羽。残念ながらキミの仮説は、柘榴の言う通り違うと思うよ」

「……」

今度はキュウベえからも否定され、歌羽は恐ろしいぐらい無言になる。

その胸中に何を思うのか、その表情からは読み取れない。

「……入理乃は行方不明になる前に、手紙を残しているんだよ。そこにはつきりと、自分の意思でサチの元から離れることが書かれている。」

また、エルの瞬間移動も結界を脱出できるものではない。彼女が生存している確率は限りなく低い」

淡々とキュウベえは、歌羽の仮説を否定していく。

まあ当然と言えば当然だろう。その仮説はこじつけのような、根拠も薄い論理で構築されたもの。柱がすっかりしていない家だって、すぐに壊れてしまう。

そのことを自覚しているのだろう。歌羽は特にキュウベえに言い返したりしない。

「……そこまで、はつきり言っちゃうかな」

やがて、歌羽は苦笑した。それは苦々しく、というよりも、何処か自嘲するようなもので。あたしも、柘榴も、サチも、声をかけられなかった。

「……キミらしくないね。どうしてこんなこじつけに近い説をボクに聞いてきたんだい？」

「……」

歌羽は目を合わせたくないとばかりに、視線をキュウベえから外した。

それが、何かを認めたくないという現実逃避のようにも見えて、あたしは思わず、首にかけていたペンダントを握りしめた。

自分を誤魔化してきた、あたしには分かったのだ。

歌羽もまた、自分を誤魔化したかったんだと。

友人が一ミリでも生きている可能性を信じたかった。

だから、こんなこじつけみたいな説を考えて、それを本当のことと思おうとしたに違いない。

「……。……何を信じちゃってるのよ。馬鹿馬鹿しい」

「……こゆり？」

皆が変な目であたしを見る。それに一瞬全身が火照るぐらい恥ず

かしくなったが、ここは我慢して気を強く保つ。

そして、びしつとキュウベえを指さした。

「こいつは詐欺師よ？基本こいつが言うのは、都合の良い言葉だけ。それなのに簡単に信じちゃ駄目でしょ」

「だ、だけど、エルはミズハと入理乃の事件とは何の関係もないって……」

「手紙を残したのは入理乃よ。ミズハは残していない。エルがミズハを攫らったという可能性はまだ残っているわ。それにアンタが言ったじゃない。エルが死んだところを誰も見てないって。つまり、エルが生存していることだってあり得るのよ」

一気に喋ったところで、深呼吸をする。どうも我ながら興奮しているらしく、息が続かないのである。

「こゆり、それは屁理屈——」

「屁理屈じゃない」

あたしはキュウベえの言葉をわざと遮り、そう否定した。

その赤いビー玉の目をまっすぐ見て、睨みつける。

「……屁理屈じゃないんだよ。信じ込みさえすれば……!!だから——」

「お、おい、もう止めなよ」

「サチ……」

呼びかけられ、船花サチの方を見る。彼女はほおを人差し指でかきながら、

「気持ち分かるけど、ちよいと落ち着けよ……」

周りを見渡す。

あるものは複雑そうに。そしてあるものは興味深そうに。

皆、それぞれ反応をしてあたしを注視している。

……それをこつちも見ていると、すぐに自分の行動が馬鹿馬鹿しくなってくる。

「……分かったわよ」

はあ、とため息をつきながら、そっぽを向いた。

一方のキュウベえはマイペースに耳の後ろをかく。あたしは一瞬

イラツときて、目つきを不機嫌なものにさせた。

「こゆり、あの……、なんといいばいいのか分からないけど、励まそうとしてくれたんだよね？」

歌羽が胸の辺りで手を持ってきて、そう感謝の言葉を言ってくる。

しかし、あたしは首を振った。

自分は、そこまで優しくもないからだ。

「そんなことしてない。ただ、こいつの言うことってムカつくから否定したくなったのよ」

「……えー、でもでも、今は明らかに……」

「ちーがーいーまーす」

あたしは不満を露わにする様に、口を尖らせた。

柘榴がめんどくさいなーと無表情に言う。

「……ねえ、歌羽。何でこの人はこんな天邪鬼なの？」

「う、うたに聞かれても困るんだけど」

困り気味に歌羽が苦笑を浮かべる。

「……で、他に何か聞きたいことはないの？」

あたしの方に話題がいたったためか、少し拗ねたような声でサチが歌羽に聞く。しかし、彼女は静かに首を振った。

もう確認するべきことは確認した、ということだろう。

「こんなことに付き合ってくれて、ありがとう。……とところでうた、ちよつと用事を思い出したからさ、帰らせてもらいたいんだけど……」

「うん。分かった。あ、でも今度、バイクには乗せてよね？約束だよ？」

無邪気に子供っぽくサチは笑う。粗野な態度は微塵もない。

歌羽は毒気が抜かれたように、こくりと頷いた。

そうして、彼女はバイクの後ろにあるホルダーからヘルメットを取って被り直し、座席に跨る。柘榴も続いてサイドカーに乗り込んだ。

しかし、あたしは搭乗できなかった。サチがあたしの手を掴み、バイクの方へ行こうとするのを止めたからだ。

「……ま、待つて。テメエにはまだ話したいことあるんだ」

「話したいこと……？」

「うん。だから残って」

「……分かった」

了承すれば、サチはほつとしたようになる。多分あたしが断るとでも思ったのだろう。

「ボクもまだここにしよう。こゆりの方から話があるみたいだからね」

何故かキュウベえもこの場に残ることを言ってくる。

あたしはギョツとした。まさかこのサチがいるタイミングで話をしようとするとは思っていなかったからだ。

警戒して、密かに小動物を睨みつける。キュウベえは、やはりあたしを意にも返さず、無表情を返すだけだった。

「じゃあ、また。色々ありがとね、こゆり、サチ」

「バイバイ、三人とも」

バイクがエンジン音を出しながら去っていく。

その姿はみるみるうちに小さくなっていき、消えていった。しかし、あたし達はしばらくの間そこで立ち尽くし、じーと前を前を見続ける。

二人つきり（正確にはキュウベえもいるが）になると、やっぱり気まづくなってしまったのだ。

もちろん何か喋ろうと思ったが、口は開かない。言葉だけが頭の中を飛び交っている。

そしてそれはサチも同じようで、目をきよきよとさせながらそわそわしている。

だから、その場で最初に声を発したのはキュウベえだった。

「……サチ、もしかしてボクがいるからこゆりに話をしづらいのかい？ だったらしばらく席を外すけど……」

「……………いや、そこまで気をつかはなくて良い」

サチがゆつくりと首を振る。まるで、決意したかのような顔で。

あたしは酷く緊張しながら尋ねた。

「……えーと、その……。話つてのは、何なの……?」

「……こゆりはさ、仲間が欲しい……。とは思わない?」

「え……?」

心臓がどくと跳ね、激しく戸惑う。

……まさかそんな言葉がサチの口から出るとは思いもよらなかったのだ。

「仲間つて……。まさか……」

「うん。仲間。私……。こゆり以外にも、仲間が欲しい」

「……!」

サチは小さな声量で、しかしはつきりとその言葉を口にする。

瞬間、あたしは少なからずショックを受けた。

……それは、ミキオさんの時のように、僅かながらにも期待をしていたからかもしれない。サチも、あたしと同じ考えを持っているんじゃないのかって。

でも、やはりあたしの想像通りなわけがなく。こうして、あたしが望んでもないことを言う。

「ど、どうしてそんなこと言いだすのよ……。あたし達は、入理乃に裏切られたばかりなのに……」

身勝手な怒りを飲み込みながら、あたしは出来るだけ平静を装った。

しかし、意識しないうちに声の響きが自然と低くなる。

そのせいか、サチは申し訳なさそうにしていた。

「……ごめん。でもさ……。このまま私達二人だけじゃあ、潰れるような気がして……」

「潰れる……?」

「うん……。私……。正直いうとね、寂しくてどうにかなりそうなの。それに、こゆりだつてどうせ一人で辛いんでしょ?このまま二人でいたら私達……。駄目になるんじゃないかな?」

「それは……」

否定しようにも、あたしにはできなかつた。

何故なら、今のあたし達の関係がとても良くないものだ、というこ

とを自覚していたからだ。

……互いの精神状態は不安定で、微妙な距離感。

そんなの……、いつか崩れ去る。上手くいくはずもない。

それをサチは、限界だと断じたのだ。

「……でも、アンタ入理乃のことは……」

あたしは本当にいいのか、とサチに問う。

今この時期に仲間を作るということは、入理乃による喪失感を他人で埋め合わせする行為だ。

それに、耐え切れるのだろうか？ なのよりも入理乃を大切にしていた、サチに。

「もちろん、……それは考えたよ」

「なら——」

「だけど……。さつきも言った通りもう耐えられねえんだよ」

サチは頭を振りながら、そう悲しげに言った。

「……私、入理乃に裏切られて心に穴が出来てる。それを埋めるのは、こゆりだけじゃ足りない。足りないんだよ……」

「……、あたしは……」

落胆。そして、これは仕方がないことだ、という思いが混じり合う。

あたしはサチから目を逸らしていた。逃げていた。

だからこの色梨こゆりは、彼女の仲間として役不足になってしまったのだ。

……情けがないことに。

「……こゆり。サチの意見にボクも賛成するよ。キミには仲間が必要だ」

キュウベえがきつぱりと断言する。

嫌いな奴にまでそんなことを言われて、あたしは奥歯を強く噛み締めた。

「……今ここで、キミがボクに聞きたがっている質問に答えよう。ボクが柘榴と契約した理由、それは魔女の管理のためだ」

「魔女の管理……？」

問い返すと、キュウベえは尻尾を一振りした。

「そうだ。最近、牛木草問わず、魔女が増え始めている。だから、ボクは魔法少女を増やしたんだ」

「……あたしだけでは、魔女に対処できないとでもいうの？ていうか、本当にそれだけのことで柘榴と……」

あたしはサチにちらりと視線を移す。

彼女は案の定、微妙な顔つきになっていた。どうやらあたし達の話聞いて、複雑な気持ちになったらしい。

「これはとても重要なことだよ。魔女が増えれば一般人が死んでしまうんだから。」

……そう、キミ一人だけじゃ、悪戯に事件が発生するだけなんだよ」
「……!!」

キュウベえが、一人、という部分を強調する。

それで、あたしは彼の意図を完全に理解した。……こいつは、あたしと歌羽達を何がなんでもチームにしたいんだ。

歌羽達についていかずこの場に残ったのも、あたしがサチの前だと、どうしても強く出れないっていうのを分かっていたからだ。

……一体全体、どうしてそこまで、と疑心暗鬼になる。こういうのは、必ず裏があるものなのだ。

「ごゆり……、キュウベえもこう言っているし、どう？仲間を一緒に探してくれない……?」

サチの縫るように目。

それに不満を出すことも憚られ、しばらく黙る。……そうして、あたしは横に首を振ることも出来ず、考えさせて、と言うしかなかった。

すべてのきっかけ

「……もう朝か……。たつる……」

それはうた——古鐘歌羽が、いつも朝起きた時に発する一言だった。

窓から差し込む目を焼かんばかりの眩しい太陽の光。この時期特有の、肌寒い外の空気。スマホから鳴り響く、けたたましいアラーム音。

その全てが煩わしい。うたはそれらから逃げるように、寝ているベットの毛布で足の先から頭までをすっぽり覆う。

ふわふわとした感触に包まれ、非常に気持ちが良い。

一言で言えば、天国だ。この瞬間が、生きている中で一番幸せと言っても過言ではない。

……あく、もうこのまま、二度寝したいなあ。

学校たる過ぎて行きたくないもん。

授業も勉強も何もかもがめんどくさい。やる気が起きないんですよ、本当。

ていうか、こうして呼吸してるのでさえもめんどくさい。めんどくさいって考えてるのもめんどくさいし、めんどくさいって感じるのもめんどくさい。生きてるのがめんどくさい。

いっそのこと永眠できないかな……。何やってもどうせ無駄だし、どうせ何にもならないのだ。ならもう、このまま——

「歌羽!!いつまで寝てるの!!さっさと起きなさい!!」

お母さんの怒鳴り声が一階から聞こえた。

……あれは間違いなく機嫌が悪い時のやつだな。また昨日、お父さんと喧嘩したのだろう。早く起きないと、八つ当たりの拳が飛んでくる。

うたは仕方なく、のそのそと、まるで芋虫のような動きで毛布から出て、身を起こす。

……ああ、なんて憂鬱な一日の始まりなんだろう。

ああ、めんどくさい。

うたはいつものように、今日もバイクで高校に登校する。そうして、またいつも通り授業を受けた。その時間は、つまらないことこの上ない。先生の話はまるでお経のように聞こえるし、教科書の文字は意味のない記号のように見える。

授業中こつそりと寝たいとも思うが、しかしうたの席は残念なこと一番前なので、真面目にしているふりをしなければならぬ。たるくて、何もやりたくないってのに。

だいたい勉強などに価値はあるのだろうか。必死に学んだり覚えたりしても、大半は無駄なものばかり。数学の定理を、生活のどこの場面で使う？ 文豪の作品を知ったところで、頭などよくなならない。

それに、特に興味もないし。なんか、どうでも良い。何も楽しくない。

一体何のために学校に来ているのか分からない。うたの母親と父親は言った。

将来のために、せめて高校は通いなさいと。

それで嫌々勉強させられて、それなりのところに入ったけど……、今思えば無理やりノートにでもなれば良かった。

学生という身分は、良く考えればうたにとって苦痛でしかない。……進路、というものを突きつけられるからだ。

自分の未来について、自分で考える。自分の未来のために、自分で努力を積み重ねる。

それがとんでもなくめんどくさい。

出来れば、誰かが適当に決めてくれれば良いのと思う。

どうせどこに行っちゃって、つまらないに決まってるもの。……うたは、良い方に何も変わらないから。

「……、いつつ……」

憂鬱な気分になったせいか、ごぼりとお腹の中でガスが蠢く感触がした。

それはゴロゴロと腸で暴れまわり、トイレに行きたくなるくらいの腹痛を発生させる。

数日前から、何故か突然こういった症状が酷くなったのだ。おかげで、気分が悪くなってしよがなくなる。特に授業中は最悪だ。

我慢するしかないので痛みが延々と続き、吐き気さえこみあげる。

……早く、授業なんて終わってくれ。うたは教室にかけられた時計の針を見つつ、そう願うしかなかった。

「連絡は以上だー。来週小テストあるから、勉強しとけよー」

担任の男性教師がそう言うと、教室から出て行く。

これで放課後のホームルームは終わり。今日の学校での予定は終わる。しかし、めんどくさい時間はまだ続く。

「歌羽!!一緒に帰ろー!!」

早速、友達が三人やってくる。

うたは瞬間、ちよつとだけ苦笑いしそうになった。

……胸の内に、もやりとした気持ちが生かんだのだ。

「えー、どうしよつかなく……」

それでも、明るい表情をうたは崩さない。

崩して仕舞えば、陰口を叩かれるというめんどくさいことが起きるからだ。

そうでなくとも、気まずい空気が生まれてしまう。それもまた、めんどくさい。

「もー、そんなこと言わないでよ。意地悪だなあ。このこの」

偽った甲斐もあってか、友達達はうたの気持ちに気づかずこちらをおちよくってくる。

仕舞いにはそれがエスカレートして、こづかれもした。

彼女達は明るく……、端的に言ってしまうえばキャピキャピしているギャル集団で、かなりうるさい。

故に距離感の詰めかたもちよつと強引だったりするのだ。

それを苦手だ、とうたは思う。

馴れ馴れしいのは煩わしく、そしてめんどくさい。

じゃあ何でそんな相手と友達になつていいのか、と言われたら……まあ、〃数日前〃はそのこと自体を気にしていなかったからだ。

さらに言うなら、この子達はうたと行方不明になつたエルが幼なじみだと知らないから、色々都合が良いのだ。

「……ん？」

その時、バックに入れていたスマホからピロン、という音が鳴った。ラインの着信音である。

どうやらマナーモードにするのを忘れていたらしい。

友達に少し待ってもらつて、うたはスマホをバックから取り出し、ラインの内容を確認する。

表示されたのはただ一言、三階の空き教室に来てください。

その送り主はこの前ラインに登録したばかりで、うたに話しかけてくるのはこれが初めてだった。

「……ごめん、一緒に帰れない。先輩が、用事があるから来いって」

「えー、楽しみにしてたのになあ」

残念がる友達。少し申し訳なくなる。

あの人に呼ばれたのを、ラッキーって感じている自分がいるからだ。

「ごめんね」

謝ると、うたはバックを持って教室を出て行く。

廊下を歩きながら、うたは何でこんなにも薄情なつたのかということを考え続け、〃契約〃のことを思い出しては落ち込んだ。

同時に、心の中でキュウベエのことを散々罵る。

もやもやした思いを、自分のせいだとは思いたくなかったのだ。

それが悪いくせなのだと自覚はしている。でもやめられなかったし、止めるつもりもなかった。

……うたは自分のことに関しては何もかも諦めてる。努力もしたくない。だから、自分の性格を直すのもしない。

三階の空き教室の扉を開けると、そこにうたを呼び出した人はいなかった。

何かあつて遅れているのだろうか。あの人結構顔が広いみたいだし、もしかしたら誰かに捕まっているのかもしれない。

とりあえず中に入り、入り口近くの机の上にバツクを置く。そうして換気でもしようと思窓を開け放った。からりとした、しかし清涼な風が入り込む。

うたは窓枠に手をかけ、外の景色を眺めた。

水彩絵の具を一滴垂らしたような、綺麗な夕焼け。

校庭を集団で走っているのは、男子野球部だろうか。白いユニフォームを赤く染め上げ、元気よく掛け声を上げている。

何のためにあんなことをやっているのか、と思わず笑ってしまう。走るのとか、きついし、だるいし、疲れるだけだ。

それって何が楽しいのだろう。……努力が報われるわけ無いのに。

「……、性格悪いなあ……、うたつて」

そこまで考えて、自嘲気味に笑った。自分は一体何様だ。

こんなこと言つて、馬鹿馬鹿しい。

結局のところ、嫉妬しているだけじゃないか。

うたは何をやつても達成感があまりなく、努力ができない。

そんな自分をうたは嫌い、しかしやつぱり何も変えられないから悪態をついて、周りの人を見下しているのだ。

「でも、……どうせ努力しても認められない……。何かやったところで、それに見合った評価は誰もくれないじゃない……」

……それは、頭にこびりついて離れない言葉。『夜見鳴子の死』がうたにもたらした呪い。

このせいで、うたは常に無力感に苛まれ続けている。だから、いつもたるい。面倒くさい。

それに「契約」のせいで、ここ数日気分が最悪だ。楽しめていたはずのものが楽しめなくなつて、好きなものも嫌いになつてしまった。友達の時が良い例だ。うたはあの子達と共にいる時間が好きだったのに、色んなことが気になつて今では苦痛になっている。

そしてその度に自己嫌悪して、人のせいにして、また言い訳ばかりを繰り返してて……、なんかもう疲れて、何も考えたくないし、何もやりたくない。

……そう思うけど、うたはどうしようもなく矛盾した行動をとつてしまう。

自ら死ぬ勇気とかは全然なく、惰性で毎日を過ごしているくせに、命の危険がある魔法少女を続けている。

……エルのこと諦められず、ずっと探して。あんな薄情な「契約」したくせに、うたは彼女が戻ってくると信じてサチに変なことを聞いてしまった。

うたは一体、なんなんだろう。何がしたいんだろう。自分で自分がわからない。

また、無力感が襲ってくる。

「自分から呼んだのに、待たせてごめんなさい。向かっている時に先生に話かけられてしまつて」

佇んでいるのも飽きて、バックを置いた机の席に座つて転寝をしていた最中だった。

教室に、ようやくうたを呼び出した人がやってきた。

ワインレッドの、セミロングまでの髪。おっとりとした、温和そうな顔立ち。

ブレザーの制服はきつちりしているが、それがかえって胸部の大きな膨らむを主張しており、目のやり場に困る。

彼女の名前は、恵比寿小豆^{えびすあずき}。この学校の三年生で、うたの先輩。

そして、入理乃とミズハの行方不明件のことを教え、気をつけるよと言ってくれた魔法少女だ。

彼女はうたの元までやってくると、本当にすみません、とゆっくりとした動きで頭を下げた。

相変わらず丁寧でおっとりしている人だ。そういう性格は嫌いじゃないから、失礼がないよううたは慌てて立ち上がると、いえいえと首をよんわり振った。

「……あの、歌羽ちゃん。大丈夫？」

「え……？」

「かなり疲れたような顔をしているなあと思って。……もしかしてエルちゃんのことを悩んでいたりとかしてました？この前言つてましたけど、二人は幼馴染なんですよね？」

そう言われ、少し自分でも驚く。

うたは、そんな感情が表に出ていたのか。いつもいつも、外面を取り繕っているのに。

「……確かに、エルのごことは心配です。でも、きつと何処かで元気にやっているはずですよ。あの子、諦めが悪くて負けず嫌いなんで、しぶとく生きてますよ」

何の根拠もない楽観的な考えを、うたは自分に言い聞かせるように答えた。

……それは、こゆりの受け売りのようなものだ。

屁理屈も、信じ込みさえすれば本人にとつて真実になる。……ようはエルを失った悲しみを誤魔化せるってことだ。

うたはエルが死んだなど、認めたくない。……あの子はうたと違って、〃呪い〃に打ち勝っていたのに。

「そうですね……。でも何かあったら、いつでも相談してくださいね。これでも先輩ですから」

胸をとんと小豆さんは叩いてみせる。しかし、ありがたいとは思っても、彼女の言う通り相談しようとは思えなかった。

ここでも、無力感が湧いてきたのだ。なるようになれば良い、と投げやりな気持ちになって、この悩みはどうしようもないと、うたは諦めた。

「あの、小豆さん。それで話つて何かようですか？」

会えば少し話す程度の仲だが、しかし彼女から呼び出されたのは滅多にない。

何か重大な話に違いないと、うたは気を引き締めて聞いた。すると、小豆さんは神妙な顔をしてこう言った。

「私、牛木草の魔法少女の共同体を作ろうと思っているんです。どうか、歌羽ちゃんも入ってくれませんか？」

「共同体……？」

うたは復唱し返す。それが何のためのコミュニティなのか、よく分からなかったのだ。

「ええ。牛木草の魔法少女を統制し、管理するための共同体です。」

……最近、新人魔法少女が増えている、というのは知っていますか？」

「いいえ……」

首を振ると、そうですか、と小豆さんは落ち着いた様子で頷いた。

「なら、説明しましょう。この牛木草の――、いえ、今の寝巢扉都市圏の現状を」

彼女は黒板の前に立ち、そこに向かってチョークで何かを書き始めた。

それは寝巢扉都市圏に属する市の、大まかな位置関係を表す図だ。

真ん中にある寝巢扉市を中心に、トメ井は真上、牛木草は寝巢扉市の真下に。そして左はいさ土、右に飛雄角が広がっていた。

ちなみに図に書かれていない早島市は牛木草の右、飛雄角の真下に位置している。立地的にあまり色々恵まれない土地で、牛木草と飛雄角の経済成長の煽りを受けに受けまくっているらしい。

「現在寝巢扉都市圏は、急激に発展しています。特にここ最近の成長速度は異常です」

小豆さんはそう話しながら、チョークで図そのものを指差す。

うたは、やたらニュースで都市開発の話が流れていることを思い出した。

「……確かに、そんな話をよく耳にしますね。でもそれが、新人魔法少女が増えるのとはどんな関係が？」

「じゃあ、魔法少女になる子はどんな子が多いと思いますか？」

「えーと、それは……」

自分のケースを参考に考える。

うたの願いは、簡単に言ってしまうえば性格を変えることだった。その明るく能天気な思考が、嫌で嫌で仕方がなくなってしまうたのだ。つまりうたは、自分に不満があったからこそ魔法少女になった。

それはきつと、他の子も同じなはず。だいたい、願いの本質なんてどれも似たようなものである。

「精神的に満たされていない子、ですか？」

出した結論を答える。

小豆さんはその通り、と知的な笑みを返してくれた。

「ようは、何かを悩んでいる子が魔女少女になるということです。

そして社会の発展による不安定さは、その悩みを発生させる温床となり得ます。

また人々の負の感情は魔女を呼び寄せ、その管理のためにキュウベえは魔法少女を増やさざる得ないんですね」

寝巢扉都市圏の図の横に、小豆さんは魔女の図とキュウベえを描く。

……こんな時に思うことではないが、案外絵が下手くそだった。魔女が怪物であるのはわかるからいいとして、キュウベに至っては顔が胴体より三割以上大きく、尻尾が線になっている。

「これにより、寝巢扉都市圏全体の魔法少女の総数は増加しているわけです。新人である歌羽ちゃんも、その流れに巻き込まれたといっても過言じゃありません」

……なら、あのこゆりや柘榴も、同じ理由で巻き込まれたのだろうか。

可能性としては充分にあり得る。そう考えると、なんとも複雑だ。「ここで問題になってくるのが、縄張り争いについてです。

魔法少女の増加により、魔女との数のバランスは崩れないでしょう。しかし、魔法少女の縄張りのバランスは崩壊します。

何故ならその分、一人当たりの狩場が狭まるからです。

また、新人が新たに縄張りを獲得するのは難しい。既に他の場所には古参の魔法少女がいますし、今に争いが起き始めてもおかしくはあ

りません」

「……小豆さんはそれを防ぐために、共同体を作ろうと？」

「ええ。しかし、理由はそれだけではありません」

そこで小豆さんは、寝巢扉都市圏の図……、正確には牛木草の部分
をチョークで刺した。

「今、牛木草全体がまとまらないと、とんでもないことになりかねない
からです」

「……う？とんでもないこと、ですか？」

無言で小豆さんは図に、三つ矢印を書き足した。

いさ土と飛雄角から伸びる二つの矢印は、それぞれ牛木草に。そし
て牛木草からは、寝巢扉市に一直線に矢印が向いている。

「寝巢扉都市圏で現在最も不安定なのは、飛雄角といさ土です。」

観光業が盛んな飛雄角は多くのホテルが立ち並ぶ一方、昔ながらの
旅館などが潰れ社会問題になっています。いさ土は海に面した工業
地帯ですが、こちらにも前からある工場が後からやってきた企業など
よって潰れ、失業者が多く出ています。その他にも経済成長が遅れて
いたり歪な部分が多くある。

つまり、飛雄角といさ土は魔法少女が他の市より生まれやすい場所
なんです。縄張り争いも激化し、そこから何人もの魔法少女が追い出
されることでしょう。

……その魔法少女達の行き着く先は、ここ牛木草である可能性が高
い」

「それは何故……？」

「簡単な話です。」

牛木草は治安が悪いとはいえ他の市より安定している。魔法少女
の増加率は恐らく最も寝巢扉都市圏で低いでしょう。追い出された
魔法少女が向かうには、それだけで十分な理由です」

小豆さんがそう言いながら、顔を曇らせる。

ここまで説明されたら、うたでもその原因が分かる。

「……そうだったら、今度は牛木草の縄張り争いが激化して……」

「また新たに追い出される人が増えるでしょうね。そしてきつと今度

は、その人達は寝巢扉に向かう。牛木草から寝巢扉の学校に通う子も多いし、交通手段も整っているから、そっちの方に流れると思います。そして、際限なく争いが広がっていく」

……少しだけうたは、その光景を想像してみる。

自分勝手に縄張りを主張し、別の魔法少女からグリーンフシードを奪う魔法少女。逆に、過剰防衛を行なってしまふ魔法少女。

その暴力の輪が広がって、やがて大きな動乱となり、うたも巻き込まれる。

ぞくりと背中に冷気が這い寄った。

痛いのも、理不尽な目に合うのは嫌だ。うたは、そんなことにはあいたくない。

無力感に苛まれても、命は大切だ。

「……それを食い止め、牛木草の魔法少女を守るためにも、共同体を作り上げなければなりません。お願いです。歌羽ちゃんも、その共同体に入ってください」

「分かりました。うた、その共同体の一員になります」

うたは即答した。

引越しも簡単できず、他のところに魔女狩りに行っても、結局は逃げ道はどこにもない。なら、ここは素直により安全な方へ流れた方が良く考えたのだ。

小豆さんはうたの反応に、にこりと微笑んだ。どうやら満足して、気分を良くさせたらしい。

「ありがとうございます」。

……あ、そうそう。良ければ、もし他に牛木草の魔法少女の知り合いがいたら教えてくれませんか？その子達にも、共同体の話をしなければならぬので」

そうと言われて、色梨こゆりと江戸柘榴の顔が思い浮かぶ。

会ったのは一度きりだが、あの二人が縄張り争いに巻き込まれるのはなんとなく気分が悪い。

うたはどうせだから、と、彼女達の名前を小豆さんに教えた。

「……あまりよく知りませんが、この前色梨こゆりと江戸柘榴という

二人の魔法少女に会いました」

「聞いたことのない名前ですね。どんな子達でしたか……？」

「ぶっちゃけ、二人とも癖が強い性格だと思います」

うたが感じた印象をそのままストレートに伝える。

誤魔化そう、という気はさらさら起きない。こういうことに関しては、我ながらはつきりと言うタイプなのである。

「まずこゆりですが、かなり感情の起伏が激しくて不安定です。また人との関わりを避けようとしている感じがあつて、共同体の話をしても煩わしいと感じるかもしれません。」

柘榴は悪い子ではないですが、非常にマイペースで何を考えているのか分からない部分があります」

「……成る程。それは確かに癖が強い性格ですね……」

小豆さんはうたの話聞いて、難しい顔をした。その気持ちは良く分かる。厄介なものは、それだけで億劫になる。

「後、こゆりにはまだ問題があつて……、彼女、早島の船花サチという魔法少女と同盟を組んでいるんです。しかもサチは入理乃の元パートナーで、ミズハと知己だったらしく、共同体に引き込む際、そこが少々面倒かと……」

「そうですね……。にしても、奇妙なこともあるもんですね……。まさか、歌羽ちゃんの知り合いの知り合いが、入理乃ちゃん達と繋がりがあるなんて」

少し小豆さんは驚いたように言う。

本当に、うたも変な縁だと思う。こんなドラマみたいな偶然が起るなんて考えてもみなかった。

だが、会うことはあつても、自分から積極的にこゆり達とは関わることはもうあまりないだろう。

正直、苦手なのだ。こゆりはいまいち掴みどころがないし、柘榴のテンションはついていけない。

だからこそ、一緒にチームをやるのも断つたのだし。面倒くさいのには関わらないのが一番だ。

「情報提供、助かりました。とても参考になりましたよ」

「……こちらも、少しでもお役に立てたようで良かったです。」

ところで、牛木草の共同体って何か名前とかあったりするんですか？」

好奇心から聞くと、小豆さんは、はい、と頷いた。

「『プライマリーカラー』。意味は原色。かの有名な夜見鳴子のオブリエと同じ名前です」

誰も味方がいないなら

夜見鳴子が、転落死した。

そんな酷いことが起こったらしい。

らしい、というのは、それは人伝で聞いた話だからだ。

その日うたは家族と旅行に出かけていて、その場にいなかった。

だから、その死がどんなものか想像ができない。

潰れた体がどんなに悲惨なものなのか。その瞬間を見ていたであろう人々が何を感じたのか、はつきりとは分からない。

正直、夜見鳴子が死んでも悲しいとは思わない。

うたはおじいちゃんと、モノトーンでバイトをしていた彼の姪、ナルさんと親しかつた。うたにとって、彼らは第二の家族とも呼べる大切な存在だ。

しかし夜見鳴子とは面識がなく、彼女は赤の他人同然だった。夜見鳴子がモノトーンに来たことは、うたが知る限り一回もない。

でも、彼女の死は子供心に虚しかった。

うたはよくナルさんに聞かされてきた。

夜見鳴子はずっと報われなかった。けれど今すごく認められて、頑張っているだって。

それなのに、結局理解されずに終わってしまつて、すごく哀れだ。

その後も好き勝手に自殺だのなんだの、あいつはおかしいだのなんだの騒ぎ立てられて、ああ、尊厳つてのはこんな簡単に踏みにじられるんだなつて思った。

おじいちゃんの周りの状況が、気がつかないうちに目まぐるしく変わっていく。

家族でいつも過ごしていた喫茶店、モノトーン。

それが、夜見鳴子の死によって評判が落ちて潰れた。

今までおじいちゃんは、長年娘を支えて頑張っていたらしい。しかし、その娘のせいで、ミキオさんの大切な居場所はなくなつてしまつた。

ミキオさんの元には、誰も寄り付かなくなつた。あんなにモノトー

ンは賑やかだったのに、今は寂れた跡が残っているだけ。

ナルさんはすっかり意気消沈し、……心の窓を閉じてしまった。極度な人間不信に陥り、誰の声も耳をかきなくなっただの。

彼女のその有り様は、まさに人形のように。いつも明るく優しい、姉のような人だったのに。

うたは、この酷い状況をとなんとかしたいと思った。

まあ、当時うたも六歳だったし、そこまで何かやれたわけじゃない。せいぜい、ナルさんのところに通って、彼女に話しかけ続けようくらいしか無理だった。

もちろん、何も反応はしてくれなかった。一回悪戯で思いつきり叩いて見ても、怒りもしなかったほどだ。

しかし、通い始めて三ヶ月がすぎた頃、ふとナルさんはうたに対してこんなことを言った。

「……そこまで頑張らなくて良いよ。努力なんて、どうせ無駄なんだから。誰も認めもしないのに、……私も貴女のこと見てないのに、どうしてそんなことするの？」

やめてよ。おじいちゃんも私も、まったく嬉しくないから」

——その時、パリン、と心の中で何かが崩れた気がした。

現状を何も変えられないうたが、唯一できること。それがナルさんと再び仲良くなることだと思っていた。

なのに、肝心の本人からそうやって明確に拒絶されて、努力を否定されて……、何が何だか分からなくなってしまった。

その内、ナルさんは忽然と姿を消して行方不明になり、二年後に戻ってきた——左腕のみを残して。

発見されたのは、寝巢都市のある美術館の倉庫。雑然とした部屋の棚の上に、その腕は放置されていたという。

現場に残された、辺り一面に広がった血の量からして、ナルさんの死はほぼ確定したようなものだった。お骨はありえないくらい小さかった。

うた達は取り残された。

おじいちゃんと夜見鳴子とうた。

三人とも頑張ったはずなのに、どうしてこんな結果になったんだろう。
ナルさんの言う通り、努力は無駄ものだからなのか？認めれないかなのか？

ならば、うたは何のために、何をすれば良い。何もしないのが正解？

……そうかもしれない。努力とか、愚かでしかない。

夜見鳴子が、まさにそうだ。

彼女は生前、人に評価されもせず、大切なものを壊され、何も為せなかった。

死後に認められても遅い。生きてないと、認められたという実感も達成感も味わえない。

この世は虚しいんだ。すべて無意味なんだ。だから、うた——古鐘歌羽もまた、虚しく無意味で。

生きている価値があるのかすら、曖昧になっていく。

うたは、一体何だ？



私は魔法少女になった時から、夢を見ている。

その内容は様々だ。やけにリアルで鮮明かと思えば、混沌として抽象的である場合も多々ある。

しかし、共通点が一つだけ存在する。

それは、私が関わった人達——例えば母親だったりといった身近な人から、顔見知り程度の友達——の過去にまつわるものだということだ。

私は、彼らの感情を夢という形で追体験しているのである。

これに気づくのに、私は当時半年以上の時間を要した。そのせいで知人を傷つけたのが何回もある。

彼らには本当に申し訳ないことをしてしまった。

だが、何故私がそんな夢を見るのか。

キユウベえ曰く、それが私の固有魔法なのだという。知己の記憶を夢として見るのが、私の能力。

制御も出来ず、見たい時に見えるものではないし、逆に見たくもないものまで見えてしまう。

今回見た夢も、まさにその見たくもない夢だった。

「歌羽ちゃん……」

その夢は、古鐘歌羽の内面を声を聞くものだった。

それ故にか、普段の夢以上に本人の感情をダイレクトに感じ取ってしまった。

……実は会った時からうすうす、歌羽ちゃんが何処かやるせない何かを抱いているということには気がついていていた。

だが、まさかここまで苦しんでいるとは思わなかった。

作り上げようとしている共同体につけた、プライマリーカラー、という名前を、今になって皮肉に感じてしまう。

これも、何の因果だろうか。私はただ、その夜見鳴子のオブジェに込められた意味にあやかっただけなのに。

まあ、今更後悔したところでどうにもならない。すでにこの名前は、少なくない人数に教えてしまっている。

何となく気まずい思いをしながら、自室の時計を寢床から見上げる。

朝、五時三十分。

どうやら、速く目覚め過ぎたらしい。その割には頭は妙に冴えていて気分が悪く、二度寝をしたという気にはまったくならない。

この余った時間を無駄にしないためにも、私はせっかくなので、牛本草の魔法少女の情報を整理しようと思いついた。

机のところまで行き、引き出しからノートを取り出す。

これは一ページ一ページ、私が作り上げようとしている共同体や、

そこに所属してくれると言ってくれた魔法少女について、事細かく記したものだ。

改めてそれを見ると、共同体の参加者人数は現在十人だ。

その内九人が古参や中堅層。新人は歌羽ちゃんただ一人。

……共同体を作ろうと、今日で一週間。それでこの結果は、あまり上々ではないのかもしれない。

特に新人を一人しかメンバーに入れられてないのは、かなり痛い。これから先、縄張り争いで中心になるのは新人魔法少女だ。

言い方は悪いが、トラブルの種のもとには主に彼女達に関わる事柄から発生するし、今やその数は古参や中堅層を超えているだろう。無視できないほど、その存在は大きい。

しかし、仲間にするのは難しいのだ。

まず全体的な数も把握できず、誰が何処にいるのかすら分からない。い。

一人見つかったと思えば、今度は別の場所でもう一人見つかる……、なんてことがしょっちゅうだ。

あとは、共同体の話をしてでも大抵顔を顰められるか、考えさせてください、という返事しか返ってこない。

私那不審なのだろう。なかなか信用してくれない。

これが古参や中堅層なら顔も聞かため、ある程度なら話を聞いてくれるし、協力してくれる子もいるんだけど……、こっちもこっちで、私が率先して共同体を作ろうとしているのを気に入らない奴がいる。

もう、前途多難って感じた。覚悟はしていたことだが、共同体をつくり上げるのはそう甘くはない。

だけど……、私は前に進まなければならぬ。

私は、あの日エルちゃんの夢を見たのだ。彼女が見たであろう、牛木草の魔法少女が「魔女化」するその瞬間を。

あの悲劇を、牛木草の子達にまた起こさせてるわけにはいかない。すべての絶望を、私が食い止める。

……とにかくまずは、人員確保が急務だ。

現在でも、牛木草内では縄張り争いの小競り合いが起き始めてい

る。

その現状を利用し、被害にあつた子から積極的に保護して共同体に入れる。同時に噂を流させ、更に同じように争いに苦しむ子を集めつつ、それと並行して悪行を働いたものには罰を与える。

少し悪いが、そうしなければ信頼を得られないだろう。牛木草の秩序を守るためにも、綺麗事ばかり言つてられない。

それから、歌羽ちゃんに教えてもらった新人魔法少女、色梨こゆりと江戸柘榴のことも考えなければならぬ。

さつき言つた通り、人員確保は急務だ。出来れば今のうちに味方につけておきたい。

「……しかし、彼女達の性格は一癖も二癖もあるらしいし、話すだけでも大変そうだなあ……」

一体どんな子達なのか、事前に調べていた方が良さそう。

……特に、色梨こゆりは要注意人物だ。

なんせ、あの『阿岡入理乃』の相方、船花サチの同盟者なのだから。



「……こゆり。そこにあるのは何なんだい？」

住処にしている廃ビルの三階。その一室にやってきたキュウベえが、『それ』を見てツツコミを入れた。

室内の中央には、一メートル弱の物体が鎮座している。

金網でできた箱の上に長い長方形の木の板を垂直に打ちつけ、その両側面から色紙で作った人間の手足が何本も生えているオブジェだ。

少々粗雑な作りだが、一応丈夫だ。なんせあたしがちよつとガタガタ揺らしても、壊れなかつたんだから。

「よく聞いてくれたわねえ……、ウヒ、ウヒヒヒヒヒヒ」

あたしは不気味に笑う。

ちよつと、昨日、今日と徹夜しすぎたのかもしれない。我ながらテーションションがおかしくなっている。

「これ、この前見た魔女を真似てね、ゴミ捨て場で良いもの見繕って、それを組み合わせさせてオブジェにしてみたの！もうすごく時間がかかったんだけど、良いできだと思わない!?クフ、フフフフ!!」

あたしはまた笑いながら、高らかに自慢する。

キユウベえはそんなあたしについていけないのか、はたまた何も感じていないのか、普段通り静かな態度だ。

「そうだね。確かに良くできている」

「ちよつと!?それだけしかないの!?もっと褒めるところあんでしょ!!ちやんと見なさいよ!!」

あたしはびしっと自分の作品を指差して怒鳴る。

すると仕方なさそうに、小動物はその赤い瞳でじっとオブジェを一瞥した。

「ボクには美術品というものはわからないが、作りがとても精巧だ。特にあの手足が、魔女と本物そっくりだ」

「そうなのよ、そうなのよ。特にあそこには拘ってね。作るのに最も時間がかかったのよ。納得がいけないものは廃棄してまた一から作り直したし……、アアアアアア、もう、あの作業を思い出すだけでも……!!」

あたしは地獄の時間を思い出し、悶絶する。

……あれは本当に大変だった。ひたすら失敗ばかりして、しんどかった……。それでも妥協できなくてやめられなかったし、マジあたしの性格疲れるわあ……。

まあそういう時間が楽しいってのもあるし、創意工夫好きだから、やりがいとか達成感はあるんだけど……。

「キミ、色々大丈夫かい?」

キユウベえが慰めてくる。あたしはようやく頭が冷えてきて、その場できくりと俯いた。

「自分でも、どうかしてると思っています……。恥ずかしすぎてマジ死にそう……。てか死にたい……」

「うん。大丈夫そうだね」

「何処がよ……」

キュウベエのいうことにじと目を向ける。

このあたしの項垂れっぷり、こいつ分らないのか？マジ人外、マジでおかしい。

「でも何でまたそんなものを作ったんだい？」

「あー……。暇だったんもんで、つい」

あたしの趣味は、物作り全般だ。

暇さえ有れば小物を作ったりとか、日曜大工とかばっかりやってた。

しかし今まで余裕もなく、また気分も憂鬱で、そんなことをあたしはすっかり忘れていた。

それを先日ふと思い出し、どうせだからと気分転換に、久々に物作りを試してみたのだ。

……。そのせいで張り切りすぎてしまい、先ほどまでおかしなことになってたが……。

「何故魔女をモチーフに？」

「……。それが自分でも、さっぱりなのよ。自然とこれを作ろうと思ったの」

さあね、と首を傾げて見せる。

しかし実際それはただのポーズで、ちゃんと理由はあった。

ただ、素直に話したくはない。だって、これは恥ずかしくてあたしらしくないことだから。

「で、突然きて何のようなわけ？」

あたしは若干警戒しながら聞く。

キュウベエがなんの理由もなくここに来るわけがないのが、これまでの経験で分かっていたからだ。

「グリーンシードの回収か、最近の報告？それとも——」

「チーム」のことか、だろ？もちろんその話をしにきたんだよ、こゆ

り」

あたしの言葉を先回りにして、キュウベえがそう答える。それがあまり気に入らなくて、ムツとした顔になった。

「アンタもしつこいわね……。チームなんていらないうって言ってるでしょ？」

「しかし、サチに仲間を探そうか誘われているだろう？」

痛いところを突かれて、あたしは少し眉を寄せた。

そう。あたしは、サチのその誘いにはつきりとした返事を返していいのだ。あれから、たらたらと先延ばしにしている。

「……だからって、チームを組むのとは別問題よ。確かにサチには仲間が必要かもしれない。あの子を支えられるのは、あたしじゃ役不足だからね。」

……でも、あたしは一人の方が気楽で都合が良いの」

「ボクには人間の感情が理解できない。しかし今までの魔法少女の観察経験から察するに、キミは天邪鬼とかいう、極めて不可解な性格なのだろう？」

何回も言っていることだけど、いつまで本心を認めない気だい？」

「……何よ、その言い方は」

キュウベえの言うことは、やっぱりいちいち釈にさわる。

あたしの心を、いつもいつも容赦なく抉ってくるのだ。

「一応これでも、ボクはキミを思っているんだよ？今までキミのような子達は、皆死んでいったからね」

そう言っている割には、キュウベえの言葉は心がこもっていない。冷酷で、冷酷で、そして平坦だ。

「人間の感情を理解できない」、と自称するだけのことはある。……この世からいなくなればいいのに。

「それとも、自分の望みが分かっているのかい？心の底から思う、自分の願いが」

……うるさい。

そんなの、〃本当〃はどんなものか分かっている。

そして、それから目を逸らしていることも自覚しているわよ。

あたしがいくら、馬鹿で愚かで間抜けで卑屈で自己中で、頭も悪くって、性格もそこまで良くないのだとしても、ずっと、何で自分はこうなんだ」と考え続けていたのだもの。

しかし、だからこそ無理やりにも自分を誤魔化すしかない。

……強く心を持つにはそうせざる得なかった。それをしなければ、あとは押しつぶされて、絶望するしかなくて――

「……、魔女が……」

思考を中断するように、その時禍々しい魔力の反応がした。

しかし、それは風が一瞬で駆け抜けるように素早く、あつという間に過ぎ去っていく。

今すぐ行かなければ、取り逃してしまいうだろう。

「キユウベえ。悪いけど話はここまでよ」

「ああ。また続きは今度だ。気をつけてね」

「大丈夫よ。魔女なんてあたし一人でも簡単にぶっ殺してやるわよ」

「ボクが言っているのは、そういうことじゃないんだ。最近、キミ以外に――」

「ごめん。急いでいるからまた後で言っ頂戴」

キユウベえの言うことなど、どうせ大したものじゃない。

最後まで聞かず、あたしは魔法少女に変身。すぐ側にある窓を開けて、そこから飛び降りる。

そうして難なく着地をして、魔女が去っていった方角へと足を進めた。



「……ていうのに、何なのよこの状況は……」

魔女を追いかけやってきた、暗く寂れた商店街。その一番奥を、あ

たしは角からこっさり覗いた。

そこでは先ほどから大きな怒声が上がっている。

紫色の修道服を着ている魔法少女が、オレンジの頭巾を被った魔法少女に一方的に突っかかっているのだ。

そのせいで、頭巾の少女はすっかり涙目になって萎縮してしまっている。

魔女の気配はない。どうやらあたしが辿り着く前に、どちらか一方が先に倒したらしい。それでグリーンフィードの件でいざこざがあったのだろう。

頭巾の少女の手の中には黒い球体があり、それをシスターの少女が指差しながら、やたら自分のものだ、と主張している。

まあそれ以前に、あの魔女は元々あたしの獲物だったんですけどね。ここ一応、あたしの縄張りに入るし。

……それを知らずに、あの二人はここまでやってきたのか？歌羽といい今回のことといい、こういうの困るわね。

とりあえず、ヒートアップしているシスターの少女を止めなければ、とあたしは角から出ていく——その瞬間、シスターの少女が獲物であるフランベルジュを振り上げた。

「……それはあたしのものだ!!渡せ!!」

「……!!」

我慢ならないと言った様子で激昂し、顔を真っ赤にして叫ぶ。

頭巾の少女は慌てて後ずさるものの、その攻撃範囲から逃れることは出来ない。

あたしは思わず飛び出し、そこに割って入る。同時に、呼び出した盾で剣を防ぎ、シールドバツシュを仕掛けた。

シスターの少女は後方へ押し出され、地面に叩きつけられる。

「……!?あ、貴女は……!!」

「大丈夫?怪我とかない?」

「は、はい!!」

あたしが無事を確認をすると、頭巾の少女はごくごくと何度も頷く。まだまだ恐怖心があつて、混乱しているようだった。

「アンタ、一体何だよ……!!邪魔しやがって……!!」
シスターの少女は立ち上がりながら、あたしをまつすぐ睨みつける。

闘志は消えておらず、物々しいフランベルジュをゆらりと構えた。
「そういうアンタこそ、あたしの縄張りで何してんのよ。さつさと出て行きなさいよ」

対するあたしも、盾を剣の大形へと変形させてみせる。しかしシスターの少女は怖気もせず、むしろ更に殺意を滲ませてきた。

「やろうっていうの……?上等よ……。アンタから力づくでも縄張りを奪ってやる……!!」

「……!!」
突っ込んでくるシスターの少女の一撃を、咄嗟に大剣で受け止める。

があん、と刃と刃の間で火花が舞った。それを見て、頭巾の少女が声をかける。

「だ、大丈夫ですか!？」

「……ええ。だから下がってなさい。巻き込まれでもしたら邪魔よ」

片手でしっし、と下がる仕草をしてみせる。するとシスターの少女が不愉快そうに眉間にシワを寄せ、激情をあらわにした。

「どいつもこいつをあたしを下に見やがりやがって……!!舐めたマネをお、するなあ……!!」

体全体を使って、大ぶりに波打つ剣が振るわれる。あたしも同じように大剣で対抗した。再び舞う火花。

その反動で互いに軽く弾き飛ばされ、距離が開く。

あたしはその瞬間、大剣を地面に刺して魔力を流し込んだ。

その道を辿るように鉄の刺が次々と隆起していき、シスターの少女へと向かっていく。

しかし彼女はギリギリのところで大きくジャンプ。くるりと一回転をし、逆にあたしへと攻撃を仕掛けてきた。

「これでえ!!」

フランベルジュが影の魔力を纏い、その姿を変化させる。それは、

命を刈り取る、湾曲した刃——死神の鎌だった。

後ろで頭巾の少女の息を飲む声が聞こえる。

……だが、あたしは大剣を地面から引っこ抜かず、そのまま魔力を周囲に流させた。

目の前に大きな金属の壁が、下から一瞬だけ生える。それは鎌が振り下ろされるタイミングと重なって、少女の攻撃を阻害する。

「……はあ!? な……、今の反則だろ……!!」

シスターの少女は大声を上げ、降り立ったあともひどく戸惑った様子を見せた。あたしは大剣を引き抜き、威嚇するようにそれを赤い少女に見せた。

「まだやる? ……あたし、これでも容赦しない性格なんだけど」

「……くそ……、なんなんだよ、こいつ……。お、覚えてろ!!」

少女はそういうと、忌々しそうにそう吐き捨てた。

瞬間、背を向けて高く飛び上がる。周囲の建物に一瞬にして飛び移ると、そのまま走り去って見えなくなった。

随分とまあ、小物くさいというか、なんとというか。逃げ足が凄まじく速い……。

「あ、ありがとうございます……。助かりました……」

頭巾の子がお礼を言ってくる。別に大したことをしたわけじゃないのに、あたしははむず痒くなって髪を弄った。

「……、ま、まあ、無事なら良かったけど。ていうか、それよりアンタ、勝手に魔女狩りしたのよね?」

あたしは気を取り直すと、じろりと鋭い目つきを向ける。

少女はびくつと、肩を勢いよく跳ねさせ、口をまごつかせた。

「その反応……、縄張りのことを知らない新人じゃないわね。アンタ、ここが別の人の縄張りだって知ってて、ここに入ったわね?」

「ひっ、す、すみません!! つい、見つかりにくいところなら大丈夫かなって思っちゃって……!!」

なるほど。何となくあのシスターの子に突っ掛かられた経緯が分かってきた。

この頭巾の少女は、恐らく魔女を狩った後で、同じようにあたしの

縄張りに入ってきたあのシスターの子と鉢合わせたに違いない。

シスターの少女にとって、頭巾の少女は目的を邪魔されたライバルだ。だからああやっていちやもんつけてたのだろう。

「でも、何でそんなことをしたの？」

「答えなければ、……分かっていないでしょうね？」

あたしは大剣をちらつかせる。……もちろんそれは軽い脅しで、危害を加えようとかいう意思は……、少ししかない。

歌羽の時は半殺しにするって言ったけど、今回は流石に相手を助けちゃったから、自分の手で攻撃するのはちよつくときつい。

「え、えと。さ、最近新人が増えすぎて、縄張り争いが激しくなってます……、それで自分の縄張りを奪われたんです……」

「……!!」

思わず、はつとなる。

歌羽や柘榴のことを思い出したのだ。

あたしも彼女達に会った時、縄張りのことでピリピリしてしまっただ。

だから、頭巾の子の境遇がすごく他人事のように感じられない。

そして、いつそ同情してしまうくらいには、心を冷めたくすることも出来なかった。

「アンタ……、何処にも行き場がないの？」

「……は、はい。そうですけど……」

「ふうん……」

複雑な面持ちのまま、あたしは少しの間黙ってしまった。

大剣を握る手を、ぎゅつと強く握る。どうにもやるせなさが入り込めてきて、あたしはそれを嫌に思った。

「……なら、今回は大目に見てあげるから、さっさとグリーンフシードを持ってどっか行きなさい」

「え……、けど……」

「いいからいけて言ってるでしょ……。それとも何？さっきの子みたいに、無理やり追い出されたい？」

わざと不機嫌な態度をとると、頭巾の少女はすまなさそうに表情を

歪めた。

そして、一度だけ躊躇するように手の中にあるグリーンフィードを見て、去っていった。

その背が見すばらしく見えて、心苦しい。

何処にも行けない、何処にも自分の場所がないのが、学校でいじられたりしていた自分と重なってしまう。

……話を聞くに、あの子と同じような子がいっぱいいるだろうなあ……。

弱いとそれだけで生きていけなくて、潰れてしまう。魔法少女なんてそんなものだ、仕方がないんだってどこかで納得してたけど……、実際縄張り争いに負けてしまった子を見ると、切ない気持ちに襲われる。

それなのにあたしは……、こんな追い出すようなことしかできない。自分の縄張りを——自分の居場所を守るためには、そうする他ないからだ。

でも……、弱い子は誰が味方になってあげて、誰が守ってあげるんだろう。

一人ぼっちは、惨めで虚しいってのに。

「……、あたし——」

そこまで考えたせいだろうか。

ふと、ある発想が頭の中をよぎった。

……それは、かなり独善的で馬鹿馬鹿しいもので、自分でも信じられないくらい最低な願いだった。

だから、すぐ否定しなければならぬ、と思った。

しかしその発想はあまりにとっても良いアイデアに感じられ、到底目を逸らすことも無理だった。

「……別に、これは誰かのためじゃない。自分のためでもない。

……そう、縄張り争い自体が理不尽に思えたから。むしゃくしやするから、それで……」

ぶつぶつと、屁理屈が自然と口から漏れていく。

まるで、自分で自分を洗脳するように。

そして、その発想を都合のいいようにねじまけてでも、正当化する。だつてこんな感情、気持ち悪い。認めたくない。素直になりたくない。自分が可哀な奴と自己憐憫もしたくもない。

だからあたしは——いつものように、本心を偽った。

かつての自分と今の自分

深夜も深まった時間。人は寝静まり、辺り一面、世界は闇の中へと包まれていた。

しかし、私には周囲が朧気ながら見えている。それは私の手に握られた炎の短剣が、周りを僅かに照らしているからだ。

私の前にあるのは、ポツンと立つ普通の一軒家。

灯はついていない。この家に住んでいる一家は、今別の場所に泊まっているのです、中はもぬけの殻だ。

住宅街からも離れているため、周りに人気もない。

この場にいるのは、私——東ミズハと、阿岡入理乃。そして黒曜富夢の三人だけだ。

皆、魔法少女の姿に変身している。側から見たら、ローブに着物に白黒衣装という、ちよつとしたコスプレ集団に見えるだろう。

「さあ、ミズハ。あれが、お前を竹林へのいじめに加担させた子の家だよ。憎いんなら、早くやっちゃいなよ」

リノちゃんが歌うように、そう私に言った。

ニヤニヤ、くつくつと笑う様は、まるで化物のようで。

ああ、こんなに小さいのに、彼女はどうしようもなく壊れたんだな、と胸が痛くなってしまう。

しかし、こうしてしまったのも一部は私のせいだ。

……仲の良かった妹のような従姉妹が——順那が自分のせいで魔女化したからって、やけになって縄張り争いなんて起こさなければ、リノちゃんはさらに狂わずに済んだ。

たとえ、何かの代わりにされようとも、情を持ってきていたのは本当のことだったのだから。

だが反面、これは仕方がないことだとも思う。

リノちゃんは愛を歪んだ形でしか認識できないし、知らない。

だからいずれ、その歪みは大きな狂気となって、彼女を支配していただろう。

事実、“別の時間軸”の未来では、リノちゃんはとんでもないこと

をやらかしたみたいだし。

「ミズハ。リノの言う通り、貴女の手でやりな。貴女はこの家に住んでる子のせいで、魔女になったんだ。その報復は、今しかできない」
対して、富夢は冷徹私を支持を下す。

彼女はリノちゃんとは別の意味で狂っていた。

目が、あまりに冷たいのである。人の大切なものを石ころのように扱い、それを砕くことに何の感情も抱いていない。

……きつと私も、二人のように狂っているに違いない。

少しの逡巡はあれど、自らの望みのために悪逆をやるうとしているのだから。

「……ごめんなさい」

一言謝ると、私は炎の短剣を振るった。

飛びちった火の粉が民家に着き、瞬く間に燃え広がっていく。

煙が夜空にたなびき、灰の嫌な臭いが辺りに充満する。

炎に包まれた家は黒いシルエットとなり、バキバキと柱から倒壊していった。

それはあまりに傷ましく、しかし同時に清々しい。物が壊れる光景は、ある種の美しさがある。

私は家が燃える様子を、ぼんやりと眺めていた。

中に人がいないこともあるだろう。自分でやったのに、どこか罪悪感がない。あるのは、ただ作業が終わったという淡々とした実感のみだ。

……やはり、私は一度「魔女」になったのだ。すっかり、心の一部が死んでいる。

「……アハハ。アハハハハハハハハ!!燃える燃える燃える!!私は、それだけで愛される!!燃える燃える!!アハハ……アハハハ!!」

リノちゃんが支離滅裂な言葉を吐きながら、醜悪に顔を歪ませて隣で笑う。

これをサチちゃんが見たらどう思うのか。とても同一人物には見えないだろう。

だが、これが彼女の本性なのだ。普段の態度は何重にも被った仮面

でしかない。

「……ミズハ、お疲れ様。これで、ここに住んでいた子の“契約”する動機ができたよ」

ほん、と肩に手をかける富夢。私はそれをしばらく見つめてから、耐えきれなくなつて払い除けた。

「何がお疲れ様よ。……ふざけるな。こんな仕事をさせやがって」

夜見鳴子が率いるグループは、寝巢扉都市圏で不幸を巻き散らしている。

それも、小さなものから大規模なものまで。そうやって“目的”のために魔法少女候補が契約する“動機”を無数に作り出しているのだ。

今回の仕事も、その一環。魔法少女の素質がある子が住む家を、家族共々居ないすきに焼き払うことで、契約させようという計画らしい。

それを私にやれってんだから、胸糞悪い話だ。

しかもその子、竹林をいじめたグループのうちの一人だし。命令だから仕方なくやったけど、本当ならやってなかった。

「どういうつもりよ。私の気持ちも知らずに……」

「そう言われてもねえ。これでも一応気は使ったつもりだよ？」

「どこが——」

「だって、貴女ここに住んでる子のせいで、何もかもめちやくちやになつたんでしょ？ さつきも言ったけど、だったら報復のチャンスを奪つちやダメだよね？」

呆気からんとする富夢に、思わず無言になる。

私は、竹林のことがそこまで嫌いではなかった。それなのに、この家に住んでる子にいじめを強要され、私の人生は不幸な方向へ捻じ曲がった。

だから確かに……私は彼女に対してはつきりと恨みを持っていたのだ。

「……でも、こんなことをして一体何になるの？ 本当に、私達の理想の世界が作れるの？」

私は無理やり話題を切り替えようと、今更な質問を口にする。すると、面白がるように富夢は笑い、

「できるぜ。新人魔法少女を増やすのは、つまりは因果の糸を紡ぐことだからねえ」

「何それ？ どういうこと？」

「……『鹿目まどか』の時と、似たようなもの……、だよ……」

そこに、今まで笑っていたリノちゃんが割り込んでくる。口調は元通りの、辿々しいものとなっていた。

「彼女は暁美ほむらのせい……、すべての原因の中心となつて膨大な因果を背負うことになり、やがて『女神』に至るまでの力を手に入れた……」。

それと同じように……、私達は、『夜見鳴子』という存在を……、すべての厄災の中心にさせて力をつけさせ……、この世界を改築する。

そのために『夜見鳴子』の手足たる私達が、新人魔法少女を増やし……絶望の連鎖を引き起こすんだよ……」

「うーん……、分かったような……、分からないような……」

私は微妙に理解できず、首を傾げる。

あんまり頭の出来はよろしくないの、因果がどうのこうの言われなくてもピンとこない。

「ま、そこら辺は後で『結界』に戻ったら、一から説明するよ。今はさっさとずらかる。警察来ちゃまずいしね」

そう言う富夢はマイペースに欠伸をしながら、くるりと背を向けて歩いて行った。

リノちゃんも再び笑いながら、それに続いていく。

私だけが一人、暗い表情でその場に残る。炎の臭いは、いつまでも肺にこびりついていた。



柘榴との再会は、小豆さんから共同体の話があつて、数日してからのことだった。

うたはその日、からりと晴れた青空のもと、外をぶらついていた。休日だったので、特に何かをやる気にもなれず、かといつて家でだらけていると親に怒鳴られるからだ。

しかし、普段からたるいたるいと言っているうたである。バイクにのってどこかへ行く気にもなれず、うたは適当に徒歩で近所の本屋などの店を転々としていた。

その内、路地裏で魔女の結界を見つけ、放置もできずこれを撃破。そしてまた散歩の続きをしよう……といったところで、魔女狩りに来たであろう柘榴に偶然にも出会ったのだ。

正直、めんどくせー、という気持ちになつたのは言うまでもない。「あ、久しぶり！ずっと会いたかったよ〜」

「……うん。お久しぶり」

元氣よく柘榴が挨拶するのを、うたは適当に返事を返す。

契約する前の明るい性格のうただったら積極的に挨拶してるんだろうけど、今のうたはそれを失っている。

なので、やはりあのギャルっぽい友達同様、ぐいぐいくる柘榴は苦手なのだ。

「あれからどう？元氣？」

「まあ、ぼちぼち……。柘榴の方こそどう？うまくいってる？」

辺り触りのない質問に、うたは先ほど同様、適当に質問を投げ返す。

取り繕うのも疲れるので、自然と投げやりになる。

「うん。毎日すっごく楽しくて充実してるよ。特に魔女を見ると、面白いなーって思うんだ。知ってる？あいつらよく見ると、意外と愛嬌があつたり、仲間同士で喧嘩してたりするんだよ。不思議だよね」

「……うたは貴女の方が不思議だよ」

相変わらず柘榴は異端というか、変わっている。

魔女はうた達魔法少女にとっては、単なる倒すべき悪い敵でしかない。

それを、わざわざ生き物を見るような目で観察など、本来ならば考えもしないだろう。

「あ、でも……」

「ん？……何かあったの？」

急に言い淀むので、うたは心配になって聞く。

柘榴は数秒迷うように視線を彷徨わせると、

「いや、何かあったわけじゃないんだけどね。……その、ずっとこゆりとサチのことが、あれ以来気になってるんだよね……」

「あの二人を？ どうして？」

「だってこゆり達、なんかすごい複雑そうで、寂しそうだっただしよ？ だから、どうにかしてあげたいなあって」

かなりのお人好し発言だ。そこには何の邪気も感じられず、ただ無垢な真つ直ぐさが込められている。

うたはそれを少し羨ましく、そして疎ましく思った。

純粋な子は嫌いではない。だが、同時に気に入らない。

どうしても、昔の小さい頃の自分を思い出す。

「でも、深入りはやめといた方がいいんじゃない？ その善意は、二人にとっては余計なお世話かもしれないよ？」

うたはその醜い感情からやんわりと否定を混ぜた忠告をした。

柘榴は案の定、え、と少し驚きの声を上げた。

「確かにこゆりも不安定だったし、サチも入理乃の件でこたえてるんだろうなあって思うよ？」

だけど、複雑な事情に第三者が介入するのは、時として不幸を招くこともある。それは、傷口を不容易に抉るのとおんなじだよ」

かわいそうだから、という理由で手を差し伸べるのは美しい行いだ。

だが、傲慢でもある。憐憫を与えるのは、自分が優位だと見せつける行為だからだ。

それが反発を生み、心をさらに閉ざさせるきつかけにもなるのだ。特にこゆり辺りは、その反応が顕著に現れるだろう。

「だいたい、柘榴にとってこゆりもサチも他人じゃん。そんな相手を、どうしてわざわざ助けよう？」

お人好しだから、純粹だから、無知だから。

その理由はいくらでもあげられるのに、わざわざうたは嫌味つたらしく柘榴にそれを聞く。

少しでも世の中の厳しさを教えてやろうという、大人気ないからかいだ。

「馬鹿言わないで……。二人とも、もう他人じゃないよ。私にとっては、友達だよ」

「え……？」

棒読みだが、はつきりとした怒りの言葉にうたは瞠目する。

まさか、そんな意外な反応をされるとは思ってもいなかった。

これには、流石に困惑してしまう。

「ま、待ってよ。なんで一度会った人を友達認定するの？ どう考えてもおかしいでしょ」

「おかしくないよ。私が仲良くなりたかった子は、誰であっても私にとっては友達だよ」

ほんのり、本当にほんのり、柘榴は眉の端を上げた。

人を疑わない、その瞳を共に細めて。

「逆になんで歌羽は、そう思えないの？……どうしてそこまで、人を警戒してばかりなのさ」

「それは警戒しておいて損になることはないからだよ。人は、皆必ずしも優しくはない」

あんなに優しくかったナルさんも、うたをおいていってしまった。

常連客でさえ、夜見鳴子が死んだ途端、モノトーンの誹謗中傷を始めた。

心の闇は、そう簡単に分かるものじゃない。ならば最初から疑ってかかる方が、まだ安心である。

それに期待していたら、その分だけ疲れてしまう。

「……でも、そうやって最初から否定するのは、私はなんか嫌だなあ」
柘榴は、やはりうたととは違う意見を言う。

この子は、うたととは真逆の性質を持っているらしい。

うたがマイナスなら、柘榴はプラス。うたがネガティブなら、柘榴はポジティブだ。

だから、うたはそれ以上何も言えなかった。

思ったよりぐちゃぐちゃな感情が胸を内側から引つ掻き、暴れまわっているのがよく分かる。

小さい頃、うたも似たようなことをエルに言い、それがきっかけで彼女と仲良くなった。

しかしその後、夜見鳴子の事件やエルの家庭環境のこともあって離れ離れになり、再び会ったのは高校生になってから。

友達として復縁したものの、その距離感以前のものとは違って、その絆はうたのせいでも簡単にも簡単に崩れ去った。

積み重ねた時間はなんだったのか。あの笑い合った日々は、時間が経てば風化してしまうのだろうか。

……うたもエルも、昔のまま互いに純粹だったら、何もかも上手くいっていたのに。

年齢を重ねるたびに、人との付き合いがいかにかに上つ面のもので難しくいかを突きつけられて、汚物塗れになっていく。

だから、うたはもう柘榴のように綺麗じゃない。根拠もなく人を信じれもしない。

それが成長というものなのだろうけど、元に戻りたいとも思っていない。

「あ、もちろん、歌羽も友達だよ。歌羽とも仲良くしたいなあ、って思うから。だからさ、そんな悲しいこと言わないでよ」

言い忘れてた、と言わんばかりに慌ててそう付け加える柘榴。

思わず、苦笑いしそうになってしまう。

まったく、訳が分からない。

柘榴のその仲良くなりたいたいという気持ちには、どんな基準があるのだろうか。

少なくとも、自身がその基準を満たしているとは思えないのだが。「……だったらさ、柘榴。友達だつていうんなら、例えばうたに何かあったら、助けてくれるの?」

嘲笑を混ぜ、悪戯っぽく聞いてみる。

おかしなことに、自分がどんどん感情的になつていて、変なところで突っかかってしまう。

冷静に平静に、常に穏やかでありたいというのに。まるでうたは、小さな子供のようである。

「助けるよ」

柘榴は、しつかりとした口調で答える。うたはそれに、念押しをして更に尋ねた。

「絶対に?」

「絶対に。そりやそうでしょ。友達なんだからさ」

「そっかあ……、やつぱりそっかあ……」

当たり前のように頷かれ、ちよつと残念な気持ちになる。

ここは、否定して欲しかったのになあ……。それなら、こんな感情に少しでも折り合いがつけられたはずなのだが。

いやあ、まいったまいった。

堅牢無比な愚かで純粋なその性格を、切り崩すことなどうたには出来ないうた。

ここまで来ると、逆にほつたらかしておけないな、という気持ちが芽生える。

柘榴はみたいなタイプは、その行動の結果いつかしつぺ返しがやってくるだろう。それを考えるとどうにも胸糞悪くて、無関係ですと言えるほど割り切れやしない。

「なら、しょうがないよね……。こんなうたにそこまで言うんなら、こつちも貴女を助けるしかない……」

「え?それって……」

ため息まじりにやれやれというポーズを取ると、柘榴がキョトンする。

うたは首に手をやり、疲れた表情で答えた。

「助けたいんでしょ？こゆりとサチのこと。なら、貴女の友達としてうたが、それをサポートしてあげるよ」

「ほんと!?」

「ほんとほんと。……貴女のこと、どうにもほつとけないからさ」

どうせ何か言ったり止めようとしても、柘榴はこゆりとサチを助けようと動き出すはず。

それならいつそのこと、かつたるいけど、大変なことが起きる前に柘榴のそばにいた方がいい。

まあ、流されがちなうたが何かをしたところで、無駄かもしれないけど。

「ありがとう!!歌羽!!」

「ぐえ!!」

突然柘榴に抱きしめられ、体が圧迫される。

しかも良いところに腕が食い込んで、腸がメリメリいつている……!

その痛みたるや、このまま拗けてしまうのではないか、と思うほどだ。

しかし柘榴にはいたって悪意は感じられない。彼女はただ無邪気に、感極まつてうたに抱きついただけなのだ。

「……ど、どういだし……、まして……」

苦し紛れにどうにか言葉を紡ぐ。

ギブです、無理です、開放してくださいーい!と本音では叫んでいるが、そんなこととても言えない。

「うん!!よろしく!!」

そしてそれに気づかず、抱きしめる力を強くする柘榴……。

メキッ!!と腸に加わる圧力に付加がかかり、うたはそれを誤魔化すように、青い顔をしながら薄らと苦笑いを浮かべるのだった。

重すぎる期待

「あのさ……こんなことを言うのも今更だけど、どうやってサチとこゆりに会おう」

抱きつくのを止め、うたをやつと解放した後。柘榴がふと、困ったようにそんなことを言った。

サチとこゆりとは一回会っただけだ。当然、連絡先など交換しているはずがないので、柘榴から二人にコンタクトを取る手段は存在していない。

しかし、その心配は実は杞憂である。何故かというと、

「うた、まだ履歴に電話番号残っているから、サチとは一応電話できるよ」

数日前、こゆりはサチを呼び出すときにうたの携帯電話を使った。つまりうたなら、その履歴から再びサチのスマホに電話することもできるのだ。

ちなみにその履歴、一番新しいものだったりする。友達とプライベートは分けるタイプだし、親とはラインで会話するので、電話の機能はあまり使われていない。

「え？よく残ってたね。普通定期的に消さない？」

「めんどくさがりやなもので」

素で驚いてくる柘榴に、意外とこまめだなとこちらが逆に驚く。

どちらかというと、柘榴にはガサツなイメージがあったのだが。

ていうか、そうであつて欲しかった。じゃないと年上なのに自分の方がだらしなとか、恥ずかしくなってくる。

「こゆりも連絡先分かったら良かったんだけどねえ……」

「いやあ、どうだろう。分かったとしても、普通に出ないと思うから、どっちみちまともにコンタクトは取れないんじゃないかなあ」

サチのところへバイクに乗って向かっていたとき、うた、柘榴とばっかり話していたけど、それとなくこゆりに話題を振ってたんだよね。

でもあの子ばーとしてて、全然こっちの会話聞いてなかったし、普

段は必要以上にあまり話したがらない性格なのかもしれない。

それに、軽く人間不信っぽいし。

チームを組もうと言われたときの、あの情緒不安定っぷりは普通ではなかった。過去に何かがあり、そのせいで必要以上にコミュニケーションを取ろうとしていないのかもしれない。

だから、まずコンタクトを取る順番はサチが最初だ。

あと付け加えて言うなら、サチとはバイクに乗せる約束しているし、その件もついでにさっさと済ませたい。

……ああ、でも、いきなり電話なんてして大丈夫だろうか。

よく考えてたら、非常識すぎない？普通に迷惑じゃん、迷惑。

それで会うのを約束させようとしても、相手に警戒心を持たせてしまう。

「やっぱり、一度電話する前に、キュウベえに事前に言ってもらおうかな……。いや、でも、今から探したらそれこそ何時間かかるか——」

「呼んだかい？」

「うわ!？」

突然何処かから声がしたので振り向くと、背後にはいつの間にか白いぬいぐるみ——キュウベえがいた。

神出鬼没なのは知っているが、まさかこんな都合良く現れるとは。

本当、すつごい偶然だ。

「あ、キュウベえく。こんにちは」

「こんにちはは、柘榴。……ところで何でボクをやたら撫でているんだい?？」

「いやあー、触り心地が良いと思ってー……」

柘榴はキュウベえの前でしゃがみ、彼の頭をずっと撫でている。

完全に猫か犬のような扱いである。

うたからしてみれば、それはあり得ない行為だ。

人のように言葉を喋り、人よりも物事を見据えるキュウベえを、うたはただのマスクットのようには思えない。

確かに見た目は可愛らしいが、その中身は何か得体の知れない……、例えば映画とかに出てくる正体不明の怪人と同じだと考えてい

る。

魔法少女や魔女という、不可解で不気味な存在に関わっている時点で、その腹が綺麗なわけがない。

そしてそれは多分、うた達が聞いても相容れないものだろう。

キュウベえは所詮人間ではないし、魔法少女の絶対的な味方でもない。

「グリーンシードを回収してきたんだけど、二人が一緒にいるとは珍しいね」

「偶然会ったんだよ。ねー」

「……そうだねー」

うたは柘榴のテンションが面倒くさくなって、彼女と似たような棒読みになる。

でも柘榴は特に気にしている様子はない。

「……こういうところ、掴みどころがなくて何考えているか分からない。

「でも、さつきからサチとこゆりのことを話していたようだね？何かあったのかい？」

「ああ、うん。」

実はうた達さ、サチに会いたいんだよね。うたはサイドカーのバイクにサチを乗せてあげるっていう約束あるから、その日程がいつが良いか知りたいし、柘榴は柘榴でサチと話したいって言っててさ。だから、キュウベえには悪いんだけど、サチにそのことを話して欲しいんだよね」

「そういうことか。なら今からサチに会いに行ってくるから、しばらく待っていて欲しい」

そう言うと、キュウベえはとてとと走り去っていった。

それは遅くもなかったが、……あの速度でサチの元にまでつくのに一体何時間かかるのだろうか。

「……ねえ、今思ったんだけどさ。やっぱりそのままかけた方が良かったんじゃないのかな？」

「悔しいけど、それ、うたもちよつと思った……」

ところで、キュウベえはグリーンシードを回収しに来たんじやないのか？

彼、そのこと忘れてサチのところへ向かっていない？

……なんか、悪いことしてしまったな、と、うたは密かに罪悪感を覚えた。

しかし、その罪悪感とは裏腹に、数十分とたたずにスマホに電話がかかってきた。

その番号には見覚えがなかったが、恐らくそれはサチのものでらうと直感で分かった。

あちらも同じように履歴を消していないとすると、うたの電話番号を知ることにはできる。

……だが、キュウベえは一体どんな手段を使ってこんなにも早く、サチと接触したのだろう。

きつとキュウベえのことだから、それはうたたちが予想もつかない、不思議な方法に違いない。

「私出たい出たい出たい!!」
「駄目。うたがまず出る」

横で手を上げて主張してくる柘榴を制止すると、えーと抗議の聲が上げられた。それすらも棒読みなので、いちいち妙な違和感が生まれる。

本当、この子は行動と表情が一致してないよね。

「何で駄目なのさー」

「余計なことしそうだから」

「めっちゃ辛辣……!!」

ショックをうけたのか、柘榴ががくりと頭を下げる。

うたは少し白けたような、呆れたような目線をざくろに向けなが

ら、電話に出る。

すると案の定、画面から聞こえてきたのはサチの声だった。

「もしもし、うたは？」

「もしもし。名前、少し惜しいよ。うたは“じゃなく、うがは”ね」

一人称もうただし、名前の漢字も“歌羽”だからよく勘違いされるのだが、読み方は“うがは”である。

本来なら“うたは”になるはずだったが、両親が寝ぼけていたせいか書類に誤字があつたらしく、“うがは”になつてしまつたらしい。

だが逆にそれを両親が気にいつてしまい、結果家族からは“うたは”と呼ばれず“うがは”と呼ばれている。

「ややこしいなく。うたは”でもうがは”でも良いでしょ」

「そんな適当な……。まあ、そんなに名前が呼びにくいなら、うた、でも良いよ。知り合いからはそう呼ばれてる」

「何？呼び名の話？サチもうたつて呼ぶなら、私も歌羽のことうたつて呼ぼうかなあ。だって、うたつて渾名可愛いよね、うたつて渾名」何故か柘榴が勝手に呼び名を決めてくる。

まあ、呼び名などどうでも良いが、なんか距離感が近い。

「じゃ、テメエを呼ぶ時は“うた”で良いや。うたの方が歌羽よりなんか可愛いし。呼びやすいし」

そしてサチはサチで、“うた”という渾名に関する感想が柘榴と同じなのに、言い回しが若干失礼である。

そんなに、うがはという名前が変なのか。自分でも結構気にしているんだぞ？

「うた。私、キュウベえからだいたい話は聞いたから。今から柘榴と一緒に、あのバイクで会いに来て良いよ。どうせ暇だし、そつちも休日だから暇でしょ？」

「ああ、うん……」

意外とあっさりとおちらの要望を聞いてくれて、うたは少し驚く。どうにも付き合いが良いというか……。会った時はそんな印象な

かったのだが、案外こゆりとは真逆のタイプなのかもしれない。

口調は粗野だが、語調は何処となく明るい。……というより、妙にウキウキしている？

「何かサチ、嬉しそうだね。そんなに、バイクに乗れるのが嬉しいの？」

「は、はあ!?! 違うし!!」

「そのわりに、声の調子が弾んでいるけど……」

「だから違うって言うてんでしょ!! 私こそ、そんなこと思ってたねえし!! 全然テメエらにまた会えるから嬉しいとか、思ってたんだからね!!」

うーん、見事なまでのツンデレ。

ここまでテンプレなもの、見たことがない。

……こゆりとは真逆のタイプだと思っていたが、前言撤回しよう。案外、サチとこゆりは似ている性格かもしれない。

「そ、そういうことで、早くこいよな! 待ち合わせ場所は、以前会った空き地だから!」

「あ、ちよつと!?!」

ガチャ、と唐突に切られ、うたは苦笑いを浮かべた。

勢いありすぎて、ちよつとついていけない。何か今更になって、すっげえめんどくせーっていう思いが強くなってきた。

「ねえねえ、うた。サチなんて?」

早速うたを渾名で呼んで、サチのことを尋ねる柘榴。うたはそれに雑な顔をしないよう気をつけながら、

「良いつてき。今からサイドカーのバイクとつてきて、あのサチと前に会った空き地に集合だよ」



家に戻り、お父さんに話をつけてサイドカー付きのバイクを借りる。

サイドカーに柘榴を乗せると、うたはバイクを発進。早島の空き地に、三十分かけてついた。

初めて会った時と同じく、サチはすでに空き地に来ていた。

服装は、紫色のワンピース。悔しいことにその服のセンスはうたの目から見ても良く、サチを何処ぞの落としやかな令嬢のような雰囲気にしてている。

しかし、中身はやっぱり子供だ。

地面に木の枝でうんこの絵を描いてニヤニヤ笑ったりと、やっていることが下らない。

一方キュウベえも空き地において、こちらはマイペースに地面に丸くなっている。

その様子はいかにも可愛らしいが、サチにほったらかされているせいか、なんとも哀愁があった。

「サチ、キュウベえ」

バイクから柘榴と降りて名前を呼びかけると、サチとキュウベえはうた達の方を振り向いた。

サチははつとすると、慌てた様子で地面の絵を足で雑に消し、キュウベえを両手で掴むと、こちらへ走り寄ってくると、

「今の絵……、見たのか？」

赤面した顔で、見たこともないくらい鋭い目つきで睨みつけてくる。

よっぼど、さっきの絵を見られたのが恥ずかしいらしい。それなら描くなつて話だが、まあここは気を使ってやろう。

うたは、サチの質問に頷きそうになっている柘榴を密かに小突いて止めてから、

「全然見てないよ？」

「本当に……？」

「見てないって。本当に」

「……なら良いけどさ」

心なしかほつとしたように溜息を吐くサチ。

だが、さっきの言うことを素直に信じるとは……。我ながらバレバレだったと思うんだが。

「柘榴。うた。……また、会えたね」

サチはそう、何処となく含みのある言い方をした。

うたは瞬間、ぎよつとなる。うた達を見る彼女の瞳が、以前と会った時にはなかった、期待のようなものが宿っていたからだ。

それが具体的には何か分からないが、しかし相当重いものであるのは間違いない。

……ああ、嫌だな、嫌だな。そういうのめんどくさいな……。……。

柘榴はともかくさあ、そんな何かを期待されても、どうにかできる力ないってうたには。

ただでさえ、いっつもいっつも無気力なのにさあ。

でも、拒否できないよねえ……。柘榴にほつとけないって言っちゃったから、どうせ助けなきやだし……。

……あー、もう、カツコつけるんじゃないやなかった。結局しんどい思いするじゃん。

「二人とも、予想以上にここに着くのが早かったね」

「そつちこそ、サチに連絡するの早すぎない？どうやったの？」

「早島にも、ボクと同じ個体が沢山いるからね。その仲間に頼んだんだよ」

「……、えーと、要するにキュウベえってのは群体なの……？」

「そうだよ」

肯定され、うた達はそれぞれがそれぞれで異なる反応をする。

サチは、気持ち悪いもので見えるように手の中のキュウベえを見、逆に柘榴は興味深そうにキュウベえの耳などを仕切に触り、何かをぶつぶつ呟いている。

うたはというと、ある意味そこまでびっくりしておらず、逆に納得していた。

だって、各地に魔法少女がいる理由も、その魔法少女のグリーンフ

シードがちゃんど処理されている理由も、キュウベえが群体であればすべて説明がつく。

「いやあく、にしても、また見たけどすっげえカッコいいなあ〜」
微妙になった空気を無理やり払拭しようとしたのか、サチはバイクをジロジロと見ながらそう褒め称える。

しかし、うた的にはこれのどこがそんなにいいのかよく分からない。

古いし、お父さんの匂いがしてあんま好きじゃない。サイドカーの座席も掃除あまりされてないし。

……まあ傍目から見たら、そんなの分からないだろうが。

「分かるく、カッコいいよねえ、このバイク」

「意外と話が合うじゃない、柘榴」

そして何故かサチと意気投合している柘榴。確か中学一年生のはずなのに、そのはしゃぎっぷりはサチと同年代のようであった。

言っちゃ悪いが、もしかしたら二人の精神年齢はそう変わらないのかもしれない。

「柘榴、さつきと本題に入って。何か貴女達を見てるだけで疲れるからさあ」

「ねえ、やっぱ、さつきからだんだん私に対して辛辣になってない？うた」

「気のせいだよ」

うたは柘榴の文句に適当に返す。

サチがこちらに何か言いたそうに半目で見ていたが、それこそ恐らく多分きつと気のせいだろう。

「で、この船花様に会いたかったって、どういうことだよ」

サチが柘榴の方を向く。

瞳に宿る、こちらに何かを期待しているような光が一層増して、胸の奥が締め付けられる。

……それと共に強くなる、無気力な感覚に、柘榴などその期待には不相応だという、馬鹿にする思考。そして、そう思う自分に対する自己嫌悪感。

……あー、全部全部、嫌になる、嫌になる。不愉快で吐きそう。「こゆりとサチが寂しそうにしてたから、どうにかしたいなっと思っただの。」

……貴女達、何か辛いことあったんでしょ？あの時会って話している中で、そういうのを感じ取っちゃってさ」

柘榴はいつになく真剣だ。

それは彼女がたとえ無表情で棒読みであっても、雰囲気で分かる。サチの目が一瞬そのことに見開かれ、次に切なげに細められた。

まるで、何か光明を見出したかのように。

この空気に耐えられず、うたは込み上げてくる感情を、キュウベエの顔を見て落ち着かせた。

彼はいつも表情を崩さず、まるで永遠に溶けない氷のようだ。それが不気味ではあるが、しかし今のうたには心地よい。

「……うたの方は？」

「え？」

「なんとなくだけど、ただついでに、ここまで柘榴を送ったようには見えないんだよね。お前も、本当は私になんかあったりするの？」

あの期待が込められた目が、今度はこつちを向く。

うたは何処か酷い罪悪感に苛まれながら、違うと首を振った。

「いや、うたは柘榴が心配でついてきただけだよ。この子、ほつたらかしておけなくて」

「そっかあ……」

サチがあからさまにしゅんとする。

やめてくれ。……うただって、ちよつときついんだからさあ。

「まあ、歌羽の心配も理解できるよ。柘榴は、やることなすこと予測不可能だ」

「ちよつと、何でうただけじゃなく、キュウベエまで辛辣なの……!?!」
「それほど人望がないってことだろ」

小馬鹿にしたようにサチが笑う。と言っても、それはからかうような、軽いものだったが。

しかし、柘榴は少し拗ねたのか、むう……と、ほんの僅かに頬を膨

らませた。

「……でもどうして私だけにコンタクトをとってるの？こゆりは？」

「こゆりはほら、気難しいから。話しかけるならまずはサチからかなって」

「なるほど」

あっさりと納得したように頷く。

どうやらサチの中でも、こゆりは感情的で付き合いづらい人物、という認識らしい。

いや本当、どうしてこゆりのような子がサチと同盟を組んでいるのか分からない。

その接点が、色んな点から考えても全然見えてこないのだ。

「その判断は正しいよ、歌羽。キミが言う通り、こゆりは気難しい。それにサチからの方なら、こゆりがどうして『ああなっている』のか知れるからね」

「サチは、こゆりについて何か知っているの？」

「うん。こゆりはね……、妹を亡くした後、家族からも、入理乃からも裏切られたんだ」

やはり、色梨こゆりは暗い過去を持つていたらしい。

『妹をなくした』。『裏切られた』。その二つのワードだけでも、嫌な想像が働いてしまう。

一体、彼女はどれほどの絶望を背負っているのだろう。

「……柘榴、私達の寂しさに気付いたというのなら、どうか、私達を助けてよ」

「助ける……？」

「私達の、仲間になって欲しい。私達を、受け入れて欲しい」

うたははつとずる。

その頼みには、瞳に宿った期待と同じものが込められていた。

サチは人の温もりを求める心があったのだ。

そしてそれを求めるということは、こゆり同様、暗い過去があるということだろう。

何が、彼女達にあったんだ。

うたはもしかしたら、何か自分の手に負えないものに触れようとしているのではないか？

だが、怖くなっても逃げれない。

それは、好奇心があつたから。そして、柘榴をほつといておけないから。

そんな自分がどうしようもなく矛盾しているように感じられて、馬鹿馬鹿しく思う。

何が、何が柘榴のためだ。

何も出来ないくせに。それで、うたの価値は何も上がらないのに。

「そんな風に頼まなくても、サチとこゆりはもう私の友達だよ」

そんな風にもやもやしている間にも、柘榴は躊躇する様子も見せず、サチの手をとって親愛の情を表す。

サチは瞬間、瞳に涙を浮かべ、それを一筋流した。

「……良かった」

伝えようとしないと、何も伝わらない

その後、うた達はバイクの座席を椅子代わりとし、しばらく話をした。

話題は、サチやこゆりのことについて。サチが自ら、自分達のことを話したいと言ってきたのだ。

それは彼女の願望——自分達を受け入れてもらいたい、という思いからだろう。

しかし、うたはただ付き添いで来ただけでありサチを受け入れたのは柘榴だ。

だから、うたはその話を自分も聞いて良いのかと尋ねたのだが、サチは別に良いと答えた。

誰かにただ話したいのだと。分かってもらわなくてもいいから、心に溜め込んだものを解消したいのだと、寂しそうに笑うのである。

それが嘘だというのはみえみえで、うたは胸が張り裂けそうになる。

だが、やはり彼女を受け入れられる度量というものをうたは持っていない。

うたには自信がない。うたが持っている心はずっと空っぽなのだ。そんな奴が、他人をどうこう出来るのか？出来るわけがない。権利なんてものもない。

かと言って完全に見捨てることも憚られ、複雑な気分のままうたはサチの話を聞いていた。

サチは色梨こゆりや阿岡入理乃のこと、自分のことを含めて出来る限りの事情を話し、キュウベえもその補足などをしてくれた。

それはどれもが驚きの連続で、そして予想以上に重たい内容だった。

柘榴でさえ、サチの話を聞いている内に段々と口数が減る。

その中でも、特にこゆりの過去は一際辛いものだったように思う。

幼い頃から周囲に馴染めず孤立し、自分を殺して家族だけを支えに生きてきたこゆり。

そんな状況で彼女はキュウベえと契約し、やがて出会った入理乃に希望を見出したものの、何故か妹が魔女によって殺される。

挙げ句の果てに入理乃はいなくなり、真実を受け入れてもらおうとした家族からは魔法少女の力で拒絶されて、現在進行形でホームレス生活だ。

そりやあ不安定にもなるし、あの人間不信っぷりも納得だ。

むしろ、あそこまで気丈でいられるのだから大したものである。下手したら自殺してもおかしくない環境だっていうのに。

……初対面の時、こゆりは突然現れたうたに非常に驚いたような顔をしていたが、その胸の内では一体どんな感情があったのだろう。

おじいちゃんは、間違いなくこゆりに優しくしただろう。彼は超が付くほどのお人好しだ。

そんなおじいちゃんに、こゆりが何も感じないはずがない。

もしかするとおじいちゃんとの時間は、こゆりにとっては救いだっただのかもしれない。

だから——うたが来たとき、あんなにも驚いた顔をしたのだろうか。

……今思えば、もう少し気を使うべきだった。それに、随分と酷いことも言ってしまった。

後悔しても遅いが、……ものすごくあの時の自分を殺してやりた

い。

それから、それから——

うたは止めどなく、頭の中でこゆりに関する思考をぐるぐるさせる。

それはサチの話を聞いて、こゆりへの印象が大分変わったからだろう。

実は今まで、こゆりにはあまり良い思いは抱いていなかった。

縄張りのことで少しいざござがあったし、何より初対面の時におじいちゃんのそばに居たから、警戒心が上がってしまった。

だが、今は同情的な気持ちの方が強い。

だから、嫌うに嫌えないし、嫌いたくないとも思う。

……ちなみにサチに対しても、その事情を知ったことでこゆりと同じく大分同情的にはなったが、それでも疎ましいという感情だけはないならなかった。

本当、自分ながらクズだと思うのだが、やっぱりサチは本質的に純粹だから嫉妬してしまうのである。

「……あの、それでサチはその……、仲間が欲しいってこゆりに言ったんだよね？」

「うん……」

あらかた話して疲れたのか、サチは柘榴の質問にため息をつくように頷いた。

話の内容は、何故「受け入れて欲しい」のか、というものに移行していた。

……サチ曰く、入理乃はサチにとって唯一無二の親友であり、他に友達はこゆりぐらいなものらしい。そのこゆりもまた精神的に追い詰められており、サチを気遣える余裕はない。

サチとこゆりの二人でいても、その孤独は癒せないのである。

だから、誰か自分達を救って欲しい。助けて欲しい、ということだった。

うたはここに来て、初めてサチの瞳に宿った期待の意味を知る。

あれはつまり、自分とこゆりのために、鬱屈した今の現状から抜け出したいというサチの願いだったのだ。

ある意味、それは当然の願望だろう。

サチもまた、こゆり同様辛い過去を持っている。

ずっと過干渉してくるが、自分を見ないサチの両親。そんな彼らに育てられた彼女は、常に愛に飢えていたに違いない。

だから、入理乃という親友はきつとサチのすべてで、特別なのだ。それを唐突に失ったら、誰だってその穴を埋めたいと思うだろう。

「こゆりは何て？」

「考えさせて欲しいって最初は言われた。……その数日後に、仲間と一緒に探してもいいけど、あくまでそれはサチの仲間だけだって」

サチの話を聞いて、そりやそうでしょうな、と内心で納得してしま

う。

こゆりの立場からすると、もう仲間など作りたくない、という思うろうが、サチのことを考えると完全に断りきれなかったのだろう。

こういう辺り、意外と根は優しいこゆりらしい。

「しかも、最近何かを隠してるみたいでさ……。どうせこゆりのことだから大したこととしてねえと思うけど、何かもやつとすんだよ」

不貞腐れたように、サチはぶすつとする。

皮肉にも、入理乃も隠し事をしていたのにこゆりも同じことをやってしまっている。それが気に入らないのだろう。

「……どうして、何かを隠していると分かったんだい？」

「そりゃあ、あれだ。」

会うたびに、すっげえ顔が強張ってんだよ。あと若干拳動不振になつたりしてるし、自分の現状を話したからないし。これはもう、何かを隠してるとしか思えないでしょ？

まあ、当人は自分がそんなリアクションしてるとは気付いてなくて、上手く隠し通せてると思ってるみたいだけど」

何そのポンコツエピソード……。

こゆりって、もしかしなくても天然の気がないだろうか。

物騒を仏像と聞き間違いて照れたりしてたし……。

「あーもう、あいつ、ムカつくんだよ!!」

自分だって寂しい思いしてくるせにつっぱねやがってえ!!ここ最近、妙にこつちに会いに来てくれたり、話をしに来てくれると思えば、仲間を探そうって言うのと遠回しに話を逸らされるしい!!さつきも言っただけど何か秘密隠してるしい!!

本当、素直じゃないし何も言わない!!そゆとこ嫌い!!大嫌い!!」

怒りのボルテージが限界突破したのか、サチが強く頭を掻き始める。

それに、柘榴とうた、ついでにキュウベえは三人揃って顔を合わせ

る。
「……それ、本人に直接ぶつけらればっ!」

柘榴が全員が思ってることを代弁する。

しかし、サチはぶんぶんと勢いよく首を振る。

「む、無理無理無理無理無理!!こゆりだつて大変だし精一杯なんだよ!!これ以上この船花様が!!普通に考えて!!聞けるか!!」

「……」

最早、困り果てて何と言つたら良いか分からない。

なんかサチつて思つた以上に……、その……、端的に言つて面倒くさい。

超絶に不器用なんだろう。物言いははっきりしてるくせに、それを肝心の伝えたい人には気を使って言えないとか、もどかしいにも程がある。

本当、……これ、どうすれば良いんだ?

そりやあコミュ障同士上手くいかないのは分かるけどさ、それにしただつて、こゆりとサチ、どっちも問題があり過ぎない?

こゆりは言わずもがな素直にならな過ぎだし、サチも変な意味で意地を張っているように思う。

「……普通に考えて、ね。なら、普通の状況じゃなきゃ、その思いを言えるつてこと?」

しばらく考える素振りをしていた柘榴が、ふと、そんなことを呟いた。

それは何の変哲もない逆転の発想だったが、しかしサチにとっては驚きだつたらしく、目を点にしている。

「は、はあ!?何言つてんの!?普通じゃない状況なんて、どんな状況だよ!」

「それは分からないけど」

無表情でのんびりと言う柘榴に、サチの顔は怪訝そうに歪められる。

そして、そこには呆れも混じつているようであり、何なんだよ、とサチは小声で文句を言った。

しかし柘榴はそれを聞いていないのかマイペースに、

「あ、でもでも、その思いは絶対伝えた方が良いよ。それだけで、こゆりとの仲は多少改善されると思うから」

「どこにそんな根拠が……」

「根拠なんてない。勘だよ、勘」

サチの呆れ顔が、今度は微妙な顔に変わる。

勘という、ふわっふわした答えに、サチはいささか失望しているようですらあった。

これは不味い、と何故か思ううた。

気がつけば、うたは柘榴のフォローをしていた。

「……うた、柘榴のように勘ではないけど、彼女の言うことは正しいと思うよ。互いの想いが伝わってないから、すれ違うんだ」

うたに、サチの、柘榴の、キュウベエの視線が集まる。

それはむず痒く、煩わしく、面倒くさいもので。だから、目を逸らしたかったんだけど、うたはそうしなかった。というより、出来なかった。

体が言うことを聞かないのだ。本来の自分の思いとは違う、相反する感情が急に浮かび上がり、それがうたの言動を支配している。

サチの顔をちゃんと見て、うたは向かい合う。

「ぶつちやつけ、こゆりにも結構問題はあるけど、貴女にも問題はある。

それは、直接こゆりにぶつかろうとしてないことだ。そんなんじゃない、いつまで経っても状況は進展しない」

「……」

「さつき、こゆりが何も言わないって怒ってたけど——それ、貴女もおんなじだと思うよ。……伝えようとしないと、何も伝わらない」

“伝えようとしないと、何も伝わらない”。

自分で言っていて、かなり不快な言葉だった。

伝えようとしたって、伝わらないこともある。

どれだけ感情を思いを意図を意思を込めても、相手が拒絶すればそれまでだ。

主人公が綺麗事言っ、ヒロインの心を救うなんて展開、そうそう実現しない。

サチをこゆりに向き合わせて、それで傷ついたらどうするって言う

んだ。

こんな無責任なこと言うなよ。らしくないだろう、古鐘歌羽。でも、そう言い聞かせても感情が止まらない。勝手に口から、それが飛び出していく。

「そう……、何も伝わらないんだよ、何も。」

あのね、サチ。貴女はまだ分からないだろうけど、気が付いたら既に手遅れなことっていっぱいあって、それはずっとずっと心の中に残り続けるんだよ。

でも今なら、間に合う——うた、サチみたいな純粋な子には、後悔もして欲しくないし、その純粋さを失って欲しくない」

はつきりと言ったうたのその発言に、柘榴が、サチが驚く。

キウウベえは分からないが、ぴくりと耳を僅かに立てたことから、何かしら思うところがあつたのかもしれない。

しかし、うたもうたで酷く驚いていた。いや、驚きというより、それは呆然といった方が正しいか。それほどまでに、自分の言葉が衝撃的だったのだ。

どの口が言う。何故お前がそんなことを口走る。

ああ、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い。

何が、何が、何が、何が、何が、後悔をして欲しくないだの、失って欲しくないだの。一体、なんなんだよ。

うたは、何がしたいんだよ。うたは、こんなことを思っていたのか？

訳が分からない。矛盾してる。だって、うたは諦めてる筈だ。全部を馬鹿にして嫉妬して。

それが、こんな無意味な——

「……ありがと。うた」

「……、何が？」

しばらくの静寂の後、ふいに投げかけられたのは、サチのお礼の言葉だった。

うたはそれがとてもおかしく、訝しく思っ、ゆっくりと顔を向ける。

彼女の双眼に映るうたは、動揺した様子もなく、普段通りだ。

良かった。うたの外面、ちゃんとしてる。

これで、醜い自分を隠せる。

「なんか、上手く言葉にできないんだけどさ。……伝えようとしないと何も伝わらないっていうのは、その……、その通りなのかなって……」

俯いて、サチはぼそぼそと喋る。だが、拙くともすぐそうやって言えるのは、彼女が素直だからだろう。

それは幼い故なのか、それとも元からそういう気質なのか。恐らく両方だろう。うたにはないものが、サチにはある。

「それに気づけたから……。だから、ありがとう」

ふにやりと笑うサチ。

うたにはそれが、あまりに眩し過ぎて。胸の内を焦がすような、この思いは何なのだろうか。

……やはり、自分で自分が分からない。しかし強烈な虚無感は、少し和らいだような気がする。

「……気を使わないで。うた、思ったこと言っただけだもん」
穏やかではない心情を隠すため、最大限優しい声で言う。

その甲斐あつてか、サチがいくらか明るい表情をした。

……それで良い。小さな子が、暗い顔をしててもしょうがない。

「結構うたって良いこと言うじゃん。私ちよつと見直したよ」

「……柘榴はうたをなんだと思ってるの？」

「え？ 幸薄い人かな？」

「……うた、その評価は心外だなあ」

というか、普通に失礼だろうよ。ちよつとどうということだって、問い詰めてやりたい気分である。

まあ、そんなこと面倒くさいからやらないけど。

「サチ……。自分の思いをこゆりにぶつけてみるかい？」

それまで黙っていたキュウベえがサチの足元で、確認する様に聞いてくる。

サチは一瞬だけど迷うような顔をした後、

「正直言うと、今のうたの言葉でちよつとやってみようかなって思ったけど……、やっぱり無理……。かもしれない……。でも、普通の状況じゃなきゃ——こゆりも私も自分から逃げられない状況なら、……言えるかも」

「……まさか、強制的に自分で自分を追い込むつもりなのかい？」

「“自分”では、無理だよ。だからここは、柘榴達の手を借りる」
そう宣言して、うた達を見てニヤリと笑った。

これ絶対あれだわ。この後なんか、絶対厄介なことに巻き込まれるわ。

……やっぱり、柘榴なんかにつき合わない方が良かったんじゃないですか？

ああ、畜生。面倒くさい。面倒くさ過ぎて、数十分前の自分を呪い殺したくなる。

「ん？」

ふいにポケットに入れていたスマホから、着信音が鳴り響いた。

取り出し、画面をタップして確認すると、それはラインの通知だった。

その送り主の名前を見て、どうしてこのタイミングで、と思う。内容も内容だし、また面倒くさいことが増えてため息が出る。

「そんな疲れた顔しちやつて、誰からラインが来たのさ」

「……小豆さん。恵比寿小豆さんだよ」



闇の帳が落ちる時間に町を歩き周り、散策する。

それが、ここ最近のあたしの日課になっていた。

だから今日もあたしは、一人で夜の中を進んでいく。

回るのは、主に人がいない場所。

しかし、魔女や使い魔を探しているわけではない。そもそも、回っ

ているのは自身のテリトリーではない。あたしはわざと、他人のテリトリーに勝手に入り込んで行動している。

もちろん、グリーンフシードなどを奪うつもりはない。むしろ、そうやって他の魔法少女を苦しめている奴を探しているのだ。

既にここ数日で、五人もの魔法少女をやっつけた。

最初に会ったのは二人組で、姉妹だった。

次に会ったのは高校生で、見るからに陰気そうなやつだった。

その次に会った魔法少女は、見た目は大人しそうだったが、性格はあまり良くなかった。

全員、とても弱かった。

あたしの魔法少女としての素質は結構高いらしく、そのおかげで負けがない。

流星あたしだ。

彼女達に苦しめられていた魔法少女は、あたしに必ず感謝の言葉を言ってくれた。

助けてくれて、ありがとうございました。このご恩は必ず、返します、と。

だがその度に、違う、とあたしは首を振った。

だってこれは、そもそも弱い新人魔法少女を守るためにやっていることではない。

完全なる八つ当たりだ。

悪いやつなら、とっちめても何も良心が痛まない。このむしろくしやしたもやもやをぶつけても、何も文句は言われない。

だから、あたしは「誰の味方」でもないんだ。

決して、助けることで認められたいとか、受け入れて欲しいとか、弱味に漬け込みたいとか、恩を来させたいとか、優しくされたいとか、感謝されたいとか、そんな卑しいこと思っていない。

救われたいと、どうしてあたしが願う。そもそも幸福ってなんだよ。

あたしの幸福の象徴は——家族は、嘘っぱちだったじゃないか。

全部嘘だ。嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ。愛なんて、嘘だ。

「全部無い。無い、無い、無い、無い、無い。愛なんて、無い。サチも入理乃もお母さんもお父さんもさゆりもキュウベえも——信じない。信じられない。信じるものか。」

だから——手に入れないと。本当の愛——」
とつ、とつ、とつ。

一步を踏み出す度に、あたしの軽い足音がやけに響く。

それなのに、あたしは前に進んでいる気がしない。

小学生の頃の話だ。

運動会の入場練習の時、何人かの生徒が真面目に練習をやらず、先生達が怒ったことがある。

彼らはあるうことか、怠慢な生徒を叱らず全体の連帯責任とし、あたし達はその場で行進のやり直しをさせられた。

全体が揃わないとダメだ。

足が上がっていないとダメだ。

何度もそうやってダメだしされ、その時間が永遠に感じられたものだ。

まあ後から振り返ってみれば、たかだか一時間や三十分程度の長さだったが。

そんなどうでも良い昔話を、あたしは何故か思い出していた。

それはあの時同様、今の状況がずっと続くかのような錯覚に襲われているからだろう。

しかし、永遠など真の意味で存在しない。あたしが何もしなくても、何かをしようとも、時は移ろっていくものである。

——今のあたしは、ずっとは続かない。

人気がない、河川敷を通っている際だった。

ふいに、本当にふいに、誰かの怒声が聞こえた。それと共に、何か

暴力的な——何かを激しく叩きつけたような音が響く。

魔力反応を感じとる。これは魔女のものでもなく、ましてや使い魔のものでもない。このパターンは間違いなく魔法少女のものだ。

あたしは瞠目し、僅かな期待を伴って視線を彷徨わせる。

遠くに見える、ビル街の明かり。

側で流れている川の水面はその光を反射し、いつそ幻想的ともいえる光景を作り出していた。

しかし、その川にかけられた橋のすぐ近く、ちょうどあたしから見て真正面の場所で、綺麗な光景に似つかわしくない場面が繰り広げられている。

そこにいたのは、二つの人影。どちらとも、中学生くらいの魔法少女だった。

一人はセミロングの金髪で、フリルが付いたポンチョを着込んでいる。

それ以外に特徴らしき特徴はなく、見た目は凡庸。

武器である短槍を落とし、地面に手を付いている。

対する二人目は、紫色の修道服を着た少女だ。

頭巾から覗く青色に近い髪は肩より僅か上のあたりで切り揃えられ、

顔は猫のようで愛らしい。

だがその目は憤怒に濡れ、手に握られたフランベルジュはポンチョの少女の首元に向けられている。

「つて、あの子……」

シスターの子に既視感を感じて一瞬疑問に思ったものの、すぐにそれに思い当たる。

彼女はあたしのテリトリーに侵入し、頭巾の少女を襲っていた魔法少女だ。

きつちり痛い目みせたつもりだったけど、まさかこんなところで同じことをしていたとは。本当、信じられない。

「誰がお前なんか……!! やつと手に入れた場所なんだぞ!! そう簡単にやれるか!!」

「何を言っているんだ!! こうしてお前を倒した以上、もうこの縄張り
はあたしのものだ!! あたしは、グリーンフシードが必要なのだ!!」
「それは私だって同じだよ……!! さっさと、いさ土に帰れ!!」

シスターの少女に脅されているにも関わらず、ポンチヨの少女が負
けじと吠える。

すると腹を立てたシスターの少女は、ポンチヨの少女の髪を乱暴に
掴み、自分の顔の方まで持ち上げた。

「ぐっ!!」

痛みで短い悲鳴を上げるポンチヨの少女。シスターの少女は、彼女
に向かって唾を飛ばす程大きな声を浴びせる。

「ぐちやぐちや言ってるねえで、渡せこの野郎!! もうここしかないんだ
よ!! ここしか!! このままじゃ、あたしはあの人を救えない!!」

「何のことを言ってる……」

「あたしに渡せえ!! 何もかもを!!」

激情にまかせ、シスターの少女はポンチヨの少女を地面に叩きつけ
る。

派手な音がして、ポンチヨの少女は倒れた。その上に、揺らめく炎
の形をした剣が掲げられる。

「そこまで強情なら、いつそあたしが——」

「止めろ!!」

フランベルンジュが振り下ろされる前に、あたしはとっさに叫ん
だ。

シスターの少女の動きが、動揺したようにピタリと止まる。

あたしは魔法少女に変身して飛躍。その強化されたジャンプ力は、
あたしの体を少女たちのもとへと一気に移動させた。

「……お前は」

いきなりのあたしの登場に、シスターの少女は震える声を縛り出
す。

一方でポンチヨの少女は混乱の二文字を顔に貼り付け、あたしを凝
視していた。

「誰……?」

「……ただの『風来坊』よ。そいつみたいな奴をボコボコにして、ウザばらししてるの」

「じゃあ、お前も縄張りを奪いに——」

「勘違いしないで。縄張りとか、興味ない。興味あるのは、ただ相手をボコボコにすることだけだから」

警戒しているポンチョの少女に、あたしは冷たく言い放つ。

すると次の瞬間、ポンチョの少女が短く悲鳴を漏らした。

……おい、待て。なんでそんなに怖がる。何もしないって言うてるのに——

「良いところだったのに。また……、また邪魔しに来やがあつてえええええ!!」

「うお!!」

何が、彼女の中でそこまでやくに触ったのか。

シスターの少女は突然髪を振り乱して怒りだし、側にいるポンチョの少女も忘れてこちらへ突撃。

まさに文字通り鬼のような形相をしながら、鋭く、しかし力強い突きが放ってくる。

あたしは咄嗟に小型の盾を召喚して身を守るが、それでもビリビリと、持ち手を握る手に衝撃が伝わる。

「死ねえ!!死ねえ!!死ねえ!!」

何度も何度も叩きつけられるフランベルジュ。

激情が少女の力を増幅させているのか、以前戦った時より、スピードもパワーも上がっている。

その練撃を苦勞しながら受け流し、受け止め、あたしはなんとか堪える。

さつきから前進が一步もできない。たまに盾でこちらから殴りつけても、その猛攻に返される。

「どいつもこいつも!!お前もあたしを笑いやがって!!何もできないと、そう思ってあたしを下にみるんじゃねえよ!!」

シスターの少女は被害妄想が酷いらしい。

根も歯もないのに自分が馬鹿にされていると思い込み、酷く憤怒し

ている。

ちよつとやめて欲しいんですけど。あたしが何したってんだ。

「そうやってみつともなく怒っているんだから、下にみられてもしようがないでしょ!!ガキか!!」

「誰がガキだよ!!今年で十五よ、あたしは!!」

「一つ年上かよ!!全然そんなふうに見えない!!」

「なら今からその見方を変えて、年下らしく年上を敬ええ!!」

そう吠えるとシスターの少女は、盾で守っている正面ではなく、右側面から剣を差し込むように攻撃してきた。

狙いは右腕だ。持ち手を握れなくし、盾を使えなくさせる作戦だろう。

「……誰がお前みたいなのを敬うか!!」

しかし、あたしもただではやられない。

液体金属を召喚し、右腕に巻き付かせて硬化。不格好な、即席の籠手の完成だ。

その籠手と剣がぶつかり合い、ノーダメージとまではいかずとも深い負傷は免れる。

あたしはそのまま右腕を振り払うと、フランベルジュを思いっきり弾いた。

「くそ……!!」

シスターの少女が失敗に舌打ちをする。

あたしはすかさず一步を踏み出し、渾身の力を込めて盾を押し出した。

シスターの少女の体が後方に思いっきり下がり、隙が生まれる。そこへ盾を変形させて作った、いわゆるフランキスカと呼ばれる投擲用の斧を容赦なく投げつける。

当然防御し、斧を弾くシスターの少女。

あたしは肉薄し、右腕の籠手に魔力を通す。液体金属は蠢きながらあたしの想像を反映させ、その身から一メートルもの鉤爪を生えさせる。

「とった」

眩き、姿勢は低く、右腕をバネが縮むように引かせる。

シスターの少女は息を飲むが、もう遅い。彼女が気がつく前に、腕を伸ばし——下から上へと爪を突き出した。

フランベルジュの刀身の、ちょうど半分あたりのところに爪がぶつかる。

そのせいで見事に剣は真つ二つになり、軽い音を立てて地面に落ちる。

それを、啞然とした表情でシスターの少女は見ていた。

「どうして。なんであたしは何も……。何でお前なんか……」

「アンタがあたしより弱かった。それだけじゃないの？」

冷めたように言うと、シスターの少女は笑みをこぼした。

彼女の中で、怒りが別のものへと変換されているに違いない。愉快そうに、実に愉快そうに少女は笑い転げる。

「ははっ!!そうかよ!!あたしはやっぱ、この世界でも落ちこぼれかよ!!

はははははははははは、……。あたしの馬鹿。クソツタレ」

失望の声音を吐き出し、シスターの少女は首元に触れる。そこにあったのは、紫色に光り輝く十字架の意匠の宝石……。ソウルジエムである。

それを指先でなぞり、少女は先ほどとは打って変わって目元を悲しげに下げる。

「……あの、アンタ——」

「出てくよ。出てけば良いんでしょ。はいはい、分かってます分かってます。どうせあたしなんて、邪魔だと思ってるでしょ。ならお望み通り目の前から消えてやるよ」

シスターの少女は悪態をつくど、ふん、と鼻息を荒くして背を向ける。

そうして、そのまま闇夜の中へと歩いていった。

最後の最後まで小物臭い言動である。……。なんか、入理乃に近いものを感じてしまう。まああちらは小学生だったので、年相応の性格ともいえるが。

「本当なんだったんだ……」

「それは……、こっちの台詞なんだけど」

戦闘の間に、己の体を治癒をしていたのか。外傷もなく、しかし疲弊した様子でポンチョの少女はなんとか立ち上がる。こうして相對してみると、結構背が低い。恐らく、百四十五センチ前後という感じだ。

「ともかく。アンタがいなきやばかったよ。助けてくれてありがとう」

「――」

お礼を投げかけられ、言い表すこともできない切なさが胸のあたりに広がっていく。

だから自分が喜んでいるのか、いまいち分からない。

でも、口角が自然とニヤケそうになるのだ。本当に奇妙だ。あたしは『誰の味方』でもないのに。

「……別に助けたわけじゃないって。でも、はいこれ」

「はっ」

少女の手の平に、あたしはポケットから取り出したものを押し付けた。

それは、あと一回使えるぐらしか使えないグリーンフシードである。

そのためか、少女はあたしの行動に驚いているようだった。

またその反応で、何かが昂る。もっと、もっともっと、そうやって、あたしを見てほしい。あたしを優しいやつだと思って、認めて欲しい。

「良いの？」

「良い良い。いっぱいあるからさ」

嘘だ。せいぜい三個ぐらいしかない。その三個も、どうせすぐ使ってしまう。けれどもこの子に認められるためなら、そんなの痛くも痒くもない。

でも——と、あたしはこの子を観察する。

……性格はいまいちよく分からないが、それほど優しいわけでもない気がする。

グリーンフシードを渡した途端、あたしの罪悪感よりも喜びの方が勝った目をしていた。

「……今回も、サチの仲間を探すのは失敗か」

「え？」

「なんでもない。それじゃあね」

あたしは手を振ると、シスターの少女が去った方とは反対方向へと足を進めた。

闇夜の中へ、あたしは再度溶け込んでいく。その先にあるのが何なのか、不透明なままに。

劣等Ⅱ絶望

「……あの野郎……!!いつか絶対、切り刻むなり何なりして痛い目にあわせてやる……!!」

闇世の中、あたしは歩きながら呪詛を吐き続けていた。

その対象は、もちろんあの液体金属を操る魔法少女である。

さつきから、あいつには腹が立ってしようがなかった。

あたしは魔法少女になってここ一ヶ月、地元のいさ土で縄張り争いに負け続けていた。

どうやらキュウベえは意地の悪いことに、あたしと同じような新人をぼんぼん増やしていたらしい。

結果、魔法少女の縄張り不足が起き、争いが激化。あたしも早々に狩場を奪われた。

その後、なんとか同じ境遇の子とチームを組んだが、それも仲の悪さが原因で即解散。また縄張り争いに巻き込まれ、そうして流れ着いたのが牛木草である。

ここはいさ土よりも、そこまで縄張り争いが頻発していない治安の良い場所だった。

そのため滅多に襲われる心配もなく、縄張りも時期に手に入るだろうと油断していた。

だが、そう都合よくいかない。

何処の狩場も他の魔法少女が既に所有しており、頼んでもそれを使わせてくれなどしない。あたしがグリーンフシードを手に入れるには、もう他の魔法少女から無理やり縄張りを奪うしかなかった。

しかし、これも上手くいかなかった。

相変わらず他の魔法少女に負け続け、追い出され続けた。

そんな中で、諦めず何度も何度も他の魔法少女の縄張りを奪おうとし——やっと今回縄張りが奪えそうだと思ったのだ。

でも、そんな希望も泡のように消え失せた。あの液体金属を操る魔法少女のせいだ。

一度邪魔されたのもあって、最早、腸が煮えくりかえるどころじゃ

済まされない。彼女の姿を脳裏に浮かべるだけで、殺したくなるぐらいの憎悪が腹の底から湧き出てくる。

「……いや、今はそれよりもグリーンフシードだ。ともかくグリーンフシードを、なんとかしないと……。今のままじゃ、全然足んない……」
現状の手詰まりを思うと、自然と憂鬱になる。あたしは思わず、頭に手をやった。

あの人の——お母さんの病気は、今もなお進行している。医者が見立てでは、余命はあと一ヶ月。

手術は出来ない。

お父さんの勤め先の工場は、他所から来た会社の嫌がらせを受けて財政難になっている。そのためうちの家計も火の車であり、お母さんを入院させているだけで精一杯だ。

治す術はあたしの固有魔法、病気の治癒のみである。しかし、お母さんの病気は重すぎて、あたしの魔力では快癒できない。

だから一ヶ月までに、どうにかして大量のグリーンフシードを掻き集めなければ。

それが出来なきゃ、お母さんは死んでしまう。

お母さんを失うのは嫌だ。

あの人は、出来損ないのあたしに唯一失望しないでいてくれた人なんだ。

彼女がいない世界など、生きている意味も、価値もない。

……この際、手段など選んでいられるものか。

魔法少女の命を殺すなり何なりして、グリーンフシードを奪うもよし。他の魔法少女が魔女のことで争っている隙に、漁夫の利を狙うのも良いだろう。

それからそれから——

「くそ……!!」

あたしは苛立ちのあまり立ち止まると、側にあつた外灯の柱に拳を叩きつけた。

鈍い痛みが走り、手にアザが出来る。

だが、それで感情が発散されることはなく、むしろより激しくなっ

ていく。

本当は、こんなこと考えたくもない。

本当は、誰かにひどいことをしたいわけでもない。

あたしはついさつき、金髪の魔法少女に暴力を振るっていたが、あれも実のところ本意じゃない。

誰かを傷つけるのは、流石のあたしだって心が痛む。何より、こんなことが知られればきつとお母さんに嫌われてしまうだろう。

それが、一番恐ろしい。

しかし、そんな手段しかあたしにはない。

あたしは、小さい頃から物覚えが悪かった。何も出来なくて、とろくさいって言われ続けた落第生だった。

それは中学生になった今でも、多少マシになった程度で大して変わらない。

愚鈍なあたしは、やっぱり魔法少女になっても落ちこぼれなのだ。皆みたいは何もかも上手く出来ない。

だから成功法は使えなくて、結局外道に落ちる羽目になった。

「どうしてあたしは……」

強烈な後悔の念があたしを襲う。

今のあたしって、一体なんなんだろう。何処にも行き場もなく、誰かを傷つけても何も得られない。

なんて惨めだったらいいんだ。

こんなことになるなら、契約の時にあの人の病気を治してほしいですって頼めば良かった。

病気を治す力の方を願ったって、何にもならなかった。

「……うう、……ぐす……」

あたしは思わず、みつともなく泣き始めた。押さえ込んでいた色々な感情が溢れ出して、止まらないのである。

誰かに相談も出来なくて、ただ責任感がプレッシャーとなって常にかかっていた。

そうしてもがけばもがく程焦り、失敗し、状況は進展しない。そのくせお母さんは日々弱くなっていき、タイムリミットが僅かであるの

を突きつけられる。

……もう、限界だ。もう、どうすれば良いか分からない。

いつそのこと、お母さんが病気になる前に戻ればいいのに。それか誰かあたしのことを――

「何でこんな道端で泣いてるの？もしかしてお腹でも痛くなつた？」

ふと後ろから、不躰にあたしをおちよくるような声が聞こえてきた。

あたしはまず誰かいるということに驚き、ついで泣いているところを見られたことに苛ついた。

これは何か一言言つてやろうと、涙を急いで洋服の袖で拭う。そうして後ろを振り向いた途端、

「ばあ

「……うきや？」

外灯の光に照らされた少女の顔が、至近距離であたしの顔に近づけられた。

当然あたしは驚き、短い悲鳴を上げて数歩距離を取る。

すると少女は腹を振らせるほど哄笑し、目尻に涙を浮かべた。

「すっごい良いリアクション!!予想以上で、逆に感心したわよ」

「いやー、それほどでも……つて、失礼だろ!!そんなんで感心されたくないんですけど!」

「これまた良いノリツツコミで。貴女、天才的な弄られ役の素質があるわね」

「そんなの全然欲しくない!!」

なんだか漫才じみた会話をしてしまい、あたしは頭が痛くなった。ここまで初対面の相手におちよくられたのは初めてである。

少女は比較的落ち着いたあとも、時折くすくすと小さく笑う。

忌々しいことに、先ほどのやり取りを思い出しているのだろう。

「お姉さんつておもしろいわね。こんなに愉快なのは久々よ」

「……あたしもこんな笑われるのは久々だわ」

僅かに眉を寄せる。

馬鹿にされるのは慣れてるが、しかしこうも堂々とからかわれるの

は腹立たしい。

なんなのだろうかこいつは、とあたしは少女を観察する。彼女が外灯の光をスポットライトのように浴びてくれているおかげで、視界の悪い夜の中でもその全身がはつきりと見える。

年の頃は、十三、四才頃だろうか。

色素の薄い淡い色の髪を二つ結びにし、肩に垂らしている。

服装が古風なローブなためか特に目立った露出は少なく、落ち着いた印象を受ける。が、それは顔を見なければの話であるのは言わずもがなである。

……格好や魔力反応から察するに、どう考えてもこの子は魔法少女だ。

そしてこちらに近づいてきたということは、あたしが魔法少女であることを彼女は知っているのだろう。

もしかしたら縄張りのことなんか文句を言いに来たのかもしれないと、あたしは少女を警戒する。

「睨みつけないですよ。そりゃあ最近ぴりぴりしてるけどさあ、こっちは争う気はないわよ？」

ねえ、お姉さんと笑う少女。

随分と飄々とした子らしい。あたしの態度に不快そうな表情を全くしない。まあそれは、ある意味予想がつく反応だったからというものもあるだろうけど。

「どうだか。今まで散々あたしは、色んなところを追い出され続けたんだよ？その経験から言わせてもらおうと、お前みたいなのが一番怪しい」

「ちよっと人を疑いすぎでしょと思うけど、反論できないのが地味に痛いわね」

少女は恥ずかしそうに頭の後ろを掻いた。

それが冗談ではなく本当に苦々しそうな仕草なので、一瞬だけ、彼女に敵意はないのだと思ってしまうし、そうにもなる。

かといって、そう信じ込んでしまうほどお人好しでもない。

あたしは変わらず警戒を続け、少女に問いかける。

「……お前、グリーンフシードとかかを奪うために、あたしに近づいてきたの？」

「うんにや。私が貴女に近づいたのは、ある人が貴女を自分の元へ連れてこいと言ったからよ」

「ある人……？」

不穏な単語が聞こえ、あたしは震え上がった。

……ま、まさか、その「ある人」ってあたしに対して、何か恨みでもあるんじゃないよね？

ヤバイ。心当たりがありすぎるわ。

……ここ最近、本当録でもないことばかりやってたから……。

「ビビンないですよ、お姉さん。あの人は、別に貴女に酷いことしようとしてないから。むしろ、貴女を受け入れてたがっているだけだから」

「受け入れる……？」

「……お姉さん。貴女、牛本草出身じゃないでしょ？」

余所者だということを書いてられ、動揺が走る。少女はそんなあたしを面白がるように、ニヤリ、と悪戯っぽく笑ってみせた。

「すぐ分かるわよ。何だかここらに慣れてないみたいだし、何よりこそこそ移動してんだもの」

「……、もしかして、つけてたのか……？」

「サチちゃんじゃあるまいし、私はそんなことしてないわよ。だけど、偶然お姉さんをあの人が見ちゃってさ。それで会いたって言い出しちゃったの」

知らない子の名前を出しながら、少女は困ったような表情になる。

口元の笑みは諦め気味になっていて、なるようになれ、という彼女の心の声が聞こえるようだった。

「ごめんなさいね。本当はお姉さんをあの人のところへ連れて行きたくないんだけど、私、あの人にはちよつと負い目があるから命令には榮らえないのよ。」

だから、素直にあの人に会ってくれない？

これは悪い話じゃないわ。あの人の元にくれば、こそこそする必要もなくなる。今よりずっと好き放題できるわよ？」

「――」

こちらを真っ直ぐ見る少女に、あたしは思わず目を見開く。自分についてくれば、日陰者でなくなる。その提案が、今のあたしには一種の希望のようにも思えたのだ。

だって堂々と出来れば、その分よりグリーンフシードを集めやすくなる。

しかし、だからこそ迷いも生まれる。

まだその「ある人」が、あたしに対して恨みがある可能性は捨てきれないのだ。

もしかしたら、「ある人」は都合が良い話であたしを誘き出し、制裁を加える気なのかもしれない。

でも――どんなに怖くても、もうあたしに時間は残されていないんだ。縫れるものは、縫らないと。

「分かった。なら、さっさとあたしをその「ある人」の元へ連れて行って」

「え、マジで?」

あたしが申し出に頷き返すと、その返事が予想とは違っていたのだろう。少女は僅かに驚いたような目で見てきた。

「意外ね、お姉さん。もっと嫌がるかと思っただけど」

「生憎、あたしには行き場がどこにもないんだ。……それが手に入るってんなら、ついて行かない理由はない」

少女の目に、こちらも強い意志を込めた瞳を返す。

お母さんが今病気で苦しんでいるのは、あたしのせいだ。

だからあたしには、彼女を救う責任があるのだ。

たとえ、何を代償に払っても構わない。お母さんさえ助けられれば、それだけで良い。

そのチャンスを逃してたまるか。

「……そこまでお母さんを大切に思っているのに、それを私の都合で利用してごめんなさい」

「ん?何か言った?」

風のように小さな呟きに、あたしは疑問の声をあげる。

しかし、大したことではなかったらしく、少女は何でもないと首を振った。

「じゃあ、お姉さん。案内してあげるから私についてきて。あ、逸れるのが不安だったら手を繋いであげるけど？」

「いらんわ。ガキかあたしは」

「怒りっぽい人ねえ。軽いジョークだってのに」

少女はやれやれと肩をすくめる。それがいかにも大げさなもんだから、あたしは一瞬だけ本気で引っ叩いてやろうかという気になった。もちろん、そんなことを実行するつもりはないが。

しかし、

「……なんか調子狂うな。本当」

この子と話していると、なんだか感情的になってしまうというか、素直になってしまおうというか。怒りで怒鳴ってばっかになってしまおう。

……かつて初対面でこれ程までに振り回されたことはあつただろうか。

実に奇妙で、実に疲れる。

「でも、泣いているよりかは良いでしょ？」

「……!!」

はつとして少女の方を見る。少女はにっしし、と歯をみせて、してやったりといった風に笑う。

それであたしはわざとおちよくられたのだと気がついた。あたしは、見ず知らずのこの少女に気を使われていたのだ。

「くそ……、あたしとしたことがなんたる恥辱……」

「そんな落ち込まないでよ、お姉さん」

「落ち込むっつーか、呆れてんだよ。余計なことさせてしまった、馬鹿で愚かな自分に」

「……ふーん。お姉さんってば、思ったより難儀な人なのね。……そんな風に自分のことを考えてるなんて、辛くはないの？」

鼻白んだような顔をし、何故かいらぬ心配をしてくる少女。余計なお世話だ、と悪態をつくど、

「そういえば、お前名前は？」

「私？私の名前は伊尾……、じゃなくて、東ミズハ。貴女は？」

「みいか。藤野ふじのみいかだよ」

あたしはぶっきらぼうに名前を名乗る。

少女は忘れぬように、みいかね、とあたしの名を口にし、うんと頷いた。

「それではお姉さん——藤野みいかさん。改めて、あの人の元へ案内するよ。……ちよつと遠いけど良い？」

「良いよ。どうせ今、深夜だし。それよりさっさと連れつてて」

「分かったよ。せっかちな藤野さん」

ふふ、と見た目に反して大人っぽく笑うと、少女はくるりと背を向けて闇の方へと歩を進めていく。

あたしはその姿に緊張のようなものを感じながら、少女と同じように夜の中へ足を出した。



「……唐突ですけど、アニメとかでよくありますよね？貧乳の女性キャラが、巨乳の女性キャラを見て嫉妬したり、羨ましがったりするシーン。」

あれ、正直見てて私思うんですよねえ——マジ死ねって」

につこりと……、そう、につこりと、パイプ椅子に座りながら少女

——恵比寿小豆さんは笑った。

彼女の胸は、大きく膨らんでいた。ぶっちゃけめっちゃ巨乳だ。

そのためか、小豆さんの前にある机の上に乗せられたそれは官能的な魅力を放っており、視線が吸い込まれる。

惑の二文字が表情となつて出ている（といつても、柘榴の方はほぼ無表情に近かったが）。

「何かさ、聞いてたのと性格違くない？」

サチが訴えるようにうたの方を向く。しかし、そんな風な目で見られてもこちらも困つてしまう。

うただつて、何が何だか分からない。

「……本当は、もっと穏やかで理知的な人のはずなんだけど」

「うふふふふふふ——」

「これの何処が？」

サムズアップを横にしてサチが小豆さんを指す。

彼女は暗い表情で、未だに笑い続けていた。

「本当の本当に、穏やかで理知的な人のはずだったんだよ」

うたはそう言いながら、背もたれに背を預けた。座っているパイプ椅子がぎしりと音を立てる。

今、うたの胸中ではある思いが浮かんでいた。

——どうしてこうなつた。

胸でつか!!いいなあ!!つてサチが言った途端、ご覧の有様である。

正直、シヨックを隠しきれない。

うた、実はいうと小豆さんには少し憧れがあつたし、密かに尊敬していたのだ。

その尊敬が、ガラガラ音を立てて崩れていくのが自分でも分かる。

それに、小豆さんにはうたと同じくまとも粋でいて欲しかった。これ以上こゆり達のような残念枠が増えちまったら、面倒くさいし、胃に穴が開く。

……ああ、こんな時に限つて腹が痛くなつてきた。そしてカムバッククインタイム。こんな思いをするくらいなら、過去に戻りたい。

と、うたが遠い目をしながらそんなことを考えていた時、

「ほい」

「ぴゃ!!」

小豆さんの隣に立つ人物が、彼女の後頭部へと容赦なくチョップを喰らわせる。

その一撃で小豆さんは机に頭をぶつけ、しばらくの間痛みに悶絶する。

そうして恨めしそうに、手刀を入れたその人物を睨みつけた。

「いきなり酷いじゃないですか、家主」

「でも前回もこうしないと止まんなかったし、仕方がないじゃないか。僕だって本意じゃない」

家主、と呼ばれた少女は少しじと目気味な目を小豆さんに返す。

その人は、ぱっと見は小豆さんと同年代ぐらいに見えた。

淡い色の髪はウェーブがかかったボブぐらいの長さで、身長は普通よりも若干高い。

目は穏やかかつ理知的であり、小豆さんとはまた違ったタイプの落ち着いた雰囲気を感じる。

格好はフリルのついたエプロンの下に、スリットの入った深緑の着物を着ているという服装で、所謂和風メイドという奴になるのだろう。

そのスリットから見える太ももには緑色に輝くソウルジエムがあり、その姿が彼女の魔法少女の衣装らしいことが窺えた。

「ごめんね。この子、スイッチ入るところなっちゃうみたいで」

家主さんははあ、と溜息をつき、それからうた達を見て申し訳なさそうに苦笑する。

するとびくり、とサチが一人だけ大きく硬直した。

「どうしたの？」

柘榴が棒読みながらも心配そうに聞くと、サチが顔をしかめながら腕を組んだ。

「……いや、気のせいかも知ないけど、この人ミズハに表情そっくりじゃねって思ってたさあ」

「ミズハって……、確かサチと縄張り争いしてた、あのミズハ？」

「そう、そのミズハ」

うたが確認すると、サチがこくこくと頷いた。そして、家主さんを穴が開くほどじろじろ見ると、

「ていうか、顔の作りもよく見たら微妙に似てるくね？何？血縁者？」

「……似ているというのなら、そうかもしれないね」
「は？」

サチが素っ頓狂な声を上げる。

家主さんの言い回しは、それだけ変だったのだ。

そしてそれを自覚しているのか、彼女はあらゆる感情を内包した複雑な顔になって、口を閉ざしている。

喋りたくないからではなく、どう喋れば良いか分からないのだろう。

その目には、迷うような色が浮かんでいる。

「すみませんね。家主は記憶喪失……、所謂エピソード記憶つてのが欠けてまして。自分が何者で、何をしてきたのか思い出せないんですよ。覚えてるのは自分の名前と、家主つて渾名ぐらいで」

やがてそんな家主さんを見ていられなかったのだろう。

頭をさすりながら姿勢を正す小豆さんが、助け舟を出した。

「記憶、……喪失？」

その事實は、場に幾らかの衝撃をもたらす。

特にミズハの血縁者かもしれないと疑ったサチは驚愕しており、しばらくの間、呆然としている程であった。

家主さんは皆の反応をそれぞれ見て、氣遣うように笑う。

「ま、まあ、記憶喪失つていても、それも今のうちだけですぐその内思い出とか戻ってくるだろうし、だからそこまで暗い顔はしないでよ」

「……でも、不安なんじゃないんですか？ 私だったら大混乱しますけど」

「——それが、結構落ち着いているんだよね。何故か僕、記憶喪失になったこと自体には最初から折り合いついてるみたいで」

そう言うと、家主さんは先程とは別に複雑そうに笑みを作った。

彼女の中でも、色々あるのだろう。

記憶の消失は、そのままアイデンティティの消失を意味する。

その辛さはうたには想像の中だけしか理解できないが、とにかく大変なのは間違いない。

これ以上この話を続けるのは、家主さんのためにもやめておいた方が良いかも。

うたは話題を変えようと、ここに来た用件について質問した。

「あの、小豆さん。うた達をこんな場所に集めて話たいって、何かあったんですか？それこそ重大なことが起こっていたりとか……」

「重大なこと……、ですか。まあ、ある意味重大なことではありますけど……」

小豆さんは一瞬考え込むと、腕を胸の前で組んだ。そしてごほんとかいをする、咳払いをすると、

「本題といきましょうか」

と、神秘的な顔をして話す始めたのだった。

矛盾

——時間は先日、早島の空き地にて、サチと柘榴と、あとついでにキユウベえといた時にまでに遡る。

その時うたは、小豆さんから来たラインを見て憂鬱な気持ちになっていた。

その内容は、明日午後一時に出来れば話がしたいというものだった。

場所は、プライマリーカラーがいつも話し合いの場に使っているという廃墟の倉庫だ。ご丁寧の写真や地図まで送られてきている。

しかも、小豆さんらしく文面は穏やかだが、さりげない言葉で絶対に来いと書かれてあつて、それなりの強制力がある。

……つまり、それほど大事な話つてことなのだろう。

多分、共同体の基本方針に関する話だ。

以前小豆さんに呼び出され共同体に入るよう勧誘されたが、その共同体自体がどのような仕組みになっていて、どのような活動をしているのかはまだ説明がなされていなかったように思う。

それを教える準備が整った、と考えれば、まあ自然な流れではある。もちろんそれが確定したわけじゃないし、もつと別件なのかもしれない。どっちにしろ面倒くさいことであるのは間違い無く、休日が明日も潰されるのを思うと、行きたくないなあと素直に思ってしまう。

……そういえば、行きたくない、で気づいたけど、

「……柘榴。もしかして貴女のところ、小豆さんってまだ行ってない？」

サチはともかく、柘榴は小豆さんの名前を聞いた時、少し首を傾げる程度の反応しか見せなかった。

そこから察するに、柘榴は小豆さんのことを知らないのだろう。

恐らく小豆さんは、まだ柘榴を勧誘してないに違いない。あの人も忙しそうにしてるし、それが原因でそこまで手が回っていないのかも。

「いや、さつきも思ったけど、小豆さんって誰……？」

案の定知らなかったらしく、柘榴は疑問を口にする。

その瞳には胡乱げな輝きはなく、純粋な興味のみがあるようだ。

彼女の顔は無表情だが、目に宿る感情は表情豊かである。

「牛木草で活動するベテラン魔法少女だよ。少し変わった人物で、横のつながりが薄い牛木草の魔法少女の中において、顔が広い。

しかし、キミのような新人とも既に彼女は顔見知りなのか。流石、小豆といったところか」

うたの代わりに小豆さんのことを説明したキュウベえは、その後感心したように頷いた。

うたも、小豆さんの交友関係はすごいと思う。軽く話しただけで、魔法少女の名前がぽんぽんと飛び出してくるのだ。彼女ほど牛木草の魔法少女を把握している人はいない。

「でも小豆も柘榴には会えていないみたいだね。牛木草の共同体を作るという話をしていたから、もうすぐ会いに行ってもおかしくないだろうけど」

「キョードータイ？」

ぽかんとするサチ。

ピンときていないというより、言葉の意味そのものが理解が出来ていないのだろう。

うたは何だかそれが微笑ましくなって苦笑し、サチや柘榴のために今の魔法少女社会の事情を説明した。

「寝巢扉都市圏では、今新人の魔法少女がすっごく増えててね。縄張り争いが酷くなってきたらだつてさ。牛木草も例外じゃなくて、いさ土から魔法少女が流れてきて混乱は始まっている。それを防ぐために、牛木草全体で一つに纏まろうって、小豆さんは動いているんだよ」

「……ようは、バラバラになつてる魔法少女を、一つのグループにしちゃおうってことで良いんだよね？」

「うん。その認識で良いと思う」

柘榴の確認に肯定しながら、改めて小豆さんはすごいことをしようとしているんだな、と実感する。

いくら交友関係が広いとはいえ、それで誰しもがついてくるわけではない。そこに信頼と実績とメリットがなければ、相手を納得させられないのだ。

そして、新人魔法少女には小豆さんの顔は効かないため、その関係を築くのにも相当手間がかかるだろう。

他にも、牛木草に流れてきている魔法少女への対処や、組織運営の管理など、問題は沢山だ。

本当に、こんな面倒くさいことをよくやろうと思ったものである。実行に移すだけでも、相当覚悟が必要だろうに。うただったら、絶対真似できない。

「ふーん。こゆりから牛木草の情報は聞いていたけど、そんな動きがあるとは知らなかったわ」

この場で唯一、牛木草出身者ではないからだろう。サチは興味なさにげにぼやいた。しかし次の瞬間、

「……って、ちよつと待って」

と、今しがた発した自分の発言の違和感に、弾かれたように顔を上げる。

「私、牛木草の情報こゆりに逐一聞いてんのに、共同体のこと知らないとかおかしくね？まさかこゆりの野郎、意図的に小豆ってやつの情報話してないんじゃないの？それがこゆりの隠し事だったりするんじゃない……？」

「確かにその可能性は否定できないかもね。うた、小豆さんにこゆりや柘榴のこと聞かれたし」

うたはサチの言うことに頷く。

柘榴の方はまだでも、こゆりの方には向こうから接触し、勧誘しているかもしれない。

それをこゆりが悩み、サチに話をしていないというのは十分に考えられる話である。

「いや、まだこゆりの方にも小豆は行っていないよ」

しかし、すぐにうたたちの推察はキュウベえによって否定された。彼は皆から注視されるなか、赤い瞳を一回瞬かせ、

「最近、風来坊と名乗る魔法少女が牛木草で出役しているという話を聞かないかい？」

「あー……、ちよつとだけ聞いたことあるかも」

柘榴が目を上に上げて、思い出すかのような仕草をとる。

だが、うたの方はまったく聞き覚えがなかった。

魔法少女の知り合いもあまりおらず、また積極的に魔女狩りをやっているわけでもないの、そういう噂話には疎いのである。

そしてそのことを見抜いているだろうキュウベえは、早島にいるサチのためにも「風来坊」のことについてわざわざ話してくれた。

「その風来坊はね、牛木草で縄張りを奪われそうになった弱い魔法少女を、独断で助けているみたいなんだ。その特徴は、飾り気のないワンピース衣装。新人とは思えない戦闘能力。様々な武器。液体金属を操る固有魔法らしい」

「……それってどう考えても——」

「二間違いなく、こゆりだね」だろ」でしょ」

異口同音。全員の考えが揃う。

というか、その情報で符合する人物は、あの意地っ張りな少女以外あり得ない。

「キミ達仲良いね」

「そーでしょ。私とうたとサチは友達だもん」

柘榴は胸を張る。

本当、さらつと恥ずかしい事言う奴だ。うた、死んでも絶対そんなこと言えない自信ある。

「ていうか、風来坊って……。あいつ何やってんだよ……」

呆れたような、それでいて何処か複雑そうな顔をするサチ。

さつきキュウベえが言ったことは、どうやらサチも知らないことだったらしい。つまり、こゆりの隠し事の中に、「風来坊」のことも含まれているのだ。

そこにどんな考えがあるか、本人に聞くまでははっきりと分からない。い。

まあ、あの少女のことだから、単純に変な意地を張って言ってない

だけ……ということなのかもしれないけれど。

「キュウベえ、テメエ何でダンマリだったんだよ。教えてくれたら良かったのに……」

サチが若干腹を立てながら、小動物に抗議する。

しかし、そこはあのキュウベえである。鉄面皮で、

「すまない。風来坊——色梨こゆりはほぼ一撃で魔法少女を撃退していたらしく、情報が錯綜してなかなか集まらなくてね。今回風来坊がこゆりだと断定できたのも、珍しく長時間戦闘をしていたのを、助けられた子が見ていたからなんだ」

「……ふん。そうですかよ」

拗ねたようにそう吐き捨てるサチ。

先程よりもご立腹の様子で、ぶつぶつと文句を言っている。

うたは苦笑を内心でして、話を軌道修正した。

「それでその風来坊の話と、小豆さんがこゆりのもとへ行ってないっていう話は、どう繋がるの？」

「ボクは風来坊の情報を集めるため、つい数日前に小豆に会いに行っただ。彼女は共同体を作ることと牛木草の魔法少女を助けようとしている。だから、風来坊と何か関連性があるのではないかと疑ったんだ」

それは、自然と行き当たる一つの可能性ではあった。

何故なら、両者の目的はある程度一致しているからだ。

だが、キュウベえの言い方からするに、それは間違っていたのだろうか。

現に彼自身、*“独断”*という言葉をこゆりに使用した。

「……結論から言うと、小豆は風来坊の正体を知らなかった。つまり、こゆりはまだ、小豆の管理下でない魔法少女ということだ」

「成る程ね。それでこゆりは小豆さんの勧誘を受けていないと。うた、何となくわかったよ」

うたはキュウベえの説明に納得したことを口にする。

柘榴とサチの二人も、概ね話の内容は理解したようである。

しかし、ここで問題なのは、

「小豆さんがこゆりをどうするか、だよね」

「え？どういう意味だよ、それ」

うたの眩きに、サチがぼつとこちらを見る。すると柘榴が、頭のこめかみに人差し指をやって、

「上手く言葉に出来ないけど、その小豆さん？にとって風来坊の存在は無視できないんじゃないのかな」

「何で？こゆりは悪いことしてないよ。ただ人助けを——」
「でも、勝手にやってることだよね？」

うたはサチの言葉に、自身の言葉を被せる

小豆さんは、牛木草を一つにまとめようとしている。それは、牛木草すべての魔法少女を自分の手で管理し、制御下におくということだ。

そんな中、イレギュラーなことはあつてはならない。そういう意味でいえば、こゆりは正しく厄介な者というわけだ。

「それに、その手段も穏当なものじゃないんでしょ？撃退とか言つてももんね、キュウベえ」

うたがそう言えば、白い小動物に全員の注目が再び集まる。

彼はただ、うたを真っ直ぐ見つめ、しばらくしたのちに答えた。

「そうだね。彼女は、弱い魔法少女を襲う強い魔法少女を返り討ちにしてあげること人助けをしているみたいだけど……、その方法はちよつと暴力的みたいだね。どうも、相手に軽い怪我を負わせているケースもあるみたいだし」

「な……」

絶句したようにサチが息を飲む。彼女は今はつきりと、こゆりが風来坊のことを秘密にしていた理由を理解しただろう。

しかしそのことを上手く飲み込めないのか、サチは困惑した表情をずっと浮かべている。

「何でこゆりはそんなことを……。あいつ、そういうことやるやつじゃないのに……」

「——もしかしたら、そうするくらい何かに追い詰められているとか？」

柘榴が首を傾げながら思案し、憶測を呟く。すると次の瞬間、サチが更に悲痛そうに顔を歪めた。彼女のことだから、自分で自分のことを責めているのだろう。

これにはやばいと思っただのか、柘榴も若干バツが悪そうにし、必死に取り繕うように、

「あ、その……今のはただの推測だから、そこまで気にしないで。それに本当だとしても、それは絶対サチのせいでもないから」

「どこにそんな証拠が……」

「証拠はない。ただの勘。でも、サチは良い子だからさ。そんな子が、こゆりを追い詰める真似できないよ」

「……」

柘榴は真つ直ぐサチの方を向いて微笑する。

サチはしばらく垢抜けたようにぽかんとしていた。

柘榴の在り方が、あまりに綺麗過ぎて。

それに嫉妬のような思いが燃え、そう思う自分に対する虚しさが同時に去来する。

しかし、それは今表に出すべきものでもない。笑顔の仮面を気持ち悪く貼りつけて、うたはサチを励ました。

「柘榴の言う通りだよ。そもそも、こゆりに聞かなきゃ本当の理由は分かんないんだから。だからこそ、ちゃんと話するんでしょ？」

「……うん。……でも、小豆ってやつがこゆりのことをどうするか分かんないのは……」

「うた、どうせ明日小豆さんのところ行かなきゃいけないから、その時に聞いてあげるよ」

うたはサチの頭にぽんと手を置いて、ちよつとだけこちなく撫でる。ナルさんがよく、うたにしてくれたものだ。これをされると気持ちがいっつも落ち着いた。

サチにも、その効果があったのだろうか。何故か妙に素直に、こくりと頷かれた。

それに内心ほつとすると、

「……あと、柘榴。貴女に共同体の話を変えたって、小豆さんに言つと

くから」

「あ、ごめん。ありがとう」

柘榴が礼を言う。

うたはどういたしまして、と返すと、暗くなったスマホの画面をタップ。

素早く文字を打ち込み、明日の当日に混乱させないよう、サチや柘榴のことを書いて小豆さんにラインを返信する。

すると――

『サチちゃんと柘榴ちゃんの件、話は分かりました。しかし、どうせなら対面で質問のやりとりをした方が良さと思うし、二人にも話があるので、サチちゃんと柘榴ちゃんに明日来るよう、出来ればお願いできませんか?』

「あ、そう来ましたか……」

返ってきた小豆さんのラインを見て、思わずうたはそう呟いてしまった。それが、ちよつと予想外の提案だったからだ。

しかし、ありがたい話ではある。サチと柘榴の二人と同行するのは気が疲れるが、これで面倒ごとが一気に片付くというものだ。

「何て返ってきたんだい? 歌羽」

キユウベえがうたに聞いてくる。うたはサチと柘榴の顔を見て、返信の内容を話した。

「実は――」



――こうして、時は現在に至る。

うた達は今、倉庫の廃墟の中にいた。

そこそこ古いらしく、屋根や壁を支えている緑色の鉄骨の塗装は所々がはげかけ、床には少しヒビ割れが走っている。

広さは、学校の体育館ぐらいだろうか。大人数が入っても、きつと

充分に互いに距離を取れる。

そんな空間の中心に机を置き、その間を挟むようにパイプ椅子が。北側には、うた、サチ、柘榴が座り、南側には小豆さんが座る。その隣では家主さんが立って、こちらと相對していた。

ちなみにこの場にキュウベえはいないが、彼はまた別件の用事があるようで、今日は来れなかった。群体であるのに、その一部をこちらに向かわせることもしないくらい、何かをやっているのだろうか。

まあ、そもそもの話、よく分からん不思議な奴である。うた如きがあれこれと予想しても、どれも一つも擦りはしないだろう。

つまり、あーだこーだと、キュウベえがいらないことに文句を言うのは時間の無駄だ。

むしろ、この状況はラッキーであるかもしれない。あいつは人の神経を逆撫し、話をややこしくさせるのだ。キュウベえがいない方が、ずっと場は良い雰囲気になる。

「――本題に入りましょうか」

神妙な顔をした小豆さんが、胸の前で腕を組んで話し始める。そうしてうた達をその瞳に映し、

「と、すみませんがその前に、まずは自己紹介からしましょう。」

私は、恵比寿小豆。共同体『プライマリーカラー』の発起人であり、暫定代表者です。魔法少女の活動期間は二年半ほどになります。そしてこちらが――」

「弦家住^{げんやすみ}。さつき小豆が話した通り記憶喪失だけど、今は小豆のところに厄介になって、彼女の手伝いをしているんだ。出来れば、家主と呼んでほしいな」

そう言い終えると、家主さんは温和に笑う。その笑顔はとても本人に似合っていて、うたはよく笑う人なのかな、とぼんやりと思った。「自己紹介ありがとうございます。うたは、古金歌羽っていいいます。髪が短い方が船花サチで、長い方が江戸柘榴です」

三人を代表して、うたが紹介を返す。両隣から何を勝手に、という視線が突き刺さるが、別に何も問題はないと思うのであえて無視した。

なんだかんだ考えるのも煩わしく、段々と彼女達に対する扱いが雑になってきている。

「はい。ありがとうございます。」

……それで話の内容というのですね、実は貴女達それぞれで違っているんですよ。しかし、決してそれは互いに無関係ではありません」

「無関係ではない……？」

「例えば、それは色梨こゆり——風来坊のことだったりね」

家主さんがそれを口にした刹那、サチが瞠目し、見るからに何かを言いたげに口をぱくぱくさせた。

サチにとつて、それだけ色梨こゆりという存在はあまりに大きい。そのため、サチは動揺してしまったのだろう。

うたの方は、やっぱりか、という気持ちになっていた。

小豆さんが持つネットワークならば、情報をかなり早くかき集めることができる。だからキュウベえに聞かれた時にその正体を知っていなくても、その後自力で風来坊Ⅱこゆりの図式に辿り着いていてもおかしくない。

もちろんこゆりには、まだ干渉してないだろう。牛木草の魔法少女に怪我を負わせているこゆりをどうにかする必要はあるだろうが、それを同盟者であるサチに無断で行うことは、多分ないと思うから。

——つまりサチをここに呼び出したのは、こゆりに今から干渉する」と伝えるためであるとも言えるのだ。

「お前、こゆりのことどうするつもり？ 酷いことしないよね？」

やがて、感情を出来るだけ殺した声で、サチが小豆さんに問うた。
すると小豆さんは、

「出来る限りは。基本的に対話しようというのが、プライマリーカラーの理念ですから。といつても、その度合いは歌羽ちゃんの返答しだいで変わると思いますがけど」

「え？」

と、意味深げにうたの方に視線を向けた。何故か、家主さんもうたに気の毒そうな顔をしている。

うたは当然戸惑って声を上げて、体を硬直させた。

ある種、空間に独特な空気が渦巻く。こういう時、大抵良いことは起こらないのをうたは知っている。

つまり、……ほぼ百%小豆さんの話は厄いということだ。

それを理解した瞬間、うたの中でエマーゲンシーの声がこだまし、警戒度レベルが急上昇。拒絶の感情をわざと瞳に出し、うたは若干厳しい語調で聞いた。

「うた次第って、どういうことですか？」

「言葉どうりの意味ですよ」

「言葉どうりの意味？」

柘榴がその好奇心からなのか、前のめりになって復唱し返す。

少しの間、家主さんは瞑目すると、

「プライマリーカラーの方針としては、風来坊——こゆりちゃんを止めるってことで内部で意見が一致してる。こゆりちゃんがやっていえることは、プライマリーカラーの活動には邪魔になるからね」

「……まあ、そうなりますよね。その判断は、間違っていないと思います」

「ありがとうございます。ああ、もちろん、こゆりちゃんがやつけたという、他の子の縄張りを奪おうとした魔法少女にも、然るべき罰を受けてもらいます。……というか、今そうするように絶賛動いている真っ最中です」

小豆さんはそこで組んでいた腕を解き、リラックスさせるように机の上に乗せる。しかし、その顔の真剣さはより深くなり、自然とこちらの身も引き締まる。

ゴクリ、とうたは唾を飲み込んだ。

「プライマリーカラーは、牛木草をいくつかの地区に分け、その地区ごとに揉め事などや様々な問題に対処する調停役を置くことで、その治安を守ろうとしています。」

今動いてくれている子達も、そういうった調停役なのです」

広すぎる土地に、何十人も魔法少女。それらを細く管理するのは、一人では無理だ。そのため、管理する場所を細かく分け、それぞ

れの担当をつけるという方法になったのだろう。それは独裁体制を阻止するためにも、理に叶っている。

だが――

「そう上手くもいってなくてですね。人員不足のせいで、その席が空いている地区も多いんです。歌羽ちゃんやこゆりちゃんが活動している地区もそういった地域で、それ故に現在こゆりちゃんを止めるべき担当の地区の人は……残念ながらいないんですよ」

消沈した声音で小豆さんは話す。

そこには気苦労が見て取れ、うたは少し同情心を抱いた。

こゆりに対処しようと他の地域の調停役を動かそうにも、小豆さんの様子からして出来ないんだろう。多分、忙しすぎて皆、手が回らないのだ。

「じゃあじゃあ、その調停役つてのをどうにかすれば、こゆりをどうにかできるの？なら、私その調停役になるからこゆりを止める。そんでサチもこゆりを仲直りしてみせるよ」

棒読みながら強く言い、柘榴は自分の胸に手を当てた。

すごく自信满满で、傲慢で、厚かましい態度である。だが、柘榴は誰よりも真剣に、純粹に、勇気を持って頼み込んでいた。

そんな彼女に、サチは感動したように唇を震わせ、小豆さんは目を細めて観察する。

そんな中で、家主さんは申し訳なきような顔をして、

「――残念だけど、君には任せられない」

「それは、私が役不足だから？」

「そういうことじゃないんだ。ただ、もう候補はすでに見つかっているから。ていうか、その話のためにそもそも歌羽ちゃんを呼んだんだし」

そう言つてから、うたを見た。

「……ま、まさか――」

その視線と口ぶりからある答えに辿り着き、うたは青ざめる。それはここに来る前に予想していた話よりも、遥かに最悪なものであった。

「うたみたいな奴が……ういやそんな……」

うた同様その答えに行き着いたのか、サチも困惑の表情を浮かべている。失礼だが、うたでは出来ないと思っているのだろう。

一方の柘榴は何故か、「……まあ、うたなら」と納得している。舐めた態度とつてるくせに、実に不服だ。

「ちよ、ちよっと待ってください。話が急展開すぎて、頭が追いつきません。え？何ですか？うた、もしかして調停役になってこゆりを止めるって言われているんですか？違いますよね？」

うたは思わず、縋るように否定を求める。しかし小豆さんは表情を変えず、家主さん是不憚そうに苦笑する。

「否定してあげたいけど、違わないよ。小豆は君を調停役にしたがつている」

「……サ、サイデスカ」

クソツタレと、うたは心の中で思いつきり顔をしかめた。

これは、面倒くさいとかいう問題じゃない。やりたくない。やれるわけがない。

調停役と言葉を変えてはいるが、ようはその地区のリーダーと、プライマリーカラーの中枢メンバーになれと言われているようなものである。

その責務の重さは想像をしているよりきつと何十倍も重く、そんなプレッシャーに耐えられるわけがない。

何より、うたは魔法少女という存在自体が嫌いなのである。

うたもそうだけど、どいつもこいつも願いで現実を捻じ曲げて、自分の都合の良いように変えているぞるい連中だ。

そしてその結果として宿る魔法の力は、恐ろしく禍々しい。特にうたの能力なんか、その最たるものだろう。

とにかく、魔法少女はロクでもない存在なのだ。

そんな奴らのために、どうしてうたが身を粉にしなければならぬい。

「……うた、嫌なんです。何故普通の魔法少女であるうたが、色々と巻き込まれる立場に立たなきやいけないんですか？」

悪感情から、冷たく言い放つ。それが意外だったのか、両隣から驚いたような気配が伝わってくるが構わない。

うたは確かに間違ったことも言っているが、同時に正当な主張もしているはずなのだ。

そこを、うたは都合よく誤魔化したりしない。それが、ただ能天気にはヘラヘラ笑ってエルを傷つけた、古鐘歌羽のけじめだ。

「話は理解できません。理解できますよ。こゆりを止めるのはうたも同意しますし、柘榴やサチのためならそれを手助けしたいとも思いますが。ですが、だからってそのためだけに調停役になりたくありませんよ。うたがこの共同体に入ったのは、自分の身を守りたいからであつて、皆を守りたいからではない。小豆さんが大変なのは分かっていますが、そこまでする義理はうたにはありません。」

……だいたい、どうしてうたなんですか。うた、どうせ何もできませんよ」

うたは、包み隠さず拒否の意を伝える。

その反応を内心で予想していたのか、小豆さんは苦笑し、

「まあ、そう言いますよね。突然ですし。ですが、私は貴女が調停役に適任だと思っただんですよ」

「何処が……」

「そうですね。決断力の速さとか、頭の回転が速いところとか。それでいて、汚い部分でも自分の意思を曲げずにこうやってはつきり言うところとか。何より、貴女は弱者の心が分かる人です——貴女は、貴女が思っているより何もできない人じゃありません。貴女は、やれる」

小豆さんは最後の方を、こちらに訴えるように強めた。

その意味が、まるで分からない。

うたには、訳が分からない。

ただ、それは心を見透かしたかのような言葉であり、うたが常に持っている無力感を真つ向から否定するものであった。

……こんなのは初めてだ。うたは誰にも、それこそおじいちゃんにさえ悩みを話したことなんか無い。それなのにどうして——

「……そんな簡単に、やれるとか言わないでくださいよ。うたは無理です」

うたは先ほどより、攻撃的な響きを声にのせる。

何でもできる。何でもやれる。

うたが、一番嫌いな言葉だ。かつてのうたはそれを信じ、裏切られた。そしてそれをエルに言ったことで絆は崩壊した。

綺麗事など、この世で最も反吐が出る。

「私は、何も考えなしに言ってますよ。」

さつきも言いましたが、貴女は弱者の心が分かる人です。貴女は満たされていけない。ずっとコンプレックスに苛まれている。だからこそ、魔法少女の心情を読むことに長けているのです。何故なら、魔法少女は基本的に貴女のように“満たされていない”子が多いから」

また、見透かしたかのような発言。それがうたの心にすんなり入り込んできて、周りに柘榴やサチがいるのも忘れて、呆けたような表情をしてしまう。

「貴女は、一体どこまでうたのことを……」

ここまでうたの感情を意図的に刺激してくるなんて。

どう考えても小豆さんは、こっちがどう思っているのか把握している。

それが魔法によるものかは不明だが、あまり良い気分ではない。

「秘密です」

ウインクしてお茶目に笑う小豆さん。どんな方法でこちらを知ったのか、話す気は一切ない、ということらしい。

それにちよつとイラつときたのは内緒だ。この人、ここに来てからイメージが崩れに崩れまくっている。

「……ですが、どうせ調停役にならないにしろ、このまま何もしないほうが貴女にとってストレスなのでは？」

「……？」

言っている意味が分からず、うたは首を傾げる。小豆さんはうたの神経を逆撫するような慈悲深い目つきで、

「分かってないようなのではつきり言いますが、貴女は魔法少女という存在に対して、同情心を抱いている。自分と似た境遇の子がいつぱいいるから、自分を無意識のうちに重ねてるんですよ。だからこの現状を、どうも思わないはずがない。……どうにかしたいって、心の何処かで思っているはずなんです」

「……そうでしょうか？うた、そんなこと考えてません」

うたは、その断定を否定する。

確かに、この現状は酷い物だと言えるし、思うところがないではないが、それより巻き込まれるのは嫌だという考えの方が強い。

それに、この呪いのような無力感がうたをいつも蝕んでいる。

そんなうたが、自ら何かを変えたいなど、それこそ矛盾して――

「矛盾していることに、罪悪感を抱かなくても良いですよ。感情は複雑なものです。切り離すべき、こうあるべきって時点で間違ってます。……そういうところ、歌羽ちゃんは真面目すぎて頭が硬いと思います」

「――」

思考が停止する。心臓の音すらも、それに伴うように聞こえなくなった。

それは、衝撃と呼ぶのすら生温い驚愕。よく殴られたような、という表現を目にするが、正しくうたはそんな感覚に陥っていた。

「思いは矛盾するものですよ。嫌いなものを好きって思ったり、逆に嫌いなものを好きって思ったりするもんです。……だから、何もやりたくないって思いと、何かをやりたいって思う気持ちも、どっちも心の中で同居する場合もあるんですよ」

「……」

「なら、それらを見せず、叶えれば良いじゃありませんか。それだけ嫌だって気持ちをはつきりと言えるんです。やりたいって気持ちも、この際自覚して、認めてあげましょう」

「……」

「そもそも、貴女はどうして共同体に入るのを即答したんですか？ただ単に守ってもらいたくて入ったんですか？大の人間不信のくせに、

怪しい私を完全に信頼するなんておかしい話じゃないですか。その時点で、貴女は変わりたい、変えたいと思ったんじゃないんですか?」
「……」

反論もできず、うたは黙る。ただ小豆さんの声だけが頭の中で反芻し、自分がどう思っているのかも、よく分からなくなっていく。

うたは、一体何なのだろうか。その疑問がつきまとっていて、矛盾はずつと悪い物だと思っていた。しかしそれは、おかしくないのだと肯定された。むしろ自然なことだと論された。

今までとは真逆の考えだ。

だが、それが本当ならば、小豆さんの言う通り、うたは本気で自分で自分を変えたいと思っているのか? 契約しても、何も本質は変わらなかったのに。

——だが、胸の内側で、何かが動く。それは、小豆さんを試してやろう、結果は何も変わらないと嘲笑ってやろうという、黒々とした感情だ。

「そんなの……、うた、分かんないですよ。何もかも分からない。自分のことなんて、自分が一番分かんないです」

しばらくしてから、ぼそりとうたは呟いた。小豆さんはそれを真剣に聞いてくれている。

「矛盾が、おかしくない? うたの、この二つの相反する感情は、どちらも正しい? ……めっちゃくちや馬鹿馬鹿しいですね。ならば、どうしてうたはこんなに苦しむんですか。矛盾しているから苦しむんでしょ?」

「その通りかもしれませんが。しかし、そうやって決めつけている方が苦しみを生むんですよ? すべてを否定することになっていいるから。貴女はまず、そこを自覚すべきです」

うたの言い分を、小豆さんはバツサリと一刀両断する。それはもう気持ちがいいくらいで、思わず嘆息が出る程だ。歯向かう気持ちも、これには失せる。

「——そうですか。貴女の言いたいことは分かりましたよ。……ならば、そうまで言うなら自覚とやらをさせてくださいよ」

「残念ですが、そこまで甘やかしません。まあ、その手伝いぐらいなら
できますけど?。」

「それが、調停役をやらせることですか?それって程の良い言い訳
じゃありませんか?人員不足だから、うたに無理やりやらせようって
いう」

指摘すると、小豆さんはまたもや苦笑いを浮かべた。いくらか当
たっているらしい。

「歌羽ちゃんって結構言いますよね。否定はしませんが。……否定
は、しませんよ?。」

「二回も繰り返し返さなくて良いです」

ふざける小豆さんに、うたは容赦なく言う。

小豆さんはごめんごめんとばかりに少し舌を出し、

「で、どうしますか?……調停役、なりますか?。」

「……」

穏やかな口調で問われ、うたは改めて考える。

「うたは——」

相棒

目覚めて最初に思ったことは、ここはどこだ、でもなく、自分は誰だ、でもなかった。

頭の中に浮かんだのは、あの子はどうなったんだろうか、ということだけだった。

早く、早く何とかしなければ。あの子を死なせるわけにはいかない。その焦燥感が、僕の中で燻っていた。

しかし、何故そう思ったのかは分からなかった。

その時すでに、僕の頭から記憶は抜け落ちていた——俗に言う、エピソード記憶の喪失だ。

覚えていたのは、家主というよく分かんない変な渾名と、弦家住というこれまたおかしな名前のみ。自分が何処で生まれ育ち、何をしで、どう過ごしていたかという記録は、綺麗に消去されていた。

もちろん、目覚める前の直前の出来事など覚えているはずもない。気がついたら小豆の家において、小豆と、その知り合いだという魔法少女が僕の体を治療してくれていた。

僕は、どうやら血だらけの状態で道端に倒れていたらしい。それを発見した小豆達に保護され、助けられたのだという。

僕は非常に運が良かった、と素直に感謝した。

何か使命感のようなものがあり、それを果たすまでは死ねないと思っただからだ。

……まあ、それを抜きにしても、道端で死ぬのはいささかかつこ悪すぎるだろう。

そういう意味でも、僕は生きていて良かったと心の底からほっとした。

「ねえ、これが何か分かりませんか？」

しばらく記憶喪失の話をしたりで一悶着あった後、落ち着いたところで、小豆はその質問と共にあるものを見せてきた。

それは長い柄に斧と槍が備わった武器——ハルバードだった。

芸術的な形を持ち、鮮血の如き色に輝く斧槍は、目を奪われる程に

美しい。

心がざわつき、僕は思わず食い気味になって小豆にハルバードのこ
とを訊いた。

「……それは一体何だい？」

「倒れていた貴女が握りしめていたものですよ」

「僕がそれを……」

何故そんなものを持っていたのだろう。分からない。

しかし、そのハルバードには酷く見覚えがある。馴染みがある。

少なくとも、僕と無関係であるとは思えない。

「しかし、この武器から感じる魔力……、貴女のものとは全然合致しませ
んね……」

「……」

そう言われてみれば、確かに魔力反応が自分のものとは違うことに
気がつく。

試しに自分の武器を出してみればそれは剣鉈で、ハルバードとは似
ても似つかない。

十中八九、この斧槍は他人の武器なのだろう。

だが――

「それは……、僕のものだ。僕が、持っているべきものなんだ」

「何故そう思うのです？」

「大切なのだと……、そう感じるからだよ」

そのハルバードは見ているだけで懐かしく、愛おしく、憎たらし
かった。

だから、手放し難いと感じた。

これは、僕の体の一部にさえ等しいもの。たとえ何があったとして
も、全力で死守しなければならぬ。

だって、それが「僕の世界」にとつて――

「それを、出来れば返してくれないかな？ 側に置いておかないと不安
なんだよ」

「……だけど」

「……？ 何か問題でもあるの？」

治療してくれていた子が言い淀むのが気になって、僕は首を傾げる。すると彼女はまた言いづらそうに口を嚙むと、やがておずおずとした様子で、

「……恐らく、だけどね。このハルバードのせいで貴女は記憶喪失になつたんじゃないかな?」

「え?」

「多分これ、他人の武器なんですよ?しかも、込められている魔力がちよつと普通じゃないっていうか……、強すぎるんだよね。それを無理やり使つたんだとしたら、何か代償を支払つたとしてもおかしくないかも思つて」

その子の心配している顔が、このハルバードは貴女にとって危険物だ、と言っていた。

そして彼女の言い分は恐らく正しく、僕がこのハルバードを手になれば只では済まない。

だが、それで良い。それくらい受け入れる。

「そうだとしても、大切なものなんだ。……返して欲しい」

「怖いとか、思わないんですか?」

「思わない。不思議だけど、何か記憶喪失になつたのは仕方がないって割り切れちゃってるんだ。多分、こうなることは分かつてたんだろうね」

だからこそ、今こうして話しても驚くほど冷静なのだ。

これが普通の記憶喪失なら、もう少しパニックになっているはずだ。

そう確信して頼めば、

「……」

瞳を細め、観察するような目つきで小豆がこちらを見てきた。

それは警戒心からではなく、この人は何を考えているのだろうという純粋な興味からくる目だ。

——僕のことを信頼したがつているのか?

一瞬、そんな世迷言が頭の中で浮かぶ。続いて、そう思う自分自身に呆れた。

何を期待しているのだ。そうそう上手い話、あるわけがない。

こんな記憶喪失で見ず知らずの女を、誰が仲良くしたがるという。だが、

「そんな目をされ続けたら、困るな」

「……………」

「こつちの話だよ。こつちの話」

からかうように、悪戯っぽく笑う。

きつと、この少女は気付いてしまい。その目に、僕がどれだけ心動かされたのか。

冷静ではあったが、実はいうと物凄く心細かったのだ。

当たり前だろう？

僕は根無草の一文無しだ。身寄りもないなかで、どう生きて、どう過ごせば良い。

もちろん魔法少女だから、最低限の生活はできるだろうさ。だが、だからって人は一人じゃ生きられない。

……僕は、どうしても孤独にはなりたくなかった。

そんな心情を抱いている中で、この小豆という少女はタイミング良くこちらのことを知ろうとしてくれた。

それが、とても嬉しかった。こんなどうしようもなく怪しい自分に歩み寄ろうとしてくれたことに、喜びが溢れた。

「……………ふふ、ふふふふふ、あははは、あはははははははははははは!!」

ふと腹の底がムズムズして、僕は我慢ができず大口を開けて笑った。

こんなに嬉しい気持ちになること自体が愉快で、そして愉快になること自体がまたツボにハマった。

そうして、ずっと僕は笑い続ける。延々と、人目を気にすることなく。

生まれ変わったような気分だ。きつと、この笑いはその歓喜の叫び。

この思いがある限り、僕はやっていける。

“今度こそ”、しみつたれたクソみたいな呪縛から解き放たれ、生

きて生きて生きて生きて生き抜いて、幸せになってやるのだ。
そして、僕はいつか必ず――



「はっ!!」

唐突に意識が覚醒する。

同時に、自分の体が再構築される感覚。胴体から、手、足の触覚が徐々に戻り、指の先から爪先まで神経が通っていく。最後に頭の部分に戻り、思考が明瞭に。すると、今まで鈍っていた五感が急に処理できるようになり、暴力的な情報量が流れてこんできた。

そのせいで、妙に目の前はギラギラしてテカテカするし、頭の奥でグワングワン耳鳴りがなっていて気持ちが悪い。

それでも私はなんとか寝そべっていた体制から身を起こすと、込み上げてくる吐き気を我慢し、ふうと息をついた。

「また、過去の夢を見たのですか……」

呟いて、いつの間にか浮かんでいた額の汗を拭う。

思い出されるのは、夢の中の光景だ。

心配そうにこちらを見つめる私と、知り合いの中でも治癒魔法に長けた少女。そこで交わされた、家主の記憶や、彼女が握りしめていたハルバードの会話。

そこから考えるにどうやら私は家主の過去……、彼女が記憶をなくし、初めて目覚めた瞬間のことを夢で見たらしい。

過去といえは過去ののだが、だからといって二週間ぐらい前のことを見るのは初めてだ。いくらなんでも直近すぎるだろう。

ていうか、色々と恥ずかしいことが多いのだが。

ああいう風に感謝されていたなんて、思いもよらなかつたし……。

……こつちこそ、ありがたいこといっぱいあるのに。

「まあ、何にせよ――」

——戻ってきた。

念じるように、そう何度も何度も度も言い聞かせる。こうすることで、自分が自分なんだと暗示をかける。

私が時折見る『夢』は、大半が抽象的なものばかりだ。しかし歌羽ちゃんの時のように、ダイレクトに思考が流れ込んでくるようなはつきりし過ぎていいる夢もあるわけで。それが度を超えると、自分とその夢に映し出された過去の持ち主との境が交わってしまう。

今回の家主の夢が、まさにそれだ。

もちろん、それは夢を見ている間だけであり、こうして目を覚ませば元の恵比寿小豆に戻る。だが一度他人と混ざると、その違いに違和感が発生してしまうのだ。結果として酔いのような症状が発生し、具合が悪くなる。

この感覚は、いつまで経っても慣れないものだ。自分が自分でなくなるようで、身の毛がよだつ。いつか本当に、返ってこれないのではないか——そんな気さえしてくるのだ。

それでも、この固有魔法のことを嫌いになったことはあれど、なくなれば良いとは思わない。

……文字通り、この魔法のおかげで私は人生が変わったのだ。苦しんだ分、喜びも教えてくれた。

「——ところで、今は何時でしようか」

私はふと疑問に思ったことを呟く。

まだ少し暗いが、それでも既に朝だ。時間帯によっちゃあ、遅刻なんてことになりかねない。

私は側にあつたスマホを手取る。そして画面に触れ、時刻を確認——表示されたのは、六時半。いつも起きている時間より、少しばかり早い。

「……とって、今更二度寝する気分でもありませんね」

眠気など、具合が悪くなった時点で吹き飛んでいる。そしてその具合も落ちつてきた。

ならばここは早めに起きて、学校の支度を済ませる方が良くに決まっている。

「さて、今日も一日頑張りますか」

呑気にのんびりと呟いて、私は寢床から立ち上がる。

そうして、寝巻きから制服に着替えたりといった一通りの身支度を済ませ、次はリビングへ行こうと自室のドアを開けた瞬間、

「ぐああああああ……」

先に伸びる廊下の右側、そこにあつたドアが開き、不気味な呻き声を上げる人物がフラフラな動きで部屋から出てきた。

約二週間前からこの家に住んでいる居候、弦家角——家主だ。

その目元には恐ろしいほど黒いくまがあり、双眸にも光がない。

彼女は恐ろしく低血圧らしく、朝が極端に苦手らしい。そのため、毎度起きるたびに苦しみ、まるでゾンビのような有様になるのだ。

私も初めの頃はそんな彼女にビビっていたが、今では見慣れて日常になりつつある。

まあ一応気遣ねばと、私は彼女のもとに行つて声をかけた。

「大丈夫ですかー?」

「……気持ち悪い」

……大丈夫じゃないらしい。

その後も、ごとおお……と呻き声を上げ、蹲っている。こうなつては、彼女はもう駄目だ。

「すみません。成仏して下さい」

「何でこれから死ぬみたいなの!? て、あ、ちよつとちよつと、まって、行かないで、行くなああああ……!! 白状なしいい……!!」

私は家主をほつたらかし、廊下の先にあつた階段を降りていく。上から恨み言が聞こえてくるが、あえて無視。

しばらくしたらいつもの調子を取り戻して、下にやってくるだろう。

つまり、あまり心配するのも無駄なのである。

「でも、今日ぐらいはさっさと学校に行くのは、待ってやるとしますか」

何せ、珍しく家主も早起きしてきたのだ。しばらく話す時間はあるだろう。

——その時間を取らなければ、私の中で恥ずかしさの感情が収まりそうにもなかった。



「ちよつとさー、僕の扱い酷くない？ 仮にも二週間程度の付き合いとはいえ友人でしょー？」

「……容赦なくチョップしてくる子は友人とは言わないんじゃないんですか？」

「あれは君が悪いよ。すぐ暴走しちゃって、僕が止めなきや誰が止めてたんだい？」

リビングにて、復活して一階まで降りてきた家主と軽口を叩き合う。

その間にも、互いに箸は止めない。目の前の食卓に並べられた料理を口に運んでいく。

家主が来るまでずっと面倒くさくて朝食抜きだったのだが、家主はそれに激怒し（曰く、朝食食べないと力が出ないよ!!これちよー重要なんだから!!）、毎日朝食用の作り置きをわざわざ作ってくれていた。他にも様々な家事の部分に駄目だしをしつつ、まるでオカンのようにこちらの世話を甲斐甲斐しくしてくれている。

おかげで何もやることもなく、ここ最近家のことは家主に任せつつある。本来の「家主」は私のはずなのだが、家主の方がすっかり渾名通り家主ぽくなってきているのだった。

「……てかそれ、やばくないですか？ よくバクバクいけますね……」
「ん？」

私は微妙な顔をしながら、向かい席に座っている家主に声をかける。

彼女の持つ茶碗にはご飯が盛られているが、その上には赤々としたキムチが大量に乗せられている。しかもそれは、一口食べただけで悶

絶し、一日寝込むんじゃないかってぐらい辛いものだ。

家主はそのキムチを平氣そうにバクバクと食べているのである。

……私からすればちよつとドン引きする光景だ。

しかし家主は、そっちの方こそおかしいとばかりに、

「小豆は分かかってないなあ……。そのやばさが良いんじゃないか。この辛さを通り越した破壊的な痛みが、いつそ快感なんだよね」

「……ドMじゃないですか」

「否定しないけど、その言い方ちよつとないんじゃないかなあ!？」

私が再度ドン引きすると、家主は大袈裟に傷ついたフリをする。彼女はオーバーリアクション気味で、こういう時実に良い反応を返してくれるのであった。

と、一頻りどうでも良い会話をしたところで、家主がふと感慨深そうな顔をした。

「どうしたんですか?」

「いや、僕は幸せ者だなあと改めて思つて。君つていうふざけあえる友達がいて、……毎日毎日怖いくらい楽しいんだよ」

ふにやり、と、家主がほわほわした笑顔を浮かべるもんだから、私はしばらくの間呆けて黙つてしまう。

彼女は良く笑う性格だが、その顔はどれも恐ろしいぐらい彼女に似合つていて、時たま虚を突かれる。

「……それは、良かったです。私も、貴女と過ごせて嬉しい。……両親が出張でいないのが、色んな意味で良かったです」

「住まわせてもらつている僕が言うのもなんだけど、バレたら僕がここに住むの絶対反対されるもんね。君の両親、意外と厳しいみたいだし」

「厳しいのとは少し違います。どつちかつていうと、あれは過保護です」

私は両親のことを思い出し、溜息をついた。

高校生になつてしばらくしたころだろうか。両親はやりたい仕事が出来たといい、私を置いて海外へ飛んでいってしまった。

それ以来、彼らは家には帰ってきていない。そのくせ、お小言の電

話やメールばかりはやってくる。あれでいて両親は心配性で、ずっとこちらの近況を鬱陶しいぐらい知りたがるのだ。

そして私もなんだかんだ彼らのことが好きなので、そう無碍に出来ない。ついつい、両親を心配させることはないよう気を使ってしまう。

……それでも私は、自分から家主を引き取った。

その理由は二つある。

一つ目は記憶喪失であり、なおかつ特殊な「副作用」にかかっている彼女を保護するため。

二つ目は、家主が私の共同体を作ろうという考えに、最初に賛同してくれたためだった。

救われた恩からか、あるいは夢で見た通り、私が家主のことを知ろうとしたからなのか、彼女は妙に私を手伝おうとしてくれた。

私はそんな彼女を不気味に思ったものの、同時に面白く感じ、側に置こうと決めたのだ。

実際、弦家住は右腕として申し分ない働きをしてくれている。

私の話に耳を傾け、意見を積極的に言い、その人柄なのか牛木草の魔法少女の中にもすっぴん溶け込んでいる。

難点があるとすれば、

「……ところで話変わるけど。昨日の歌羽ちゃん達との話し合いでさ、歌羽ちゃんを丸め込んで調停役にしちゃったの、ちよつと酷くなかった？」

と、このように、時折痛いところをチクチクと突いてくることだった。

……穏和だが、だからといって根を持たないわけじゃないらしい。

「あーいうのつてさ、どうなの？いくら歌羽ちゃんのためとはいえ、あの子の心の隙をつくような真似してさ。しかもサチちゃん達の前で。ちよおつと、ずるくない？」

「……」

ほったらかしにされ、おいて行かれたのがよっぽど尺に触ったようだ。

家主は執拗に、ぐさりぐさりと言葉のナイフで滅多刺しにしてくる。

もちろんぐうの音も出ないので、反論しようもない。

私はアハハ、と笑うと、無理やり話題を変えた。

「そ、その話は後にしましょう。それよりサチちゃんと柘榴ちゃんですよ」

「……ん、そだね」

もう十分だと思ったのだろう。私を虐めるのをやめて頷く家主。

「……サチちゃんと柘榴ちゃん、それぞれにそれぞれの話はできたけど、サチちゃん大丈夫かなあ。内心不満そうにしてたし」

「柘榴ちゃんも、鉄面皮すぎて何を考えているのか分かんないところがありますし……。一応乗り気みたいですけど……」

私と家主は顔を曇らせ、揃って頭を悩ませた。

——昨日の倉庫で、歌羽ちゃんに調停役の話をした後、私達はサチちゃんと柘榴ちゃんにそれぞれの用事の話をした。

まずサチちゃんには、こゆりがもしプライマリーカラーに入ったら、サチちゃんと入理乃の魔法道具について相談しあいたい、ということ話を話した。

共同体を作ることをキュウベえに伝えた時、彼はそのお礼なのか、行方不明になった早島の魔法少女、阿岡入理乃がやらかしたことにについて教えてくれた。

曰く、阿岡入理乃はグリーンシードなどの材料を使い、様々な強力な魔法の道具を作っていたらしい。

しかし行方不明になった後に、それらを放棄。厄介なことに、かつてのテリトリーであった牛木草に魔法の道具が残ったままになってしまったのだという。

もちろん、こつちとしては冗談じゃない話だった。

入理乃の魔法道具は明らかに危険物であり、そんなの放っておけるわけがない。

そのため、随時破壊、封印したいところだが、どんなふうになっているのかは完全に分からない。

そこで、入理乃の相棒であるサチちゃんに、ゆっくりそのことで話し合いたい、ということ提案したのだ。

サチちゃんは渋ったものの、ある程度了承してくれた。

幼いながら、あの子はこちらの言い分を当然だと思ってくれたらしい。

しかし「渋った」とあるように、不満そうなのは言わずもがなで、こゆりを味方につけたとしてもどうなるのかよく分からない。

次に柘榴ちゃんが、プライマリーカラーへの勧誘と、その固有魔法——増幅の力を貸して欲しい、という話をした。

柘榴ちゃんを調べているうちに知ったその固有魔法は、他者の力を倍増させるという効果を持っていたが、それ故に汎用性が広く、色々と活用できそうな場面が考えられた。

だから、その力を出来れば役立てて欲しいとお願いした。

その話を聞いた時、柘榴ちゃんほううんと仕切りに頷いていたが……、正直大丈夫なのだろうか、と見ていて密かに不安になった。

善意はあるし、優しさも持ち合わせている。

しかしそれが裏返って身勝手に繋がり、無自覚の傲慢さになっている。

それを、あの子の固有魔法が助長させる気がするのだ。

思わぬ地雷二つを手にし、私達は頭を抱える。

——どうすんの？

——分かんないです。

視線だけでそんな会話を交わし、何度したか分からぬ溜息をついた。

……嫌な話だが、胃が痛くなりそうだ。

「……大変だねえ。プライマリーカラーの運営は」

「ええ。大変です……」

「僕がこう言うのもどうかと思うけど、共同体を自分から作って、リーダーになるうとよく思ったよね。ぶっちゃけ皆から見たら貧乏くじだし。……めちゃくちゃ勇氣いるよね」

家主は称えるように、感心したように言う。

私はそれに自嘲して、

「大したことじゃありませんよ。私がやりたくてやってることですか
ら」

「やりたくてやってること……?」

「ええ。……貴女も知っていますよね? 私の固有魔法」

「うん」

家主には、固有魔法のことは少し話してある。

だからか、彼女は真剣に言葉に耳を傾けてくれた。

そのことに感謝しつつ、私は続けた。

「私はですね、両親が思い切って外国に飛び出したのを見て、二人を
かっこいいと思ったんです。ああやって何かに夢中になるのって素
敵なことなんだなあ。だから、将来何になりたいか真剣に考えよ
うと思って、そのために“昔のことを振り返りたい”と願いました」
そうして、私は今までの人生を振り返った。生まれた時から、成長
するまでの過程を追体験した。

……しかし、それで気がついてしまった。

本気で何かに夢中になったことが、私には一度もなかったのだと。
ただ、私は流されるままに生きてきたのだ。

灰色の人生。空っぽな毎日。それしか持ち合わせてないのを思い
知らされ——だが、私は絶望しなかった。

「何の因果か手に入った、“他人の過去を夢で見る魔法”。その力で
見る他の人の過去は、私の人生よりも色鮮やかでした。そしてそれを
知ること、私は人って面白いものなんだなって思えるようになりま
した。

……そのおかげか、それまで人と触れ合うことはつまらないと考え
ていたのに、気がつけば積極的に人と関わるようになっていたんで
す。人の心を知り、交友を結ぶこと。それこそが、私にとっては何よ
り夢中になれることだった」

そしてそのことをさらに教えてくれたのが、仲良くなった牛木草の
魔法少女達だった。

彼女達と交流を重ねる度、私は彼女達の思いを知った。

絶望、希望、喜び、悲しみ。それらはあまりに尊くて儂く、キラキラしていて。

「……私は人を、あの子達を守りたいと思ったんです。彼女達の思いを、消したくないと私は願いました」

——だがそれは簡単に失われるのだと、私はまた夢で気付かされた。

私は偶然、同じ学校で知り合いだったエルちゃんの夢を見てしまったのだ。

それは、エルちゃんと仲が良かった魔法少女グループのうちの一人が魔女化し、仲間を殺していく光景だった。

いとも容易く崩壊する絆。血塗れみれになり、無残な姿になる少女達の死骸。

恐らくエルちゃんも死んでしまったのだろう。夢は魔女に攻撃されたところでプツンと途絶えている。

まさに地獄絵図だった。

一人が絶望しただけ。ただそれだけで、すべてがなくなってしまうた。

普通の人だったら、いくらでもやり直す機会があったのに。

何故私達魔法少女のみが、こんな目に合わなければならぬ。

皆、大切な思いを抱いて頑張っているのだ。ここで死んでいいはずがないだろう。

もし、希望が転じて絶望に繋がるなら、私がそれをこの手で食い止めてみせる。

“尊くて綺麗な思い”を、私が庇護してやる。

「……ですが、守れる人数にはやはり限りがある。だったら、せめて私の人生を変えてくれた子達だけでも——牛木草の子達だけでも守りたいと思ったんです」

「……それで共同体を作ろうって考えたんだね」

「はい」

私は家主の顔を見て、相槌を返す。すると彼女は何故か満足そうに微笑むと、瞳を細めた。

それが、家主の夢で私がしていた目と重なる。

……弦家住は、何を思つてこんなことをしているのだろうか。分からない。だが――

「そんな目をされたら、困りますね」

「……？」

「こつちの話です。こつちの話」

首を傾げる家主が面白くて、いつぞやの誰かさんみたく、悪戯っぽく笑つてみせる。

それでも家主はそのことに気がつかず、訝しそうにするだけだ。

「……まあ、良いです。それより、ご馳走様でした」

話しているうちにちようど朝食を食べ終わり、私は両手を合わせる。

料理を作つてくれた家主は、それだけで嬉しかったのか、ふふ、と笑みをこぼした。

私は視線を壁にかけられた時計に移動させる。

長話をし過ぎたせいか、その針は七時二十分を指し示している。

それでも、朝食を食べる終わるいつもの時間より十分は速い。

「家主。学校行つてくるんで、後片付けお願いします」

「うん。気をつけてね」

「そつちこそ――今日の夜の件、頼んだよ」

「分かつてる」

任せてくれ、と家主は胸に手を当てる。短い付き合いだが、その姿は頼もしい。

私は彼女に対していつの間にか出来上がった信頼を実感し、案外自分ばかりいなあ、と内心呆れる。

そんな私だからだろうか。――最後まで家主の夢を見たことを、結局恥ずかしくて切り出すことは出来なかったのだった。

惨めな子供

——無意味な時間を繰り返し、積み上げ続ける。

あたしという人間は、一体何なのだろうか。

ここのところ、そんなことばかりを考える。

感情はしつちやかめつちやかで、思考はぐつちやぐちやだ。

望みははつきりしているのに、行動と心は矛盾しまくり、合致して
いない。

魔法少女を守りたい。サチを大事にしたい。

その二つの思いが混じり、魔法少女を助けて恩を売って、その恩を
利用してサチに仲間を作ってあげようと躍起になる。

でも、色んなことがつてムカつくから、そのイライラでつい悪いこ
とをしている子に怪我をさせてしまう。そしてそれに罪悪感を感じ、
自分のやっていることをサチに隠して、結局彼女を蔑する。

そうして、自分は悪くない、しょうがなかったんだって自分に言い
訳をし、サチにふさわしい子を探して町をまた徘徊する。

そのループの繰り返しだ。

そんなんだから、何もかもが宙ぶらりんで中途半端だ。あたしはぶ
かぷか、風船みたいに状況に流されてる。

でも、だからこそ何かに縋りたくて、愛が欲しい。嘘でもいいから
愛が欲しい。迷惑がかかっても愛が欲しい。自意識過剰になるくら
い愛が欲しい。なんと少しでも愛が欲しい。狂う惜しいくらい愛が
欲しい。どんな形でも愛が欲しい。何でも良いから愛が欲しい。た
だあたしだけの愛が欲しい。

……愛してくれたら、ちゃんと愛を返すから。

どうか、あたしを愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛
して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛
して愛して。

——お願いです。誰でも良いから、あたしを愛して下さい。



朝と昼は、魔女を模したオブジェの作成。夜は魔法少女の縄張り争いへの介入。

そんな日々を過ごしたせいだろうか。最近グリーンフィードの減るスピードが速くなってしまった。

それを解消する為に、夕刻の僅かな時間の中に魔女を探す。

ソウルジェムの導きを頼りに、あたしは無言で町の中を歩く。歩く。歩く。

ビルの摩天楼。商店街。相変わらず多い人混み。その雑多な有象無象の群は、色梨こゆり——あたしにとって、どれもこれもが別の世界。

決して交わり合うことはない。日常と普通に満ち溢れたそこから、あたしはもうはみ出してしまっている。

なんせあたしは化け物——人間じゃないんだ。そんな奴が、暖かい場所に居られるはずがないだろう？

「……」

建物のショーウィンドウに映った自分の姿が目に入り、ふと足が止まる。

肩ぐらいの薄い色の茶髪はボサボサで、少し長くなってきた前髪が目元に暗い影を落としている。

服装は実家から持ってきた長袖とズボンだが、手洗いによる洗濯の影響か、少し伸びてしまっていた。

そしてその表情は、我ながら酷く寂しげなものだった。

髪と同色の目は何処かやり切れないように切なげな目をしていて、眉根は下がりになり切っている。

あたしってば、こんなしけた面している奴だっただろうか。

……まあ元から根暗だし、いつも暗い顔はしていたけどさ。だからって、これはない。こんなのまるで、捨てられた子供じゃないか。

「ふん……」

不機嫌さから悪態をつき、また歩き出す。

何を考えているのだろう。自分が捨てられた子供みたいとか、気色悪いだろ。

……自分で自分を哀れんでるみたいで、流石に思い上がりも甚だしいつてもんだ。

あたしはそんなんじゃない。そんなんじゃないんだ。

同情も憐憫もいらぬ。そんな価値いらぬ。そうしてもらえない理由がない。

さつきも思っただけど、化け物は暖かな場所にいちやいけぬのだ。だから、あたしは可哀想でも哀れでもない。『惨め』じゃない。

「——ん？」

と、そこまで必死に考え事をしてしていると、ガヤガヤとした周囲の声に混じり、僅かに誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。

視線を動かせば、すぐ近くの街路樹の下に小さな人影がいる。

それは、まだ七歳ぐらいだろうと思われる幼い少女だ。迷子なのか見たところ一人で、親の姿は見かけない。

顔をぐちゃぐちゃにさせながら泣いているが、周りの人は素知らぬフリして通り過ぎていつている。

多分関わりたくない、と感じたのだろう。皆忙しいだろうし、それぞれ事情があるものだ。

しかし、あたしはどちらかといえば暇な方である。

そして、子供が泣いているのを無視するほど薄情じゃない。

……だって可愛そうじゃなか。一人で『惨め』に泣いてて、取り残されて。

そういうの辛いつて、あたしはよく分かっている。

それに、助けたら感謝してくれるかも。あたしと仲良くしてくれるかもしれない。恩を売って、恩を着せさえすれば、愛してもらえ理由ができる。

その可能性が低くても、どんな子でも、あたしは——

「ね……ねえ。ど、どうして泣いてるのかな？お母さんとはぐれちゃったの？」

あたしは幼い少女に近寄ると、少し屈んで自分の目の高さを彼女の目線に合わせる。そうして、勇気を出してなるべく優しく話しかけた。

しかし、元来あたしはコミュ障である。必要以上に緊張しちゃうて、辿々しい口調となつてしまった。

案の定、少女はぼかんとした表情であたしのことを見ている。

「……おねーちゃん、誰？」

「えーとね、あの……おねーちゃんはね、色梨こゆりっていうんだよ。たまたま貴女を見かけて、その……、泣いているから心配になつて声をかけたんだ。な、何かあつたのなら、せ、精一杯解決してみせますから、ど、どどどどどど、どうか頼りにして欲しいかな!」

少女の怪訝な目に更に緊張しまくり、あたしはしどろもどろになる。

そんなあたしのポンコツっぷりに、少女は呆れたような顔をした。

「おねーちゃん、頼りにならなさそう……」

「うぐっ……」

子供のストレートで容赦がない言葉に、何も反論ができない。しかも事実なだけに、あたしは結構痛いところを突かれて心にダメージを負う。

しかし、それでも即座に立ち直るのがあたしというもの。また勇気を出し、恐る恐る話しかけた。

「ま、まあ、なんだ？あたし、たしかに頼りにはならないかもだけど、お話を聞くことぐらいはできるわよ？……だからね、こ、こ（こ）こ、こゆりおねーちゃんに、何があつたかお話ししてくれない？」

「でも……」

迷うように口を噤む少女。あたしは彼女の手を握り、安心させるように言った。

「どんな話でも、信じるから」

「……ん。なら……、話す……」

少女は決意してくれたのか、涙を袖で拭い、自分からこちらと目を合わせてくれた。

あたしは少女に感謝しつつ、偉いと褒めた。

「それで、何があったの？……やっぱり、お母さんとはぐれちゃったの？」

「……うん。だけど、ね。私からはぐれちゃったんじゃないの」「え？」

どういうことだ、と驚きの声をあげる。その言い方だとまるで、母親の方から離れたみたいだ。

「まさか、お母さんが貴女を置き去りにしちゃったの？」

「違う、そうじゃない」

「じゃあ、貴女のお母さんは一体……」

何があったのか分からず、あたしは困惑する。すると少女が一言、ポツリと呟いた。

「化け物」

「――!!」

「化け物がね、お母さんをつれていっちゃったの!!」

少女は瞬間、叫ぶように大声を出す。

今度こそ、心臓が止まったかのような心地になった。

“化け物”。連れて行く。

その言葉が示唆しているだろう存在が、頭の中でちらついたので。だ。

「お、落ち着いて。……その化け物って、一体どんな風だったの？何があったの？」

少女を宥め、あたしは話すように促す。彼女はしばらく泣いた後、ようやく、しゃつくりを上げながら事情を説明してくれた。

「……あのね、お母さんと一緒にトイレに行ってたらね、その途端いつの間にか変なところに行ったの。とても広いところで、ギラギラしてた。そこには変な化け物がいっぱいて……、中でも大きな化け物がお母さんを……。それで、どうしたら良いのか分からなくなつて……、ここで泣いていたの」

「……」

予感的中したらしい。

やはり、この子とそのお母さんは運悪く魔女と鉢合わせ、その魔女がお母さんの方を連れていったのだ。

……しかし、最悪だ。そこまで時間は立っていないだろうが、連れて行かれた以上無事であるのか分からない。

今から探しても間に合うかどうか……。もし死んでいたとしたら、あたしはなんて言い訳をすれば良い。

「……て、まって。なんで貴女は無事なの?」

奇妙な点に気がつき、あたしは少女に確認する。

通常、魔女の結界に取り込まれた人は帰ってこれない。その時点で、魔女に捕食されるのは確定しているようなものだ。

しかし、この少女は生き残っている。怪我もないようだし、服の汚れもないことから、使い魔にすら攻撃されていないらしい。

普通じゃあり得ないことだ。

「それが、化け物は私には見向きもしなかったの……。お母さんにだけ飛びついて……」

「……もしかして、大人にだけ興味がある魔女なのかしら?」

あるいは、子供にだけは興味がない魔女……?

どっちにしろ、変な話であることに変わりはない。これは、何を表しているんだ……?

「とりあえず、化け物がいたっていうトイレにまで案内してくれない?……おねーちゃんが、そいつをやっつけてくるから」

「まさか、お母さんを助けてくれるの?」

「うん」

頷けば、少女は期待に目を輝かせる。しかしそれも一瞬で、すぐにハッとすると、

「け、けど危険だよ!!おねーちゃんが行ってもやられちゃう!!」

「だ、だいじょーぶ。あたしこう見えても強いなのよ?大の大人でも吹っ飛ばせちゃうんだからね。ほ、本当だからね!」

「……何で最後自信なさげなの?」

「ごめん……」

元々そこまで強気でいくタイプでもない。特にこういうのを断言

するほど、自信に満ち溢れているわけでもないし、つい弱々しい態度をとってしまった。

……くそ。これじゃあいけない。ここはビシツといかないと、この子をさらに不安にさせてしまう。

「とにかく、案内して欲しいの。おねーちゃんが、必ず化け物をぶっ飛ばしてお母さんを助け出す」

今度こそはつきりとした口調で言い切る。するとそれが効いたのか、少女は先ほどとは違って、希望を見出したかのような表情をした。「おねーちゃん……。うん！分かった!!こつちだよ!!」

途端、少女はとてとと走って行く。あたしは屈んだ体勢から元に戻ると、胸中の不安を抱えながらその後を追っていった。



少女に案内された場所は、近くの公衆トイレだった。

そこは分かりにくいが目鼻の先にある場所で、少女が近くで泣いているのも納得の距離だ。

早速、卵形にしたソウルジエムをかざしてみる。少女の言うとおり、反応は確かにあり、ここに魔女がいたのは確実だ。

しかし当たり前の話だが、少女の母親をさらってどこかに行ってしまったのか、このトイレにはもういない。

「……でも中に入ったら、何かあるのかもしれない」
スライムの魔女の時、そいつは魔力を目印として残していった。

そういう手がかりが、今回もないとは言い切れない。
あたしは少女に外で待っているように言うと、公衆トイレの女性用の場所へと入って行く。

そうして、個室をいちいち開けてはソウルジエムをかざし、何がな
いかを探していく。

そして最後の個室を開け――

「あ——」

「……」

「……ごめんなさい」

あたしは思わず謝ってしまった。

個室には、すでに人が入っていたのだ。

少し高い身長に、淡い色合いのゆるふわした髪をショートに揃えた少女である。

年は歌羽ぐらいかそれより少し上程度で、間違いなく高校生だろう。

ぶかぶかの長袖のセーターを着ていて、それがまたよく似合っている。

彼女はトイレで用を足していなかったが、個室に入っているところを見られたために恥ずかしそうにしていた。

そしてあたしも不躰なことをしてしまったため、赤面しながら弁明する。

「あ、あのですね、その、決して覗こうとしたわけじゃないんです……。こ、これは、た、たまたまで!!トイレをしたのならどうぞお好きに!!」
「……うん。本当ごめん。なんか誤解させちゃってるとこ悪いんだけど、別に僕もトイレをしようとしてたわけじゃないんだよ。君こそどうぞお好きに……」

セーターを着た少女はそう言いながら苦笑し、あたしに譲るように個室から出てくる。しかしあたしはぶんぶんと首を振り、それを断った。

「いえいえいえ!!あたしもトイレをしたかったわけじゃなくて、……。あの、調べ物してただけで!!それで個室を開けちゃっただけなんです!!」

「調べ物?……ああ、なるほど、そういうことか」

少女はあたしの言うことに少し首を傾げたものの、次には何故か納得したかのように頷いた。その視線はあたしの手のひらの上——卵型にしたソウルジェムに向けられており、

「——君も、魔女を調べに来てたんだね」

「……？」

「僕は君と同じ魔法少女だよ。僕も魔女を探していた最中だったんだ」

ほら、と同業者の証たる指輪を見せてくる。

あたしはそれに微妙な顔を返した。

こんな時に魔法少女に会って、厄介な事に発展しかねないような気がしたからだ。

しかし、少女の方はあたしのように慌てずに自然体でいる。

「そう警戒しないでよ。お嬢さん。……まあ、気持ちは分かるけど」

少女はアハハ、とまた苦笑。よく笑う人だ。

「別に僕は魔女探しを妨害しようだとか思っていないよ。獲物を横取りしようとかもね。というか、むしろ君の魔女探しを助けてあげたいくらいさ」

「どういうこと？」

「……こういうことだよ」

そういうや否や、少女は右腕のセーターの袖を下に来ていた服の袖ごと、一気に一の腕まで捲り上げた。

あたしはその下にあったものにぎよつとなる。

……アメーバのような模様が、腕全体に走っていたのである。

それは常に僅かに赤黒く発光しては明滅を繰り返し、まるで血管のようにも見えてグロテスクだ。しかもその刻印は、魔女と似た悍しい魔力を放っている。

訳が分からず、あたしは戦慄した。思わず、一步下がってしまった。

「何ですか……、それは……」

「呪いだよ。呪い」

少女は軽い調子で答える。

「固有魔法の使いすぎと、あと他の子の武器を強引に使ったせいらしくてね。穢れが呪印となって体に刻まれちゃって、魂と体のリンクが少し微弱になっているんだ」

「……つまり、どういうことなんですか？」

「固有魔法を使うとその度に呪いが蓄積して、最終的には昏睡しちゃ

うってこと。同時に戦闘も体に負担をかけるから厳禁。要は、僕は魔法少女を殺せない魔法少女なんだ」

唾然とするあたしに、セーターの袖を元に戻しながら少女は説明する。

そして、次に何処かほつとしたような表情を浮かべた。

「だから魔法女を見つけた時、粗方調べたら仲間に伝えて退治してもらおうって思ったんだけど、君がいるならその必要もない。正直、仲間には迷惑かけっぱなしだったから、君が退治してくれるならありがたいんだ」

にこりと笑う少女の顔は晴れ晴れとしていて、嘘を言っているようには見えなかった。

しかしあたしはその態度が解せず、困惑するしかない。

「話は分かったけど、……何でそんな平気そうにしてるんですか？」

「ん？何が？」

「その呪い、嫌なものですよね？それをあたしに見せて、辛くはないんですか？」

あたしは失礼を承知で質問する。

言っちゃ悪いが、その呪印は気持ち悪いもので、他人に見せたいものではないだろう。それに、そのこと自体を言うことも憚れるものだ。

なのに、何でこの少女は何でもないと普通に普通にしている。それがあたしには理解できないのだ。

「……んー、そうだねえ」

少女はあたしの質問に、考えるような仕草する。そうして、数分した後で、

「これはしようがないことだって、受け入れてるからかな？」

「受け入れている？」

「うん。……こうなることは必然で、避けられなかった。そういう思いがあるから、呪いを否定したり、目を逸らしたりっていうことはしないで済んでるんだよ」

少女は相変わらず、何でもないとように笑う。

だが、その受け入れ方はあたしから見ればあまりに強い。

彼女は重度のハンデを運命として捉えて、消化している。それは自分の思いを完璧に整理して割り切っているということだ。並大抵の精神力でできることではない。

「心配してくれてありがとね。君は本当に良い子だよ」

「……、どうも」

ナチュラルにお礼を言われ、あたしは照れるの隠すやめにそっぽを向く。その様子が面白かったのか、ふふ、と少女は笑う。

「君つてば、面白いんだね。なんかこう、愛でたくなる可愛いさがあるというか……、撫でくりまわして甘やかしたい」

「……普通に遠慮します」

あたしは犬か。

……てか、この人あたしみたいなのを可愛いとかマジ変わってんな。

あたしの顔なんて、普通だっつーの。

「つれないねえ。」

……まあ良いや。そんなことより君に、魔女が何処に行ったか教えてあげよう」

「まさか、分かるんですか？」

「目見当だけどね。こう見えてもベテラン……、ベテランなのかな？とにかく、魔力探査はずつとやってきた感覚があるから、自信があるんだ」

少女は再び個室の中に入ると、その中のトイレを指す。

それは一般的な洋式のタイプであり、一見すると普通のトイレだ。どこもおかしな点はない。あることだけを除けば。

「なんか、そこだけ魔力が濃い……？」

変なことに、このトイレにだけべつとりと魔女の魔力が染みついているのだ。

他のトイレはそうでもなかったのに。

「おお、一発で分かるんだね。すっごくいい!!」

「そうですか……っ？」

「すっごいよ。僕も調べるのに五分くらいかかっているんだよ？それを指摘しただけで分かるのは、普通の魔法少女にはできないことだ。もう天才としか言いようがないよ！」

少女は大袈裟なくらいあたしを褒める。それも嫌味じゃないから、すんごく恥ずかしい。

あたしは顔が赤くなるのを誤魔化すかのように、強い口調で先に進めるように言った。

「て、天才だとか、それは今良いです!!このトイレの何が、魔女と関係あるんですか？」

「ああ、うん。つまりね、こういうことだよ。このトイレに魔力がべつたり残っているのは、魔女がこのトイレを使って逃げたからなんだよ」

「……トイレを使って逃げた？」

訳が分からず、ぼかんとする。だって、トイレなんてただのものだ。それをどう使えば魔女が逃げられるというのだろうか？

「そんなのどうやって……。トイレはどこにも繋がってないじゃないですか。逃げ場はありませんよ？」

「普通はそう思うよね。ところがどっこい、トイレには道が繋がっているよ」

「あ……」

その可能性を見落としていたことに、あたしははっとする。

……確かに少女の言う通り、トイレには道が繋がっている——即ち、下水道という道に。

そこを伝えれば、魔女は瞬時に逃げる事が出来るのだ。

「……じゃあ、何処かしら下水道に降りて魔女を追えば……」

「見つけられるだろうね」

確信してか、少女が断言した。

あたしは瞬間、ばつと外の方を向き、すぐさま入り口に駆け寄ろうとする。

見つけられる手段が出来たのなら、速くそれを活用しなければならぬ。

そうしなければ、あの幼い少女の母親が死んでしまうかもしれないのだ。

そんなの悲しすぎて絶対イヤ。絶対に避けたい。

あの子は母親のことが好きなようだし、母親の方だってあの子のことが好きだろう。その関係性は正しく「愛」で、あたしが失ってしまったものだ。だから、それが他人のものであったとしても、消えるのは許さない。

「ちよつと待って。いくら魔女を追っているからといっても、そこまです慌てるなんて何があつたんだい？」

「……何ですか？ 邪魔しないでください。あたしは急がなきゃいけないです」

出て行こうとした時にすんで呼び止められ、あたしは思わず少女を睨みつけた。

しかし、少女は物怖じせずにあたしの目をじつと見る。

「……何か大変なことがあつたんだろう？ そういうのは、一人で抱え込まない方が良く。非力な身だけど、僕で良ければ力になるよ」

「……」

あたしも彼女の瞳をじつと見つ返す。

とても人間的な目だと思った。優しく勇氣に満ち溢れていながら、同時に悲しみや憎悪を孕んでいる。今だって、彼女の中にはあたしに対する疑念と心配が入り乱れていることだろう。

——それなのに。この人は矛盾だらけなのに、それに何処か惹かれてしまう。

きつと本質的に弱いから、同じように弱いあたしも共感してしまうのだ。

「……貴女みたいな人に愛されれば、あたしももう少し違った未来に至れたのかな？」

「……え？」

「何でもありません。今のはただの戯言。聞き流して下さい」

あたしは一瞬だけ浮かんだ期待を嘲笑い、苦笑する。

少女は首を傾げるが、すぐにそれを無粋と思ったらしく、こくりと

頷いた。

「力になるって言うってくださるのですしたら、一つあたしの頼みを聞いてくれませんか?」

「うん。それで、どんな頼みなのかな?」

「それは——」



「——で、頼みがこれだけって言うわけか。確かに誰かがやらなきやいけないことだけど、もう少し頼って欲しかったなあ……」

「おねーちゃん。何のお話をしているの?」

「ん? さっきのおねーちゃんは、ちよつと意地っ張りだったなあって話だよ」

幼い少女の頭を優しく撫でて、微笑んでみせる。

それだけなのに、彼女はこちらに背一杯笑い返してくれた。

うむ。ロリコンじゃないが幼女は可愛い。

「こゆりおねーちゃん、大丈夫かなあ」

「どうして?」

「あの人なんかヘタレだもん」

「ぶ……」

子供のストレートな言葉に思わず吹き出す。

これほどまでに色梨こゆりという人間を端的に表した言葉は、そうそうないだろう。

いやはやまったくその通り。

色梨こゆりは臆病で、弱気で、小心者で、慌てん坊で、ちよつと情けない少女だ。

——風来坊、色梨こゆり。

傍若無人のようであり、よく分からない行動している人物。堂々と歩いて、強くて、ただならぬ雰囲気を持ち主。

そんな噂があつたのだが、話に聞いていたのと大分印象が違うじゃないか。

あの子は、寂しがり屋の普通の子だ。

「……そう。寂しがり屋なだけ。ただ、愛されたくてあんなことやっているだけだもんね」

……鳥澁がましいがかもしれないが、色梨こゆりのその気持ちが自分には何となく分かる。

彼女は愛されたくて仕方がないが、同時に愛を信用できなくなっているのだ。だから行動がぐしゃぐしゃになって、心の中ががちがちやちやしているのだろう。

でも、こゆりちゃん自身は気がついていないが、彼女を愛そうとしてくれる子はいっぱいいる。

本当は孤独などではないのだ。それに気が付き、殻を撃ち破れれば、また彼女は愛を実感できるようになるだろう。

そのためにも――

『歌羽ちゃん。想定外のこと起きたよ。夜の件は早めにした方がいいかもしれない。実は――』

ジエムに魔力を込め、テレパシーを送る。すると相手も同じようにテレパシーを返し、一言二言呟くと、了解しました、とだけ言っ切ってしまった。

「……お願いね」

願いを込めて呟く。

こゆりちゃんは、この幼い少女を預けること以外何も頼んでこなかったけど、こちらとそれだけで納得できるほど冷たくもないんだ。

何より、〃彼女達〃が〃やる〃と言っているのだ。僕にできる力添えは、十分にさせてもらう。

……それが、上手くいくかどうかは分からないけど。

「――それでも、こゆりちゃんの心を開けるのは君達だけだよ」

絶望へのチケツト

路地裏に周り、誰もいないのを確認。素早くマンホールの蓋を開けてずらし、その縦穴へと侵入する。

そうしてマンホールの蓋をどうにか閉めると、縦穴に沿うよう備え付けられた梯子を踏み外さぬように慎重に下りていった。

やがて地面に足が付き、長く続いていた梯子が終わる。

あたしは暗くてじめじめとした空間を、実体化したソウルジェムの光で照らしながら周囲を観察する。

コンクリートで出来た壁や天井は丸みを帯びており、どうやら下水道全体が筒状のトンネルのようになっていているらしい。

灯らしいものはなく、ソウルジェムの光でしか視界は得られないが、見た感じ高さも幅も余裕がある。多分思っているよりこの場所は広いだろう。

そして――

「くっさ……」

思わず鼻をつまみ、顔をしかめる。

地面は凹のような形になっており、そのへこんだ部分に水路があるのだが、そこに流れているのが汚水であるために、近くにいただけでひん曲がりそうな臭いがしてくるのだ。

へこんでいない部分――コンクリートの通路が確保されているのでまだ良かったが、これが全部地面が汚水で満たされていたら、どうなっていただろうか。考えただけでゾツとする。

「こりゃあ体にも臭いがつくだろうなあ。帰ったら速攻で風呂だわ……」

誰もいないことをいいことに、一人ぼやきながらソウルジェムで魔法の反応を確かめる。

宝石の光は微妙な強さで明滅しており、魔法の反応はあるものの近いんだか近くないんだかよく分からない。

このまま根気よく追っていくしかないだろう。

そう考え、暗い道を進んでいく。

歩くたび足音が反響し、それがやけに孤独感を煽る。周りも暗闇のためか平衡感覚さえおかしくなりそう。

まるで、お化け屋敷に入ったかのような心地である。終わりがあると分かっているにしても、先がどうなっているか分からず、不気味さは拭えない。

まあ、そんなことを感じるなんて今更な話ではあるが。

普段行き来している魔法の結界だって、深層部がどうなっているか分からない。むしろ使い魔や魔法がいる分、この場所より危険だ。

それでも、あたしの本能は闇を忌避しているのだろう。

早く光がある場所に出たいと思ってしまう。

まったく、魔法少女という化け物になったというのに、こういうところばかりは中途半端に人間的な部分が残っていて嫌になる。

いつそ、契約時に身も心もなくなれば良かったのに。

……何も思わず、何も求めなければ、こんな息苦しい生き方をしないで済むし。

「……はあ」

思わず、ため息を吐く。

暗闇の中にいるせいで、さつきからどうにもネガティブなことばかりを考えてしまう。

例えば、さつきのように自分に残された人間性のこととか。

その他にも、あの幼い少女の母親のことが頭に思い浮かぶ。

……だって、責任が重い。

人の命。それもまだ小さい子の親を背負っているんだぞ？何かあつたら言い訳も、誤魔化しも出来ない。

ついでに言えば、その母親が無事だという保証もない。こうして魔法を追っても、無駄な足掻きかもしれないのだ。

……本当に、あたしだけで大丈夫なのか？あの高校生くらいの少女に、仲間を呼んで貰った方が良かったんじゃないだろうか。

後悔や最悪なケースばかりが思い浮かび、緊張でお腹の調子が悪くなりそう。

しかし引き受けた以上、引き返すことも出来ない。もう前に進むし

かないのだ。

「……、この反応は——」

しばらく小走り気味に移動し、十分ぐらい立った時だろうか。ようやく魔女の魔力が近づき、やっと追いついたと思ったその瞬間、魔女の反応が妙な動きをし始めた。

今いる下水道から、急速に地上に向かい始めたのだ。

慌てて周囲を照らし、上に行けるルートを探す。

すると数メートル先に、梯子があるのが見えた。

すぐさまそこへ飛びつくように走り寄り、あたしは魔法少女に変身。

その強化された身体能力をフルに使って素早く梯子を上り切り、マーンホールの蓋を内側からずらして地上に顔を出すと——

「は——？」

そこに広がっていたのは、普段見かけている町並みの世界ではなかった。

代わりにあったのは、歪な光景。

ギラギラとした緑色のスパンコールで覆われた床に、艶やかな女性の写真が貼られた看板。いかにも意味ありげに立てかけられた、点在する無数の木の梯子。そうしてコンクリートで出来ていると思われる、下水道の時にも見た丸みを帯びた天井には、キノコのような形の電球がいくつも備え付けられている。

いきなり視界が明るくなって目の前がチカチカしていたが、見間違えようはずもない。

これは魔女の结界——化け物が作り出した異界だ。

「追いかけているうちに入り込んでしまったのか、あたしは……？」

ぼやいて地上から完全に出ると、立ち上がって片手剣を作り出して警戒する。

するとそれに反応したのか。あたしの周囲の空間が一斉に歪み、捻れ、そこからあつという間に「使い魔」が出現した。

それは全体的なフォルムから、コウモリと思わしき生物だった。ただし、頭部は青緑の体毛に覆われており、口からはタコのような触手が無数に出ているという、クリーチャーも真つ青になりそうな外見をしている。

またその翼は体に反して異常にでかく、片方だけでも広げれば四メートルにもなりそうだ。

そんな奴らが宙を飛びながら、大量にあたしの周りをぐるりと囲んでいた。

睥睨してくるその目は侵入者を排除しようという敵意に満ち溢れており、こちらを逃してはくれないだろう。

「……あの子のためにも急いでいるつてのに。本当、邪魔」

呟き、あたしは自分の中の魔力を高めた。同時に使い魔達が大きな翼を一斉に羽ばたかせる。

そうして四方から放たれたのは、薄く鋭い風の刃——鎌鼬だ。

触れば人体など軽く切り裂きってしまうだろうそれらは、明確な「死」を伴いながらあたしへと風音を立てて襲いかかる。

しかし、あたしは慌てず、右足の爪先でとんとんと床をついた。

その動作だけで魔力が地面に伝達。瞬時にあたしを囲うように床から鉄壁が隆起し、ドーム状になって死の風からあたしを守る。

「えい」

もう一度右足で床を叩く。

するとドームの形状を崩壊させる代わりに、鉄壁は新たな形へと変形していった。

それは地面から迫り上がる形で伸びる、鋭い槍だ。

その槍を計二十本、あたしの周りに展開させ、一気に魔力を操作する。

瞬間、花開くように鉄槍が成長。所構わず突撃してくる使い魔達を重ねるようにくし刺しにし、紫の体液を撒き散らせる。

それでも、すべてがやられたわけではない。むしろ大半は槍を回避

し、旋回しながらあたしへと向かってくる。

それを片手剣で殴り、斬り伏せ、口内に刃をねじ込んで先端をトゲ付きの鉄球に変形させ、使い魔を内側から破裂させる。

「ふ——!!」

あたしはそれだけに留まらず、鉄球に変化させた先端部と柄以外を長い鎖へと変え、無茶苦茶に振り回した。

金属音が唸り声を上げる。モーニングスターの一撃は、まさに台風だ。

その台風の目として鎖を操り、圧倒的な質量を持つ鉄球で次々とウモリの使い魔を潰し、暴殺していく。

「最後!!」

残った使い魔の一匹へと柄を振り下げる。続く鎖が遠心力を伴って鉄球をその体へ叩きつけ、コウモリもどきは地面に激突。紫の体液を散らしながら陥没し、ミンチとして粉碎された。

「これで——、……!?!」

ほっとしたのも束の間。すぐに違和感が気がつく。

何故結界内に入っているのに、魔女は襲ってこなかったのだろうか。いや、何故そもそもいるのは使い魔だけで、魔女は姿を表さなかったのか。

見たところこの場所は最深部。住処にしている魔女が真つ先に怒ってきてもおかしくないのに。

嫌な予感に、弾かれたように周囲を見渡す。

そうして、はるか彼方の後方。そこでは予想外の光景が繰り広げられていた。

気絶し、意識を失っているらしきサラリーマン風の二人の若い男性が、「魔女」に捕まっていたのだ。

そいつは蝙蝠もどきよりも、もつと悍しい姿をしていた。

使い魔と違い、地面にドツシリと構えたその体の体長は、三メートルぐらいだろうか。

頭部は腸を複数繋ぎ合わせてできたかのような醜い肉塊。その下にある蝙蝠の体と翼は赤紫色の体毛に覆われ、本来足があるべきはず

のところにはタコのような六本の触手が左右それぞれに生えている。それで男性達を縛り上げ、持ち上げていた。

魔女がいたこと、何より一般人がいることに驚く。

いつの間にか冷や汗が流れ、心臓のリズムが速くなっていた。

「まさか……」

あたしは嫌でも魔女の意図に思い当たる。

あたしは多分、魔女が一般人を襲おうとしたタイミングで運悪く入り込んだのだろう。だから、それを邪魔されないために、入った直後ですぐに使い魔を囿に差し向けられたのだ。

なんてあくどく小賢しいのだろうか。馬鹿にしているにも程がある。

……いや、今はそんなことどうでも良い。

一般人の悲鳴がどうして聞こえなかったのか。数分使い魔と戦闘したのに、何故その間魔女は男性達を殺さなかったのか。少しばかり疑問点が多いが、一刻も早く助けなければ。

あたしはその思いを胸に、モーニングスターを振るう。

じやらりと鳴き声を上げて魔女へ向かう鉄の蛇。しかし弾丸の如く発射された鉄球は、蝙蝠の魔女にぶつかる直前、そのタコの触手によつて邪魔される。

「ちい……」

その悪あがきに、思わず舌打ちした。どうやらあの魔女相手に真正面からいっても駄目らしい。あのタコの触手は前に迫り出しており、攻撃してもその多腕で先程のように防がれる。

何か不意をつき、背後をとつて触手を封じるしかない。

ならばと、攻撃が弾かれた時の力を生かし、あたしは柄を振り上げる。

鎖も連動するように上に上がり、鉄球は勢いそのまま天井へと突き刺さった。あたしはそれを確認すると鎖を短くし、その反動で体を持ち上げる。

あつという間に視界が遥か高くなり、魔女の頭上をとるあたし。

当然、魔女は黙っていない。あたしへとそのタコの触手を伸ばして

いく。

しかしあたしはその直前、振り子のように前方に鎖を揺らすことで逃れると、勢いに任せて柄を離す。

落下しながら空中で身を捻り、あたしは魔女の背後を注視した。

意外とガラ空きだ。身構えも何もへったくれもない。

……いける。ゴクリと生唾を飲み込み、あたしは魔女目掛け、召喚した短剣を投げつけた。

「縛れえ!!」

叫ぶや否や、固有魔法を発動させる。

すると短剣はぶつかる瞬間、武器の形状を失い液体へと融解。

液体金属は触手のような形となって蠢きながら、頭部を、胴体を、タコの足を、一般人の男性二人を避けながら魔女の体を拘束する。

そうして動けなくなったところを、着地したあたしは再び攻撃を仕掛けた。

召喚した液体金属で作り出すのは、身の丈ほどの長さの槍だ。それでタコの触手を断ち切り、一般男性二人を解放。続く二撃目で深い切創を与え、更に三撃目で胴体を突き穿つ。

そして四撃目。恐らく最後になるだろう攻撃に、全身全霊の魔力を込めて、槍を振り下ろそうとし――

『強いねえ』

刹那――ゾツとするような声が無処からともなく聞こえた。

それは、女のものだろうか。それとも男のものだろうか。

ノイズが混じり、そのせいで機械音声地味た、無機質な声音となっている。

その言葉の発音の意味も上手く聞き取れず、まるで日本語を喋られているのに、脳はそれを英語として捉えているような、奇妙な感覚に陥った。

……だが、その声に込められたものだけは、全身の肌で感じた。

それは理解し難いほどにあたしに向けられた、悍しいまでの羨望だ。

嫉妬。諦念。憎悪。悲嘆。絶望感。劣等感。そういうありとあら

そうして、〃声〃は何事もなかったかのように沈黙し続ける。
時間が長引くと共に緊張感が高まり、あたしは何度も唾を飲み込
んだ。

やがて、何分間が時間が過ぎた時——

『^{貴女、空っぽ}××。矛盾してる』

「……え？」

再び、無機質な〃声〃がした。

相変わらず何を言っているのか、あたしの脳の言語野は捉えられな
かったけれど、しかし〃声〃は先程とは違って響きが明らかに変わっ
ていた。

それは——同情心だ。

上から目線で傲慢な、あまりに身勝手な憐憫だ。

そのことに、怖気が心の底から湧き上がる。得体の知れないものに
理解されたような気になられるなど、これほど気持ち悪いことがある
だろうか。

『空っぽ。×^{愛が、なご}×。愛して』

「……っ。な、何なんだよ……、一体……」

余計なことに、こちらを哀れんでくる〃声〃。

その不快さのあまり、疑問が口から飛び出る。しかし〃声〃はそれ
を無視し、雑音混じりの音声で空っぽ、空っぽ、と連呼する。

そして、ある程度繰り返してから、無邪気に笑った。

『おいで。空っぽ。——おいで』

「……!？」

最後の言葉。〃おいで〃の部分だけが、やけに明瞭に聞こえた。

そのことに瞠目しているうちに、〃声〃がまたも笑いながら小さく
なっていく。

何となくだが、自分の元から遠ざかっていっているのが分かった。
ぞくりとする感情の本流が、少しずつ向けられなくなっているのが
本能的に感知できたからだ。

「——は、はは……」

〃声〃の気配が消えた時、緊張が一気に弛緩する。

気がつけばあたしはその場にへたり込み、乾いた笑みを浮かべていた。

安心感がどっと押し寄せる。これ程までに、恐怖から解放されて感謝した日はないだろう。

「……、魔女は……」

落ち着いてきたところで、状況を把握しようとする周囲を見渡す。

するとそこは、木でできた見慣れぬ古い店の裏路地であり、近くにはマンホールがあった。

……その光景は、どう見えても結界じゃない。あたしは、すっかり現実世界に戻ってきている。

どうやら、魔女はあたしが固まっている隙に逃げていったらしい。一般人の男性二人もいないし、多分彼ら魔女が連れていったのだろう。

……追いかけるより前に比べて、明らかに状況が悪化している。

どれもこれも、あたしがさっさと魔女をぶっ殺せなかったせいだ。

もつと速く魔女を倒せていたら、あの幼い少女の母親も、男性二人も救えたかもしれない。

不甲斐なさが込み上げ、あたしは八つ当たり気味に大声を上げたくなった。

しかし、そんなことをしても無意味だということは分かっていたから、済んでのところで感情を抑え込んだ。

——今は、出来ることをやらないといけない。

あたしは数分をかけて気持ちをどうにか切り替えると、意識を集中中。

魔力の残滓を探查する。

すると南南西の方向に、強い魔女の魔力が感じ取れた。逃げてばかりだから、やけに足跡がはっきりしているのだ。

「よし……」

魔女が追えるなら、まだ希望は残されている。それをわざわざ捨てることなどするものか。

あたしは心の中でそう自分に喝を入れて、立ち上がる。そうして、

額に浮かんだ汗を拭おうとした時である。

「……？」

カサリ、と僅かな音が手の中からしたのだ。

握り拳を開いてみると、そこにはいつの間にか紙切れが握らされていた。

それはどうやら、デザインのなものを見るにチケットのようなものならしい。

スケジュールなどは判別不可能な文字——魔女の結界で時々見かける、あの不思議な文字で書かれており、何のチケットなのかはよく分からない。

ただし、よく見てみれば裏には地図が載っており、一番右上の建物には星のマークが刻まれている。しかもあたしの周囲と合わせて観察するに、地図はこの周辺地域を表しているようだった。

「……もしかして魔女の奴に誘われているのか？」

文字や状況、そして「おいで」という言葉。

それらから総合的に判断すると、そうとしか言えないだろう。

嫌な汗が、また背筋に浮かぶ。だが、あたしはそれを跳ね除けるようにニヤリと笑った。

「……良いわ。面白いじゃない」

畏であったとしても、行く以外に選択肢はない。だったら、堂々と倒しに行くまで。

そして、あの幼い少女の母親も、一般人の男性二人も取り戻すのだ。

そう決意を固め、あたしは歩を進める。

——夕暮れの空は、既に暗闇になろうとしていた。

饗宴にて狂う

チケットの地図、それから魔女の魔力反応を頼りに、あたしは道を進んでいく。

足を前に動かすごとにどんどんと人気は無くなっていき、家が少なくなっていく。

そうして雑木林の中に入り、やがて辿り着いたその最奥にあったのは、西洋風の大きな建物だった。

白い屋根の天辺には十字架の飾りがついており、赤煉瓦を積み上げてできた壁にも似たような意匠が施されている。

恐らく、教会……。もしくは礼拝堂といった施設なのだろう。

あまりこういったところに縁がないので、断定はできないのだけだ。

しかし、雰囲気こそなんとか壮麗さを保ってはいるが、窓ガラスに少しヒビが入っていたり、周囲には雑草が生い茂っている。

もうこの礼拝堂は使われておらず、廃墟になってしまっているのだ。

「反応は……」

一応念のために、魔力を探る。

すると、衣装のベルトに付けられたソウルジェムの光が強く明滅。やはり、ここに魔女がいるらしい。

「……ここまで追いかけて何企んでんだか分かんないけど、今度こそ狩らせてもらうわよ」

軽口をわざと叩き、あたしは気合を入れた。

正直あの「声」のこともあって恐怖しているのだけれど、それは今は胸の内に無理やり抑えなければならぬ。

感謝されたいわけでもないし、ましてやこの件が終わったら関わることはないのかもしれないけれど、あたしはあの幼い少女の母親を助けないといけない。そうすることで、幼い彼女に恩を着せたいのだ。

……どうせあたしなんて、誰からも愛されないの「かも」しれない

しぎ。ならせめて、その存在だけでもその身に刻み付けたい。

「たのもー……」

礼拝堂の観音扉に手をかける。それは軋んだ音を立てながら、ゆっくりと開いていった。

警戒しながら中に入る。

カビ臭い臭いが鼻につき、埃が舞った。

そこそこ広い空間が広がる。

真つ直ぐに伸びる道。その両脇には木の長椅子がそれぞれ十個ぐらい並べられ、それなりの人数が座れるだろう席が確保されてある。

正面、奥の壁にある大きなステンドグラスは、イエスキリストが天に登っている様子を描いており、その周りには天使や聖人の姿が見受けられた。

精巧さと良い、芸術性と良い、思わず息を飲んでしまうぐらいに美しい。

ステンドグラスの前のスペースはほかの場所より一段高く、演壇となっている。壇上には質素だが高そうな演台があり、その上には教典と思わしき本があるが、それ以上のことは分からない。

また、周囲の白い壁や床にある装飾は、どれも豪華な作りだ。

廃墟になってしまっているが、元々は権威ある場所だったのかもしれない。

そう考えると、なんとも言い難い感傷がある。

なんて、どうでも良い思いを抱えながらあたしは通路を歩いていく。

そうして演壇の前に立つと、魔力の揺らぎに干渉した。

変化はすぐに訪れる。

あたしの目の前で、ステンドグラスは歪み、捻れ、コウモリのマークが浮かんだ空間の穴を出現させたのだ。

結界の入り口——異界の扉だ。あの先に、魔女が住まう迷宮が広がっている。

あたしは素手になっている掌に、最も得意な武器である硬鞭を造り出した。気休めかもしれないが、こうすることで心持ちは前向きにな

る。

これで準備完了だ。ようやく、魔女をぶつ殺せる。

あたしは改めて気合を入れ直すと、息を飲む。そうして、意を決して飛び込もうとしたその時――

「やっぱり来てくれたんだー。来てくれたんですね」

漆黒の虚の孔から、突如として「右手」が生えた。

「……は？」

思考が停止。あたしは体を強張らせながら呆然とする。

……訳がわからなかった。一体全体、何が起きているのか。

だってこんなこと一度もなかったし。その右手が何なのかも、理解が出来なかった。

そうやって固まっているうちに、「手」は徐々に結界の入り口からその身を出し、右腕、左足、と、徐々にそのシルエットが明らかになっていく。

それは背の高い、一人の少女だった。

すらりと長い手足。羨ましくなるぐらい白い肌。それらを大事に包むかのように、柔らかな素材で出来た黒いワンピースを着ている。

だがその服は決して地味ではなく、むしろフリルがふんだんにあしらわれた派手な装いであり、まるで舞台衣装か何かのように思えた。

髪は腰まで伸びた長髪。太陽の日をそのまま写したかのような鮮やかな赤みを帯びた橙色で、横に結び、肩にたらしめている。

都雅な雰囲気を出しているが、しかし肝心の顔はよく見えない。それは頭から被ったベールのせい、常に目元には暗い影が出来ているのだ。

得体の知れないやつだった。

魔法少女の魔力反応もなく、かといって魔女の反応も返ってこない。

そいつはそいつ独自の魔力を放っており、それがこの上なく異質であった。

あたしはあまりの恐怖に、「声」の時同様、魔女のことも幼い少女のことも忘れる。

少女は見ているだけで呼吸が止まりそうな、圧倒的なプレッシャーを放っていたのだ。

それに当てられていると、自然と頭を垂れ、命の許しを乞いたくなる。

あたしが蟻なら、向こうは像。気まぐれ次第でぺちゃんこだ。

「空っぽ。可哀想。空っぽ——ああ、嬉しい。貴女に会えて嬉しい。やったー、やったー」

少女は演壇に降り立ち、無邪気にバンザーイ、と手を上げては下げるのを繰り返す。

その声は、あのコウモリの魔女の結界で聞いた「声」と同じものだ。

大分明瞭で意味も分かるが、調子が似ている。間違いない。

「ア、アンタ……、一体……」

混乱の中、あたしはどうか辿々しく少女に声をかけた。

すると黒の少女はピタリと止まり、首を勢いよく六十度の角度に傾けた。

まるで人形めいたような、不気味な動作。それなのに、口元に人間みたいな満面の笑みを笑み浮かべ、

「来てくれてありがとう。ありがとうございます。よく来てくれましたね。歓迎しますよ。空っぽ。矛盾。ありがとうございます。おめでとー。イエーイ、ヒューヒュー！」

パチパチパチパチ。

少女は軽く拍手を送る。

こちらの言葉など聞いちやいないし、また言っていることも支離滅裂だ。

——完全にイカれてやがる。

「……何なんだよ」

あたしは顔を顰めて呟いた。

まったく、置かれている状況の理不尽さに悪態をつきたくなくなってしまふ。

そうしないと、こっちまで少女の狂気に影響されて気が狂いそう

だ。

何もかもが、意味不明だ。

この少女の正体は？

何であたしに“声”をかけてきた？どうして、結界の入り口から出てきたんだ？

尽きぬ疑問で頭の中が満たされていく。

しかしそれを答えてくれるだろう黒の少女は、まともではない様子でぶつぶつと何かを言っている。

「矛盾。空っぽ。私が、私の、私は高尚だ。私より下のやつ。助ける。助けて、助けて下さい。助けないで。」

……うん、良いの……、良いの良いの良いのよ。……大丈夫だから……さ。その……ええとね、勇気を出して……。

——ああ、そうだねその通り。リノ、大丈夫。さっすが友達。心配してくれてありがと〜」

少女は右手の人差し指を立てて動かしながら裏声を出すと、何故か自分で自分を慰める。そうして、次には顔を輝かせてその指をリノと呼び、接吻を落とした。

それは滑稽な一人芝居。だが、少女はその芝居を本気でやっているようだった。

だからこそ、直視したくない。純粋な狂気が、そこにはあつたから。「ん、じゃあ貴女の名前教えて。漢字も教えて。してして。お願いします」

「……」

一頻り盛り上がったところで、ようやくあたしとコミュニケーションをしようという気になったらしい。少女は接吻した右手の人差し指であたしを指し、自己紹介するように求めてきた。

その言葉は軽いが、圧はもの凄い。口元には一切の笑みはなく、少女から感じるプレッシャーは更に強まっている。

「色梨、こゆり……。色と果物の梨で“しきり”で、こゆりはひらがな……」

あたしは仕方なく自分の名前を言う。それを聞いた少女は熟考す

る様に顎に手をやり、

「なるほどなるほど。色梨こゆり。

こゆり。こゆり、こゆり、こゆり。ゆりこ、リユーク……。いや、色梨……。色無し、色がない。……。無彩色——モノクロ。

うん。貴女は今日からノモロクちゃん」

「……ノモロク？」

「渾名。私だけの呼び名ですよ。おめでと。これで貴女は私のものだよ、ノモロクちゃん」

「は、はあ……」

なんか勝手に変な名前つけられて、自分のものだ宣言された。

なんだなんだこいつ……。何考えてんだか分かんねー。

「それでその……。ア、アンタは……。？一体、何者なのさ……」

今ならば答えてくれるかもしれないと思い、あたしは再度正体を問う。

すると少女は胸を張り、これまた絶句するような答えを返してきた。

「ふふ。聞いて驚いて下さいね。我こそは殺人卿。ウロボロスの輪で首を吊って時間を繰り返した、この世で最も特別で高尚なもの。即ち

——神様なんですよ」

「……か、神？」

「——そう。我こそは、神!!」

指を天に突き上げ、自信満々にそう言い放つ少女。

あたしは恐怖から一転、何言ってるんだろうとぼかんとしてしまつた。

いやだって、自分のこと神様とか言うの正直痛いし。

それに何処となく台詞自体が臭いし、何言ってるのか分からないぐらいカツコつけた言い回しが多いし。

……うん。はつきり言って中二病くさいんだわ。

それでいてノリノリでいってるのが残念さに拍車をかけていて、雰囲気台無しである。

「えーと。馬鹿にしてるわけじゃないのよね？」

あたしは確認のために、苦笑いを浮かべながら訊いた。

しかし、少女はその真意が分からなかったのか、笑顔を浮かべながら首を傾げた。

「……何で馬鹿にする必要があるんですかあ？」

「必要っていうか……。冗談を言っておちよくってるのかと」

「おちよくるう？——それこそ私を馬鹿してる」

「……!？」

急に少女の雰囲気が変わり、あたしは瞠目する。

ボールの奥で輝く少女の瞳は、それこそ温和のようであったが——そのガラス玉のような眼球には、底無しの闇が宿っていた。

…… “不快”。

ただその負の感情を、少女は膨大に闇の中に込める。しかしあたしはそれだけで腰が砕けそうになり、ぞくりと毛が逆立った。

「……我こそは神。特別。特別なんだーよ？それがあ？何で何でどうしてどうして、可哀想なお前にににに、同情？下に見る？」

……そう、私はだからこそ力ある!!故に、皆を救うのだ!!矛盾してるやつを救えるのだ。

それを救えないと。神じゃないから救えないとお前は言うのですか？」

「い、いや……。そんなつもりでは……」

「そういうつもりだろ？お前。私のこと、プリマドンナにもなれぬ脇役だ!!肯定、肯定!!塵芥!!私は特別じゃないってふざけんな!!抗議します!!バン、バン、バン、バン!!」

少女は訳の分からないことで癩癩を起こし、バン、バン、と言う度に、演壇に握り拳を叩きつける。

相変わらずこっちの話の聞きかたやいな。あたしは、一瞬でも話が通じるのではないかという希望を持ったことに今更ながら後悔する。「……ふう。叩きつけすぎて痛いよ。痛すぎるよお。これも全部私のせい。私が何も持ってないせいなんだ。ごめんねごめんよ、私い。えーん!!」

……もーしょうがないなあ。私ったら泣いちゃってみつともない。

頭を撫でてあげるよ。えー子供っぽすぎるう、それでも良いの、よしよしよしよしーふええ!!何でなでるの!!でも落ち着いた。ありがとうー!やはり我こそは、我らこそは神なり!!」

少女は泣いたと思ったら、次の瞬間優しげに笑みを作って自分の頭を撫で、大袈裟なりアクションで照れると、最後にお礼を言っ自分
のことを神だと声高に叫んだ。

そのころ変わる行動には何の脈絡もなく、理解不能だ。

おまけに、自分で自分と会話しているマジキチっぷり。

……こいつは、狂人どころかマジもんの怪物だ。自分の中だけで自分が完結してる。

「よしよしよしよし、よーよしよしよし。ようやく私のおかげで落ち着いたあ。そう!!落ち着いたところでえ、貴女をサクツと救っちゃいまーす!!コングラッチュレーション!!一回回ってピース!!イエイ!!」
本人曰く落ち着いたはずなのだが、むしろ異常なテンションではしゃぐ少女。まるで服を自慢するかのようターンをしてみせ、目の横であざとくピースなんて決めてみせる。

……その異常行動についていけない。それに、何を話してるんだかさっぱり分からないし。

「救うってどういうことなのよ……」

最早、意思疎通できることを半分諦めながら質問する。だが今度は、少女はさつきと比べればいくらかまともな返事をしてきた。

「私ってばね、この通り誰よりも高尚なのです。つまり、時間を繰り返し繰り返し繰り返し抜いた私の悲願は、矛盾した人を救うことなのです。」

故に、私は貴女を神として救うの。『天才』で可哀想な貴女を、凡人で空っぽな私が救ってあげる」

吐き気を催す言葉を平気で言っ、壇上から見下すように、にこりと少女は微笑む。

——それは、唾棄すべき理論だった。

こいつはあたしを救うと言っているが、それは究極的には自分のためだ。

空っぽで何も無いから、あたしを助けることで自分の価値を上げようとしている。

そしてそんな自分を高尚だの神だの称しているのだ。

歪んだ承認欲求と肥大化した劣等感。こいつの中には、それしかない。

あたしはその狂人らしい思想に、言葉も出なかった。途方も無い嫌悪感が湧き上がり、それを上手く言語化出来なかったのだ。

「ア、アンタ、あたしを救うっていつているけど、具体的にはどうやって救うつもりなのよ……」

やがて震える声で、その救いの手段を問う。

少女はあたしを観察するようにじーと見ると、しばらくしてから演台の上にある本を手に取り、ページを開いた。

「——暗黒教典、教義その一。

矛盾している人は、可哀想な人です。自ら思いを蓋をし、自らの手で首を絞め、自ら鎖で自分を封印する。そんな生きにくい道を選んで、いる人が、矛盾している人です。そういう人は塵芥であり空っぽで、自分がないから他人を求めずにはいられません。つまりこの世で最も惨めな人なのです」

朗々と読み上げる少女。

その「声」は魅惑的な程に響き、心を鷲掴みにする。

嫌悪感しかないのに、視線なんて逸せない。

「繰り返してください。矛盾している人は、可哀想な人です」

彼女は復唱を要求する。

途端、プレッシャーが重圧を増して襲いかかり、自然と口が開く。

あたしは恐怖心から、素直に少女の言うことを聞いていた。

「……矛盾、してる人は……、可哀想な、人……です」

「惨めです。塵芥です——空っぽです」

「惨め……です。塵芥です……か、空っぽ、です」

最後の方では少し擦れ、消えるほど小さな声になる。

自分のことを、自分で悪くいうように強制される。そのことのとんと屈辱的なことなのか。

あたしは涙腺にこみ上げてくるのを必死で我慢し、なんとか平静さを保った。

しかし、少女はあたしのその様子に舌舐めずりし、面白がるような調子で揶揄う。

「ちよつとー、何で泣きそうなんですかー？もしかして貴女、強気のよううでいて結構弱気なタイプなんですかー？リノと真逆のタイプ？かわいー、かわいそー。私と同じくらいかわいそーで惨めちゃうん、何ですからー」

「あ、あたしは……、惨めなんかじゃ——」

「——ない、なんて言い切れませんよね。だって貴女、愛されたいのに愛が信頼できないんですもの」

あたしが言い切る前に、少女は言葉を被せた。

誤魔化していた部分。心の弱い部分を曝け出していないのに、少女はそれをピタリと言い当てたのだ。

その衝撃で、体が硬直する。思わず息も詰まった。

「どうしてそれを……」

「見ましたから。いえ、実際に見た訳じゃないんだけどね。教えてもらいましたから、〃私〃に。ええ、ええ、ええ、ええ。神である〃私〃は何でもお見通しなんです。その矛盾も、惨めさも、ぜんぶぜーんぶ！

畜生、畜生ですよ、〃私〃のやつはー」

可愛らしく頬を膨らませる。

それに頭が痛くなりそうだった。意味不明な事ばかり言って、全然望んでいる答えを言ってくれないからだ。

「でも本当にノモロクちゃんは矛盾していて可哀想で惨めなやつですよー」

少女はそう言うと、心底哀れそうにこちらを見てきた。

ベールの奥にある瞳の闇は一層濃くなり、その目元は愉悦で細められる。

「貴女は小さい時から、周囲に馴染めなかった。話しかけてもどもつたり、勢いで突っ走って自分の拘りを押し付けてしまった。

それ故に嫌われて、ハブられて、その原因も小さかったからよく分からなくて。

貴女には、さぞ周りが理不尽に思えたでしょうね。

そんなどうにもならない世界で、好きでいてくれるのは家族だけ。家族という時だけ、貴女の世界には色がついていた。

しかし、それ以外はすべて灰色。偽物で嘘の世界。その世界に合わせるために、貴女は心を閉ざした。

どんなにハブられようとも、どんなに周りとか合わせようとも、どんなに好き勝手に扱われようとも、貴女は自分の意思を出さなかった。

ずっとずーと、辛くて助けて欲しくて泣いていたのに、ね？」

「……、それは——」

「分かりますよ。認めちゃったら、押しつぶされちゃいますもんね。だって、望んだら望んだ分だけ絶望した時の反動も大きくなりますし、望む事自体に貴女は疲れている。何より自分が嫌いでももんね、貴女。無意識に救われるのは間違いだ！ってどっかしらで思っちゃってたんですよね？むしろ消えた方がマシだって。

でもそうやって追い込んだ周りに対する怒りもあって、死ぬに死ぬなくて。妹に迷惑をかけてでも、心を偽る事でしか生きる生き方も分かんず。袋小路に自分を追いやって自縄自縛。……生きづらい人だねえ」

「そしてそんな自分を変えたいと思って魔法少女になったのに。ようやく入理乃という希望を見出して、灰色だらけの世界に色がつき始めたのに。今度は家族をなくして入理乃に裏切られた。

灰色どころか、世界は真っ黒になった。

ぜんぶゼーんぶ真っ黒の虚構の世界。そこで心を閉ざしたとして、一体どこに行けばいいの？

チームを組む？サチと仲良くし続ければいいの？分からない。それでイライラして癩癩を起こして叫んで周りに迷惑をかけて、本当にクズなんだから。サイテー。けどどうしようがないじゃん好かれたら裏切られるかもしれないし。

本当理解できない。何もしてあげてないのに何でサチはあたしに構うの？嫌われてきたのに今更あたしのこと好きな子が現れるはずがない。どうしてどうしてどうして？

救わないでよ。自分なんて嫌いだから、救われたいとも思っちゃいけないのよ。

だけどね、愛して欲しいの。心から愛して欲しい。救って欲しいの。それに、この状況って酷くない？そんなにあたしって責められるべきなの？なんでみんなあたしを排除しようとするのよ。あたしを見るよ、あたしを愛せよ。あたしのせいにするなよ。あたしが全部悪いのか？悪いだろうさ、悪いだろうとも！だって化け物だもんね！簡単に愛せよとか言うんじゃねえ！それともなんなのか。すべて被害妄想なのか？分からない分からない分からない分からない分からない——愛がなんなのか、分からない」

「っ……」

暴かれていくあたしの過去。記憶。思い。

すべて当たっている。当てられた上で、刻まれた傷をジクジクジク焼かれた。

そんなの認めたくないのに。

だけど、だけど、あたしはただ、ただ、ただ、ただ、ただ——

「何でこんなに惨めで、空っぽで……」

「そうです。貴女は矛盾してて、可哀想で、惨めで、塵芥です。空っぽなんです。それを再確認できましたかー？」

「……………」

「直視しろ。その矛盾を。疑問を抱け。苦しめ。矛盾。空っぽ。塵芥が。私のように、時間を回って苦しめボケカス。」

——愛してほしいって、さっさと認めろよ」

少女の放つプレッシャーが質を変えて、また襲いかかる。

瞬間、体の力が抜けていく。

ぐるぐるぐるぐる、万華鏡のように頭の中で何かの文様が浮かび上がり、回る。嘘という揺籃に閉じ込められていた感情が放たれていく。

認める？何を？どうやって？矛盾、空っぽ、あたしは……、

「愛して、欲しくないけど、愛が欲しいですう……」

気がつけば漏れ出す、心の奥底からの願望。

あたしは涙を瞳から溢れ出させ、感情のまま話す。

「寂しいんです。愛して欲しいんです。どうしようもなく愛が欲しい。でも愛が、愛が怖い。分からない。何をやれば良いか分からない。苦しい。助けて。助けて……」

「分かりました。助けてあげます」

縫り付くあたしの求めに、“神様”は頷いた。

あたしは闇の中に光明を見つけ出したときのような心境になり、瞳に輝きを宿す。

「本当……？」

「本当ですよ」

「——あ、ありがとうございます!!」

手に持っていた硬鞭を落とし、飛び上がらんばかりに喜ぶ。

麻薬に侵されたみたいにもうでも良くなるくらい嬉しい。

ああ、ああ、ああ!!ありがたい、ありがたい!!

あたしずつと苦しかったの!!もがけばもがくほど、状況が悪くなるばかりでさ!!

でも神様は、そんな状況からあたしを救ってくれるんだ!!あたしを解放してくれる!!この自縄自縛の苦しみから!!

どうにもならない現状から、嘘まみれの世界から、あたしを助けてくれる!!

「お願いします!!ぜんぶぜんぶ、目の前が真っ黒なんです!!だから、今更あたしもどうなってもかまいません!!どうか、どんな手段でも良いからあたしを愛して救ってください!!」

「……ああ、その矛盾。その惨めさ。本当に、私好みの可哀想な人ですよ。特に自分がないっていうのが共感できて非常に良ポイントだよ。……思う存分、一切の容赦なく、救ってあげますからね」

「わーい!!ありがとうございますー!!」

半狂乱になりながらお礼を言う。それくらい感謝して感謝し尽く

さなければ!!

自分なんてどうでも良いや! どうでもいいの!! どうでもね!! 愛してくれさえすれば良い!! 神様ね、そんなあたしに愛をくれるって!! 世界は色とりどりになるよ、やったー!! やったー!!

「ふふふ、喜んでくれて何より。じゃあ、他の皆様も、ノモロクちゃんと一緒に救われちゃいましょうか」

小躍りするあたしを前にして神様は微笑まれると、パチンと指を鳴らす。

すると神様の背後――ステンドグラスに浮かぶコウモリのマークから、次々と人影が出てきた。

それは年代もバラバラ、服装もバラバラな、十数名の老若男女だ。その中には、コウモリの結界の中で見たサラリーマン風の男性二人や、あの幼い少女そっくりの若い女性の姿が見える。

皆、あたしのように喜色満面の笑みを浮かべ、涎を垂らしていた。本能的に理解する。彼らはあたしの同志だ。矛盾で苦しむ、自分の意思が出せない人達。

「けどね、けどね、もう大丈夫よ。貴女達も救われる。神様が救ってくださるもの!!」

「神様選ばれたのね。おめでどう!! おめでどう!! おめでどう!!」
パチパチパチ。

拍手を送る。彼らも拍手を送り返してくれた。
心が繋がった気がする。嬉しい嬉しい嬉しいなあ。

「皆さま。どうぞ席におつきください」
「はーい」

神様が壇上で、手をひらげて仰る。

この場にいるあたし達信徒は行儀良くお返事を返すと、並べられている木の長椅子に座っていく。

あたしはせっかくだから、右にある一番前の席に着いた。
だって、こっちの方が神様のお声がよく聞こえるもの。

「さて。本日は皆さま、私、殺人卿のチケットを受け取っていただきありがとうございます。よくきてくれたね。可愛い可愛い馬鹿な信者

達」

神様は演壇の前に移動すると、周りを見渡し、化け物のように笑われた。

あたし達はもうそれだけで感涙だ。隣の人なんて、神様のご慈悲に感謝をと叫んでいる。

「私は神!! 私は誰よりも優れ、誰よりも秀で、誰よりも力があり、なにより誰にも負けない! 私はこの世で最も特別で高尚な存在!! つまりあのクソ兄貴より上!!」

私は貴女達を踏みにじり、救う!! はい、喝采!!」
ワー!!

あたし達は声を上げて神様を称える。全身全霊で、血反吐を吐くぐらい、呼吸を忘れるぐらいに!!

救われるぐらいなら何でもします!! このくらいで死んでも構いませんとも!

「この饗宴にて狂いましょう? 狂えば狂うほど、私の価値は上がる!! 私の空っぽな器は、貴女達の血でしか満たされないので!!」

神様は持っていた教典を演台に乱暴に叩きつけると、あたし達へと指を突きつけられた。

「私は命令する!! 復唱!!」

暗黒教典教義その一、矛盾している人は、可哀想な人です!!」

「二矛盾している人は、可哀想な人です!!」

「惨めです。塵芥です——空っぽです!!」

「二惨めです。塵芥です——空っぽです」

あたし達は声を揃え、神様の言うことを繰り返し、繰り返し、繰り返した。

頭がぼんやりしていく。直前の記憶があやふやになっていった。

ああ、あたしは何をしていた? あたしはなんだ? あたしはあたしはああああああああ——

「ああ、悩める人達。貴方方は本当に本当に、可愛そうな顔をしていますねえ。自ら思いに蓋をし、自らの手で首を絞め、自ら鎖で自分を封印する。そのことのなんと生きにくいことか。貴方方は矛盾の権化

と言えるでしょう」

舞台上にでも立っているかのような、大仰な口調。手を広げて、まるで踊るようにくるくる回っている。

万華鏡みたいに、世界もぐるぐる、ぐるぐる。

気が緩み、パカって、思いを閉じ込めていた心の箱が開く。あたしは手で顔を覆って、その思いを面に出した。

「何であたしは……。あたしは、ああああああ、愛が、愛が欲しい……。なぜ選べない。意思を貫き通せない。あたしは……。あたしはア……」

イキテルカチ、ないんじゃない？

アイサレルカチ、ないんじゃない？

そうだよ、そうだよ、きつとソウダヨソウニキマツテル！

マワリニメナムケルヨウモノ!!マワリガ怖いもの!!

「ぜんぶぜんぶ、夢なら良いのに。ぜんぶ嘘なら嘘なら、嘘にして仕舞えば……。!!逃げれば逃げ続ければ……。あたしは絶望せずに済む……。!!」

世界に色彩がないのなら、あたしもいろを失おう。

アイサレルカチがない。アイする世界はない。この世界に、あたしの居場所はどこにもない!!

「ああ、さゆり、さゆり、さゆり、さゆり。助けて、どうしたら良いのさゆり——」

求めてやまない妹の名前を連呼する。

周りの人たちも、それぞれ大切なナニカヲサケブ。

クウカンガかなしみで満ちていく。ジゴクノヨウナ阿鼻叫喚。一回回ってハッピーハッピー。ピースをしたくなっちゃう。

ウフフ悲しい哀しいかなしいなあ。空っぽ矛盾矛盾目のシズクがわずらわしいのああああああ、ハッピーハッピー嬉しいナアかなしいなあ泣きすぎておばあちゃんになっちゃいそうよウフフフふふふ。

「分かります、分かります。貴方方の苦しみ、よく分かりますとも。私もそうでしたから」

嘘臭い演技で泣き真似をするカミ。なのに、リカイされたようなキモチナル。

ウレシイ、嬉しい、うれしいヨオ。

皆、泣イチャってるヨオ。隣のヒトなんか、モウスゴイ……。

皆、カンセイアゲテル。アタシモカンセイアゲテル。コエハリアゲテ、アゲテル……。

「この苦しみが、永遠に続くのは耐えきれませんよね？この苦しみが、永遠に続いて欲しくありませんよね？」

声がひびく。アタシはウンウンうなづいた。もうクルシミタクナイ。

「苦しみから逃れる方法は一つしかありません。それは命を断つこと。肉体を滅ぼせば、魂は救われる。何故なら魂は自由だから」

フワン、グワン、ぷワン。

ミミナリガひどい。何かがアタシの頭を揺らし、陶醉サセテイル。

メノ前が真っ赤つか。夕日みたいに真っ赤つか。

「その手段を貴方に授けましょう」

フイにポケットの中がヒカツタ。気になってポケットにテヲ突っ込んで光ってるモノを取り出すと、ソレはチケットだった。

コウモリの魔女のケツカイでもらった、あのチケット……。

マワリノ人も、同じようにポケットなどからヒカリカガヤクチケツトを取り出して注視して居る。

そうして皆が見守る中、チケツトは光りな蛾ら楚の姿を変え、や画で——一振りの包丁となった。

「うわああ……」

ナンダこれ。怖い。ウレシイ。きれいすぎて、思わずカンタンする。ミンナうつとりした顔で包丁の柄ヲナデタよ。

「さあ命を断ちましょう。死は唯一にして至高なる救い!!死者の私が与える、生者への復讐。さあ、ぐさつと刺しちやっつてえ!!さあ、さあ、さあ!!」

神様は大声を張り上げ、アタシ達に命れいする。

すると動きだすカラダ。あた死もミンナも包丁をモチ上げ、そのム

ネに刃をむけ溜。

これで終わりだ。これで、あたしの人生がお和る。ようやくオワレル。

……矛盾矛盾矛盾空っぽ空っぽ空っぽ、もう疲れた。救われたい。救われないなら、イツソシンダホウガイイよね？

「さゆり、さゆり、さゆり、イマイクカラネ!!」

けたケタケタ!!

笑いながら、救いを信じながら胸に刃を突き立てル!!

こうしておしまいお終い——

「なんて、させてたまるものですか」

——その時、突如として何処かから声が響いた。

次の瞬間、胸に到達しそうだった刃が止まる。見ると、床から生えた三本の鎖があたしの腕に絡みつき、その動きを拘束していた。

驚いて目を見張り、同時に一気に明瞭になる思考。

周りを見ると、包丁をその身に突き刺そうとした人達の腕も、あたしと同じような形で拘束されて、自死を防がれている。

「これは——」

一体何が起こったのか分からない。自分が何をしていたのかすら、上手く理解ができない。

しかし、ステンドグラスの反対側。そこから聞こえる人物の声だけははっきりと分かる。

「……危ないところだった。間に合わなかったらどうなっていたことか。久々に肝を冷やしたよ」

背後に視線を移す。

開け放たれた扉。その前に立つのは高校生ぐらいの少女だ。

オレンジ色の髪をツーサイドアップにし、ミニハットに黒いドレスにを身に纏っている。

彼女はらしくなく仁王立ちし、その手にある大きな鍵を「神様」に向けて、

「——調停役、古金歌羽として、牛木草の魔法少女を殺そうとした貴女をこれから排除させてもらう。うた、これでもおこりんぼだから容赦

しないよ?」
そう言っで、絶対零度の瞳を細めるのだった。

ファイル・イン

「調停役……？」

武装を向け、黒の少女を睥睨する歌羽。

その歌羽の名乗りの意味がわからなくて、あたしは呆けてしまった。

それどころか何が起こったのかすら把握ができず、さっぱり頭が追いつかない。

なんせ、一変に色んなことが起こりすぎだ。

歌羽は突然現れるし、黒い少女は変なことばかり言うし、それになんかあたし、いつの間にか包丁持って自害しようとして……、

「……って、ちよつと待ってよ。何よそれ……」

直前の記憶がフラッシュバックし、あたしは自分がやっていたこと、考えていたことに戦慄する。

あたしはさつきまで、本気で「神様」を崇め、死が救いだと信じ込んでいた。

そんなこと一度も思っただけなのに、無理やり意思を歪めさせられていたのだ。

そうして、あたしは歓喜しながら本気で自死しようとした。何の迷いも、恐怖もなく。

……まともじゃなかった。

何が救われるだ。こんな形で救われるか。

神様だのなんだのも馬鹿らしい。

アレがこの世で最も尊いとか、笑えない冗談だろ。アレはただこつちを僻んでマウント取ってくる、尊厳を踏みにじる化け物じゃないか。

そして一番おかしかつたのが、異常を異常だと思えなかったことだ。

あたしはあたしと同じように狂っていた周りの人を、称賛し、喜んでしまっていた。

本当は止めなきやいけない悍しい光景だったのに。それを抵抗も

なく受け入れていた自分が、いかに狂っていたことか。

普段の思考に戻って、それがよく分かる。

「うぐ……、うおえ……」

狂っていたことを自覚したせいか、気分が急激に悪くなる。

直後に胃液が逆流し、あたしは堪らずそれを吐き出した。

見るに耐えない汚物が床にぶちまけられる。

あたしはそのまま俯むいて荒い息をすると、また二、三回、我慢できずに咳き込むように吐いた。

「ごほ、ごほっ!!はあ、はあ……。この……」

そこまでしてようやく顔を上げ、あたしは「神様」を睨みつける。

そうしなければ、自分の恐怖で今度はまた別の狂気に囚われそうだった。

しかし黒の少女はあたしに目を向けない。自身の正面にいる歌羽にばかり真っ直ぐ顔を向けていて、不気味な笑みを浮かべている。

「また空っぽ。矛盾。してる奴現れて嬉しい。でも救われにきてくれたんですね?この神に!!ありがとー。どういたしまして。見下させて見下して、踏み潰すみたいに救うよ救ってあげるよ?ウフフフフヒヒヒ、アハハハ?」

自分の目論んだことが邪魔されたにも関わらず、黒の少女は上機嫌だ。訳の分からないことを言いながら、歌羽を歓迎している。

当然歌羽は不快そうに表情を歪め、その正体を少女自身に問う。

「貴女、異質な魔力してるけど何者なの?……魔女?魔法少女?どっち?」

「よくぞ聞いてくれました!!私私私私は、神!!神神様!!高尚で、特別で、この宇宙を、時間軸を守る神!!高尚で特別な「神」なり!!」

「……やばいな。うた、ここまで狂ってる奴見るの初めてだよ」

手を叩いて神と名乗る化け物の狂態に、歌羽は苦笑いを浮かべた。相対しているだけで、少女のプレッシャーに圧されているのだから。

顔には僅かに冷や汗が浮かんでいる。

しかしそんな状態でも、恐らく無駄だろうと分かっているながら、

「ここに居る人たちを、さっさと解放して」

と、厳しい目で長椅子に座っている人たちを見渡した。彼らは未だに涎を垂らし、陶酔したかのように目を虚にさせている。

まだ黒の少女の支配から脱していないのだ。

……これは推論だが、多分魔法少女であるあたしと普通の一般人では抵抗力が違うのだろう。

じゃなきゃ、あたしだけ正気に戻ったことに説明がつかない。

「どーして？何で何でだろ〜？わかんないなあー？貴方の言うこと全然意味わかんない。皆、高尚であり特別な私の信徒になっているんだよくん？つまりハッピーはピース、ワンダフォーな訳ですよ？皆幸せなんです。それをぶち壊せと〜？そんなの非道ですよ酷いですよ。どういふつもりなんですか？ヒヒヒヒ？」

壇上で少女は首を傾げる。

どうやら質問の意味を分かっているながら、歌羽をおちよくっているらしい。悍しい理論を並べてながら嘲笑い、見下すように哄笑を上げている。

「こんなの幸せでもなんでもない。ただの気持ち悪い洗脳だよ。反吐が出る」

だが歌羽も負けずに、毅然と言い返す。そしてぐっと眉間に力を入れて黒の少女を睨みつけ、

「うた、お前みたいな高尚だの特別だの自分で言う奴、気に入らない。そしてそれを免罪符に救ってやるって言ってるのも気に入らない。そんなの痴がましいにも程がある」

「……はア？」

黒の少女は先程とは違い、今度は本気で訳が分からなそうな声を出す。

歌羽はそんな彼女に対し、嘲笑うように、あるいは侮辱する様に言葉突きつけた。

「だってそうでしょう？お前、都合の良いように他人を動かそうとてずつといい訳言ってるだもん。まさに空っぽで、矛盾した言葉だよ。」

……何が救いだ。それはただの偽善で、マウント取りのための詭弁だ」

堂々とした態度を貫く歌羽。

少女は歌羽をじつと観察しながら、やがてまた、理解できないとばかりに質問する。

「またまたア、どういうつもり何ですかア？そんなこと言っただよねえ。神である私は特別。故に、みんなを救うのが悲願であり存在意義。そんな私に、頭を立れないとは如何程のことか。挙げ句の果てに救いすらも否定するなんて。」

貴女だつて空っぽで矛盾しているのに、救われたいと願わないの？神が救つてあげるというのに、有り得ない。馬と鹿、合わせて馬鹿なんですか？」

「……そうかもね。だけど、さっきも言った通り、矛盾だらけで空っぽで、それを盾にしているお前のごとがうたは嫌いなんだよ。そんな奴に助けて欲しいとは思えないね」

マジシヤンの格好した少女は、臆することなく軽口を叩いた。まるでお前になんか負けないとばかりに。

「うた、お前の言うような偽物の救いはいらぬ。そうやって何かに縋つて、もう自分の意思を誤魔化すようなこともしたりしない。自分の中の矛盾も、空っぽさも、全部受け止けとめると決めたの。うたの救いは、うた自身がこの手で作り出す。お前なんか幸福を決めつけられてたまるか」

歌羽ははつきりと、自分の思いを宣言する。

そんな彼女に、あたしは衝撃を受けた。

歌羽はまったく怯えていない訳じゃない。むしろかなりの恐怖を感じているようで、遠目から見ても震えているのはよく分かる。

しかしその上でそれを跳ね除け、歌羽はあたしが出来なかつた拒絶の意を、はつきりと示してみせたのだ。

すごい、と素直に思った。

あたしは今まで何も意志を出せなかつた。出せてこなかつた。

今も出せているのかどうか自信はない。いつもいつも自分に嘘を
ついて、惨めに生きている。

だが、歌羽は恐ろしい相手を前にして、自分を曲げなかった。

その姿はまさに、あたしが契約の時に願った理想そのもので。

そこにどれだけの心の強さがあるのだろう。

……きつとあたしには、それは持てない。あたしなんて、ずっと
ずっとこのままだ。

「……………意味が分からない」

歌羽の気迫に圧されたのか、絶句したようにそう呟く黒の少女。頭
を抱え、戸惑ったように頭を振り続ける。

「私は高尚で特別なはずなのに、どうして空っぽとか矛盾してるとか
言われなきやアいけないの？ 私は塵芥じゃない、私は偽物、本物なの
よ？ 故に神なのに!! 猿真似？ すべてでない尽くして草が生える。

……それは私じゃねえよ理解しろよ……。 縫れ縫れ縫れ縫れよ意味
わかんねえよ何でお前ばかりお前ばかり持つててずるい!! 私に
は何もない何も無い平凡で平凡で平凡で得意なこと何一つ
ないし、強い心も体も技も信念も魔法も歪みも狂気も愛も何もないあ
るのは矛盾と空っぽさと無為に積み重ねた努力だけああどうしてお
前のような馬鹿で愚鈍でとろくて私より劣っている奴が何かを手に
している欲しい欲しい渡せ渡せ渡せ渡せ渡せないなら死ねよマウン
ト取らせろふぎけんな死ね死ね死ね死ね死ねどうして私ばかり無
理なのよ意味がわからないこんなに頑張ったのに誰も褒めない絶えな
いずるいずるいずるいずるい

うん。落ち着ついて落ち着きなさい。そんなの君が言うことじゃな
いよ。僕とは違って君は高尚なんだから。特別なんだから。自由な
んだから。何をしたって良いんだよ……。

……うん。さっすが結^{ゆえ}さん、良いこと言うねえ。そうだよ私は神だ
よ特別で高尚なんだよ!! 故に私は皆を救わなければならぬ!! 何度
繰り返すことになっても、私は私しかない!! つまり私には次がある
のだから!!」

黒の少女は高らかに叫ぶ。観客に向かって、まるで演説でもしているみたいに。

しかしそれはすべて、自分にしか言っていない。彼女は一人芝居しかしていないのだ。

そうして勝手に取り乱して勝手に落ち着くと、

「いやいやいや、私に心を向けないなんて、可愛そうな人ですねぇ」

心底憐むように、困ったような仕草を試みせた。

「私を見ろよ私を崇めろよ。嫌だよいやよも好きのうちと言いますけれども、矛盾、空っぽ、塵芥なれば、私を見つめるは必然、この世の法則じゃねーのかよ。そんなんじゃ救われないよ？救われるのが最大の幸福で、最大の福音、そのままだと地獄に落ちて煉獄の炎に焼かれます。そうなる前にあたしに心を差し出せば、それだけけけけ結果、天国行きなのにー。何が悪いの意味わからん!!」

歌羽の態度に気に入らないものでもあったのだろう。

黒の少女は露骨に残念がりながら、しかし不満をたらたらと垂れ流す。

その様は実にわがままな子供そっくり。見ているだけで彼女の器の小ささを嫌でも理解させられる。

「神である私は高尚。高尚たる私は神であり故に皆を救わなきやいけないし見下したいのよ。私と私と私の四人に向かってそんな暴言は冒涇!!崇め方が足りないんじゃないの？頭をたれろよ、たれなさいわよ？イヤイヤイヤイヤイヤー!!」

化け物はぶんぶんと首を振り、随分とご立腹な様子で癩癩を起こした。

そうして、だん、と強く足を踏み鳴らすと、壇上から歌羽へと手を向ける。

刹那、放たれたのは圧倒的なプレッシャー。

あたしは頭が真っ白になり、息を飲む。

このプレッシャーを食らえば、歌羽とてひとたまりも無いだろう。

なんせ、一発であたしはおかしくなったのだ。歌羽も同じようになるに違いない。

逃さなければ、と思考が回転する。

だがすぐに、どうやって逃すだとノイズが走った。

プレッシャーを直に当てられていないとはいえ、あたしもまだ少し影響化にはあるようだ。

動きたくても恐怖で動けない。動こうとしただけで気がおかしくなりそうになる。

あたしにできることは、もう彼女の名を叫ぶことだけだった。

「歌羽!!」

「くう……っ、これは……」

なす術なくプレッシャーに晒され続ける歌羽。マジシャンの魔法少女はその重圧に苦しげ呻き、膝を折られそうになる。

少女はその様を面白がるように哄笑。さらに歌羽の存在自体を押しつぶすようにプレッシャーの質量を上げる。

「フッフッフひひひハハババ!!これで!!お前も信徒に——」

「——サチ、柘榴。やって」

その時、苦悶の表情を浮かべる少女の唇から、聞き覚えのある名が滑り出した。

途端、この場にて目を疑うような現象が起きた。

「は——?」

突然のことに惚けたのか。

背後の気配に振り返った黒の少女は、声というより空気を漏らすように息を吐き出した。

いつの間にか現れたのか、彼女の後ろで小柄な人影がニヤリと笑っていたのだ。

「吹き飛ば、このクソボケ変態!!」

その人影——否、水兵の魔法少女はそう悪口を黒の少女に浴びせると、持っていた身の丈ほどもある錨を振るった。

爪が黒の少女を真横から殴りつけ、その身をくの字に折れ曲がらせる。

そうして水兵の魔法少女は勢いそのままフルスイング。黒の少女は恐ろしい勢いでぶっ飛ぶ。

と、そこへ――

「こんなこととして酷い。私超怒ったんだからね」
棒読みの声が空間に響き渡る。

瞬間、瞬きのうちに生み出された白い光が編まれて矢となり、吹き飛ばされる黒の少女目掛けて突っ込む。

それが一瞬のうちに五回。

矢は黒の少女の胴体を、首を、手足を穿ちながら食い込み、同時に壁に突き刺さって黒の少女を貼り付けにした。

「ぐぎゃあ!!」

化け物のくせに、人間らしく赤い血を口から漏らす黒の少女。
痛みのためかピクピクと痙攣し、戸惑いの目を歌羽へ向ける。

「アヒ……? お前ババババ、何、を……? 幻覚……?」

「ちよつと違う。うたはただ、固有魔法の精神操作――いや、洗脳”を使って、貴女達の視覚内にいるこの子達を”意識”させないようにしてただけだよ」

歌羽は壇上へ視線を移した。

そこには、二名の魔法少女がいる。

一人は小学生ほどの、小柄な水兵の格好をした少女。

もう一人は赤い髪を腰程までに伸ばした、植物をあしらった衣装に身を包む少女だ。

彼女は無表情ながらも胸を張り、手に持った円状の石板を抱いている。

二人とも、本当に奇妙だった。まるで初めからそこに立っていたかのようにしているのだから。

……いや、実質その通りなのだろう。

歌羽の言葉を信じるなら、あたしと黒の少女は、歌羽の固有魔法によつて間違つた認識させられていたのだ。

二人を見ていながらも、それは”見えていない”のだと。

そうしてそれを利用し、歌羽は二人に奇襲を仕掛けさせた。

あたしにも固有魔法をかけたのは、単純にその反応からバレルのを防ぐためだろう。奇襲を成功させるためには、徹底的に相手を欺かな

ければ意味がない。

そして歌羽一人で突入したように見せかけ、黒の少女と長話をしたのも、その一環だろう。彼女は自分に意識を集中させ、さらに二人から「意識」を逸させた。

恐ろしいくらいに計算されつくした策だ。ここまで来るのにそう時間はなかっただろうに。

……思った以上に、古鐘歌羽という少女は頭が回るらしい。

「——認識しようという意志をあえて弱め、意図的に視覚に盲点を作り出す。そしてその盲点は他の情報によって補われ、本人はそれに気づけもしない魔法。名付けて、フィル・インってね。……うた、言った筈だよ？おこりんぼだから、容赦しないって」

「……アアアアアア!!このクソがアアアアアア!!」

笑う歌羽に、怒りの咆哮を上げる黒の少女。しかし光の矢によって壁に縫い付けられているため、もがくことすらもできない。

「よいしょっと!!」

掛け声一つ、歌羽は鍵で床を軽くつく。刹那、周りに鉄格子が出現。驚いて四方を見渡せば、並べられた長椅子を取り囲みように、巨大な鳥籠が二つ、左右それぞれに出現していた。

恐らく結界のようなものだろう。それを歌羽は瞬時に作り上げたのだ。

「サチ、柘榴」

流石にこれだけ大きな檻を作ったのもあって、負担もかかったのだろう。

歌羽は若干苦しそうに手を上げ、再度合図を出す。

すると壇上にいたサチと柘榴は、それぞれの武器を掲げた。

歯車が動くような音がして、サチの持つ錨の形状が変わってゆく。爪は折り畳まれ、柄の部分も太く変形。あつという間に立派な長銃へ変身する。

一方柘榴の石版は何も変わっちゃいないが、その前に集う虹色の光は、目も眩まんばかりに周囲を照らしている。

そこに込められた魔力は、尋常じゃない程膨大だ。

「穿て!!」

「スペクトル・ビーム……!!」

二人が同時に叫ぶ。

銃から放たれた青の光線と、それぞれの色に分光して発射された七つのレーザーが、黒の少女目掛けて襲いかかった。

視界を眩い光が埋め尽くす。と同時に髪が大きく揺れた。光の余波で、すぎまじい風圧が発生したのだ。おかげでひっくり返りそうになり、体勢を保てない。

しかしこれでもまだマシな方だ。結界の外にある演題なんかは軽くぶっ飛び、そのまま壁に叩きつけられている。

……多分このことを想定して、歌羽は檻の結界を作り上げたのだろう。この光は一般人には危険すぎる。

「――」

やがて、ようやく風が収まる。あたしは自然と閉じていた目を開き――そして“それ”を見て、言葉を失った。

少女が貼り付けにされていた壁。その中央に、ぼつかりと巨大な穴が開いていたのだ。その大きさ、およそ七メートル弱といったところか。無論、穴の先にあつた木々もまるっと消失し、地面も大分抉れている。

少女の姿なんて、どこにも見当たらなかった。

「あ、アハハハ……」

あたしは乾いた笑みを浮かべる。

いやだつて、めっちゃやくちや怖えんだもん。至近距離だつたし。あれが当たっていたらと思うと、全身が冷たくなるわ。

「いやあく、綺麗なくらいぶっ飛んだなあ……。我ながら火力やばくない?もしかして天才なのかな、私」

「いや、調子に乗っているとところ申し訳ないけど、その火力大部分私のだから。テメエのなんて良くても三分の一だから。つまり、あの野郎やっつけたのほぼ私のおかげだから。てかなんだよスペクトル・ビームつて。なんか技名の名前ダサくない?」

「失礼だなあ。ダサくないよー。何せ一週間かけて頑張つて考えたん

だから」

「嘘だろ……。一週間もかけてあのレベル!？」

そしてそんな怯えるあたしとは違って、気の抜けるような会話を続ける穴を作った張本人達。呑気すぎて逆にムカつく。あたしが今どんな思いでいるのかわかってんだらうか。

「えーと……。大丈夫？」

入り口付近にいたことで、風からの被害を免れたのだらう。

五体満足のまま、歌羽はあたしがいる檻の前まで歩み寄ってきた。

あたしは彼女に軽口を叩いていいのやら、どうすれば良いのか分らず、「疲れた」とだけぼやいた。

「だらうね……。顔色悪いし。うた、もっと早くこれれば良かったんだけど……。ごめんね」

歌羽はあたしの状態を見て軽く苦笑。申し訳なさそうに謝ると、指を鳴らし、あたしの腕を縛り上げていた鎖を消してくれた。

あたしは立ち上がり、目の前の檻に出来た扉を開ける。そうして外に出ると、右側の側頭部に手をやった

「何だこれ……。どうなってるんだ……。？」

何故か酷く、頭がぼんやりしていた。

さつきまであたしや一般人を狂わせていた「あいつ」。それはとても狂っていて、とても怖かった筈なのに、何故かその姿を思い出せない。

その他にも、声や口調や性別、何を言っていたのという記憶すら、もやがかかっている。

思い返せるのは、「あいつ」がやったことだけだ。

「あいつは、何処に行った……」

あたしは改めて室内を見渡す。

壇上には、話しているサチと柘榴。そして吹き飛ばされて倒れている舞台。

二つの檻は左右それぞれに一つずつあり、長椅子を取り囲むように存在している。

……何処を見ても、やはり「あいつ」の姿は何処にもいない。影も

形もなく消えている。

あの光条に飲み込まれて、この世から完全に消滅したのだろうか。しかしそれにしてもあつきりし過ぎているような気がする。

「あいつ」の魔力は今まで感じたことがないくらい強かった。あの程度でやられるとはとても思えない。

「でも魔力反応がないし……。もしかして本当に死んだ……。のかな？」

手の中にあつた包丁は、いつの間になくなっていった。そして檻の中にいる一般人達も皆気絶していて、狂っている様子はどこにもない。それが「あいつ」の消滅のせいだとするのなら、一応の筋は通る。「いや、あいつ死んでないと思う。多分、逃げただけだろうね」

しかし、歌羽はそんなあたしの考えを否定する様に首を振った。

あたしはどうして、と目で尋ねる。

「何も思い出せない」からだよ。こゆりも、あいつのことぼんやりしてるでしょう」

どうやら歌羽も、あたしと同じような状態になっているらしい。厳しい顔をしながら、苦々しく答える。

「こうなったの絶対あいつのせいだろうし、そうすること自体、追いかけて欲しくないって言ってるようなもんじゃん？」

「まあ確かに……」

「それに、厄介なことに爆弾残していきやがったしね」

「……!？」

あたしはその発言に瞠目し、ステンドグラスの方を思わず見た。

そこにはコウモリのマーク——結界の入り口が浮かんでおり、禍々しい魔力を放っている。

まだ、驚異は健在なのだ。

「くそ、何でこんなことに。」

歌羽、色々聞きたいことはあるけど、ここは一緒に魔女を……!!」

「うん。でもその前に、はい」

「え……」

そう言っ手渡されたのは、黒い球体に針がついた物体、グリーンフ

シードだった。

あたしは戸惑いながらそれを受け取ると、本当に良いのか歌羽に聞く。

「あたしなんかに渡して良いの？そうする義理はないはずなのに」

「そうは言っても、今は戦闘力が一つでも欲しいから。こゆり、結構ジエムが濁ってるし」

「あ……」

そこで初めて、自分の白い宝石の輝きが、黒いもやに侵食されていることに気がつく。しかもその穢れは十分の八弱ぐらいまで溜まっ
ていて、あと一歩で真っ黒になってもおかしくなかった。

「一体いつの間に。そこまであたし、魔法を使っていないのに……」

「そうなの？一体何がどうなって……」

訝しくなつて首を傾げるあたしに、歌羽もまた意外そうな反応をする。そうして一瞬考えこむような仕草をした後、すぐ様首を振り、

「こんなの今考えてもわからない。とにかく、浄化して」

「え、ええ」

促されるままグリーンシードをソウルジエムに当て、あたしは穢れを吸い取らせる。

歌羽はきれいになったあたしの宝石を見て頷くと、壇上で信じられないほど無警戒に話す二人に呼びかけた。

「サチに柘榴。戦闘準備して。残された魔女をやっつけるよ」

「……ふえ？魔女？」

「柘榴、後ろ後ろ」

サチがステンドグラスを指差すと、柘榴がああ、と納得したように声を出した。

「よーし、なんか良く分かんないけど頑張るぞー。おー」

「棒読み過ぎるだろ。そんなんじや氣イ抜けるって。もつとこんな風に声はりげてみなよ。おー!!」

「うわ。確かにすごく元気良い。私もさっそく真似するよ。おー!!」

「声量上げただけで棒読みじゃん。全然何も変わってないよ!!」

無表情で握り拳を突き上げる柘榴。そしてそれに御本を示すサチ。

その様子にこつちまで毒気が抜かれる気分になる。こいつら本当、マイペースだな。

「……ごめんね。馬鹿二人が真面目にやらなくて」

「いやあ。そつちこそ、なんか大変じゃなかった？」

サチと柘榴と一緒にいるということは、ここまで彼女達と同行してきたということに他ならない。

つまり、あのやり取りが延々と繰り返されてきたのだ。

その心中は察して余りある。

「大変だったねえ。二人とも本当に腕白で……」

歌羽はサチと柘榴のことを思い返したのか、遠い目をした。やっぱりそれなりに苦労したらしい。

しかし、口元は浮かぶのは苦笑ながらも、どこか楽しそうなもので。

「——でもうた、結構そんなの嫌いでもない気がする」

「……」

「こゆり。矛盾だらけのうたでもこう思えたんだ。きつと貴女もそう思えるんじゃないかな？」

こちらを見ながら、歌羽は目を細める。

それがらしく思えなくて、あたしは呆気に取られた。

そうしている内にも、結界の入り口は歪み、周囲の背景は変わっていく。

歌羽はあたしの手を取ると、突撃していく前方の二人の少女を見て、

「行こう、こゆり」

そう再び、晴れやかに微笑んだ。

露見

コンクリートで出来た、丸みを帯びた天井

緑のスパンコールが敷き詰められて地面。そして無数の点在する木の梯子と、艶やかな女性の写真が貼られた看板。

そんな不思議で不気味な空間——結界。

そこにいる主は、コウモリの翼にタコの触手を持つ異形だ。機動力はない代わりにその触手の一撃は強力で、当たればあつという間にぶっ飛ばされて一般人なら即死であろう。まあ負けることはないと思うが、それでも十分注意すべき魔女であるとあたしは思う。

が、しかし、それも四人いれば話は違ってくるのだった。

決して皆弱いわけではないので、あたし一人で追い詰められた魔女など、文字通りタコ殴りに出来る。

おかげで、あつという間にコウモリの魔女は消滅したのだった。

……しかし不思議なことに、あたしはその戦闘中に違和感を覚えた。

柘榴とサチが、なんだかお互いのことしか気にしていない動きをしていたのである。

そして歌羽も、いつもより何だか無鉄砲になっているような気がした。

まるで、少し性格が変わったのかように。

それは実に奇妙な現象だったといえるだろう。このまま続いたらどうしようと密かに不安になったほどだ。しかしその現象は結界が消失してすぐ、衝撃的な歌羽の行動によって終わるのだった。



「おええええええええ!!」

結界が消え、礼拝堂内部に戻る。そうして歌羽がサチと柘榴を寄せて何らかの言葉を交わし、あたしに一言謝ってから三人揃って（サチは歌羽に連れられて、柘榴は二人に自ら付いて行った）外に出た瞬間、突如として餌付く声が響き渡った。

「え……うな、何？何なの……!?!」

いきなりのことで混乱し、あたしは数分硬直。その後、慌てて外に飛び出し、次の瞬間驚いて目を見開いた。

何とそこには、ぐったりとした様子で地べたに座る三人の姿があったのだ。

皆、具合が悪そうだ。サチはさつきから顔面を蒼白させているし、歌羽に至っては胃液を吐いたらしい。あまり見たくはないが、彼女の手には大きなビニール袋が握られており（恐らくサチのレプリカ精製の魔法で作られたものだ。多分これを作り出すためにサチを外に連れ出したのだろう）、それが妙に臭い匂いを漂わせていた。

一番マシンなように見える柘榴でさえ、歌羽の背を摩りながらも俯いており、微妙に苦しそうな表情をしている。

あまりの変わりっぷりに、あたしは動揺して再度固まった。しかしそのままでもいられず、

「……だ、大丈夫?」

と心配しながら、あたしは三人に近寄って声をかける。すると歌羽がゆっくりとした動作でこちらを見て、苦笑いを浮かべた。

「……いきなりで驚いたよね。おまけにゲロったし。でも出来るだけ気にしないでもらえると、うた、色々と助かります……」

「え、ええ。分かったわ」

あたしは元気のない様子の彼女に相槌を打つ。そうしてあげないと、なんかちよつと可愛そうな気がしたのだ。

「無事で良かった……。どうなることかと思って心配したんだぞ」

「うん。本当に助けてくれてありがとう。……それでその、大丈夫なの?」

サチが続いて顔を上げ、こちらの身を案じてきてくれた。あたしは

礼を言い、逆にサチの方を心配する。するとサチは、力なく首を振った。

「見ての通り大丈夫じゃねーよ……。最悪だわ」

サチは少し仏頂面になる。

声にはいちいちそんなの聞くな、という子供らしい不満が見え隠れしていて、そしてそんな感情に同意するかのようには、柘榴もまた覇気のない様子で頷いた。

「そうだね。こればかりは大丈夫じゃない。私の方も歌羽の方だつて大分やばいもん……。こゆりも、体調悪くなつてないの？」

「正気に戻つてすぐの頃は、ものすごく気持ち悪かつたわ。歌羽みたいに吐いちゃつたし。でも今はマシ」

あたしは安心させるようにそう答えた。

流星に全快……。とまではいつてないが、大分気分は回復はしている。

普通に会話して動いても大丈夫だし、何なら普段通り戦えと言われたら戦えるだろう。

……それを見抜いて歌羽もグリーンフィールドを渡したんだろうし。

「……こゆり、ごめんね、あの時二人で話し込んでちゃつて。本当はこゆりのとこ行かなきゃ行けなかつたんだけど、あの時はその……、ちよつと色々あつてサチ以外あまり目がいなくなつてき」

「そうだな……。しようがなかつたとはいえ、ちよつとねえ……」

「いやそれを言うならうたもだし。うたが二人をああなつたのはうたの責任だから、うたも謝らなくちゃいけない。ごめん」

申し訳なさそうに謝る柘榴に、心なしかしゅんとしている顔になっているサチ。そして訳が分からないことを言つて頭を下げる歌羽。三人のそれぞれの謝罪に対し、あたしはいやいやいやと首を振り、「そこまで謝らなくて良いわよ。こうして今三人とも心配してくれてるんだし、その想いだけで充分嬉しいわ」

「……そう。だけど、本当に良かったあ。生きていてくれて、とつても嬉しいよ」

赤髪の少女は、うつすらと笑みを浮かべた。

それは相変わらず分かりづらいものだったが、どうやら安堵の笑顔らしい。

彼女の目の奥は、暖かいものでいっぱいだ。

そしてまたサチや歌羽の方も無言だが、ほっとしたような表情をしてくれた。

何となく気恥ずかしいというか、居心地が悪いような気になってきた。

サチと柘榴と歌羽。三人に心配されて嬉しいのに、それを認めたくないという思いがあつたからだ。

あたしは今更のように、「誰も信じてなんかない」んだって。あたしを操つてた奴に自覚させられた。ずっとずっとと、愛されたいと願いながら、でも愛されるわけがないと諦めてきたんだって。

あたしはそんな矛盾を抱えた自分が醜く思えて、殺したいくらい憎たらしい。

だから、皆が必死で助けしてくれたこの命も、いつそ助からない方が良かったのではないかと思ってしまう。

……こんな化け物のあたしに、価値なんてあるわけない。悪いけど、本気で心配しないで欲しい。

——これ以上そうされると、愛ってなんだか分からなくなる。

「まあ、そんなのどうでも良いわよ……」

あたしは余計な考えを首を振ることで断ち切る。

こんなことを今ぐだぐだ悩んでいても、キリが無い。

それよりも、

「……ねえ、ところで今ふと思ったのだけれど、もしかして、皆“あいつ”のプレッシャーの影響を受けちゃったの？」

「そうだよ」

思い浮かんだ可能性をそのまま問えば、すぐに歌羽が肯定してくれた。

やはり、皆あたしが吐いた時と同じような感じの状態になっているらしい。だってあたしと症状が似ているもの。

「歌羽、あたし分からないことだらけなの。何があつたのか、説明して

くれないかしら……？もちろん今じゃなくても良いから」

「……いや、今この場で話すよ。うた、割と楽になってきたし」

あたしは後でで良いから、色々と話すようお願いする。

しかし歌羽は、とても快調したとは思えない顔ながら、説明すると
言い出した。

もちろん無理をするなどあたしは即座に忠告する。

見たところ、どうやら歌羽がこの中では一番ダメージを負っている。

当たり前だ。奇襲に回っていて「あいつ」に存在を気づかれなかった他の二人と違い、歌羽は真正面から虚のプレッシャーを食らったのだから。

「他の時の機会でもいいでしょう？今無理やり話しても悪化するだけじゃない」

あたしが再度忠告すると、うんうんとサチと柘榴が同意する。二人もう歌羽にゆっくり休めと思ってくれているらしい。だが意外なことに強情なのか、すぐさま歌羽は首を振った。

「うん。そういう訳にいかない。というか、うた、そうしたくない。皆で納得して決めたこととは言え、「それ」をこゆりに説明しないままなのは、なんかもやもやする。だから、うたの口から全部話すよ」
「……まあそこまで言うのなら、テメエの好きにするといいよ」

ふん、とそっぽを向くサチ。それに歌羽は困ったような笑みをし、何も言わず、尊重するような目で見ると柘榴に視線を少し移してから、あたしの方へ顔を向ける。

「じゃあうた、色々と説明するけど、いいかな」

「ええ……。サチの言う通り、そこまで言うならアンタの好きにする
といいわ」

あたしはある種、溜息をつきたくなるような感情を抱えたまま、肯首した。

歌羽の目にはこちらが思った強い光がある。どうもあたしじゃあ、それを換えられそうにない。

「うん。じゃあ一から話すよ。と、その前に一個だけ良い？うた、

ちよつと知り合いに電話がしたいの。心配して待たせてあるから」

「……別にそれくらい良いけど」

「ありがとう」

歌羽は礼を軽く礼を言うと、スカートのポケットから携帯を取り出して番号を打ち込み、スマホを己の耳に当てる。そうして繋がった相手に具合の悪さを伝えないようにするためにするためか、出来るだけ明るい声で話しかけた。

「もしもし、家主さん。調停役の歌羽です。こゆりを追いかけて、無事魔女を退治しました。……はい、……はい。……それでですね、無事倒したのは良いんですが、被害者の一般人が何人もいます。その中にはどうやら怪我人もいますので、家主さんが来てくれると嬉しいんですが……。……え？被害者の中にちっちゃい子のお母さんはいないかって？……。……はい。その特徴の人なら、見かけました。……。ええ、恐らくその子の母親で間違いないと思います。……。分かりました。応援をお願いしてくれるのは心強いです。ありがとうございます。ええ、またのち程」

しばらく話し込む歌羽。

そうして二分ぐらいしたのち、お互い伝えたいことは伝え終わったのか、歌羽はペコリと律儀にお礼をしてから電話を切る。

あたしは野暮だと思いつつも、興味本位から電話の相手が何者なのか尋ねた。

「一体誰と会話していたの？家主さん、とか言ってたけど」

「弦家角さん。うたと同じ魔法少女だよ。こゆりも一度会ってると思うよ？公衆トイレで」

「は……。？」

一瞬意味が分からず、あたしはきよとんとする。しかしすぐにトイレという単語からある人物が思い浮かび、途端に微妙な顔をしてしまった。

「あのセーター着た人か……。？」

意外な繋がりがあったことに、びつくりである。

まさかこんな形であるの人の存在がここに来て出てくるとは思っても

しなかった。世の中、案外広いようでいて狭いのかもしれない。

「……って、何であの人が公衆トイレにいた事を知っているのよ。あたしがあの人とそこで会ったって本人から聞いたの？」

「うん。家主さんね、トイレで会った子——こゆりが魔女を追っかけてるって私達に連絡くれたんだよ。……まったく、一人で無茶して駄目じゃない。今頃私達が来なきや、天国行きだったんだからね、こゆり」

柘榴が何処か責めるような口調で話す。あたしはまたも微妙な顔を続けた。

余計なことを、と思わずにはいらなかったからだ。

あたしは何もあの人に、助けてなんて頼んでない。そこまですてもらおうとも考えてなかった。それなのに勝手に歌羽達を助けに出させて、お節介にも程がある。

……だが、あたしはそのおかげで命を救われたのだ。そのことには素直に感謝せねばなるまい。故に、複雑な気分でいっぱいである。

「あの人と呼んだってことは……、もしかしてアンタ達、あの子の仲間なの？」

「そうだよ。まあ厳密に言えばこの船花様はちよいと特殊だけど、歌羽達と色々あって仲良くなったから、行動を一緒にさせてもらった」
「……………、そう」

あたしは勤めて平静な態度で答える。

もちろん、サチと柘榴と歌羽が仲良くなっているという事実には、あたしは内心で動揺していた。

こつちはずっとサチの仲間を探そうと必死だったのに、肝心のサチは知らない間にあっさり仲間を手に入れていたのだ。今までやってきたことは一体なんだったんだと、思わずにはいられない。

しかし同時に仕方がないと、何処か諦めてもいた。

だってあたし、自分が裏でやっていること、本当は良くないことだと知っているもの。

そしてその方法で仲間を見つけたのだとしても、きつとサチは喜ばないことも知っていた。

だけどあたしはムシヤクシヤしてたから、半ばヤケクソ気味にそのことを言い訳にして、色んな子に喧嘩をふっかけてたのだ。しかもあたし、自分はやっていること何もサチに行行ってないし。

こんなの、知らない間に仲間を作られても何も文句言えないし、仕方がないでしょ。

……そう、これは仕方のないことだ。ズルイあたしへの罰に違いないんだ。

だから、平気……。あたしは平気だ。どうせどうせどうせどうせどうせ——

「——こゆり。貴女何考えてんの？」

——その時、何故か歌羽の目が鋭くなった。

あたしは思わずびくり、と肩を縮こまらせる。それだけの迫力を、彼女が纏っていたからだ。

サチと柘榴もこれにはビビリ上がり無言になっている。

「……うた、そういうの気に入らないんだよね」

「……」

静かに、だがはつきりと怒気が含まれた声。それにあたしは自分の頭の中が筒抜けになったような恐怖を感じ、さっと目を逸らした。

歌羽はあたしをじっと猛禽類のような目で見つめると、しばらくの間何か思案するような顔をし、

「まあ、話を戻そっか」

と、先ほどまで出していた怒りの表情を消して、普段どうりの何処かほわほわした雰囲気再度身に纏った。

そのことが更に恐ろしくもあつたが、あたしはとりあえずこの場は乗った方が良い気がして、ええと空返事を返した。

「それでさっきも会話の中にあつた通り、うた達は家主さんに頼まれてね、こゆりの後を追つたんだ。

そうしてここに来たとき、すでに「あいつ——いや、もうずっと「あいつ」じゃ不便だから、この際「虚」って呼ぶけど、その虚の影

響が出ていたんだよ。つまりあのプレッシャーが礼拝堂の外にも漏れて、うた達もそれを浴びちゃったんだよね」

「……じゃあ、歌羽達は——」

「当然、気が狂うほどじゃないけど、具合は悪くなったよ。……動けなくなっちゃったんだ。そこで苦肉の策として、うたは自分の固有魔法である精神操作——『洗脳』を使ったの」

『洗脳』。

歌羽は、はつきりとした声でそう言った。

ようは歌羽は、サチと柘榴を操った、と告げたのだ。

当然、あたしは訝しがるしかない。

その言葉の意味は理解ができるが、それをどのように使ったのか皆目検討もつかなかったからだ。

それにその響きにも少し不快感があつて、少々の抵抗感があつた。故に、僅かに嫌な顔をしてしまう。

しかし歌羽の方もそれは同じだ。本人も洗脳という固有魔法が嫌いなのか、洗脳という単語を口にいただけで、顔を一瞬だけ思いつきり歪めた。

「作戦実行のために、無理やり暗示を自分たちにかけて、その役割を遂行できるようにしたんだよ。まずうたは、自分の中で『蛮勇』を増幅させて、プレッシャーを受け止められる役目を担うだけの抵抗力をつけさせた。そしてサチと柘榴には、『サチと柘榴で互いに協力し合おう』という意識を高めさせて、あの状況でも動けるようにしたんだ。

とまあ色々と言ったけど、ようは自分達はその役割を出来ると思ひ込ませて、プレッシャーに対する恐怖とかを無理やり麻痺らせてただけなんだよね……」

苦笑いを浮かべる歌羽。

その説明は色々と納得がいくものであり、同時に色んなことに対して疑問が一气にはれた。

初めに急に皆が具合が悪くなったことについてだが、これは魔法を解除したことによって、今頃になつて一気にプレッシャーの影響が始めたせいだろう。急に外に飛び出したのは、その魔法の効果時間が切れる

ことによるものか。

また彼女達が普段と違っていたのも、暗示にかかった状態だったからだ。

歌羽が若干無鉄砲だったのは、蛮勇が少し増幅されていたから。サチと柘榴が互いの動きしか気にしなかったのは、互いに協力し合う“という意識が強すぎたためだ。これによつて互いの存在がなによりも至上のものとなり、他の人のことが少し無頓着になっていたのだろう。

「本当はグリーンフィードを渡した時に説明するべきだったんだろうけど、時間がなかったから、こんな形で話すことになってしまつてごめんね。あともう一回、二人にも改めて謝っておくけど、柘榴とサチもあんな風にしてごめん。皆、嫌だったと思う……」

歌羽はバツが悪そうに謝罪する。

そんな彼女を見てあたし達は顔を見合わせるなりして、互いの意見を無言で交わし、柘榴が代表して、

「別に良いよ。状況が状況だったし」

「……うん、ありがとう」

歌羽はあたし達を見渡し、感謝の言葉を述べる。その何処か救われたような表情が、とても印象的だった。

「……ところで、何か他に質問はある？今ならなんでも答えるよ。なんか思つたより体調回復してきたし」

彼女はそう、若干自分の血色の良くなった顔をあたしに向ける。あたしは無理は良くない、と思つたのだが、本人が真摯に向き合おうとしてくれることもまた事実なため、一つだけ気になつていた点を質問した。

「アンタ、調停役つて名乗つてたけどさ、その調停役つてなんなの？」

「——牛木草の共同体、プライマリーカラーにおける役割の一つ。その地区ごとに配置されたリーダーみたいなもんだよ」

「それが歌羽……？ていうかプライマリーカラーつて……」

……なんかその名前、聞き覚えがある。

確か助けた新人の子が、プライマリーカラーつていう組織があつて、そこ入るか入らないか迷つてるとか言つてたような……。

その時はふーん……、としか思ってたけれど、いざこうしてその名前が出てくると、なんか心の底がざわざわするというか。嫌な感じがする。

これ以上先を聞いてると、何か良からぬことが起こりそうな気がしてならないのだ。しかしそんなことで会話を中断できるわけもない。そうしたら、不審がられる。

「知らない？プライマリーカラーってのは、牛木草をまとめあげようとしてる共同体だよ」

歌羽はあたしの思っていることを見抜いているのか、見抜いていないのか。周りに構わずに話を続ける。

あたしは嫌な予感に何故か冷や汗を流しながら、それに耳を傾けていた。

「……プライマリーカラーは牛木草の魔法少女を統率して、争いを減らすための魔法少女の集まり。互助団体みたいなもんだと思ってくれて良いよ」

「……」

「プライマリーカラーはさつき言ってた調停役つてのを格地域において、その問題をその人に任せるって形で運営してる」

「……」

「うたもその問題解決のために動いてたりするんだよ。……例えば何処ぞの誰かさん——『風来坊』を探したりね」

「——」

ドク、とその瞬間、心臓が飛び跳ねた。

風来坊——それは新人の子を助ける時にカツコつけて名乗った名前。いつの間にか知れ渡ったり、恥ずかしいことになんか異名みたいになっちゃった渾名だ。

つまり『風来坊』——新人魔法少女を助ける魔法少女って図式が成り立つわけで。

そしてその名前を知って、今この場でそれを言ったということは——

「……、まさか——」

だから何がしたかったのとか、そういう問いを投げかけられても困る。しかもそれをよりによってサチにどうしてされなくちやいけな

い。……考えたくない。考えたくない、考えたくない、考えたくない。

「……………」

あたしは刹那耐えきれなくなり、脱兎の如く逃げ出した。

何も見たくなくて、何も感じたくなくて、すべてを捨て去りたいとも思ったから。

しかし――

「柘榴!!」

歌羽の合図が兎玉する。

次の瞬間柘榴が石版を掲げ、その赤髪の少女の影の中から無数の黒い手腕が飛び出した。それはあたしを捕まえんと、手の平を開いて向かってくる。

あたしは突然のことに驚きつつも、咄嗟に身を捻ることで回避。そうして距離を取るために大きく跳び、そのまま逃走を凶ろうとした時――突如一瞬だけ、意識の酩酊が起こった。

「!?!」

体に力が抜ける。

そのせいで体勢が少し崩れ、前のめりに転けそうになる。瞬間、鎖の鳴る音が聞こえ、刹那両腕に痛みが走った。

見ると地面から三本の鎖が伸び、それがあたしの右腕と左腕をまとめて拘束している。動かそうにも、ギシギシいうだけでびくともしない。

「お前エ……………」

「一瞬だけ精神操作をさせてもらったよ。うた、こゆり強いからあんまり捕まえられるか自信なかったけど、動揺して簡単に引つかかってくれたから、すぐくラッキーだったね」

具合が悪そうにしながらも、歌羽は自分を誇るように胸を張った。

そこには、普段のような自信のなさがまるで見られない。そうして彼女はふつと笑い、

「ごめんね。だけど、しばらくしたらどっか行っちゃうだろうし、貴女をここで逃すわけにもいかなかったから。——さあ、うた達とゆつくり話し合うとしようか」

手を繋ぎ、心を結ぶ

「ねえ」

「……」

「ねえってば」

「……」

礼拝堂の裏手の壁に背を預け、女の子座りをしているあたし。そのあたしに対して、歌羽が右隣で時折呼びかける。まるで、仲の良い友達に声をかけるかのような調子で。

それに、あたしは答えない。すっかり暗くなった夜空の方を見る。サチが卵型にしたソウルジェムの光で辺りを照らしているが、しかしあたしは歌羽の表情を見たいと思わなかった。故に、そっぽを向いていたのである。

それは何も——そう、何もコンタクトを取りたくないというあたしなりの意思表示だ。こうしてれば、いつか必ず相手は諦める。そこまです長い時間かまつてられるわけがないから、あたしのことなんて見逃してくれる。

そんな気がして、理屈の部分ではあり得ないと分かっているながら、あたしは内側に閉じこもる姿勢を取り続ける。

なんともまあ、我ながら稚拙で幼稚な作戦だ。実際あたしは半ば怒りが転じて子供のように拗ねており、膨れっ面をしていた。

「ねえ、こゆり。いつまでそうしてるつもりなの、こゆりちゃん？」

そして、そのことを分かっているのだろう。呆れたような、というか少し怒ったような声音で、歌羽が再度あたしの名前を呼ぶ。

当然あたしは歌羽の方を向かない。強情なあたしの態度に、彼女は、はあ、とため息をついた。

「やっぱり何回呼びかけてもだんまりするんだね。そんなにうた達と話したくない？」

まあ、この状態じゃあ嫌にもなるだろうけど、と歌羽は手に持っているものを鳴らす。それはあたしの両腕を拘束する三本の長い鎖、その末端である。彼女は地面から生えていた鎖を魔法によって地面か

ら離し、自身が持てるように細工したのだ。

おかげで歌羽に手綱を握られ、いざ逃げようとしても鎖を引っ張られたり、またあの酩酊感を発生させられて逃げられない。

実に嫌な気分だ。誰かに支配されることなど、元来好きじゃない。

「拗ねててもしょうがないよ。そりゃこんな形で拘束して悪いとは思
うけど、でもこゆり、絶対こういう強引な手法じゃないと話をしてく
れないでしょ？」

あたかも仕方がなかったんだという口ぶり、あたしの左隣で柘榴
が言う。

彼女の話によれば、もともと今日の夜、サチをあたしに呼び出させ
た上で、話し合いはするつもりだったらしい。

つまり虚が来ようとこない、こうなることはどっちみち必然だっ
た。だから良い加減に素直になりな、という上から目線で、柘榴は
さつきからあたしの口を開こうとする。歌羽同様、彼女は厄介な尋問
官だった。

そんな中で救いだと思われたのは、歌羽の隣で立つサチが、あたし
同様無言でいてくれることだけだった。

それは見方を変えれば責めているともとれる態度だったが、同時に
温情をかけてくれるとも受け取れた。

そのため僅かに心持ちが楽になり、ますますあたしは突っぱねる意
思を強くしてくれたのだ。

「……」

絶対、絶対口を聞くもんか。あたしはヤケクソ気味にそう心の中で
唱え続ける。歌羽や柘榴が仕切りに何か言ってくるが、それもすべて
聞き流す。

あたしは何も見たくなかった。あたしは何も考えたくなかった。
あたしは何も、状況に向き合いたくなくなかった。

自分の心にある矛盾と空っぽさを、自覚したくなかったのだ。

そうして、意固地になって丸まっていると——突如として白い光が

飛び込んできた。

「おーい、歌羽ちゃん」

飛び上がらんばかりに驚いたのも束の間、すぐに聞き覚えのある声
がした。徐々に足音と光がこちらに近づき、複数の人影が側に立っ
た。

それは三人の魔法少女だった。一人は新緑の着物にエプロンを着
た人物、弦家角。

あと二人は赤のマントに赤ドレスを着た少女と、青い甲冑を着込ん
だ少女だ。こちらは見覚えがない。だけど新人っぽくも見えなかつ
たので、恐らく魔法少女になってそれなりの時間がたっているだろ
う。

「待たせて悪かったね」

白い光——懐中電灯を向けながら、家主さんが軽く謝る。歌羽はい
くらか顔色が良くなっていったのもあつてか、電話の時ほどかしこまっ
た態度ではなく、ある程度慣れたように、いえいえと首を振った。

「あの、預かっていたっていうちっちゃい子はどうしたんですか？」
「母親の無事を伝えて、警察に届けてきたよ。流石にほったらかしで
ここに来るわけにはいけないしね」

家主さんの言葉に、あたしは今更のようにあの幼い少女のことを思
い出す。

どうやら歌羽と家主さんの会話からするに、母親は助かっているら
しい。

思わず、ほっとしてしまう。本当に良かった。それこそ死んでし
まったら、あの幼い少女は一生苦しむことになっていただろうから。

「そっちの二人は、応援できてくれた子達ですか？」

歌羽が家主さん以外の少女達の方に目を向ける。二人は気さくな
様子で挨拶すると、

「ちようど暇してたしね。一般人の怪我人ときいちやあ、無視できな
いでしょ？」

「それに魔法少女は助け合いです。これくらい、手伝いますよ」

赤い少女と青い少女がムカつくぐらい、にこやかに笑う。やる気充分って感じで、柘榴も同調するようにこくこくと頷いていた。

「で、そっちの鎖で腕がぐるぐる巻きになってる子が、お話にもあった風来坊ですか？」

「……」

あたしに興味でも湧いたのだろう。ふとこっちの方を向く青い少女。それににびびるように顔を強張らせ、あたしは出来るだけ体を縮こまらせる。赤い少女が、あらら、と苦笑いを浮かべた。

「なんか思ってたより怖がりっていうか……、ここまで人見知りだとは思っていなかったよ。全然イメージと違うんだけど」

「ええ、驚きました。噂とはあてにならないものです」

あたしを見て、二人は意外そうな顔をする。あたしは怒って良いのか呆れて良いのか複雑な気分になり、一体どんな話が広まっているんだと考える。

この感じだと、絶対ロクな広まり方してないだろう。多分暴力鬼とか、そんなこと影でいわれてるんだろうなあ。

「こゆりちゃん」

家主さんがあたしに声をかけて来る。

あたしは警戒心を剥き出しにして更に縮こまり、俯くようにしてその視線から逃げた。

それでも構わず、家主さんは言葉を続ける。

「君が無事でよかった。本当に、無事で良かったよ」

「……」

「余計なことをするじゃないって顔してるね。でも、こんな言い方をして厚かましいかもしれないけど、僕はただ黙って君に任せるのは駄目な気がしたんだ。君があまりに不安定に見えたから。だから、どうか悪く思わないでくれよ」

家主さんはあたしの不満をすぐに見抜ぬいたのか、真剣な声音で何故歌羽達をここに来させたの説明する。

あたしは半分睨みつけるような目つきで彼女をチラリと見ると、剥れた表情を作って、ぼそりと礼を言った。

「ありがとうございます……」

「うん。どういたしまして」

和風メイドの少女が微笑む。それははつとなるくらい心を揺さぶるような微笑で。

しかし当の本人は、そんな笑みを作ったとは気付いていないのだろう。自覚のない様子で、柘榴に自分たちの手伝いをするようお願いすると（会話からするに、もしものことがあればこうすることは事前に決めてあったらしい）、歌羽に一言言ってから、柘榴と応援の二人を連れて礼拝堂の面へと回ってしまった。

あたし達はそんな彼女らを視線だけで見送り、その消えた背を見続ける。

後処理をしてくれる、とは言っていたが、それでも上手くやってくれるか少し不安ではあったのだ。

「家主さんと柘榴の申し出とはいえ、ちょっと押し付けて悪いなあ……」

歌羽が小さい声でそうぽつりと呟く。

そしてしばらく目を瞑るような仕草をすると、さて、と目蓋を開け、黙っていたサチの方へ視線を移した。

「サチ。もう家主さん達も行っちゃったよ。きつと処理を終わらせたとしても、あの人たちは面から出るだろうから、会話を聞くような無粋な真似はしないはず。……そろそろサチもこゆりに何か言ったら？」

「……」

「だんまりじゃいけないでしょ。何のためにうた、こんなことしてるの？」

再度、あたしの腕を拘束する鎖を鳴らしてみせる歌羽。

顔は温和だが、怒っているのだろうということとは口調と声音から何となく分かる。

だがサチは怖気付いたように逡巡した。

「けど……」

「貴女が言いだしたんでしょ。こゆりに思いを伝えるために、彼女を

逃がさないで欲しい。自分も逃げ出せないように、誰でも良いから立ち会って欲しいって」

「……」

「柘榴も柘榴で、貴女を信じて一般人の治療を手伝いに向かったんだよ。そして家主さんも……、きつと柘榴のその意向を汲んで、治療を手伝わせてると思う。それにうた、言ったよね？——伝えようという何も伝わらないって」

歌羽が静かに論するようにサチを説得する。

その口振りから、サチが今まで黙っていたのは温情でも何でもなく、ただ怯えていただけなど気がつき、途端楽になっていた心が重たくなる。

だって、彼女は意思を伝えようとしてないわけじゃなかった。それなら、柘榴と歌羽と何も変わらない。厄介な尋問官その三である。

「」

隣で息を飲む音が聞こえる。それはサチのものであり、その事実だけであたしは震え上がった。

サチが一言、小さく何かを呟く。そうして次に彼女はこちらを向いて、おずおずと

「何で私のこと、頼ってくれないの？」

ただそれだけを質問して来た。

「——、それは……」

その問いに、今度はこちらが息を飲む。

拗ねていた感情は消えて、混乱に変貌する。

あたしはてつきり、責められるのだと思っていたのだ。激しく罵られるのだと。

しかしサチのその言葉は、予想にかなり反するものだった。あたしは身構えていた分激しく動揺し、どうすれば良いのか分からなくなる。

そうしているうちにも、サチは我慢していたのか堰を切ったかのようには喋りだし、自分の思いを吐露していった。

「……どうして私だけ仲間を作れば良いとか、悲しいこと言っちゃう

の？

私は……、私はね、入理乃がいなくなって寂しかったの。あの子は、私のすべてで、親友で。そのあの子がいなくなって、私の心の中には穴が空いてしまったの。だから入理乃以外の理解者が欲しくて、私は仲間が欲しいって言ったんだよ。

でもね、それだけじゃないの……。仲間がほしいって言ったのは、こゆりのためでもある。こゆりも寂しい思いをしてるだろうなって思ったから、こゆりのために思って私は……。それなのに、私の言うこと突っぱねて、素直に何なくて、マジでなんなの？信じられないんだけど。

……そのうえ、今度は勝手に風来坊とか呼ばれちゃうくらい、牛木草の縄張り争いに介入しちゃうしき。人を守るのは立派なことだけど、人を傷つけてまでそんなのしちゃうダメだよ。

私、貴女のやってること……。意味わかんない。何考えてんの、こゆり？

……悲しい思いをしてるから、こんなことをしているの？どうせ、どうせ泣いているくせに……。それをどうして言ってくれないの!?!どうして……。何で！この気持ち、分かれよ!!……。私は、……。私は、そのことが何より悲しいんだぞ……」

気がつけばサチのその瞳からは、大粒の涙が溢れていた。それは声さえ上げていないが、かなりの大泣きだった。初めて会ってカフェで話した時でさえ、ここまで泣かれてはいなかったと思う。

その姿に、喉の奥が乾くような感覚。胸の内側が焼かれているみたいに、罪悪感でじりじりと痛む。

……本当に何で。何でこうなる。意味が分からないと叫んでいるが、しかしこちらだって意味が分からない。

サチはあたしを、どうしてそこまで心配してくれるんだ。どうしてあたしに頼られないことを悲しむ。

あたしにそこまでの価値はない。ましてや何もやってあげてないんだぞ？

……そう、何も。何も、あたしがサチのために役立てたことはなく

て。それで何で無条件にここまで受け入れてもらってるんだろう。そんなの痴がましいにも程があるのに。

「サチ。よく言えたね。とつても偉いよ」

「……うん」

褒め称え、歌羽がゆつくりと頭を撫でる。サチはそれだけでこくりと頷くと、大粒の涙を拭い、ぐしやぐしやになった顔をにへら、と笑ってみせた。

それだけで信頼関係が結ばれているのがよく分かる。……本当、一体いつのまに仲良くなつたんだろう。

「じゃあ、今度は貴女の番だね、こゆり。うた、サチも自分の思いを言つたんだから、こゆりも同じテーブルにつくべきだと思うよ」

無言で震えるあたしに、歌羽があたしの真正面に移動し、瞳を合わせようとしてくる。あたしは咄嗟に目を伏せ、家主さんや青の少女の時のように自分を守る体勢をとつた。しかしそうした次の瞬間、顎をぐいっと上げられ、無理やり視線の位置を変えられる。

「人が話をしている時は、こつちを見る。うたや自分の思いを言つたサチに失礼でしょ」

歌羽は怒気を込めた目で射抜くように睨みつけ、あたしを叱り付ける。

それから逃れられない。歌羽には、あたしを逃がそうという甘い考えはない。

「サチは勇気を出したのに、どうして貴女はそんな彼女から目をそらすようにするの？」

受け入れられないから？サチが嫌いだから？

どちらにしろ、このまま黙つてもサチの方は納得できないよ。ならせめて、その訳ぐらい言つてあげるのが思いをぶつけたサチに対する礼儀つてもんじゃないの？これじゃあ、あまりにサチが可愛そうだよ」

「……、可愛そう？」

「そうだよ。これって無視されてるようなものなんだから」

歌羽の怒気が激しさを増す。彼女はより一層その目を鋭くさせる

と、

「これだけ心配かけといて、それで当の本人はそんなの知りませんじやお話になんないんだよ。貴女には、貴女を救いたいというサチの思いを受け止める義務があるんだよ」

「……義務」

「……そう、これは義務だよ」

あたしは目を見開き、その言葉を繰り返す。

そういう表現の仕方をされるのが、少し意外に思えたのだ。

こういう時、皆よく綺麗事言ったりとかするし、曖昧な表現を使いがちである。しかしそうせずに、歌羽ははっきりと明確な言い方をした。

まるで誤魔化すのなんて嫌だとばかりに。

「だから、自分がどう思っているのか話して。それを聞かない奴は、ここにはいない。……貴女だって、自分の思いを伝えたいと願っているはずだと思うよ」

あたしの顎から手を離し、歌羽は自分の胸にその手を当てる。顔は真剣そのもので、どんな話だって受け入れるとそこには書かれてあった。

サチの方も、だいたい歌羽と似たような目をしている。

あたしはそれらをじつと見つめ、しばらく瞬きを繰り返して、そして――

「――馬鹿じゃないの?」

「はっ」

言った途端、ぽかんとする歌羽。隣のサチも同様で、あぐりと口を開けている。

それが何処か、心地よい。あたしは先程とは打って変わって、何故か急にすべてが馬鹿馬鹿しくて愉快的気持ちになり、アハハハ、と笑った。

「何がおかしいんだよ、テメエ」

突然のあたしの笑い声に、不快そうに訝しがるサチ。それがまた面白くって、あたしはニヤリと口角を歪に上げた。

「これが笑わずにいられるかしら!!全部馬鹿馬鹿しいのよ!!だってあたし、別に救われたいとか、寂しいとか、思っていないんだもの!!義務だとかなんだとか、意味不明!!そういうの迷惑だって話!!」

「——な」

歌羽とサチが、明らかに絶句したような顔になる。うん、実に良い気味だ。もつともつと、そんな顔をあたしに対してすれば良い。そうすればきつと、あたしのことなんてどうでも良くなるでしょ?

あたしは調子に乗って、演説する時みたいに大声で続きを言った。

「あたしね、親に化け物だって言われたの!!偽物だって!!」

事実その通り化け物なのよ、あたしは!!みんな、みーんなぶち壊して不幸にしちゃう化け物!!人間じゃないの!!

そんな奴つてき、別に救わなくて良くない?結局あたしってばいるだけで迷惑かける存在だもの!!」

「そ、そんなこと、あり得る訳——」

「ないともう……それこそあり得ないわよ」

サチの否定を、あたしは上から被せることで抑え込む。それでサチは何も言えなくなった。ただ先ほどのように絶句したままの顔で固まる。

あたしはくつくつと笑い、上機嫌になった。

「そう!!あたしがぜーんぶ悪い!!あたしがぜーんぶ不幸にする!!」

昔からそうだったの。お前なんているだけで迷惑なんだって、周りはそのような空気ばかり出してたの。あたしと喋っていると皆必ず顔をしかめたし、あたしのこと皆影口言ってたみたい。先生もこんなに手のかかる子は初めてだって、親に言ったぐらいよ?アハハ、馬鹿みたいよね?

そんなあたしがよ?ついに家族まで壊しちゃたんだー!これを化け物と言わずしてなんというのかしら!!こんなやつを、まだ救おうつての!?!片腹痛くておかしいわ!!

こんな奴好きになるとかキチガイだって!!アンタら馬鹿!?あたしに構うなあたしに何かを与えようとするな!!——あたしに、救いを与えようとするなア!!死ね!!」

あたしは勢いのままに叫ぶ。

最後あたり、何を言ったのか自分でもいまいち良く分からない。でもとても酷いことを言ったような気がする。

そのことに、つい心が痛んだ。でも、これで良いような気分になった。もうどうにでもなれって感じた。

だって救われたいとか思ってたないし。あたし自分のことなんてどうでもいいし。

むしろ、これで嫌われるなら――

「――何言ってるんだよ、こゆり」

「……え？」

「……初めて会った時、受け入れてあげるって言ったのに。友達になつてあげるって言ったのに……、どうしてそこまで嫌われようと必死になつてるんだよ。そんな悲しい考え方しないでよ」

「……」

思わぬサチの発言に、あたしは呆けてしまう。

彼女は今、何と言った？あたしが嫌われようとしているだつて？

何で、どうしてそんなことが分かる。何で見透かしたように、言いついてしまう。

こっちは必死になつて、取り繕っていたつてのに――

「……ち、違う違う違う違う!!何言ってるのさ!!あたしは別に嫌われようとか考えてないし。化け物なら嫌われて当然だつて、ただそれを教えてあげるために、さっきのは言っただけだし!!」

あたしはバレているのにも関わらず、愚かにも誤魔化しを続ける。それはただの負け惜しみ。悔しくて悔しくて、自分の心を認めたくないという言い訳だった。

そのため、もちろんあたしの言葉は通じない。歌羽とサチは、あたしを哀れそうに見ている。

「何処が。あんなの、傷つきたくないって叫んでるのと一緒だとうたは思うけど。ていうか、嫌われようとしたのって、いつそ見捨てて欲しいと思つたからなの？」

歌羽がじとりと目を細める。あたしはそれに、反射的に肩を跳ねさ

せた。途端、少し呆れたようにサチが言う。

「……凶星なのかよ」

「……」

あたしは声が出せず、その言葉を否定できなかった。

とうとう袋小路に追い詰められたのだ。退路を探そうにもそんなのは何処にもない。

「……それだけ、心の内側指摘されるのが嫌だったんだね。……もしかして、うた達のこと信じて良いのか迷ってるの？自分が救われて良いのか分からないから」

「――!?!」

あたしは瞳孔を見開き、たらりと冷や汗を流す。

「見抜かれた」。

直感で、何となくそれを感じ取った。

「やっぱりこれも、凶星なんだね」

あたしの反応から、歌羽が確信を得たらしい。妙に腑に落ちたように頷く。

「……うた、この子が何を思っただけで縄張り争いに介入してたのか大体分かったわ」

「え、マジで?」

サチは驚いたように歌羽の顔を見る。歌羽は呆れたような、困ったような表情をすると、

「こゆり。貴女が自分の思いをどうしても言わないなら、仕方がないけどうたがそれを代わりに言っただけよ。……貴女さ、自分が「愛されて」良いのか分かんないでしょ。その価値があるのか、見失ってるんだ」

「……」

「だからしつちやかめつちやかな行動してるんでしょうが。人から好かれたいから、魔法少女を助ける。でも好かれちゃいけないとも思っているから、仲間なんていらないうて言う。そしてそういう思いがあるから、サチのところにも助けを求めない。何よりそんな自分にイライラするからこそ、弱い魔法少女を助ける時に、襲っている魔法少女

の方に八つ当たりをする。貴女、……本当に矛盾していて、ぐっちやぐちやな状態なんだね」

最後の部分だけ、まるで同情しているような声を紡ぐ。

あたしは自分の思いをすべて言い当てられたことに呼吸さえ止まりそうなくらい驚愕し、唇を震わせた。

だって、だってそんなの、

「あり得ないじゃんか……」

「——、それは、肯定って意味で受け取って良いってこと？」

歌羽が意味のない確認をとってくる。

当然あたしはそれに答えない。答えたところで、歌羽はどうせこの思いを正しく理解してる。

だから代わりに、あたしは歌羽とサチの顔をしばらく見つめて、

「……どうして、あたしなんかを助けようとするの？」

そう、弱々しい声で訊いた。

「……」

今度は歌羽の方が無言で黙る。あたしはようやく堪忍して、知ってるんだよ、とやけくそ気味になりながら吐き捨てた。

「……そう。あたしは、あたしを受け入れてくれる人がいるって知ってる。サチのおかげでそれを学んだ。世の中冷たいやつばかりじゃないことも、何となく分かる。……けどさ、それを自覚しておいて尚、あたしは疑問なんだよ。そいつらが、本当に裏切らないのかどうか」
入理乃はあたしを捨てた。あたしのことを大切にしてくれていた両親でさえ、あたしを愛してくれなくなった。

いくら良いやつでも、それが変わる時があるのだ。

そのことが、あたしは恐ろしい。それを味わいたくない。だから、人のことなんて信じたくない。

それに、

「あたしは、助けられる価値のない人間よ。だって、化け物なんだから。あたしがこんなだから、お父さんもお母さんもあたしを拒絶した。あたしが不快に思われるだけのことしたから、あたしのこと嫌ったんだ。あたしが——すべて悪い」

「嘘だろ……、私はそうは——」

「思わないんだよね？……それも、知ってるわ」

またサチの言葉に、あたしは自分の言葉を被せる。しかしそれは否定ではなく、肯定。

あたしは自然と、彼女を突っぱねることを辞めていた。そうするための仮面が、もう通じなくなつたから。

「でも、実際そうなのよ。……この手で家族を壊したのは紛れもない事実だから」

さゆりは、家族が何より好きだった。あの家族で過ごす時間を大切にしてる子だったのだ。

だから、自分が死んで皆が悲しむよりも、家族が壊れてしまう方がよっぽどあの子にとって辛いはずなのだ。あの子をこの世で一番理解しているあたしは、そう断言できる。

なのにあたしは選択肢を間違えてしまった。よりよつて一番大事なところで、失敗した。

「……それで、あの子の大切なものを踏みにじつて壊しておいて、あたしだけ救われるなんて間違つてる。あの子は苦しみながら死んだはずなのに、あたしだけ酷い目に合わないのは間違つてる。あの子がもう愛されることはないのに、あたしだけ愛されるのは間違つてる。ね、あたしだけが救われるなんて、痴がましいでしょ？」

「……、そんな——」

「そんなじゃないの。嫌われてきたあたしには、嫌われるだけのものしかない。アンタだつてあたしのこと受け入れても、最後には嫌つちやうんだよね？……家族を壊した化け物は、嫌われて当然だよね？」

縋り付くように同意を求める。あたしはいつの間にか瞳から零れ落ちる滴をそのままに、

「——だから、救わないでください。あたしなんて、ほつといて。……あたしのことを、見捨ててください」

「……、こゆり……」

サチが悲しそうに眉根を下げる。それは、悲痛からくるものだろう

か。

恐らくそうなのだろう。彼女は、あたしのせいで苦しんでいる。そのくせに、そんな船花サチを見ていと辛い。バラバラに張り裂けそうな程に。

でも、ほつたらかして欲しいという思いだけは止められず、サチがこちらを罵倒することを期待する。

……感情が矛盾している。歌羽が言うように、あたしの中はぐつちやぐちやだ。

本当に、どうしたら良いのか分からない。あたしは、何を望んでいる。あたしは、あたしは一体何を――

「こゆり。怯えてないで、さっさと手を伸ばしたら？その権利があるくせに、何でそれがないと決めつける」

「――!?!」

歌羽の突然の叱責に、あたしは涙を引つ込ませる。その声が、あまりにストレートにあたしの心に突き刺さったのだ。

あたしは恐る恐る真正面の歌羽を見る。彼女は怒りに満ちた表情であたしを見下ろして、

「救われちゃいけないとか、一体誰がそんなの貴女に決めたよ。そんなのサチの思っている通り、ただの思い込みだろうが。凝り固まった考え方するなよ」

「……!?!で、でもあたしは化け物だから――」

「――たとえそうだったとしても、心は人間でしょうが。何親に言われたからってその気になるの。全部悪いと思うの。貴女が何もかも悪いわけではないでしょうが！もつと客観的な目をつけろ！目を!!」

怒鳴り、あたしへと指を突きつける。

あたしは歌羽の言うことに目を白黒させ、え？と仕切りに首を傾げさせた。

「ど、どう考えてもあたしが悪いのに。何でそんな冗談みたいなことを……」

「いやいやいや、そつちこそ何冗談言ってるの。親が子供を化け物扱いって、その時点でいくら何でも酷すぎだからね？うた、ぶつちやけ

その両親にそこまで罪悪感感じなくて良いと思うんですけど。それに家族を崩壊させたって主張するけど、こゆりそこまでのことしたの？うたには貴女みたいなヘタレがそんなことできるタマには見えないね。家族が壊れたのは、不幸な事故みたいなものだったんじゃないの？」

「……」

思わぬ発言をポンポン投げかけられ、あたしは困惑を通り越して唾然としてしまった。

だってどれも、あたしが考えてもなかった視点なのだ。これにはキャパオーバーを超えてしまう。

「ば、馬鹿言わないでよ!!あたしが悪いって——あう!!」

堪らず怒鳴ろうとしたとき、頭頂部に軽い衝撃が走った。あたしは思わず短い悲鳴を上げる。恨みがましく歌羽を見ると、鎖を持っていない手の方が手刀となっている。それであたしにチョップを喰らわせたのだろう。

「な、何するのよー!」

「いや、悪い悪いうっさいから。うた、ついうっかり!」

「うっかりじゃないわよ。地味に痛かったんだからね!!」

あたしは憤慨して抗議する。すると歌羽は舌を出し、まるで反省してないような調子でごめんと謝った。

「でも、悪い悪い言うのマジうっさいからやめて。不快。てか拗らせ過ぎ!」

「はあ!?!あ、あたしが拗らせてるだってえ!?!嘘でしょ!?!」

「自覚ないんかい。誰がどー見ても拗らせすぎだと思えますけど。ねえ、サチ」

「え?ま、まあそうだな……」

それまで無言だったサチの方へと話題を振ると、途端彼女は何故か居心地が悪そうにした。

しかもぶつぶつと「私もそうだったからなんとも……」とか言っている。意味がマジで分からん。

「サチ。そんなしみつたれた顔してないで、この舐め腐った根性して

るこの子に何か言っておいて。もつと言ってやらないと、貴女の気持ちはこの子に絶対届かないよ」

「……。……うん、分かった。伝えようとしないと、伝わらない、だもね」

あたしへと何か言葉を投げかけるよう言う歌羽。それにサチがしばしばの沈黙の後、肯首する。

そうして意を決したように深呼吸をすると、

「バーカ!!」

と実に気持ち良さそうな顔で悪口をぶつけた。

あたしはまた一瞬だけ、唾然となる。しかし次に呆れ果て、半目になった。

「何よ急に。何でそんなこと言うのよ」

「いや、バーカ、意外に何も言えなかったから」

「はあ……。？」

あたしはますます訳が分からず困惑する。サチはそんなあたしにムカつくのか、先ほどとは違い目に鋭い光を宿らせて、あたしを睨みつける。

「だってこゆり、本当にバカだもん。自分を悪い悪いって変に拗らせて、やりたいこと我慢してるから。……素直に助けて、愛して欲しいって言えば良いのに。それだけで、何もかも一発で解決じゃん」

「……。そんな簡単に言われても……」

困る。……すごく困るよ。

あたし、そんなの出来ない。

あたしも自分の状況が酷いんだって分かっているし、そこから抜け出たしたいと常々願っている。

でも手を伸ばしても、目の前の先は暗闇の世界なのだ。いくら手探りで進んでも、何も見えないし、何もない。すべてが虚構のように思える。

だから――

「……。どうせ本物の愛なんて、ないんでしょ？ あったとしても、あたしが家族ごと壊しちゃった。なら何を信じれば良いの？――何も、信じ

られないよ」

「あたしがそう思いを吐露した刹那、歌羽は目を伏せ、サチは喉の奥がつつかえたように急にまた黙り込んだ。多分そう安易に口出ししちやいけないって思ったのだろう。」

「だが歌羽とサチは、それでもその場で熟考するような仕草をしてみせ、あたしに向き合おうとしてくれている。しかしそれも、あたしには無駄のように思える。何故ならあたしは、誰も信じようとしてないから——どうせ、あたしなんて……、誰かを好きでいることなど無理なのだ。」

「さっきも言ったけど……、あたしなんてほったらかしておいて。救いなんて求めちゃいけないのよ、あたしは……」

「あたしはこの後に及んで、まだそんな突っぱねることを言う。そうすれば二人は呆れ果てて、きつとあたしのこと見捨ててくれるに違いないと、浅はかにも思ったからだ。」

「……そう必死に思いこまないと、やってられない気がした。」

「あたしは、救われちゃいけない人間なのよ……。助けようとしなくてよ……。甘い言葉であたしを騙すな……。こ、こんな最低なやつ、とつと見捨てて仕舞えば良いんだ……」

首を振りながら、弱々しく喋る。

それと同時に、あたしは自分の中でも言い聞かせる。

「あたしなど、家族を壊した化け物だと。そんなあたしには、誰かを愛する資格もないし、また愛される資格もない。」

「そうやって一人でいる方がお似合いで——」

「誰が見捨てるかよ」

「……え？」

「サチの強くはつきりした声に、驚きの声を上げる。その感情をぶつけられて、あたしはしばらく動けなくなった。」

「誰が見捨てるもんか。こんなに思い悩んでるやつを、ほっとける訳ない」

「私、こゆり好きだから受け入れるよ？だって友達だもん。ね？」
隣で笑顔の花が咲いた。

あたしは思わず目を瞬かせ、サチと初めて会った時にした会話を思い出す。

……あの時は、こんな物好きもいるもんなのだな、と酷く感慨深く思ったものだ。

それと似たようなことを、今のあたしも感じている。この子は本当に、あたしに似合わないくらい一途で純粹だ。

あたしがもう良いって言っているのに、こんなにも綺麗な笑顔をするのである。

……彼女の中で、あたしはそれだけ価値のある人物なのか。

そのことを、あたしは今まではつきりと考えたことがなかった。

この子は——サチは、さゆりみたいにあたしのことを存在ごと認め
てくれてる。

「ほら、サチはそう言っているよ。……素直にその手を取りなよ。貴女が悩んでることなんて、全部全部思い込みなんだから」

歌羽はサチにしたように、静かにあたしを論ずる。あたしは彼女の瞳を見て、迷っている心をさらけ出したい。

「……本当に、そんなこととして良いの？……また、人や自分を好きになっても良いのかな……？」

「——当たり前でしょうが。貴女が全部悪いんじゃないんだよ？だからまた、人を愛して、自分を愛せば良い」

歌羽があたしの望みを肯定する。

その一言で、はっとするほど世界が広くなったように感じた。

だって歌羽の言う通り、すべて、すべてあたしの思い込みの方が間違いだとしたら。

元からあるような気がしてくるじゃないか——一度失った本物の愛ってやつが。

こんなのまた、泣きそうになる。

「……人を信じられなくなる気持ちは、うたもすごく良く分かるよ。誰も彼も怪しく見えて、怖くなっちゃうんだよね？今もすごく怖い

でしょ?」

優しく、まるで同情するように訊いてくる歌羽。あたしは自然と俯くように首を縦に振る。

「怖いよ……、とつても」

「……それは、この船花様も?」

「うん、サチも歌羽も柘榴も、誰も彼も怖いよ」

あたしはずっと家族以外の人を信用してこなかった。

無条件であたしのことを好きになってくれなかったし、どう接すれば良いのかも分からない。

自分を出せている今でさえ、焦っちゃってどもったり詰まったりしてしまふ。あたしの人見知りは筋金入りだ。

「でもうた、怖くても貴女には人を信じて欲しいな。そこまで愛して欲しいって思ってるんだ。……なら、手を伸ばすべきだよ。矛盾してるうただって、ある人のおかげで変わろうって思えたんだからさ」

歌羽が微笑する。

少し驚いて、あたしは信じられないと思った。

「……アンタが矛盾してる? えらい自信満々に見えたけど……」

「それは勘違いしてものだよ、こゆり。うたに自信なんてない。……うた、貴女にうたの言葉が本当に届いているか、今だって不安でいっぱいだよ?」

弱々しい苦笑が浮かべられる。それは確かに本人の言う通り、自信満々とは程遠いものだ。

……それでもあたしに堂々と言葉をぶつけ、怒ったのか。勇気を出して。

「すごいな……。アンタ……。いや貴女は、どうしてそこまで出来るの?」

「分からない。けどうた、こゆりの考え方はムカつくから、関わるのはめんどくさいしたるいけど、見てられないの」

歌羽は身勝手な理由を述べる。

しかしあたしはそっちの方が、取り繕った綺麗事よりもよっぽど好感が持てた。

同情や憐憫といった傲慢な感情は、あたしには辛いだけなのだ。

「……こゆり。サチに心配かけたんだから謝って。それでそろそろサチとお互い手を取り合おう」

歌羽が指を鳴らし、あたしの腕を拘束する鎖を消す。自由になった腕を動かしながら驚いていると、もう逃げないでしょ、と言いたげな顔で歌羽が苦笑していた。

「……」

そのことに一瞬、よく分からない感情が走った。

あたしはバツが悪そうに、サチは眉根を少し恥ずかしがりながら相對する。

そうして数秒黙ると、

「ごめんなさい。……意固地になって。こんなあたしだけど、友達、続けてくれる？」

「うん」

サチがあたしの手をとって、頷いてくれる。

それだけで、もうあたしは色んな思いが溢れてきて、強く強く胸が締め付けられた。

……あたしは一体何をしてきたんだろう。勝手に自分で突っ走って、この子の気持ちにも寄り添おうとしなくて、殻に引きこもってばかりいて。

そんなの、この子の言う通り馬鹿だったんだ。

……「本物の愛」はなくなっていなかった。「愛」は確かにここにある。

この世界は決して、暗闇なんかじゃないのだ。

だから歩いて行けるし、信じられる。あたしは救われても――

「うた、サチ、こゆり。お話終わったの？」

「柘榴……」

その時、白い光が近づいてきた。見ると懐中電灯を片手に、植物をあしらった衣装に身を包んだ少女がこちらに歩み寄ってきている。

彼女があたし達の前に立つと、歌羽は首を傾げながら質問した。

「家主さん達はどうしたの？」

「一般人をどう運び出して警察に連絡するか話し合ってる。私はもう充分手伝ったから、そろそろ戻っていいよって言われたの。それと家主さん達から、こつちで全部やっつくから、心配しなくていいって伝えてっってお願ひされた」

「そつか。うた、本当に悪いことしたな……」

何処か居心地の悪そうな顔をする歌羽。そしてお札をいつかしなきやな、と呟いてから、柘榴の方を労った。

「お疲れ様」

「うん、ありがとう」

柘榴は無表情にお札を返す。そして、あたし達の方を見てしばしば何かを考えるような仕草をした後、突然屈み、あたしとサチをまとめて抱きしめた。

「……うな、何を……!!」

当然あたし達は困惑する。それにまた当たり前のように柘榴が答えた。

「……？用が終わったらやりたいようにやりなさいってうたが言ったからだけど。だから抱きしめたいな、と思って」

「いや、意味がわからんし、え？歌羽がそんなこと言ったの？」

そう質問しながら歌羽にちらりと視線を移すと、彼女は少し真つ赤になった顔を隠すかのように、そっぽを向いた。

どうやらマジで言ったらしい。その理由は、今更説明するまでもないだろう——柘榴が必ずこうすると分かっている、歌羽は柘榴に好きにするよう言ったのだ。

「歌羽、貴女……」

「……」

歌羽は何も言わない。唇を尖らせ、不満げにするだけである。よっぽど柘榴にバラされたことに腹が立つらしい。

だが悪びれることもなく柘榴はキョトンとして首を傾げ、そうしてふいに薄く微笑して、

「こゆり、サチ。今までよく頑張ったね」

「――」

ぎよつと抱きしめる力を強くした。

あたしはそのことに何故か衝撃を受け、腕を縛っていた鎖を消してもらったときに感じた感情を思い出した。

近くで心臓の音がする。それが一体誰のものなのかよく分からな
いけど。でも、決して不快ではなくて。

あたしはその命の鼓動に耳を澄ましながら、ゆっくりと目を閉じた。

指切り

あたしはサチと仲直りした後、大人しく歌羽の言うことに従うことにした。

“本物の愛”が失われていないと分かった以上、あたしにはもう躍起になる理由が存在していなかったのだ。

それに、あたしはあたしがやったことに対する責任を取らなければならぬ。いくら弱い子を助けていたとはいえ、多くの魔法少女を傷つけてしまったのは事実だから。

歌羽があたしに下した指示は、二つだった。

一つ目は魔法少女を傷つけたことに対する罰則を受け入れること。

二つ目は牛木草の共同体——プライマリーカラーへ参加することだ。

どうもプライマリーカラーのリーダー、恵比寿小豆は、あたしに首輪をつけておきたいらしい。

それも当たり前だろう。あたしみたいな奴にまた暴れられたら、治る縄張り争いも治まらない。

こうしてあたしはプライマリーカラーに入り、罰としてある程度のグリーンフシードを没収されることとなった。

これらのグリーンフシードは怪我をさせた子達の治療用に使うとのこと、謂わば慰謝料の代わりだ。

あまりに軽い罰則だが、あたしが弱い魔法少女を助けていたのも事実なので、このくらいの方が穏当に済むと判断された。

事実あたし以上に暴れ回った魔法少女には、縄張りの剥奪というあたしとは比べようもない罰が与えられたという。

このように恵比寿小豆は、リーダーとして公平な指示をし、縄張り争いを行なっていた魔法少女を一気に取り締まった。

以来、プライマリーカラーの牛木草内における地位はぐっと向上した。

素早く実績を上げたことが、結果として力の証明になったのだ。

そして力が証明されたのならば、それ以降のことにも人間は期待を

抱けるものである。

この一件のことを聞きつけるや否や、一部が手のひらを返したように一気にプライマリーカラーに加入。恵比寿小豆が流した噂もあって、雰囲気の流れされた子達が次々に新たな共同体へと入っていった。そのおかげで調停役の人達はてんでこ舞いだ。

激化する縄張り争いの仲裁に、新人魔法少女達の愚痴や不満といったクレームの殺到。そしてグリーンフィードの融通の仕方の取り決め。彼女達は日々を仕事に忙殺され、まるで死んだ魚のような目をしていた。

それは歌羽も例外ではない。会うたびに目の下に隈を作っており、苦笑いを浮かべていることが多くなった。

しかしそんな風なのに、歌羽は何処か充実そうにしている。まるで、これが自分のやりたかったことだと言わんばかりに。

あたしは色んな意味でこの人の凄さを再確認させられた。

「虚」の時にも感じたが、彼女はどんな時であろうと自分の意志や勇気を持つとうとしている。

どんなに苦しくても前に進み、変わろうとしているのだ。

そういう古鐘歌羽の弱くも強い部分が、あたしには眩しく、そして魅力的に思えた。

だってその姿は、かつてあたしが願った理想の自分そのものだから。

あたしはどんなに情けなくても、血反吐を吐いたとしても、自分のやりたいようにやりたかった。

それを実践してる人が目の前にいたら、普通に憧れる。

だから、この人に付いていきたい。この人をずっと支えていきたいと、自然とそう感じるようになるのに時間はかからなかった。

多分、彼女に救われたのもそれに拍車をかけただろう。

古鐘歌羽は、最早あたしの中で中心に位置するだけの存在となっていた。

……なんだか、ようやく「信念」というものを見つけられたような気がする。

これが本当にあたしのやりたいことだというのなら、あたしはあたしのすべてを捧げよう。

それがあたしの祈りの原点——すべてをなくし、再び愛を得た、あたしがやるべきことだから。



「ところで話変わりますけど、最近の子達、共同体のことちゃんとプライマリーカラーって呼んでくれないんですね。『原色』とか『プライマリー』とか短めるんですよ。どう思いますか、歌羽ちゃん」
「別に『原色』でも『プライマリー』でもどっちでも良いんじゃないんですかね……」

——廃倉庫、その中では、五つの机とパイプ椅子が円状に向き合うよう並べられ、五人の少女がそれぞれの席に付いていた。

正面にるのは、ワインレッドの髪をセミロングにした少女、恵比寿小豆だ。彼女は高校の制服と思わしきブレザーを着ており、参考書や教科書を広げながらこの場にいる全員に時折話しかけている。

当然この場にいるメンバーは皆困ったような顔をしており、特に小豆の右側に座る、オレンジ色の髪をツーサイドアップにした少女——古鐘歌羽は、面倒臭そうに頬杖をついていた。

「まあでも、プライマリーカラーって名前自体、少し長いと思いますしね……。ここはもう、うた達も短く原色って呼称した方が良いのではないでしょうか、サクトさん」

歌羽はあまりに小豆さんがしつこかったらしく、うんざりとしたように溜息を吐く。

そして、同意を求めるように向かい側、正面から見て左手に位置する少女に声をかけた。

すると少女はうんうんと頷き、紺色のロングヘアを揺らした。

「確かにそうかもだな。原色という名前の方が、私も短くて好きかもだな」

「サクトちゃん、貴女まで何を言い出すんですか。プライマリーカラーはちゃんとプライマリーカラーという名前です——」

「でも面倒くさいんだなあ」

一刀両断。

紺色の少女はのんびりとした口調で、小豆さんの発言を切り捨てた。

彼女の名前は碌^{ろくろ}サクト。四人いる調停役のうちの一人であり、紺色のロングヘアが綺麗な小柄な少女である。穏和で童顔。服装もオーバーオールと子供っぽいのが、調停役の中では最強かつベテランだ。

歳も小豆さんと同じであり、仲も一番良いらしい。そのため誰に対しても穏やかなのに、小豆さんには容赦がないのだった。

そんなサクトさんに頬を膨らませ、小豆さんがぶすつとする。

彼女は親友とはお話にならないと思ったのだろう。今度はここにいる中で一番気の弱そうなメンバー——歌羽から見て左の席、自分から時計周りに数えて三番目に座る、薄紫色の髪の少女に話しかけた。

「因幡^{いなば}ちゃんはどう思います？原色と略すのって、ありですか？」

「わ、私はその……、プライマリーカラーっていう名前は好きですけど……、あ、ありだと思います。皆そう呼ぶのなら、そっちの方に呼び方を統一した方が良いんじゃないかな……、なんて」

因幡、と呼ばれた少女は、控えめな態度でそう答えながら、肩まである豊かなサイドテールを弄る。

一見おどおどしているように見えるが、しかし彼女も調停役の一人だ。

少女——伊具^{いぐない}奈因幡^{いなば}は、己の意見は歌羽並にはっきりと言うタイプである。

流されがちに見える発言だが、彼女の主張は一定の筋が通っていた。

そのためか小豆さんはぐうの音も出ずにしばらく黙りこげ、そうして駄目もとで……と言わんばかりに、サクトさんの右隣、因幡さんから見て左隣の席にいるピンク髪の少女に目を向けた。

「ニツカちゃんは？ 共同体の名前は——」

「アタシ原色つて名前に賛成ー!!」

「分かってましたけど最後まで言わせて下さいよ、マジで」

手を上げて元気な声を出すセミロングの少女。

その彼女に言葉を遮られ、小豆さんは呆れ顔になった。

このいかにも明るい感じの少女が最後の調停役、白亜日華^{はくあにちか}である。

ニツカという愛称で親しまれており、ぱっちりとした赤い目が特徴の美人だ。明朗快活、天真爛漫ではあるが、小豆さんに言わせれば大分現実主義者とのことで、十五才と調停役で最年少ながら、最も治安維持に貢献している。

ただしこの中では最弱で、新人である歌羽との模擬戦でも負けているらしい。

まあ、かといって弱いわけではなく、どちらかといえば歌羽との相性が悪いだけらしいが。

「あく、皆、皆プライマリーカラーつて名前がそんなにどうでも良いんですか。まさか拘っているのは私だけなのは……!!」

「ぶつちやけ初めつからそうだな。ていうか小豆はそこら辺ウザくてキシヨイんだな」

「酷い……!!」

頭を抱える小豆さんに、親友が毒舌を浴びせる。その相変わらざる容赦のなさに、小豆さんは更にシヨックを受けたようなりアクションをした。

もちろんそれはコミニケーションの一環であり、互いに本気で喧嘩してるわけじゃない。

現に小豆さんは明らかにふざけているし、サクトさんの顔には笑顔が浮かんでいる。

そしてそのことを誰もが理解していたので、またかというような態度で、他の三人はそのじゃれ合いを見つめていた。

「……で、原色って略称はどうするんです？ 認めますか？」

歌羽が疲れてきたのか、気怠げに言う。

彼女は小豆さんに散々絡まれたので、少しそのノリに辟易としてきたのだろう。

しかし小豆さんは変わらずに、ふむ……と考え込むと、今度はあたしの方へと、

「じゃあ、最後にこゆりちゃんの見解を聞いて決めましょうか。

ねえ、こゆりちゃん。プライマリーカラーって正式に呼ぶべきですよ？ それとも原色って貴女も呼びますか？」

「え、あたしですか？」

突然話しかけられ、あたしは雑巾を動かしていた手を止める。

この廃倉庫はすっかりプライマリーカラーの人達の溜まり場となっており、そのためかここに供えられた棚に皆ポンポンと私物（例えば小豆さん秘蔵のBLの○口本とか、西洋かぶれらしい歌羽のよく分からんアンティークとか）をとにかく適当に放り込んでいくのである。

おかげでかなり散らかっており、おまけに誰も掃除をしないので埃を被る一方だ。

そこであたしが定期的に来る、棚の清掃をしている。

今も小豆さん達が会議（と称したただのたむろ）をしている横で、雑巾で棚を拭いている真っ最中であった。

「一般魔法少女を代表して、この渾名をどう思うかぜひご感想を」

小豆さんは何処か必死な様子で、続けるようにお願いする。

あたしは一瞬苦笑いを浮かべそうになったが、一応真剣に考えて答えを出した。

「普通に良いんじゃないんですかね……。プライマリーカラーってのは、夜見鳴子の有名なオブジェの名前から来ているんですよ？ そのオブジェの渾名も原色ですし、だったら共同体のプライマリーカラーの渾名も原色で良いかと」

造形作家、夜見鳴子が生涯をかけて造ったと言われるオブジェ作品のシリーズ、*“色彩”*。

その中でも最高傑作の一つと謳われているのが、プライマリーカラーと名付けられたシリーズ一作品目の立体である。

それは一言で言えば、羽ばたく鳥を模したガラス製のオブジェだ。逸話によれば、元は大きなガラスの塊だったものを、夜見鳴子が様々な道具を駆使してその羽一本一本に至るまで鳥の形に削り出したのだという。

着彩は“色彩”シリーズらしい様々な色の塗料が使われており、遠目から見れば虹色に光り輝いて見える。

そして近くで見れば、更にその素晴らしさに誰もが息を飲むだろう。

まさに原点にして頂点。天才芸術家、夜見鳴子の初まりの作品。故に原色、と呼ばれているのだ。

しかしその名は夜見鳴子の死後に、批評家が勝手につけたものである。

だからか、一部のファンの間ではちゃんとした名前と呼ぶべきだというお堅い層がいて、どうも小豆さんもその一派に属しているらしい。

共同体の方にも、正式な名称のものに固執し続けている。

まあ、同じ夜見鳴子ファンのあたしとしては、別に正式名称で呼ばなくて良いと思うけど。

気持ちは分かるが、原色という渾名は非常にそのオブジェのことを表している名前だと考えているので、どっちを用いても変わらないような気がするのだ。

「それに他の人が言うように、プライマリーカラーという単語は長いです。短めの呼び方があるのは、一魔法少女的にはありますね」

「こゆりちゃんもそこまで言いますか。ああ、私はこの件に関しては皆と分かり会えないんですね……。リーダーだけに、ひとりリーダー……」

嘆いているのかいないのか、親父ギャグを言って小豆さんはがくりと俯いて見せる。

それは正直言っただけかなり酷いもので、とてつもなくしょうもない。

これには、先程我慢していたあたしでも苦笑いを浮かべる。他の人達もあたしと同様に呆れたのか、溜息をついたり、困った顔をしていた。

その中で唯一例外なのは、因幡さんくらいなものだろう。彼女は笑い上戸のようで、一人だけ冗談がツボに入って大笑いに耐えていた。「……」

ある意味微妙な空気が広がっていく。あたし達は変に気が抜け、脱力したような心地となってしまった。

そんな雰囲気これ以上は不味いと思ったのか。ニツカさんが話を軌道修正する。

「えーと……さ、小豆ちゃん、小豆ちゃん。歌羽も言ってたけど、結局認めんの？原色って呼び方」

「……尺ですが、皆が言うのなら認めます。ええ認めますとも。今後共同体を呼ぶ時は、『原色』と基本的に呼称しましょう。何だかんだ、そっちの方が分かりやすいみたいですね」

渋々とながら、急に物わかりの良さを発揮して小豆さんは頷く。

今までの態度はなんだったんだって感じだ。……まあ小豆さんのことだから、こうやって周りをかき乱して面白がってるだけなのかもしれない。この人、割とお茶目というか、愉快犯的なところがあるし。「やれやれ……、皆さつきからそう思っているんだな。さつきと認めれば良いんだな」

「ですが、一応皆の意見は確認しなきゃいけないでしょう？こうして全員がそれぞれの考えを言って把握し合うのって、大事な意味があるんですよ……」

「……やっぱり小豆って、面倒くさいんだな」

敵わないと言わんばかりに、サクトさんは複雑な顔になった。

小豆さんはふらふらしているように見えて、時たまこうやってリーダーらしいところを見せてくるのだ。

だから、ちゃんとしては叱れない。叱る理由ができない。小豆さんは頼りにならなさそうで、頼りになる。

「ふふ。褒めてくださってありがとうございます。サクトちゃん」

「……言ってるこのバカ、だな」

そしてそのことを自身で理解しているだろう。小豆さんは、胸を張って得意げにする。

当然、サクトさんは真面目に取り合わずに適当に返し、もやもやしているのか、歌羽のように頬杖をついて愚痴る。

「まったく、小豆の馬鹿はマイペースすぎて、古馴染みの私でも理解が出来んのだな。……と、この音は」

ふと室内にノック音が響き、全員がドアの方を一齐に向いた。きつと「あの人」が帰ってきたのだ。

あたしは雑巾を置くと、真っ先にドアの方に走って、ノックをしていた人物を迎え入れた。

「家主さん、お疲れ様です」

「こゆりちゃん、ただいま」

その人物——セーターを着込んだ少女、弦家角があたしの歓迎にこりと笑ってから入ってくる。その手にはコンビニ袋が下げられており、歩く度に妙にガサガサと音が鳴っていた。

「皆、買ってきたよ」

家主さんは調停役の人達のところまで行くと、コンビニ袋の中身を机の上に広げた。

そこに並べられたのは、ポテトチップスにクッキーの箱、煎餅の包みにいちご味のチョコレート、そして袋に入ったドーナツにチョコケーキとバラバラのお菓子類だ。

家主さんは調停役の人達の頼みで、コンビニにまでわざわざお菓子のお使いに行っていたのである。

しかもあたしのリクエストまで聞いて。

……本当に家主さんは人が良すぎだ。

優しすぎて、こうやってお使いに向かわせるのはなんだか気がひける。

しかし他の人達は気にしていないようだ。皆我先にとお菓子を手に取り、各々好きな菓子を手に取って食べ始めている。小豆さんの影に隠れがちだが、基本調停役の人達はマイペースなのだ。

「ほら、食べないの？」

「あ……、その……」

悪いなあと罪悪感に打ちひしがれていると横から声がかけられる。見ると家主さんがいて、あたしが頼んだドーナツを手渡してきた。

あたしは少々遠慮しながらそれを受けとる。

「じゃあ、頂きます……。本当に買っていただいてありがとうございます」

「うん、どういたしまして。でも、別にそんなかしこまらないで良いよ。もつと気さくにしてくれて構わないんだから」

「そう……、ですね……」

あたしはそう答えながらも、俯いてしまう。

この人が記憶喪失だと聞いているからか、必要以上に気を使わなければならぬと思い、人見知りが発動してしまうのだ。

まあ、だからといって特別苦手でもなく、嫌っているわけでもない。

先程言った通り家主さんは本当に気がいいので、あたしの中で好感度は結構上に位置する。

「……皆楽しそうだね」

「……はい」

部屋の隅に移動し、あたし達は壁を背に預けて五人の少女達を見た。

彼女達は思い思いに過ごしており、すっかりあたし達など忘れてどんちゃん騒ぎをしている。

小豆さんはポテトチップス片手に、チョコケーキを食べるサクトさんにちよつかいを出してキレられ、その横でニツカさんと因幡さん、歌羽の三人が、仲良くお菓子をシェアしながら談笑していた。

ちなみにそれぞれのお菓子のチョイスは、ニツカさんがいちご味のチョコレート、歌羽がクッキー、因幡さんが煎餅である。因幡さんだけ、少し趣向が渋い。

「歌羽ちゃんもすっかり馴染んじやって。まさかここまで仲良くなるとは思ってなかったよ」

家主さんは実に感慨深そうに呟く。

彼女の言う通り、歌羽はかなり仲がよさそうにニツカさん達と話しており、ちよつとこちらが嫉妬するくらい楽しそうだ。

正直言つて、少し寂しい気がしないでもない。ただ、

「……歌羽が心の底から笑っているのを見るのは、悪くないです。彼女が嬉しいと、あたしも嬉しくなるんで」

歌羽はあたしとサチを救ってくれた恩人だ。その感謝は計り知れないほど深く、彼女という存在はそれだけで尊い。

だから、歌羽が幸せそうにしているだけで、あたしは胸が暖かくなる。

「……、こゆりちゃん、君は……」

あたしの言うことに、家主さんが息を飲んだ。そして少しだけ切なげに瞳を細めると、これまた儂げな笑みを浮かべた。

「……そっか。歌羽ちゃんのこと、大事なんだね。すつごくすつごく、大切なんだね」

酷く悲しく、やり切れなさそうに、そして羨ましそうに呟く。

あたしは思わずはつとし、複雑な感情から目を伏せた。

どうやら何か、家主さんの中の琴線に触れてしまったらしい。

……多分それは、記憶喪失に関することだ。

彼女にとって過去とは、ここ数週間のことしか指さない。彼女にとってその前の時間は、未知の世界だ。

その世界に置き去りにしてきたものはきつと数多くあるだろうし、中には命に変えてでも守りたいものがあつただろう。

そのことを考えると、こうして悲しげになるのも当然だ。

「……」

あたしは何と言つたら良いか分からず、家主の方を向き続けた。本当なら何か気の利いた慰めの一つや二つ、かけるべきなのだろうが、生憎そんな器用なタチじゃない。

あたしに出来ることと言つたらせいぜい、わざとらしく心配するような顔をする事だけだった。

「……ありがとう。ごめんね、僕は大丈夫だから」

気を使わせたことに罪悪感を感じたのか、家主さんは申し訳なさそうに謝る。

しかし、あたしはいえ、と首を振った。

「ごうちの方こそ不躰だったと思います。はい……」

「……また遠慮がちになっちゃって。君は腰が低いといつかうか」

腕を組み、何処か腹立たしそうにするセーターの少女。彼女はあたしの思っていることを見抜いているのかじと目を向けると、

「記憶喪失だからとか、年上だからとか、そんな理由で僕のこと必要以上を気を使わなくて良いから。あくまで普通に、友達のように接してくれた方がありがたいよ」

「でも……」

「でもじゃないの。いつまで経ってもそんなんだったら、僕が寂しくて死んじゃう。というか絶賛死にそうだから」

家主さんはらしくなく冗談を言い、緊張をほぐそうとしてくれる。

あたしはそんな不器用な彼女の気遣いに驚くと共に、笑いが込み上げ、少しだけ笑い声を漏らした。

「な、何……？・僕何か変なこと言った？」

「いえ、何も変なこと言ってませんよ。ただ、どうしてこんなにも家主さんが皆に慕われているのか、その理由が分かった気がしたんです」
「……？」

不思議そうに家主さんが首を傾げる。

あたしはその反応に更に笑い、本当に自分では分かってないんだな、とおかしく思った。

家主さんは実に魅力的な人間だ。

普段の笑顔だったり、さっきの気遣いだったりで人柄の良さが実に伝わってくる。さらに弱いところや誰もが持つ矛盾が何故か透けて見えて、それが彼女の魅力となって目が離せなくなる。……そのためか、いつの間にか絆されて、自然と信頼してしまうのだ。

「……やっぱり凄いです、家主さん。呪いのことも受け入れて、皆に慕われる魅力も持ってて。……どうしてそんな風な在り方が出来るん

ですか？」

僻みからではなく、純粋な関心からあたしは質問を投げかける。すると家主さんはその質問自体が予想外だったのか、ぱちくりと目を瞬かせ、キョトンとした。

そして次には本気で訳が分からなさそうに、

「……何で凄いと思うのかな。僕、最低な人間だし、立派でもないんだけど」

「え……？」

自分を卑下する発言に、今度はこちらが目を見張る。まさかそんなことを言う人だとは思ってもみなかったのだ。

「何でそういう風に自分を……」

あたしは困惑しながら家主さんへ問う。すると彼女はしまった、と言わんばかりに狼狽、珍しく目を泳がせた。

「……えーと。これ以上はちよつと言いつらいなあ。すまないけど、この話はなしにしない？」

家主さんは何処か焦っているのだろう。話題を無理やり切り上げようとしてくる。

あたしはこのまま追求したい気持ちに駆られたが、流石に家主さんが嫌がっているので、渋々ながらも首を縦に振った。

「ありがとう、凄く助かるよ」

家主さんが礼を言う。その顔はほつとしており、随分とさっきの話題が嫌だったことを窺わせた。

そうして数分黙ると、突然神妙になって、

「こゆりちゃん。唐突だけど、共同体、ちゃんと馴染めてる？」

「……ええ。皆優しくて、こんなあたしでも受け入れてくれます」

あたしは素直に答えた。

今まで対人関係を上手く結べなかったあたしだが、このプライマリーカラーでは自分でも驚くほどちゃんとやれている。

それもすべて、牛木草の魔法少女達のおかげだ。

あれだけ散々暴れまわったのに、牛木草の魔法少女達はそれを快く許してくれた。

それどころか、常にビクビクしてるあたしに歩み寄って、友達になろうとしてくれたのだ。

……そのことが、どれだけありがたかったことか。

常に学校では疎まれてたし、あたしは他のところでも俯いていた。真に受け入れてくれる公共的なコミュニティは、この共同体が初めてだ。

だからこそ、本当にあたしの居場所なんだなって感じられる。個人的には、家族のような情さえ沸き始めているのだ。

「皆のためなら、あたしでも頑張れるなって思います。……それこそ命をかけてでも、守りたい場所ですよ」

「……そう」

あたしの返事に、家主さんが何かを考えるように俯く。

そしてまた先程以上の時間をかけて黙って、

『——じゃあ歌羽ちゃんと共同体のためなら、君は死ねるんだね？』

「……は？」

いきなりのテレパシーとその発言の内容に、あたしは疑問の声を上げる。

家主さんは口の前に人差し指を立て、あたしに黙るよう促した。

『ここからの話は周りに聞かれないだろうから、テレパシーでやるよ』

『え……、わ、分かりました』

家主さんの圧に押され、あたしはそのままテレパシーで答えてしまった。

もちろん、一体何なんだ、という気持ちで頭の中はいっぱいだ。

それを彼女に聞かされたため、あたしは再び心の声を念として飛ばす。

『それで話したのは……』

『……そうだね。単刀直入に言うと、この先何があったとしても、自分を投げ出すことはしないですってことかな』

『あたしが自分を投げ出す……？』

訝しげに問い返す。

だってそんなことなど、そうそうありっこない。

この命は大事だし、進んで痛い目になど会いたくないではないか。そんな思いを目に込めるが、しかし家主さんは首を振り、その考えを否定した。

『君、さっき言ったじゃないか。命をかけてでも守りたいって』

『……そりや言いましたけど、でもあれは言葉の綾っていうか、それぐらい大事って意味で——』

『——でも、本当にそうする危険があるように僕は感じる』

『……』

はつきりと言い切る家主さんの言葉に、あたしは思わず声を詰まらせる。

家主さんはあたしに対して、同情や憐憫といった感情の念を届けた。

『君、歌羽ちゃんには心酔してるし、共同体には仲間意識があるでしょ。……どっちも悪いこととは思わないけど、だからってそれがすべてと信じこまない方がよいよ。きつといつか、……それらが自分を滅ぼす』

『……!?!』

心の中を言い当てられたような気がして、あたしは瞠目。何故そんなことが出来る、と警戒心から家主さんを無言で見つめると、彼女はテレパシーでその答えを言ってくれた。

『だって君、なんか僕と似ているところがあるから。それに分かりやすいし、見ているだけで何となく分かっちゃった。歌羽ちゃんに心酔してることとか、共同体に対する思いとか』

『……そうですか。でも、何でそれが身を滅ぼすことに繋がるって言い切れるんです?あたしがそこまで自分を蔑ろに出来るんです?』

あたしはやっと手に入れた信念がバカにされた気がして、声に刺を含ませる。

しかしそれが通用しないどころか、ますます家主さんは哀れむような視線をあたしに向ける。

『……蔑ろに出来るでしょ。だってこゆりちゃんってば、自分の価値を自分の大切なものの価値の下に置いてるよね?これまでの行動

を見ていても、それは明らかだよ』

『確かにそれは……』

言い返せないかもしれない。

あたしってば共同体に入ってから、歌羽や他の魔法少女の手伝いはつかりしてる気がする。

しかもいじめられている時と違って強制ではなく、自分から進んでやっているのだ。

そうやって共同体のために働いていると、えもいわれぬ充実感に溢れて、楽しくて仕方ない。

最近では自分のプライベートまで投げ打ってまで働いている。

『そんなんだったら、いつまで経っても誰も救えず、自分を傷つけるだけで終わりだ。こゆりちゃんもつと自分を優先させてあげないと』

『……』

『すべてを投げ打ったところで、何にもならないんだからね』

家主さんは何故か苦々しそうに、そしてそれに耐えるかのように唇の端を曲げ、あたしに忠告する。

その胸の内には、一体どんな思いが渦巻いているのだろうか。

家主さんの表情だけでは類推することすら出来ず、あたしはどうにももやもやしてしまう。

『……貴女、何を考えているんですか？』

『何をつて……、僕は君に、もっと自分を大切にしてほしいなって考えてるけど』

抱えているだろう感情について聞くと、明らかにはぐらかされたような返事が返ってくる。

さっきの自分を卑下する発言といい、かなり妙だ。

その先に、家主さんにしか分からない何かがあるのだろうか。

あたしははつきりしないのに納得がいかなかったが、やはり踏み込むのは躊躇われて、口をつぐんだ。

『……』

家主さんはそんなあたしに、一瞬だけバツが悪そうな表情を浮かべた。だが、すぐに気を取り直すように首を振ると、真剣な顔になり、言

い聞かせるようにあたしと目を合わせた。

『良いかい。自分を大切にしないきや、君は自分を見失うことになるだろう。自分を犠牲にするし、最悪命を落とす。それにもしも大切なものを失ったら、君みたいなタイプは自棄を起こしかねない。……そうなって欲しくはないんだよ』

『……ですが、あたしはやっと抱いた信念を貫こうと——』

『その信念を貫くのと、自分を大切にしないのは、同義じゃない』

頭の中で、怒った響きが広がる。目の前には少しだけ目つきを鋭くさせた家主さん。

あたしは一体何が正しいのかよく分からなくなった。

だって、家主さんの言っていることが、あたしには完全に理解できない。あたしが自分を見失うとか、自棄を起こすとか、意味不明だ。それでも、これだけ家主さんが真剣だと変な説得力がある。故に、どれを信じれば良いのか迷う。

『訳が分かりません……。同義じゃないって、どういうことなんですか？』

『……それは僕が言っても意味がないよ。だけど分かんなくても良いから、僕の言ったことと向き合おうと約束して』

『……』

『……ほら、指切り』

小指を立てて、あたしへ向ける。あたしは少しだけ逡巡すると、仕方なくその小指に己の小指を絡ませ、指切りをするのだった。

龍神のお守り

「……こゆり、帰っちゃいましたね。もうちよつといても良いんですけど」

「そうですね。私もこゆりちゃんと話すの結構好きですし」

うたがドアの方を向く横で、小豆さんが少し寂しそうに最後のポテチに手を伸ばした。

彼女が今さつき言った通り、こゆりは柵の掃除を終わらせて、たった今廃倉庫から出て行った。

普段は少し駄弁っていくのだが、今日は恐らくサチや他の魔法少女と用事があるのだろう。

かなりウキウキとした様子だったし、間違いない。

どうやらこゆりは、順調に友人を増やしているようだ。

ようやく、閉じていた心を素直に開けるようになったのかもしれない。

……とても良い兆候だ。正直、上手く馴染めるか心配していたので、少しほっとする。

「あの子結構良い子だし、根は穏やかに見えるんだな。風来坊として暴れ回ってたのが嘘みたいなんだな」

サクトさんが柵の方に視線を移す。

そこは散らかっていたのに、こゆりのおかげですっかり綺麗になっている。

自分達の私物で溢れているのに、その整頓を任せられている時点で、こゆりはそこそこ認められていると言えるだろう。

サクトさんの言う通り、アレで根は穏やかなのかもしれない。性格自体も、本人が思っているより親しみやすく、可愛らしいところがある。

何より、最近では自身の欠点を直そうと努力しているのが目に見えて分かるので、これで周りに受け入れられない方がおかしい。

こゆりは今ままで周囲と上手く馴染めなかったが、その原因は多分、環境よりも本人にあったのだ。

話を聞くに、彼女は幼い頃にハブられたという。そのトラウマがずっと残り、盛大に拗らせていたに違いない。

それで自ら心を閉じ込めていけば、そりやずっと一人のままだ。

……まあだからといって、こゆりが自業自得だとも言い難い。これはある意味仕方がなかった。

幼少期の挫折っていうのは、良くも悪くも影響がデカイ。うただって小豆さんがいなきゃ、〃呪い〃に立ち向かおうなどとは思えなかっただろう。

そういう意味では、こゆりが共同体に入ったのは良かった。

ただ――

「……なんだろう。何だか、嫌な感じがする……」

ポツリと呟く声が、隣からした。

振り向くと、因幡さんがサイドテールを相変わらず弄りながら目を伏せている。

この場にいる全員が、一斉に黙りこくった。

それは因幡さんの発言が、〃皆〃が何となく思っていることを代弁したからだろう。

サクトさんは悲しそうな表情になり、因幡さんは不安そうに眉を下げ、ニツカは冷静な顔で考え込むような仕草をする。うたの方は、皆のように複雑な面持ちをしていた。

そんな中、小豆さんもまた深刻げに瞳を鋭くさせ、自身の側に立つ家主さんへと声をかけた。

「……貴女、何かテレパシーでこゆりちゃんと話していましたよね？何を話していたんです？」

「それ、必ず聞かれると思ったよ」

家主さんはうた達の顔を見渡す。それが嫌にわざとらしい。

「もしかして家主ちゃん、わざとアタシ達の前でこゆりちゃんと話してた？」

「わざとって感じじゃないけど、でもこゆりちゃんのこと皆に話したいことはあったから。だから彼女と〃話した内容〃は明かさないけど、〃話した〃こと自体はバレても構わないかなって」

ニツカの指摘に、家主さんは悪戯っぽく小さく笑う。いまいち食べないのか食えなくないいのか、よく分からない。

……前から思っていたが、この家主という人物は意外と掴みどころがない。人柄の良さとかは伝わってくるのに、肝心の部分がまったく見えないというか……。これ、意図的に隠されていないか？

「……」

うたが胡乱げな目で家主さんを見てみると、ふと彼女は一瞬だけ――そうほんの一瞬だけ笑みを消し、次にセーターに付けられたポケットに手を突っ込んだ。

そうして取り出し、小豆さんに渡されたのは、二つの白いお守りだった。

なんてことない、神社でよく売られていそうな普通のものだ。一つ変わっている点があるとすれば、裏側に金と銀の二対の龍が刻まれていることだろうか。その刺繍は見事なもので、思わず見惚れてしまうくらいだ。

「それ……」

因幡さんが驚いたように、小豆さんの手の中のお守りを見返す。それは、どうしてこんなものを持っているのか、と言わんばかりの反応だった。

「……因幡ちゃん。何かあるの？このお守りに」

すぐに、ニツカが誰よりも早く疑問をぶつける。すると因幡さんは、お守りを裏側にした状態で見せるよう、小豆さんに指示。

彼女は小豆さんの掌に乗る二つのお守り、そこにある二対の龍を指し、

「これは早島やここら一帯で信じられてる、金早龍と銀島龍、二対の龍を祀る龍神信仰のお守りだよ……。特にこのタイプのは、ある願掛けのために用いるものだよ」

「ある願掛け……？」

「互いの髪の一部をこのお守りに入れて交換し合い、安全を願うっていう願掛け。かなり親しい間柄とか、親族間で行うのが慣例なの。」

でも、龍神の刺繍は腕のある人じゃないとできないから、そうそう

お守りは作れないし……、手に入れられるのは、それこそ信者の中でも一握りのはずなんだけど……」

因幡さんが困惑気味に説明する。

うたはそれを聞いて、先ほどの因幡さんの驚きに納得がいった。

このお守りは、思っているよりも相当希少性が高い。

多分、年に数個程度しか作れないレベルだろう。一つ持っているだけでも相当凄いことなのだ。

しかし家主さんはそんなお守りを、二つも出してみせた。しかもなんでもない風に、ポンつと。

これで不思議に思わないはずがない。

「すごいね、因幡ちゃん。普通の人なら、そんなの知らないはずなんだけどな」

お守りのことを説明されて感心したのか、家主さんが因幡さんを褒める。

因幡さんは何処か微妙な顔をしながら、説明できた理由を答えた。

「私の家は神社なんだけど、そこで龍神信仰に係のある神様を祀ってるから……」

「へえ……」

また一瞬だけ笑みが消え、別の感情が顔に浮かぶ。しかし“一瞬”というように、それは刹那のことだ。探ろうにも、すでに彼女は仮面を被るように、ただただ無表情になっている。何を思っているのかまるで判別がつかなかった。

いつになく、普段の家主さんらしくない。彼女がこのようになるなど、今まで一度たりともなかった。

こゆりと話したり、お守りを渡してきたり。今日は妙な行動ばかりする。おかげでうただけでなく、全員が家主さんに不審げな目を向けている。

「……それが何なのか分かったけど、何でそういう貴重なものを持っているんだな。記憶喪失で、しかも小豆のお世話になっているお前に、そんなもの手に入れられる術はないんだな」

皆を代表し、問いを投げかけるサクトさん。家主さんはそうだよ

ね、と、苦笑した。

「実はね、僕もこのお守りのことは知らなかったんだ。……だけど、キュウベえが昨日の夜、僕のところに唐突にお守りを持ってきたんだよ。キミに渡すのが、一番ふさわしい気がしたからねって。」

……キュウベえ曰く、二つのお守りは失踪したミズハの物らしい。そしてそれぞれお守りの中には、一房髪が入っていた。話を聞くに、それは「ミズハと順那じゆんな」の髪だっけさ」

「……髪」

うたはその事実を聞いて、眉を寄せた。

あいつのやることは、いちいち信用がならない。うたを魔法少女にしたことといい、その真意が読めないのだ。

そもそも順那という人物が誰かもまったく分からないし、このお守りがミズハのものとはいえ、それをわざわざ持ってきたのも意味が分からない。

怪しさMAXの話だった。

「どういうことですか……」

相方である小豆さんも、初耳らしい。その衝撃の事実を目を見開いている。

他の調停役の人達も、小豆さんと同様の反応をしていた。

「ごめん。ちよつと僕も動揺しちゃって。早めに言わなきゃいけなかったんだけど、感情の整理がなかなかできなかったんだ……」

気まずそうに家主さんが謝る。それは心底罪悪感を抱いているという感じで、そのせいか責めるのも悪いように感じる。

小豆さんは、はあ、と溜息をついて、気に病むことのないよう言った。

「朝言ってくれなかったのは残念でしたけど、今皆が集まった場で話してくれてるから別にそのくらい良いですよ」

「……ありがとう」

礼を言い、家主さんは頭を下げる。小豆さんはふっと笑い、どういたしまして、とこちらもペコリと頭を下げる。

そんな少し息の合った微笑ましいやり取りの後、小豆さんは気を取

り直し、何故キュウベえがお守りを持ってきたかの確認をする。

「それで、ヤツらは一体どういうつもりだったんです？」

「どうやら、キュウベえが僕のことミズハの親族か何かだと思ってるらしくてね。それを調べる手がかりとして、髪の毛が入ってるお守りを渡してきたんだよ」

「キュウベえがそんなことを疑って……」

それはある意味、当然の流れかもしれない。

ミズハのことを知るサチが、家主さんをそのミズハと似ていると称した。

なら同じくミズハのことを知るキュウベえも、家主さんがミズハと似ていると思っても不思議ではない。家主さんがミズハの親族であると疑うのは自然なことだ。

「小豆は知ってると思うけど、僕は確かに魔法少女なのに、キュウベえには僕と契約した記憶がないらしい。僕の存在なんて、知らないっていうんだ。」

……だから、彼も僕の正体が知りたんだろうね。イレギュラーである僕の正体が……」

家主さんは口元を歪めた。苦笑と自嘲が混じり合った笑みが、その複雑な感情を物語っている。

……キュウベえでさえ、自分のことが分からない。その事實は、記憶喪失である家主さんにとって辛い現実なのだろう。

キュウベえはすべての魔法少女のことを覚えている。大なり小なり、彼の中にその思いやカケラが残っているのだ。だけど家主さんだけがその例外。仲間外れ。

これでは世界にたった一人、取り残されたようなものだ。

その孤独感は、やはり筆舌し難いことかもしれない。

……うただって、もし同じ立場だったら絶望すると思う。

「……でも、うた、分かりませんね。何で手がかりとして髪なんかを渡してきたのでしょうか？」

うたは失礼なことを承知の上で、さっさと話を進めた。

あまりしんみりし過ぎては、逆に気持ちが切り替えられなくて、

そっちの方が悪いような気がしたのだ。

「……………」
そしてその気遣いは、幸いなことに家主さんのためになったらしい。

あたしが話を進めたことで、周りも悲しげなものから真剣な顔に戻った。

家主さんもそれには少しばかり驚いていたが、しかしすぐに皆と同じような表情をし、

「DNAだよ。キュウベえは、この髪を使ってDNA鑑定をさせたがってるんだ」

「…………あ、そっか。それならミズハと家主ちゃんの関係が調べられる…………!!」

その手があったか、とニツカが手を叩く。

確かにDNAを見れば、ミズハと家主さん、両者に血縁があるかすぐに分かるだろう。さらに言えば、どれだけ血が繋がっているかも判別できる。

DNA鑑定をさせるのは、実にキュウベえらしい合理的な判断だ。

しかし、

「なら順那とかいうやつのは髪は、必要ないんじゃないのかな。ミズハと家主ちゃんのものだけ比較すれば良いし」

「そうですね」

ニツカの意見に頷く小豆さん。

順那、という人物が誰か知らないが、キュウベえが知りたがっているのは、あくまでミズハと家主さんの血縁関係の有無である。順那の髪を渡したところで、何の意味もないのだ。

「ていうかそもそもその話、ミズハがどうしてお守りを二個も持っていたんだな。それこそ奇妙なんだな」

サクトさんが訝しげに首を傾げる。

家主さんがお守りを持っていた理屈は理解できた。が、何故ミズハがお守りを所有していたかについては、その理由はまったくと言っていいほど分からない。

……ミズハ如きただの女子中学生が、果たして希少なお守りを自力で手に入れられただろうか。やり方次第では出来るかもしれないが、まあ普通に考えて難しい話だ。一般の、それこそ大人の人でさえ、入手するのは簡単ではないみたいだし。

そこには何か特別な事情がある筈だ。

「つてことは、もしかしてミズハは普通の子じゃなかった……？」

「——多分、そうだと思うよ……」

うたの呟きに、ふと隣の因幡さんが肯定し返す。うたが驚いて見ると、彼女はうたの心を読んだかのように詳しく話した。

「私もあまり知っているわけじゃないんだけど、早島にはすつごく古い家がたくさんあってね。その人達に権力が集中しているの。その中でも特に歴史の古い家が、龍神信仰に関わる一族で……、確かミズハがいた東家も、その一族の家系に連なる血筋だったと思う。」

彼女達一族は龍神信仰の神社を代々管理していて、ある意味信者中の信者……。だから、ミズハがお守りを手にしていたとしてもなんら違和感はない……。

その順那つて子もミズハに関係してる子だろうし、順那の遺伝子と家主さんの遺伝子を調べて、キュウベえは何かしたいんじゃない……？」

「じゃあ順那は……」

「キュウベえは、従姉妹だつて言つてた」

ようは、血のつながりがある「親族同士」だということだ。

つまり、それぞれのお守りに髪が入っていたのは、そういうことだったのだろう。

……だが、どうしてミズハが二つもお守りを持っていたのか。

もう一方は、その順那というミズハの従姉妹が持っていないとおかしい。

それでは願掛けは成立しない。

「……まさか交換するつもりだったけど、出来なかったとかだなか？」
「うーん、そうかもしれないですね……。ミズハのところに二つともあつたつていうことは、二つともミズハが持つてたつてことだし。順那は

お守りを渡したけど、何かあつてミズハの方は順那に渡していない、つてことになるんじゃないんですか？」

小豆さんとサクトさんが、親友同士で推論を述べ合う。

それは少しだけ穴があつたが、まあ理屈上は確かにあり得そうな話ではあつた。

だが家主さんは首を振り、

「ミズハ達は、実際にお守りを交換しあつてるよ。ただ、順那はもう死んでる。ミズハがお守りを二つも持っていたのは、単純に順那の形見としてお守りを持っていたからなんだ」

「!?!」

家主さんが順那の死を告げた途端、誰かが息を飲む。それ程までに「死」というワードは重い。

空気が一気に暗くなる。誰もがその順那の死に思いを馳せているのか、しばらく無言の状態が続いた。

「——キュウベえによると、順那はミズハのせいで死んだんだつて……。順那はミズハを救うために魔法少女になつて……。その直後、彼女はミズハのために力を使い果たして、そのまま……」

やがて、耐え切れなくなつたのだろう。家主さんが必要以上にゆっくりと、辿々しく喋つた。

小豆さんはそれに目を伏せ、悲しげに声を沈ませる。

「そうですか……。ということはミズハはその子の……。彼女が今何処で何をしているか分かりませんが、大丈夫でしょうか……」

小豆さんは、どうやらミズハのことを心配しているようだ。

そうなるくらい、ミズハが可哀想な境遇であるのは間違いない。従姉妹という、場合によっては姉妹ぐらいの仲にもなる血縁が死ねば、ミズハ本人もやり切れなくなるだろう。しかも自分のせいでとなれば、尚更だ。

うただつて、ミズハにはつい同情してしまう。

「絶対、大丈夫じゃない」

家主さんは額に手をやり、何かに耐えるように唇を噛んだ。そのわけにはつきりした口調に、ニツカがすぐさま質問を浴びせる。

「家主ちゃん、ミズハのこと何にも知らないのに断言できるんだね。その根拠は一体何処にあるの？」

「……根拠なんてない。でも、そんな気がするんだよ。あの子はきつと、〃ソレ〃には耐えられない。あの子は必ず心が折れてしまう」

「……」

先程以上にきっぱりと言つてのける。それは、ミズハという人物を深く知らなければできないくらい、強く確信に満ちた発言だ。

そこに何か「繋がり」があるのは明白で、やはりミズハと家主さんには、何かただならぬ関係があるのだ。

この人は、無意識に何かを覚えている節がある。……その記憶の中に、ミズハに関することがあってもおかしくない。

「奇妙なんだけど、僕とミズハ……。そして死んだ順那。調べなくても、きつと血縁なんだろうなつてのは何となく分かるんだ。……このお守りも妙に懐かしいしき。どっちかと姉妹でも驚かないんだよね」
家主さんは苦笑混じりにそう言う。そこにも強い確信が秘められているようで、彼女としてはほぼキュウベエの説を信じているらしい。

他の人も、そこだけは確定だろうという雰囲気を出している。だが、この場でただ一人、因幡さんだけは納得がいていないようだ。

サイドポニーの少女は、その見た目からは想像がつかないくらい訝しげな表情になって、

「……だけど、苗字が違うよ。それに弦家なんて、龍神を祀る一族の中にはいなかった筈……。たとえミズハと似ているのだとしても、他人の空似という線だつて——」

「じゃあ案外偽名なんじゃない、弦家角なんて名前」

「……え？」

横から割り込んできたニツカ、その彼女の言うことに、因幡さんが目を丸くする。

それは恐らく全員がそうだっただろう。特に家主さんなんて愕然としている。

そりゃあそうだ。だってまさか、そんな可能性があるとは思わな

かっただろうから。

「家主ちゃん、記憶喪失なんだよね？ だったら本名だって忘れてるかもしれないじゃん。それで他に覚えている名前を、自分の名前だと思いい込んでても不自然じゃない。……記憶を誤認してない、なんて確証、家主ちゃんにだってないでしょ？」

ニツカがさらつと、そんな冷たいことを言う。

しかし確かに、有り得ない話ではなかった。

記憶がほぼない以上、その覚えている名前が他人のものかどうか、状況によつちや判別できないだろう。何処かでごつちやになつても、仕方がない気がする。

それにもしこのことが本当なら、たとえ一族に連なる家の苗字じゃなかったとしても、ミズハと血縁であるという可能性は消えない。だって、その「苗字」は本当の「苗字」じゃないから。

「そんなの有りえるわけが……」

認めたくないのか、家主さんが苛立ったようにニツカを睨みつける。

自分が信じているものを否定されたら、いくら穏和であろうと怒りを露わにするだろう。

だが、うたはニツカの言うことを正しいと思ったので、ニツカを擁護する様に彼女を支持した。

「うた、ニツカの言っていることは案外正しいんじゃないかと思いません。……一応辻褄は合いますし」

追い詰めるみたいで悪いが、はつきりしなければいけないことなので、うたは遠慮なく行かせてもらった。

案の定、家主さんの顔が曇る。

彼女は拳を握り、しばらく視線を彷徨させた後、

「……分かったよ。少しはその可能性があるんじゃないかと疑ってみる」

と、無理やり納得させたかのように肯首した。

「家主、無理しなくて良いんだな」

「でも、二人が言っていることも現実的にならないとは言えないし」

気遣うサクトさんに、家主さんがそう言って俯く。うたも罪悪感で少し俯き、一言だけ謝った。

「すみません」

「良いって。ここで口を濁す話題でもなかったしね」

家主さんは、酷いことを言ったうた達に笑う。本当にこういうことをやってのけるあたり、彼女は精神的に大人だ。

これにはニツカも若干、バツが悪そうにしている。ドライのくせに、この辺りはまだまだ甘い。

「——話を、一番最初に戻しましょうか」

小豆さんが、リーダーらしく調停役の顔を眺めながら仕切る。そうして家主の方を向き、一際厳しい表情で問うた。

「貴女は初め、こゆりちゃんのことと皆に話したいことがある、と言っていますね。それは一体何なんですか？

今さっき話したのは、あくまで自分やミズハのこと。決してこゆりちゃんのことじゃないじゃないですか。……この話が、こゆりちゃんどう繋がるっていうんです？」

「……」

家主さんは無言で黙る。

どうやって話したら良いのだろう。そんな風に悩んでいるかのように、彼女は苦笑いを浮かべた。

「えーと……、僕ね、お守りの中の髪を見たとき……、少し記憶が戻ったんだよね……。出来ることを思い出したっていうか……」

「——!?!」

今度は別の意味で、全員が目丸くする。

それは今まで明かされた事実の中で、一番衝撃的な内容だったかもしれない。

ニツカなんて、驚きすぎてさっきから口を開けっ放しだ。

「何処まで思い出したんですか、家主。貴女は一体……!!」

「お、落ち着いて小豆。思い出したって言っても、ほんのちよこつと!! さっきも言ったけど、固有魔法で出来ること思い出したただけだから!!」

焦りのあまり立ち上がり、家主さんに詰め寄る小豆さん。そんな彼女を家主さんは両手で押さえ、クールダウンするよう促す。

小豆さんはそれでハツとすると、少し気まずそうに咳払いし、何食わぬ顔で席についた。

「家主……、思い出したことって何ですか？」

「完全にさっきのなかったことにしてるんだな……」

「はいそこ、シヤラップ。……で、実際のとこどうなんです？固有魔法で出来ることを思い出したって、具体的にどういったことまで？」

隣からの茶々を黙らせ、恵比寿小豆は改めて質問する。家主さんは逡巡するかのように髪を弄ると、

「……、その人から切り離された体の一部。髪とか、爪とかから、人体を再生させることが出来る、ってことを、思い出したんだ」

「どういう意味ですか、それ……」

「言葉どうりの意味さ。僕は固有魔法の応用で、人間の肉体の一部から、もう一つその人の人の肉体を作ることが出来る。いわば、コピーの肉体を作り出すことができるってわけ」

家主さんは冗談っぽく、とんでもないことを言っただけ。

人体のコピー、それは完全なクローンを作り出す、と言っているよ
うなものだ。

生死の一端を自在に操るその力は、普通ではない。

「……本当に、そんなことできるの？」

「出来る。呪いのせいで実演は出来ないけど……、やり方、分かるもん」

疑う因幡さんに、家主さんは目を見据えて断言する。

どう見ても、嘘をついているようには見えない。……にわかには信じ難いが、コピーの肉体を作り出せるのは事実のようだ。

「ただ、皆ご存じのように、僕の魔法は肉体にのみ作用するものだ。その精神までコピーすることはできないよ。魂と肉体は別ものだからね」

「じゃあ創り出したとしても、そのコピーの肉体は抜け殻だっただけか。……つか、家主ちゃん魔法どっちみち使えないし、抜け殻創っ

たところで使いどころなくないそれ」

「……」

ニツカが、皆薄々思っていることをポロリと口にする。

もちろんはつきりしとくべき話題なので、ニツカはわざと指摘したのだろうが、だからって言い過ぎだ。

おかげで微妙な雰囲気が流れてしまっている。

「ま、まあ、普通はそうだね」

家主さんは困ったような顔で、頬を人差し指で搔いた。そして次に真面目な眼差しになると、

「……でも魔法少女なら話は別だ。たとえ肉体を失ったとしてもソウルジエムさえあれば、コピーの肉体と上手くリンクさせて復活させることができる」

「家主、貴女まさか——」

奇妙な言い方をしたせいも、小豆さんが驚愕したように固まる。うたはどういうことだ、と前のめり気味になりながら、家主さんへと鋭い声を投げかけた。

「ソウルジエムさえあれば……。何で魔法少女の時だけ、そう都合よく上手くいくんですか？おかしいじゃないですか」

「……そうかもね。だけど、ソウルジエムはその持ち主の精神と密接に関わってる。可視化された心と言っても良いくらいだ。だからそのソウルジエムがあれば、肉体がなくなっても精神は無事でいられる」

「本当なんですか、それ……」

「僕は嘘は言っていない。……後でキュウベえにでも聞いてみると良いよ」

家主さんは最後の方を、より強調する。

そうなれば、流石のうたも黙るしかない。

キュウベえは酷い詐欺師だが、嘘だけは言わない。そしてそのキュウベえに聞いてみると言っている時点で、逆説的に正しいことを言っていると考えられる。

だから、家主さんの言っていることは嘘じゃない。すべて本当のこ

とだ。

「それから、ニツカちゃん。僕は魔法を使えないんじゃないやなくて、使ったら呪いが進行するだけだ。いつだってその気になれば、戦闘だって固有魔法を使うのだって、他の魔法少女と同じように可能なんだよ」

「……つまりいざとなれば、自分を頼れって言いたいなの？」

「うん。……自慢じゃないけど、僕ならこの場にいる全員、十分に片付けられる。この場で一番僕が強い」

ニツカの方を向いて、胸に手を当てる。

この発言も、強ち嘘ではない。家主さんの魔力は側にいるだけで強力なものであると分かるし、素人目に見ても隙がなさすぎる。何よりうた達の模擬戦を遠目から見ただけで、その欠点をピタリと言いつてるのだ。

それは、それ相応の観察眼がなければできないことである。その段階で、彼女は充分強者であると言える。

「——君達も気づいていると思うけど、こゆりちゃんってすつごく危なっかしいよね。自分を大切にしないというか……、あの子、僕達に全てを捧げる気にいるよ、多分」

うた達が抱いている嫌な予感を、家主さんは明確に言葉にする。

思わず、胸の辺りがちくりと痛んだのは言うまでもない。

思い返せば、色梨こゆりという少女は、あまり自分に価値を見いだせていないところがあった。

家族を壊したのが自分だと思ひ込んだり、愛される資格がないと自分を責めたり。

本質的に、あの子は自罰的なのだ。

だからこそ、自分を犠牲することさえ厭わない、ということなのだろうか。

「……そうだね。こゆりちゃん、私達のためによく尽くしてくれてるんだけど。でも、尽くし過ぎてる」

サクトさんが家主さんの言うことに頷く。小豆さんは渋い顔のまま、うたの方を見つめた。

「ええ。特に歌羽ちゃんへの思いが強い。……あの子、貴女に心酔していますよ」

「……ええ」

うたは、誤魔化すことなく肯定した。だって薄々、それは感じていたから。

戸惑うしかないが、うたという存在はこゆりの中で相当デカいものになっているらしい。

こゆりは自分の時間を消費して、うたに必要以上に尽くすようになった。

しかも心の底から楽しそうにするのだから、救えない。

正直、かなり異常だ。

色梨こゆりの在り方は、都合の良い道具のそれだ。決してイエスマンではないが、きつとうたが死ぬと言えば喜んで死ぬだろう。そうするくらい、周りしか見えてない。

それが幸せであり使命であると、いつの間にか思いこんでるのだ。

「こゆりがそうなってしまったのは、うたのせいです」

言い訳などせず、うたは自身の責任であることを認める。

うたは、手の差し伸べ方を間違えた。

今思い返すに、こゆりはあの時少し歪みかけてた。彼女の言動は、よくよく考えれば何処か普通じゃなかった気がする。

……当然だ。あんなに心の中がぐっちゃぐちゃになれば、おかしくもなるだろう。

だがうたはそのことにも気づかず、こゆりを正しく救えなかった。結果としてこゆりの依存心を増長させ、今の状態にさせてしまったのだ。

「だから、うたがどうかしないといけません。こゆりの仲間として」
うたがやらかしたことから、うたが責任をとらなければならぬ。
いい。

それにこのままでは、うたにもこゆりにも、そして共同体にとっても良い影響を与えない。

こゆりが恭順の姿勢を示す限り、彼女は永遠に格下の存在として扱

われる。共同体の子達は、こゆりをやがて便利屋扱いするだろうし、こゆりはいじめられていた時に逆戻りする。そしてそんなこゆりを側におけば、うたもこゆりを都合よく利用してしまうだろう。

それだけは絶対に嫌だ。

こゆりとは、対等な関係でいたい。手を差し伸べたものとして、彼女を見下すようなことがあつてはならない。

「別に歌羽のせいじゃないんだな。誰がこゆりを救ったとしても、こゆりはその救った相手に依存するんだな。こゆりはずっと一人だったから、仲間に対する執着心がきつと物凄いなんだな」

「……ありがとうございます」

サクトさんがうたにフォロワー入れてくれる。うたは素直にそのことに感謝し、お礼を言った。

「サクトちゃんの言う通りです。こゆりちゃんが共同体に依存するのは、どうしようもなかったことですよ。だから歌羽ちゃんだけじゃなく、私達全員でこゆりちゃんを変えなくちゃいけない。共同体の魔法少女の問題は、私達まとめ役が責任を持って解決するべきですから」
続いて、小豆さんも優しい言葉をかけてくれる。皆もそれに、口々に同意してくれた。

……サクトさんだけじゃなく、全員基本的に仲間思いなのだ。こうして度々気遣つてくれて、正直救われる。

うたはその思いに再び感謝し、はい、と答えた。

「——ともかく、この調子のままじゃこゆりちゃん、いつか自分を犠牲にして死んでしまうよ。」

でも、生きて帰れない状況にあつたとしても、ソウルジェムさえ無事なら僕がなんとか出来る」

強く強く、弦家住はそう告げる。

その目には覚悟を決めた光が宿っており、見ているだけで気迫が伝わってくる。思わず、気圧されてしまいそうだ。

「もしもこゆりちゃんに何かあつた時、僕を呼んでほしい。死ぬ気で助けるから」

「ですが、そうしたら呪いが……」

「かなり進行するかもね。」

「けど死んだらね、その時点でお終いなんだよ。どんなに絶望してたとしても、生きてりや後から希望が持てる。……死なんて、何の救いにもならない」

家主さんの声音に、憎々しげな感情が混じる。そこには、尋常ならざる怒りがあるような気がした。

……やはり、今日の家主さんはらしくない。

記憶を少し思い出したせいなのか、普段よりずっと感情的になって
いる。

感情の整理がつかなかった、と発言していた通り、多分彼女も動揺しているのだ。

しかしそれでも家主さんは、こゆりのために自分が出れることを皆に主張している。

そのお人好しっぷりに、こちらが呆れ果てるほどだ。この人は、どこまで優しいのだろうか。

「ではいざとなったら、本当によろしいんですね？」

「ああ、勿論」

小豆さんの確認に、家主さんは迷いなく答える。それを見て小豆さんは物思いにふけるかのように目を少々の間瞑り、そして開けると、
「……皆はどう思いますか？」

「ぶっちゃけやって欲しくはないんだな……。だけど本当に、本当に最終手段としてなら、考えないわけではないんだな」

「因幡ちゃんは？」

「私は……、サクトさんと同じく、一考の価値はあると思います。……それにこゆりちゃんの時だけじゃなく、他の子が命を落とした時にも使える蘇生方法だとも思います。……ですがその場合、どのくらい呪いが進行するのか調べるべきかと……」

「ニツカちゃん」

「アタシも異論はないよ。家主ちゃんがやるって言うなら、いざって時頼って良いんじゃないかな？」

小豆さんが皆の方を順に見、調停役達はそれぞれ自分なりの考えを

言っていく。

しかし、反対意見はない。その顔に迷いの差こそあれ、全員が全員、まるで打ち合わせたかのように、最終手段として考えるべきだと答える。

「歌羽ちゃん」

最後にうたの名前が呼ばれる。

うたはどう答えたものか、と緊張し、頭の中で今の感情と考えをまとめていく。

そうして黙し、うたは――

「……すいません。ちよつと今すぐ答えが出せないんで、次来るときまで考えさせてください」

とだけ言って、結論を先延ばしにしたのだった。

柘榴の夢

牛木草、あるビルの地下駐車場。

そこは普段から、人気がない。

こうして無断で入っても、車一つ止まってる。尚且つ、結構スペースがあり、思いつき走り回ったりしても、問題がない。

あたし達魔法少女が屯するには、都合が良い。そして、こういう場所——特訓場として絶好のスポットだ。

「頑張れよー!」

約二十メートル——少し離れた辺りにいるのは、背が低い、水兵の魔法少女。

あたしの同盟者であり、ここにいるメンバーの中で最も若い女の子、船花サチだ。

彼女はこちらへ手を振り、大声で声援を送っていた。

「ええー・ちゃんと見ててよねー」

あたしもそれに返すように手を振る。

そして十メートル離れて向かい合う、私服姿の赤髪の少女——江戸柘榴を見る。

あたしは彼女にも声をかけた。

「柘榴、しないの?」

「え?」

「だから変身。魔法少女にならないの?」

あたしは自分の服を指指す。

それは地味目のワンピース。

あたしの魔法少女としての装束だ。

ぼーとしていた柘榴は、それを見て気が抜けたような、ああ、という声を出した。

彼女はソウルジェムをゆっくりと掲げ、言われた通りに変身。花をあしらった、可愛い衣装へと身を包む。手には、顔程の大きさもある石の円盤を召喚し、ゆっくりと構えた。

対するあたしは無手。何も構えない。

「それじゃあ、これから模擬戦を開始するよ！」

サチが再び声を張り上げる。そして首から下げたホイッスルを、ピーと吹いた。

戦闘開始の合図だ。

「……！」

最初に動いたのはあたしではなく、柘榴だった。

彼女は初っ端なから遠慮なく攻撃を仕掛ける。

掲げた円盤から発射されたのは、七つに分光して放たれる光線だ。

スペクトル・ビーム。

確かそう呼ばれていた技だ。

ここでどうするのか。あたしは一秒でその結論を出す。

それは回避だ。

今までこのような場合、魔力を地面に流し、鉄壁を作っていた。

しかし、最近気がついた。

その方法では、自然と視界が悪くなるのだ。次にくる柘榴の攻撃に、対応し辛くなる。

だからここは、とにかく動く。それに見切れない程、ビームが速いわけでもない。

あたしは素早くその場を飛び去った。

元いた場所をビームが通り過ぎていく。しかし当然、柘榴は攻撃の手を緩めない。

続いて複数の光の矢を生み出し、一気に飛ばした。物量で攻める作戦だろう。

だが——それも無駄だ。

あたしは光の矢が生み出される前に、その魔力の波を感知している。

故に予測は可能。飛来する前には、もう別のところへ逃げている。柘榴が無表情の顔を、少しだけ焦らせるものへと変える。

分かりやすい。

あたしはこれを好奇と見て、回り込むよう走りながら、柘榴へ接近を試みる。

「……」

柘榴は脳筋らしく、真つ向から向かいうつつもりらしい。

あえてこちらに突っ込み、その手にある円盤が振り上げられる。

それは一見すると、近距離戦の武器としては、意外に見えるかもしれない。

しかし、これもこれで立派な鈍器だ。殴られたら、それなりの深傷を負うだろう。

ま、それはまともに当たればの話だけどね。

「――！」

前髪に隠れた柘榴の目。それが僅かに見開かれる。

円盤が当たる直前、あたしは右手のみでそれを払いのけたのだ。

当然、武器など持たずに。

柘榴が一瞬、ぴたりと硬直する。

何が何だか、という感じなのだろう。

だが、やったのは単純なことだ。

魔法で生み出した金属板、それで手の甲を瞬時に覆い、弾いただけである。

「い、いの……い！」

柘榴が怯んでいたのは、僅かな時間だけだった。

彼女はやくそくそ気味に、円盤を再度振り下ろし、時にはフェイントも混ぜて、あたしに何度も叩きつける。

あたしは先程同様、右手の金属板で対処。受け止め、左手は一切使うことなく攻撃を流していく。

正直言つてそれは少し……いや、かなり簡単なことだった。

なんせ全然重みがなかったのだ。それに何だか、柘榴が遅い。遅すぎる。

「ふっー！」

鋭く息を吐くと共に、軽く足蹴りをかましてやる。ちょうど柘榴のすね辺りに直撃した。

そして、どたん。これまた呆気なく柘榴が倒れる。

あたしはその彼女の首へ、左手の手刀をとん、と軽く当てた。同時

に右手で円盤を取り上げながら。

これで柘榴に反撃の目はなくなつた。この勝負、あたしの勝ちだ。サチがホイッスルを吹き鳴らし、戦闘終了の合図をする。

柘榴は少し……何故か惚けたようにあたしを見つめていた。

あたしは彼女から左手を離すと、円盤を返し、右手を差し出す。

「お疲れ」

「……ん」

柘榴があたしの手を取って立ち上がる。

しかし返事は短めで、あたしへ視線を向けなかった。

その後も、何か考えるように黙り込む。

……完全に、またぼーとし始めていた。

「二人ともー！ 特訓してそろそろ時間経つし、喉乾いたろ！ 水飲むか、水！」

あたし達を労おうと思つたのか。

サチはそこら辺に放つていたナツプサックから、水のペットボトルを二つ取り出し、それを持ってとたとたと走ってくる。

……が、柘榴の変な様子に気がつき、訝しげな表情となつた。

「……おい、柘榴？」

「……、え？」

きよとん、と柘榴が目をぱちくりとさせる。

なんだか、心底びっくりした感じた。無表情のくせに、リアクションがもろに出ている。

「どしたの？ 何か風邪でもひいた？」

「……ごめん。ちよつと考え事してた」

柘榴はすぐに謝ってきた。サチがじと目になりながら、少し拗ねたように言う。

「……なら良いけどさー。でも、この船花様のこと無視しないでよね！ すっごいそういうの、寂しいから！」

「ごめんごめん。もーやんない」

「むー」

なおも柘榴が謝るが、サチは御立腹そうに頬を膨らませる。

それでも、あたし達にペットボトルを突きつけるように渡すのだから、彼女は優しい（ツンデレだが）。

本当、根っから良い子だ。あのクソガキの入理乃とは大違い。

「ありがとう」

お礼を言ってから、あたし達はペットボトルを受けとる。

ちょうどサチの言う通り、喉が渴いてきたところだったので、非常にありがたい。

柘榴もそうなのか、あたしがちびちび水を飲んでのんに対して、ガブ飲みだ。

あつという間に水が一本分なくなる。

「……で、さっきの奴、どんな感じだった？」

あたしは審判をしていたサチへと、模擬戦のことを聞いた。

ここ最近、時間があれば今日のように柘榴と特訓している。

教官はサチだ。

ベテランということもあり、彼女が自ら申し出た。

最初は大丈夫かな……などと思っていたが、これが意外や意外、案外分かりやすい。

……といっても、入理乃が残した特訓メニュー表（辞典レベルの厚さ）を、ただ読み上げてるだけだが。

アドバイスは的確でも、だからといって、彼女自身が物を教えることに向いているわけじゃない。

いっちゃん悪いが、サチはまだ小学生だ。……まあ、そういう技術なんて持ってない。

それより、教官として真にありがたいのは、難解な特訓メニュー表を詳しく解説してくれることだ。

サチは入理乃の相棒を務めただけあり、入理乃関連の物事には非常に強い。

おかげで、特訓メニュー表の恩恵を受けることができる。

「結構、動けたって思うのよね。なんか前回よりも調子良くなかったかしら？」

「……いや、調子良かったどころの騒ぎじゃないと思う。正直言つて

ヤバ過ぎんだろ、テメエ」

……サチは何だか若干引いている顔で、そう暴言を吐いてきた。横では、しきりにこくこく柘榴が頷く。

なんかすんごい失礼だ。軽くカチンとくる。

「ちよつとどういう意味よ、それ」

「だって、アレだよ？ 柘榴が負け続けてたから、武器を使わないってハンデをこゆりにやったんだよ？ なのに、何で圧勝してんの？

普通に考えてあり得ねーだろ」

「……そうかしら」

「そうかしら、じゃないよー。私、マジでびつくりしたんだからね？

なんかものすつごい速さで回避しまくるし、まさか片手で応戦されるなんて思わないし……、てか反則だよね。何なの、何食ったらここまで違いに差が出るの？ 同じ新人でしょ？ もー、私負け続けてすつごい嫌なんだけど」

首を傾げると、物凄く早口で柘榴から抗議された。

ハンデをつけられた分……ちよいとマジになり過ぎたかもしれない。

「ごめんなさい……次からはもう少し、手加減いたします……」

「マジでこゆり、ここ最近強くなりすぎよな。私でもたまに勝てるかどうかって思うんだけど。……何したの？」

サチが探るように見てくる。

だが、そんな目で見たって、あたしは特別なことなど一つもしていない。ただ真つ当に努力を積み重ねただけだ。

だからあたしは、正直にそれを言った。

「……帰った後でも自主練してるだけだけど」

「何時間？」

「え？ そりゃ一時間とかそこら辺……？」

「思ったより普通のことしかしてねー……。それでこれとか何なん、テメエ」

ますますドン引きするような顔になるサチ。そつちから聞いてきたのに、何なんだその態度は。

「薄々思ってたけど、こゆりは超天才……って奴なのかもね。その内、誰も勝ち目がなくなるんじゃないかな？」

「あたしが……？」

「うん。皆噂してるもの。風来坊は、牛木草で最強の魔法少女。牛木草の鉾だつて。すごいよね！」

不満げだったのが一点、柘榴が何だか、誇らしげにそうあたしに伝えてきた。

その噂は、あたしとしては初耳だ。

最近、特訓以外にも人助けとか、歌羽の手伝いとか、色々してるから……そのせいで妙な噂が広まったのかもしれない。

何だか複雑な気分。

魔法少女になって、化け物って親から言われたからかな。魔法の力って、何だか良いイメージないのよね……。

それで天才って言われても……、あたしとしては、うーんって感じだ。

もちろん、まったく嫌ってわけじゃないけど。

信頼されるのはやっぱり嬉しいし、皆を守る力は、あればある程良い。

「でも牛木草で最強とか……、そこまでは実感ないわね……。やっぱリサクトさんとか、小豆さん辺りとか強いし……」

「そいつらベテランだよ？ 経験積んでんだから、強いなんて当たり前じゃん。こゆりはそういう過程すっ飛ばして強くなってるから、ヤバ過ぎだつて言ってるの！ 良い加減自分の出鱈目を自覚しろよ！ そういうの、側から見ればどうかと思うんですけど！」

「そうなの……？」

「そうだよ。私がいかにそう思ってるって！」

珍しく語気を強くする柘榴。

……やっぱ、ここ最近負け続けたの、根に持ってるよね。

けど、そりゃあそうか。あたしの態度って、柘榴からしてみれば腹立たしいだけだわ。

めっちゃくちゃ強いのに、強くない。自分はまだまだだーなんて言わ

れたら……、馬鹿にされたみたいない気持ちにもなるだろう。

更には今回の模擬戦でガチっちゃったし……つーか調子が良いんじゃないとか言っちゃったりしちやったし……これじゃあイキってるのと変わらない。

「ごめん。あたし、柘榴の気持ちも考えず……。なんかデリカシーなかった……」

あたしはしゅんとなって謝る。

柘榴は懐が深い性格のためか、それだけで微笑して、うんと頷いた。

……が、サチは、あたしを見て何処かやりにくそうに呟いた。

「……最近、こゆりがしおらしくて気持ち悪い。あんなに気難しくて分かんず屋だったのに……」

「……いや、前はその……状況が状況だったからさ」

……以前のあたしって、常時追い詰められていたようなもんだったのよね。

自分を保つことに一生懸命で、周りのことを見る余裕なんて全然なかった。

だから、誤魔化そう誤魔化そうって意固地になっちゃってたのだ。そうすると、当然直すべきもんも直らなかつた。刺々しくなっちゃったのも、気を張り詰めていたからだ。

「だけど、すつこい今は楽なのよ。肩に力を入れなくて良いっていうか……、自分のこと、偽らなくて良いんだなって思えるの。だから素直になれるのよね。」

これも……歌羽とか、サチとか……あと柘榴のおかげよ。あ、ありがとう……」

途中から何だか恥ずかしくなってきた、あたしはしどろもどろになる。

そして、せめて恥ずかしいのを誤魔化すようにと、力なくはにかんだ。

……柘榴とサチが顔を見合わせる。誰こいつって表情だ。

「……以前のあいつは何処に行ったんだ？」

「すつこく、性格が激変してるよね……」

コソコソ話し合う二人。なんかすつげえ、悪口言われてる。そんなにあたしがおかしいか。

これには流石のあたしも文句を言うぞ。

「……ちよつと、好き勝手言わないでくれるかしら。あたしだって、好きで突っぱねてたわけじゃないのよ。それに、性格が激変したって言うけど、元からこんなものよ？ あたしって、むしろ弱気で大人しいタイプだし」

「まあ……たしかに、会った当初がまさにそんな感じだったけども……、その後がその後だったからねえ」

サチが困惑気味に呟く。

サチと本格的に付き合い出したのは、あたしがホームレスになってからだ。

その頃と今のあたしでは、結構ギャップがあるだろう。

……そりゃ、精神状態が大きく違うわけだし、サチが慣れないのも無理はないかもしれない。

「まあだけど、良い変化だよ。私は以前のこゆりより、今の方が好きだよ」

「そう？」

「うん。だって、親しみやすいんだもん。こゆりって、意外と穏やかで、照れ屋さんだよ」

「意外って……」

あたしは思わず髪を弄ってしまう。

……何だこれ。何か、めっちゃやむず痒いですけど。

「そうだな。こっちの方が本当のこゆりって奴なんだろ」

サチが柘榴に便乗するよう、ニツと微笑む。……ますます胸の内がざわざわしちやって、顔に熱が集まっていくみたいだ。

こ、これ以上はまずいっ。

「は、話を戻すわよ。さっきの模擬戦どうだったの？ サチ、貴女見たんでしょ」

「……。こゆり、別に恥ずかしがらなくても良いんだぞ？ どうせ嬉しいくせに」

「……へあ!? え、……えと……」

あたしはいきなり凶星を突かれ、あわあわとしてしまう。顔は真っ赤っかだ。

そんなあたしに、柘榴とサチは生暖かい目を向け、少しニヤニヤとした（といつても柘榴は微笑レベル）。

これ、絶対揶揄われてる……! 揶揄われてるよ……!」

「ご、ごほん。とにかく、あたしのことより柘榴よ……。柘榴がどうだったか、まだ言っていないでしょ。そこら辺どうなの、サチ」

このままでは埒があかない。

わざとらしい咳払いを一つし、あたしは無理矢理、話題を軌道修正する。

それでサチは腕を組んでから、うーんと唸り始めた。

「そうだな。ぶっちゃけ、柘榴は柘榴で、新人としては強いんじゃないの?」

「え、本当?」

柘榴が、すごく食い気味に聞いた。サチは怯むことなく、当然のようになら答える。

「ヤベえこゆりと数分撃ちあえただけでも、めっちゃ大したもんだぞ。間違いなく強いだろ」

「やったー。褒められたー」

バンザイのポーズを取る赤髪の少女。そのままぴよんぴよん跳ね、小躍りなんかも初めるもんだから、相当嬉しいのだろう。

相変わらず無邪気過ぎて、まるで中学一年生とは思えない。

「ただし、なーんか動きが鈍かったような……? いつもだったら、もうちよっとやるだろ?」

「――」

しかしサチの指摘で、柘榴はピシッと固まった。

そして俯いて、あー、と気のない声を出す。自分でも心当たりがある、と言わんばかりの反応だった。

「そうねえ。今日の柘榴、何だか変だものね。妙にぼーとしたりしてさ」

あたしも、柘榴に同意する。

柘榴は少し、気まずそうだ。普段の彼女らしくない。

「あの……何か悩みでもあるの？ 良ければ力になるわよ」

あたしは弱々しくも、胸に手当てる。

あたしはサチや歌羽だけじゃなく、柘榴にも救われた。彼女は大切な友達だ。もし深刻な問題があったら、今度はこっちが全力で助けになる番だ。

サチもあたしの仕草を真似し、そうだぞーと言う。

「あー……、じゃあ……、二人の力を借りようかな」

柘榴はしばらく黙っていたが、やがておずおずと口を開いた。

「……実は私ね、夢があるんだ」

「夢？」

「私……将来、お医者さんになりたいの」

「ええ!!」

それは予想出来なかった、意外過ぎる夢だった。とても、あの柘榴からは想像できない。

あたしは目を見開き、サチなんて声を出してしまう。それは駐車全体に響くほどの大きな声だ。

「マジ!? 柘榴が医者あ? 冗談だろー!」

「冗談じゃないよ。私の小さい頃からの夢なんだよ。幼稚園の頃から、ずっとずっとお医者さんになりたかったの」

サチの反応に、柘榴が腕を組んで、さも怒ってますというアピールをする。

「うちの家系は代々、有名なお医者さんの家系でね。ずっと、お父さん達みたいな医者になりたいって、憧れがあったんだ」

「へあー。そんなことが……ってことは、柘榴って結構、名家出身なのかよ」

そういや、柘榴の学校は柳蔵学園ってとこだったか。

あそこ、偏差値は普通でも、バリバリに学費高い学校なんだよね。

そこに通ってるって聞いた時は驚いたけど、まあ、確かに親が医者なら納得かもしれない。

医者は儲かるし、代々続いているのなら、そりや蓄えもそこそこあるだろう。

「お父さんも、お婆ちゃんのお跡を継いでね。お婆ちゃんも曾祖父ちゃんのお跡を継いだんだよって言った。お母さんはちよつと違うけど……でも、同じように、親戚の人から医者を継いだんだって」

「そうなの。じゃあ、親御さん達も、柘榴には跡継ぎになりなさいって言うてきたりするの?」

あたしはふと思ひ浮かんだ素朴な疑問を聞いた。

しかしそこで、柘榴は言い淀む。むしろ逆だと言わんばかりに。

「……あー、それは……」

「もしかして医者になりたいけど、跡を継ぐのは嫌なのか」

「ううん。跡は継ぎたいよ。そのために医者になりたいんだし」

「だったら、親に反対されてんのか?」

「そういんでもない……」

どっちつかずの、微妙な返事。

彼女もどう言ったら良いか悩んでるようで、しばしの間、こめかみに人差し指をやる。

「あれなんだよ。医者になりたいって言っても、全然、期待されてないというか……。なんか無理してなろうとしてるって、誤解されてるみたいで……。医者にならなくて良いよって、ずっと言われるんだよねえ」

「成る程……」

言い淀んだ理由が、何となく理解できたわ。

これ、場合によっちゃ、反対されるよりキツいかもしんないわね……。

だって、別に親に悪気があるわけじゃないしね。むしろ親切心からやってることだし。

でも柘榴からしてみれば、さつきと分かってくれって感じだろう。どっちの気持ちも想像できるだけに、難しい問題だ。

「柘榴、複雑でしょ。辛いんじゃないの?」

「いや。それほどでもない」

あら？ やけにあっさりしてる。何で？

「私の家族だもん。医者になりたいって思いは、きつといつかお父さん達も分かってくれると思う。それに認めてもらうまで、何度だって言うんだから。そのうち根負けさせてやるの」

柘榴はこちらがはつとする程、簡単にそんなことを言っただけだ。よほどのことがなければ、そう言うことは出来ないだろう。少なくともあたしは無理だ。家族に対する信頼が、柘榴の言葉には込められている。

いやはや、楽観的というか、純粹というか……。

こういうところは、柘榴の強さなのだろう。彼女、すごい真っ直ぐ過ぎる。

「……でもそれなら、何が問題なんだ？ 柘榴がぼーとしてるなんて、よっぽどだぞ」

「それはその……」

柘榴が視線を逸らす。そして、恥ずかしそうに、ぽりぽりと頬を掻いた。

「私、数学が苦手なんだ……。中間テストとかでは、赤点しか取ったことがなくて。普段は十点とか、二十点とか。良くても三十点……。そもそも算数も苦手で、足し算引き算もすごく間違えるの……。国語とか歴史なら、毎回九十点以上取れるのに」

「……」

「ついには、数学の小テストでも赤点取っちゃってさ……。毎日勉強してたのに、まったく効果ないんだよ……。来週にはテスト期間になっちゃうし、本番で零点とか取っちゃったらどうしよう……。」

赤髪の少女は頭を抱え、ガクガクと震える。

可哀想に。顔なんて真っ青だ。

あたし達も、何も言えない。

こういうことって良くあるけど、すっごく残酷よねえ……。

「二人とも私に勉強を教えて……。このままじゃ、医者目指すどころじゃなくなっちゃうよお……!!」

柘榴は棒読みながら、絶叫じみた大声を出し。泣きながらあたしと

サチに、縋り付いてきたのだった。